兵庫県文化財調査報告　第302冊

加西市所在

加西南産業団地内遺跡調査報告書

状覚山古墳群・堀山古墳群・堀山遺跡ほか

2006年3月

兵庫県教育委員会

加西市所在

加西南産業団地内遺跡調査報告書

状覚山古墳群・堀山古墳群・堀山遺跡ほか

2006年3月

兵庫県教育委員会

調査対象地全景（平成 5 年撮影・東から）

調査対象地全景（平成 8 年撮影・南から）

調査対象地遠景（平成５年撮影・西から）

堀山古墳群全景（平成５年撮影・東から）

状覚山 4 号墳全景（南から）

状覚山 4 号墳石室第 1 床面全景（南から）

状覚山 4 号墳石室第 2 床面全景（南から）

状覚山 4 号墳石室第 2 床面遺物出土状況（北から）

状覚山５～10号墳遠景（平成８年撮影・東から）

状覚山５～10号墳全景（南東から）

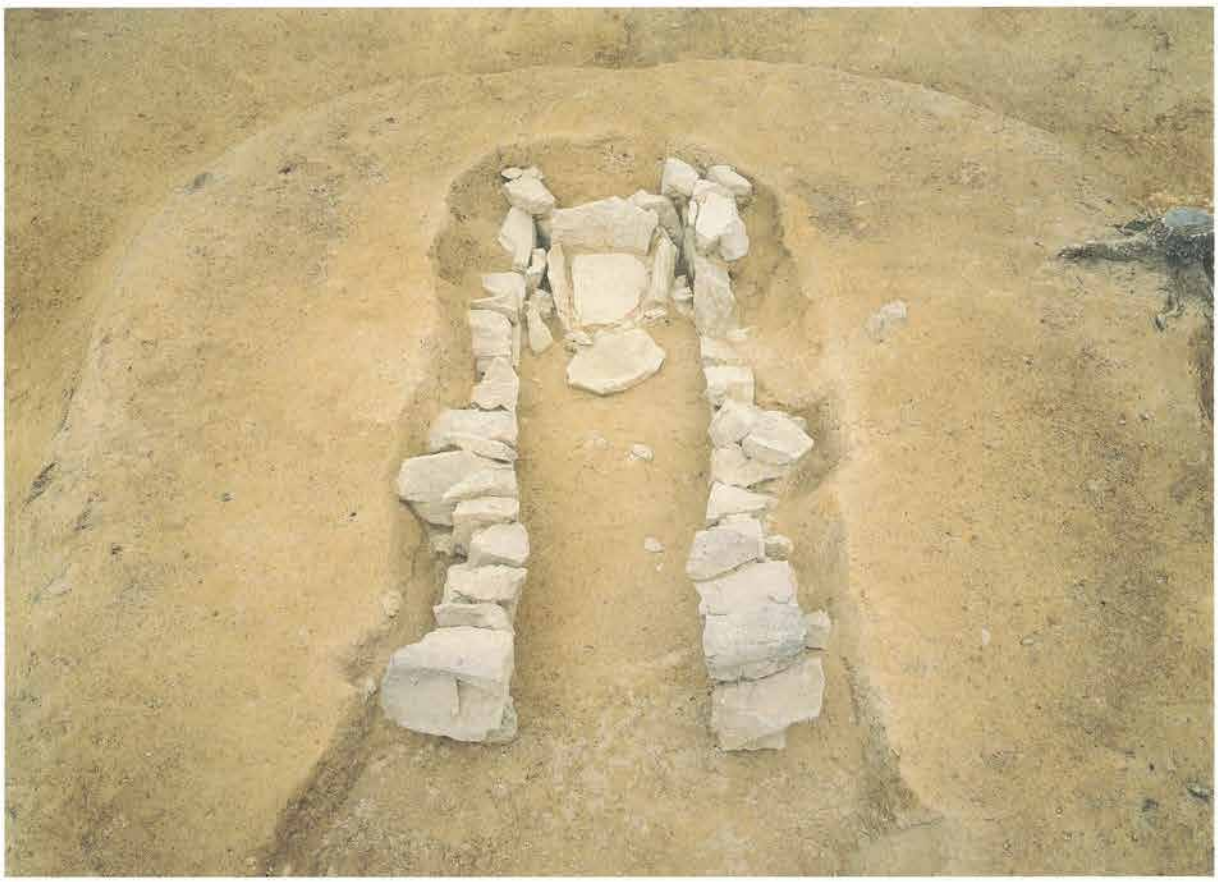
状覚山５～７号墳調査前（南から）

状覚山５～８号墳（南から）

状覚山５～10号墳（西から）

５号墳石室（南南東から）

状覚山 6 号墳石室（南東から）



状覚山 7 号墳石室（東南東から）

状覚山 8 号墳石室（東から）

状覚山 9 号墳石室（南南西から）

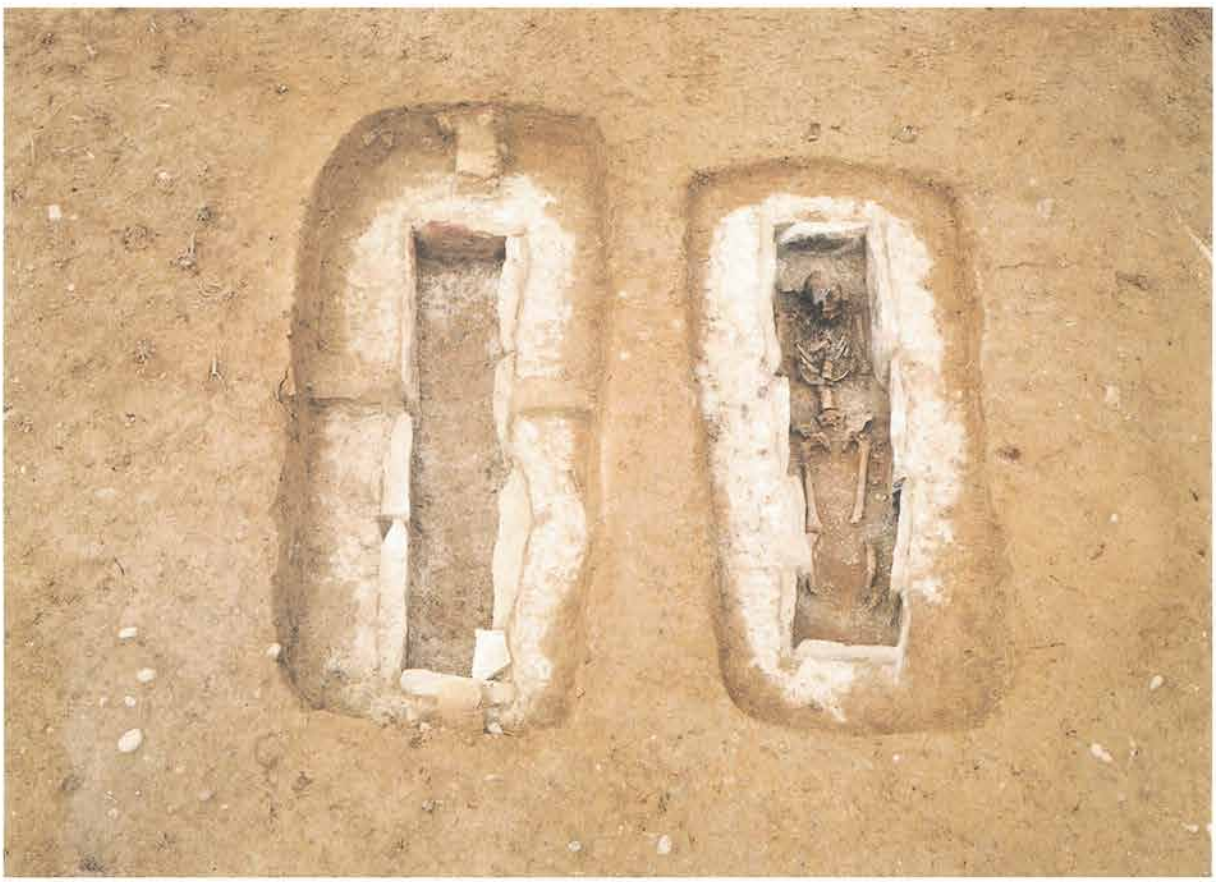
状覚山10号墳石室（南東から）

状覚山10号墳石棺内遺物出土状況（南東から）

状覚山11・12号墳（南東から）

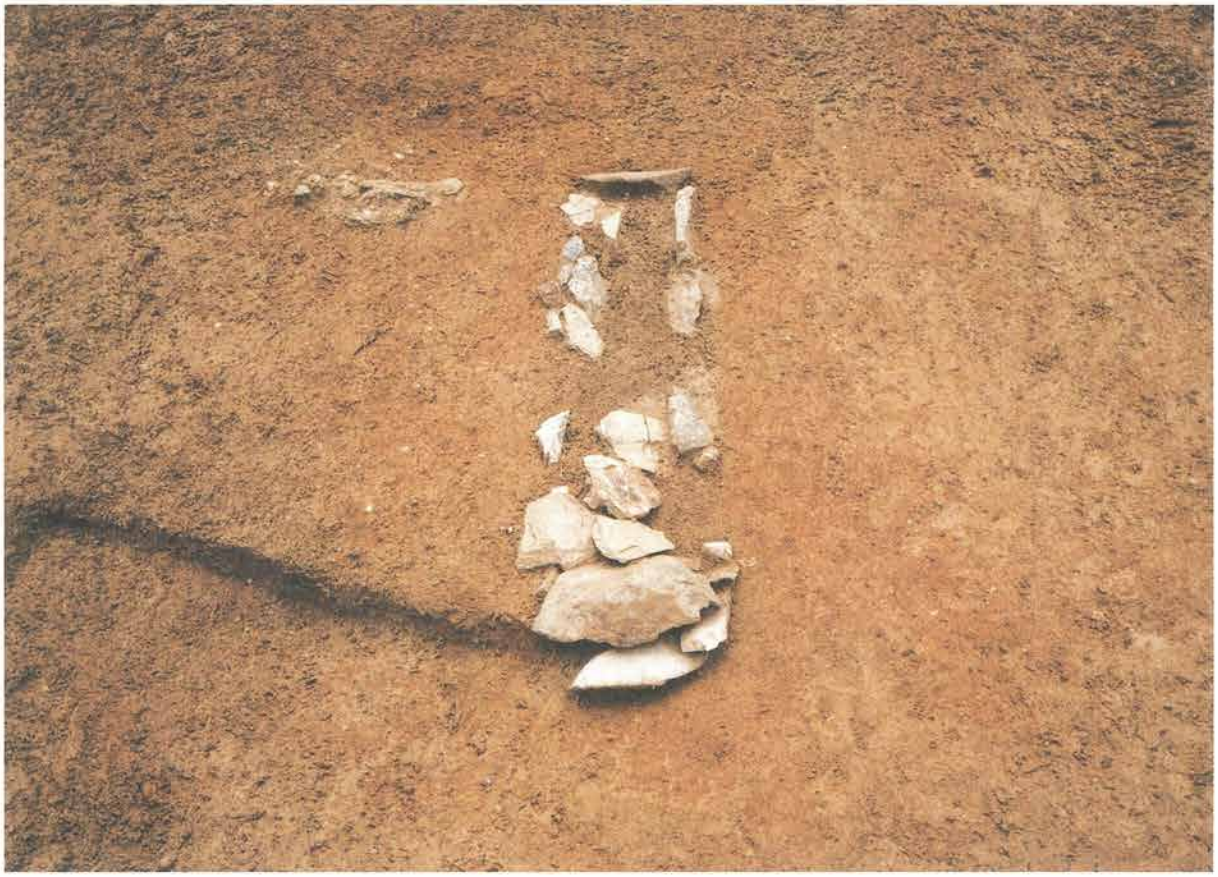
状覚山13～17号墳（南から）

堀山３号墳全景（西から）



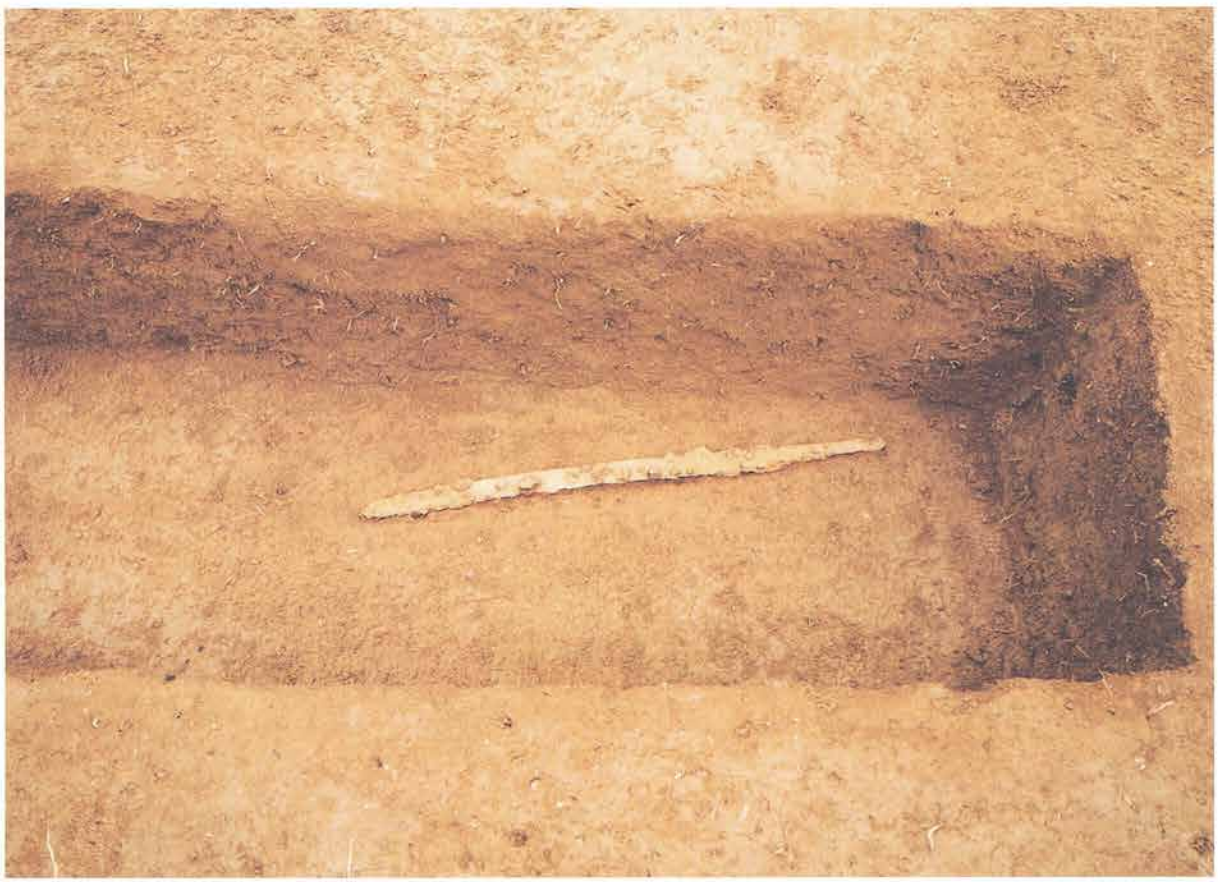
堀山３号墳第１・２主体（西から）

堀山５号墳全景（東から）



堀山５号墳第３主体（東から）

堀山６号墳全景（東から）



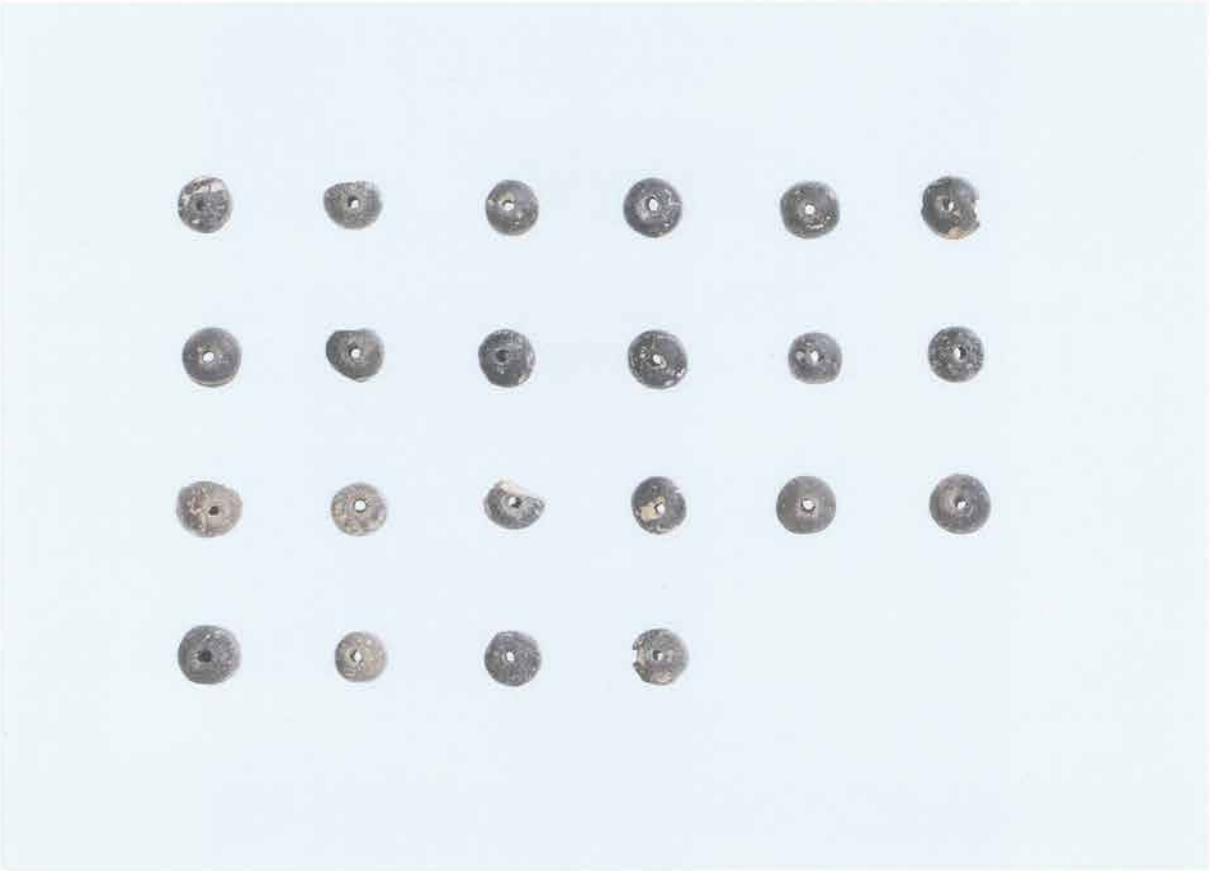
堀山６号墳第１主体鉄剣出土状況

堀山遺跡遠景（西から）

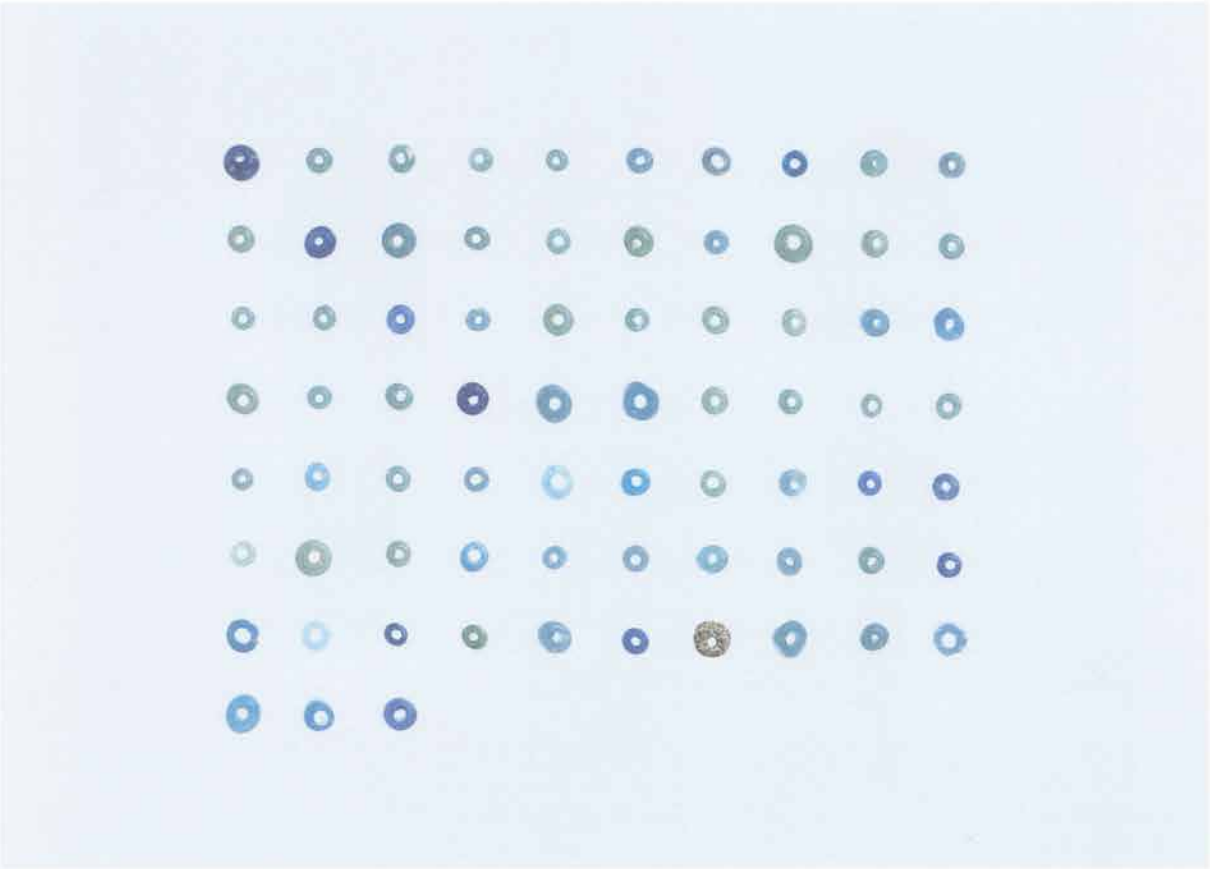
堀山遺跡全景（東から）

堀山遺跡SK02（南から）

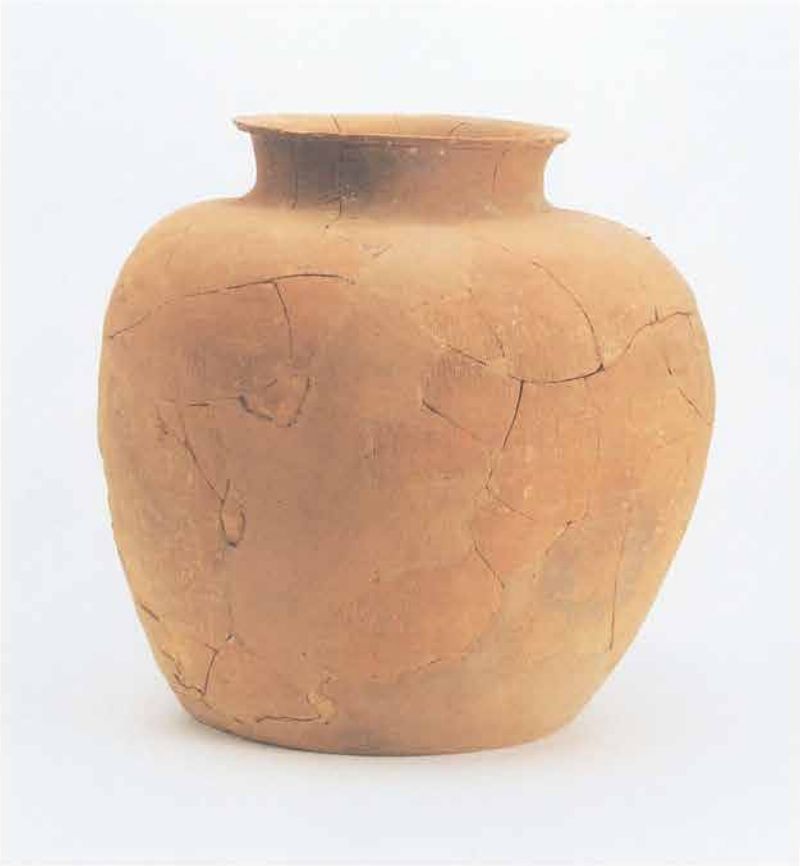
堀山遺跡方形周溝墓群（東から）



状覚山４号墳出土土玉



状覚山４号墳出土ガラス小玉



状覚山６号墳出土韓式系土器

堀山遺跡SX01木棺３出土鉄鏃

例　言

1．本報告書は加西市網引町に所在する加西南産業団地内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
所収遺跡は、状覚山古墳群、堀山古墳群、堀山遺跡、蛭ヶ池ノ尻遺跡、流尾遺跡である。

2．発掘調査は加西網引産業団地造成に伴うもので、兵庫県土地開発公社の依頼を受けて、平成４～８年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．整理作業は兵庫県土地開発公社の依頼を受けて、平成15～17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

4．遺構実測図は調査担当者・調査補助員が作成した。平成８年度に実施した状覚山古墳群の本発掘調査については、国際航業株式会社と委託契約を交わして航空写真測量を行った。

5．本書に使用した写真のうち、遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真は㈱タニグチフォトと委託契約を交わして兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて撮影したものである。
航空写真は各調査時に下記の業者と委託契約を結び、撮影したものである（番号は遺跡調査番号）。
930062：株式会社パスコ、　940104：日本工事測量株式会社、950388：アジア航測株式会社
960035：株式会社ジェクト、960174：国際航業株式会社

6．出土金属器の保存処理は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において岡本一秀の指導により行った。

7．本文の執筆は調査担当者が分担して行った。執筆分担は本文目次のとおりである。編集は古谷章子の補助を得て、長濱が行った。

8．堀山３号墳出土の人骨については、京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室　藤澤珠織、片山一道両氏に鑑定をお願いし、玉稿をいただいた。記して謝意を表します。

9．本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２－１－５）、および魚住分館（明石市魚住町清水）で保管している。

10．調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
加西市教育委員会　亀田修一　菱田哲郎　立花　聡　永井信弘　森　幸三　丹羽恵二　森下大輔
村上　立　岸本一郎　宮原文隆　安平勝利

凡　例

1．本書で使用した座標は第Ⅴ系国土座標（旧測地系）であり、水準はＴ．Ｐ．（東京湾平均海水準）を使用した。図版で示す方位は座標北と磁北があり、磁北を用いた場合はMNと示して区別した。

2．遺物は種類ごとに通し番号をつけている。また、石器は頭にS、金属器はM、玉類はJをつけて区別している。遺物の番号は、本文・図版・写真図版ともに統一している。

3．土器の断面は須恵器・陶器を黒塗り、弥生土器・土師器を白抜きとした。

4．土層などの色調については、小山目正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1992年版を使用した。状覚山５～10号墳の土層名のうち、粒度区分については『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編纂、築地書館）にもとづき、調査担当者が触感により経験的に判断したものである。

5．本書に使用した地図は下記のとおりである。

第２図　兵庫県土地開発公社　1/2500

第３図　国土地理院　1/50000地形図　「北条」平成４年発行、「高砂」平成5年発行

第４図　国土地理院　1/5000国土基本図　Ⅴ―ＯＦ22　昭和46年測量

6．遺構名は英字による略号と、２桁の数字で表記する。遺構番号は調査区ごとに01から始める。略号の意味は下記のとおりである。

溝：ＳＤ　　土坑：ＳＫ　　方形周溝墓：ＳＸ　　ピット・柱穴：Ｐ

第１図　遺跡の位置

本文目次

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経過……（長濱）　1

第２節　調査の経緯……（長濱）　1

第３節　整理作業の経過……（長濱）　6

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……（長濱）　7

第２節　歴史的環境……（長濱）　7

第３節　状覚山・堀山古墳群周辺の環境……（長濱）　12

第３章　状覚山古墳群の調査

第１節　状覚山古墳群の概要……（長濱）　15

第２節　４号墳の調査……（長濱・久保）　15

第３節　５～10号墳の概要……（岸本）　20

第４節　５号墳の調査……（岸本）　21

第５節　６号墳の調査……（岸本・岡本）　24

第６節　７号墳の調査……（岸本）　27

第７節　８号墳の調査……（岸本）　30

第８節　９号墳の調査……（岸本）　34

第９節　10号墳の調査……（岸本・高木）　36

第10節　11～17号墳の概要……（森内）　39

第11節　11号墳の調査……（森内・高木・岡本）　40

第12節　12号墳の調査……（森内・高木）　43

第13節　13号墳の調査……（森内・高木）　45

第14節　14号墳の調査……（森内・高木）　47

第15節　15号墳の調査……（森内・高木）　49

第16節　16号墳の調査……（森内・高木）　52

第17節　17号墳の調査……（森内・高木）　54

第18節　１～３号墳の調査……（長濱）　57

第４章　堀山古墳群の調査

第１節　堀山古墳群の概要……（長濱）　60

第２節　３号墳の調査……（長濱）　60

第３節　５号墳の調査……（長濱）　64

第４節　６号墳の調査……（長濱）　66

第５節　１・４・７号墳の調査……（長濱）　69

第６節　堀山古墳群出土の石器……（久保）　72

第５章　堀山遺跡の調査
第１節　堀山遺跡の概要……（久保）75
第２節　遺構と遺物……（久保・岡本）76
第３節　小結……（久保）86

第６章　蛭ヶ池ノ尻遺跡・流尾遺跡の調査
第１節　蛭ヶ池ノ尻遺跡の調査……（長濱）88
第２節　流尾遺跡の調査……（長濱・菱田）88

第７章　まとめ―加古川流域における後半期の横穴式石室について……（岸本）90
第１節　石室規模からみた時期別変化……90
第２節　古墳群内の造墓パターン……93
第３節　石室開口部の立石について……95

第8章　堀山３号墳出土人骨……（藤澤珠織・片山一道）99

報告書抄録……109

挿図目次

第１図　遺跡の位置
第２図　事業対象地における調査地点位置図……5
第３図　周辺の遺跡……10
第４図　状覚山・堀山古墳群周辺の遺跡……13
第５図　状覚山３号墳墳丘断面図……58
第６図　堀山４号墳平面図・トレンチ断面図……71
第７図　調査区南壁土層断面図……76
第８図　SX01 木棺３出土鉄鏃……80
第９図　土器出土状況……89
第10図　加古川流域における後半期横穴式石室の規模散布図……91
第11図　加古川流域における後半期古墳群の石室規模比較図……93
第12図　羨門柱立石・開口部立柱石を有する石室および類似する石室……96
第13図　第１主体-Ａ人骨 頭蓋・下顎遺存状況……107
第14図　第１主体-Ｂ人骨 頭蓋遺存状況……107
第15図　第２主体人骨 全身遺存状況……107
第16図　堀山３号墳出土人骨……108

表目次

第１表　状覚山・堀山古墳群出土・採集石器一覧表……74
第２表　SK02出土石器一覧表……78
第３表　堀山遺跡出土・採集石器一覧表……87
第４表　加古川流域における既調査の後半期横穴式石室一覧……91
第５表　第２主体人骨　頭蓋の主要計測値（㎜）および主要な示数…… 107
第６表　第２主体人骨　歯冠計測値（㎜）…… 107

図版目次

図版１　状覚山４号墳　調査区地形測量図
図版２　状覚山４号墳　石室平・立面図
図版３　状覚山４号墳　石室内土器出土状況図
図版４　状覚山４号墳　石室内金属器・石製品出土状況図
図版５　状覚山４号墳　出土土器・石製品
図版６　状覚山４号墳　出土金属器(1)
図版７　状覚山４号墳　出土金属器(2)
図版８　状覚山４号墳　出土金属器(3)
図版９　状覚山４号墳　出土玉類
図版10　状覚山５～10号墳　地形測量図
図版11　状覚山５～10号墳　調査前測量図
図版12　状覚山５～10号墳　調査後測量図
図版13　状覚山５～10号墳　墳丘盛土除去後測量図
図版14　状覚山５号墳　横穴式石室
図版15　状覚山５号墳　石室内敷石・遺物検出状況
図版16　状覚山５号墳　石室閉塞状況
図版17　状覚山５号墳　墓壙
図版18　状覚山５号墳　墳丘土層断面
図版19　状覚山６号墳　横穴式石室
図版20　状覚山６号墳　石棺・遺物検出状況
図版21　状覚山６号墳　石室閉塞状況
図版22　状覚山６号墳　１号棺
図版23　状覚山６号墳　２号棺
図版24　状覚山６号墳　墓壙
図版25　状覚山６号墳　墳丘土層断面
図版26　状覚山７号墳　横穴式石室
図版27　状覚山７号墳　石棺
図版28　状覚山７号墳　墓壙
図版29　状覚山７号墳　墳丘・前庭部土層断面

図版30　状覚山８号墳　横穴式石室・遺物検出状況
図版31　状覚山８号墳　墓壙
図版32　状覚山８号墳　墳丘・周溝・排水溝土層断面
図版33　状覚山９号墳　横穴式石室
図版34　状覚山９号墳　墓壙
図版35　状覚山９号墳　墳丘土層断面
図版36　状覚山10号墳　敷石・遺物検出状況
図版37　状覚山10号墳　横穴式石室
図版38　状覚山10号墳　石棺
図版39　状覚山10号墳　石棺（蓋石除去後）
図版40　状覚山10号墳　墓壙
図版41　状覚山10号墳　墳丘土層断面
図版42　状覚山10号墳　墳丘・前庭部土層断面
図版43　状覚山５～７号墳　出土土器
図版44　状覚山５～10号墳　出土土器・金属器・玉
図版45　状覚山11・12号墳　調査前地形測量図
図版46　状覚山11・12号墳　調査後地形測量図
図版47　状覚山11号墳　墳丘地形測量図
図版48　状覚山11号墳　墳丘実測図
図版49　状覚山11号墳　石室実測図
図版50　状覚山11号墳　出土土器　出土鉄鏃
図版51　状覚山12号墳　墳丘地形測量図
図版52　状覚山12号墳　墳丘実測図
図版53　状覚山12号墳　石室・石室内石棺実測図
図版54　状覚山13～17号墳　調査前地形測量図
図版55　状覚山13～17号墳　調査後地形測量図
図版56　状覚山13号墳　墳丘地形測量図
図版57　状覚山13号墳　墳丘実測図
図版58　状覚山13号墳　石室実測図
図版59　状覚山14号墳　墳丘地形測量図
図版60　状覚山14号墳　墳丘実測図
図版61　状覚山14号墳　石室実測図(1)
図版62　状覚山14号墳　石室実測図(2)
図版63　状覚山15号墳　墳丘地形測量図
図版64　状覚山15号墳　墳丘実測図
図版65　状覚山15号墳　石室実測図
図版66　状覚山15号墳　石室内石棺実測図
図版67　状覚山16号墳　墳丘地形測量図

図版68　状覚山16号墳　墳丘実測図
図版69　状覚山16号墳　石室・石室内石棺実測図
図版70　状覚山17号墳　墳丘地形測量図
図版71　状覚山17号墳　墳丘実測図
図版72　状覚山17号墳　石室・石室内石棺実測図
図版73　状覚山13～17号墳　炭土坑
図版74　状覚山12～17号墳　出土土器
図版75　堀山３号墳　調査区地形測量図
図版76　堀山３号墳　墳丘地形測量図
図版77　堀山３号墳　第１主体実測図(1)
図版78　堀山３号墳　第１主体実測図(2)
図版79　堀山３号墳　第２主体実測図(1)
図版80　堀山３号墳　第２主体実測図(2)
図版81　堀山3号墳　出土土器・石造品・鉄製品
図版82　堀山５号墳　調査区地形測量図
図版83　堀山５号墳　墳丘地形測量図
図版84　堀山５号墳　第１主体実測図
図版85　堀山５号墳　第２主体実測図
図版86　堀山５号墳　第３主体実測図
図版87　堀山６号墳　調査区地形測量図
図版88　堀山６号墳　墳丘地形測量図
図版89　堀山６号墳　第１主体実測図
図版90　堀山６号墳　第２主体実測図
図版91　堀山６号墳　塚状遺構
図版92　堀山５・６・７号墳　出土土器・金属器・玉
図版93　堀山６号墳　出土土器
図版94　堀山６号墳　出土金属器
図版95　状覚山・堀山古墳群　出土・採集石器
図版96　堀山遺跡　調査区全体図
図版97　堀山遺跡　第Ⅰ面　土坑・溝
図版98　堀山遺跡　第Ⅱ面　方形周溝墓群
図版99　堀山遺跡　第Ⅱ面　SX04南西角貼石　方形周溝墓群断面図
図版100　堀山遺跡　第Ⅱ面　木棺
図版101　堀山遺跡　第Ⅱ面　木棺・土坑、周溝内土器出土状況
図版102　堀山遺跡　第Ⅱ面　SK02
図版103　堀山遺跡　出土土器
図版104　堀山遺跡　出土・採集石器(1)
図版105　堀山遺跡　出土・採集石器(2)

図版106　堀山遺跡　出土・採集石器(3)
図版107　蛭ヶ池ノ尻遺跡　調査区地形測量図
図版108　流尾遺跡　調査対象地全体図　撹乱坑南壁断面図
図版109　流尾遺跡　調査区地形測量・断面図・出土遺物

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版１　調査対象地全景（平成５年撮影）　調査対象地全景（平成8年撮影）
巻頭写真図版２　調査対象地遠景（平成５年撮影）　堀山古墳群全景（平成5年撮影）
巻頭写真図版３　状覚山４号墳全景　状覚山４号墳石室第１床面全景
巻頭写真図版４　状覚山４号墳石室第２床面全景　状覚山４号墳石室第２床面遺物出土状況
巻頭写真図版５　状覚山５～10号墳遠景　状覚山５～10号墳全景
巻頭写真図版６　状覚山５～７号墳調査前　状覚山５～８号墳
巻頭写真図版７　状覚山５～10号墳　状覚山５号墳石室
巻頭写真図版８　状覚山６号墳石室　状覚山７号墳石室
巻頭写真図版９　状覚山８号墳石室　状覚山９号墳石室
巻頭写真図版10　状覚山10号墳石室　状覚山10号墳石棺内遺物出土状況
巻頭写真図版11　状覚山11・12号墳　状覚山13～17号墳
巻頭写真図版12　堀山３号墳全景　堀山３号墳第１・２主体
巻頭写真図版13　堀山５号墳全景　堀山５号墳第３主体
巻頭写真図版14　堀山６号墳全景　堀山６号墳第１主体鉄剣出土状況
巻頭写真図版15　堀山遺跡遠景　堀山遺跡全景
巻頭写真図版16　堀山遺跡SK02　堀山遺跡方形周溝墓群
巻頭写真図版17　状覚山４号墳出土土玉　状覚山４号墳出土ガラス小玉
巻頭写真図版18　堀山６号墳出土韓式系土器　堀山遺跡SX01木棺３出土鉄鏃

写真図版目次

写真図版１　状覚山４号墳　調査前状況　石室第１床面検出状況　墓壙土層断面
写真図版２　状覚山４号墳　石室第１床面炭検出状況　石室第１床面骨片出土状況
石室第１床面土器出土状況　４号墳全景
写真図版３　状覚山４号墳　石室第２床面全景(1)　石室第２床面全景(2)　石室第２床面遺物出土状況
写真図版４　状覚山４号墳　石室第２床面袖石付近遺物出土状況　石室第２床面奥壁付近遺物出土状況(1)
石室第２床面奥壁付近遺物出土状況(2)　墓壙全景(1)
写真図版５　状覚山４号墳　墓壙全景(2)　墓壙全景(3)　土壙墓完掘状況
写真図版６　状覚山４号墳　出土土器(1)
写真図版７　状覚山４号墳　出土土器(2)
写真図版８　状覚山４号墳　出土玉・石製品
写真図版９　状覚山４号墳　出土鉄鏃(1)
写真図版10　状覚山４号墳　出土鉄鏃(2)　出土耳環　出土馬具　出土刀子　出土鉄製品

写真図版11　状覚山５～10号墳　全景
写真図版12　状覚山５～10号墳　遠景　全景(1)　全景(2)
写真図版13　状覚山５～10号墳　５～7号墳調査前　５～８号墳全景　全景
写真図版14　状覚山５号墳　全景　石室全景(1)　石室全景(2)
写真図版15　状覚山５号墳　石室全景(3)　墓壙　石室閉塞石残存状況(1)　石室閉塞石残存状況(2)
写真図版16　状覚山５号墳　石室前庭部土器出土状況(1)　石室前庭部土器出土状況(2)　石室内土器出土状況　石室内耳環出土状況
写真図版17　状覚山５号墳　石室内埋土土層断面　石室前庭部埋土土層断面　墳丘土層断面(1)　墳丘土層断面(2)
写真図版18　状覚山６号墳　全景　石室全景(1)　石室全景(2)
写真図版19　状覚山６号墳　石室全景(3)　石室全景(4)　石室全景(5)
写真図版20　状覚山６号墳　石室開口部　石室内石棺　土器出土状況
写真図版21　状覚山６号墳　石室基底石　墓壙　石室閉塞状況(1)　石室閉塞状況(2)
写真図版22　状覚山６号墳　石室閉塞状況(3)　石室閉塞状況(4)　石室全景(6)　石室奥壁　石室西側壁(1)　石室西側壁(2)　石室東側壁(1)　石室東側壁(2)　石室基底石　石室床面下埋土土層断面
写真図版23　状覚山６号墳　前庭部南東端土器出土状況　北部周溝内土器出土状況　石室内埋土土層断面　石室前庭部埋土土層断面
写真図版24　状覚山６号墳　北側周溝埋土土層断面　西側周溝埋土土層断面　東側周溝埋土土層断面　南側周溝等埋土土層断面
写真図版25　状覚山６号墳　墳丘土層断面(1)　墳丘土層断面(2)　墳丘土層断面(3)
写真図版26　状覚山７号墳　全景　石室全景　石室奥壁
写真図版27　状覚山７号墳　石室西側壁　石室東側壁　墓壙
写真図版28　状覚山７号墳　石室内石棺　石室内埋土土層断面　石棺復元状況　北側周溝埋土土層断面
写真図版29　状覚山７号墳　石室前庭部埋土土層断面　西側周溝埋土土層断面　東側周溝埋土土層断面
写真図版30　状覚山７号墳　墳丘土層断面(1)　墳丘土層断面(2)　墳丘土層断面(3)
写真図版31　状覚山８号墳　全景　石室　墓壙
写真図版32　状覚山８号墳　石室内埋土土層断面(1)　石室内埋土土層断面(2)　石室内耳環出土状況　排水溝埋土土層断面
写真図版33　状覚山９号墳　全景　石室　墓壙
写真図版34　状覚山10号墳　全景　石室全景(1)　石室全景(2)
写真図版35　状覚山10号墳　石室奥壁　石室西側壁　石室東側壁
写真図版36　状覚山10号墳　石室および前庭部　石室天井石転落状況(1)　石室天井石転落状況(2)　石室北半部
写真図版37　状覚山10号墳　石室基底石　墓壙　石室内敷石検出状況　石室内床面下層土器出土状況
写真図版38　状覚山10号墳　石室内石棺(1)　石室内石棺(2)　石室内石棺(3)
写真図版39　状覚山10号墳　石棺内遺物出土状況(1)　石棺内遺物出土状況(2)　石棺内遺物出土状況(3)
写真図版40　状覚山10号墳　石室内土器出土位置　石室内土器出土状況(1)　石室内土器出土状況(2)
写真図版41　状覚山10号墳　墳丘土層断面(1)　墳丘土層断面(2)　墳丘土層断面(3)

写真図版42　状覚山10号墳　東側周溝埋土土層断面　西側周溝埋土土層断面　石室内埋土土層断面　北西側周溝埋土土層断面　石室床面下埋土土層断面　作業状況
写真図版43　状覚山５～10号墳　９号墳石室内埋土土層断面　９号墳東側周溝埋土土層断面　作業状況　10号墳作業状況　８号墳作業状況　９号墳作業状況　５号墳作業状況　６号墳作業状況　周遍寺山古墳群　糠塚山
写真図版44　状覚山5～10号墳　5～８号墳出土土器
写真図版45　状覚山5～10号墳　10号墳出土土器(1)　５・６号墳出土土器
写真図版46　状覚山5～10号墳　６～８号墳出土土器　10号墳出土土器(2)
写真図版47　状覚山5～10号墳　５・８・10号墳出土金属器　10号墳石棺内出土管玉
写真図版48　状覚山11～17号墳　11･12号墳全景　13～17号墳全景
写真図版49　状覚山11～17号墳　13～17号墳遠景　13～17号墳近景
写真図版50　状覚山11号墳　調査前状況　石室検出状況　前庭部遺物出土状況
写真図版51　状覚山11号墳　全景　石室内崩落石材検出状況　石室内遺物出土状況　石室内崩落石材
写真図版52　状覚山11号墳　石室全景（石材除去後）　石室内遺物出土状況　石室奥壁　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（石室東側）
写真図版53　状覚山12号墳　全景　調査前状況　石室閉塞石残存状況　石室全景(1)
写真図版54　状覚山12号墳　石室全景(2)　石棺底石　墓壙全景　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（墳丘東側）
写真図版55　状覚山13号墳　調査前状況　全景　石室奥壁
写真図版56　状覚山13号墳　石室全景（敷石除去後）　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（石室東側）　墳丘土層断面（石室北側）　墓壙全景
写真図版57　状覚山14号墳　全景　調査前状況　石室内石材崩落状況(1)　石室内石材崩落状況(2)
写真図版58　状覚山14号墳　石室全景　石室内高杯出土状況　石室内遺物出土状況　石室内蓋出土状況　石室内杯出土状況
写真図版59　状覚山14号墳　石室基底石　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（石室東側）　墳丘土層断面（石室北側）　墓壙全景
写真図版60　状覚山15号墳　全景　調査前状況　石室内天井石崩落状況(1)　石室内天井石崩落状況(2)
写真図版61　状覚山15号墳　石室内石棺検出状況　石室内1号棺（側壁除去後）　石室内1号棺　石室内２号棺検出状況　石室内２号棺（側壁復元）
写真図版62　状覚山15号墳　石室全景（石棺除去後）　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（石室東側）　墳丘土層断面（石室北側）　墓壙全景
写真図版63　状覚山16号墳　全景　調査前状況　石室内石材崩落状況(1)　石室内石材崩落状況(2)
写真図版64　状覚山16号墳　石室全景　石室内石棺　石室内遺物出土状況
写真図版65　状覚山16号墳　石室全景（石棺除去後）　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（石室東側）　墳丘土層断面（石室北側）　墓壙全景
写真図版66　状覚山17号墳　全景　調査前状況　石室閉塞石残存状況(1)　石室閉塞石残存状況(2)
写真図版67　状覚山17号墳　石室全景（閉塞石除去後）　石室内石棺検出状況　石室内遺物出土状況　石室全景（天井石・石棺除去後）

写真図版68　状覚山17号墳　石室基底石　墳丘土層断面（石室西側）　墳丘土層断面（石室東側）　墳丘土層断面（石室北側）　墓壙全景
写真図版69　状覚山11～17号墳　SK01検出状況　SK02検出状況　SK02土層断面
写真図版70　状覚山11号墳　出土土器
写真図版71　状覚山13・14号墳　調査区付近採集土器　13号墳出土土器　14号墳出土土器
写真図版72　状覚山11～17号墳　16号墳出土土器　17号墳出土土器　12号墳出土土器　11号墳出土鉄鏃
写真図版73　状覚山３号墳　全景　墳丘土層断面（南半）　墳丘土層断面（北半）　石室材検出状況
写真図版74　状覚山３号墳　南部周溝土層断面　Ｃトレンチ全景（西側墳裾）　Ｂトレンチ全景（東側墳裾）　状覚山２号墳石室現況　蝮蛇塚石棺現況
写真図版75　堀山３号墳　調査前状況(1)　調査前状況(2)　第１主体検出状況
写真図版76　堀山３号墳　全景　墳丘貼石検出状況　第１・２主体全景
写真図版77　堀山３号墳　第１主体検出状況　第１主体蓋石残存状況　第１主体棺内人骨出土状況　第１主体全景
写真図版78　堀山３号墳　第１主体東小口　第１主体東小口付近赤色顔料検出状況　第１主体東西断割断面　第１主体南北断割断面（北半）　第１主体南北断割断面（南半）
写真図版79　堀山３号墳　第２主体検出状況　第２主体被覆粘土検出状況　第２主体被覆粘土断面(1)　第２主体被覆粘土断面(2)　第2主体蓋石検出状況(1)　第２主体蓋石検出状況(2)
写真図版80　堀山３号墳　第２主体人骨検出状況(1)　第２主体人骨検出状況(2)　第２主体全景(1)　第２主体全景(2)　第２主体刀子出土状況　第２主体東小口付近
写真図版81　堀山３号墳　第２主体東西断割断面　墳丘土層断面（東西方向）　備前焼壷出土状況
写真図版82　堀山５号墳　調査前状況　全景　墳丘土層断面
写真図版83　堀山５号墳　第１主体全景　第２主体検出状況　第２主体全景(1)　第２主体全景(2)
写真図版84　堀山５号墳　第２主体西側壁　第２主体東側壁　第２主体南小口　第２主体北小口　第２主体および墳丘（南北方向）土層断面
写真図版85　堀山５号墳　第３主体検出状況(1)　第３主体検出状況(2)　第３主体全景　第３主体墓壙全景　第３主体管玉出土状況　第３主体刀子出土状況
写真図版86　堀山３・５・７号墳　出土土器　出土石造品　５号墳第３主体出土管玉
写真図版87　堀山６号墳　調査前状況　全景　西側周溝土層断面
写真図版88　堀山６号墳　第１主体全景　第１主体棺上土器出土状況　第１主体鉄剣出土状況　第１主体鉄製品出土状況
写真図版89　堀山６号墳　第２主体検出状況　第２主体全景　作業状況
写真図版90　堀山６号墳　SK01検出状況　SK02検出状況　SK01・02
写真図版91　堀山６号墳　出土土器
写真図版92　堀山３・５・６号墳　３号墳出土鉄器　５号墳出土鉄器　６号墳出土鉄器
写真図版93　堀山４号墳　調査前　５トレンチ墳裾付近　６トレンチ墳裾断面　４トレンチ全景
写真図版94　堀山７・１号墳　７号墳現況　12トレンチ７号墳主体部検出状況　12トレンチ７号墳周溝土層断面　１号墳現況
写真図版95　状覚山・堀山古墳群　出土・採集石器

写真図版96　堀山遺跡　第Ⅰ遺構面全景(1)　第Ⅰ遺構面全景(2)　SK03　SD02・03
写真図版97　堀山遺跡　SK02(1)　SK02(2)　SK02（土層セクション除去時）　SK02完掘状況　SK02下底石器出土状況
写真図版98　堀山遺跡　SX04西側溝上面礫出土状況　方形周溝墓群全景(1)　方形周溝墓群全景(2)
写真図版99　堀山遺跡　木棺1検出状況　木棺1土層断面　SX01木棺2土層断面　SX01木棺2完掘状況
写真図版100　堀山遺跡　SX01木棺3検出状況　SX01木棺3掘り下げ状況　SX01木棺3内鉄鏃出土状況
写真図版101　堀山遺跡　SX03木棺4検出状況　SX03木棺4掘り下げ状況　SX03木棺4墓壙断割状況
写真図版102　堀山遺跡　SX01・03溝共有部断面　SX01・02溝共有部断面　SX01・02溝共有部内土器出土状況
写真図版103　堀山遺跡　SX04南西角列石(1)　SX04南西角列石(2)　SX04南西角列石断面
写真図版104　堀山遺跡　第Ⅱ遺構面全景　SK06検出状況　SK06完掘状況　SK05
写真図版105　堀山遺跡　SK02作業状況　作業状況(1)　作業状況(2)
写真図版106　堀山遺跡　SK02出土土器　SD01出土土器
写真図版107　堀山遺跡　方形周溝墓群出土手焙形土器1（表）　方形周溝墓群出土手焙形土器1（裏）
写真図版108　堀山遺跡　方形周溝墓群出土手焙形土器2（表）　方形周溝墓群出土手焙形土器2（裏）
写真図版109　堀山遺跡　出土土器(1)　出土土器(2)
写真図版110　堀山遺跡　出土土器(3)　SX03木棺3内出土鉄器
写真図版111　堀山遺跡　出土・採集石器(1)
写真図版112　堀山遺跡　出土・採集石器(2)
写真図版113　堀山遺跡　出土・採集石器(3)
写真図版114　堀山遺跡　出土・採集石器(4)
写真図版115　蛭ヶ池ノ尻遺跡・流尾遺跡　蛭ヶ池ノ尻遺跡全景　流尾遺跡全景(1)　流尾遺跡全景(2)
写真図版116　流尾遺跡　出土土器

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経過

１．加西南産業団地

加西市を東西に通過する中国縦貫自動車道に加西インターチェンジの設置が計画された。また加西市に隣接する加古川市北部に山陽自動車道の建設が計画され、ここにもインターチェンジが設置されることになった。既存の道路からこの２つのインターチェンジを経ることにより京阪神、中四国地域へのアクセス向上が見込めることから、加西市内で新たに産業団地の造成が計画され、２つのインターチェンジに直結可能な加西市南部にその候補地が求められた。

候補地の１つとなった加西市網引町の山林は、既存の県道・市道を利用することにより中国縦貫自動車道・山陽自動車道の各インターチェンジへ、また加古川市方面へ南下することで加古川バイパス（国道２号線）に短時間でアクセスできることから、産業団地の用地に決定された。

２．事業用地内の遺跡

事業対象地付近は開口した横穴式石室の存在が古くから知られている地域であり、事業地内には『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表第１集』（1968年）によれば周知の遺跡として堀山古墳群（４基）、状覚山古墳群（２基）、周遍寺山古墳群（３基）が所在している。周遍寺山１号墳は1958年に調査され、同時期に調査が行われた小野市焼山古墳群とともに兵庫県内において埋蔵文化財への関心を高めることになった学史的にも重要な古墳である。また近年では墳丘の形状が四隅突出墳墓に類似するとの指摘もある。

これら周知されている古墳のほかにも対象地内では各所で造成や開墾が繰り替えされていることから、消滅した古墳が少なからずあることが考えられた。また、対象地周辺には旧石器・縄文時代の石器散布地、奈良・平安時代の窯跡群などが多数あることから、本対象地内にも同様の遺跡が所在する可能性が考えられた。

第２節　調査の経緯

平成２年度

・調査番号　900024
・種　　別　分布調査
・担 当 者　西口和彦・吉田　昇・平田博幸・西口圭介・菱田淳子・藤田　淳・山田清朝・甲斐昭光・中村　弘・山本　誠・長濱誠司

・調査番号　900183
・種　　別　分布調査
・担 当 者　池田正男・村上賢治

概要

事業対象地内の埋蔵文化財を把握するため分布調査を行った。対象地の大半は山林であり、山中は雑木が繁茂し踏査は困難を極めた。調査の結果、周知の古墳の所在を確認したほか、新たに古墳状隆起や遺物の散布などを確認した。古墳などは主に事業対象地の北・東縁辺部に分布することから、周遍寺山古墳群、堀山１～４号墳、状覚山１・２号墳を周辺緑地として保存することで保存協議を行った。また当初の分布調査で踏査不可能であった水田部分については、第２次分布調査を実施し、遺跡の存在する可能性は低いと判断した。

平成4年度

- **調査番号**　920007
- **種　　別**　確認調査
- **担 当 者**　甲斐昭光・長濱誠司
- **調査期間**　平成４年５月11日～７月15日
- **調査面積**　1,618㎡

概要

平成２年度の分布調査結果に基づいてトレンチによる確認調査を実施した。協議により保存が決まった堀山１・４・７号墳、状覚山１・２・４号墳の墳丘範囲を明らかにした。また事業対象地内は開墾や造成により消失した古墳があると想定されたことから、その有無を確認し、新たに状覚山３号墳が確認された。

平成５年度

- **調査番号**　930062
- **種　　別**　本発掘調査・確認調査
- **担 当 者**　平田博幸・長濱誠司・井本有二
- **調査期間**　平成５年４月30日～９月20日
- **遺　　跡**　堀山３・５・６号墳、状覚山４号墳、蛭ヶ池ノ尻遺跡
- **調査面積**　3,553㎡

- **調査番号**　930247
- **種　　別**　分布調査
- **調査期間**　平成６年３月３日
- **担 当 者**　長濱誠司・井本有二

概要

平成４年度の確認調査の成果に基づき記録保存となった堀山３・５・６号墳、状覚山４号墳、蛭ヶノ尻遺跡について本発掘調査を実施した。当初調査計画にあった堀山７号墳は事業対象地から除外されたため調査は行わなかった。一方周辺道路建設に伴い堀山３号墳の本発掘調査と路線部分の確認調査を追

加して行った。

調査終了後、「加西町全図」において、事業地内の３地点に古墳の所在が記されていることが判明し、再度分布調査を行った。３地点のうち２地点で複数の古墳を確認した。

平成６年度

・調査番号　940148
・種　　別　本発掘調査・確認調査
・担 当 者　久保弘幸・岡本一秀
・調査期間　平成６年５月23日～７月29日
・遺　　跡　堀山遺跡
・調査面積　476㎡

概要

平成５年度に確認調査を行った堀山３号墳の東側について全面調査を実施した。調査の結果、弥生時代末期の方形周溝墓４基と縄文時代の土坑を検出した。また縄文時代の石器も多く出土した。

本発掘調査中にナイフ形石器の出土をみたため、下層の確認調査を行ったが、他に遺物は出土しなかった。

平成７年度

・調査番号　950388
・種　　別　本発掘調査
・担 当 者　岸本一宏・高木芳史・岡本一秀
・調査期間　平成８年１月17日～３月23日
・遺　　跡　状覚山５～10号墳
・調査面積　1,114㎡

・調査番号　950124
・種　　別　確認調査
・担 当 者　中川　渉・菱田淳子・水嶋　稔
・調査期間　平成7年５月16日～５月18日
・調査面積　236.4㎡

概要

平成５年度実施の分布調査において古墳が確認された地点について調査を行った。当初３基と思われていたが、調査の段階で３基を新たに確認し、６基の古墳を調査した。

また、平成５年度実施の分布調査において古墳が確認されなかった地点について、古墳が土地の改変により破壊されている可能性があるため、トレンチによる確認調査を実施した。その結果、古墳は確認できなかったが、土坑などの遺構を検出した。確認した遺跡は流尾遺跡と命名した。

平成８年度

・**調査番号**　960035
・**種　　別**　本発掘調査
・**担 当 者**　深江英憲・服部　寛
・**調査期間**　平成８年５月８日～６月30日
・**遺　　跡**　流尾遺跡
・**調査面積**　397㎡

・**調査番号**　960106
・**種　　別**　分布調査
・**担 当 者**　鈴木敬二
・**調査期間**　平成８年５月21日

・**調査番号**　960104
・**種　　別**　確認調査
・**担 当 者**　長濱誠司
・**調査期間**　平成８年５月27日～５月29日
・**調査面積**　421㎡

・**調査番号**　960174
・**種　　別**　本発掘調査
・**担 当 者**　森内秀造・高木芳史
・**調査期間**　平成８年７月17日～平成９年１月10日
・**遺　　跡**　状覚山11～17号墳
・**調査面積**　3,751㎡

概要

前年度確認調査の成果に基づき、流尾遺跡の本発掘調査を実施し、土坑・柱穴などを検出した。

造成事業が本格化し、事業対象地全域の伐採を行ったところ、６基の古墳が確認された。そこで周囲の分布調査を改めて行い、古墳の所在する可能性のある地点についてトレンチによる確認調査を実施した。調査の結果、さらに古墳１基を確認した。これら７基の古墳については、事業の進捗に鑑み、早急に本発掘調査に移行した。

なお、状覚山古墳群の本発掘調査は国際航業株式会社と委託契約を結び航空写真測量を実施した。

平成９年度

・調査番号　970166
・種　　別　確認調査
・**担 当 者**　西口和彦

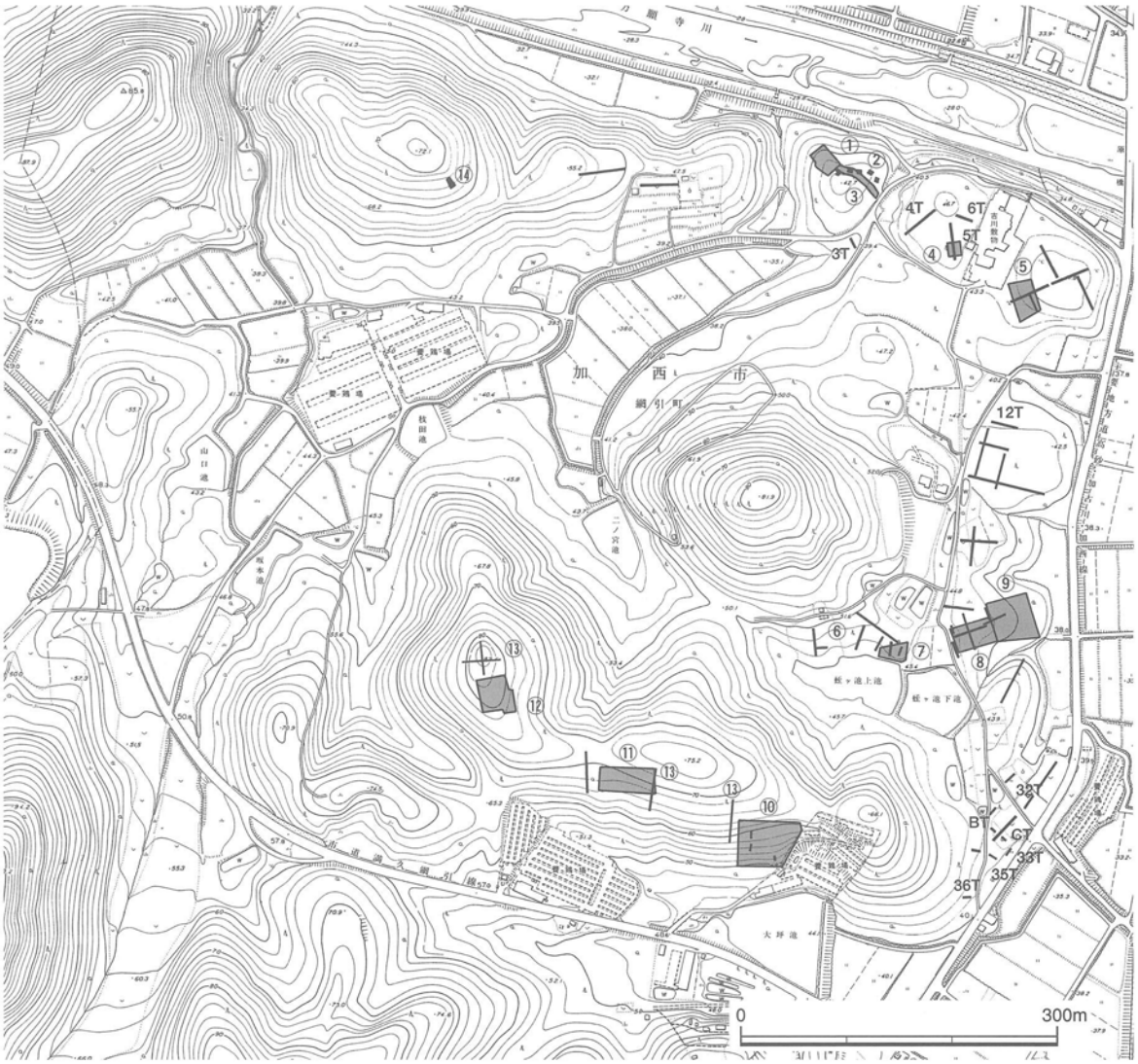
・**調査期間**　平成９年４月23日

・**調査面積**　21㎡

概要

すでに事業対象地内の発掘調査は終了していたが、周辺緑地部分の開発に際し、周遍寺山古墳群の所在する井堰山に四阿を設置するため、設置箇所について確認調査を実施した。調査の結果設置箇所については、埋蔵文化財は確認されなかった。

またこの年度には本事業とは異なるが、自転車道整備事業に伴い事業地に隣接する状覚山３号墳の範囲確認調査（調査番号970214）も行っている。



①平成４年度本発掘調査（堀山３号墳）　②平成４年度確認調査　③平成６年度本発掘調査（堀山遺跡）
④平成４年度本発掘調査（堀山５号墳）　⑤平成４年度本発掘調査（堀山６号墳）　⑥平成７年度確認調査
⑦平成８年度本発掘調査（流尾遺跡）　⑧平成４年度本発掘調査（状覚山４号墳）
⑨平成４年度本発掘調査（蛭ヶ池ノ尻遺跡）　⑩平成８年度本発掘調査（状覚山13～17号墳）
⑪平成８年度本発掘調査（状覚山11・12号墳）　⑫平成７年度本発掘調査（状覚山５～10号墳）
⑬平成８年度確認調査　⑭平成９年度確認調査
番号の無いものは平成３年度確認調査

第２図　事業対象地における調査地点位置図

第３節　整理作業の経過

整理作業は、調査時において現地で行った遺物水洗などに始まるが、本格的な整理作業は出土遺物を埋蔵文化財調査事務所に搬入し、平成15年度から17年度までの３ヵ年で実施した。

平成15年度

整理作業を開始した。初年度の作業は水洗、ネーミング、接合・補強および金属器の保存処理である。

整理保存班

調 整 担 当　　主査　　村上泰樹

進 行 管 理　　主査　　長濱誠司

保存処理担当　　主任　　岡本一秀

非常勤嘱託員　　佐々木誓子・長川加奈子

栗山美奈・藤井光代・三好綾子・三島重美

平成16年度

実測・トレースにいたる作業と遺物の写真撮影を実施した。また堀山3号墳検出の赤色顔料のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析、状覚山10号墳石棺出土炭化物の放射性炭素年代測定について株式会社パレオラボに委託した。また堀山３号墳出土人骨の鑑定を京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室藤澤珠織・片山一道両氏にお願いした。

整理保存班

調 整 担 当　　主査　　菱田淳子

進 行 管 理　　主査　　長濱誠司・主任　　仁尾一人

保存処理担当　　主任　　岡本一秀

非常勤嘱託員　　古谷章子・池田悦子・眞子ふさ恵・島村順子・木村淑子・前田千栄子・小野順子

宮野正子・三好綾子・奥野政子・早川有紀・石野照代・岡田祥子

栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美

日々雇用職員　　西村美緒・髙橋朋子

平成17年度

レイアウトから報告書刊行に至る諸作業を行い、担当職員は原稿執筆に専念した。

整理保存班

調 整 担 当　　主査　　菱田淳子

進 行 管 理　　主査　　仁尾一人

非常勤嘱託員　　古谷章子　松本嘉子　高瀬敬子　前川悦子　垣本明美　西村美緒

日々雇用職員　　久保昭夫　岡田陽子

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

加西市は兵庫県南部、旧播磨国の東部に位置する。市域は加古川と市川の中間に広がり、北は西脇市、多可郡（旧多可郡）、神崎郡（旧神崎郡）、南は加古川市（旧印南郡）、姫路市（旧飾磨郡）、東側は小野市、加東郡（旧賀茂郡）、西は姫路市、神崎郡と接している。市域の規模は東西12.4㎞、南北19.8㎞、面積150.44㎢ある。市域の北は中国山地の裾を構成する海抜300～500ｍの山地に、南側も海抜200ｍ級の山地（来住山地、法華山地）に遮られる。また東側は洪積台地である青野ヶ原台地が南北に広がる。以上のような山地や台地によって市域は盆地状を呈する。このような地形的な途絶により加古川本流との結びつきは必ずしも強いとはいえない。

市域を流れる河川の大部分は加古川水系に属するが、小規模で水量も多くない。市内を流れる大半の小河川は東部を流れる万願寺川と西部を流れる下里川に集約される。下里川は本調査対象地北西側で万願寺川に合流、さらに青野ヶ原台地と来住山地の間を東流し、小野市粟生町付近で加古川に合流する。本調査地点付近は加西市において唯一加古川への開口部といえる。万願寺川と下里川沿いには平野が広がり、その中間は飯盛野、鶉野などの洪積台地がある。洪積台地上は開発が遅れたものの近世以降は開墾が進められた。降水量と河川の水量が少ないため、洪積台地一帯を中心にため池が多く作られている。

河川が小規模なため河川交通は発達しなかったが、地理的な要因から街道など陸路が発達している。瀬戸内海沿岸部と但馬・丹波地域を結ぶ南北の街道、播磨内陸部を東西にむすぶ街道が通過し、その交点となる北条町は、酒見寺、住吉神社の門前町に加えて宿場町としての面ももつ。また南部には播磨の中心である姫路と丹波国をむすぶ街道が東西に通過し、西国巡礼道として賑わいをみせる。街道の多くは現在でも国道や主要地方道として多くの交通量がある。近代にはいると北条町は行政上の中心となる。北条町と粟生駅を結ぶ播州鉄道北条線（国鉄を経て現在は北条鉄道）が下里川沿いに開通する。

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

加古川流域は県内でも旧石器・縄文時代の石器散布地が濃密に分布している。逆池遺跡(A2)、鶴池・逆池遺跡(A3)、鴨池遺跡(A4)、善防池遺跡(A6)、七ッ池遺跡(A7)、畑谷池遺跡(A8)など洪積台地縁辺のため池から有舌尖頭器、ナイフ形石器などが採集されている。従来は採集遺物のみで遺構は未確認だったが、近年の調査では、勝手野遺跡(A5)で旧石器時代後期の石器製作跡を検出したほか、堀山遺跡(A1)でも縄文時代中期の土坑を検出するなど生活の痕跡が次第に明らかとなりつつある。

弥生時代

加古川沿いの平野部では、右岸の河合中カケ田遺跡(C8)、左岸の高田古苗代遺跡(C13)などで弥生時代前期の遺構が検出され、早い時期から集落が形成されていたことが伺える。河合中カケ田遺跡では弥生時代中期には周溝墓などの墓域、後期以降は居住域として用いられる。大寺遺跡(C9)でも中期から後期の土器が多く出土する。左岸の高田古苗代遺跡に続く遺跡として高田地蔵ノ本遺跡(C14)などがあり、以後高田・敷地・王子付近の段丘上に弥生・古墳時代を通じて集落が営まれる。高地性集落として青野ヶ原

台地の縁辺部に金鑵城遺跡(C10)があるほか、加古川の中・下流域の境界となる正法寺山からは銅剣が出土し、加古川を結ぶネットワークの存在が想定される。加西市域では弥生時代中期の集落として土井ノ内遺跡(C5)、長塚遺跡(C6)、大村遺跡(C7)などがあり、住居跡、周溝墓などが検出されている。本調査対象地と万願寺川をはさんだ位置にある針田遺跡(C1)は弥生時代後期の集落遺跡で、隅丸方形住居1棟が万願寺川に面した段丘の突端で検出されている。網引集落の周辺や小野市の三ッ塚遺跡(C11)では弥生土器が採集されているが遺跡の実態は不明である。

古墳時代

古墳に先行する墳墓のうち、発掘調査により明らかとなったものは、堀山遺跡(B2)のほか、西条古墳群の中の西条52号墳(B88)、堀山古墳群の西側丘陵に位置する周遍寺山1号墳(B4)がある。西条52号墓は竪穴式石室内より内行花文鏡片、墳丘から弥生時代後期の土器が出土している。周遍寺山1号墳は、時期を判断できる遺物が出土していないが墳丘の4隅が突出する形態であり、古墳時代を遡る墳墓との見方がある。また発掘調査は行われていないが、加古川右岸の丘陵上に所在する八ツ塚3号墳(B66)、神吉山5号墳(B75)は、墳丘周囲から弥生時代後期の土器が採集されており墳丘墓の可能性がある。

前期古墳のうち首長墓クラスのものは加古川下流域の左岸に集まる。日岡山古墳群(B89)は日岡山1号墳をはじめとする5基の前方後円墳などで構成され4世紀中頃～5世紀前半に造営される。下石野古墳群(B51)の中の前方後円墳である愛宕山古墳も出土した埴輪から4世紀後半の古墳とされる。一方、加古川右岸の山頂には天坊山古墳(B60)、長慶寺山1号墳(B67)があり鏡などが出土しているが小規模である。加古川中流域では、大型円墳である敷地大塚古墳(B46)が唯一前期末と確認できる古墳であるが、粟生三ッ塚古墳群(B37)から銅鏃が出土している他、箱式石棺を埋葬施設とする樋詰古墳(B28)も前期古墳と推定され、青野ヶ原台地上に前期古墳がさらに存在する可能性がある。加西市域では、前期古墳は未確認だが、西山谷遺跡(C4) など前期の集落遺跡があることから付近に前期古墳の存在が想定できよう。

中期にはいっても下流域で大型古墳の造営が続く。日岡山古墳群での造墓活動は終了するが、その北東にある西条古墳群(B88)で造墓活動が開始される。西条古墳群は前方後円墳の行者塚古墳を盟主墳として複数の大型古墳で構成される。

一方、加古川右岸には里古墳(B68)、西山大塚古墳(B69)、平荘湖古墳群(B72)の中のカンス塚、池尻2号墳など小規模なものしかない。しかし、カンス塚、池尻2号墳からは渡来系の遺物が出土しているほか、平山古墳群出土と伝えられる韓式系土器がある。これら古墳の南側に所在する砂部遺跡(C18)からも韓式系土器、初期須恵器が出土しており、渡来人の痕跡が色濃い地域といえる。

加西市では前方後円墳の玉丘古墳を中心に大型古墳で構成される玉丘古墳群(B13)がある。玉丘古墳は加古川中流域では最大規模の前方後円墳であり、5世紀前半に台頭した勢力の墓域と考えられる。小野市には大型円墳の王塚古墳(B47)があるものの前方後円墳は存在しない。なお王塚古墳周辺にはかって多数の古墳が存在したとされ、大部古墳群とも呼称される。この古墳群の下部に広がる段丘には敷地遺跡(C15)、王子城ノ下遺跡(C16)、垂井遺跡(C17)など弥生時代から継続する集落があり、中期以降の住居が検出されている。加古川右岸の中期古墳は、青野ヶ原台地上の妙見山2・3号墳(B27)、山頂に立地する阿形1号墳(B40)がある。

後期に入ると築造される古墳の数は急増する。日岡山古墳群、西条古墳群、平荘湖古墳群は後期に入っても墓域として用いられ、玉丘古墳群もその周辺部に後期の群集墳がある。

6世紀半ば頃は埋葬施設に横穴式石室が導入されるが、加古川流域では池尻19号墳、奥新田西古墳

(B62)、状覚山４号墳、黒石山11号墳(B26)があり、加古川中下流域の右岸に点在する。さらに後半になると横穴式石室の数は急増する。

加古川右岸では、本調査対象地の他、福甸古墳群(B41)、岩倉古墳群(B42)、毛無山古墳群(B44)、勝手野古墳群(B45)など来住山地の谷間の小野市来住町、黍田町、加古川市白沢に数基から10基程度で構成される古墳群が点在する。加古川市平荘･上荘地域では大亀谷山古墳(B57)など谷部に単独で位置するもの、中山古墳群(B61)、野尻古墳群(B63)、奥新田古墳群など数基で構成される古墳群が点在する。

木棺を直葬する古墳は、加古川左岸には焼山古墳群、樫山古墳群(B49)などがあり、100基以上の古墳で構成される大規模な群集墳がある。右岸では青野ヶ原台地東辺に小規模な古墳群が点在するのみである。

加西市南部における古墳の分布は、本調査対象地付近を除くと後藤山古墳(B5)、焼野古墳(B6)、西笠原古墳群(B8)、大村古墳群(B9)など疎らな分布を示すのみである。加西市の高室、長からは竜山石系の石棺材を産出し、市域およびその周辺部の各所に石棺材が現存している。現存する石棺の分布を見る限りにおいては、現在古墳が空白となっている地域にも古墳が存在したと思われる。しかしこの地域は早い時期にほ場整備などが行われたことにより集落遺跡の状況も含め不明な点が多い。

７世紀後半に入っても古墳の造営は続く。古墳時代終末期の古墳としては、菖蒲池型石棺をもつ後藤山古墳、切石積みの石室をもつ地蔵寺古墳(B70)などがある。一方で神子谷古墳群(B52)、カメ焼谷古墳群(B53)などのように遠望のきかない谷間に、簡略化された横穴式石室を築造し、内部に小型の石棺を有する古墳が作られる。今回調査を行った状覚山古墳群、その東側に所在する糠塚古墳群も同様に７世紀後半につくられる。

またこの時期に加古川流域で須恵器生産が開始される。加古川支流の草谷川流域に所在する野村古窯跡群(D4)、野新村古窯跡群(D5)の中に６世紀後半のものがあり７世紀代まで継続する。加西市域では野田窯跡、続いて中村窯跡(D6)が６世紀後半～７世紀に操業する。上長池窯跡(D1)、白沢１・２号窯跡(D2)なども７世紀中頃に生産を開始し、後の志方窯跡群、白沢窯跡群、に継続する。

奈良・平安時代

奈良時代に入ると播磨において多くの寺院が建立される。それは本調査対象地周辺も例外ではない。加古川中流域では７世紀後半の河合廃寺(E4)を最初とし、次いで大寺廃寺(E5)、左岸では広渡廃寺(E6)が造営される。加西市域では奈良時代前半に繁昌廃寺(E1)、奈良時代後期に野条廃寺(E2)が創建される。繁昌廃寺は発掘調査により薬師寺式伽藍配置になることが判明したほか、寺院に瓦を供給した瓦窯跡が西側の丘陵裾部で検出されている。加古川下流域では山角廃寺(E7)、西条廃寺(E9)が７世紀後半に創建、次いで石守廃寺(E8)が８世紀前半に創建される。

なお繁昌廃寺付近に安置されていた五尊石仏は奈良前期の石仏としては全国的にも類例の少ないものであり、繁昌廃寺の遺仏の可能性がある。また善防山中の古法華寺(E3)にある三尊石仏と厨子屋蓋は繁昌五尊石仏と同時代のものと考えられ、付近に古代寺院の存在が指摘される。いずれもこの地域に高い仏教文化が開花していたことが伺える資料である。

加西市、小野市、加古川市境界付近の山麓には白沢窯跡群(D2)、志方窯跡群(D3)をはじめとする多数の須恵器窯跡が分布している。古墳時代から続く白沢窯跡群は８世紀初頭まで操業が続き、硯などの生産が行われた。加古川市と加西市にまたがる志方窯跡群は奈良・平安時代を通じて須恵器の一大生産地となり、製品の一部は貢納として平城京に持ち込まれている。窯跡は印南郡と賀茂郡を結ぶ谷の東西に15の支群に分かれ、100基以上の窯跡が確認されている。

第３図　周辺の遺跡（1/75,000）

旧石器・縄文時代

A1 堀山遺跡　A2 逆池遺跡　A3 鶴池・逆池遺跡　A4 鴨池遺跡　A5 勝手野遺跡　A6 善防池遺跡　A7 七ッ池遺跡　A8 畑谷池遺跡　A9 亀倉池遺跡

古墳・墳墓

加 西 市：B1 堀山古墳群　B2 堀山遺跡　B3 状覚山古墳群　B4 周遍寺山古墳群　B5 後藤山古墳群　B6 焼野古墳　B7 地蔵古墳　B8 西笠原古墳群　B9 大村古墳群　B10 向山古墳群　B11 岸呂古墳群　B12 寺山古墳群　B13 玉丘古墳群　B14 亀山古墳　B15 宮池古墳群　B16 玉野寺山古墳群　B17 荒神山古墳群　B18 明神山古墳群　B19 西の垣内古墳　B20 南条古墳　B21 吉田山古墳　B22 円山古墳群　B23 豊倉古墳群　B24 飯盛山古墳群　B25 土井ノ内遺跡

滝 野 町：B26 黒石山古墳群　B27 妙見山古墳群　B2 樋詰古墳

小 野 市：B29 皿山古墳群　B30 復井古墳　B31 西山古墳群　B32 曽我井古墳群　B33 大塚山古墳群　B34 河合西古墳群　B35 新部大谷古墳群　B36 三ツ塚古墳群　B37 粟生三ツ塚古墳群　B38 岡古墳群　B39 西脇北方古墳群　B40 阿形 1 号墳　B41 福甸古墳群　B42 岩倉古墳群　B43 下来住古墳群　B44 毛無山古墳群　B45 勝手野古墳群　B46 敷地大塚古墳　B47 王塚古墳　B48 市場古墳群　B49 樫山古墳群

三 木 市：B50 正法寺山古墳群　B51 下石野古墳群

加古川市：B52 神子谷古墳群　B53 カメ焼谷古墳群　B54 大谷山古墳群　B55 山尾古墳　B56 白沢西山古墳　B57 大亀谷山古墳　B58 寺谷古墳　B59 小野古墳　B60 天坊山古墳群　B61 中山古墳群　B62 奥新田古墳群　B63 野尻古墳群　B64 高塚山古墳群　B65 井ノ口古墳群　B66 八ツ塚古墳群　B67 長慶寺山古墳群　B68 里古墳　B69 西山大塚古墳　B70 地蔵寺古墳群　B71 平山古墳群　B72 平荘湖古墳群　B73 升田山古墳群　B74 飯盛山古墳群　B75 神吉山古墳群　B76 宮山古墳群　B77 小畑古墳　B78 二子塚古墳　B79 石打山古墳　B80 寺山古墳　B81 高畑古墳　B82 志方宮山古墳群　B83 天神山古墳群　B84 野村古墳群　B85 宮山古墳群　B86 成福寺古墳群　B87 新池古墳群　B88 西条古墳群　B89 日岡古墳群

集落遺跡

加 西 市：C1 針田遺跡　C2 網引市場遺跡　C3 宮ノ後遺跡　C4 西山谷遺跡　C5 土井ノ内遺跡　C6 長塚遺跡　C7 大村遺跡

小 野 市：C8 河合中カケ田遺跡　C9 大寺遺跡　C10 金鑵城遺跡　C11 三ツ塚遺跡　C12 高田宮ノ後遺跡　C13 高田古苗代遺跡　C14 高田地蔵ノ本遺跡　C15 敷地遺跡　C16 王子城ノ下遺跡　C17 垂井遺跡

加古川市：C18 砂部遺跡　C19 東神吉遺跡

窯跡（▲）

D1 上長池窯跡　D2 白沢窯跡群　D3 志方窯跡群　D4 野村古窯跡群　D5 野新村古窯跡群　D6 中村窯跡

寺院跡（■）

E1 繁昌廃寺　E2 野条廃寺　E3 古法華寺　E4 河合廃寺　E5 大寺廃寺　E6 広渡廃寺　E7 山角廃寺　E8 石守廃寺　E9 西条廃寺

第３節　状覚山・堀山古墳群周辺の環境

調査対象地である加西市網引町は市域の南東端にあたり、東側は小野市（旧賀茂郡東部）、南側は加古川市（旧加古郡）に隣接する。古代においては、万願寺川中下流沿い一帯に広がる賀毛郡楢原里に該当すると考えられる。

先述したように加西市内を流れる河川の大半は網引町付近で万願寺川に集約され青野ヶ原台地と来住山地の間を東流し加古川に合流する。右岸にある糠塚山（標高150ｍ）はその山容が流域の各所から遠望でき、加古川への開口部のランドマークとなっている。また『播磨国風土記』記載の「粳岡」の比定地となっている。

調査対象地は網引集落と万願寺川をはさんだ位置になり、奥行き約1.5㎞、幅約0.5㎞の谷の西肩にあたる段丘および丘陵上に位置する。谷の中央には加古川市境付近から発する小河川の新村川が北流し、糠塚山北裾の小野市境付近で万願寺川に合流する。川沿いは東西の丘陵・山地から新村川への傾斜面で構成され、平野部は少なく、棚田が川沿いに広がる。

現在主要地方道高砂・加古川・加西線が西側丘陵裾を南北にはしるが、この道は加古川下流域と播磨内陸部・丹波を結ぶ街道から発展したものである。現道は昭和初期に里道を改修したもので、旧道は加古川市境から東側の山裾に沿う。集落は東側の山裾の旧道沿いに形成されている。この集落は地元では「新村（しむら）」と通称され、現網引集落からの分村と考えられる。おそらく新村川沿いの水田開発に伴い形成された集落であろう。

「新村」では山裾で開口した横穴式石室が古くから知られていた。その調査は大正年間に行われた加西郡の調査が最初と思われ、この時に20基程度の古墳が確認されている。栗山一夫氏が昭和初期に行った調査は群集墳の調査の嚆矢となるもので学史的にも知られているが、ここでは網引南方古墳群として16基以上が記載されている。昭和30年代に小野市の焼山古墳群発掘調査とともに高まった考古学への関心により周遍寺山１号墳の発掘調査が行われ、この際周辺の分布調査が行われたようである。この時点では『祖先のあしあとⅣ』によれば糠塚山西側に３基と県道西側の古墳群を新村古墳群として７群で35基以上、『兵庫県遺跡地名表』では周遍寺山１号墳のほか周遍寺山古墳群として「数群にわかれて約40基」とされている。その後市教委および県教委による調査により、現状では堀山古墳群(1) ７基、状覚山古墳群(2)19基、周遍寺山古墳群(7) ３基、糠塚古墳群(8)15基、赤松ノ尾古墳群(10) ４基、新池古墳群(9) ５基、新村古墳群(11) ９基、亀ノ尾古墳群(12) ２基の合計64基が確認されている。ただし西側の丘陵や山裾は耕作地の開墾、食料増産のための開発、昭和30年代以降の造成や土取りにより大きく改変されているため、現在周知されている古墳以外にも消滅した古墳が少なからずあると考えられる。また古墳から持ち出されたとみられる石棺材は、網引町内では蝮蛇塚(a)の他、不動ノ尾(c)、古池横(b)、旧密蔵院(d)、八幡神社境内(e)で確認されている。いずれにしても新村川流域の狭い谷は加西市内でも有数の古墳が密集する地域といえる。

古墳時代以降の状況は、周遍寺山１号墳の墳頂部に平安時代の火葬墓が３基検出されている。また本調査対象地西側の山裾には志方窯跡群から派生した窯跡が分布している。

集落遺跡は調査対象地の対岸、現網引集落と重複するように確認されている。針田遺跡(13)は万願寺川に張り出した段丘末端に位置し、弥生時代後期の住居跡１棟が検出された。遺跡の本体は網引集落方向

に広がっていると思われる。宮ノ後遺跡(14)は集落内の八幡神社周辺に広がる古墳時代から中世の集落遺跡である。竪穴住居と考えられる遺構も検出され、古墳時代の土器が出土していることから、堀山古墳群などと同時期の集落になると思われる。なお八幡神社付近では、過去に鉄刀と白磁が出土したと伝えられる。万願寺川南岸では出土状況は明らかではないが、開墾時に弥生土器・須恵器、平安時代とみられる高台付の皿が出土したという。

加古川市境に近い山地の中腹には周遍寺がある。法道仙人開基の伝承をもち、『峯相記』によれば鎌倉時代に栄えたとされる。戦国期に焼失したと伝えられ現在は小規模な本堂が残るのみだが、本堂周辺には平坦面が確認され、井戸や石垣が残存するほか、須恵器や瓦が採集されている。

1 堀山古墳群　2 状覚山古墳群　3 堀山遺跡（弥生時代）　4 堀山遺跡（縄文時代）　5 蛭ヶ池ノ尻遺跡　6 流尾遺跡　7 周遍寺山古墳群　8 糠塚古墳群　9 新池古墳群　10赤松ノ尾古墳群　11新村古墳群　12亀ノ尾古墳群　13針田遺跡　14宮ノ後遺跡　15八寸山墳墓群　a 蝮蛇塚石棺　b 古池横石棺　c 不動ノ尾石棺　d 旧密蔵院石棺　e 八幡神社境内石棺

第4図　状覚山・堀山古墳群周辺の遺跡

参考文献

兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地名表』　1965年

兵庫県教育委員会文化課『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表第１表』　1968年

『加西郡史』

栗山一夫「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告一　下里川及び万願寺川流域」　『人類学雑誌』49巻７号　1934年

神戸新聞社会部編『祖先のあしあとⅣ』のじぎく文庫　1961年

赤松啓介「周遍寺山第１号古墳発掘概況」『播磨郷土研究』第３号　1958年

「「人骨古墳」発掘についての打合会記録」『播磨郷土研究』第３号　1958年

古家実三「如意山周遍寺と附織辺家」『播磨郷土研究』第２号　1958年

『小野市史』第４巻（史料編Ⅰ）　1997年

『加古川市史』第４巻　史料編Ⅰ　1996年

加西市教育委員会『加西市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』　1997年

加古川市教育委員会『加古川市遺跡分布地図　第２版』　1994年

小野市教育委員会『小野市遺跡分布図』　1992年

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「宮ノ後遺跡」『平成13年度年報』　2002年

各遺跡の調査報告書は割愛した。

第３章　状覚山古墳群の調査

第１節　状覚山古墳群の概要

状覚山古墳群は１～19号墳の19基の古墳で構成される。『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表第１集』においては１・２号墳のみが周知されていたが、その後の分布調査・発掘調査により３～19号墳が確認された。19基の古墳が所在する丘陵一帯の字名が状覚山であるため、１つの古墳群としているが、大別すると１～３号墳、４号墳、５～10号墳、11・12号墳、13～17号墳、18・19号墳の各群に分かれている。

状覚山１・２号墳は道路に面して開口していることから古くから知られ、栗山一夫氏の「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」において「両カブト塚」として紹介されている。また５～10号墳、18・19号墳のいずれかの古墳についても昭和35年発行の「加西町全図」に古墳の記載がある。

４号墳は、状覚山１～３号墳と堀山古墳群のほぼ中間にある尾根上に単独で所在する。南北両側には谷が入り込み、いずれの古墳群とも地形的に連続しない。古墳の所在する地点の字名は字蛭ヶ池ノ尻であり、本来はこの字名を古墳名に用いるべきであろうが、確認調査時の認識で、堀山古墳群は横穴式石室を内部主体としないことから状覚山古墳群に含めることとした。現状では単独で存在しているが、『加西郡誌』に「網引蛭ヶ池山中にも五六の古墳があり」との記載があり、「加西町全図」にも蛭ヶ池北側の緩斜面に古墳の存在を示す記載があることから、かつては５基程度で群を形成していたと推測される。

本発掘調査は４号墳、５～10号墳、11・12号墳、13～17号墳を対象にし、残る古墳のうち、１～３号墳は保存を目的としたトレンチによる範囲確認調査、18・19号墳は現状において墳丘の範囲を明示し、工事用図面に記して現状保存した。

第２節　４号墳の調査

１．立地・検出状況

状覚山４号墳は新村川を見下ろす西から東へのびる低い尾根上に位置する。尾根は45.7ｍをピークとして東へゆるやかに傾斜している。古墳は頂部から斜面への傾斜変換点付近に開口する。

尾根頂部は標高45ｍ付近まで幅約15ｍにわたって土砂採集が行われ、調査区西半部は旧状を留めていない。調査区東半部および南北両端部のみわずかに原地形が残存している。調査前は、墳丘の高まりは全く認められず攪乱内に石室材と思われる石２点が露頭していたことで辛うじて古墳と推定しうる状況であった。確認調査の結果、石室を検出し、古墳であることが明らかとなり、本発掘調査に移行した。

石室の残存状況は不良だったが、攪乱の影響は石室床面まで及んでおらず、床面の遺物は当初の状況を留めていた。

２．墳丘

攪乱により表土である腐植土の直下で地山が露出しており、盛土などは全く確認できない。ただし石室の南西部で地山を掘り込んだ凹地を弧状に検出した。規模は検出長約3.8ｍ、幅２ｍ、深さ10㎝程度である。検出位置から周溝の残欠の可能性があるが、そうであれば径９～10ｍ程度の墳丘が復元できる。

３．埋葬施設

埋葬施設は右片袖式の横穴式石室である。主軸はMN20°Wにもち、南東方向に開口している。石材は主に石室右側の基底石のみが残存し、左側は１石を残してすべて抜き取られているため石室の構築方法や構造は明らかにできない。ただし基底石の据付穴が残存することから石室の平面規模を復元することができる。

墓壙は東半部を損ねているが、長軸方向は4.5ｍを測り、平面は石室と相似した片袖を持つ方形を想定する。深さは最も残存する右側壁の奥壁付近でも削平のために0.5ｍを測るにすぎない。周壁はほぼ直立するように掘られている。基底石の据付穴は墓壙床面から個々に掘り下げている。

玄室奥壁および側壁の基底石は３石で構成される。玄室の復元規模は、長さ3.1ｍ、幅は奥壁際で1.8～1.9ｍ、玄門側で2.0ｍを測る。基底石は横長の石を並べて用い、内側はほぼ面を揃えて構成する。奥壁にむかって大型の石材を用いている。袖石は幅1.0ｍ、高さ0.8ｍの石単一で構成する。玄室右側壁から袖の突出は0.8ｍである。羨道は残存状況が不良で、右側壁の基底石２個が残存するだけだったが、石材据付穴からみて基底石は少なくとも３石前後で構成され、左側壁は玄室と同一の面を構成していたと考えられる。袖部の幅は１ｍ前後と推定され、石室の主軸よりもやや南東に偏りをみせる。羨道の床中央部分では排水溝を１本検出した。検出長6.1ｍあり、石室主軸方向よりも18°程南東方向に偏る。規模は幅0.4～0.6ｍ、深さ６㎝を測り、北端と南端の比高差は37㎝ある。排水溝の北半と中央よりやや南よりに集石がみられ、検出位置から閉塞石の残欠と考える。溝内からは須恵器片が少量出土した。

玄室の床面は２面検出した。流入土を除去後に検出した面を第1床面、間層を挟んで約６㎝下に存在する面を第２床面と呼称する。

第１床面

明黄褐色または黄橙色シルトの上面にあたる。この面では後述する棺台と考えられる石列や遺物の大半は埋没している。第１床面では中央西よりを中心に炭・灰の堆積層が検出され、その中に骨片が混じっている。このような状況から石室内で火葬が行われたものと推定される。

床面上からは土師器皿の出土があり、平安時代に石室再利用があったことを示している。したがってこの床面で火葬の行われた時期は、第１床面整地時から出土遺物の所属時期である平安時代までの幅をもって考えざるをえない。

第１床面から出土した遺物は、須恵器杯蓋(7)および杯身(8)が奥壁付近で出土している。また原位置を保っていなかったが、奥壁近くで２次焼成を受けた須恵器有蓋高杯(10・11)が２点出土しており、火を用いた際に影響をうけた遺物である。なお２次焼成のある遺物は高杯の２点のみで他の２点は２次焼成の痕跡はない。なお確実に火葬に伴うと考えられる遺物は出土していない。

第２床面

墓壙底に明黄褐色砂質シルトを５～８㎝の厚さで整地した上面にあたる。この面では玄室西側石よりで棺台と考えられる石列を２組検出している。ここでは棺台として報告しておく。

棺台１は右側壁際にあり、石室同様主軸を南北にもつ。台は南、北と中央の３組で構成され、両端は各４個、中央に２個、計10個の礫を用い、さらに西側に押さえと思われる礫３個がつく。推定される棺の規模は長さ２ｍ、幅0.6ｍ程度である。

棺台２は棺台１の東側に接してある。棺台１設置後に作られたとみられ、使用する礫は棺台１と比較

するとやや小型で配列も粗雑に見える。台は棺台１と同様に南、北と中央の３組で構成され、各２個、計６個の礫を用いている。推定される棺の規模は長さ1.9ｍ、幅0.5ｍ程度である。

第２床面ではまとまった遺物の出土をみた。遺物の出土状況は玄室の奥壁側と袖石付近に大別でき、中央付近からの出土は少ない。主な出土遺物は土器、金属器、玉類である。土器は石室袖石付近から比較的まとまった状態で出土した。杯蓋・身、高杯、壺、甕があり、欠損があるものの大半は完形に近い状況である。これらの土器が袖石側へ寄せられたのは、第２床面における追葬時か第１床面整地の際なのかは明らかにできない。また実測しえない土器片として土師器高杯脚部と杯が玄室内より出土している。金属器は玄室の奥壁付近からの出土が多い。完存するものは少なく、大半は小片となっている。またまとまった出土状況を示さず、散乱したような状況であることから、副葬時の原位置を保つものはないと考える。馬具は奥壁付近から袖石付近までの間に点在している。なお第２床面からは鉄釘が出土していることから木棺が存在したと考えられる。

玉類も石室中央付近から奥壁までの間で出土しているが原位置を留めたような出土状況ではない。

羨道部の排水溝および閉塞石内からは須恵器杯が出土しているがいずれも破片であり、本来の位置を留めていないと考える。実測しえない破片であるが、羨道から須恵器杯蓋１点と格子タタキを施した須恵器甕体部片が１点、閉塞石付近で須恵器杯身が２個体程度出土している。

４．出土遺物

（１）土器

１～６は玄室袖石付近に片付けられていたもので、すべて第２床面に伴うものである。

１の杯蓋は２の杯身と焼成され、溶着した痕跡が認められた。１は天井部と口縁部の境界が明確で沈線が巡る。内傾する鋭い端面をもつ。２は体部が底部からゆるやかに外方に開く。３はやや体部が丸みをもつ形状で、立ち上がりは内傾する。底部内面に同心円状の当て具痕をなで消しているのが確認できる。２と３は器高、口径ともに差異はほとんど認められない。４は無蓋高杯である。１段の長方形透かしを三方向に穿つ。杯部は1段の稜をもち、底部外面には列点文を施す。５は壺である。体部は倒卵状を呈し、外面は平行タタキの後、カキ目を施す。底部は回転ヘラ削りを行う。６は甕である。口縁端部を欠くが口縁部径が体部径を上回るようである。やや扁平な体部には円孔をはさんで２条の沈線を巡らせ、その間に列点文を施す。頸部下半にはカキ目を、上半部から口縁部にかけて10本／１単位程度の波状文を２単位施す。

７～11は玄室北半から出土したものである。このうち７・８は第１床面で検出し、10・11は第１床面で用いられた火による２次焼成を受けている。

７の杯蓋は天井部と口縁部の境界が不明瞭となり、わずかに沈線が１条巡るのみである。２・３に比べ器高がやや低く扁平な形状となる。９は無蓋高杯杯部である。口縁部と底部の境界に稜をもつ。４と比較すると口径に対し器高が低くやや扁平な形状である。12は脚裾部である。端部を水平につまみ出す。９と同一個体となるかは明らかでない。10・11は有蓋高杯である。４号墳出土土器の中で唯一２次焼成を受けているものである。法量は口径については両者とも差異はないが、高さは杯部、脚部ともやや11が高い。杯部は内傾する短い立ち上がり脚部は短脚で透かし孔はもたない。脚端部の形状は内側にやや屈曲させ、水平な端面をもつもので、10と比較して11は屈曲が大きい。

13～18は玄室南半と羨道から出土したものである。

13～15は杯蓋である。14は天井部と口縁部の境界に沈線が１条巡る。口縁部は内傾する鋭い端面をもつ。13は14と比較するとやや丸みをもち、底部と口縁部の境界が不明瞭になっている。口縁端部の形状もやや丸い。15は天井部が平坦で口縁部へ丸みをもってつながり、その境界は不明瞭である。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ切りのまま不調整である。

16～18は杯身である。底部の形状は16・18が扁平なのに対し、17は底部が丸みをもち器高は深い　また立ち上がりはすべて内傾するが18の立ち上がり高は低い。

19は石室再利用時の遺物で土師器杯である。いわゆる回転台土師器である。

（２）石製品

石製紡錘車（S50）１点が第２床面の奥壁付近から出土している。滑石製で淡緑色を呈する。傾斜面に斜格子、下面に放射状の線刻を施すが、表面を引掻く程度の表現であり不明瞭である。直径4.4㎝、上面径3.1㎝、厚さ1.6㎝、孔径0.75㎝を測る。

（３）玉類

土玉22点（J2～J23）、ガラス玉73点（J24～J96）、切子玉１点（J1）が出土した。すべて第２床面から出土したものである。

J1は切子玉である。風化により灰白色を呈する。稜が不明瞭であり、断面形はほぼ円形を呈している。

土玉は径7.2～9.0㎜、厚さ6.2～9.0㎜を測るが、径は８㎜程度に収まるものが多く、厚さは６・７・８㎜程度に大別できる。色調はほぼすべて黒褐色を呈し、にぶい光沢をもつものもある。

ガラス玉の色調は、青～青紺色系、スカイブルー系、エメラルドグリーン系、緑色系に大別でき、透明なものから不透明なものまである。緑色系が33点と半数弱を占める。規模も径2.9～5.3㎜、厚さ1.9～4.4㎜とばらつきがある。

（４）金属器

金属器はすべて第２床面から出土したものである。

a. 武器

鉄鏃がある。大部分が破片で出土しているため、全容がわかるものは少なく、副葬された点数は明らかにしえない。

M1・M2は柳葉の鏃身でM1はやや外反する逆刺がつく。M2も基部の残存状況から逆刺のつく可能性がある。M3～M5は柳葉または三角形の鏃身であろう。M6は三角形の有茎鏃で、１点のみ出土している。

M7～M21は長頸系の鉄鏃である。全容のわかるものはM7とM8のみである。M7は全長18.5㎝を測る。鏃身は柳葉形で側面は直線的である。断面形は錆で明確でないものの片丸造の可能性がある。各部の規模は鏃身長2.8㎝、箆被部は長さ8.5㎝で断面形は方形を呈するようで、関部の形状は棘箆被である。茎部は長さ7.2㎝で断面は円形を呈する。茎は木質に覆われ、矢柄装着の際の樹皮による結縛痕跡がある。M9～M14は鏃身から箆被部分が残存するもの、M15～M23は箆被から茎部が残存するものであるが、各部の規模・形状はM7に準じている。また錆により明確にしえないが一部無関とみられるものがある。M24～M28は箆被または茎部の破片である。M27は茎であり一部木質が残存、M28は矢柄装着の際の樹皮による結縛痕跡が認められる。

b. 馬具

馬具はすべて破片で出土しており、全容が明らかな状態で出土したものはない。

M29は鞍金具に用いられる鞍金具と思われる。上部がすぼまった銀杏形の縁金にＬ字状に残存する板状の金具が付着する。縁金との結合部分については残存しないが付着部分がやや丸まっているので、本来は縁金に巻きつけていたと思われる。M30は兵庫鎖の一部で、M31の鉸具と鐙金具を構成する可能性がある。M31は輪金と輪金の基部に取り付けられた刺金から構成される。M32は復元すれば５弁の花形になるとみられる。花弁の中央は円丘状に盛り上がり、円形の孔がある。

c. 工具

刀子あるいはそれと推定できる破片が４点ある。全容が明らかなものはM33のみで、他は破片である。M33は上下に関を持ち、茎は木質に覆われる。全長11.5㎝を測る。M34は刃部の切先付近のみが残存する。部分的に木質に覆われている。M35、M36は茎と刃の基部のみが残存する。いずれも関は下方にのみ持つ。茎には木質の上から樹皮を巻きつけた痕跡が見られる。またM36は刃部も木質に覆われる。

d. 装身具

耳環は２点（M37・M38）出土しているが、この２点で一対になると思われる。幅、高さとも2.0㎝前後である。いずれも残存状況が悪く箔は完全に剥落している。銅芯はほぼ全面が緑青に覆われ、部分的に箔の下地となる物質が残るのみである。

e. その他

鉄釘は釘頭の形状がわかる４点（M39～M42）を図化した。いずれも木棺材を緊結するために用いられたものであろう。断面はいずれも方形で、頭部は大きく折り曲げている。すべて先端部を欠損しているため形状は明らかでない。

M43は不明鉄製品である。先端が「U」字状で、基部から棒状に続く刺股状を呈する。断面は方形を呈し、一部に木質が付着する。馬具の一部を構成するものであろうか。

５．小結

４号墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。石室は南東方向に開口しているがこの方向は谷の奥に向くため、眺望は良好とはいえない。

初葬時の床面とみられる第２床面から出土した土器のうち、杯蓋は天井部と口縁部の境界が明確で段をもつもの、あるいは沈線が巡るものが多い。杯身も、内傾する立ち上がりはまだ高さをもつなどTK10併行期の範疇で把握できることから、古墳築造は６世紀中葉と考える。４号墳は当地域における導入期の横穴式石室とすることができる。所属する古墳群こそ状覚山古墳群と呼称しているが、後述する５号墳以降の古墳は終末期の古墳であり本墳とは時期的に連続するものではない。

古墳周辺は大規模な撹乱を受けているため、正確な墳丘の形状や規模、石室の立面的構造など不明な点は多いが、墳丘は９～10ｍ程度の円墳であったと推定する。石室は残存状況が不良ながら、床面は辛うじて原状をとどめていたため、石室の平面形態は復元しえた。玄室は長さ3.1ｍ、幅1.9ｍの長方形を呈する右片袖である。いわゆる畿内型石室として把握できる形態のものである。

加古川流域における導入期の横穴式石室としては、同じ加西市域には万願寺川支流の下里川流域に剣坂古墳があり、本古墳とは約８㎞の距離がある。出土土器から６世紀前半の築造と推定され、本墳に先行するものだが、九州系石室をもつもので関連は認めがたい。周辺地域で本噴と同時期の古墳としては、石黒山11号墳、池尻19号墳、奥新田西古墳などがあり、加古川右岸に点在している。このうち奥新田西古墳は新村川と権現川水系との分水界をはさんだ位置関係にあり、距離的にも近い。右片袖で、玄室の

長さ3.5m、2.2mを測り規模的にも類似する。ただ石室の平面形を本墳と比較すると、玄室は長方形を呈するものの、玄室長に対する玄室幅がやや広く、立面的な構造からも平面方形の石室の系統にあるものと考えられ、本墳と同一系統にあるとは考えがたい。他の導入期の横穴式石室も玄室の平面形は方形平面あるいはその系統にあるもので、やはり本墳との関連は認めがたい。したがって、導入期においては、周辺地域を含めても本墳の石室が確認されている唯一の畿内型石室となる。

調査によって実態が明らかになっている古墳の中では、むしろ近接する堀山6号墳の系統に属するものと考える。堀山6号墳は後述するが5世紀後半から6世紀初頭の築造と推定でき、周辺には同時期の古墳の存在が想定される。韓式系土器が出土していることから被葬者を渡来人またはそれに関わる人物に想定できる。本墳とは1、2世代程度の空白期間があるものの、堀山6号墳の被葬者と同一の集団、つまり渡来人と関わりの深い集団がいち早く横穴式石室を導入しえたと考えることが妥当かと思われる。古墳名こそ状覚山古墳群としているが、系譜的には堀山古墳群として把握すべきであろう。

なお、石室内から平安時代に属する土師器の灯明皿が出土しており、少なくとも中世以前の段階で石室は開口していたものの、天井石は残存していたと推定される。

6．その他の遺構・遺物

（1）遺構

4号墳石室の東側約6mで土坑を1基検出した。平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈し、規模は長さ1.5m、幅0.7m、深さ36cmを測る。坑底の西半部に20cm大の礫がある。検出状況から土壙墓の可能性がある。遺物は出土していないため所属時期は不明である。

（2）出土遺物

S41は、サヌカイトを用いた、凹基無茎式石鏃である。風化が進行している。両側縁はほぼ直線的に整形されているが、先端部にかけて緩やかに屈折する。両側縁の厚さが大きく異なるため、二次加工は厚い側縁に集中して施されている。左右の脚長が極端に異なるが、片脚が折損した痕跡は認められない。脚端部は、いずれも尖る。確認調査時に石室付近より出土したもので、遊離遺物である。（実測図は図版95、計測値は第1表に掲載している）

第3節　5～10号墳の概要

状覚山5～10号墳は分布調査時点ではB地点と呼称しており、丘陵東端の県道脇に所在する状覚山1～4号墳とは約500mの距離をおいて離れているが、所在地字名が同じ状覚山であることから状覚山古墳群と呼称することとなった。墳丘は低平であったことから内部主体は木棺直葬と考えられており、古墳番号についても山麓からの続き番号で5～7号墳となったが、前述のとおり、調査過程で古墳数が増えたため、結果的には10号墳まで番号を付した。また、内部主体はすべて横穴式石室であることが判明した。なお、その後、5～10号墳の南側尾根にも古墳群が存在していることが判明したため、さらに続き番号を付した結果、状覚山古墳群は19号墳までとなった。

5～10号墳は、標高85.8mの山頂最高所から南に水平距離で55～125mの位置にあたり、尾根稜線上よりも東斜面側に偏った位置に立地している。6基で一つのまとまった古墳群を形成しており、調査前での標高は80mから84.5mの間である。調査時の所見では、近接した位置に古墳は存在しないようであるが、

８・９号墳のような、地形変化が顕著でない小規模古墳が墳丘流出や埋没した状態で存在している可能性は残っている。

調査は、掘削前の地形測量から実施し、縮尺１/100で平板測量図を作成した。その結果、古墳がもう１～２基増えることが予想された。発掘調査は表土からすべて人力により掘削し、古墳表土・古墳周囲の流入土および周溝内埋土・石室内埋土の掘削を先行した後、石室の写真撮影・実測を行なった。また、新たに古墳と推定された部分では掘削の結果、石室が検出され古墳であることが判明したため、調査区を拡張して調査を行なった。その結果、５～10号墳の発掘調査面積は1,114㎡となった。各古墳の調査については四分法を用いて行ない、石室主軸方向が判明した段階で土層観察用畔を石室主軸と平行・直交する方向に振りなおした。すなわち、本報告では石室主軸と平行・直交方向の土層断面図を掲載しているが、墳丘盛土残存面以下は石室主軸と平行・直交方向に設けた畔にもとづくものであり、それ以前の調査段階における表土・周溝埋土等の土層断面図は石室主軸および墳裾・周溝肩に合わせる形で適宜縮小・引き延ばし等の変更を加えて合成した。石室および石棺等の内部施設については、随時の写真撮影や、縮尺１/10での実測を行ない記録につとめた。また、同時に平板による残存墳丘の地形測量を行ない、ヘリコプターによる航空写真撮影も実施した。その後は、古墳構築状況確認のため、土層観察用畔を残してすべての墳丘盛土を人力により除去し、古墳築造当時の地表面の検出を行なった。墳丘盛土除去後は、石室石材を除去し、石室構築のための墓壙（石室掘形）を検出してその掘削も行ない、写真撮影や平面・断面の実測および地形測量を行ない、調査を終了した。

なお、各墳における横穴式石室の主軸方向は振れがあるものの、大きく異なっていないこと、および煩雑さを避けるため便宜的に奥壁を北として記述することとする。また、北方位は座標北を基準とした。

第４節　５号墳の調査

１．立地・検出状況

調査区の最も高所、標高約84.5ｍ前後に位置する円墳で、横穴式石室を内部主体とするが、西（北西）側の石室壁は盗掘等により破壊されており、石室側壁も２段程度で、天井石は残っていなかった。一方、石室閉塞石や前庭部は遺存状況が良好で、閉塞石際で土師器、前庭部から須恵器が出土した。周溝は６号墳と共有しているが、土層堆積状況からは前後関係は把握できなかった。しかし、５号墳の墳裾を削っているように認められることから、６号墳が後に構築されたものと考えられる。また、７号墳との前後関係についても、７号墳の周溝が５号墳の周溝中央付近から切り込んでいるため、５～７号墳のうち５号墳が最も先行して築造されたものと判断している。

石室を検出する前段階での土層観察用畔は、５号墳中央から７号墳中央を通るラインに平行・直交方向に設けていたが、石室検出以降、墳丘盛土および地山の断面ラインは石室主軸に平行・直行に設定しなおした。したがって、墳丘土層断面図のうち、表土および周溝埋土などの上層は石室主軸に合わせた近接ラインに時計回りに回転させ、縮小・引き延ばし等の加工を行ない、合成するかたちで作成した。

２．墳丘

調査前の現況測量時点では、直径約７×６ｍ程度の楕円形に近い円墳と認識しており、幅約１ｍの周溝が斜面上半分に巡っている状況が観察できた。また、その時点での墳丘の高さは斜面下側から約１ｍ、

斜面上側からでは約20㎝で、墳丘最高所の標高は84.921ｍであった。墳頂部の中心は盗掘と思われる窪みがあり、２×1.5ｍの楕円形を呈していた。

調査の結果、横穴式石室を内部主体とする古墳であることが判明したが、墳丘は調査前よりもいびつな形状となり、南半分では円墳、北半分では方墳に近い。残存墳丘は南北6.5ｍ、東西5.5ｍで、斜面下側からの高さは0.6ｍ、斜面上側からはマイナス10㎝、斜面上側の周溝底からでは0.3ｍを測る。なお、石室の位置は墳丘中央部よりも西にややずれて存在している。

墳丘は旧地表面を削平したのち盛土を行なっている。土層断面図では墳丘構築後に墓壙が掘削されたように看取できるが、最初の造成の段階で墓壙を掘削し、石室を構築しながら盛土を行なったものと判断している。築造時の墳丘は現状よりも高かったと想定されるが、その高さについては想像の域を出ない。ただし、約２㎞南に存在する奥新田東１号墳は状覚山５号墳に近い時期に築造された横穴式石室墳であるが、床面から天井石までの石室高が約1.6ｍ、墳丘高は２ｍ弱であったことや、状覚山10号墳の石室が高さ約1.3ｍ遺存していたことは参考になるであろう。なお、状覚山５号墳では葺石・列石等の外部施設は全く認められなかった。

周溝は前庭部を除いた墳丘の周囲を巡っていたようであるが、東側および南側は６・７号墳によって削り取られており、周溝を共有しているようにもみえる。なお、６号墳の周溝は５号墳の墳丘の一部までも削り取っている。周溝幅は約1.5ｍで、北西部の最も高い部分が方形状に張り出しており、北東隅でも張り出しているように見える。方墳を意識していた可能性がある。周溝断面は逆台形を呈し、深さ15～20㎝であったが、４㎝大までの礫を含んだ明黄褐色系の細粒砂～極細粒砂が流入していた。

南側周溝埋土から角釘が１点出土しているが、後世の混入の可能性が高い。

３．埋葬施設

（１）石室

内部主体である横穴式石室は無袖式のもので、玄室・羨道を区画する立石も認められない。また、石室上部および西側側壁の半分が失われていたものの、石室は開口部まで残存し、閉塞石も遺存していた。また、石室床面には敷石も認められた。なお、使用石材は周辺で産出する流紋岩質凝灰岩である。

床面での石室全長は最大値で2.28ｍ、幅は0.74～0.79ｍを測り、床面からの高さは最大56㎝遺存していた。石室の開口方向はＳ28°Ｅである。奥壁は幅59㎝、高さ45㎝の角礫１石が残存し、下部には幅20㎝、高さ７㎝程度の角礫２点を下にかませていた。側壁は部分的に３段遺存していたが、大半は２段のみであった。使用石材は幅18～43㎝、高さ10～30㎝の角礫を横積みにし隙間に小角礫を詰めている。なお、石室開口部のみ幅30㎝、高さ35㎝程度の角礫を縦に使用しており、立石状にしている。

石室床面には７～25㎝の角礫を石室幅いっぱいに敷いているが、必ずしも平坦面を上にして敷いている訳ではなく、上面が尖った状態のものも多く認められる。また、石室奥壁付近および開口部付近では敷石は認められないが、当初からの状態であった可能性が高いと思われる。さらに、敷石が集中する範囲が、開口部より約0.8ｍ内側から始まっており、その長さは1.3ｍを測る。敷石集中部から開口部へ約15㎝の西側側壁ぎわで土師器の杯が出土し、奥壁と東側壁の接点付近から耳環が１点出土した。

なお、床面は墓壙掘削後に20㎝程度土を入れて上面を平坦にしている。床面の標高は84.25ｍを測る。

閉塞石は石室開口部端に合わせるかたちで２段分遺存していた。長さ50㎝、幅30㎝程度の角礫の長軸を石室主軸方向に合わせて２石置き、その上に30×15㎝程度の角礫を同方向に乗せている。最も高いと

ころで床面から約30㎝の高さであった。

石室開口部から南側では、側壁の外側のラインに合うかたちで、幅1.8ｍ、最大深20㎝の窪みが1.6ｍ続いていた。盛土から切り込んでいることと、底面と石室床面の高さが合うことから前庭部と判断した。前庭部南端に近い西端から土師器甕、東部では須恵器杯２点と平瓶１点が並んで出土した。杯は１点が正位置、もう１点は天地逆になった状態で検出した。ほかに須恵器短頸壺と土師器甕が前庭部に置かれていた可能性が高いと判断される位置から出土している。

（２）墓壙

石室を構築するための墓壙は先述のように、地山整形後に平面「コ」字形に掘削している。端のラインはやや歪になっているが、基底石を置く際に再加工したとも考えられる。底面は凹凸が多く、平坦とは言えないが、奥壁位置のように基底石を置く部分が窪んでいるのも再加工の可能性を考えるべきであろう。墓壙の南北最大長は2.85ｍ、東西最大幅は約1.5ｍ、掘削面からの最大深は約30㎝である。なお、墓壙底の南北方向は水平に近いものの、東西方向では地形の傾斜方向に傾いているうえに、石室西側壁部分と東側壁部分では高低差約10㎝の段差がある。

４．出土遺物

土器のほか、鉄釘・耳環といった金属製品も出土している（図版43・44）。

（１）土器

20は石室内南東隅床面敷石上から出土した土師器杯である。外面には粘土紐接合痕が残り、やや歪な形となっている。口径15㎝、器高5.4㎝で底部外面は静止ヘラケズリのようである。内面は5YR7/6橙色、外面は10YR8/4浅黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。飛鳥・藤原宮跡では杯Ａにあたり、口縁端部の特徴や径高指数（器高／口径×100）が36であることから、飛鳥藤原宮（以下飛鳥と省略）編年（西1986）第Ⅲ期から第Ⅳ期にあたると考えられる。実年代では７世紀第４四半世紀が与えられている。

21は須恵器杯Ｇの完形品で、石室前庭部から22や24と並んで出土したものである。口径10.9㎝、器高3.4㎝を測り、径高指数が31であることから、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。底面は回転ヘラ切り後の調整は施していない。永井氏による播磨地方古墳時代須恵器編年（永井1995）では、Ⅲ期１Ｂ小期の特徴を有している。

22は完形の須恵器杯Ｈで、底面は回転ヘラ切り後不調整、その他は回転ナデであるが、底部内面のみ仕上げナデを施している。口径10.9㎝、器高3.7㎝を測り、径高指数は34であり、飛鳥Ⅳ期と考えられる。

23は須恵器短頸壺であるが、破片を図上復元したものである。破片の出土場所は、５号墳石室前庭部および５号墳南東区以外に、７号墳の南西部周溝および８号墳墳丘北東裾からも出土しているが、出土位置で最も標高が高いのは５号墳であり、７・８号墳での出土場所を考慮すると、当初５号墳前庭部に置かれた土器が７・８号墳間に流出したものと判断してよいであろう。23の復元値では、口径は9.7㎝、器高15.1㎝、体部最大径は18.2㎝である。体上部表面には自然釉がかかり、体部下半に流れ落ちている部分がかなり認められる。肩部には３条の沈線をめぐらせ、下段側沈線間には櫛による刺突文を施しており、飛鳥Ⅲ期～Ⅳ期と考えられる。

24は石室前庭部出土の須恵器平瓶であるが、口縁部全体と体部の約半分を欠失している。体部最大径は19.7㎝を測り、その上部には１条の沈線をめぐらせている。また、体部上面に釦状の粘土粒を貼り付けている。体部下半外面は静止ヘラケズリで、底部付近は平滑になっているが、使用のためと思われる。

この土器も５号墳石室前庭部以外に７号墳の南西部周溝から出土した破片が接合した。焼成は良好堅緻で、体上部には自然釉が被っている。

25は前庭部内西部で出土した土師器甕で、約半分残存している。口径13.7㎝、器高15㎝、胴部最大径15.3㎝を測り、体部外面は縦ハケ調整で仕上げている。口縁部は体部から屈曲して単純に外反し、厚みもほぼ均一で、端部上面に面をもつようである。

26は５号墳南東区の表土下から出土した土師器甕の破片であるが、前庭部に置かれていたものを掘削中に取り上げてしまった可能性が高い。口径11.2㎝で、体部最大径は11.6㎝を測り、体部外面は縦ハケ調整である。口縁部は緩やかに外反するが直立に近い。

（２）金属器

M44は５号墳の南側周溝から出土した角釘である。断面は4.5×4.8㎜の長方形で、長さは7.4㎝遺存している。頭部は折り曲げの状況がよく観察できる。

M47は石室内奥壁北東隅の床面から出土した耳環である。長径22.0㎜、短径21.8㎜で、断面は５ないし６㎜の径を測る。内側面および外側面に沿った部分のみ金箔が残っており、他は銅の地金が露出しているが錆びている。芯である銅は中実となっている。

５．小結

状覚山５号墳は比較的緩やかな傾斜面に築造されており、墳丘が明確であったことから、調査前に古墳であることが判明していた。低墳丘であったことから木棺直葬を内部主体と判断されていたが、予想に反し、横穴式石室を有していた。石室の規模は小さく、無袖で時期的に降るものであり、前庭部に置かれていた土器は７世紀後半という実年代が与えられる。石室内は敷石を伴っていたが、石棺は認められず、木棺を安置していた可能性を考えておきたい。また、石室開口部には閉塞石が遺存していた。

石室開口方向はそのまま延長すれば８号墳の西側をかすめることになり、墓道を復元するうえで興味深い。また、５号墳は６号墳と周溝を共有しているが、ほぼ同じ等高線上に２基が築造されていることも付け加えておきたい。

第５節　６号墳の調査

１．立地・検出状況

６号墳は、標高84ｍの緩やかな南東斜面上に位置し、今回調査を実施した５号墳の北東隣、７号墳の北隣の位置に立地する。調査前の観察では、わずかに墳丘の高まりが認められた。石室の石材は表土下に埋没していたが、石室上部に当たる部分の墳丘がわずかにくぼんでいた。

２．墳丘

墳丘の盛土は流失しており、築造当時の状況はとどめていないが、現存する墳頂部は、標高84.5ｍで、北側墳裾部より比高差0.2ｍ、南側墳裾部から比高差1.3ｍを測る。墳形は調査前、調査後の地形測量をもとに円墳と判断したが、石室前庭部の石室開口部より左側の墳裾が直線的な形状を示していることから、方形を意図して作られた可能性も考えられる。墳丘の規模は、石室主軸方向で8.4ｍ、同直交方向で8.4ｍを測る。

墳丘の構築方法は、まず墳丘部分の当時の地表面を残したまま周溝部分のみを上端幅1.4ｍ、下端幅0.8ｍ、深さ約20～40㎝の深さに地山を削り出し、墳丘の基礎部分にしている。次に石室構築のための墓坑を掘削しており、掘削後に基底石を置いている。基底石を据え付ける際に、５～15㎝ほど床面に穴を穿ち、石の安定を図っている。基底石と墓壙との隙間には土を充填している。旧地表面から上は、黄褐色系の細砂から極細砂で盛土して墳丘を形成している。これらの土は、墳丘周辺の掘削土を利用したものと推定される。

周溝は、墳丘の山側を巡るようにして「Ｃ」字状に掘削されている。総延長は約24ｍ、検出面での幅は1.4ｍである。５号墳側の周溝は、５号墳の墳丘を削り取っており、７号墳側では逆に７号墳の周溝に周溝の肩部が削られた状態である。

３．埋葬施設

（１）石室

埋葬施設は、無袖式の横穴式石室で南東方向（Ｓ38°Ｅ）に開口している。床面の標高は83.8ｍである。幅は奥壁部分で0.85ｍ、石室南側で0.7ｍである。

天井石は残存してなかったが、石室壁は左右とも３段（高さ0.6ｍ）ほど残っている。また、閉塞石も残存していた。石室に用いられた石材は、いずれもこの付近より産出する流紋岩質凝灰岩である。

石室側壁は基底石が左右共に７石が直線的に並べられている。側壁の長さは2.6ｍを測る。基底石は幅40㎝、高さ30㎝、奥行き30㎝程の石を使用している。底部は５～15㎝ほど掘り下げて石の安定を図ると共に上面の高さを調節していると考えられる。２段目以上には幅20㎝、高さ15㎝、奥行き20㎝の小さな石も用いているが、基底石と変わらない大きさの石も混じっている。奥壁は東西２石で構成され、３段が残存している。それぞれの石は幅60㎝程の大きさである。

石室の床面は敷石などの施設は無く、１～５㎝大の礫を含む黄褐色の細砂が敷かれていたが、その厚みは奥壁部分で10㎝、石室中央部で15㎝近く、石室南側にかけて徐々に薄くなる。閉塞石は幅60㎝の石が２石、石室入り口に中央が外側に張り出すように据えられている。

石室南側の東壁の前に須恵器の長頸壺が１点、据え置かれた状態で出土した。また、前庭部からは、須恵器の鉢あるいは甕、甑、杯の破片が出土している。

（２）石棺群

石室内には２基の埋葬施設が認められる。いずれも細部加工を施さない流紋岩質凝灰岩を用いた組み合わせ式石棺である。玄室奥壁寄りに１号棺、その南側に２号棺が構築されている。また、２号棺と閉塞石の間の床面に長さ60㎝、幅40㎝の板状石材が敷かれていた。側石が無いため、調査時には石棺とは判断しなかったが検討を要する。

ａ．１号棺

石室最奥に設置されている。石室奥壁を北側短側石として利用している。東側長側石と石室東壁面の間隔は、ほぼ密着しているが、西側長側石と石室西壁面の間隔は10㎝ほど開いている。棺の内法は、長さ1.0ｍ、幅50㎝、高さ35㎝である。長側石は50×20㎝の石２段と30×30㎝の石１段で構成されている。底石は南側に50×30㎝のものを置き、北側に30×20㎝の大きさの石を３石並べ、残りの隙間には20×10㎝の小振りな石で埋めている。南側短側石は80×40㎝、厚さ20㎝の石を使用しており、安定のため、床面を深さ10㎝ほど掘り、据え付けている。南側側石の上には蓋石が１点、棺内に落ち込むような形で残

存していた。大きさは.65×50㎝、厚さ15㎝を測る。

石棺内部には炭混じりの土が充満していたが、棺内から遺物は出土しなかった。

b．２号棺

２号棺は石室中央部の南側寄りの西側側壁に沿う形で設置されている。西側長側石は石室西壁面を利用している。東側長側壁は60×20㎝と15×30㎝の長短２石で構成されている。奥壁側の短側石は30×15㎝の石が１石、南側短側石は35×40㎝の石が１石だけで構成されている。南短側石は少し内傾している。底石は長さ40×30㎝の石と30×30㎝の石の２石で構成されている。石棺の上の北側には蓋石が１点残存していた。大きさは長さ65×50㎝、厚さ15㎝を測る。

（３）墓壙

石室構築のために墓壙は、平面形「コ」字形に掘りくぼめている。長さは3.3ｍ、幅２ｍを測る。深さは床面が石室前面の標高で水平になるように掘りくぼめられており、奥壁側が最も深く40㎝を測る。床面には石室の石や棺の側石の安定を図るための据え付け穴が穿たれている。

４．出土遺物

27は石室内南東部入り口付近より正立状態で出土した完品の須恵器長頸壺である。器高26.3㎝、口径10.4㎝を測る。口縁部の高さ13.4㎝で、ラッパ上に長く上外方に外反しながら開く。頸部には粘土紐接合痕が残る。体部はあまり角張らず丸みがあり、体部高13.2㎝にくらべて体部最大径15.2㎝と径が小さい。体部下半には「湿台」の痕跡が認められる。底部外面は回転ヘラケズリの後多方向のナデを施している。この土器の体部は形態的には短頸壺に似ている。

28は須恵器鉢または甕に分類される器形で、体部から屈曲した短い口縁部をもつ。４分の１程度の破片であるが、底部は欠失している。口径18.4㎝、体部最大径は21.2㎝を測り、最大径付近に３条の沈線を施している。体部下半外面にはカキ目を施し、内面下半は同心円文当て具痕をヘラ状工具でナデ消している。体部下半の器壁は厚く、焼成はやや不良である。この土器の出土位置は６号墳南東側墳裾の表土層を最高位とし、７号墳の南東側周溝上層および10号墳の北西から西側周溝といった広範囲におよんでいるが、原位置は６号墳石室前庭部に置かれていたものと考えている。

29は須恵器甑の口縁部および底部の小片で、軟質の焼成となっているため、表面が磨滅している。小片であるため不正確であるが、口径は28.2㎝、底径20.9㎝を測る。外面口縁部下に１条の沈線状の浅い窪みが観察できる。６号墳石室前庭部下の７号墳周溝埋土から出土しているが、原位置は６号墳前庭部と判断している。

30は須恵器杯Ｂの４分の１程度の破片で、口径18.0㎝、器高5.0㎝、高台径13.1㎝を測る。体部下半は稜をもって屈曲している。底部器壁は厚く、高台は外側でやや踏ん張る。径高指数は28で、飛鳥Ⅳ～Ⅴ期にあたると判断できる。接合した破片のうち、６号墳前庭部以外では７号墳の周溝北西部の埋土上層から破片が出土している。

31は須恵器杯で、底部を欠失し約３分の１の破片である。口縁部は端部で外反しており、口径は11.4㎝を測る。石室前庭部から出土している。

32は須恵器杯Ｂの底部で、底部は完形であるが口縁部は全く残っていない。高台径7.3㎝で、自然釉がかかり外面は緑黒色を呈する。底部から体部への屈曲は緩やかであり、飛鳥Ⅳ期あたりに比定できるであろう。６号墳前庭部南東端で７号墳周溝との接点付近出土分および７号墳の周溝北西部から出土した

破片が接合した。

5．小結

6号墳は、5号墳、7号墳と周溝を接する横穴式石室を内部主体とする古墳である。

築造は、周溝の切り合い関係より5号墳、6号墳の順で行われたと考えるが、7号墳との前後関係は確実に判断できる資料に恵まれないため、今後の検討課題としたい。

墳丘は、封土の流出などにより築造当時の形は保っていないが、墳形は円墳と考えている。しかし、墳丘前面の形状から、方墳を意識して築造された可能性も捨てきれない。

石室は墳頂部の残りが悪く、天井石も残っていないかもしくは、最初から無かった可能性もある。石組みは3段まで確認ができ、それ以上に段が無かったとすると、天井部までの高さは60㎝程度であったと推測される。内部主体の横穴式石室には明確な袖部は認められなかった。

埋葬施設の石棺は2基である。1号棺は奥壁側に、2号棺はその手前の左側壁沿いにそれぞれ設置されている。石室の内法の長さは、1号棺が1ｍ、2号棺が60㎝を測る。いずれの棺も成人を伸展して葬るには不十分な長さであり、1号棺内に炭混じりの土が充満していたことは示唆的である。

6号墳の埋葬時期は出土土器より、7世紀第4四半期と推定される。

第6節　7号墳の調査

1．立地・検出状況

5～10号墳が存在する支群のうちのほぼ中央に位置し、南東方向に下る緩やかな斜面に立地する。標高は83.5ｍ前後を測り、本支群の中では最も良好な位置を占めているようである。南東方向に開口する石室の規模も本支群中2番目の長さを有する。

本墳も調査前に判明していた3墳のひとつであるが、低墳丘であったことと調査前に板石の一部が露出していたことから、箱式石棺を内部主体とする古墳であろうとの判断であった。調査の結果、板石は予想通り石棺であったが、横穴式石室に内蔵されたものであることが判明した。

土層観察用畔は、7号墳の中心と5号墳の中心を通るラインおよびそれと直交する方向で調査前に設定した。横穴式石室検出後、石室の主軸方向が当初のラインとほぼ合致したため、ラインの変更は行わなかった。ただし、石室長軸方向では石室の中心から少しずれていたため、墳丘残存面以下の土層観察用畔については、石室中心にあたるラインまで平行移動して設定した。

また、明らかに5号墳の周溝を切っていることから、5号墳よりも本墳の方が新しく築造されたことが判明しているが、6号墳との関係は確実に判断できる資料に恵まれないため、前後関係は不明である。しかし、6号墳石室前庭部南端が7号墳を避けるかたちで東方向に曲がっていることから、6号墳が後出である可能性が指摘できる一方、6号墳追葬時の整形である可能性も考えられる。また、6号墳の石室開口方向は7号墳を意識したものではないように観察できることから、7号墳に先行することも考えられよう。

2．墳丘

調査前の墳丘外形は直径８ｍの円墳状を呈し、幅約1.5～２ｍの周溝が墳丘の４分の３程度巡っている状況が看取できた。調査前の墳丘は斜面下側からの高さ1.2ｍ、斜面上側からでは０ｍの高さを有する低墳丘で、墳丘最高所の標高は83.935ｍであった。この最高地点は石室奥壁の後ろ、周溝肩上端部分にあたる。なお、墳丘南東側の等高線がやや直線的であるのは土砂の流出によるものと考えられた。

調査の結果、横穴式石室を内部主体とする古墳であることが判明したが、石室奥壁の位置は古墳の中心部よりもかなり墳丘端に寄っていたため、新しい時期の古墳であることが判断できた。墳形は方墳と呼んでも差し支えないほど方形を意識していると考えられ、約７ｍ×約６ｍの規模を有している。調査前に土砂の流出によるものと考えていた墳丘東部の直線的な等高線は、墳丘構築時の地形をほぼ残していたものと判明した。残存墳丘の高さは斜面下側からでは1.3ｍ、斜面上側からでは約0.2ｍを測る。斜面上側の周溝は深さが約30㎝あり、斜面上側周溝底からの墳丘高は約0.5ｍとなる。

墳丘構築にあたっては、墳丘部分は当時の地表面を残したまま周溝部分のみを、墳丘が方墳になるように掘り下げており、周溝の外形線および盛土除去後の地形観察でも墳丘平面は隅丸方形を呈していた。石室を構築するための墓壙は当初の整形時点で掘削しており、墓壙掘削後はまず石室の基底石を置き、墓壙との隙間を土で埋めている。この作業は墓壙上面にあたる石室壁面第２段目もしくは第３段目の石積みまで行なっている。石組みと墓壙壁との隙間を埋める土は、ちょうど版築のように粘質土と砂質土を交互に埋め、裏込め土の強度を増すための技法が使われている。その後、盛土は石室の東西両側壁の石材を積みながら盛土を行なっているが、墳丘盛土は側壁外側を被う部分を先行する部分と、奥壁および西側側壁の外側のように墳丘側を先行させる部分の両者が認められる。また、墳丘盛土には周溝を掘削した際の土を使用することを基本としているようであり、使用された土は浅黄～明黄褐色系の細粒砂～極細粒砂で礫を含んでいる。なお、本墳においても葺石・列石等の外部施設は認められなかった。

周溝は墳丘斜面下側を除いた３辺に「コ」字形に掘削されている。周溝幅は1.5ｍから2.5ｍ程度で、南西側は８号墳の周溝と共有しているが、堆積土層観察の結果、８号墳に寄った位置で幅狭く浅い周溝があらためて掘削されていたことから、８号墳が後に築造されたものと判断できた。７号墳周溝の断面形は「U」字形で、検出面からの深さは30～40㎝程度であり、最深60㎝を測る部分もあるが、後世に水流によりえぐられた場所である。周溝の南東端は傾斜する地形であるため、自然消滅する形となっている。また、南西側周溝は自然流路になっていたことにより、水流により墳丘が50㎝程度削られているようである。なお、北東側周溝の一部が約２ｍ外側に張り出しているが、目的・機能等は不明である。自然によるものか、あるいは６号墳との関連でとらえるべきかもしれないが、明確な答えは用意できていない。いずれにしても、本墳の周溝は規模・深さともに本支群中最もしっかりしたものである。

南西側周溝埋土から須恵器破片が出土したが、５号墳前庭部出土土器と接合したため、流入であることが判明した。また、北側周溝内からも須恵器が出土したが、これらも６号墳の前庭部から流入してきた可能性が高い。

3．埋葬施設

（1）石室

内部主体である横穴式石室は、上部が既に破壊されており、壁面も２～３段程度と床面から50㎝しか残っていなかった。また、石室内最奥部には自然石による組合わせ式石棺が１基存在していたが、蓋石

はなく、手前側の短側石も倒れていた。石室内からは遺物は全く出土しなかった。

横穴式石室は無袖であり、袖石も認められない。また、現状の開口部が本来の石室端かどうかは判断を伴う。石室開口部であるための判断の条件を満たすもののひとつに開口部立石があるが、石室西側壁南端の石材は若干縦長方向に置いているようにも見える。一方、東側壁南端では石材を横積みにしており、立石とは呼べない。一方、現在の石室開口部端は東西両側壁が同じ位置で揃っている。もしも側壁石材が欠失しているのであれば、石室の両側壁端がこれほどうまく揃うとは考えにくい。これらのことから、現状の石室端は構築時のまま残っているものと積極的に判断しておきたい。なお、現状石室端を境に床面が大きく傾斜を変えていることも傍証としておく。これらをふまえた上での７号墳の石室内規模は全長3.35ｍとなる。床面での石室平面形は中央部が若干膨らむ形態で、開口部が最も狭くなっている。最も幅が広いのは奥壁から南1.5ｍの所で、幅1.0ｍを測り、開口部では幅0.82ｍとその差は18㎝となっている。また、奥壁での石室幅は0.88ｍである。なお、石室の開口方向はＳ62°Ｅである。

側壁に使用されているのは長さ22～56㎝、厚さ10～44㎝の角礫で、それらを基本的に横積みにしている。奥壁は下端のみ遺存し、東西２石で構成される。東側は縦43㎝、横40㎝、西側は縦40㎝、横48㎝とほぼ同大の角礫を使用している。奥壁上部の石材は失われている。壁体および後述の石棺に使用している石材は、いずれも付近一帯で産出する流紋岩質凝灰岩である。

石室床面は後世の撹乱を受けていないようであったが、敷石等の施設は全く認められず、遺物も出土しなかった。また、閉塞石も全く認められなかった。床面は墓壙底から最大20㎝程度の厚さで、粗粒砂～細礫を含んだ明黄褐色系の細粒砂～極細粒砂（図版29の55・56層）を敷き、上面を平坦にして床面としているが、奥壁から南にゆくにつれ徐々に低くなっている。石棺ぎわでの床面の標高は83.13ｍ、開口部では標高83.03ｍを測り、その差は10㎝となっている。

石室開口部の南側には、石室両側壁の外側ラインにほぼ合う形で、幅2.4ｍ、最大深25㎝で底がほぼ平坦な窪みが長さ2.1ｍにわたって南に続き、南端は傾斜のため自然消滅していた。墳丘盛土から切り込んでおり、底も盛土中で終わっていることと、石室床面の高さが窪み底と同じであることから、石室前庭部と考えられる。ここからも遺物は全く出土しなかった。

（２）石棺

７号墳の横穴式石室内には、細部加工を施さない板状石材を組み合わせた箱式石棺が据え付けられていた。

石棺は奥壁に接し、東西両側壁とは10～20㎝程度の間隙があるが角礫を詰めている。石棺南側の側石のみ開口部側に倒れた状態であったが、他の側石は正立状態で検出した。また、底石は存在していたものの、蓋石は認められなかった。棺内には土が充満していたが、石室内に埋まっていたものと同質であり、炭等は検出されなかった。石棺の内法は東西45～55㎝、南北は73㎝と推定され、南北方向が長くなっている。底石は45×60㎝、厚さ10㎝程度の板石を上面が水平になるように床面上に置き、側石との隙間を小礫で埋めている部分が認められる。南側短側石が底石ではなく短側石が倒れたものであると判断した理由は、隙間の小礫の存在と石材の使用方向によるものである。南側短側石は52×38㎝、厚さ10㎝、北側短側石は64×40㎝、厚さ７㎝程度の板石を使用し、西側長側石は67×23㎝、厚さ７㎝程度、東長側石は56×50㎝、厚さ13㎝の板石である。東側長側石のみ床面に坑を穿ち、15㎝程度埋め込んでいるが、他の側壁は10㎝以下しか埋まっていない。石棺内法の高さは北側短側石部分で最も高く29㎝を測る。

石棺の規模から、成人をそのまま埋葬するには不可能な大きさとなっており、人骨や副葬品等も遺存していなかった。

（3）墓壙

石室を構築するための墓壙は「コ」字形に掘削され、幅約1.8m、長さ約2.7m遺存していたが、石室側壁南部は墓壙外にも存在していた。墓壙底は平坦に近いが、南に若干傾斜しており、墓壙南端は奥壁部分と比べて15cm低くなっている。墓壙底には石室基底石を安定するためと考えられる底面の加工が数多く認められる。墓壙検出面から底までの深さは奥壁側の最深部で約30cmを測り、墓壙の深さは南方向の斜面下側に向かって徐々に浅くなり、自然消滅している。

なお、石棺の中央下面にあたる位置に東西方向の溝が穿たれているが、機能等は不明である。

4．出土遺物

図版43に図示した須恵器杯が周溝内埋土から出土しているが、その出土位置はどちらも北西部周溝であるため、6号墳の石室前庭部を原位置としていたものが7号墳の周溝まで流出した可能性が高いと判断している。ただし、6号墳の石室前庭部からは同一個体の破片が出土していないため、断定するにはいたらなかった。なお、7号墳の西側周溝からも須恵器・土師器が出土しており、それらのうち5号墳出土土器と接合できたものは5号墳の土器が流入したものと判断し、接合できなかったものについても5号墳に伴うものの可能性が高いと考えている。図示していないが、後者には須恵器甕片がある。

33は須恵器杯Aで、全体の3分の1程度が残存している。口径11.1cm、器高3.7cmを測り、底部外面はやや下方に出ており、回転ヘラキリ後の調整は施していない。口縁部は底部から内湾気味に外上方にのびた後少し外反させている。杯Gから杯Aへの過渡期の形態と思われ、径高指数が33であることから、飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の所産であろう。

34も須恵器杯Aで底部から体部の器壁厚はほぼ同じである。口縁部は端部に近づくにつれ厚みを減じている。口径12.0cm、器高3.6cm、底径8.2cmを測り、径高指数は30となっており、飛鳥Ⅳ期と考えられる。約2分の1の破片で、焼成はやや不良、7号墳周溝内埋土最下層から出土している。

5．小結

調査の結果、状覚山7号墳は本支群中ほぼ中央に位置し、2番目の石室規模をもつことが判明した。7号墳に伴うと判断できる土器が全く出土していないため、築造・埋葬時期をおさえる根拠に乏しいが、本墳の築造は5号墳より後出し、8号墳に先行することが周溝埋土の土層関係より明らかとなっている。つまり、5号墳が飛鳥Ⅲ～Ⅳ期、8号墳が飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に埋葬されたことが、それぞれに伴う土器により判断できることから、7号墳の築造・埋葬時期は飛鳥Ⅳ期を中心としてその前後と考えられるであろう。これは、6号墳が築造されたと考えられる時期に極めて近接していることから、6号墳と7号墳の前後関係を早急に決めることができない。5・6号墳の関係では北東方向に造墓を行なう一方、7・8号墳のように南西方向に新しく築造していくという2方向があることが判明した。仮に2基ずつのセットであると考えた場合、近接した位置にありながら造墓方向を違えていることは興味深い。

第7節　8号墳の調査

1．立地・検出状況

掘削前の地形測量の際に標高83.25mの等高線が微妙に張り出す若干の平坦部分があり、古墳の可能性

を考えて畔を設定して慎重に掘削した。その結果、無袖式と思われる横穴式石室が検出された。ただし、古墳南西側が深く掘り下げられてしまったため、墳丘の西側と南側の墳端が削られてしまい、墳端を明確にすることができなかった。横穴式石室は撹乱が著しく、東側の壁体がほとんど残っておらず、床面も荒らされているようであったが、石室端から南東にのびる排水溝が検出され、須恵器が出土した。東側周溝は7号墳の周溝の一部と重複しており、その後、自然流路にもなっていたようである。

8号墳が立地するのは、本支群中南西端に位置し、標高83m前後であり、本支群が立地する丘陵の尾根稜線に最も近い位置に築造されている。

掘削前に土層観察用畔を設定したラインは、7号墳の畔をそのまま延長した東西方向のみであった。そのラインは検出した石室の方向のみならず石室中心からかなりずれていたため、土層断面図については、表土から墳丘残存土までの土層図を回転・移動および長さや高さが合致するように改変して合成した。

2．墳丘

調査前は、墳丘はほとんど確認できず、わずかな平坦面が存在していたのみである。したがって、調査前における古墳の規模等の観察は行なうことができなかった。

調査後の墳丘では、直径5m程度の円形もしくは方形と考えられるが、遺存状況が悪いため、不明確な部分が多い。本支群中の他の古墳が方形あるいは方形を意識していると考えられるため、本墳も方墳と考えておく方がよいのかも知れない。墳丘残存高は、斜面下側からの計測では0.8m、斜面上側の周溝底からは0.13mを測る。墳丘構築にあたって、地山の平面的な整形はほとんど行なわず、周溝と墓壙の掘削の後石室構築と墳丘盛土を行なっている。盛土はほとんど残っていなかった。石室構築と盛土の前後関係では、石室基底石および第2段くらいまでは、7号墳のように、石室構築および壁体と墓壙との間の裏込めを行なう作業を先行しており、その後は墳丘盛土と石室壁構築を同時に行なっている可能性が高い。石室および盛土完了後の墳丘には、葺石・列石等の外部施設は施していない。

周溝は石室の南側を除き「C」字あるいは「コ」字形に巡っていたと想定されるが、確認できるのは斜面上側と東側に限られる。周溝の断面形態はゆるやかな「U」字形で、幅は0.8mから1.6m、深さは最も深い南東側周溝で20cmを測る。ただし、7号墳周溝と重複している部分では、7号墳周溝の底まで一気に掘削してしまったため、断面による観察に限られる。

3．埋葬施設

(1) 石室

8号墳の埋葬施設も南東方向に開口する横穴式石室で、開口方向はS34°Eである。前述のように石室壁体はかなり破壊されており、かろうじて西側壁2段分と奥壁1段が残っていた。石室開口部も築造時の石室端が残っていないと考えられる。なお、床面からの石室残存高は最大65cmを測る。

石室はその中心が墳丘のほぼ中央にあたり、石室奥壁は周溝中心から墳丘側に約2mの位置にあり、本支群中の他古墳の石室奥壁位置が、周溝の中心や墳裾から約2mの距離であるのと同様であり、横穴式石室の奥壁位置が墳丘端に寄ることから、新しい時期の古墳であることがわかる。なお、本支群では石室の中心が墳丘のほぼ中心と重なっている。

石室は西側壁で2段程度の石積みが残存しているが、東側壁ではほぼ皆無である。西側壁は角礫を主

として横積みにし、間隙には小角礫を詰めている。側壁使用石材は横30～60㎝、縦20～30㎝程度の大きさである。西側壁は全長2.1ｍを測るが、先述のように、開口部は破壊のため、石室構築時の開口部は遺存していないものと思われる。東側壁は２石が残存しているものと考えて、それらを残しながら調査を行なったが、奥壁近くのものは石の傾きや底のレベルから、原位置をまったく留めていないことが判明したため、調査の過程で除去した。南端の石についても疑問がないわけではないが、石底のレベルが石室床面よりも低いことにより、原位置を保っているとみられ、石の形状から基底石の一部と判断している。奥壁は75×50㎝の角礫を横長に使用し、床面から約40㎝の高さに揃うように据えていた。また、奥壁石の厚さは30㎝を測る。以上の所見から、床面での石室規模は長さ2.1ｍ以上、残存部南端の幅0.5ｍ、奥壁際では推定幅0.6ｍとなる。なお、石室床面の標高は82.65ｍを測る。

石室床面のうち、中央部と奥壁付近に角礫の集中がみられた。中央部のものは立った状態の板石の存在から箱式石棺の残骸の可能性、長さ30～40㎝の棒状の角礫が平行に存在したことや平らな面を上にした礫の存在から棺台の可能性を考えて調査を行なった。その結果、石棺として機能する板石は西側の１石しかなかったこと、棺台と考えるには礫があまりに散乱していることから、どちらかに決着することができなかったと同時に、どちらも可能性が極めて低く、壁体等に使用されていた石材が落ち込んだものであるとの判断に至った。一方、奥壁付近の礫は、奥壁から南に45㎝までの長さであったが、石室幅いっぱいに認められ、10㎝程度の角礫でその上面の高さがほぼ揃っていたことから、敷石もしくはその残存と判断することができた。ただし、礫の角が上を向いているものも多く認められた。なお、奥壁付近の床面がその他部分の床面よりも数センチ低くなっていることにより、撹乱を免れたと判断できそうである。遺物は、敷石の南東隅付近、敷石の下面に近いレベルで耳環が１点出土した。

石室の南側には前庭部と考えられる部分もあるが、規模が確定できない。幅は1.7ｍ程度と思われる。前庭部と考えられる位置からは須恵器杯Ａ・Ｂおよび須恵器杯Ｂ蓋が出土している。ちょうど前庭部の南端あたりから、南（南東）方向にのびる溝が検出された。溝は幅0.6～１ｍ、深さ５～12㎝で長さ3.5ｍにわたってほぼ直線的にのびており、溝南端は傾斜地のため自然消滅していた。溝の横断面は緩やかな傾斜をもつが、一段下がった深い部分が延長方向にのびている。この溝は排水溝と考えているが、10号墳の排水溝および石室の規模に較べて幅が広いのは、後世に自然流路として機能していたためとも考えられる。排水溝の埋土から須恵器杯Ａ・Ｂの破片が出土したが、前庭部出土土器と接合した。なお、須恵器短頸壺の破片も８号墳から出土したが、これは５号墳からの流入と判断した。

（２）墓壙

墓壙は幅約２ｍ、長さ3.7ｍの平面「コ」字形に掘り込まれ、深さは最も深い北端で60㎝を測る。墓壙底はほぼ水平で、地形に反して南側が若干高くなっている。基底石を据える部分のうち、石の形に合わせてさらに掘り込んでいる部分がある。墓壙の掘り込みは東側のみ急角度になっているが、西側は中央付近で傾斜角度が変わり、下半は東側とほぼ同じ急傾斜になっている。

４．出土遺物

８号墳からは須恵器のほか耳環が１点出土している（図版44）。

（１）土器

８号墳出土土器は石室前庭部および石室前庭部の排水溝から出土しているが、接合した破片が他の位置から出土しているものも８号墳出土土器に含めている。これは、原位置が石室前庭部と推定されるためである。

35および36は須恵器杯Ｂである。35は口縁の約３分の２を欠損するのみで、口径13.1㎝、器高3.7㎝、高台径8.2㎝を測る。高台は内側に寄った位置に貼り付けられ、外側に踏ん張っている。口縁部は、底部から屈曲して外上方に直線的にのびるが、屈曲部分に緩い稜線が認められる。径高指数は28であることから、飛鳥Ⅳ期の所産であろう。焼成は良好で、８号墳石室前庭部以外に７号墳の南部周溝内中央部から出土した破片も接合できた。

36は底部中央を欠失するが、約３分の１の破片である。口径は15.2㎝とやや大きく、器高4.0㎝、高台径10.5㎝を測る。口縁部は底部から屈曲して内湾気味に外上方にのびるが、屈曲部分の外面には稜をもつ。焼成は良好で、８号墳石室前庭部および前庭部の排水溝から出土した。径高指数は26で、飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の所産と考えられる。

37は須恵器杯Ａの破片で、底部は約２分の１残存しているが、口縁部は大半が欠損している。石室前庭部および石室前庭部排水溝からの出土である。焼成はやや不良で、内面の底部直上に２条のヘラミガキを施し、底部外面はヘラケズリで仕上げている。口径13.4㎝、器高2.9㎝、底径9.5㎝を測り、精緻な胎土を使用している。飛鳥Ⅳ期に位置付けられると思われる。

38は須恵器杯Ｂの蓋で、口縁端部は平らな天井部から下外方にのびた後肥厚して終わる。口径15.4㎝、器高1.9㎝を測り、天井部内面は仕上げナデを加えている。径2.8㎝と大きめのつまみは扁平である。８号墳前庭部から出土した、３分の１程度の破片である。扁平なつまみおよび口縁端部の特徴から、飛鳥Ⅴ期と考えられる。

（２）耳環

M46は石室内奥壁寄りの東部床面直下から出土した。長径18.6㎜、短径17㎜と小ぶりで、断面は長径６㎜、短径4.5㎜の楕円形を呈している。この耳環も５号墳出土耳環と同じように、内外部側面のみ金箔が残り、上下面は金箔が剥がれて錆びた銅芯が露出している。

５．小結

状覚山８号墳は掘削前の測量段階で、墳墓の可能性がある平坦部を認識し、掘削の結果横穴式石室を内部主体とする円墳または方墳であることが判明した。また、周溝埋土土層断面の観察によると７号墳よりも後に築造されたと判断できたが、前庭部出土土器から飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の土器が出土しており、７世紀第４四半世紀に埋葬された古墳であると考えられる。また、本墳では墳丘外にのびる排水溝を検出したが、本支群中唯一である。

石室の開口方向はＳ34°Ｅで、６号墳の石室開口方向に最も近く、次いで５号墳に近いが、周溝を共有する７号墳とは石室開口方向に最もずれがあり、その差は28°にも達する。隣り合い、周溝を共有することが、被葬者が近親者であることの理由になるのであれば、石室開口方向が同一方向であることとは無関係ということになるであろう。また、石室構築時期の同一性を示すと考えた場合、４°差の６号墳（飛鳥Ⅳ～Ⅴ期）とは時期的にもその可能性が大きいが、６号墳と４°差の10号墳（飛鳥Ⅲ～Ⅳ期）は６号墳と時期が異なっていると想定できることから、開口方向と築造時期の同一性は必ずしも合致しない。石室の開口方向を決定あるいは規制するのは、墓道の位置による可能性も考えられるが、本支群では６号墳のように石室前庭部端が曲がっていると判断できるものもあり、単に墓道の位置のみが開口方向決定の理由とは考えられないようである。

第８節　９号墳の調査

１．立地・検出状況

調査区北東壁に接するかたちで10号墳と周溝を接し、その北側に存在する。７号墳とは墳裾間で約７ｍの距離である。地形測量の際に若干の盛り上がりが認められたことにより古墳と推定したため、調査区を拡張し、10号墳とともに調査を行なった。

地形測量の際、調査区北東部の斜面のうち、標高81.00ｍ前後で東西約６ｍ、南北５ｍ、斜面下からの高さ1.2ｍの小規模な楕円形の高まりが認められた。また、高まりの南北裾には幅１ｍ強の周溝も認められたため、古墳であると判断し、調査区を拡張するとともに掘削を行なった。その結果、南東方向に開口する横穴式石室を内部主体とする古墳であることが判明した。

９号墳が立地する地形は、５～８号墳が立地する斜面よりも傾斜が急になりはじめ、９号墳の斜面下方はさらに急傾斜になり、北西に開く谷につながってゆく。

２．墳丘

残存墳丘は北西－南東軸および北東－南西軸ともに約４ｍの規模で、北西側が丸みを帯びているが、その他の部分は直線的であり、周溝外端のラインも方形にめぐっていることから、方墳と考えられる。なお、斜面下からの残存墳丘高は90㎝を測る。

土層観察用畔のラインは、掘削前の墳丘長軸方向が等高線と直交方向であったため、墳丘の長軸および短軸方向に設定し調査を行なった。石室検出後は石室主軸方向に合わせたかたちに振りなおし、当初の土層図については、石室主軸方向と平行および直交するラインに合うように変換していった。

周溝幅は１～２ｍで、本支群中の他古墳の周溝が斜面下側を欠くのと同様、９号墳でも「コ」字形にめぐっている。周溝横断面は緩やかな「Ｕ」字形で、深さは20㎝程度である。

なお、本墳でも葺石や列石等の外部施設は認められなかった。

３．埋葬施設

（１）石室

調査の結果、墳丘中央部で小石室が検出されたが、遺存状況は非常に悪く、奥壁と東側壁の一部および西側壁の１石がわずかに遺存していた。壁面の積石も２段までで、床面からの石室の高さは最大でも50㎝しか残っていなかった。なお、この小石室は、墓壙の南側短側辺が開くことから横穴式石室と判断している。

石室奥壁内面は北西側周溝中心端から約２ｍの位置になっており、本支群の共通事項である。石室は長さが不明であるため、石室の中心が墳丘中心の位置にあたるかどうかは不明であるが、石室横断方向では、石室中心と墳丘中心はほぼ合致する。

石室側壁の石材は角礫を縦や横に積んでいるが、基底石では縦置きが多く、２段目は横積みにしているようである。使用石材は15～35×30～45㎝の大きさで、隙間には小さな礫を詰める。奥壁は縦50×横55×厚さ25㎝程度の大きな角礫を置き、その上に15～20×20～30㎝の角礫を横積みにしている。奥壁付近での石室幅は0.5ｍ、東側壁は長さ1.05ｍにわたって遺存していたが、東側壁の延長方向に２石が遺存しており、壁面下端の基底石間に詰められた石の可能性が高いと思われ、敷石の拡がりも認められるこ

とから、石室がもう少し長かったことが首肯されよう。この位置まで石室があったと仮定すると、長さ1.6m程度となるが、石室開口部端かどうかは全く判断できない。

奥壁と側壁との接点の第2段目は隅を覆うように置かれており、東側が顕著に認められる。天井近くの石積みの様子に近いことから、本墳の石室高は低かった可能性が高い。強いて推定するならば、床面から70cm程度であった可能性がある。

石室床面には敷石が認められた。使用石材は2～10×3～15cmの角礫であるが、尖った部分を上面にしているものも多く認められる。敷石は長さ1.4mにわたって拡がっていた。敷石上面での石室床面の標高は80.75mを測り、南側に行くにつれ若干低くなっている。

石室内部からは遺物は全く出土しなかった。

（2）墓壙

墓壙の斜面下側は後世に少し削られているが、長さ2.2m、幅1.4mの規模で、平面「コ」字形に掘られている。最も残存状態の良い北西側で深さ約40cmを測る。墓壙底のうち、石室床面にあたる部分は平坦で水平となっている。石室基底石を置く部分については数cm掘り下げて基底石の安定を図っている。北・西・東側壁での墓壙の掘り込み角度に大きな差はない。ただし、墓壙の北西隅が若干外に拡がっている分、緩傾斜となっていることから、作業上の出入り等に使用された部分の可能性がある。なお、10号墳の場合は落差の大きい部分で2段に掘り込まれている箇所があり、同様の機能を果たしていた可能性が指摘できよう。

4．出土遺物

周溝内から須恵器杯A底部小破片、周溝部分の表土から須恵器甑や土師器甕の小片が出土したが、いずれも図示できるほどの大きさではなかった。これらのうち、須恵器甑片は6号墳出土の29と同一個体であり、他の破片についても、破片の大きさや出土位置から流入による可能性が高い。

5．小結

9号墳は調査の結果、小規模な横穴式石室を内部主体とする方墳であることが判明した。本墳は調査区東隅に近い、傾斜変換点のすぐ上に位置している。9号墳から下方は傾斜がかなり急になり、谷に入ってゆくと同時に、東側に存在する尾根により周囲を眺望できなくなる。本支群が立地する部分は、東側への眺望が開けた高さに限られているため、9・10号墳よりも標高の低い部分には本支群のような古墳は存在しないと判断される。

本墳からは時期を明確に示す遺物が検出されなかったため、築造時期の限定は難しい。ただし、10号墳に接しており、2基セットのようなあり方は7・8号墳にみられるように相前後した時期に築造されたものである可能性は高いと思われる。石室規模の対比においても、7・10号墳が本群中でも規模が大きいのに対し、8・9号墳が小規模であることも共通している。したがって、9号墳については、10号墳が築造されたと考えられる飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と同時もしくは相前後する時期の築造と考えることができよう。

また、7・8号墳との対比で見た9・10号墳の関係は、さらに細部においても共通事項が多い。すなわち、それぞれ群中の大きな石室墳と小規模石室とが接して存在し、2基セットであるかのような位置関係のみならず、大きな石室には石棺が造り付けられ、小石室には敷石が認められる一方、小石室には

石棺が存在しない。これらのことから、かつて指摘した（岸本2001）ように、小石棺は改葬のための施設であり、改葬前には石室内のスペースを利用して木棺を安置したほか、火葬にしたのち石棺に遺骨を入れたという考えと同時に、他の想像をたくましくすれば、８号墳や９号墳のような幅0.5～0.6ｍ、長さ1.6ｍ程度や2.1ｍの石室規模は人間の大きさや木棺の大きさに近いものであることから、小石室には遺体を直接あるいは木棺に入れて安置し、その後規模が大きい石室内の石棺に改葬したと考えることもできよう。石棺を造り付けた石室の残りのスペースにすでに木棺や遺体があり、余裕がない場合には特にこういった施設が必要なのであろう。また、７世紀後半といった改葬が定着してきた段階では、システマティックにこういった施設を設置することも考慮に入れておく必要があるように思われる。

第９節　10号墳の調査

１.立地・検出状況

10号墳は古墳群が広がる緩斜面の末端、標高80ｍ前後に位置し、傾斜変換点にまたがる形で立地している。本支群中最大規模を有する古墳であるが、墳丘の東半部は流出してその高さを減じ、かつ上からの流入土によって埋没していたため、調査前の段階では墳丘のたちあがりを観察することができず、その存在が確認されていなかった。調査を進めていくうち、古墳の存在が明らかとなり、検出したものの中でも最大規模であることが判明すると同時に、墳端が調査区外へ広がるため、拡張して全体を調査することとなった。天井石は石室内に落ち込んだ状態で１石のみ検出されたが、側壁についてはまずまずの遺存状況で３～５段が認められた。

２．墳丘

墳丘の上部はほとんどが流失しており、原形をあまりとどめていなかった。残存する最高所標高は80.5ｍで奥壁の北側で測ったものである。奥壁北側では周溝によって削りだす形で墳端が形成され、残存する盛土はわずかである。東西方向の谷側（東側）では比較的盛土が残っており、旧表土からの墳丘比高差は120㎝である。一方山側（西側）では30㎝を測る。墳端に貼石などは検出されず、立ち上がりも谷側（東・南）では明瞭だが、山側（北）では不明瞭であった。周溝の立ち上がりは、墳端西側で一部明瞭なところもあるが、全体に流失のため弱く、斜面山側では地形なりに徐々に掘削されている。周溝は墳丘の山側を半周するかたちで掘削されており、特に墳丘西側は幅４ｍと非常に広い幅を設けてある。これは、西側の墳端のラインが斜面と斜交しており浸食を受けやすいため、少しでも水を逃がす工夫をしているものと考えられる。墳丘平面形態は方形を意識したものでコーナー部分はやや丸みを帯びる。墳丘規模は、主軸方向で8.5ｍ、主軸横断方向で6.8ｍとなっており、主軸方向に長い長方形を呈する。

盛土は砂礫を含まない細砂～極細砂、砂礫を含む細砂の２系統に大別でき、これらの用土を交互に積み上げて構築している。積み上げは、石室構築のための足場として、平坦面を形成しつつ段階的に行なわれたと考えられる。大まかには基底石配置後、側壁構築後、天井石架設後の三段階が断面観察から推定される。また墳丘の積み上げに際しては、墳丘の外側から内側へと進められており、墳丘外縁に土手状の高まりを形成後、石室との間を埋め立てるといった工程が想定される。これは、特に谷側の墳丘で顕著にみられる傾向である。

3．埋葬施設

（1）石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS42°E、南東方向に開口する。石室は天井石がなく、最上段については失われた箇所もあると思われるが、概況としては全体に残りがよい。石室の高さは奥壁のところで127cmを測る。長さは5.25m、幅は奥壁のところで102cm、最大幅130cm、開口部で最小幅92cmを測る。明確な袖は構築されていないが、西側壁が開口部から奥壁までほぼ直線的に面をそろえているのに対し、東側壁は開口部から外側へ外湾しつつ奥壁へと収束する。また両側壁の開口部に向かい合うように配置された立石は、壁面のラインからやや内へ入って設置されており、石室内外を区画する。

石室に使われている石材は、いずれも割石を積み上げたもので、壁面を加工整形するような状況はまったく確認できない。左側壁には、基底石に高さ50～60cmほどの石を用いるが、2段目より上では小型の石材を用いている。一方、右側壁は高さ30～40cmの石材を平積みして3段目まで積み上げ、それより上は小型の石材を用いている。奥壁は平石2枚を基底部分に並べ、それより上は30cmほどの厚みをもつ石材を積み上げて構築している。開口部付近の東側壁際から須恵器の短頸壷が検出されている。また、石室床面には15～30cm大の割石が開口部から約2mのところから奥壁まで敷き詰められている。敷石を取り除くと、小石棺の開口部側小口より石室外まで延びる排水溝を検出した。排水溝はほぼ直線的に構築され、幅は25cm、深さはもっとも深いところでも6cmほどで、開口部側では徐々に浅くなり、前庭部の地表面とすりあって消失する。なお、開口部付近の床面を断ち割ったところ、須恵器杯が検出された。

（2）石棺

割石を利用した組み合わせ式石棺である。石室の最奥部に設置される。底石は3石で構成され、側石は全て底石の小口に取りつくかたちで設置されている。長側は東西ともに2石で構成され、奥壁及び開口部側は1石である。蓋石は2石で構成されていたと推測されるが、残存していたのは奥壁側の1石で割れた状態で検出された。石棺の組み合わせ方は雑な印象を受ける。2石で構成される側壁をみると西は接合部の隙間が開き、東では接合部で小口をあわせず南側の石が外へ飛び出すかたちで重ねている。南小口には摂理に沿って割れた均等な厚みの板石を用いているが、平面形は方形を成しておらず、正面から見ると上辺が大きく西へ傾く。北側に用いられているのは不整な板石で、側壁とのかみ合わせは悪い。ただ、石材はしっかりと据え付けられており、南側と東の側板は墓壙底面に埋め込まれ、他の部材についても周囲をつき固めて固定していた。石棺内の埋土は南側に堆積が偏っていたが、底部では炭の小片が少量混じっていた。石棺の内法は、長さ94cm、幅48cmを測る。深さは30～40cmである。なお石棺内からは耳環、刀子、管玉が出土している。耳環、刀子は石棺中央西側壁ぎわで検出した。刀子は底から若干浮いた状況で検出した。管玉は2点検出されており、1点は石棺のほぼ中央から、もう1点は石棺中央奥壁よりに位置していた。

（3）墓壙

西側壁側から奥壁にかけて2段に掘り込まれ、内側の掘形平面は「コ」字形を呈する。外側の掘形は奥壁側では奥壁の背後を桟橋状に残してそれぞれ側壁終端の延長上を階段状に掘り下げてある。桟橋状に掘り残した部分はやや西側壁の方へ寄っており、東側壁終端の背後には幅100×40cmほどのテラスが階段状に2段削り出されている。石室構築あるいは天井石架設などの作業の足場として利用されたものと思われる。西側壁の背後はやはり2段に掘り込まれており、さらに外側の掘り方は奥壁側と開口部側で段をなしている。奥壁側では緩やかなスロープが形成されるにとどまるが、開口部側にはやはり200×50cm

ほどのテラス面が形成されており、同様の作業足場であると考えられる。開口部側に設けられているのは、旧地表と石室上部との比高差が大きく、高所への積み上げのために安定した足場を確保する必要があったものと思われる。規模は検出面で最大幅4.6m、最大長6.2m、深さは1.1mである。内側の掘形は底部で、幅3.0m、長さ5.2mを測る。奥壁側は斜面をほぼ垂直に掘り込み、開口部まで水平に基底部を整形し斜面にすりあう。掘形基底部には基底石を据えるための掘り込みが認められた。

4．出土遺物

10号墳出土遺物には、図版44に示したように、須恵器・土師器のほか石棺内出土の耳環・刀子・管玉がある。

（1）土器

39は須恵器短頸壺としたが、口縁部が中央についた平瓶のような形であり、石室開口部付近東壁下に正立状態で検出したものである。口縁部は体部のほぼ中央部にあることから、平瓶に分類するには躊躇をおぼえる。平底から外上方に直線的にのびた後、稜をもって屈折して頸部にいたる体部を有し、口縁部はラッパ状に外反気味に開くが、口縁部の高さは5.5cmと短めである。口径12.8cm、器高20.3cm、胴部最大径22.4cm、底径11.8cmを測る。体部最大径がある屈折部のすぐ上には1条の沈線をめぐらせており、体部下端付近にも1条の沈線をめぐらせているように見える部分がある。焼成は良好・堅緻である。時期的には飛鳥Ⅳ期前後と想定している。

40は須恵器杯と思われる口縁部の破片で、口径18.8cm、残存高4.8cmを測る。石棺西から出土している。

41は須恵器杯Gで、口縁部の約3分の1を欠損する以外は完形である。石室床面断ち割りの際に、石室開口部近くの排水溝横から出土している。口径10.9cm、器高4.7cm、底径6.4cmを測り、底部外面には回転ヘラキリ痕が残る。底部から外上方に立ち上がったのち、曲折して上方に外反しながら短くのびる口縁部となっている。白沢2号窯跡出土土器に類似しており、時期的には飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。また、永井編年（永井1995）ではⅢ期1B小期と思われるが、1A小期に遡る可能性も残している。

42は墳丘北東裾付近の明黄褐色土から出土した須恵器杯Aの小破片で、口径12.2cm、器高2.9cmを測る。底部中央は欠損のため不明であるが、底部外面は回転ヘラキリのちナデを加えている。口縁部および器表には歪みや凹凸が多い。底部から口縁部への屈曲は緩やかである。

43も杯Aの破片である。屈曲部は鋭く、外面に稜をもち、底部外面にはナデの痕跡が残っている。口径15.6cm、器高3.5cm、底径12.1cmを測り、口縁端部は若干外反する。石室内埋土で、落ち込んだ天井石の下から出土している。

44は須恵器蓋の4分の1弱の破片で、焼成は良好、外面全体に自然釉を被っている。口径15.1cm、器高5.1cmとやや大型で、天井部外面にヘラ記号が認められる。天井部から屈曲して下外方にのびる口縁部で、端部のみ外反し、面をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリ調整である。墳丘断ち割りの際に、石室開口部付近の墳丘盛土から出土している。

45は石室開口部付近の墳丘盛土の黄褐色土から出土した、須恵器杯B蓋である。約2分の1の破片で、口径12.7cm、器高3.5cmで、つまみは幅広くやや低い。また、内面のかえりは断面三角形状に突出するだけで短い。天井部外面のつまみ貼り付け部分以外は、回転ヘラケズリのち調整を加えていない。時期的には飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。また、永井編年ではⅢ期1B小期に属すると思われる。

46は土師器甑の口縁部片である。口縁部は約8分の1残存している。口径23.6cm、残存高は8.1cmで、

石室開口部から出土している。

（２）金属器

M48の金環は長径28.9㎜、短径26.5㎜、断面も長径9.5㎜、短径6.5㎜の楕円形を呈しており、５・８・10号墳出土金環のうち最も大きい。表面の箔が剥がれて中実の銅芯が露出している部分が多い。石棺内底部中央西端寄りで出土している。

M45の鉄製刀子も金環に近い位置の石棺内底部中央西端寄り出土であるが、両端を欠損する。刃部と背部の両関で、茎部の表面には把と思われる木質が残存しており、関部も被われていたようである。刃部残存長47㎜、最大幅19.5㎜、背部の最大厚6.8㎜で、茎部残存長5.75㎝、残存全長10.6㎝を測る。

（３）管玉

濃緑色の碧玉製管玉が２点出土しており、J97は石棺底部中央北部、Ｊ98は石棺底部中央で検出した。J97は長径8.7㎜、短径8.3㎜、全長20.6㎜を測り、中央部が若干膨らんでいる。両端面の周囲は面取りを施している。孔は片側穿孔で、孔径は3.1㎜と1.5㎜である。J98は長径9.1㎜、短径8.9㎜、全長18.5㎜を測り、側面中央部が若干凹んでいる。片方の端面は平坦で、周囲の面取りを行なっている。もう一方の端面は割れた状態であるが、製作時の状態を残していると判断しており、稜線部分のみに研磨を加えている。孔は片側穿孔で、孔径は3.4㎜と1.0㎜を測る。

５．小結

10号墳は当支群中最大の規模を有し、S42°Eに開口する横穴式石室を主体とする方墳である。築造時期についても、出土した土器から飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられ、支群中で最も古い時期を示している。副葬品も須恵器のほか刀子や管玉があり、多様であることから、当支群において中核をなす古墳であると考えられる。石室は無袖式で、開口部に立石を配して内外の区画を示す構造をもつ。埋葬施設として石室最奥部中央に組合せ式の石棺が設置されている。石棺の側板材は墓壙に突き立てられていることからも石室構築当初から設置された、初葬の棺であると考えられる。墓壙掘削時には成人の伸展葬はまずもって不可能な規模であり、微量ではあるが石棺内から炭片が検出されたことも考慮に入れると、火葬骨の改葬などの葬法が採用されていた可能性にも注意を払っておきたい。当墳を利用した埋葬は、出土遺物の時期幅が飛鳥Ⅲ～Ⅳ期であることから、７世紀後半～８世紀初頭にかけておこなわれていたことが推察される。追葬の回数や方法などは明らかにできなかったが、石室最奥部に据え付けられた石棺より手前には敷石が検出されており、ここに石棺もしくは木棺などを納める形で追葬がおこなわれていたことは想定しておいてよいであろう。

５～９号墳に先行して構築される10号墳の被葬者は、この支群を形成する中心的な人物もしくはその家族の墓であったことが想起されるのである。

第10節　11～17号墳の概要

状覚山11～17号墳は平成７年度実施の５号墳～10号墳の東の丘陵南斜面に立地する。平成７年度の調査において、分布調査時に発見し得なかった低墳丘の古墳が発見されたために、従前の分布調査では存在しないとされていた当該斜面にも同様の低墳丘古墳が分布している可能性が指摘された。このために、雑木の伐採後の平成８年５月に当該斜面の分布調査を実施し、３地区合わせて13箇所の古墳状隆起を確

認した。周辺では造成工事が進行しており、緊急を要するため、石材の露出等で明らかに古墳と断定できる６箇所（６基）を除く７箇所を対象にした確認調査を同月末に実施した。この結果、１箇所が古墳であると確認され、合計７基の古墳が所在していることが判明した。この７基の古墳については、前年度の古墳番号の続きをとって11号墳～17号墳の番号名称を与えた。本発掘調査は同年７月に着手し、翌平成９年１月に完了した。

７基の古墳は11号墳・12号墳の西側地区と13号墳～17号墳の東側地区の２地区に分かれ、11号墳・12号墳の西側地区より調査を開始した。工事が差し迫っていたことから時間短縮のため、事前の地形測量および残存墳丘の地形測量を航空測量によって行った。全体図は１/100、特に古墳周辺の地形については１/20の精度で行った。それぞれの古墳ごとに石室の主軸方向および直交する方向に基準線を設定したのち、表土を取り除いたうえで周溝掘削と墳丘面の検出を行った。この後、石室内の流入土を取り除き、床面の検出を行った。出土遺物については、随時出土状況写真し、１/10縮尺の実測図を作成した。東西２地区のそれぞれの地区での古墳検出の完了を待って、地区ごとに航空写真ならびに航空測量を実施した。最後に墳丘構築状況を観察するため土層観察用畔を残しながら墳丘を除去し、1/10で断面図を作成した。石室については、平面図、側壁、奥壁の見通し図を1/10で実測した。石をすべて取り除いた後、墓壙の平面図を1/10で実測した。また、適宜写真撮影を行い記録につとめた。

なお、石室検出後の土層断面図とそれ以前の調査段階における表土・周溝埋土等の土層断面図は主軸の設定方向や位置が異っているために、石室検出後の土層断面図に合わせる形で表土・周溝埋土等の土層断面図を適宜縮小・引き延ばし等の変更を加えて合成した。また、各墳の石室の主軸方向は多少の異なりはあるが、便宜的に奥壁を北として記述している。

第11節　11号墳の調査

１．立地・検出状況

12号墳との２基からなる支群の西側、標高約72ｍ前後に位置する方墳である。横穴式石室を内部主体とするが、西（南西）側の石室壁は盗掘等により破壊されており、石室側壁は基底石のみが残存していた。前庭部からは須恵器や土師器の破片が多数出土した。周溝は墳丘の山側を巡って構築されている。墳丘は低墳丘でかつ流失のためにさらに低くなっており、調査前ではかろうじて古墳状隆起が認められる状況であった。

土層観察用畔は主体部の中心を通るラインおよびそれと直交する方向で調査前に設定した。横穴式石室検出後、石室の主軸方向が当初のラインとほぼ合致したため、新たなラインは設定しなかった。ただし、石室主軸方向では石室の中心から少しずれていたため、墳丘残存面以下の土層観察用畔については、石室中心にあたるラインまで平行移動して設定した。

２．墳丘

調査前の墳丘はかろうじて隆起を確認することができる程度のものであった。表土を取り除くと、墳丘山側を４分の３ほど巡るかたちで周溝が検出された。検出面からの深さは最大で約35㎝であった。周溝山側の立ち上がりは弱く、地表にすりあうような状況であった。古墳の構築は、周溝の上端から斜面を緩やかに抉り取りながら平坦面を形成する意図が看取されるが、こうした状況から、周溝は排水の目

的もあろうが、むしろ、古墳構築の基礎工事の一過程として形成された面を強調したい。規模は１辺約3.2ｍの方墳であるが、やや歪みがある。また墓壙および主体部は墳丘の中心からやや東へずれている。

墳丘は山側では、明黄褐色～褐色の砂礫を含む細砂～極細砂を交互に重ね、緻密に積んでいるのに対し、谷側では砂礫が多く混じる細砂を比較的大きな単位で土入れしているようである。山側の墳丘で周溝底から残存する墳丘頂部との比高差は約20cmである。墳丘上半部のほとんどは流失しているものと思われる。

３．埋葬施設

（１）石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS42°Eで、南東方向に開口する。石室は南側が崩壊のために欠失しており、石室の右側壁は奥壁に取り付く１石を除いて失われている。左側壁についても残存しているのは主に基底石で、開口部側から２石目で２段目が残存している。天井石はまったく残っていなかった。検出時は石室を構成している石材の上端がのぞいていた。石室内部の埋土を慎重に掘り下げていったところ、よく締まった面が検出されたため、貼床の可能性を考慮に入れて、いったん清掃・写真撮影を行った。その後、掘り下げていくと、前庭部から須恵器と土師器、石室内からは奥壁のところで崩落した石材と須恵器の長頸壺、左側壁際から鉄釘、開口部付近から須恵器高杯などが検出されたため、この面を本来の床面と判断した。使用されている石材は地元の流紋岩質凝灰岩の割石で、基底部はすべて板石を立てて構築しており、水平方向で0.5～1.0ｍ、床面からの高さは35～72cmほどの規模である。このうち奥壁は幅90cm、高さ72cmである。唯一残っている２段目では同様のサイズの石を平積みしている。石室の規模は現存長で2.6ｍ、幅は奥壁のところで、90cm、最大で105cmである。石室本来の高さは基底部の規模をみるとそれほど高いとは思えない。あくまで推測であるが、天井石が遺存していた状覚山17号墳が石室の幅70cmに対して床面から天井までの高さが65cmであったことを参考にすれば、11号墳は１ｍほどであったか。奥壁のところには石材が検出された。一辺30～40cm大のものが４石と20～30cm大の小礫が混在していた。石棺材の可能性も考えたが、これらの部材を用いて石棺を復元することは難しく、崩落した側壁もしくは奥壁を構成していた石材でが崩落したものであると考えられる。基底石が板石を直立させる構造からみて、積み上げられていたのは最大でも４段までと思われる。左側壁をみるかぎり明確な袖は構築されていない。左側壁の最も開口部側の基底石の際には20×40cmほどの石が２個検出されているが、側壁を構成していたものであろうか。この立石は小型であり、17号墳のように複数の立石を組み合わせて内外の区画を行っていたことは想定しうる。また状覚山17号墳では約20～25cm大の礫を積み上げて閉塞する状況が確認されており、閉塞石の一部である可能性も捨てきれない。ただ左側壁がさらに南側へ延びる可能性は低いと考える。すなわち、墓壙に痕跡がないこと、現存する末端の部材が立石であることの２点が論拠である。

（２）墓壙

整形した地山をコ字形に掘り下げている。墓壙壁は直立せず、およそ45～60度ほどの角度で立ち上がる。幅は最大で2.6ｍ、長さ4.4ｍを測る。深さは最大で55cmで、開口部に向かって徐々に深さを減じ、ベース面にすりあう。

４．出土遺物

（１）土器

石室内出土遺物

47は石室奥部の崩落石材と西側壁にはさまれた空間の床面より出土した。長頸壺で、完形品である。口径10.8㎝、器高30.0㎝を測る。頸部中央よりやや下がった位置に１条の沈線を施す。体部は算盤形で、肩の稜線の前後にそれぞれ１条の沈線を施す。体部の器面全体はヘラ削りによって整形しているが、中央付近に叩きの痕が認められる。底部の高台は外側に強く踏ん張る。口縁部から体部上半にかけて、外面全体に緑色に発色した自然釉がかかり、きわめて高い温度で焼成されている。体部内面は完存品のため観察不能である。

48は石室の入口に近い東側壁から出土した。壁に立てかけられ、床面からやや浮いた状態で出土した。器種は鉢で、口径28.9㎝、器高12.7㎝を測る。口縁部から底部まで残存するが、全体としては1／4程度の残り具合である。焼成は甘く還元は器表面のみで、器壁内部は酸化状態で赤化し還元は及んでいない。口縁部は「く」の字状に屈曲している。

前庭部出土遺物

53は無蓋高杯の完形品である。石室入口の外側から出土した。口径9.3㎝、全高8.2㎝を測る。杯部は焼成中に生じた焼きひずみにより、片方に傾く。また、口縁部もひずみにより楕円形状に変形している。体部中央に稜をもち、体部と底部の境付近には２条の沈線が施されているが、線の幅は狭く、２条の沈線の間隔も狭まっている箇所と広がっている箇所がある。

49～51は高台を有する杯Ｂの身で、前庭部東付近からまとまって出土した。いずれも破片で、口縁部を欠く。高台径はそれぞれ11.2㎝、10.4㎝、7.7㎝である。

52は無台の杯身で、49～51と同じく前庭部東付近から出土した。口縁部は1／2程度失われている。口径11.5㎝、器高4.2㎝を測る。底部は丸く、ヘラ切りのままで調整を省略している。灰白色を呈する。

54と55はともに土師器甕で、前庭部の東側から出土した。55は口縁部の一部と底部の一部を欠く。口径11.7㎝、器高21.4㎝で、体部の最大径は下半部にあり、瓜形の形状を呈する。体部外面は成形時の凹凸が著しく、縦方向のハケ目調整によって凹凸を消している。内面は削りに近い調整を行っている。胎土は砂粒を多く含む。54は口径16.0㎝、残存高13.8㎝で、底部を欠く。体部外面と口縁部内面にハケ調整を行い、内面は軽くナデ調整を行う。胎土は比較的砂粒が少なく、器壁も薄い。

（２）金属器

M49は、石室開口部の北側壁付近の床面より出土した。長頸系の鉄鏃である。頸部のみで、鏃身部が欠損しているため形態は不明である。頭部関部の形状は棘状篦被である。残存長は113㎜を測る。

M50は、石室床面より出土した。長頸系の鉄鏃である。鏃身部と茎部の先端を欠損しており、形態は不明である。頭部関部の形状は段が付いてなだらかに頸部へつながる。残存長は72㎜である。

M51は、石室床面より出土した。長頸柳葉式の鏃である。鏃身部と頸部の一部が残存していた。残存長は59㎜である。茎部には樹皮が巻き付けられている。

M52は北側壁の床面より出土した。鉄鏃の茎部である。M53と同一個体の可能性もあるが接点をもたないため、ここでは別個体として報告する。樹皮が巻き付けられている。残存長は14.5㎜を測る。

M53は北側壁の床面より出土した長頸系の鉄鏃である。頸部のみで、鏃身部が欠損しているため形態は不明である。関部の形状は棘篦被である。茎部には樹皮が巻いてある。残存長は49.5㎜を測る。

5．小結

11号墳はS42°Eに開口する、横穴式石室を主体部とする方墳である。大きく破壊されているため確証はないが、無袖式の石室で開口部に立石を配していた可能性が高いと思われる。また基底部を石を立てて構築している点は、古墳群中唯一の例であることを強調しておきたい。築造時期は石室内に副葬された須恵器などから飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の段階が当てられる。また前庭部からは8世紀に下る時期の須恵器が検出されており、追葬や祭祀がこの時期まで継続しておこなわれていたようである。隣接する12号墳と比べて石室内の遺物は豊富で特に4本の鉄鏃が副葬されていることは特筆に価する。11・12号墳は独立した支群にも見えるが、5～10号墳の支群が立地する緩斜面から東へ伸びる尾根の南斜面に位置しており、築造時期もともに飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の段階が想定される事ともあわせて、10号墳を中心とした造墓活動から派生した小支群と捉えておきたい。なかでも11号墳は、この小支群のなかで主格をなすものと位置づけられよう。

第12節　12号墳の調査

1．立地・検出状況

11号墳との2基からなる支群の東側、標高73m前後に位置する。横穴式石室を内部主体とする、低墳丘の方墳である。周溝は墳丘の山側を巡って構築されている。墳丘は低墳丘でかつ流失のためにさらに低くなっており、調査前ではかろうじて古墳状隆起が認められる状況であった。

土層観察用畔は主体部の軸方向を掘削前の段階では把握しがたかったので、斜面に対して直交する方向で設定していた。横穴式石室検出後、石室の主軸方向が当初のラインと約45度で交差したため、主体部および墳丘の調査時は改めて土葬観察用畔を設定した。したがって、墳丘土層断面図のうち、表土および周溝埋土などの上層は石室主軸に合わせた近接ラインに時計回りに回転させ、縮小・引き延ばし等の加工を行ない、合成するかたちで作成した。

2．墳丘

調査前の墳丘はかろうじて隆起を確認することができる程度のものであった。非常に浅い周溝が墳丘山側を4分の3ほど巡っている。検出面からの深さは最大で約15cmであった。11号墳と同様古墳の構築は、周溝の上端から斜面を緩やかに抉り取りながら形成した平坦面に墓壙を掘り、盛土をして墳丘を築いて行われている。

12号墳の墳丘盛土は、砂礫の混じる黄褐色ないしは明黄褐色の細粒砂～極細粒砂が用土として用いられているが、残存する墳丘では土質の違うものを細かく積み替えるような状況は認められない。石室横断方向での周溝底部からの高さは現存値で約35cmを測るが、墳丘の周囲との比高差は一様でなく、山側ではわずかに15cm、一方谷側では約90cmある。雨水による流失の影響もあるが、下からの視線を意識していることが示唆される。墳形は西（南西）側でやや強く円弧を描くが、全体としては方形を意識しているものと思われる。規模は約2.5m×3.0mで、主軸と直交する方向にやや張り出す形態を呈する。

3．埋葬施設

（1） 石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS30°E、南東方向に開口する。天井石は残存せず、左右の側壁と閉塞石が検出された。側壁は現状で最大２段が確認できた。側壁に用いられている石材は一辺30～50cmほどの大きさのものを用いており、やや小振りながら整った壁面を構築している。右側壁開口部から２石目の際より須恵器杯が１点出土している。床面からの高さは現存値では最大でも50cmほどで、奥壁のそれを超えない。奥壁には高さ62cm、幅90cm、厚さ40cmの石材が１石遺存している。これは墓壙の深さとほぼ同じである。側壁は左右ともに４石が配置されその長さは左側壁で1.8m、右側壁で1.7mを測る。開口部には高さ40cm、幅90cm、厚さ40cmの石材が配置され、石室は閉塞されている。閉塞石について強調しておきたいのは、用いられている石材が他のものと異なり、石材中に非常に多くの亜角礫を含む流紋岩質凝灰岩を用いていることである。付近で採取は可能な石材なのだが、あえて閉塞石に採用し視覚的な効果をもたらしているところに、何らかの意図を感ぜずにはいられない。閉塞石までの石室の内法は、長さ1.5m、幅は1.1mを測る。右側壁開口部の延長上には、さらに１石が検出された。

閉塞石の外側は、まだ左右に墳丘をともなう墓壙内であるが、この部分の埋土は非常に締まりが悪く、本来の床面は流失し、山側からの流土が埋没しているものと判断した。したがって、右側壁があたかも閉塞石を越えて南へ延びているかのように錯覚させる石は、石室の基底部ではなく、二次的なものと考えている。ただ、閉塞石から想定される墓壙の南辺までは約1.2mあり、両側壁がさらに２～３石ほどのびる余地は十分に残っている。この場合、検出された閉塞石は石室内を区画する役割を果たすことになる。

（2）石棺

割石を用いた組合式の石棺を１基検出した。石室内、右側壁と奥壁がなすコーナーに取り付く形で設置されている。石棺の左側壁は石室の壁面を利用しているが、奥壁は石室の壁面を利用せず、独自の石材を用意する。基本的な構造は厚さが10～15cm、一辺25～60cmほどの板石を底石のうえに奥壁と側壁を載せている。側壁材は底面が不整なため、外側から小さな根石を噛ませて直立させている。この側壁材は底石とほぼ同じ長さを有しているが、この側壁に継ぎ足して開口部側へもう１石並立させてある。この２石目の側壁材は、開口部側の短側板材を受ける形で床上に設置される。なお開口部側の短側板材は、底石と接する形で床に設置されている。この短側板にも外側には根石が据えられ、さらに上段に20×35cmほどの角礫を積み上げている。このように、開口部側短側板に小礫が折り重なるような状況が見られた。蓋石は検出されていないが、開口部側の短側板は立石の上に２段目を積み上げてレベルを揃えており、もともと蓋石が架設されていたことが推測される。なお石棺内から遺物は検出されなかった。

（3）墓壙

軟岩質の地山を掘り込んでおり、掘形上端での平面はコ字形であるが、墓壙の下端は∩形に近い。検出面での規模は幅2.5m、長さは４mである。墓壙壁は底部から20cmほどの高さまでは直立するが、そこから大きく外へ広がって立ち上がる。墓壙の深さは奥壁の背後で約65cmである。開口部へ近づくにつれて高さを減じ、ベース面にすりあう。

4．出土土器

56は無台の杯身である。石室西側壁際より出土した。口径10.5cm、器高3.2cmを測り、完形品である。口縁部は焼成時の焼けひずみによりゆがんでいる。底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を施す。白い砂粒

を多く含み、5㎜～10㎜強の大きな石も含む。形態から7世紀後半から8世紀初めのものと推定されるが、12号墳からはこれ以外の遺物の出土はなく、これ以上の年代の限定は難しい。

4．小結

12号墳はS30°Eに開口する、横穴式石室を主体部とする方墳である。無袖式の石室で、開口部は一枚石で閉塞されている。石室内のスペースは狭く、石室の短軸と長軸の距離差は古墳群中最も小さい。石室内には組合せ式の石棺が1基据え付けられてあったが、さらに同様の規模を有する棺を納めることは難しい状況であった。追葬を確認できる状況はみられなかったが、近隣の奥新田2号墳では石室側壁や他の石棺壁を共用する単独では棺として成立しない埋葬の事例が確認されており、まったく追葬の用意がなかったと断定することには慎重でありたい。また、石棺の側板は墓壙には突き立てられておらず支石を用いて立たせてある。築造時期は石室内に副葬された須恵器から11号墳と同じく飛鳥Ⅳ～Ⅴ期が当てられる。

第13節　13号墳の調査

1．立地・検出状況

13～17号墳は古墳群が展開する山塊のもっとも東のピークが形成する南斜面に位置する。13号墳は14号墳の西に隣接し、墳丘最高所の標高は58.7ｍである。横穴式石室を内部主体とする円墳であるが、墳丘山側の周溝部分には後世の炭土坑（SK01）が作られている。石室の遺存状況は悪く、天井石は残っておらず、側壁はよく残っている箇所でも2段程度であった。

2．墳丘

検出前の状況では、顕著な隆起を確認できたが、墳丘山側ではSK01構築によって一部削平されている。古墳の構築は、周溝をふくめて斜面をえぐるようにカットして作り出した面に墓壙を掘削しているのだが、古墳を構築した箇所は傾斜が強く、このため墓壙の底面は奥壁から開口部まで強い傾斜がついている。また、主軸に直交する方向でも、山側墳端から谷側墳端までの約6ｍの間でおよそ70㎝の比高差が見られる。

13号墳の墳丘盛土は、砂礫の混じる黄褐色ないしは明黄褐色のシルト混じり細粒砂～極細粒砂と褐色の細粒砂を交互に積み、版築のように積み上げる様子が認められる。急斜面上に立地し、かつ主軸が斜面に斜交しているため、谷側では十分なレベルが確保されず、墓壙壁の立ち上がりはほとんど見られない。このため、右側壁の裏込めは、側壁を支えるために土を張り付けるように盛土し、段階的に側壁を構築後、外側へ墳丘を拡大している様子が観察される。また、墳丘断面を観察すると、山側と谷側では墳丘の構築方法に差が見られる。山側では墳端にまず土手状の高まりが形成され、その後側壁の裏込めを行っているが、谷側では、側壁を支えるように土が入れられ、側壁と同じ高さまで土を積んでから墳丘を外側へ拡大しているようである。敢えてモデルを提示すれば、山側では外から内へ、谷側では内から外へ墳丘を構築するのである。石室横断方向でのベース面からの高さは現存値で約30㎝を測る。墳丘の規模は主軸方向で6.8ｍ、主軸直交方向で5.8ｍのいびつな円形を呈する。なお、列石などの外部施設は検出されていない。

周溝の北東コーナー部分は直角に張り出しているが、これはSK01に伴う地形改変の可能性が高く、当初墳丘の山側を平面⌒字形にめぐっていたと考えられる。構築した場所の傾斜がきついので、墳丘の横では明確な溝は検出されていない。周溝の深さは最大で20cmほどである。周溝内からは須恵器の杯が1点出土している。

3．埋葬施設

（1）石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS46°E、南東方向に開口する。天井石は残存せず、側壁は現状で最大2段が確認できた。奥壁は2石で構成され、主壁面を構成するのは左側壁に取り付く幅50cm×高さ80cm×厚さ30cmの立石である。もう1石は高さ58cm、幅22cm、奥行き36cmの立石を組み合わせているが、壁面には幅の狭い面を採用しており、2枚の石は上から見るとL形を呈している。これは、石室構築を考える上で、石室の規模が入手可能な石材の大きさによって制限されるのではなく、設計された既定のサイズが厳密に守られていたことを示唆するとすれば興味深い。側壁に用いられている石材は20×30×15cmほどの大きさのものを用いており、基底石は基本的に横積みされていて安定感がある。墓壙底面が斜めになっているために、基底石も奥壁から開口部に向かって階段状に並んでいる。側壁の基底部は右側壁で5石、左側壁で6石を数える。左側壁の開口部へ向かう延長線上にはおよそ1石分のスペースを空けて7石目が検出されている。この7石目が基底石として原位置を保っているとすれば、石室の規模は幅72cm、長さは2.6mになる。石室床面は5～20cmの厚みで盛土をして平坦面を形成し、さらに5～10cm大のほどの割石を敷いている。床土は褐灰色～黄褐色の礫混じり細粒砂～極細粒砂を入れてあるが、基本的には単層である。敷石は奥壁から4石目まではほぼ隙間なく詰められており、さらに6石目付近までは散在する。床土が厚いため棺の沈み込みを防ぐ目的でおこなわれたものであろう。側壁は左右とも面をそろえて直線的に伸びており、明確な袖は認められない。ただ、右側壁の最も開口部側では掘形の中に3石を検出したが、いずれも一辺が10～25cm、厚みは5cmほどの小さな礫であることから、ほかの部分で使われているような石材を支える根石であると判断される。掘形は石室内側へ張り出していることから、ここに袖石がすえられていた可能性にも注意を払っておきたい。

（2）墓壙

先述したとおり、主体部は急斜面上に斜交するため、谷側では十分な深さが確保できていない。このため墓壙壁は谷側ではほとんど見られなかった。奥壁のところはやや弧を描くように掘削されており、平面形は∩形を呈する。墓壙の幅は検出面で幅2.3m、長さ3.6m、深さは最大約40cmである。墓壙壁はすり鉢状に緩やかに立ち上がっている。

4．出土土器

57は杯B身である。残存率の小片で、口縁部を欠く。北側周溝内のSK02から出土した。胎土は精良で、高台は底部の縁部に貼り付けられている。明らかに8世紀代のものであるが、口縁部が残存していないのでそれ以上の時期の限定が難しい。

5．小結

13号墳は横穴式石室を主体とする円墳である。無袖式の石室でS46°E方向に開口する。また石室規模は

0.7×2.6mと古墳群中でも小規模な部類に属している。石棺などは検出されなかったが、石室床面には一面に敷石があり棺床と考えられることから、なんらかの埋葬施設が納められていたことは間違いない。石室内では副葬品なども見られず、築造時期や追葬の状況を確認することはできなかった。周溝からは８世紀に下る時期の須恵器片が出土しており、この時期までは埋葬あるいは祭祀などが行われていたものと推測される。当支群の中心的な古墳で最初に築造されたと考えられる14号墳に近接しており、これに追随する形で当墳も早い段階で築造されたことを想定している。

６．その他の遺構

SK01　墳丘山側の周溝内より土坑を検出した。土坑は周溝によって作り出された平坦面を利用して掘削したのであろう。平面は長方形を呈し、西側の短辺には半円形の突出部が見られる。長さ4.5m、幅1.75m、深さは最大で35cmを測る。土坑は長軸をほぼ等高線に対して平行に設定して構築されている。土坑の底部はほぼ平坦に揃えてある。壁の立ち上がりは緩やかであるが、本来は直立に近かったと考えられ、北西隅の比較的残りがよいところで確認できる。埋土は焼土塊が混じり、炭や灰を多量に含んでいた。

第14節　14号墳の調査

１．立地・検出状況

14号墳は本支群中で最大の規模を有し、S48°E方向に開口する、横穴式石室を内部主体とする円墳である。立地場所は古墳群の中央で最も低所にあたる。13号墳と同様急斜面に構築されており墳丘の上半は、流水や盗掘等によって失われている。標高は58.5mである。天井石は残存しておらず、掘削前の段階で主体部に相当する部分が大きく落ち込んでいた。表土を取り除くと奥壁材が検出された。石室内部の埋土中には崩落した側壁材がいくつか落ち込んでいた。側壁は平均２段程度残存しているが、左側壁の一部は土圧を受けて内側へ歪曲し、このため基底石の一部は強くオーバーハングしていた。

土層観察用畦は、想定される主体部の中心を通るラインおよびそれと直交する方向で調査前に設定した。横穴式石室検出後、石室の主軸方向が当初のラインとほぼ合致したため、新たなラインは設定しなかった。

２．墳丘

掘削前から顕著な隆起を確認できた。周溝は墳丘山側を⌒状に巡っている。コーナー部分は張り出しており、120度ほどの角度をなしている。奥壁山側での周溝の深さは検出面から約20cm、幅は90～120cmほどである。墳丘は現状ではいびつな円形を呈しているようだが、西側及び北側の墳端は直線的であり、周溝の形状と合わせて考慮すれば、方形を意識していた可能性は残る。主軸は斜面に対して斜行しているが、山側墳端と谷側墳端の比高差はおよそ４mの間で約25cmと周溝からほぼ平坦な面を作り出しており、13号墳ほど谷側にむかう傾斜は強くない。主軸直交方向で墳丘断面を観察したところ、 砂礫の混じる黄褐色ないしは明黄褐色のシルト混じり細粒砂～極細粒砂と褐色の細粒砂を交互に積み、版築のように積み上げる様子が認められる。14号墳では山側、谷側ともに、墳端側に土手状の高まりを形成し、側壁の積み上げと併行して盛土を行ったものと思われる。なお、山側の墳丘では上層に化粧土のような堆積が認められた。現状での墳丘規模は南北8.4m、東西7.8mで、斜面下側からの高さは1.7m、斜面上側か

らは0.2m、斜面上側の周溝底からでは0.4mを測る。

3．埋葬施設

（1）石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS48°E、南東方向に開口する。天井石は残存せず、側壁は現状で最大3段が確認できた。奥壁には幅1m、高さ1.9mの一枚岩を用いている。地中に30cmほど差し込んで、しっかりと自立させてあった。床面での石室全長は最大で5.08m、幅は奥壁のところで95cm、最大で1.24mを測り、床面からの高さは最大1.1m遺存していた。使用石材は基底部など下段には一辺約40～70cmの大型の石材を用い、上段には一辺約30～40cmの角礫を横積みにし、隙間に小角礫を詰めている。側壁の基底部は左右ともに9石を数える。壁面の並びを見ると、右側壁は5石6石目の境をピークとして緩やかに外反する。8石目は内側へ突出するが、おそらく後世に土圧等の影響を受けて動いたものであると判断した。すなわち最も開口部側に当たる9石目は6、7石目の並びが生み出す延長上に位置しており、8石目の配置が不自然であると考えられるからである。一方左側壁についても、奥壁からの3石は内側にせり出しているが、土圧による2次的な変化であり構築された当時の姿ではない。土圧の影響を免れた箇所ではほぼ直線状に配置され、最も開口部側に位置する9石目だけが約25cm内側へずれて配置されているが、袖石というよりはここが玄門であることを示しているものと考えたい。それは両側壁ともに開口部に用いられる石材が、どちらも一辺50～60cmほどの他より一回り大きなものを用いていることからも明白である。ここからさらに羨道が延びる可能性については、それを示唆する状況は確認できなかったし、古墳の規模から鑑みてもきわめて低い。近隣の奥新田1号墳は、やはり奥壁に1枚石を用いる無袖の石室を有する古墳であるが、開口部には立石を配し石室内外を区画する特徴を持つ。状覚山10号墳も奥壁のつくりは異なるが、開口部に立石を配置する。これらの開口部立石は側壁面のラインより若干内側へ入り込んでおり、この14号墳の開口部も類似した構造をもつものと捉えられる。

石室内埋土の最下層は、締りのよい礫混じりの暗褐色～黄褐色の粗粒砂であった。敷き固めて平坦面を形成していたが、敷石はまったく確認できなかった。この層の上面では須恵器蓋(58)および高杯(60)を検出している。さらに写真撮影および実測後に断ち割ったところこの土層中から須恵器の杯身(59)が検出された。これらの遺物は、石室内埋土中から検出されたものや、墳丘および周溝などから検出されたものと比べて一段階古い様相を呈していることから、少なくとも築造時期の上限を探る資料として評価しておきたい。

（2）墓壙

墓壙は奥壁の所では1mほど垂直に掘削し、開口部に向かってほぼ水平に床面を形成するが、開口部から4石目あたりでもとの傾斜面にすりあい、そこから床面はナチュラルに下がっていく。このため墓壙壁も開口部側では立ち上がりが見られない。平面形はコ字形を呈するが、上述したような理由から石室を完全に包囲しているわけではない。墓壙の幅は検出面で幅3.6m、長さ4.4m、深さは最大約1.2mである。

4．出土土器

58は杯Bの蓋で石室中央の東側壁際より出土した。口径15.7cmで、完形品である。つまみは中央部が陥没したボタン状の形状を呈す。天井部はヘラ削りが施されているが、頂部には別器種が置かれて焼成さ

れた痕跡が残されている。天井部から口縁へはわずかに屈曲して続く。口縁端部はわずかに内側に折り曲げられている。天井部には自然釉がかかる。内面は灰色である。

59は杯Ｂの身で、石室中央の床面から出土した。口径16.7㎝、器高4.1㎝を測り、完形品である。底部外面はヘラ切り後、板状工具で調整を行う。高台周囲は爪形圧痕を残す。58とは離れた位置から出土しているが、両者の口径から判断してセットになる可能性が高い。

60は無蓋高杯で、西側壁際より出土した。完形である。杯部の口径10.2㎝、全高10.8㎝を測る。杯体部中央に１条の沈線を施す。胎土は粗く、白い砂粒を多く含む。

61は杯Ｂの身で石室内の埋土最上層から出土した。口径11.5㎝、器高4.2㎝の小型品で、ほぼ完形である。高台は底部の縁辺部に貼りつく。焼成は59とは異なり堅牢な焼き上がりである。

62と63は石材下の埋土層から出土した。62は杯Ｂの身で、口縁部を欠く。身体部は直線的に立ち上がる。63は無台の杯身である。口径11.2㎝、器高3.0㎝。体部と底部の境は明瞭で底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。底部外面に降灰がある。

64は墳丘南側表土層からの出土で、胎土も精良で器面の調整もていねいである。底部のみの小片で、体部はやや直線的に立ち上がるので器高の高い杯になると思われる。65は土師器甕の口縁部のみの破片で、全体の形状は不明であるが、長胴形の甕であろう。砂粒を多く含む。北東部の周溝内からの出土である。

５．小結

14号墳は当支群中最大の規模を有し、S48°Eに開口する横穴式石室を主体とする円墳である。石室は奥壁に一枚石を用い、開口部には大型の石材を配して内外を区画する構造をもつが、左側壁開口部の石材は側壁のラインよりも内側へ配置されていた可能性がある。石室内からは石棺などの埋葬施設はまったく検出されておらず、敷石も見られなかった。築造時期については、床面およびその埋土中から検出された土器の製作年代から飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられ、支群中で最も古い時期を示している。これらの遺物が原初の位置を保っている確証は得られていないが、右側壁際から出土した高杯は古い様相を示しており、築造の時期あるいは初期の葬送にかかわる可能性が高いものと判断した。石室の埋土中から検出された須恵器はいずれも製作年代が飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に下ることから、追葬および祭祀がこの段階まで継続されていたことがうかがわれる。しかしながら、その回数や方法については明らかにすることはできなかった。遺物は須恵器のほか土師器片が１点周溝内から検出されているが、鉄器や玉類は見られない。隣の支群の主格墳である10号墳と比べると副葬品についてはやや見劣りがするが、盗掘などによって失われている可能性も十分にあり、単純に比較はできないであろう。当支群中において最大最古の古墳であり造墓活動の中核をなすものと位置づけられる。

第15節　15号墳の調査

１．立地・検出状況

15号墳は13号墳の南東に近接する位置にあり墳丘最高所の標高は62.6ｍである。横穴式石室を内部主体とする。石室は二つの天井石が内部に落ち込んだ状況で検出された。右の側壁は開口部側半分が失われており、奥壁から３石が２段目まで遺存している。左の側壁は２～３段程度残存しており、開口部には

閉塞石も認められた。墳丘の立ち上がりは不明瞭ながら認められたが、事前に規模等を把握するにはいたらなかった。

土層観察用畔は主体部の軸方向を掘削前の段階では把握しがたかったので、斜面に対して直交する方向で設定していた。横穴式石室検出後、石室の主軸方向が当初のラインと大きくずれていたため、主体部および墳丘の調査時は改めて土層観察用畔を設定した。したがって、墳丘土層断面図のうち、表土および周溝埋土などの上層は回転、縮小・引き延ばし等の加工を行ない、合成するかたちで作成した。

2．墳丘

調査前の段階で観察しうる隆起は不明瞭であった。ほかの古墳と比べると墳丘が形成される範囲に比して墓壙の占める面積の割合が高く、低い上に痩せている印象を受ける。奥壁側はほぼ削り出しによるもので、盛土部分は墓壙の周辺から顕著に認められるようになる。墳形は釣鐘のような外形を呈しており、円形とも方形ともつかない不整な形態であるが、南東側のコーナー部分は強く張り出しており、当初は方形を意識していたことがうかがえる。墳丘山側は雨水によって流失したようで、盛土をした部分が侵食された結果、現状のような形態を呈していると思われる。周溝は墳丘山側を囲うように巡る。山側の掘形は斜面とすりあうようになっているため明確ではないが、コーナー部分は張り出しておよそ120度の角度をなしている。幅は60～80㎝、深さは最大で30㎝を測り、両側ともに断面形は開いた「V」字形に掘削されており、底部のピークが明瞭である。本来は周溝の底部付近を墳端として盛土が行われていたとすれば、山側墳丘はもう少し外側へ張り出すためより一層方形を呈することになることからも、本来は方墳であった可能性を強調しておきたい。南西部のコーナー部分から西側の墳裾にかけては墳端のラインが改変を受けており、右側壁と墓壙壁の損壊状況ともあわせて考えれば、盗掘や地形改変、石材の抜き取りなどが行われたものと推察される。

墳丘盛土は、砂礫の混じる黄褐色ないしは明黄褐色のシルト混じり細粒砂～極細粒砂と褐色の細粒砂を交互に積み、版築のように積み上げる様子が認められる。ただ、盛土の単位は粗く、このことも雨水の浸食に耐えられなかった一因と思われる。

3．埋葬施設

（1）石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS50°E、南東方向に開口する。天井石は2石が石室内に落ち込んだ状態で検出された。側壁は、右側壁は開口部側約半分を破壊されており残存状況は悪いが、左側壁の残存状況は良好で、ほぼ3段目までは遺存しており、部分的には4段目がみられた。側壁はほぼ直線的に構築されており、現状では袖石は確認されなかった。側壁に用いられる石材は、一辺30～50㎝の直方体に近い割石を横積みにし、床面からの高さは最大で90㎝を測る。奥壁は2石で構成されており、厚さ20㎝、幅40～60㎝、高さ70㎝ほどの板状の石材を併置して主壁面を構成する。奥壁は独立して構成されるのではなく、両側壁の3段目がこの2枚の板石の上に回り込むように積み上げられている。奥壁部分の床面からの高さは、最大で85㎝を測る。石室の規模は長さ2.7m、幅は床面で最大1.1m、残りのよい奥壁と取り付く部分で側壁最上段の石材の中心間距離を測るとおよそ1mであった。落ち込んでいた天井石は奥のものが一辺80㎝、開口部側のもので一辺75㎝であった。この天井石を架設するために、穹隆式の石室が築造されていた蓋然性が高い。

（2）石棺

割石を用いた組合式の石棺を2基検出した。以下、石室奥から順に1号棺、2号棺として詳述する。

1号棺　石室内最奥部に奥壁に取り付く形で据え付けられた石棺である。石室壁面との間は広くても10㎝ほどで、右側板は石室壁面にほぼ接する状態で立てられている。底石は5枚、一辺50㎝四方の板石を左側板と開口部側の側板に取り付けて設置し、右側板と石室奥壁との間を4枚の板石で埋めて構成している。側板石をみると右は約70×40×15㎝の1枚の板石を用いているが、左は50×60×8㎝の板石を奥壁に取り付け、開口部側の側板との間に30×15×10㎝ほどの石材を詰めて、壁面を構成している。開口部側の側板は、50×90×15㎝の底石と両側板石を受ける形で設置されている。石棺の内法は主軸方向で70㎝、主軸直交方向で70㎝、高さはおよそ30㎝である。石棺内には崩落時の流土がいくらか堆積していたが、炭などはまったく含まれていなかった。また、棺内から遺物も検出されていない。

2号棺　石室のほぼ中央に位置するが、側石はすべて倒れた状態であった。左側板は石室壁面を利用する。検出したうち確実に石棺石材と考えられるのは底石と開口部側の短側板、右長側板である。底石は幅60㎝、長さ80㎝、厚さ20㎝の大きさで石室左側壁面に接するようにして配置される。奥壁側の短側板は、復元に耐えうる石材は検出されなかったが、底石北側には根石と思われる、高さ25㎝、幅20㎝、長さ50㎝ほどの石材を据え付け、底石との間には、5～15㎝大の小礫を詰めた様子が観察された。右長側板と考えられる石材は長さ65㎝、幅30㎝、厚さ5㎝ほどの規模で、長辺を底石と並行する方向に接して倒れていた。底石との間には隙間を埋めるかたちで根石と思われる小礫が詰められている。開口部側の短側板は基本的に2枚で構成されていたようである。大きいほうの石材は、石室壁面側に用いられており、長さは底石に接する辺で50㎝、幅30㎝、厚さ8㎝を測り、底石の幅におよそ10㎝満たない。この空間を埋めるために、石室内側に接する形で長さ15㎝、幅20㎝ほどの板石を大きいほうの石材に接する形で組み合わせているようである。またこの短側板の縁辺が直線的であるのに対し、底石は屈曲しているため、両端に間隙が生じるが、その部分にも10×15㎝ほどの小ぶりな板石を埋め込んでいる。棺内および周辺からは遺物は検出されなかった。

（3）墓壙

石室を構築するための墓壙は、地山整形後に平面コ字形で、開口部側がやや開く。墓壙壁は奥壁裏でやや角度をもって立ち上がるが、側壁側の立ち上がりは緩やかである。先述のとおり右側壁の開口部側は削平をうけて消失している。左側壁と墓壙壁との間は約60㎝空いており、側壁構築のためのスペースを確保しているようである。また、奥壁側では2段掘りになっており、天井石架設のための足場などに利用したのかもしれない。墓壙の規模は長さ3.7ｍ、最大幅は約2.8ｍ、掘削面からの最大深は約90㎝である。なお、墓壙底左側壁の末端までは水平に近く、そこから緩やかに谷側へ傾斜していく。

4．小結

15号墳はS50°Eに開口する、横穴式石室を主体部とする方墳である。墳丘の形態についてはややいびつであるが、開口部側には角が作り出してあることから方墳を意識しているものと判断した。右側壁が大きく破壊されているため確証はないが、無袖式の石室であったと思われる。石室はやや小ぶりの石材を積んで持ち送っている状況が看取され、また石室に落ち込んだ天井石の規模と基底部の幅とを比較すると、穹隆式の石室が築造されていた蓋然性が高いと思われる。また石室内には組合わせの石棺が2基、石室最奥部と石室中央左側壁に取り付く形で据え付けてあった。開口部よりの石棺は倒壊して側板がす

べて床面に展開した状態であった。敷石は認められず、閉塞の状況についても確認できなかった。２棺ともに蓋石は検出されておらず、１号棺は天井石が直上に落ち込んだ状況で確認された。仮に独自の蓋石があったとすれば、盗掘などの際に抜き取られていたことになる。このように少なくとも１号棺の蓋は石以外の材質であった可能性も示唆される。築造時期および追葬の期間は出土遺物に乏しいため明らかにできなかったが、埋葬の順序は１号棺が初葬で２号棺が追葬と捉えるのが妥当と思われる。１号棺、２号棺ともに側板は墓壙に突き立てていないことは、10号墳の石棺とは墓壙掘削時の意識が異なることを示唆するものであろう。この点において、15号墳は石室築造と初葬である１号棺の設置が必ずしも一致しない可能性が考えられることには注意を払っておきたい。また10号墳と15号墳の石棺を組む方法の差異については、時期的な変遷の中で捉えられるかもしれない。これについては詳細に論証できる状況ではないが今後の資料の増加を待って解明すべき問題として提起しておきたい。

第16節　16号墳の調査

１．立地・検出状況

16号墳は支群中最も東に位置し、標高は62.0ｍである。S13°Eに開口する横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室の残存状況は比較的よく両側壁ともに３～４段目までが残っていた。ただ天井石は全く残っていなかった。墳丘は低墳丘ではあるが、掘削前からはっきりと認識することが可能であった。表土を剥いだ段階で、西側の墳裾に３石が並ぶことから列石と判断し、検出につとめつつ慎重に掘削をおこなったが他では認められなかった。やはり急斜面に立地するのだが、主体部の軸と斜面はほぼ一致している。

土層観察用畔は主体部の軸方向を推定したうえで調査前に設定した。横穴式石室検出後、石室の主軸方向が当初のラインとほぼ合致したため、新たなラインは設定しなかった。

２．墳丘

調査前の段階では、墳丘は十分認識することができたが、墳端は不明瞭であったため墳形や規模について確信を抱くには至らなかった。墳丘の規模は主軸方向で4.8ｍ、主軸直交方向で5.2ｍの円墳である。墳丘の周囲との比高差は一様でなく、山側では周溝底から20㎝、一方谷側では約130㎝ある。奥壁側はほぼ削り出しによるもので、盛土部分は墓壙の周辺から谷側半部で顕著に認められるようになる。

墳丘盛土は、砂礫の混じる黄褐色ないしは明黄褐色のシルト混じり細粒砂～極細粒砂と褐色の細粒砂を交互に積み、版築のように積み上げる様子が認められる。褐色系細粒砂はしまりの悪い部分もあるが、盛土の単位は細かく、丁寧に積み上げられている印象を受ける。地山成形は主軸直交方向でみれば、ほぼレベルをそろえて平坦面を形成している。石室はさらに墓壙を掘った中に構築されている。盛土は石室構築と併行しておこなわれたと考えられ、基底石の配置、側壁積み上げ、天井石架設の三段階が想定できる。

周溝は墳丘山側を半円状に巡っており、周溝山側の掘形はほぼ墳端と平行している。幅は1.1～1.9ｍ、深さは最大で40㎝を測る。墳丘南西の墳端で列石とおぼしき１辺35㎝ほどの礫を３石検出した。ただし他では全く検出されていない。

３．埋葬施設

（１）石室

横穴式石室を埋葬主体としており、主軸はS13°E、南東方向に開口する。天井石はすべて失われていたが、側壁は両側ともにほぼ３段目までは残存している。石材は、一辺30～50cmほどの大型のものと、一辺10～20cmほどの小礫を組み合わせて用いている。特に右側壁の奥壁側半分、基底石の上段は小礫の使用が目立つ。大型の石材は基本的に横積みされているが、奥壁も含めて、間隙が目立つ。壁体を構築する場合、一般的な通念としては、外形がなるべくかみあうように隣接する石材の組合わせを選択し、あるいは加工するのが良策と思われるが、16号墳の石室では、特に大型の石材の配置に、そういった意思が感じられず、ずさんな印象を受けてしまう。多少かみ合わなくとも、小礫を詰め込んで構築する方法が取られているようである。大型の石材の調達や加工の手間を省略していた可能性がある。また、特に奥壁と左側壁で顕著な傾向であるが、壁面はオーバーハングしており、穹隆式の石室を志向している可能性が考えられる。この場合、小型の石材で壁面を作り出すほうが容易であったのかもしれない。側壁は右側壁が１石分左側壁より長く、奥壁からは2.78ｍを測る。開口部の積み方をみると、ここが終端ではなく築造時はまだ南へ伸びていた蓋然性が高いと考えられるが、墳端にかなり近いことから、延びるとしても１石程度であろう。墓壙底には大型の立石を据えられるような掘形はみられなかった。石室の幅は奥壁部分で110cm、開口部側では現存値で90cmを測る。左側壁はほぼ直線的に配置されているが奥壁から数えて４石目と５石目は若干内部へ張り出しているが、積極的に袖石であるとは言いにくい。床面からの高さは最大で75cmを測る。右側壁については、壁体そのものは直線的に構築されているが、奥壁となす角度が直角ではなく、結果的に開口部に近づくほど対面との間隔を狭めている。奥壁は一辺が最大35cm程度の割り石を組み合わせて構成している。ただ石材同士の間隙は大きく水平方向で10cmほどの隙間もみられる。奥壁部分の床面からの高さは、最大で80cmを測る。

石室内からの出土遺物は左側壁の際より、杯蓋と壺の底部片が検出されている。

（２）石棺

割石を用いた組み合わせ式の石棺を１基検出した。石室内最奥部に奥壁に取り付く形で据え付けられた石棺である。やや左側壁に偏って据えられており、石室壁面との間は左側で10cm、右側で30cmほどの間隔がある。短側板と両長側板はともに一枚の板石で構成されており、いずれも石室床面にしっかりと埋め込まれて自立する。厚みは10～15cmほどあり、側板には他墳のものよりも厚手のものが用いられている。３枚の板石は相互に小口を受けることなく立てられており、このため角の部分はわずかな接点を有しつつも空く格好になっている。側板に比して、底石は貧相な印象で、４枚の板石を組み合わせて構成しており、さらに隙間に小礫を詰めて床面を形成する。石棺の内法は長さ72cm、幅41cm、高さは約30cmを測る。石棺内には崩落時の流土がいくらか堆積していたが、炭などは確認できなかった。また、棺内から遺物も検出されていない。

（３）墓壙

石室を構築するための墓壙は、地山整形後に平面コ字形で掘削されている。墓壙壁と石室壁体との間はやや広く、石室構築のための十分なスペースを確保している。墓壙壁は奥壁裏では約60度の角度をもって立ち上がり、全体的に直立した掘形であったと推定される。墓壙の規模は長さ3.4ｍ、最大幅は2.6ｍ、掘削面からの最大深は104cmである。なお、墓壙底は主軸方向、主軸直交方向ともにほぼ水平に掘られている。

4．出土土器

67は東側壁際の石棺前から出土した。小型の壺で、完形である。口径6.2㎝、器高4.4㎝を測る。口縁部周囲に降灰がなく、共蓋が置かれた痕跡を示す。この痕跡は壺蓋66の口径と一致している。釉調も66と一致しており、66がこの共蓋であることを示す。体部と底部との境付近から底部全面にヘラ削りを施す。灰白色を呈するが、肩部に緑色の自然釉の発色がある。白い石を多く含む。

66は石室の奥壁と西側壁のコーナー部より出土した。壺67と離れた位置から出土したが、上記の通り、口縁部の降灰の状況から壺67の共蓋と考えられる。径7.4㎝で、約1/2を欠く。扁平な笠形を呈し、口縁端部をわずかに内側に屈曲させる。頂部はヘラ削りを施している。頂部には宝珠つまみを有す。天井部の表面は自然釉がかかるが、焼成最終段階の炭素吸着により、部分的に融けてまだら状になっている。内面は灰白色を呈する。

69は口径10.0㎝、器高3.6㎝の無台の杯Aである。石室内床面より出土した。底部はヘラ切り後、軽くナデ調整を行う。体部中央付近からやや直上方向に立ち上げる。焼成は甘く、黄褐色を呈する。

68は周溝部から出土した蓋のつまみである。径が3.5㎝でやや大きいが、杯Bの蓋であろう。形は偏平な宝珠形で頂部をわずかに突出させる。

5．小結

16号墳はS13°Eに開口する、横穴式石室を主体部とする円墳である。墳丘の西裾では3石外護列石が検出されており、古墳群の中では唯一の事例となる。石室は無袖式で、天井部にかけて持ち送った積み方がなされている。開口部は失われているため石積みを確認できなかったが、少なくとも大型の立石を配していたのではなさそうである。石室内の埋葬施設は小石棺が1基最奥部に据え付けてあっただけで、その他の埋葬施設や敷石は検出されなかった。石室内からは須恵器の有蓋壷、杯などが出土しているが、いずれも小石棺の付近からであり、追葬時の副葬品である可能性は低い。出土遺物の年代から築造時期は飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の段階が当てられる。追葬についてはその回数や方法については明らかにできなかった。

第17節　17号墳の調査

1．立地・検出状況

本支群の最も西、標高約61.5m前後に位置する。墳丘は低く、調査前の状況では明確な隆起は観察できなかったので、あくまでも古墳の可能性を念頭に置きつつ掘削を開始した。慎重に調査を進めた結果、横穴式石室を検出した。石室の開口方向はS32°Eである。13号墳と同様墳丘山側の周溝内に後世の炭土坑（SK02）が構築され、墳丘及び周溝の一部が削平されている。横穴式石室を内部主体とし、奥壁にかかる天井石が残存していたが、他はすべて失われ、石室側壁も開口部側は2段程度しか残存していなかった。ただ、石室閉塞石と考えられる礫群が良好に遺存している。

土層観察用アゼは、掘削前に設定したものはずれていたため、改めて石室主軸に平行・直行に設定しなおした。土層断面図については、表土から墳丘残存土までの土層図を回転・移動および長さや高さが合致するように改変して合成した。

2．墳丘

調査前の現況測量時点では、明確な隆起は観察されなかったが、平坦面による傾斜の変換が見られることから、古墳の存在が想定された。掘削を進めると、横穴式石室が検出された。主軸は斜面方向と斜交して構築されている。表土直下で奥壁天井石を検出しており、墳丘盛土の大部分が流失していると考えられる。少なくとも主体部より山側の墳丘盛土はほとんど残存していなかった。墳丘の谷側では、側壁の裏込め部分で盛土が見られる。黄褐色系のシルト質細粒砂と褐色系の礫混じりの細粒砂を版築のように積み上げており、石室構築の工程と平行しておこなわれている。現状でもっとも残りのよいところで、約40㎝の高さである。明確な墳丘の範囲は把握しがたかったが、主軸方向で5.8ｍ、主軸直交方向で5.4ｍ程度の楕円形に近い円墳で、周溝は1～1.5ｍほどの幅で墳丘山側を半周足らず巡っている。先述のとおり、周溝と墳丘がなす鞍部にはSK02が構築されている。

3．埋葬施設

（1）石室

内部主体である横穴式石室は無袖式のもので、側壁は２段以上残存しており奥壁部分では天井石も含めて遺存していた。また、開口部では閉塞石と考えられる一辺10～30㎝大の割り石を用いた礫群が検出された。石室側壁は最大で一辺50㎝ほどの石材を横積みして構築している。明確な袖は見られないが、左側壁は中間部から開口部にかけて緩やかに弧を描きつつ狭まっている。開口部では立石を用いているが、17号墳では長辺が40～70㎝を有する不整な柱状の石材を組み合わせてあり、やや内傾して向かい合う。10号墳などのように大型の石材を単独で用いて区画するものと比べて、貧相な印象を受ける。もっとも明らかに側壁部分とは積み方が異なるので、石室の終端であることは明白である。使用石材は周辺で産出する流紋岩質凝灰岩である。床面での石室全長は最大値で2.8ｍ、幅は0.58～0.76ｍを測り、床面から天井石までの高さは65㎝であった。奥壁は３段で構成され、基底部には、幅45㎝、高さ50㎝ほどの板石２枚を並べ立て、20㎝ほどの厚さを有する角礫を横積みしている。

閉塞石は10×15㎝～20×30㎝大の角礫を10個ほど積み上げている状況が認められた。石室が破壊されているため、元位置を保っていない可能性もあるが、少なくとも閉塞の方法は認識できた。現状では床面と閉塞石の頂部の比高は28㎝であるが、本来は開口部立石の頂部にあたる60㎝ほどの高さまで積み上げられていたことが想定される。

石室開口部より南側は、側壁の外側のラインの延長上に幅1.0ｍ、最大深20㎝ほどの掘形が続き、前庭部を形成している。

（2）石棺

割石を用いた組合わせ式石棺を１基検出した。石棺は右側壁面に取り付く形で設置されており、石室開口部からおよそ60㎝のところから1.4ｍの地点にかけて位置する。石室中央よりやや開口後部側に寄る。側板材はすべて倒れた状態で検出された。用いられている石材は底石が幅44㎝、長さ54㎝、長側板は長さ55㎝、高さ20㎝、開口部側の短側板は幅35㎝、高さ20㎝、奥壁側短側板は複数の石材が組み合わされていたようであるが、そのうち主体をなしていたと思われる最大のものは30×24㎝ほどの板石である。厚さはいずれも10～13㎝ほどである。蓋石と類推できるものは検出できなかった。少なくとも、墓壙底部には側板を立てるための掘形などは検出されておらず、石材の検出状況から判断すると、いずれの側板も底石の上に設置する形で組み合わされていた蓋然性が高い。棺内から遺物や炭などは検出されなかった。

（3）墓壙

石室を構築するための墓壙は先述のように、地山整形後に∩形に掘削している。墓壙壁の立ち上がりは全体的に緩やかで、45度ほどの角度で立ち上がっている。墓壙の南北最大長は2.12ｍ、東西最大幅は約1.4ｍ、掘削面からの最大深は約50㎝である。

４．出土土器

71は石室表土層直下の埋土層から出土した。杯Ｂの蓋の口縁部小片である。外面に緑色に発色した釉と窯壁片が付着する。天井部は自然釉により整形の状況がよく観察できないが、砂粒の動きからヘラ削りを施していると思われる。口縁端部は丸く、天井部は平らである。

70と72は周溝から出土した。70は杯蓋である。口径9.5㎝で、一部をわずかに欠くが、ほぼ完形である。天井部はヘラ削りを施す。宝珠形の小さなつまみを載せる。口縁部内面にはかえりがつくが、高さは低い。胎土は白い７～８㎜の大きな石も含まれている。72は底部片のみであるが、体部内面はナデ調整、外面はヘラ削りを行う。胎土は精良であり、調整、形態、胎土等から志方窯跡群産の稜椀の可能性が高い。

74は石室表土層直下の埋土層から出土した底部片で、体部外面に火襷痕がある。体部と底部の境付近をヘラ削り調整するが、器種は不明である。底部内面をナデ調整しているので鉢の可能性もある。

73は口縁部のみの鉢小片で、前庭部より出土した。口縁内面に火襷痕を残す。灰白色を呈する。

５．小結

17号墳はS32°Eに開口する、横穴式石室を主体部とする円墳である。天井石が架設された状態で遺存しており、石室の高さは65㎝と小規模であった。石室は無袖式で開口部には小型の立石を組み合わせて内外を区画し、礫を積んで閉塞していた。石室中央よりやや開口部側に右側壁に取り付く形で小石棺が１基据え付けてあったが、石室最奥部には埋葬施設は遺存していなかった。ここで検出された石棺が初葬であるか否かが問題となるが、石棺の配置からは追葬棺であった可能性が強い。ただ、石室全体を通して敷石などの棺床材および石棺以外の埋葬施設に関係するような遺物は検出されていないことから、初葬であることを積極的に否定する材料にはほかには見当たらない。ただ、天井石が抜き取られ、石棺も倒壊している状況からみて、石室最奥部にあった棺が、後世に抜き取られたことを想定することは、それほど荒唐無稽な想像ではなかろう。

出土遺物を見てみよう。周溝から出土している杯蓋(70)、前庭部の盛土から出土している鉢(73)は、いずれも製作年代が飛鳥Ⅲ～Ⅳ期が当てられることから、築造年代の上限を示唆するものと考えられる。また石室埋土中から出土している須恵器の壺底部(74)、杯蓋(71)や、周溝から出土している稜椀の可能性のある底部破片(72)はいずれも製作年代が８世紀に下ることから、追葬期間の下限を示すものと判断した。このように17号墳は、14号墳とほぼ同時期に築造され、８世紀前葉までは追葬や祭祀がおこなわれていたものと思われる。また、確証はないが、検出された組合わせ式石棺とは別に石室最奥部に初葬棺が設置されていた可能性がある。

6．その他の遺構・遺物

（1）遺構

SK02　墳丘北東側の周溝内より土坑を検出した。周溝によって作り出された平坦面を利用し、長軸をほぼ等高線に対して平行に設定して構築されている。規模は長さ5.1m、幅2.8m、深さは最大で40cmを測る。土坑の底部はほぼ平坦に揃えてあり、壁はほぼ直立する。埋土は灰および炭が多量に含まれ焼土塊も混じる。底部や壁面は被熱のため赤化している箇所が認められた。

（2）遺物

75は無台の杯身で完形品である。13号墳～17号墳地区の斜面での表採品である。口径13.9cm、底径10.0cm、器高2.9cm。体部と底部の境は明瞭で、体部は斜めに大きく開く。体部外面に火襷痕を残す。形態から8世紀後半から9世紀初めの時期のものであり、古墳群形成以降の遺物である。

第18節　1～3号墳の調査

1～3号墳は新村川に面した東向きの緩斜面に位置し、北から3、1、2号墳の順に位置する。1・2号墳は県道側に開口し、約35mの距離をおいてほぼ並んでいる。3号墳は1号墳よりも約5m上方に位置する。1・2号墳は県道際に開口する古墳として古くより周知されていることから、当初より緑地帯として現状保存が決定していた。そこで1・2号墳の墳丘範囲確認と、古墳状隆起（後に3号墳と命名）が古墳であるか否かの判断を目的にトレンチによる調査を実施した。したがって各古墳の構造などは明らかにしえなかった。ここでは調査で得た知見を記述する。

1．1号墳

1号墳は県道西側の路肩に所在しているが、県道建設時に少なからず墳丘・石室が破壊されているものと見られ、辛うじて石室の一部が旧状とどめるのみで墳丘の盛土はほとんど残存しない。

調査は墳丘の範囲を確認するために想定される墳丘の北側に33T、西側に35Tを設定した。いずれのトレンチも大きく撹乱を受けていた。聞き取りによると1960年代頃に土取り業者によって墳丘を含めた周囲一帯が大きく撹乱を受けた模様で、その後県道の改良工事の際の廃棄物がそこに埋められて現在に至っているとのことである。現在の東向きの緩斜面を呈する地形は当初からの自然地形でなく、この際形成されたものとみられる。したがって石室の残存する部分を除いて墳丘あるいはその痕跡はほとんど現存しないものと考えられる。

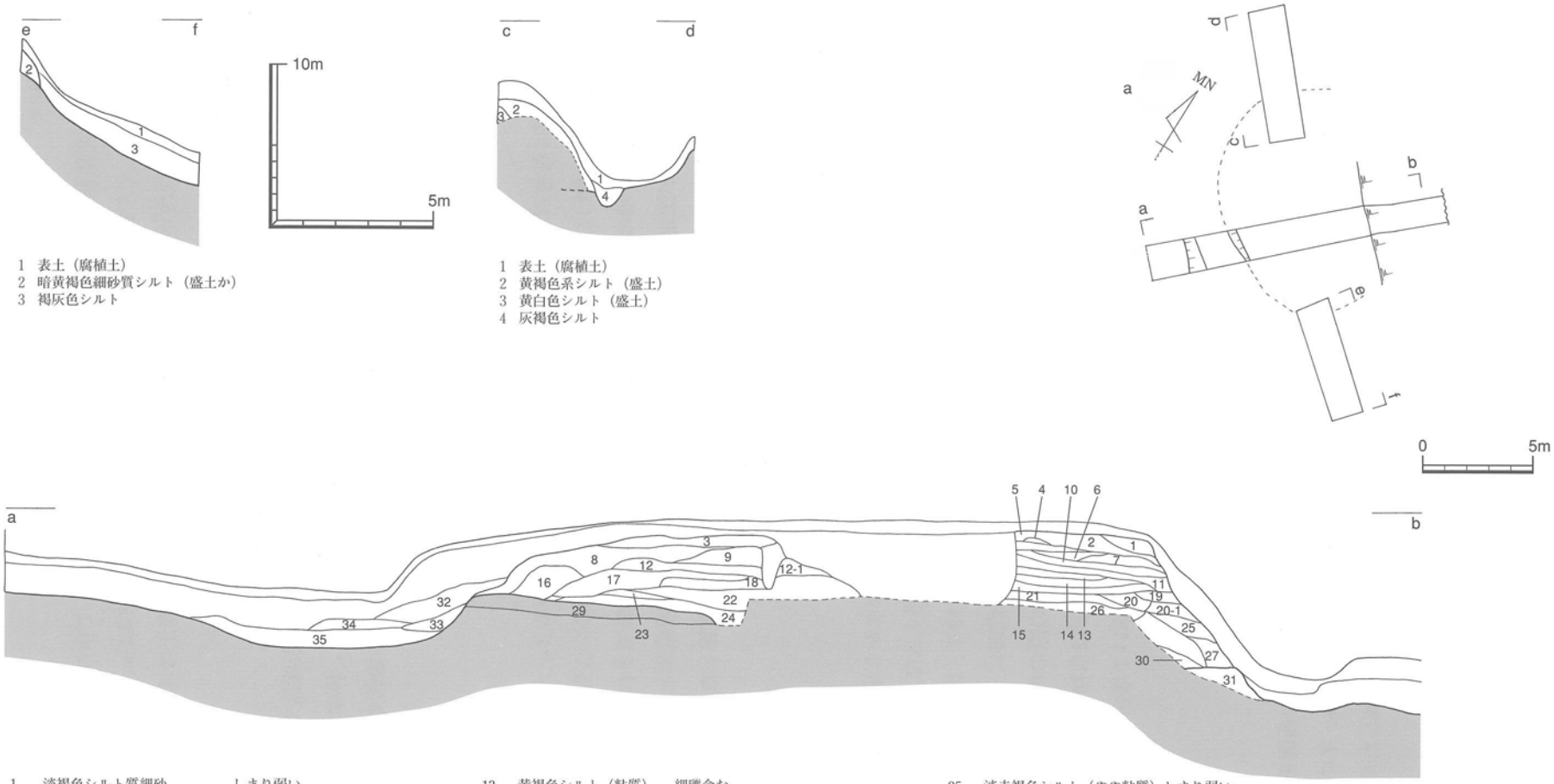
2．2号墳

1号墳の南側に位置し、現状は県道に面し石室が開口する。また墳丘の西側を里道が通過し、その路面には地山の岩盤が露出している。山側に周溝が巡る可能性があったため、その有無および範囲を確認するため、里道の西側に36Tを設定した。トレンチでは溝状の凹地を検出したが、近世以降の水路の痕跡である可能性もあり、明確に周溝と判断できる遺構は検出できなかった。

3．3号墳

（1）検出状況

1号墳の北側約30mに位置する。調査前は、周囲よりやや高まった地形が看取できたが、明瞭な墳丘



1 表土（腐植土）
2 暗黄褐色細砂質シルト（盛土か）
3 褐灰色シルト

1 表土（腐植土）
2 黄褐色系シルト（盛土）
3 黄白色シルト（盛土）
4 灰褐色シルト

1	淡褐色シルト質細砂	しまり弱い
2	明黄褐色シルト	細礫少量含む　よくしまる
3	明黄褐色シルト（粘質）	細礫多く含む　よくしまる
4	黄灰色シルト（粘質）	よくしまる
5	黄褐色シルト	細礫含む
6	黄灰色シルト（粘質）	細礫含む
7	淡褐色細砂質シルト（粘質）	マンガン沈着　しまり弱い
8	淡褐色シルト	黄色土混　細礫含む　しまり弱い
9	淡黄褐色細砂質シルト	細礫多く含む
10	明黄褐色シルト	よくしまる
11	淡い褐色シルト	細礫含む
12	黄褐色シルト	礫多く含む　しまり弱い
12-1	12と同（やや粘質）	礫含まない　しまり弱い
13	黄褐色シルト（粘質）	細礫含む
14	淡赤褐色シルト（粘質）	礫多く含む
15	黄褐色シルト	細礫含む
16	黄色シルト	細礫多く含む　よくしまる
17	淡褐色シルト	細礫含む　マンガン沈着　しまり弱い
18	淡灰色細砂質シルト	細礫多く含む　しまり弱い
19	淡褐色細砂質シルト	マンガン沈着　しまり弱い
20	茶褐色シルト	細礫含む
20-1	20と同	礫含まない
21	黄灰色シルト	細礫多く含む
22	黄灰色シルト	礫多く含む
23	淡褐色細砂質シルト	礫多く含む
24	にごった黄灰色シルト	礫多く含む　しまり弱い
25	淡赤褐色シルト（やや粘質）	しまり弱い
26	黄色シルト（やや粘質）	細礫多く含む
27	ややにごった黄褐色細砂質シルト（やや粘質）	
28	淡黄灰色シルト（やや粘質）	細礫含む
29	淡褐色シルト	細礫多く含む　マンガン沈着　よくしまる（旧表土？）
30	黄褐色シルト	細礫含む　よくしまる
31	明黄褐色シルト（やや粘質）	礫多く含む
32	にごった淡赤褐色シルト	細礫含む（やや粘質）（墳丘流出土？）
33	濁淡黄褐色細礫まじり細砂質シルト（やや粘質）（墳丘流出土？）	
34	濁淡黄褐色細礫まじり細砂質シルト　33より粒子やや粗い　やや粘質	
35	淡褐色シルト（粘質、細礫多くまじる）	

第５図　３号墳丘墳断面図

と認めるにいたらなかった。しかし開墾などにより一帯の地形が改変されていること、隣接して石棺底石を利用した石棺仏があり、「蝮蛇塚（ハメヅカ）」と呼称されていることなど古墳である可能性が高いため、古墳であるか否か、また古墳であればその範囲を確定するためにトレンチによる調査を実施した。墳丘と想定された箇所を南北に断ち割るように32Ｔを設定、さらに古墳であることが確定した後、東西に各１本トレンチを追加（ＢＴ、ＣＴ）し、その範囲の確定に努めた。

なお本古墳は協議の結果、現状保存されることになった。

（２）墳丘

32トレンチ　トレンチの断面観察によれば、墳丘は基本的に旧表土を掘り残し、その上に盛土を行っている。盛土は旧表土と思われる淡褐色系土と地山の黄褐色系土を厚さ５～15㎝程度で互層に盛っている。盛土のしまりは弱い。南側では緩い「Ｕ」字状を呈する周溝を検出したが、下方にあたるＢＴでは検出できなかったため、地形の傾斜に従い幅を減じ消滅するものとみられる。調査区の制約があるため周溝がどこまで延びるのか明らかにしえなかった。周溝底からの墳丘の現高は1.05ｍである。墳丘北側は水田化の際に削平を受け、墳丘裾部は確認できなかった。

ＢＴ　現況地形ではトレンチ西端から約１ｍの地点で傾斜が変換するが、断面観察では、0.5ｍの地点で墳丘盛土とみられる暗黄褐色土と地山の境界が確認できることから、この地点を墳丘裾と判断した。

ＣＴ　地形改変が行われているが、現況地形でもトレンチ東端から約３ｍの地点で傾斜が変換する。断面観察でもこの地点で墳丘盛土とみられる黄褐色土と地山の境界となるので、墳丘裾と判断した。なお本トレンチは32トレンチの上方になるが、周溝は検出されなかった。

（３）埋葬施設

トレンチにおいて一抱え大の石を３石検出した。埋葬施設は横穴式石室と思われるが、石材を検出した時点で掘削を止めたため、石室の平面形態などは明らかにしえない。検出した礫は東西方向に並ぶように見えるため、１・２号墳同様に東側に開口するものと推定する。

（４）小結

調査の結果、古墳状の隆起は横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが判明し、状覚山３号墳と命名した。墳丘や石室の残存状況は良好とはいえないが、現状保存が決定したため横穴式石室の構造や内部の状況までは今回明らかにしていない。また隣接して所在する石棺底石との関係も不明である。

なお地元で呼称される「蝮蛇塚」という名称については、調査時に地元住民から聞いた話では、60年ほど前（大正～昭和初期か）に蝮を一升瓶に入れ埋めたとのことである。蝮による害を防ぐまじないに関連するもので直接古墳に由来するものではないようである

参考文献

佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築にむけて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

永井信弘1995「播磨における古墳時代須恵器の変遷／まとめ」『小谷遺跡（第６次）－屋内ゲートボール場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』加西市教育委員会

西弘海1986「７世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』真陽社

岸本一宏2001「石室内に小型石棺を内蔵する古墳について」『奥新田東古墳群－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財報告xxxv－』兵庫県教育委員会

第４章　堀山古墳群の調査

第１節　堀山古墳群の概要

堀山古墳群は１～７号墳の７基の古墳から構成される。『加西郡誌』や栗山一夫氏の「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」においては堀山古墳群と思われる古墳の記載がなく、『祖先のあしあとⅣ』に「(新村群集墳) 第１群」および「さらに西方の山林中に、タテ穴式盛土古墳と思われるものの群集」と記されているのが本古墳群であると思われる。

堀山古墳群として周知されたのは『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表第１集』においてであり、この時点で１～４号墳までを周知、さらにその後に実施された加西市教育委員会の分布調査により５～７号墳が周知されている。一帯は各所で土取りや造成が行われているため、これら以外にも少なからず破壊された古墳があると思われ、本来存在した古墳の数はさらに多かったかもしれない。古墳は１箇所に群集する形態ではなく、万願寺川および新村川に沿った段丘上や丘陵上に点在し、分布状況はＬ字状を呈する。このうち河川を見下ろせる立地の古墳は３・４・７号墳のみで、他は川への眺望が困難な場所に位置する。

発掘調査は、本発掘調査は３・５・７号墳、範囲確認を目的とした確認調査は１・４・７号墳について行った。当初は周辺の古墳群同様に古墳時代後期の群集墳として認識されていたが、発掘調査によって築造時期に幅があり、ほぼ古墳時代全期を通じて築造されたと推定することができた。また埋葬施設の形態が多様であることが判明した。

古墳群は事業対象地縁辺に位置するため、１・２・４・７号墳は周辺緑地として現状保存されている。

第２節　３号墳の調査

１．立地・検出状況

３号墳は万願寺川に面した北向きに開口する谷の東側肩部、平坦な段丘頂部から斜面への傾斜変換点付近に位置する。付近には２号墳が南側約30ｍ、４号墳が東側100ｍに位置する。西側の丘陵には周遍寺山古墳群が、本墳に東接して堀山遺跡が所在し、３号墳は弥生時代末～古墳時代初頭の墳墓群にはさまれるように立地する。また弥生時代末の住居跡が検出された針田遺跡が万願寺川をはさんだ北側の段丘上に位置する。

古墳の立地する段丘頂部一帯は開墾による地形改変が行われているようである。３号墳自体は段丘頂部の端にあたるため影響は少ないが、それでも墳丘は、東側と南側の裾部が水路の掘削よって一部損なわれている。また当初墳丘西側にテラス状の平坦面がみられ、造り出しを持つ可能性が考えられたが、調査の結果、墳丘南側が後世に地形改変されたことによるものであることが判明した。調査区のうち斜面側にあたる西側および北側の地形は旧状を留めているものとみられる。

なお、本墳からは人骨が出土しているが、この人骨に関しては、本報告書のために藤澤珠織・片山一道両氏から玉稿を賜った（第８章「堀山３号墳出土人骨」)。出土人骨の詳細についてはこちらを参照されたい。

2．墳丘

墳丘はやや不整な方形を呈し、その規模は東西8.5m、南北7.5mを測る。西側墳裾からの高さは0.9mである。

前述したように墳丘の一部は後世に削平を受けているが、調査時においては周囲に周溝の痕跡は認められなかった。周溝は当初より巡らせなかったとも考えられるが、もし巡るとすれば墳丘東側と南側であり、この部分には後世の水路があるため、これにより破壊された可能性もある。

墳丘の築造は、まず地山を0.3～0.4m削り込み、その際発生した浅黄色土を旧地表面上に盛り上げて墳丘盛土としている。既に流出したことも考えられるが現存する盛土は墳頂部付近を中心に厚さ10～20cm程度しかない。周辺は旧地表面が路頭している。したがって明瞭な段差はないものの南北方向からは墳丘が2段のように見える。また墳丘北側法面の一部で貼石が認められたが、本来墳丘全体に貼られていたかは明らかではない。

3．埋葬施設

埋葬施設は墳頂部で2基検出した。いずれも箱式石棺である。2つの埋葬施設はほぼ平行し、重複はみられない。

（1）第1主体

墳頂部のほぼ中央に位置する。墳頂部のほぼ中央にあるためすでに盗掘を受け、棺中央の蓋石を亡失し、棺内には土砂が流入していた。墓壙は東西方向に主軸をもち、頭位方向はMN92°Eを示す。規模は長さ2.6m、幅1.3mの隅丸長方形を呈し、深さは0.5mである。

石棺は内法で長さ1.85m、幅は東小口側で40cm、西小口側で25cm、高さは20～30cmである。石棺は両小口に1石、側石は北側3石、南側4石で棺身を構成する。北側石の間には小型の石を置いて隙間を塞いでいる。南側側石は両小口石に挟み込まれているが、北側側石は逆になっている。使用している石は板状の自然石を加工せずに用いている。

蓋石は盗掘により東小口側1石、西小口側2石が残存するのみであったが、本来は5，6石で構成されていたとみられる。いずれも棺身と同様板状の自然石を用い、両側石を跨ぐ規模のものを並べている。特に頭位側には大型の石を用いている。2石が残存する西側の蓋石を見る限り、2石を密着させ、隙間を塞ぐ石は見られない。

棺の設置から埋設までの順であるが、棺身の裏側を灰白色粘土で裏込めを行い、墓壙を棺身の上部まで埋める。次に被覆粘土として蓋石と同じレベルまで灰白色粘土を敷き、さらに蓋石を覆うように墓壙内に淡黄色の粘土を敷く。なお、埋葬施設に用いられた灰白色粘土であるが、調査地西側山麓の工事現場で露頭しているのが確認できた。おそらく周辺の丘陵裾部などに露頭していたものを採集したのであろう。

棺内は棺底を灰白色シルトで敷きならし、東小口付近は灰白色粘土塊をやや高まるように置く。棺底の被葬位置にあたると思われる部分、長径1.4m、短径0.2mの範囲はわずかなくぼみになっている。また東小口石と北側石に赤色顔料が断片的に付着し、特に小口石には顕著に認められる。エネルギー分散型蛍光X線分析の結果、この顔料はベンガラの可能性が高いとのことである。棺内からは人骨片が出土したが、盗掘により散乱した状態であったため、本来の埋葬状態は明らかでない。鑑定の結果、残存する部位から人骨は2体であり、被葬者の1体は30歳前後の男性、もう1体は壮年の男性と推定される。

また頭位は石棺の構造から東側であったと考えられる。

棺内、墓壙内から遺物は全く出土していない。

（2）第2主体

第1主体の南側0.2mに位置する。墳丘の中心から外れるため盗掘の難は逃れたが、一部の蓋石が棺内に落下していた。墓壙は第1主体とほぼ平行する東西に主軸をもち、頭位方向はMN92°Eを示す。規模は長さ2.45m、幅1.1mの隅丸長方形を呈する。深さは0.35mである。

石棺は内法で長さ1.7m、幅は東小口側で37㎝、西小口側で34㎝、高さは25㎝である。石棺は両小口に1石、側石は両側とも4石で棺身を構成する。西側小口石は両側石に挟み込まれるが、東側小口の左側だけは逆になっている。側石は基本的に西側の石が外側になるように両端を重ねあわせているが、北側の中央のみ逆になっている。隙間を石で塞ぐことは行っていない。東小口石および側石には黒色を帯びた顔料がわずかに付着していたが、エネルギー分散型蛍光X線分析によるとこれもベンガラの可能性があるとのことである。

棺の設置から埋設までの順であるが、石棺設置後に黄色粘土が混じる浅黄色土を棺身の上部まで埋める。その上に被覆粘土として蓋石を覆う厚さで灰白色粘土を敷く。灰白色粘土は蓋石を覆うのに用いられただけで、総体的に第1主体と比較すると工程を簡略化したように看取できる。

蓋石は6石で構成される。幅50～60㎝の板石を用いるが頭から2列目は2石で構成され、うち南側が棺内に落ち込んでいた。蓋石は重複状況から東から西に並べ、その後小型の石2、3石を用いて隙間を塞いでいる。蓋に用いた石は棺身と同じものである。

棺内は棺底に粗砂・細礫を敷きならしている。頭位側に灰白色粘土を敷きその上に台形状の板石を用いた石枕が置かれている。棺内からは伸展した状態で人骨1体が出土した。頭骨の一部や末端の微細な骨は消失していたがほぼ全身が完存している。被葬者は鑑定によると20歳前後の男性と推定される。副葬品として棺内北東隅には鉄製刀子1点が切先を西に向け置かれていた。

4．出土遺物

埋葬施設、墳丘から土器は全く出土していない。周辺からは所属時期不明の土師器片が出土しているが、極少量である。確実に古墳に伴う遺物は鉄製刀子1点のみである。

M54は第2主体石棺の東小口北隅に置かれていた刀子である。完存し、全長9.5㎝を測る。刃身は反りがあり幅は1.7㎝ある。茎部は長さ1.9㎝であり、目釘孔が1つ認められる。茎尻は丸みをもつ。関の形状は差錆に覆われて明確でないが、片関になるようである。

5．小結

調査の結果、3号墳は一辺8m程度の方墳であることが明らかになった。埋葬施設は箱式石棺が2基あり、3体の埋葬が確認された。第1主体は2体が埋葬され、いずれの被葬者も男性、あるいは男性の可能性がある。撹乱のため人骨の重複など本来の埋葬状態が確認できず、埋葬の時間差、被葬者の関係などは明らかにしえない。第1主体と第2主体であるが、両者はわずかな間隔をもって並列し、重複がみられないことから、2つの棺の埋葬時期は同時またはわずかな時間差しかないものと考える。被葬者は20歳前後の男性であり、第1主体の初葬者とは親子、あるいは兄弟の関係にあるものと推定する。出土遺物はわずかに第2主体から刀子が1点出土したのみで、他に時期を示す遺物はない。そのため古墳

の築造時期は明らかにしえないが、石棺の主軸が東西方向にもつこと、石棺内での刀子の出土位置が周遍寺山１号墳における状況と共通する点が見られる。また加古川流域で類似する古墳にあたると、西脇市所在の経ヶ芝古墳がある。経ヶ芝古墳とは、墳丘の形状や構造、埋葬施設のほか、副葬品に乏しいことなど類似する点が多い。したがって本墳と経ヶ芝古墳とは築造時期も近接するものと考える。経ヶ芝古墳は古墳時代前期までさかのぼる可能性があり、本墳も同様に古墳時代前期までさかのぼると仮定した場合でも状況的に大きく矛盾が生じることはないと思われる。出土遺物の乏しさから積極的に断定し難いが、３号墳は周遍寺山古墳群や堀山遺跡検出の墳墓に続く古墳として位置づけることができよう。また前期古墳とすれば、加西市で初例となる。

また経ヶ芝古墳とは、加古川との合流点近くの支流を見下ろす場所に築造されている点でも共通しているおり、埋葬施設の配置や立地などの共通性から、被葬者は加古川中流域社会を構成する集団の一員とみることができるだろう。

参考文献

西脇市教育委員会「経ヶ芝古墳」『西脇市古墳調査集報』　2003年

６．その他の遺構・遺物

（１）遺構

３号墳墳丘から約４ｍ西側の緩斜面で備前焼壺（76）が表土直下で直立した状態で出土した。掘形などは確認できなかったが、付近で石造物の反花座片が出土していることから、壺は蔵骨器、石造物片が地上施設になる可能性があり、五輪塔などの石造物を地上施設とする墳墓が想定できる。本調査地南側にある山地中腹には中世に栄えたと伝えられる周遍寺が所在する。３号墳付近にはかつて網引集落から周遍寺まで続く参道が通過していた。また川沿いの山林には近世以降の墓地ある。今回出土したものが墳墓であるならば、中世以降この付近が集落の墓域または宗教活動の場として用いられていたと推定しうるものである。

（２）出土遺物

中世墓の遺物として、備前焼壺、石造物片がある。

76は備前焼壷であり、蔵骨器に用いられたものと考えられる。高さは14.8㎝と小型である。玉縁状に作られた口縁から短い頸部へ続く。16世紀頃に属するものであろう。

S51は凝灰岩製の反花座破片である。複弁蓮華文２弁と格狭間の一部が残存する。格狭間は刻印など認められない。蓮華文は３弁以上あると思われ、本来の規模は一辺36㎝以上あるものと思われる。

その他の遺物として石器、用途不明の鉄製品がある。石器については第６節でまとめて記述している。M55は墳丘の南側から出土した不明鉄製品である。鍔のような形状で、一端は尖っておさまるがもう一端は幅1.2㎝の茎状の部分がつく。残存長6.9㎝であり、断面はレンズ状を呈する。

中世墓に伴う土器の他に、墳丘周辺から糸切底の須恵器椀、端部を上方に拡張した片口鉢、土師器鍋などが出土している。いずれも実測しえない破片として出土したものであるが、中世において、調査区は墓の他にある程度の時期幅をもってなんらかの活動があったことが伺える。

第３節　５号墳の調査

１．立地・検出状況

堀山４号墳の所在する丘陵南側の緩斜面に位置する。北側30ｍの丘陵頂部には堀山4号墳が、東側60ｍに堀山６号墳が所在する。調査時の現況は山林である。調査区内は南西および東部分が一部削平されているが、影響は墳丘には及んでいない。また丘陵上部からの流土により周溝はほぼ埋没している。なお５号墳は丘陵の稜線に隔てられ、万願寺川や平野部への眺望は全くない。

２．墳丘

墳丘の主軸は磁北からやや東へ偏り、東西方向は、北辺が6.5ｍ、南辺が8.0ｍ、中央付近ではやや膨らみ8.5ｍある。南北方向は西辺で6.5ｍ、東辺で6.0ｍを測る。したがって墳丘の平面形は方形であるが、やや南側が開く扇状を呈する。

墳丘の周囲は、丘陵側の３方には地山を掘り込んで周溝巡らせる。周溝は斜面の傾斜によりしだいに浅くなり消滅する。また墳丘南側は幅約１ｍにわたって地山を削り込み平坦面を作っている。これらの作業で発生した土を用いて墳丘盛土とし、削り残した旧表土上に１単位の厚さ５～10㎝程度で盛り上げている。盛土は地山に類似した黄橙色または黄褐色土を高位側である北側は薄く、低位側の南側は厚く帯状に積み上げており、細かい積み上げの単位は認められない。これら作業によりつくられた墳丘の高さは、南側墳裾から最大1.1ｍを測る。

３．埋葬施設

墳丘上で木棺１基（第１主体）、竪穴式小石室１基（第２主体）を検出した。両者は切り合い関係を持ち、小石室が木棺に先行している。また南側墳裾で墓壙１基（第３主体）を検出した。

（１）第１主体

木棺を直葬したものである。墓壙は平面が長方形を呈し、長さ2.95ｍ、幅1.2ｍ、深さ0.45ｍを測る。墓壙はほぼ南北方向に主軸をもち、頭位方向はMN６°Eを示す。墓壙の断面形は台形を呈する。木棺の痕跡は墓壙の西側に偏り、西側下端付近まで寄せている。規模は長さ2.4ｍ、幅0.6ｍを測る。南小口には棺を押さえるためとみられる平坦な礫を１石検出した。また北小口側には小口穴とみられる溝状のくぼみが墓坑床面で検出された。棺内および墓壙内から遺物の出土はなかった。

（２）第２主体

竪穴式小石室である。墳丘中軸よりやや西に位置する。墓壙は南北方向に主軸を持ち、頭位方向はMN25°Eを示す。

北東隅付近が第１主体と重複し、第１主体に切られ、東側石の２段目以上と北東部分の敷石が抜き取られている。墓壙は隅丸方形を呈し、長さ2.75ｍ、幅1.4ｍを測る。深さは0.6ｍである。墓壙の底はほぼ平坦で基底石、敷石を並べている。

石室は、長さ1.8ｍ、幅は南小口で0.45ｍ、中央部付近で0.7ｍを測り、胴が張る平面形を呈する。床面からの高さは55～60㎝である。北側小口は２段積み、南側小口は２段のみ残存するが、本来は３石以上積まれていたのだろう。東側石は南半部の基底石のみが残存するが、西側石は４石を横長に３段積み上げ、３段目以上を持ち送っている。蓋材は全く残存していない。床面は40㎝以下の礫を、面を揃えて敷き詰

め、さらに敷石の隙間に小礫を充填している。南半部では一部に敷石のない部分が見られ、その１ヶ所、東側壁際に須恵器短頸壺が１点置かれていた。

（３）第３主体

墳丘南西隅付近で検出した。墓壙は、主軸は等高線とほぼ平行する東西方向にもち、頭位方向はMN96°Eを示す。長さ2.1ｍ、幅0.55ｍの平面長方形を呈する。検出面からの深さは16㎝である。小口およびそれに続く側石の一部は板状の石材を用いているが、その他は墓壙の法面に断続的に10～20㎝大の角礫を配している。蓋石は東側でのみ検出した。東端に１石のみ50㎝の礫を１石用いているが、他のものは２石以上を組み合わせ、さらにその隙間を塞ぐように石材を置く。西半部は蓋石が残存しないことから後世の撹乱を受けている可能性があるものの、蓋石の残存する東半部も墓坑側面に礫が断片的に残存するのみである。その配置からこれらの石材は側石というよりも蓋石あるいは蓋材を支える用途のものであると考えられ、この埋葬施設は箱式石棺の要素をもつものの、石蓋土壙墓の１種として捉えることが妥当かと考える。

第３主体からは滑石製管玉(J99)１点、鉄製刀子(M56)１点が出土している。管玉は床面の中央からやや東寄りで出土した。管玉の出土により被葬者の頭位は東にあったと推測できる。刀子は東側小口の北隅で、切先を上にして立てかけた状態で出土している。

４．出土遺物

埋葬施設から出土した遺物は第２主体から出土した須恵器短頸壺(77)１点のみである。周溝内からは須恵器壺(78)がある。また実測しえなかったが、堀山４号墳裾から出土した須恵器甕片と同一と思われる破片が出土している。

77は須恵器短頸壷である。肩はなで肩で最大径付近まで下がる。肩部と体部の境界付近に浅い沈線を巡らせる。口縁端部は短くわずかに外反する。78は墳丘裾部から出土した須恵器壷と思われる。体部の最大径は上半部にあり、外面はタテ方向のタタキの後、カキ目を施す。下半部はヘラ削りである。なお接点はないが、端部が外反する形態の口縁部が付近から出土している。

刀子と管玉は第３主体内から出土した。

刀子(M56)は茎尻部を欠くほか、切先の形状も錆のため明確でない。現存長は13.2㎝を測り、刃の背部は直線的である。茎の断面形は長方形を呈する。目釘孔は認められない。関は片関である。

管玉(J99)は滑石製で淡緑色をなす。円柱状を呈し長さ2.3㎝、径0.5㎝を測る。穿孔は片側から行う。

５．小結

調査の結果、５号墳は山側の３方向に周溝を巡らせた一辺６～８ｍのやや不整な方墳であることが判明した。墳丘上では木棺直葬の第１主体、竪穴式小石室の第２主体と２つの埋葬施設を検出、同一墳丘に異なる埋葬施設が存在する。第１主体は第２主体の一部を破壊し掘り込まれていることから、第１主体が第２主体の石室に後出すると考える。また２つの埋葬施設は主軸方向が異なること、切り合い関係にあることなどから、埋葬時期にある程度の時間差があったと推定される。

第２主体と同様の竪穴式石室は、堀山・状覚山古墳群およびその周辺の古墳群では見られないものである。堀山古墳群のうち、埋葬施設に石室と思われる石材を用いているのは、本古墳以外には１・２号墳があり、いずれも眺望のきかないやや奥まった場所に古墳が立地する点で５号墳と共通点をもつ。

１・２号墳と５号墳とは現状では約100ｍの距離をおくが、おそらくは１群をなし、１・２号墳と５号墳でそれぞれ支群を構成するのであろう。５号墳は唯一第２主体から出土した土器より、所属時期は７世紀代と考えられる。状覚山５～17号墳や糠塚古墳群に併行かやや先行する古墳と考えられる。一連の状覚山古墳群とは不整な墳丘や副葬品の乏しさなどでも共通する。調査が実施されていないため断定はできないが、１・２号墳も３号墳ないし状覚山古墳群に近い時期の古墳と推定さる。３号墳の第２主体は竪穴式石室と称しているが、石積みの状態などは横穴式石室に近いようにも見受けられる。後期から終末期へ石室が退化していく過程で生じた形態なのであろう。

この時期、新村川沿いでは状覚山古墳群など集団ごとに造墓活動が行われているが、１・２・５号墳の被葬者は状覚山古墳群の各支群、糠塚古墳群とは異なる集団とみることができる。しかし隣接する堀山遺跡や堀山３・６号墳など後期をさかのぼる古墳・墳墓に連なる集団と積極的に断定しうるだけの資料はない。

第３主体は墳丘外に位置するため、５号墳に伴うものか明確にしえない。主軸を東西方向に主軸をもつこと、遺物の出土状況や被葬者の頭位方向などは周遍寺山１号墳Ｂ棺、堀山３号墳第２主体など近隣の箱式石棺と共通する。ただ施設の構造自体は極めて退化した箱式石棺の形態をとることから古く見ることは躊躇せざるを得ず、ここではあくまでも埋葬形態の伝統を継承しているとするにとどめたい。

第４節　６号墳の調査

１．立地・検出状況

万願寺川右岸の段丘頂部からやや南に下がった地点に位置する。調査時の現況は竹林となっている。肉眼的には一帯はほぼ平坦な地形であり、地表観察によって明瞭に墳丘が認められた。万願寺川は本墳の北側を流れるが、４号墳の位置する丘陵から派生する稜線がのびているため、至近に万願寺川を眺望することがは不可能であり、新村川に向かって東に開口する谷を通して下流側を遠望することになる。

また、分布調査の際、６号墳南東側で小規模な墳丘状の隆起を確認している。その後、トレンチにより調査したところ礫の集積が確認でき、また土器片が出土したため、本発掘調査で６号墳と平行して調査を行った。

２．墳丘

墳丘は東西13.5ｍ、南北12ｍを測る方墳である。墳頂部の標高は43.6ｍ、墳丘の南北両側に水路が掘削され、墳丘および周溝の一部を損傷しているほか、盛土の流出が認められたが、保存状態は良好であった。

周溝は、調査前は完全に埋没しその痕跡は伺えなかったが、調査の結果４辺ともに直線的に巡ることが明らかとなった。幅は2～2.5ｍを測る。深さは均等ではなく、各辺とも中央付近を深く掘り下げ、最大で40㎝程度あるが、各隅の部分は地表から浅く窪めただけで10～20㎝程度しかない。

墳丘は周溝の掘削後、掘削で生じた地山の黄褐色または橙系の土を周溝内に削り残した旧表土上に30㎝程度の厚さで盛り上げている。盛土は断面観察で帯状の単位として確認でき、細かい単位や作業の規則性などは窺えない。墳丘の高さは最大で周溝底から1.2ｍあるが、周溝が墳丘からの流入土でほぼ埋没していることから、本来はもう少し高さがあったものと思われる。

周溝内からは墳丘から流入したと思われる土器片などのほか曲刃鎌(M59)が出土している。

3．埋葬施設

墳丘上で2基検出した。いずれも木棺を直葬したものである。

(1) 第1主体

墳丘の中軸よりやや北よりに位置する。墓壙は東西方向に主軸をもち、MN75°Eある。墳丘の主軸よりは若干南に偏っている。平面形は長方形を呈し、規模は長さ4.0m、幅2.7mを測る。検出面からの深さは40cmであり、断面形は浅いU字状を呈する。墓壙内の棺南東側に接して刀子(M58)が置かれていた。

木棺は残存しないが、その痕跡を墓壙の中央付近で検出した。長さ2.3m、幅0.6mを測り、墓壙と同様に東西方向に主軸をもつ。棺上面の中央よりやや西よりにあたる部分には破砕した土器を集積していた。いわゆる破砕供献土器であろう。土器片は長軸方向である東西にやや広がりをもち帯状に分布している。器種は、須恵器甕1個体、土師器小型壺2個体程度、韓式系土器甕1個体がある。破片の重複関係から韓式系土器、須恵器の順が見受けられるが、特に意図的な配列などはないようである。また棺内の北東部分では、鉄剣(M57)が切先を西に向けた状態で出土した。この鉄剣の位置から被葬者の頭位方向は東と推定する。

(2) 第2主体

第1主体の西側で検出した。主軸方向はMN18°Wにもち、第1主体とはほぼ直交する。位置的に第1主体と重複する可能性があるものの、墳丘断ち割りの際に検出したため、墓壙の北半部を損なうことになり、全容を明らかにしえなかった。墓壙は隅丸長方形を呈し、残存長1.7m、幅0.9mを測る。墓壙の断面形は「コ」字状を呈し、ほぼ木棺の大きさに合わせて掘られている。木棺の痕跡は残存長1.3m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。棺底にあたる部分はやや粘性のある橙色極細砂で整地した後、棺底にあたる部分のほぼ全面に5cm以下の円礫を敷き詰める。円礫は一帯の地山に包含されているもののようである。

墓壙内から遺物は出土していない。

4．出土遺物

出土遺物は墓壙上、墓壙内、墳丘上から周溝内のものがある。墓壙内の遺物は、棺内から鉄剣、墓壙内の棺側から鉄製刀子が出土している。

(1) 土器

墓壙上の遺物は、破砕供献土器であり須恵器甕1点、韓式系土器甕1点、土師器小型壺が1または2点ある。このうち須恵器甕1点、韓式系土器甕1点を実測した。

80は須恵器甕である。胎土は砂粒を多く含み、焼成も甘く、後述する81とは対照的である。破片で出土し、接合不可能な破片も多かったが、口縁部から底部付近までほぼ復元しえた。頸部から外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。頸部と口縁部の境界付近、口縁端部直下に断面形がにぶい三角形を呈する突帯が巡る。体部はやや扁平な球状を呈し、外面には格子状タタキ、内面は無文当て具の痕跡がある。

82はいわゆる韓式系土器の甕である。細片の状態で出土したが、底部を欠くもののほぼ全容がわかるまで復元できた。色調は橙色、胎土は精良で若干の砂粒を含む。口縁部は大きく外反し、端部ににぶい稜をもつ。頸部から短く張った肩部を経て体部につながる。体部には縄簾文を施す。施文後沈線を巡ら

せるが、最上部の線は一巡し、２段目以降は螺旋状に下がっていく。内面は丁寧なナデを施している。

81は須恵器甕である。周溝にかけて出土したもので、破砕され墳丘上に撒かれたものと思われる。外反する口縁部の端部直下に突帯が１条巡る。体部は縦方向の平行タタキを施し、内面は無文当て具痕をナデ消している。81は接点のない体部破片がある。外面には平行タタキを施しているが、タタキの方向や内面に付着する自然釉の状態から底部に近い部位のようである。破片のため径などは明らかにできないが体部の形状は卵形を呈すると考える。83も同じ甕片であるが、81とは別個体と思われる。肩部から頸部にかけて残存する。断面はセピア色を呈し硬緻である。

85は周溝内から出土したもので、残存部分に円孔は確認できないが瓲と考えられる。84の口縁部と接点はもたないものの同一個体の可能性がある。85はやや張った肩部と体部の境界付近に１条の沈線、その下に波状文を巡らせる。さらに体部上方の最大径付近には沈線を螺旋状に巡らせる。84は頸部中ほどの屈曲部分のみ残存し、口縁端部を欠く。屈曲部ににぶい１条の突帯が巡り、その上下に波状文を施す。

86は周溝内から出土の須恵器杯蓋である。混入または重複した後世の遺構のものと思われ、本古墳に直接伴うものではない。平坦な頂部に扁平なつまみが付く。端部は屈曲させる。

（２）金属器

M57は棺内から出土した鉄剣で完存する。全長72.6㎝、身幅3.6㎝、厚さ0.8㎝である。剣身の断面系はレンズ状を呈し、鞘と思われる木質が部分的に残存する。茎は長さ15.9㎝、幅1.9㎝、厚さ0.5㎝である。目釘孔が２個ある。また柄木が残存する。

M58は刀子と思われる。切先と茎尻を欠き、また錆により残存状況は良好でない。現存長6.1㎝、身幅0.9㎝、厚さ3.8㎝を測る。関は斜角の片関と思われるが明確ではない

M59は曲刃鎌である。南側周溝の底付近から出土した。全長14.9㎝、幅3.1㎝、厚さ0.6㎝を測り、基部は刃に対して右方向に折り返している。柄は刃に対して直角につくものと推定される。

５．小結

６号墳は段丘上に立地する１辺12～13ｍの方墳である。確認調査実施時は後期群集墳を構成する古墳と想定して調査にはいったが、調査中に韓式系土器、初期須恵器、曲刃鎌などが出土したことからから、時期がさかのぼることが判明した。埋葬施設は木棺直葬を２基検出したが、うち１基は礫床をもつものであり加古川流域でも類例の少ないものである。

出土遺物は多くないが、古墳に伴う遺物としては、第1主体上に破砕・集積したもの、墳丘上に破砕・散布したものに大別できる。このうち第１主体に伴うものとしては、韓式系土器の甕、須恵器甕がある。注目すべきものは韓式系土器の出土である。韓式系土器のうち陶質土器甕で体部に縄簾文と螺旋状の沈線を巡らせる例は、神戸市森北町遺跡、吉田南遺跡、赤穂市堂山遺跡に例がある。堂山遺跡出土のものは舶載の可能性があるが、本墳出土の82も胎土の状態などから舶載の可能性がある。一方、80については在地で生産された可能性があるものの、生産の実態が明らかでない現状では断定できない。韓式系土器が出土したことにより、堀山６号墳の被葬者は、渡来人あるいは渡来人と密接に関わった人物の可能性が高いと考えられる

時期を決定できる遺物が少なく、６号墳の築造時期は明確にしがたいが、出土土器は大型の貯蔵具に限定される。これらの土器は埋葬施設や墳丘上で破砕し集積または散布されているが、同様の例としては５世紀中葉に位置づけられる三木市年ノ神６号墳がある。また、いわゆる後期の木棺直葬墳に副葬さ

れることの多い杯などの小型器種がみられないこと、曲刃鎌が出土していることなど後期古墳的な様相は少ないように思われる。一方、陶質土器甕と共伴する須恵器甕は格子タタキを施し、やや時期の下がる要素があるように見られる。以上の点から6号墳の築造時期は、5世紀後半～6世紀初頭の幅の中でとらえたい。

加古川流域の古墳から韓式系土器または初期須恵器が出土した例は、加西市玉丘古墳群、女鹿山古墳群、滝野町黒石山古墳群、加古川市カンス塚古墳、印南野2号墳、三木市年ノ神6号墳がある。そしてこれらの古墳の近傍には、韓式系土器または初期須恵器が出土する集落遺跡が所在している。玉丘古墳群、女鹿山古墳群と小谷遺跡、カンス塚古墳、印南野2号墳と砂部遺跡、年ノ神6号墳と大二遺跡である。これらの例が堀山6号墳にも踏襲されるなら、堀山6号墳の近距離にその母体となる集落の存在が想定できよう。加西市南部における集落遺跡の状況は不明な点が多いが、今後に期待したい。

6．その他の遺構

6号墳周溝の南東隅から約5ｍの地点に位置する。マウンドは径約4ｍ、高さは約0.2ｍであり平面形は不整な円形を呈する。断面観察ではマウンドは地山上に明黄褐色土を盛り上げてつくっている。マウンドの中央付近で土坑2基を平行した状態で検出した。

SK01　南側に位置する土坑である。平面形は長方形で北西―南東に主軸をもつ。長さ1.5ｍ、幅0.95ｍ、検出面からの深さ5㎝である。検出面では30㎝以下の角礫群を検出した。礫は30個以上あり土坑の主軸よりもやや北に振れて列状に分布する。また礫に混じって須恵器甕片などが出土した。

SK02　北側に位置する土坑である。平面形は長方形でSK01同様に北西―南東に主軸をもつ。長さ0.8ｍ、幅0.7ｍ、検出面からの深さ5㎝である。検出面では25㎝以下の礫を7個検出した。土坑の中央に3個が短辺と平行に並ぶほか、北西隅に密集させて置く。

マウンド周辺などから出土した出土土器は破片であるが奈良時代に属すると思われ、本遺構が古墳ではないことが判明した。ただし遺構の性格は明らかにできなかったため、ここでは塚状遺構としておく。

第5節　1・4・7号墳の調査

いずれも現状保存される古墳について、保存すべき範囲を明らかにするため、主に墳裾部などを確認する目的で、トレンチ（以下トレンチ番号ではTと表記）による調査を実施したものである。

1．1号墳

2号墳とともに周辺緑地として現状保存が決定していた古墳である。本墳は道路工事により墳丘の半分以上を失い、古くからその崖面に石材が露頭していた。『祖先のあしあと』に「（新村群集墳）第1群からさらに西方の山林中に、タテ穴式盛土古墳と思われるものの群集がある。」と記されている古墳は状況から1～3号墳と考えられ、1号墳は早い時期に道路工事によって墳丘のかなりの部分を失っていたようである。残存する墳丘北裾には周溝の痕跡が認められることから、すでに原地形を損ねている南側にも周溝の痕跡が残存する可能性も考えられるため、墳丘南側の道路をはさんだ位置にトレンチ（3Ｔ）を設定した。調査の結果、道路南側では周溝などの遺構は確認できず、道路北側の崖面より南に墳丘やそれに伴う施設は残存しないことが明らかになった。

なお２号墳は１号墳の北側に位置し、墳丘上にひとかかえ大の礫が露頭していることから横穴式石室の可能性もある。２号墳も１号墳同様に現地表面において周溝の痕跡が認められる。

２．４号墳

（１）概要

４号墳は万願寺川右岸の標高48.5ｍの丘陵上に位置する。トレンチは、工事の影響がおよぶ西側（４Ｔ）、南側（５Ｔ）、東側（６Ｔ）に設定した。いずれのトレンチも墳裾と推定される箇所を起点とし、墳丘をやや掘り込み、終点を丘陵裾として設定した。

（２）調査の結果

４Ｔ　トレンチを設定した墳丘の西側は、現状では明瞭な墳丘の裾を認められない。調査の結果、表土直下でにぶい淡赤褐色粗砂混じりシルトを検出した。これは地山と思われるが、トレンチ東端から約8.5ｍの地点でわずかながら傾斜の変換が確認でき、この傾斜変換点を墳裾と判断した。

５Ｔ　トレンチ北端から約２ｍの地点において、表土および墳丘からの流出土を除去したレベルで墳丘盛土の裾と地山との境界を確認した。この部分では傾斜も変換することから墳裾であると判断した。またこの地点と丘陵斜面の間に幅３ｍ程度の緩斜面が存在し、須恵器甕が破砕された状況で検出された。これと同一個体と考えられる破片は下方に位置する５号墳周溝内に流入した土砂内からも出土し、その中に口縁部付近に波状文を施した破片がある。また弥生土器甕と思われる破片も出土している。いずれの破片も実測に耐えるものではなかった。

６Ｔ　墳丘東側は現地表でも明確に墳裾を確認できる。トレンチ西端から約１ｍの地点で墳丘盛土の裾を確認した。また墳丘と丘陵斜面との間に約４ｍの緩斜面が存在する。

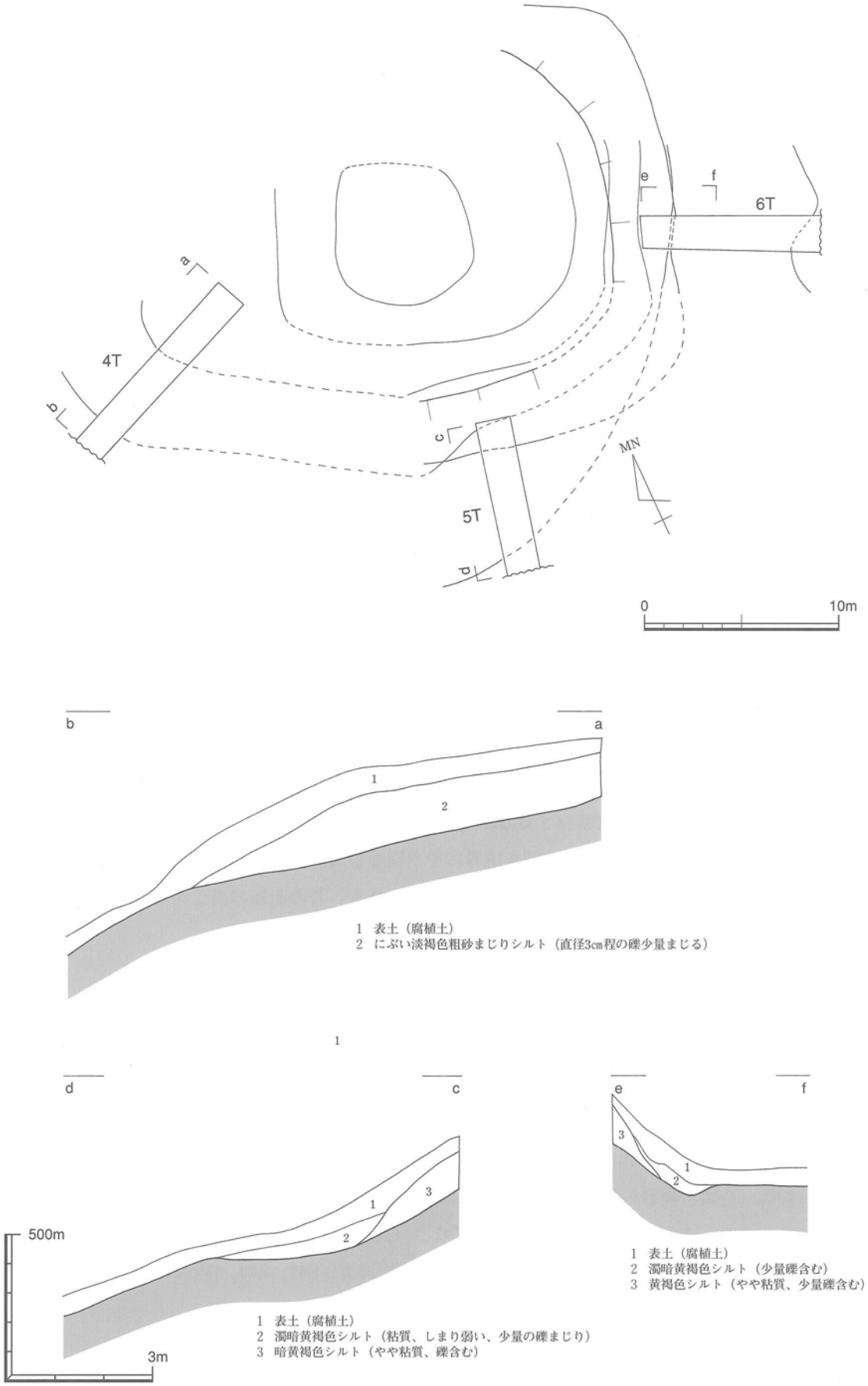
以上のトレンチによる調査および地表観察から得た墳丘の規模は、東西29ｍ、南北24ｍを測り、墳丘の高さは東側で1.5ｍ、南側で１ｍ前後ある。また墳丘の形状は方形を呈することが判明した。墳丘は北・東・南辺が明瞭であり、特に北・東辺は顕著な比高差がある。これに対し西辺の墳丘は不明瞭であり、４Ｔを設定した南西側は現状では墳丘と自然地形の境界を判断することが困難であった。おそらく南西側は当初より丘陵の自然地形をほとんど加工していないとみられる。このような墳丘の形状から堀山４号墳は万願寺川、特に下流側から見上げられることを意識して築造されていると考えられる。

墳丘に伴う施設としては、墳裾に平坦に近い緩斜面が巡る可能性があるものの、周溝は確認できなかった。埋葬施設については調査では明らかにしえなかったが、地表面の観察では、墳頂部で礫がまとまってみられる箇所があり、埋葬施設に伴うものの可能性がある。

（３）小結

調査の結果、５号墳は29ｍ×24ｍの方墳であることが判明した。平面規模では加古川流域の方墳としては大型のものである。調査の制約から埋葬施設などの調査は行えなかったため、築造時期など古墳の詳細は明らかにしえなかったが、規模や立地から堀山古墳群の盟主的な存在であった可能性がある。

古墳の築造された丘陵は、加古川から万願寺川をさかのぼり糠塚山と青野ヶ原台地の間を抜け、加西市域に入ると最初に視野に入る地点である。墳丘東側は墳丘と原地形との比高差が最も大きく、明瞭に墳丘が認められる場所である。しかし墳丘西側にむかうに従い墳丘と原地形との比高差小さくなり、川から完全な死角となる南西角付近では墳丘と原地形と区別がつかない。このような墳丘の構造から推測すると、４号墳は万願寺川下流側から見上げるという視覚的効果を意識して築造された古墳とみることができる。



第６図　４号墳平面図・トレンチ断面図

3．7号墳

（1）概要

7号墳は万願寺川およびその支流である新村川を見下ろす尾根から斜面への変換点付近に位置する。最も近い6号墳は東に開く浅い谷をはさんで北側約110mの地点に位置する。古墳付近の標高は42.7mである。調査時の現況は山林である。墳頂部には幅1m、長さ5mのトレンチ状に盗掘坑があり、その断面に埋葬施設に伴うと思われる石が1点露出する。墳丘は地表観察では円形を呈し、現状での規模は径11.6mを測る。

（2）調査の結果

事業用地取得の関係で墳丘西側のみを調査対象としたが、その後の経緯で記録保存から現状保存に変更されたため本発掘調査には移行していない。墳頂部付近から西側へ設定した12Tでは、墳裾で周溝を検出した。幅1.5m、深さ0.5mを測る。検出した周溝底から墳頂部までの高さは0.8mである。地表面では周溝の痕跡が認められないため全周するかは明らかでないが、地形的には北側と東側は傾斜しつつある地形のため、周溝は幅を減じて消滅するものと思われる。墳頂部では墓壙の一部を平面的に検出した。墓壙は北西—南東方向に主軸をもつと思われ、幅約1.0mを測る。盗掘孔などに複数の石材が見られないことから埋葬施設は木棺直葬と考えられる。盗掘坑の断面に露出している石は棺押さえなどの用途が想定される。

遺物は周溝付近で土師器細片が出土したのみである。したがって古墳の詳細な築造時期は明らかにしえない。

なお7号墳西側一帯は大幅な土地の改変が行われているが、調査時に地元住民から聞いた話では付近には他にも古墳があったとのことであった。そこでトレンチを設定して調査を実施したが、周溝など古墳の痕跡を確認することはできなかった。

ただ本体工事が開始されてから7号墳西側付近で須恵器高杯脚部(10)を採集している。

10は破片であり、裾部が1/4程度残存するのみだが、2箇所に円孔が認められ、その位置関係から、本来は4方向に穿っていたとみられる。突帯を境界にやや屈曲し端部にいたる。端部は丸くおさめる。土器の年代観からこの土器は5世紀後半に属するものと思われる。この土器の出土から7号墳周辺に堀山6号墳と同様に古墳時代後期をさかのぼる古墳が存在していた可能性は高い。

第6節　堀山古墳群出土の石器

1．概要

堀山古墳群では、古墳の墳丘盛土、溝埋土などから、原位置を遊離した石器類が出土している。石器が本来包含されていた遺構・包含層は遺存していなかったが、概ね縄文時代に属するものと思われる。出土した石器は、石鏃、楔形石器、掻器、二次加工のある剥片、石核、剥片、砕片、ハンマーストーン等である。ここでは、11点を図示して、記載をおこなう（図版95）。出土位置、計測値等については、第1表に示す。なお、S37、S42、S49は堀山遺跡隣接地の確認調査、S43、S44、S48は同じく隣接地である堀山3号墳の調査の際に出土したものである。

２．出土石器

石鏃（図版95　S37～S40）

４点が出土している。いずれもサヌカイトを用いた、凹基無茎式石鏃である。

S37は、風化が顕著に進行している。両側縁ともに、ほぼ直線的に整形されており、基部の抉りは浅い三角形状を呈する。確認調査のグリッド３より出土した。

S38は、やや粗質な印象を受けるサヌカイトを用いている。両側縁は直線的に整形されており、基部の抉りは浅く脚端部にかけて円みをもつ。

S39は、緻密なサヌカイトを用いている。両側縁は緩やかな鋸歯状を呈し、基部の抉りは器長の1/3程度に及んでいる。両脚は長さが不ぞろいで、脚端部は尖る。

S40は、流状構造が顕著なサヌカイトを用いている。両側縁はほぼ直線的に整形されているが、先端部および脚端部にかけて緩やかに屈折する。基部の抉りは三角形状を呈し、脚端部は尖る。堀山4号墳裾部より出土した。

楔形石器（図版95　S42）

S42は確認調査の際、採集した楔形石器である。

掻器（図版95　S43）

S43は、幅広のメノウ製剥片を素材とした掻器である。剥片の末端部に、腹面側から細かな二次加工を施して、直線的な刃部を作出している。素材となった剥片は、平坦な剥離面打面をとどめており、背面を構成する剥離面も同一打面上から剥離されている。背面側末端部には、打面とほぼ平行する節理面が認められるが、その性状から石核素材の分割面（石核の下底面）と考えられる。刃部を形成する剥離痕の稜線には、顕著な光沢が認められる。

二次加工のある剥片（図版95　S44）

S44は、暗赤色のチャートを用いた二次加工のある剥片である。片面に広く礫表皮をとどめている。図上下の相対する縁辺に、剥離痕が集中することから、剥離の程度が低い楔形石器である可能性も考慮される。

剥片（図版95　S45～S47）

S45は、緑灰色を呈する、良質のチャートを用いている。打面は非常に小さいが、２面の剥離痕から形成されており、打点が顕著な収束を見せることから、押圧剥離による可能性がある。背面側は、腹面と同一方向からの、２面の剥離痕で構成される。腹面が湾曲する形状と、打面・打点の特徴から、尖頭器調整剥片の可能性が考慮される。

S46は、風化の浅い剥片である。表裏ともに、縁辺からの不規則な剥離痕をとどめるが、二次加工の意図の存在が判然としないことから、剥片とした。

S47は、やや風化が進行する。２面の剥離痕で構成される打面を見せ、その稜上を打撃することで、剥離がおこなわれている。背面側は、石核上の面と考えられる２面の剥離面で構成されるが、その稜上に打撃痕と考えられる弧状の裂痕が集中していることから、石核素材剥片の打面部から、最初に剥離された有底剥片と判断される。

本資料のみからは、瀬戸内技法の存在を認めることはできないが、その第二工程に類似した資料として注目される。

ハンマーストーン（図版95　S48）

チャートの亜円礫を用いた、ハンマーストーンである。礫の一端から、表裏両面に向かって形成された剥離痕によって形成される稜の頂点付近が、顕著に潰れていることから、本器種と判断したが、石材が良質であること、一般にハンマーストーンの場合、剥離によって機能面を作出する例が少ないこと等から、石核を転用した可能性があろう。古墳の墳丘断ち割りに伴って、「地山」直上より出土した。

石核（図版95　S49）

S49は、灰色を呈する良質のチャート礫を用いた石核である。分割した礫を素材としたと思われ、その分割面を剥離作業面としている。礫表皮が平滑であることから、打面調整の頻度は低かったものと思われるが、剥離作業面側から打面側（礫表皮）に向けて、数回の剥離がおこなわれている。

2．小結

堀山古墳群で出土した石器類は、いずれも原位置を遊離しており、所属時期などについては確定することができない。

石鏃については、その形態から、概ね縄文時代に属するものであろう。また、サヌカイト剥片（S47）については、瀬戸内技法に近似する技術的特徴が看取されることから、後期旧石器時代の所産である可能性を考慮しておきたい。

第１表　状覚山・堀山古墳群出土・採集石器一覧表

番号	調査番号	地区	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
S37	930131	３Ｇ	石鏃	Ｓｎ	15.1	9.0	2.0	＜0.1
S38			石鏃	Ｓｎ	15.0	16.4	4.3	0.7
S39			石鏃	Ｓｎ	19.8	17.7	3.5	0.7
S40	930109	堀山４号墳	石鏃	Ｓｎ	22.8	14.5	3.8	0.7
S41	920007	状覚山４号墳	石鏃	Ｓｎ	22.7	15.3	4.9	1.0
S42	930131	３Ｇ	楔形石器	Ｓｎ	19.5	35.0	8.9	5.0
S43	930108	堀山３号墳	掻器	メノウ	34.7	37.7	14.5	15.7
S44	930108	堀山３号墳	二次加工ある剥片	Ｃｈ	33.7	36.3	9.0	9.7
S45			剥片	Ｃｈ	20.7	12.3	3.0	0.7
S46	930109	堀山５号墳	剥片	Ｓｎ	18.7	19.5	5.5	1.7
S47			剥片	Ｓｎ	18.2	23.6	5.4	2.1
S48	930108	堀山３号墳	ハンマー	Ｃｈ	63.7	50.1	25.1	115.6
S49	930131	３Ｇ	石核	Ｃｈ	54.1	30.1	14.6	20.1

第５章　堀山遺跡の調査

第１節　堀山遺跡の概要

１．遺跡付近の地形

堀山遺跡は、加古川の一支流である万願寺川南（右）岸に沿って形成された、段丘面上に立地している。調査地付近の標高は約40ｍで、河床面からの比高は約12ｍを測る。遺跡付近の地形面は、緩やかな起伏を見せながら、遺跡の西に位置する小山塊に向かって標高を高める。遺跡の東側は、県道79号（高砂・加古川・加西線）が南北にはしる幅広い谷を隔てて、糠塚山（150m）を頂点とする小山塊が並ぶ。また北側は急斜な段丘崖となって、遺跡の範囲は明瞭に画され、また東側についても発掘調査によって遺構面の範囲を把握することができたが、西側と南側については、現地形上の特徴から遺跡の範囲を確定することはできない。

２．調査の概要

堀山遺跡の本発掘調査は、1994（平成６）年５月23日から、７月29日にかけて実施した。調査対象地は、産業団地内の道路建設予定地であり、調査面積は476㎡である。

調査地付近は、1993（平成５）年度の確認調査によって、弥生時代の遺構が存在することが明らかにされており、道路建設によって地下遺構に影響が及ぶ範囲について、本発掘調査を実施したものである。

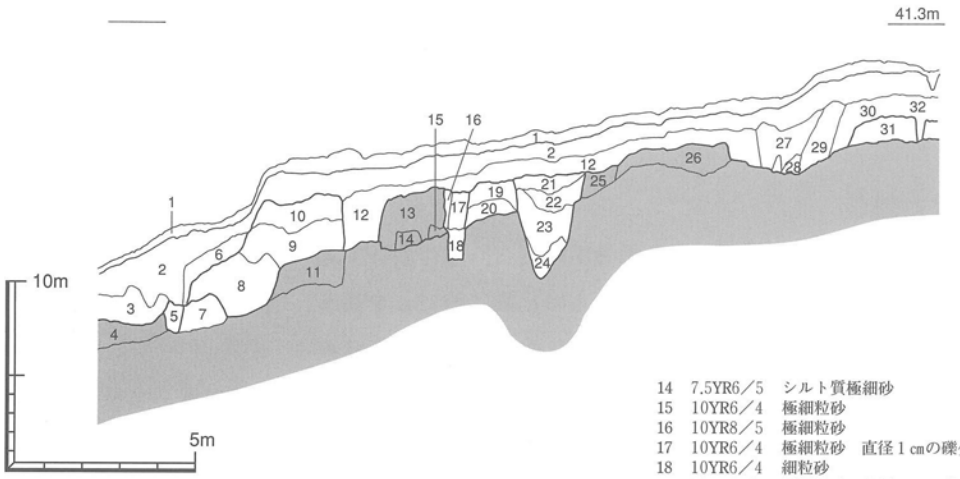
調査地は、山林であったためまず伐開作業をおこなった後、重機による表土除去を実施した。さらに、調査区北壁に沿って地層確認用のトレンチを設定し、まず堆積関係の把握に努めた。その結果、調査対象地の東側約10ｍの範囲には、遺構面が存在しないことが明らかとなり、その後の調査は、調査区西半中心に実施することとなった。

この地層確認トレンチの掘り下げにより、上下二枚の遺構面が存在することが明らかとなったため、上位の面から第Ⅰ・第Ⅱ遺構面と呼称し、順次調査を実施することとした。さらに、調査の過程でチャート製ナイフ形石器の出土を見たため、トレンチによる下層の調査を試みたが、旧石器時代の遺物を包含する地層は遺存しておらず、他に遺物を検出することはできなかった。

３．基本層序・遺構面

調査地付近の段丘面を被覆する堆積物は、細粒の砂ないしはシルト質砂を主体としており、これに少量のペブル級の礫を含んでいる。下位の遺構面（第Ⅱ遺構面）の基盤をなす層は、黄褐色～橙色ないしは明褐色を呈する、細砂～極細砂である。その上位には、にぶい褐色～黄褐色のシルト質細砂あるいは細砂が堆積し、上位の遺構面（第Ⅰ遺構面）の基盤となっている。これを、褐色ないしは黄褐色の礫混じり砂が被覆するが、これら２層中には、縄文時代～弥生時代の遺物が、ごく散漫に包含されている。

これらの堆積物は、色調や層相によって細分されたが、基本的には段丘を覆う更新世の堆積物と、縄文時代以降に形成された古土壌および、これが二次的に堆積したものと理解される。調査地に隣接して、古墳も存在するので、弥生時代以降、遺跡周辺の地形が人為的に改変された可能性は高い。今回の調査で、原位置を遊離した旧石器～縄文時代の石器が数多く出土したことも、こうした事情を傍証している。



1　表土
2　10YR6／6　細粒砂　直径１～２㎝の礫含む
3　10YR4／5　極細粒砂
4　10YR6／4　極細粒砂
5　10YR6／4　細粒砂
6　7.5YR6／5　極細粒砂
7　7.5YR8／5　極細粒砂
8　10YR8／5　極細粒砂
9　10YR6／4　細粒砂　直径0.3～１㎝の大礫少し含む
10　7.5YR4／5　極細粒砂
11　10YR6／4　極細粒砂
12　10YR6／4　シルト質細砂
13　10YR6／4　細粒砂
14　7.5YR6／5　シルト質極細砂
15　10YR6／4　極細粒砂
16　10YR8／5　極細粒砂
17　10YR6／4　極細粒砂　直径１㎝の礫少量含む
18　10YR6／4　細粒砂
19　10YR8／5　極細粒砂　直径５㎜の礫少量含む
20　10YR6／5　シルト質極細粒砂
21　10YR5／4　極細粒砂
22　10YR5／4　細粒砂
23　10YR5／6　細粒砂
24　10YR5／4　細粒砂
25　10YR6／4　細粒砂
26　7.5YR6／4　極細粒砂
27　10YR6／5　細粒砂
28　7.5YR6／5　シルト質極細粒砂
29　10YR4／5　細粒砂　直径0.5～１㎝の礫含む
30　7.5YR6／5　細粒砂
31　7.5YR8／5　極細粒砂
32　7.5YR6／5　細粒砂

第７図　調査区南壁土層断面図

第２節　遺構と遺物

１．第Ⅰ遺構面（図版96）

第Ⅰ遺構面では、溝３条・土坑２基・柱穴４基が検出された。これらのうち、SD01は、本来第Ⅱ遺構面に伴う遺構であるが、深い遺構であるためこれを埋める堆積物の上部が、第Ⅰ遺構面にまで及んでいた結果検出されたものと判断される。従って、SD01については、第Ⅱ遺構面の項で記載をおこなう。

（１）溝（図版97）

SD02・03

調査区中央部付近で検出された。規模・断面形状が類似し、ほぼ平行して南北に延びることから、同時期に形成された可能性が高い。内部は小礫を含む褐色の細砂で埋積されていた。埋土中より、少数の弥生土器片のほかに須恵器片を出土していることから、古墳時代後期以降に属すると思われるが、詳細な時期を決定する根拠に欠ける。

（２）土坑（図版97）

SK01

調査区西端に位置する。長径63㎝、短径54㎝、深さ12㎝を測る楕円形の土坑である。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

SK03

調査区西部の南壁に接して検出された。長径144㎝、短径75㎝、深さ76㎝を測る楕円形の土坑である。内部は、自然堆積と考えられる極細砂ないしは細礫を含む極細砂で充填されており、出土遺物は見られ

なかった。平面形が整った楕円形を呈することと、土坑内の堆積状況から、樹根等の自然因によるものとは考えがたいが、所属時期は不明である。

（3）柱穴

調査区西部で3基、中央部のSD02に接して1基の、柱穴状遺構が検出された。調査範囲の制約もあろうが、いずれも出土遺物が見られず、建物跡として柱穴列を復元することもできない。

（4）小結

第Ⅰ遺構面で検出された遺構は、ほとんどで出土遺物がなく、時期に言及することは困難である。弥生時代の遺構面（第Ⅱ遺構面）埋没後、何らかの人為的造作がおこなわれたことは確実であるが、その時期・性格等は明らかにしがたい。隣接して堀山古墳群が営まれることと、須恵器の小片を出土した遺構があることから、古墳時代以降に属する可能性を指摘するにとどめておく。

2．第Ⅱ遺構面（図版96）

第Ⅱ遺構面では、方形周溝墓4基とその主体部である木棺4基、周溝墓外に設けられた木棺墓1基をはじめ、溝、土坑、柱穴等が検出された。これらのうち、SK02は縄文時代中期、SD01は弥生時代中期、方形周溝墓群と木棺墓は弥生時代終末に位置づけられる。その他の遺構については、出土遺物が僅少であるために、所属時期を確定することは困難である。

（Ⅰ）縄文時代の遺構と遺物

（1）土坑

SK02（図版102）

縄文時代の遺構と確認されたのは、SK02のみである。SK02は調査区北西角に位置し、約1/3が調査区外に伸びる。すりばち形の掘形をみせるやや不整形な土坑で、径145㎝、最大深42㎝を測る。検出面から深さ20㎝付近にかけて、人頭大の礫が多数検出された。礫は、土坑の掘形に沿うように検出され、下底面が土坑底に接するものも見られた。礫の下位からは縄文土器および石器が出土した。

以下で記載するS3・S4は、礫の直下から重なった状態で出土しており、人為的埋置であった可能性が高い。こうした石器出土状況と大型礫の集積に基づいて、SK02は墓であった可能性が高いと判断された。従ってS3・S4は副葬品として評価してよかろう。S1・S2については、発掘時に、土坑内における出土位置を確定することができなかったため、こうした判断は差し控えておきたい。縄文土器はすべて細片であるため、SK02に対する副葬的な意義付けをおこなうことは困難である。しかしSK02内においては、他の時期の遺物が認められないことから、本遺構の所属時期については、記載した土器の時期（船元Ⅱ式）に相当するものと判断して大過ないだろう。

（2）出土遺物

土器（図版103）

SK02の埋土および集石下からは、細片化した少数の縄文土器が出土している。

出土した縄文土器は、同一個体をなすと思われる、十数点の細片であるが、接合・復元はなしえなかった。ここでは文様帯が比較的鮮明な、2点を記載する。

87は、深鉢の口縁部である。口縁外面に幅広い粘土帯を貼り付け、ここに斜行する刻みを施している。口縁端部には平坦な面を形成しており、この面に対しても刻み(註1)を施している。外面には斜行する粗

い縄文が見られるほか、口縁内面にも縄文が認められる。

88は、同一個体の体部破片である。図上縁は、粘土紐の接合面で破損したものと見られるが、この縁辺がわずかに外反する形態を示すことから、口縁部から体部に至る屈曲部に相当する可能性が考慮される。外面には、刻みを施した粘土帯が貼り付けられ、刺突による点刻が施されるほか、ナデの痕跡が認められる。内面はナデにより平滑に仕上げられている。

ともに胎土には、直径2㎜程度の砂粒を多量に含んでおり、やや脆弱な感を受ける。中期の船元Ⅱ式に相当する資料と考えられる(註2)。

石器（図版104）

集石下より、ほぼ重ねて埋置された状態で出土した石匙、剥片各1点のほか、石匙1点、石鏃1点が出土している。計測値等については、第2表に示した。原位置を遊離した石器の中にも、SK02出土のもの数点が含まれるが、いずれも礫検出面より上位の出土であるため、二次的な流入と判断し、SK02に伴う遺物として取り扱うことは避けた。

S1は、著しく風化が進行した石鏃である。器表面は、剥離痕の稜線が観察困難なまでに風化している。両側縁は概ね直線的に整形され、基部の抉りは頂部が円みを持つ三角形状で、脚端部は円く仕上げられている。左右の脚長が異なるが、風化のため折損によるものか否か判断できない。先端部を折損している。

S2は、SK02北側の調査区境界に、断面確認のためのトレンチを掘削している際に出土した遺物であり、出土状況からSK02に伴うものと判断した。讃岐産と思われる、流状構造の発達したサヌカイトを用いた、横型の石匙である。横長剥片を素材とし、その末端部に対して腹面側から二次加工を施して刃部を作出している。刃部に相対する側縁は、背・腹両面から二次加工が施され、つまみ部分についてはその基部を円く抉っている。背面側には、ポジティブな剥離面が広く残されており、素材となった横長剥片は、剥片素材の石核から剥離されたものと考えられる。

S3は、S2と同様に顕著な流状構造を見せる、讃岐産サヌカイトを用いている。比較的薄い板状の剥片を素材とし、その縁辺に、腹面側から二次加工を施して刃部を作出する。刃部以外の縁辺は、背・腹両面から二次加工が施され、不整楕円形を呈するつまみの基部は、円く抉られている。SK02の礫下位から、S4の剥片と重なった状態で出土しており、意図的な埋置であったものと認識された。

S4は、S3に類似した流状構造を見せる、讃岐産サヌカイトの横長剥片で、強く風化している。1面の大きな剥離面を打面としており、背面側の1側縁には、石核の側面を整形したものと思われる剥離痕が密集している。剥片末端部は、顕著な蝶番状を呈する。

第2表　SK02出土石器一覧表

番号	地区	器種	石材	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)
S1	SK02上部	石鏃	Sｎ	18.5	12.7	3.8	0.5
S2	SK02の可能性	石匙	Sｎ	46.4	65.2	10.0	26.8
S3	SK02	石匙	Sｎ	89.3	75.3	18.5	46.6
S4	SK02	剥片	Sｎ	69.8	117.7	12.0	80.7

（Ⅱ）弥生時代の遺構と遺物

（1）方形周溝墓（図版98）

今回の調査で検出された方形周溝墓は、合計４基で、西からSX01～04と呼称した。SX01～SX03については、埋葬主体部を含めて、墳丘上面のほぼ全域を調査することができたが、SX04はその大部分が調査区北側にあるため、墳丘南西角から南辺の一部について調査しえたのみである。

埋葬主体部としては、SX01の墳丘上で１基、西側周溝内に１基、SX03墳丘上で２基、周溝墓群の西側で１基の、合計５基の木棺墓が検出された。

出土遺物は埋葬主体部の一部で、副葬された鉄器が出土した他は全体に僅少で、図示できるものは、SX02・03に共有される溝内より出土したものに限られる。

SX01

墳丘

調査区の南側中央部に位置する。本周溝墓は、北東溝をSX02と南東溝をSX03と共有する。南西溝は調査区外に位置する。SX02と共有する北側周溝は長さ5.0ｍ(註３)、幅0.5ｍ、深さ10㎝、SX03と共有する東側溝は、幅1.7～2.1ｍ、深さ56㎝、西側溝は検出長5.0ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る。各溝は横断面が逆台形ないしは緩やかに開く「U」字形を呈しており、黄褐色ないしは黄橙色の細砂～極細砂により自然埋没している。墳丘の規模は、北辺の墳丘裾で長さ5.5ｍを測る。

埋葬主体部

埋葬主体部として、周溝墓中央におよび西側周溝内から木棺を検出した。

木棺３（図版100）

周溝墓中央に位置する。掘形はやや不整形な長方形を呈し、長さ226㎝、幅87㎝、深さは検出面より5㎝を測る。埋土は明褐色の細砂である。上部が削平を受けているため、棺の痕跡を確認することはできなかったが、掘形の形状から組み合わせ式の、箱形を呈する木棺であった可能性が高い。主軸方位は、MN30°Eを測る。鉄鏃２点が、掘形北縁から約40㎝の位置に並んで出土しており、この付近が木棺北縁にあたるものと推定される。鉄鏃の先端は北向きであり、被葬者の頭位も同方向であったと思われる。

木棺２（図版100）

西側周溝内より検出された。掘形は長さ192㎝、幅66㎝、深さは溝検出面より37㎝を測る。掘形内は明褐色ないしは明黄褐色の砂で自然埋没しており、平面・断面観察では棺の痕跡を確認することはできなかったが、規格性の高い長方形の掘形から、やはり木棺の存在が推定される。主軸方位はMN34.5°Eである。棺内からの出土遺物は見られなかった。

出土遺物（第８図）

木棺３より、同形態の鉄鏃２点が出土した。

M60は、全長99.5㎜、鏃身長92㎜、身幅30㎜を測る、柳葉形鉄鏃である。身部上半は膨らみをもった平面形を呈し、両側縁は鋭利な刃部をなす。身部下半はほぼ平行する側縁を見せ、断面は長方形を呈する。茎部はわずかに遺存するのみであるが、長方形を呈する。

M61は全長125㎜、鏃身長83㎜、身幅30㎜を測る、柳葉形鉄鏃である。身部上半は膨らみをもった平面形を呈し、両側縁は鋭利な刃部をなす。身部下半は１に比べて短く、ゆるやかに湾曲する側縁を見せながら茎部に至る。断面は長方形を呈する。茎部は37㎜が遺存している。幅8.5㎜、厚さ6.5㎜の長方形を呈する茎部に木質が付着しており、さらに糸による丁寧な結紮がおこなわれている。

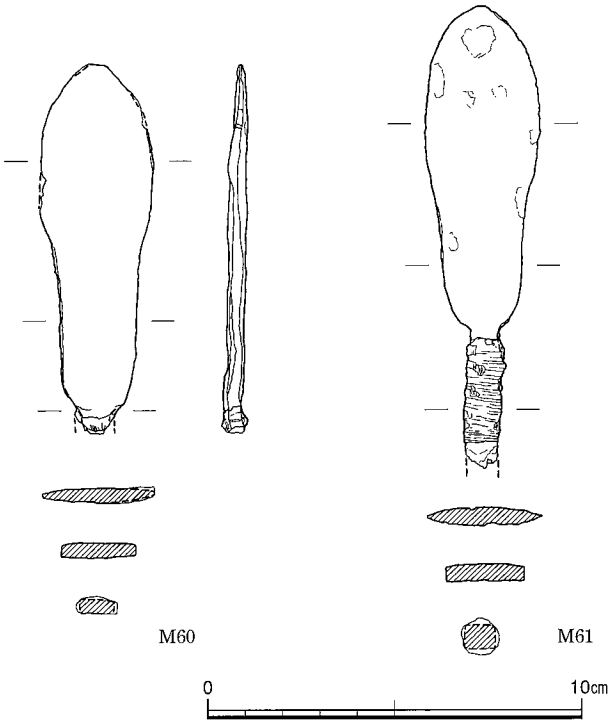
SX02

墳丘

SX01とSX04との中間に位置する。墳丘の形状がいびつな台形状の平面形で主体部も確認できなかった。SX01・03・04が、方形に廻る溝を共有しつつほぼ同一の方位を示すのに対し、SX02はSX04の南西角に、ほぼ45°の角度で取り付くように見える点で他の周溝墓とは異なっており、その状況はSX04の南西角に付属して構築されたようにも見える。

出土遺物

SX01と共有される溝内から、壺体部の破片が出土したが図示に至るまで復元できなかった。溝底にほぼ密着して出土している。



第8図　SX01木棺3出土鉄鏃

SX03

墳丘

調査区の中央部の東寄り、SX01の東側、SX04の南側に位置する。東側と西側の周溝の一部と南側周溝は調査区外で確認できなかったが、SX04と共有する北側周溝は長さ11.5m、幅1.9m、深さ40cm、東側周溝は、検出長9.0m、幅0.6～1.4m、深さ25cm、西側周溝は検出長8.5m、幅1.4～2.1m、深さ56cmを測る。各溝は横断面が逆台形ないしは緩やかに開く「U」字形を呈しており、黄褐色ないしは黄橙色の細砂～極細砂により自然埋没している。墳丘上で木棺2基を検出した。墳丘の規模は、北辺の墳丘裾で長さ9.3mを測る。

埋葬主体部

木棺4（図版101）

掘方は長さ362cm、幅102cm、深さは検出面より11cmを測る。木棺の長さ242cm、幅62cm。棺内北部より鉄製品の破片が出土したが、劣化が著しく器種を判断するに至らなかった。

木棺5（図版100）

木棺4の西側に位置する、小型の主体部である。掘形は検出長さ96cm、幅44cm、深さは検出面より17cmを測る。

SX04

墳丘

SX02の東側、SX03の北側に位置する。南溝はSX03と共有している。南溝は検出長約12m、深さ50cmを測る。各溝は横断面が逆台形を呈し、黄褐色ないしは黄橙色の細砂～極細砂により自然埋没している。

墳丘の大半が調査区外にあるため全体の調査はできなかったが、南側の規模から、今回調査を行った周溝墓の中で最大の規模であると推定される。南西角の墳丘裾には大きさ10～40cmの礫が貼られている。西溝に沿って調査区を一部拡張して貼石の範囲の確認をしたが、角の部分のみが貼石が施されていることを確認した（図版99）。

出土遺物（図版103）

SX01・02間およびSX02・03間の溝から、図示可能な土器が出土している。

92は、全体に橙色を呈する、壷の肩部破片である。大きく膨らむ体部を見せ、頸部直下に櫛描波状文および竹管文を施している。内面には、縦方向のユビナデの痕跡が明瞭に認められる。

93も、全体に橙色を呈する、壷肩部から頸部にかけての破片である。概ね直立する頸部から、円みをもった体部にいたる。風化により、外面の調整痕は明瞭ではないが、内面にはヘラケズリおよびその後に施された縦方向のナデの痕跡をとどめる。

94は、ごく小型の甕であろう。小破片のため図の傾きに些かの不安を残す。外面には４本を１単位とするタタキが認められ、体部内面はヘラケズリが施されている。内外面ともに、器表面に亀甲状裂痕が著しい。

95は、小型の甕ないしは鉢の底部であろう。直線的に立ち上がる体部外面には、縦方向のヘラミガキが、底部外周には横方向のヘラミガキが施されている。内底面には、工具による放射状の調整痕が残る。外底面は、ユビオサエによる整形がおこなわれており、わずかに上げ底となっている。

96は、甕の底部であろうか。全体に風化による剥離と欠損が進行しており、器面調整は判別が難しいが、外面にナデの痕跡が認められる。

97は、甕ないしは鉢の底部と考えられる。体部はやや歪んだ膨らみをもちつつ立ち上がる。外面には、４本１単位のタタキが施され、内底面には工具による放射状の調整痕が認められる。外底面中央に円形の凹みが認められることから、「輪台技法」による成形がなされたものと考えられる。

98は、甕の底部である。やや不整形な底部から、膨らみを持ちつつ立ち上がる体部を見せる。外面は外底面も含めて、単位の判然としないタタキが施され、底部外周のみが横方向のナデにより調整される。内面にはナデの痕跡が認められる。

99は、甕の底部である。小さな底部と、わずかな膨らみをもちつつ大きく開く体部を見せる。外面には、３本１単位のタタキが螺旋状に施され、内面はヘラケズリおよびユビオサエにより調整されている。

100も、99に類似した形態を見せる甕底部である。外面にはタタキが施され、内面はナデにより調整されているものと思われるが、風化による器面劣化のため詳細を判読できない。

101は、甕の底部である。円みを持った底部から、わずかな膨らみを見せる体部が立ち上がる。外面には、縦方向のヘラケズリが認められる。内面も同様にヘラケズリが施されていたものと思われるが、風化のため詳細は不明である。

102は、全体が赤褐色を呈する手焙形土器である。砕片化している上、全体の半分程度の破片しか回収されておらず、復元形態に若干の不安を残す。

わずかに認識できる程度の底部と、そこから広がる、膨らみを持った体部下面を見せる。体部中央は、屈折してやや内傾気味に立ち上がり、大きく外方へ屈曲してほぼ水平に開く口縁部に至る。口縁端部はわずかに上下方向に拡張され、やや凹みをもつ外面を形成する。開口部の側面観は、半円形に近いアーチ形を呈する。また、開口部内外面の下部に、不整形な粘土紐の貼り付けが認められる。

調整痕は風化のため不明な部分が多いが、天井部外面にはヘラミガキが、また内面にはハケが施されている。体部内面はハケ調整が施され、内底面ではこれが放射状を呈している。

（２）木棺墓

木棺１（図版100）

方形周溝墓群の西側、SX01の北西角から１ｍほどに位置している。外周施設は認められず、長さ78㎝、幅44㎝、深さ12㎝を測る長方形の掘形のみが検出された。平面・断面観察からは、木棺の痕跡を識別することはできなかったが、箱形を呈する掘形の状況から、小型の木棺墓と判断した。出土遺物は認められなかった。

（３）溝

SD01（図版97）

調査区西半部に位置し、調査区外に向かって延びる。全体の規模は不明であるが、検出長４ｍ、幅2.7ｍ、深さは検出面より75㎝を測る。

出土遺物（図版103）

SD01からは、少数の弥生土器が出土した。90は、埋土上層より出土した甕底部である。内面は風化による剥落が顕著である。外面には縦方向のハケ調整が認められる。

SD04

調査区西半部に位置し、SD01同様調査区外へ延びる。検出長2.6ｍ、幅1.4ｍ、深さは検出面より35㎝を測る。出土遺物は認められなかった。

SD05

調査区西半部に位置し、SD01同様調査区外へ延びる。検出長2.8ｍ、幅1.5ｍ、深さは検出面より30㎝を測る。溝の南側掘形内で、柱穴２基が検出されている。出土遺物は認められなかった。

（４）土坑

SK04

SK04は、SD01の南に位置する不整形な土坑である。平面形は、中央部で屈折した茄子形を呈し、長径1.9ｍ、短径0.9ｍ、深さ47㎝を測る。顕著な出土遺物は認められなかった。

SK05

SD01の南に接する、不整楕円形のごく浅い土坑である。長径1.3ｍ、短径0.9ｍを測る。出土遺物は認められなかった。

SK06（図版101）

SX03墳丘上面より検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径0.92ｍ、短径0.62ｍ、深さは検出面より17㎝を測る。土坑内は浅黄橙色の細砂で埋没しており、土坑掘形に接して３個の角礫が検出されたが、他に出土遺物は認められなかった。方形周溝墓に伴うか否かを確定できない遺構である。

（５）柱穴

調査区西部で５基、SX03の墳丘上で２基の、柱穴状遺構が検出された。いずれも出土遺物が見られず、建物跡として柱穴列を復元することもできない。方形周溝墓上の柱穴２基は、ともに直径が40㎝前後を測り、いずれも周溝の内縁から1.3～1.4ｍの位置にあるなど、共通点が認められるが、周溝墓上の何らかの施設を示すものか否かについては、判断の根拠に乏しい。

（Ⅲ）包含層出土の土器（図版103）

包含層からの出土土器も僅少で、図示できるものは少ない。

89は、第1・2遺構面間の、遺物包含層より出土した、壺である。円みをもった体部から、なめらかに、わずかに開く口縁部へと至る。口縁端部は、外下方へ拡張されており、その外面は平坦な面をなす。体

部外面はナデ調整、頸部外面には縦方向のハケが認められる。また、内面はハケ調整が施される。

頸部直下と口縁部外面には、６条を単位とする櫛描波状文が巡る。また、口縁部外面の一部に、わずかではあるが赤色部が認められ、何らかの塗布がおこなわれた可能性が考慮される。

91は、甕の底部である。風化が進んでいるが、外面にナデ調整が施され、底部には板状工具によるナデの痕跡が認められる。

（Ⅳ）原位置を遊離した遺物

堀山遺跡では、合計175点の石器が出土しているが、その大部分は原位置を遊離した遺物であり、確実に遺構に伴う遺物は、SK02出土の例のみである。しかし、石器の多くが縄文時代の所産と思われることから、SK02のもつ意義を考慮しつつ記載をおこなうこととする。ここでは、34点を図示する。なお、個々の石器の計測値および石材については、第３表に記載する。

ナイフ形石器（図版105　S5）

暗灰緑色を呈し光沢をもつ、良質なチャートを用いたナイフ形石器である。下半部を折損している。縦長剥片の腹面側から、急斜度の細かな二次加工を施して、背部を形成している。背面側は、腹面側と同一方向からの二枚の剥離痕によって構成されている。SX02の西側周溝より出土した。

石鏃（図版105　S6～S18）

合計13点を図示する。いずれも原位置を遊離した遺物である。石材はS10・S13を除きサヌカイトによって占められる。

S6は、わずかに凸基となる無茎式石鏃である。１側縁はほぼ直線的であるが、他方の側縁は不規則な凹凸を見せつつ、膨らみを持って仕上げられている。包含層より出土。

S7は、風化の進行した讃岐産サヌカイトを用いている。両側縁とも直線的に仕上げられ、基部は浅く、緩やかな弧状に抉られている。脚端部は円みを持つ。包含層より出土。

S8は、やや厚手の剥片を素材としているため、図左面においては、二次加工が急斜度となっている。両側縁ともほぼ直線的に仕上げられており、基部の抉りはごく浅い弧状を呈する。脚端部は尖る。包含層より出土。

S9は、１側縁が直線的に、他方が顕著な「Ｓ」字状を呈する、左右非対称な石鏃である。基部の抉りは緩やかな弧状を呈するが、脚の形態も左右で著しく異なっている。先端部の剥離痕は、やや風化が浅く折損の結果と考えられる。SX02の西側周溝より出土した。

S10は、先端を欠くため判断が難しいが、やや凹んだ両側縁をもつものと思われる。基部の抉りは浅い三角形状を呈し、脚端部は一方が外側へ張り出すように、一方が尖り気味に仕上げられている。包含層より出土。

S11は、淡紫色を呈するチャートを用いている。両側縁は直線的に仕上げられているが、脚端部に向かってわずかに外方へ開く。基部の抉りは「U」字形を呈し、脚端部は直線的に仕上げられている。表面採集資料。

S12は、両側縁ともに直線的に仕上げられている。基部の抉りは頂部が円みを持つ三角形状で、器長の1/3程度に達している。脚端部は鋭く尖る。包含層より出土。

S13は、両側縁ともに緩やかに凹み、脚端部に向かって下方へ屈折する。基部の抉りは弧状を呈し、器長の1/4程度に至る。上層遺構面精査時に出土している。

S14は、灰色～暗緑灰色を呈するチャートを用いる。両側縁とも浅く緩やかな弧状に凹む。

基部の抉りは頂部が円みを持つ三角形状で、器長の1/4程度に達している。脚端部は、円みをもつ。SX04の西側周溝上部より出土した。

S15は、風化が進行し、流状構造が顕著なサヌカイトを用いている。先端部を折損する。両側縁ともにほぼ直線的に仕上げられている。基部の抉りは頂部が円みを持つ三角形状で、器長の1/3を超えるものと推察される。脚端部は、円みをもって仕上げられる。SD01の埋土上部より出土した。

S16は、厚い剥片を素材としており、全体にやや粗雑な印象を受ける。両側縁は直線的に仕上げられている。基部の抉りは浅い「U」字形を呈し、脚端部は直線的に仕上げられている。

S17は、両側縁ともに直線的に仕上げられている。基部の抉りは頂部が円みを持つ三角形状を呈し、脚端部は尖り気味に仕上げられている。SD04北側で出土した。

S18は、五角形状を呈する凹基無茎式石鏃である。側縁はやや凹凸を見せ、鈍角に屈折して先端に至る。片脚を欠くため判然としないが、脚部は一段、幅を増すようであり、全体に魚形鏃のような印象を受ける。SD01埋土上部より出土した。

石錐（図版105　S19・S20）

S19は、著しく風化が進行したサヌカイトを用いている。両面ともに丁寧な二次加工が施されており、断面は凸レンズ形を呈する。図下端部が、わずかに多角形の断面を呈するため石錐に含めたが、図上半を折損しており、尖頭器の基部である可能性も考慮される。

S20は、ごく浅い風化を示すサヌカイトを用いている。縦長剥片の一端に細かな二次加工を施して、錐部を作出したものであるが、背面側の剥離痕からは、定型的な縦長剥片剥離技術を看取することはできない。側縁および頭部にも、不規則な二次加工が施されている。SD03埋土より出土した。

削器（図版105　S21・S22）

S21は、黒色でわずかに脈状の挟雑物（節理）を含むチャートを用いている。横長剥片の末端部に、腹面側から緩斜度の二次加工を施し、刃部としている。刃部付近の剥離痕の稜線には、わずかながら光沢が認められる。素材剥片は、石材の分割面と思われる節理面を打面としている。背面側は、腹面側と直交する二枚の剥離痕により形成されており、末端部には、石核上の面と思われる自然面をとどめることから、板状の石核から剥離されたものと考えられる。表面採集資料。

S22は、やや粗粒の頁岩を用いている。縦長剥片の側縁から末端にかけて、背腹両面から細かな二次加工を施している。素材剥片の打面部は、２面の剥離痕（または１面の自然面と１面の剥離痕：１面について識別が困難）によって構成され、その稜上を加撃することで剥離がおこなわれている。背面側は４面の剥離痕からなり、その剥離方向から、石核は両面打面であった可能性が高い。表面採集資料。

楔形石器・スポール（図版105　S23～S26）

S23は、サヌカイトを用いている。背面側に広く礫表皮をとどめる剥片を素材とし、上下二辺から剥離が進められており、１側縁に載断面が形成されている。図下方の縁辺は、特に著しく潰れている。包含層より出土。

S24は、略三角形を呈する楔形石器である。右図の右中央に、ポジティブな剥離面をとどめることから、剥片を素材としたものと考えられる。縁辺は一部を除いて顕著な潰れを見せる。SK02の埋土上部から出土した。

S25は、黒灰色を呈する良質なチャートを用いている。厚手の剥片の、相対する二辺が打撃され、両側縁に載断面が形成されている。上層遺構面精査時出土。

S26は、側面に礫の表皮をとどめるサヌカイトを用いている。上・下端が著しく潰れている。上縁辺が、腹面と直交する方向に延びることから、楔形石器のスポールと考えられる。包含層より出土。

二次加工のある剥片（図版105　S27・S28）

S27は、小型の横長剥片の打面部付近に、背・腹両面より急斜度の二次加工を施したものである。見方によってはナイフ形石器に類するが、二次加工によって形成された縁辺およびこれに相対する縁辺ともに、やや不規則な形態をとることから、本器種に含めた。背面側は、多方向からの３面の剥離痕により構成されている。また、二次加工が施されない縁辺には、微細な剥離痕が不規則に付着しており、主たる機能面であったことをうかがわせる。SD02より出土した。

S28は、頁岩を用いている。略三角形を呈する剥片の２側縁に、細かな剥離痕が観察されるが、特に腹面側左側縁に見られる剥離痕は比較的整っている。素材剥片の打面部は、剥離の際に破砕したものと思われる。背面側は２面の剥離面と打面部が破損した際の剥離痕で構成されるが、図左側の剥離面はポジティブな面であり、本剥片を剥離した石核が剥片素材石核であったことを示している。SX02の西側周溝より出土した。

使用痕のある剥片（図版105・106　S29～S31）

S29は、碧玉製の剥片である。両側縁がおおむね平行した、整った形態を示すが、主要剥離面は大きく反っている。背面側には、腹面と同一方向の剥離痕およびこれに対向する方向の剥離痕が認められることと合わせて、尖頭器の器面調整剥片の可能性が考慮される。遺物包含層より出土。

S30は、暗緑灰色を呈する良質のチャートを用いている。ごく小型の剥片であるが、末端部に微細な剥離痕が不規則に付着している。表面採集資料。

S31は、やはり暗緑灰色を呈する良質のチャートを用いている。剥片の１側縁に不規則な剥離痕が付着している。遺物包含層より出土。

石核（図版106　S32～S34）

S32は、風化の進行したサヌカイト製石核である。これ以上の剥離が困難な状態に至った、最終残核と考えられる。剥離痕の状況から。主に図左面が剥離作業面と考えられ、両側縁より小型横長剥片の剥離がおこなわれている。表面採集資料。

S33は、チャートの河川礫を用いた石核である。剥離された面は、緑灰色～灰黄色を呈するが、石核上に広く残されている礫表皮から深さ２～３㎜の付近までは、黄褐色を呈する風化帯となっている。下層遺構検出面より出土。

S33・S34の石核は、後期旧石器時代に属する可能性があろう。チャート礫を素材とし、打面転移を繰り返す例（S33）や、同様の素材で平坦打面を形成する例（S34）は、丹波市七日市遺跡、篠山市板井・寺ヶ谷遺跡、小野市勝手野遺跡などAT下位の石器群において知られており、本遺跡の資料からも技術的類似性を看取することができる。ただし、このような剥片剥離技術はAT上位においても継続していた可能性があることから、詳細な時期を決定する根拠とはなり得ない。

S34は、顕著に葉理が観察される、頁岩の分割礫を用いた石核である。礫表皮を除去した剥離痕を打面とし、幅の広い剥離作業面から、並列して剥片を剥離している。また、剥離作業面を打面として、石核側面からも剥離がおこなわれているが、これが剥片剥離を意図したものか、石核の整形を意図したものかは判然としない。包含層より出土。

ハンマーストーン（図版106　S35）

S35は、チャートの棒状礫を用いたハンマーである。全体によく水磨され、平滑な礫面を見せる。上下両端に打撃痕が密集しており、下端は、加撃によって剥離している。包含層より出土。

砥石（図版106　S36）

S36は、細粒の砂岩を用いている。破損した砥石の断片であるが、少なくとも３面に砥面が認められることから、角柱状の砥石であったものと推察される。表面採集資料。

第３節　小結

今回の調査では、大別して３時期（後期旧石器時代・縄文時代・弥生時代）の遺構ないしは遺物が検出された。以下にその概括を既述する。

１．後期旧石器時代

遊離資料ではあるが、今回出土したナイフ形石器は、技術的特徴から後期旧石器時代に属することは疑いない。本遺跡周辺には、小野市勝手野遺跡、鶴池・逆池遺跡、鴨池遺跡、加西市逆池遺跡、善坊池遺跡など、多数の後期旧石器時代遺跡が知られているが、勝手野遺跡を除きいずれも表面採集資料である。こうした状況は、石器群の様相を明らかにすることを困難にしており、本資料についても、詳細な時期、技術的系譜などに触れることはできない。また石核S32は剥片素材石核であり、後期旧石器時代の瀬戸内地域に通底する特徴を有する資料と考えられる。

２．縄文時代

縄文時代の遺構はわずかにSK02のみであったが、集石墓の検出は、今回の調査区周辺における縄文時代中期（船元Ⅱ式期）の集落の存在を推定するのに十分な資料と言えよう。

また、遊離資料として多数の出土をみた石鏃は、形態および風化度の差異から、数時期の資料を含むものと思われる。形態のみによる石鏃の編年は困難であるが、大阪市長原遺跡における検討（菅　1990）を参照するならば、縄文時代早期～晩期にわたる資料を含む可能性がある。しかし播磨地域における石鏃の編年は、きわめて不十分な状況にあり早晩解決しなければならない問題であり、今後の資料の蓄積が期待される。

３．弥生時代

今回検出された方形周溝墓群は、SX01・03間の溝から出土した土器および木棺３内から出土した大型鉄鏃などから、弥生時代終末期に相当するものと考えられる。相互に溝を共有していることから、築造時期に大きな隔絶はなかったものと推定できるが、これを検証しうるだけの遺物は出土していない。SX04の南において、溝の下底レベルが最も低く、これを共有するSX02・03の溝下底との間に段差を見ること、SX02の形態がSX01・04に影響されているように見えること、SX04のみが墳丘隅に貼石をもつこと等は、築造順に伴う若干の時期幅を孕むことを推測させる状況であるが、詳細な土器型式による検証は、今回の調査成果の中ではおこなえなかった。

註

1　あるいは縄文か。器面劣化のため、識別が困難である。

2　縄文土器については、立命館大学講師矢野健一氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

3　方形周溝墓の溝の長さについては、周溝の掘方外側にあたる位置で計測している。

第３表　堀山遺跡出土・採集石器一覧表

番号	地区	器種	石材	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
S5	SX02西側周溝	ナイフ形石器	Ｃｈ	22.5	11.6	4.6	0.9
S6		石鏃	Ｓｎ	19.0	14.0	3.9	0.6
S7		石鏃	Ｓｎ	12.9	13.5	2.4	0.2
S8		石鏃	Ｓｎ	14.0	17.0	5.0	0.8
S9		石鏃	Ｓｎ	23.7	18.8	4.5	1.4
S10		石鏃	Ｓｎ	12.7	17.5	4.3	0.6
S11		石鏃	Ｃｈ	17.7	13.6	3.0	0.4
S12		石鏃	Ｓｎ	18.7	12.1	3.7	0.4
S13		石鏃	Ｓｎ	24.1	17.6	5.3	1.1
S14		石鏃	Ｃｈ	26.2	19.8	4.1	1.1
S15		石鏃	Ｓｎ	20.0	22.3	4.1	1.0
S16		石鏃	Ｓｎ	26.5	16.9	7.5	1.7
S17		石鏃	Ｓｎ	23.8	20.5	5.6	2.3
S18		石鏃	Ｓｎ	29.5	16.0	3.9	1.3
S19		石錐	Ｓｎ	27.0	12.6	7.2	1.8
S20		石錐	Ｓｎ	30.2	11.3	4.6	1.3
S21		削器	Ｃｈ	25.0	22.9	6.5	4.3
S22		削器	Ｓ	37.0	24.0	8.0	5.2
S23		楔形石器	Ｓｎ	21.2	20.4	8.0	2.7
S24		楔形石器	Ｓｎ	21.4	32.8	5.6	3.6
S25		楔形石器	Ｃｈ	30.1	15.1	10.0	4.7
S26		楔形石器	Ｓｎ	36.0	18.0	14.0	5.2
S27		二次加工ある剥片	Ｓｎ	17.8	22.8	4.5	1.4
S28	SX02西側周溝	二次加工ある剥片		23.0	23.9	5.0	1.8
S29		使用痕ある剥片	Ｃｈ	15.5	18.0	2.9	0.6
S30		使用痕ある剥片	Ｃｈ	29.7	17.6	4.0	1.7
S31		使用痕ある剥片	碧玉	21.9	13.1	6.7	0.9
S32		石核	Ｓｎ	30.0	18.1	9.0	3.9
S33		石核	Ｃｈ	56.2	91.1	44.6	278.5
S34	Ａグリッド	石核	Ｃｈ	49.0	49.0	44.5	126.5
S35		ハンマー	Ｃｈ	123.2	38.2	22.4	169.3
S36		砥石	Ｓ	67.9	23.5	26.5	53.5

第６章　蛭ヶ池ノ尻遺跡・流尾遺跡の調査

第１節　蛭ヶ池ノ尻遺跡の調査

１．立地・検出状況

調査区は状覚山４号墳と同一の尾根上に立地し、４号墳に東接する。調査前は山林であり、伐採の後に約1500㎡を調査対象とした。尾根は標高81.9ｍの丘陵から東側の新村川方向へ派生するものである。高度は状覚山４号墳付近をピークとして、しだいに下降する。

２．遺構

検出した遺構は土坑および溝などである。

溝　尾根の傾斜変換点付近、標高41.7～41.8ｍで検出した。等高線にほぼ平行して尾根を囲むように弧状に延びる。途中尾根稜線付近で一旦途切れるが検出長は約40ｍを測る。南側は調査区内で消滅するが、北側は調査区外へと続いている。幅約0.8ｍ、検出面からの深さは５～10㎝である。

土坑　20基以上を検出した。尾根上の平坦面および緩斜面を中心に分布する。規模や主軸方位は一定でないが、平面形状は概ね楕円形を呈し、規模は長さ2.3～0.8ｍ、検出面からの深さ５～15㎝程度である。

ピット　土坑群の縁辺に疎らに分布する。径0.3～0.4ｍ程度である。検出されたものだけでは建物や柵などの施設は想定しえない。

３．小結

検出した遺構のほとんどは土坑であり、その他の遺構は確認されなかった。この土坑はその状況から判断して墓の可能性もあるが、積極的にそれを裏付ける資料もなく、土器なども全く出土していないため、可能性を指摘するにとどめざるをえない。土坑の分布は溝を東限とし、その西側に集中する。したがってこの溝は遺跡の境界と考えられよう。

なお遺物の出土がないため、各遺構の時期は明確にできない。

第２節　流尾遺跡の調査

１．立地・検出状況

調査区は来住山地から派生した標高81.9ｍの丘陵南東裾に位置する。南側には東西方向に谷が入り、この谷はせき止められてため池（蛭ヶ池）として利用されている。本調査区付近から東側へ派生する尾根上には50～60ｍの距離を置いて状覚山４号墳、蛭ヶ池ノ尻遺跡が所在する。

本地点は分布調査時に土器片を採集していること、蛭ヶ池付近に古墳が存在するとの資料があったため、主に古墳の痕跡の確認を目的に、まずトレンチによる確認調査を実施した。その結果、古墳の痕跡は確認できなかったものの、土坑などの遺構を検出したほか、撹乱坑より残存状態の良好な須恵器短頸壺、土師器把手付甕を採集したことから本発掘調査を行ったものである。

調査区の基本的な層序は、表土の下層に明黄褐色粘質細砂、黄色粘質細砂（地山）と続く。遺構は黄

色粘質細砂上で検出したが、明黄褐色粘質細砂上から切り込むものもある。

2．遺構

柱穴・土坑などの遺構を検出した。遺構は標高46.0ｍ前後の等高線沿いに東西方向に分布する。規模は径0.2～0.7ｍ程度で円形または楕円形を呈する。埋土は黄褐色または黄橙色系の細砂で、調査区西半部で検出した中には、炭混じりのものがある。検出された柱穴だけでは建物などの施設は想定しえない。

確認調時に調査対象範囲内の撹乱坑南壁に土器３点が露頭していた。壁面を精査して遺構の検出につとめたが、層位的に土器の上端を押さえるにとどまり平面的には掘形などは検出しえなかった。さらに撹乱坑内を精査したところ、さらに10点程の土器片を採集することができた。土器を埋納した遺構の可能性、具体的には墳墓を想定するが断定はできない。

3．出土遺物

103は須恵器の甕の破片である。口縁部が全周の３分の１程度残る。卵型の体部に広口短頸の器形である。胴部外面は格子タタキが施したのちナデており、上半はさらにヨコ方向のカキメを施している。頸部には指頭圧痕が薄くみとめられる。内面は同心円タタキが残るが、一部ナデ消されている。104は土師器の甕である。口縁部がいったん直立したのち、大きく外反する。器壁は剥離・摩滅が著しいが、胴部外面は縦に近い右下がりの細かいハケメ、内面は頸部以下に横方向に近い右下がりの同様のハケメが残る。105の舌状把手も同一個体と思われる。把手は俯瞰した形状が三角形に近い薄手のタイプである。いずれも奈良時代中頃の年代が考えられる。

4．小結

遺構がほぼ同一等高線上に位置することから、斜面の土砂流出を防ぐ土留施設などを想定しうるが確証はない。遺構に伴う遺物がなかったため時期は特定できないが、少なくとも近世以前の遺構であろう。

なお、調査区周辺は、田畑の開墾のほか、調査区南側の蛭ヶ池は当初１つだったものが、昭和40年代に上下２つの池に改修されている。このような地形改変により本来の地形や古墳などを含む遺構は消失したものと考えられる。奈良時代の遺構については明確にできなかったが、北側の堀山６号墳に隣接して同時期と推定できる遺構を検出している。いずれも性格は明らかでないが、墳墓と仮定するならば、古墳の築造が停止した奈良時代以降においても、当地では造墓活動が行われていたことになる。

第９図　土器出土状況　（北から）

第７章　まとめ－加古川流域における後半期の横穴式石室について

第１節　石室規模からみた時期別変化

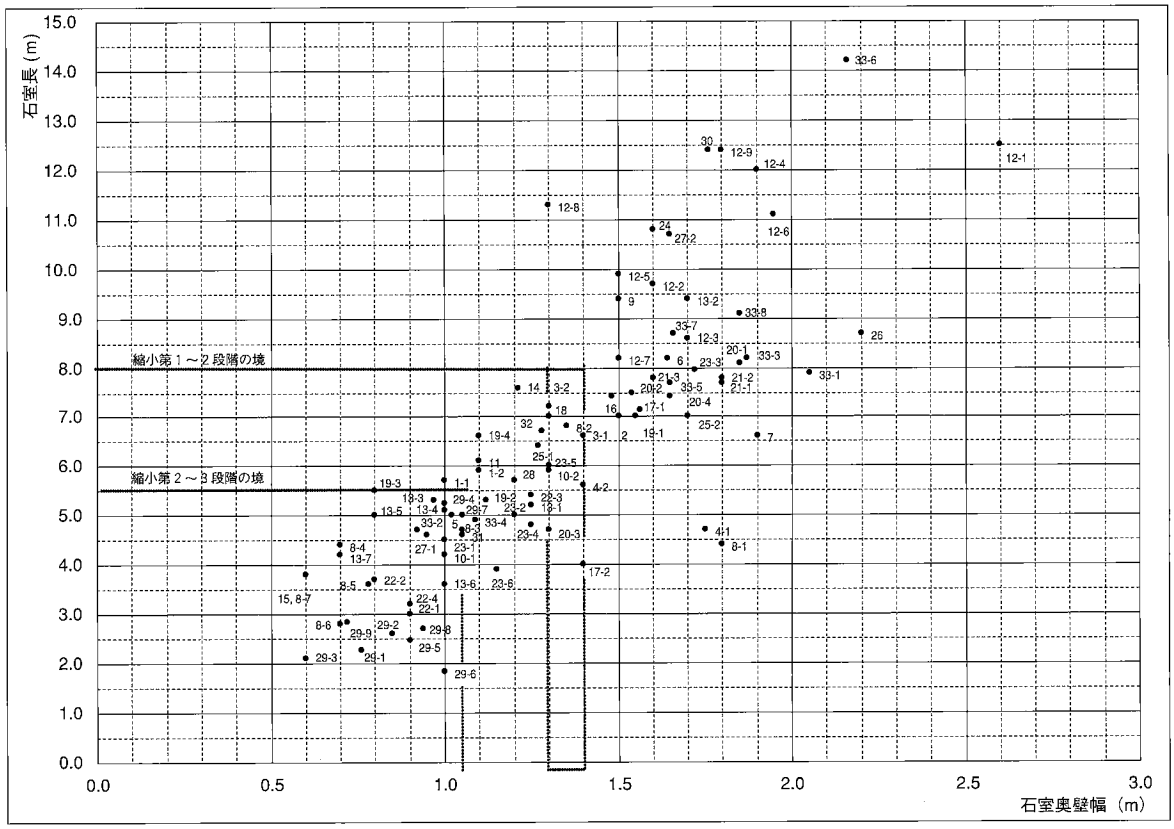
今回調査報告をおこなった状覚山５～17号墳は、終末期群集墳とも表わされる、７世紀後半の古墳群13基の調査となった。それらの墳形は方墳、墳丘は一辺４～8.5ｍと小規模で、石室にいたっては、すべて無袖の横穴式石室で、石室床面奥壁幅1.05ｍ長さ5.25ｍ以下のものであり、「小規模化」あるいは「退化」した石室と表現されるものである。

一般に、古墳時代後期も終末期になると、群集墳の石室は小型化するといわれているが、その過程については言及されたことが少ない。石室形態が無袖式になり、指標に用いる属性が減ることにより、石室構造変化がとらえにくいため（丹羽2001）であろう。そのなかにあって、西口圭介氏は姫路市西脇古墳群の報告において、同古墳群内の石室の規模について全長・幅の具体的数値により分類をおこなった（西口1995）。しかし、無袖式石室についても細分したことおよび各支群での消長に主眼を置いたため、無袖式石室そのものの変化については未消化に終わっている。その後、西播磨の黍田古墳群の報告において横穴式石室の変遷過程が検討されており、ＴＫ217型式を中心としたⅢ期には無袖式となり、小型化も進行し、幅1.3ｍ以下、全長5.5ｍ以下となることが指摘（中浜2000）されている。また、丹羽恵二氏は無袖の石室を全長と幅でのランク分けをおこなっている（丹羽2001）。ただし、大型無袖式石室を主としているため、７世紀以降にあたる規模Ⅲ～Ⅴのランクについての時期的変化等の詳細な検討が行なわれなかったのは残念である。一方、時期別に石室規模の具体的数値を示して、石室幅が縮小することを説いたのは池田征弘氏である（池田2005）。池田氏によれば、丹波市山南町野坂大谷古墳群では、Ⅰ期である12号墳の石室奥壁幅は1.8ｍ、同じく13号墳は1.3ｍであるのに対し、Ⅲ期には22号墳が1.1ｍである以外は0.7～0.8ｍになり、時期が下がるほどに縮小する傾向がうかがえるとした。なお、野坂大谷古墳群Ⅰ期はＴＫ43型式に併行し、Ⅲ期はＴＫ217型式新段階に併行する時期である。

以上のように、近年になってようやく終末期の小規模古墳にも光が射してきたようである。しかし、調査された各古墳群内での石室規模変化にのみ視点が注がれ、他の古墳や古墳群との比較検討といった広い視野で行われることはなかったようである(1)。

そこで、池田氏らの分析をふまえて、以下では状覚山５～17号墳の無袖式横穴式石室の位置付けを行なうため、近隣である加古川流域の既調査古墳・古墳群(2)の石室を中心にみることとする。その方法は、これまでは無袖式石室と有袖式石室を分けて検討されることが多かったが、ここでは、それらにとらわれることなく分析できる指標、すなわち、石室幅と石室長を基準とし、特に石室幅に着眼し分析を行なう。また、石室幅においては計測位置によって異なる数値になることが多いため、奥壁での床面幅の数値を採用し、その数値を比較するために作表した。また、地域的な特徴の比較も考慮して、加古川下流域のみならず、上流の丹波地域も加えることとした。その結果、一定の成果が得られた。

第10図は加古川流域における既調査の後半期横穴式石室(3)について、有袖・無袖の区別なく、横軸を石室床面での奥壁幅、縦軸を石室長として数値の散布状況を図にしたものである。扱った資料は第４表に掲げており、第10図と第４表の古墳番号は同一である。表の右方すなわち、幅が広く長い石室は時期も古く、幅・長さとも規模が小さい石室つまり図左方は時期が新しくなる傾向を示している。つまり、



第10図　加古川流域における後半期横穴式石室の規模散布図（番号は一覧表と対応）

所在地	古墳名		袖	奥壁幅(m)	初葬時期	番号	文　献
篠山市(西紀町)	沢の浦	1号	無	1.0	TK217	1-1	
		2号	無	1.1	TK209	1-2	市橋1985
(丹南町)	桂ヶ谷奥	1号	片	1.5	TK209か	2	村上・仁尾2001
	ずえが谷西	1号	片	(1.4)	TK43	3-1	山本・多賀・仁尾2002
		2号	無	(1.3)	TK209	3-2	兵庫県2002
	庄境	1号	無?	1.75	TK209～TK217	4-1	渡辺・別府ほか1987
		2号	無	1.4	TK209	4-2	輔老・吉田1983
丹波市青垣町	応相寺	1号	無	(1.17)	TK43～TK217		
		2号	無	(1.0)	TK43～TK217		
		3号	無?	(0.7)	TK43～TK217		
		4号	無?	(1.0)	TK43～TK217		
		5号	?	(1.0)	TK43～TK217		
		6号	無?	(0.9)	TK43～TK217		徳原1999
		7号	無	(1.02)	TK217	5	下山2000
丹波市柏原町	東奥	1号	無(立石)	1.64	TK209	6	宮谷・真野ほか1973
	三原	1号	片	(1.9)	MT85か	7	松岡・池田ほか2004
丹波市山南町	野坂大谷	12号	両	(1.8)	TK43古	8-1	
		13号	片	(1.35)	TK43	8-2	
		22号	無	(1.05)	TK217新	8-3	
		26号	無	(0.70)	TK217新～TK46	8-4	
		27号	無	(0.78)	TK217新	8-5	
		28号	無(立石)	(0.70)	TK217新～TK46	8-6	
		29号	無	(0.60)	TK217新～TK46	8-7	大平・池田2005
多可町加美区	奥豊部	1号	無	1.5	TK43～TK209	9	安平1999
多可町中区	女夫岩	1号	無	1.0	TK217後半	10-1	
		2号	無	1.3	TK209	10-2	宮原ほか1993
	石垣山	2号	無?	1.1	TK217前半	11	中村・藤田ほか1993
	東山	1号	片	2.6	TK209～TK217古	12-1	
		2号	片	1.6	TK217古	12-2	
		3号	片	1.7	TK217古	12-3	菱田ほか編1999
		10号	両	1.9	TK217中	12-4	
		11号	?	1.5	TK217新	12-5	
		12号	無(立石)	1.95	TK217古	12-6	菱田ほか編2001
		13号	片	1.5	TK217新	12-7	菱田ほか編1999
		14号	片?	(1.3)	TK217新～TK46	12-8	菱田ほか編2001
		15号	両	1.8	TK217新～TK46?	12-9	菱田ほか編1999
西脇市	坂本	1号	無	(1.25)	TK217中	13-1	
		2号	片?	1.7	TK209	13-2	
		3号	無	0.97	TK217中	13-3	
		4号	無	1.0	TK217古	13-4	
		5号	無	0.8	TK217中	13-5	
		6号	無	1.0	TK217新	13-6	
		7号	無	0.7	TK217古	13-7	岸本2001
	緑ヶ丘		片	1.21	TK217古	14	岸本1995
	高松	7号	無	(0.6)	TK46	15	岸本2003
加東市滝野町	四ツ辻	5号	無	1.48	TK209	16	森下1989
	黒石山	10号	片	1.56	TK209	17-1	
		11号	片	(1.4)	MT85	17-2	森下・宮原1986
加東市社町	吉馬櫛坂	A1号	無(立石)	1.3	TK209～TK217	18	
	吉馬滑	A号	片	1.55	TK43～TK209	19-1	
		B号	無	(1.12)	TK43	19-2	
		C号	無	(0.8)	TK209～TK217	19-3	
		D号	片?	1.1	TK43～TK209	19-4	中村ほか1990a

所在地	古墳名		袖	奥壁幅(m)	初葬時期	番号	文　献
加東市社町	牧野小丸山	1号-I	片	(1.85)	TK43	20-1	
		1号-II	片	(1.54)	MT85～TK43	20-2	
		2号	無	1.3	TK43古	20-3	
		3号	片	1.65	TK43古	20-4	中村ほか1990b
	上三草	7号	片	(1.8)	TK209	21-1	
		8号	片	(1.8)	TK209	21-2	
		9号	片	(1.6)	TK209	21-3	森下1993
小野市	中番	4号	無?	(0.9)	TK217	22-1	
		8号	無(立石)	(0.8)	TK217	22-2	
		23号	無?	(1.25)	TK217中	22-3	
		28号	無	(0.9)	TK217中	22-4	藤岡・櫓爪1969
	勝手野	1号	無	1.0	TK217新～TK46	23-1	
		2号	無	1.2	TK217中	23-2	
		3号	片	1.72	TK209～TK217古	23-3	
		4号	無	1.25	TK217新～TK46	23-4	
		5号	無	1.3	TK217中	23-5	
		6号	無	1.4	TK217新か?		
		7号	無	1.15	TK217古	23-6	
		8号	無	1.0	TK217か?		井守・久保ほか2002
三木市	窟屋	1号	無(立石)	(1.6)	TK43～TK209	24	大平・池田2002
	年ノ神	1号	片?	(1.27)		25-1	
		2号	両?	(1.7)		25-2	長濱・松岡ほか2000
	正法寺	1号	両	(2.2)	TK43～TK209	26	是川1970
加西市	ヤクチ	2号	無	0.95	TK209～TK217	27-1	
		4号	片	1.65	TK43	27-2	立花1985
	愛染		無	(1.2)	TK217新～TK46	28	加西市・奈良大学1991
	状覚山	5号	無	(0.76)	TK46～TK48	29-1	
		6号	無	0.85	TK48～MT21	29-2	
		7号	無	0.88	TK48～MT21?		
		8号	無	0.60	TK48～MT21	29-3	
		9号	無	0.50	TK48～MT21?		
		10号	無	1.00	TK46～TK48	29-4	
		11号	無	0.90	TK48～MT21	29-5	
		12号	無	1.00	TK48	29-6	
		13号	無	0.70			
		14号	無	1.05	TK46～TK48	29-7	
		15号	無	0.96			
		16号	無	0.94	TK48～MT21	29-8	
		17号	無	0.72	TK46～TK48	29-9	本書
加古川市	志方二子塚		片?	(1.76)	TK43～TK209	30	岡本1982
	奥新田東	2号	無(立石)	1.05	TK46～TK48	31	岸本・高木2001
	大亀谷山		両	1.28	TK217新～TK46(?)	32	柏原・深井2001
	池尻	5号	両	(2.05)	TK209	33-1	
		7号	無	0.92	TK217古	33-2	
		8号	両	1.87	TK43前後	33-3	
		9号	無	(1.09)	TK217	33-4	
		11号	両?	1.65	TK209前後	33-5	島田・上田ほか1965
	(升田山)	15号	両	2.16	TK43～TK209	33-6	小田木1996
		17号	両	1.66	TK43～TK209	33-7	
		18号	両	1.85	TK209前後	33-8	上田ほか1969

第４表　加古川流域における既調査の後半期横穴式石室一覧　（ ）付数値は図上又は推定値

これまで指摘されていたように、時期が降れば規模が縮小するという傾向が加古川流域においてもうかがえることが証明された。このことをさらに詳細に見てみると、ＴＫ43型式期～ＴＫ209型式期以降の石室床面奥壁幅は2.2ｍを超えることがほぼなくなる（縮小第１段階）が、石室幅が1.3ｍを下回るものはまだ非常に少ない(4)。しかし、続くＴＫ209型式期からＴＫ217型式期に変わる頃からは、石室奥壁幅が1.3～1.4ｍ以下（縮小第２段階）となる(5)。また、第２段階以降はさらに縮小し、ＴＫ46型式期以降には1.05ｍを超えるものが無くなる（縮小第３段階）。また、縮小第２段階には石室幅が狭まるのと同時に長さについても縮小傾向がみられ、石室長8.0ｍを下回るようになり、第３段階には5.5ｍ以下となる。一方、石室形態のうち、有袖・無袖の別については、縮小第２段階においては、立石によって玄室・羨道を区別しているものもあるが、明確な袖部を有するものがほぼ認められない(6)ようになり、一気に無袖化が進行する。なお、無袖の石室は古くＴＫ43型式期以降に認められる。ちなみに、現段階では、玄門立柱石を有する両袖・片袖式石室もＴＫ43型式期あたりから認められるようである。

以上、加古川流域の後半期横穴式石室は、時期が降るにしたがって縮小することが、具体的数値をもって示すことができた。ここでは縮小の３段階を設定したが、状覚山５～17号墳においても縮小第３段階の典型を示した。また、この縮小化段階設定は状覚山古墳群内にとどまらず、広く丹波地域も含めた加古川流域にあてはまることも判明したが、他の地域、西播磨については未検討である。ただし、姫路市太市中古墳群のうち、小支群を形成している２・８・10号墳が調査され、ＴＫ217型式期において石室奥壁幅1.55ｍの２号墳、同1.32ｍの８号墳、同1.12ｍの10号墳の順に築造されたと考えられている（柏原・井守・深井2003）。２号墳の石室幅数値がやや大きいが、ＴＫ217型式でもきわめて古い段階の土器と思われることから、加古川流域の縮小段階があてはまるようである。また、発掘調査された例ではないが、富山直人氏の分析（富山1999・2004）によると、赤穂市木虎谷古墳群においては２号墳が最初（ＴＫ43～ＴＫ209型式期）に築造され、その後石室規模が縮小するとされる。２号墳の石室幅は2.2ｍ、次に築造された１・７～11・14号墳の石室幅が1.73～1.35ｍ、その後築造された４・６・12・13号墳の石室幅は1.17～0.9ｍとなっている。具体的な時期は不明であるが、規模縮小の点で、富山氏の推定と今回の分析とが一致している。

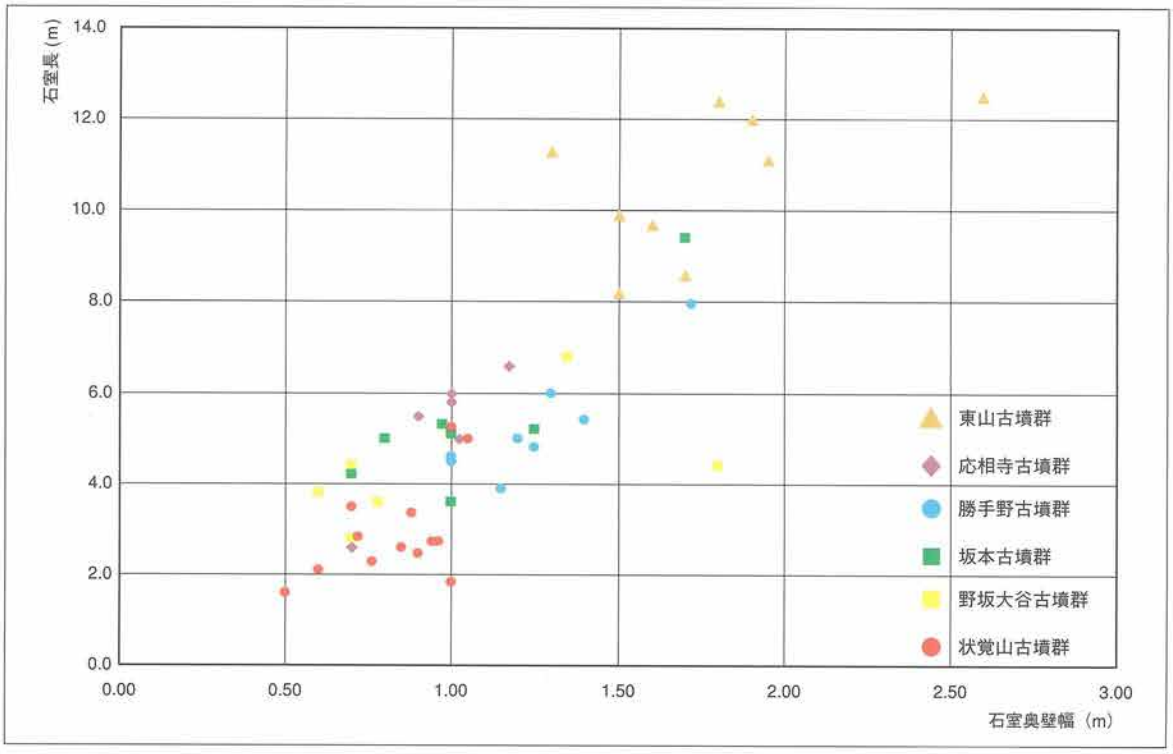
さて、話を加古川流域に戻そう。ここで特筆すべきは多可郡中町東山古墳群（菱田ほか編1999・2001）である。発掘調査の結果、ＴＫ209型式併行期に構築されたと考えられる１号墳の石室を嚆矢に、ＴＫ217型式併行期からＴＫ46型式併行期に構築された２・３・９～15号墳の石室すべてについて、これまで述べてきた縮小段階が全くあてはまらない巨大な石室となっている。つまり、東山古墳群のうち、発掘調査されたすべての古墳において加古川流域の他の古墳とは石室規模の点で大きく異なっている。この現象をどう見るかについての答えは用意できていないが、東山古墳群にのみ認められる特異な現象として大きな存在となっていることはまちがいない。

なお、規模縮小の数値から大きく逸脱するものに、加古川市地蔵寺古墳（奥壁幅1.785ｍ）、加西市後藤山古墳（奥壁幅2.80ｍ）・石櫃戸古墳（奥壁幅約1.8ｍ）、多可郡中町村東山古墳（奥壁幅1.62ｍ）がある。いずれも７世紀中葉以降と考えられる石室であるが、ＴＫ46型式期頃以降の石室でありながら、奥壁幅の数値が縮小第３段階の1.05ｍをはるかに凌駕し、他の古墳の石室と比べると格段に大きく、縮小化とはかけ離れて大きな数値となっている。これらの石室は、その規模もさることながら、奥壁のみならず側壁も巨石や切石で構築された一群であり、時期的にも官人墓と位置づけうる可能性がある。

第２節　古墳群内の造墓パターン

状覚山５～17号墳のうち、10号墳と14号墳の石室規模が他の古墳よりも大きいことおよび古墳群内では初期に築造されたことが判明した。それを石室奥壁幅と石室長を軸にして散布状況を図にしたのが第11図である。この図をみれば、状覚山５～17号墳内において10・14号墳が石室長・幅ともに群を抜いた規模であることが読み取れる。具体的には、10・14号墳は石室長５ｍ、石室奥壁幅１ｍをそれぞれ超えているが、他の古墳では石室長3.5ｍ、石室幅１ｍ以下となっており、石室長においてその差が顕著である。また、10号墳では開口部に立柱石を有するやや複雑な構造の石室であり、わずかであるが、石棺内には管玉・刀子といった群内の他の古墳では認められない副葬品を有していた。ただし、副葬品の点については、他の古墳で石室・石棺が盗掘・撹乱を受けているものも存在するため、確定的ではない。状覚山５～17号墳のうち、10・14号墳以外ではそれぞれの差を明確にできる状況ではないようである。また、その分布状況から５～10号墳の支群と11～17号墳の支群に大きく分けることが可能であるが、10・14号墳はそれぞれの支群に分かれて存在しており、なおかつ10・14号墳間では石室規模がほぼ同じであることから、古墳群内の造墓単位としては、状覚山５～17号墳全体としてよりも各支群単位に分けて考えるほうがよさそうである。そこで、状覚山５～17号墳のように、古墳群内で最初に築造されたと考えられる古墳の規模や支群との関係および副葬品の多寡の問題について、加古川流域の同時期の古墳群について同様の作業を通じて検討を深めてゆくことにする。

状覚山古墳群とは距離的・時期的にも近い小野市勝手野古墳群の石室規模を散布図にしたのが第11図の水色である。勝手野古墳群はＴＫ209型式期～ＴＫ46型式期に築造されたと考えられる８基の古墳が調査された（井守・久保ほか2002）。そのうち、ＴＫ209～ＴＫ217型式古段階の土器を出した３号墳が最初に築造されたことが判明している。３号墳は石室長7.95ｍ、奥壁幅1.72ｍで群中最も大きく、石室形態も他の古墳が無袖式であるのに対し片袖式となり、複雑な石室構造を採用している。また、３号墳からは



第11図　加古川流域における後半期古墳群の石室規模比較図

金銅張杏葉や鏡板など豊富な馬具が出土し、５号墳からも出土しているが、「３号墳にくらべると５号墳は見劣りがする」（井守・久保ほか2002）。３号墳以外の石室規模は、奥壁幅1.0～1.4ｍ以下、石室長3.9～６ｍ程度までで、３号墳とは幅で30㎝以上、長さで２ｍ近くの差があり、馬具や石室形態を加味すればその差が格段に大きなものであることは否めない。

状覚山古墳群から加古川を北に遡った西脇市に所在する坂本古墳群では、ＴＫ209型式期からＴＫ217型式期にかけて築造された７基の古墳の調査が行なわれ（岸本2001）、そのうちの２号墳が最初に築造されたと考えられている。２号墳の石室のみ片袖式石室と推定され、その規模も石室長9.4ｍ、石室奥壁幅1.7ｍを測る。他の１・３～７号墳は無袖式石室で、石室長3.5～5.5ｍ程度、石室奥壁幅が0.7～1.25ｍと石室長で４ｍ、奥壁幅で45㎝の差が２号墳との間に生じている。坂本古墳群は勝手野古墳群とほぼ同時に築造された古墳群であり、坂本２号墳の石室長は勝手野３号墳を1.5ｍ近く上回っているが、奥壁幅ではほぼ同じ値である。また、１・３～７号墳は勝手野古墳群より若干小さいものの、よく似た規模構成となっている。坂本２号墳では馬具等の副葬品が出土しておらず、１・３～７号墳との差は石室規模と形態に限られるようであるが、その規模の差は先にみた勝手野古墳群における３号墳とその他の古墳群との差よりも大きいものであることから、馬具等の副葬品が出土していなくとも坂本古墳群中における２号墳とその他の古墳との間には歴然とした差が存在していることは間違いない。

次に、加古川をさらに遡った丹波市野坂大谷古墳群では、ＭＴ85～ＴＫ46型式期に築造された群集古墳６基が調査（大平・池田2005）された結果、12号墳が最初に築造され、次いで13号墳がＴＫ43型式期に初葬が行なわれたことが判明した。12号墳は石室奥壁幅1.8ｍの両袖式石室で、片袖の13号墳の石室奥壁幅は1.35ｍを測り、両古墳で馬具が出土している。その後ＴＫ209型式期の古墳を欠くが、ＴＫ217～ＴＫ46型式期に築造された26～29号墳の石室奥壁幅は0.68～0.8ｍで、すべて無袖の石室となり、その規模は状覚山古墳群の範疇にあり、時期も近い。野坂大谷古墳群では、多くの未調査古墳が谷中に群集して存在していることと中間時期を欠くなど不明な点が多いが、ひとつの支群内と考えられる６基の古墳のうち、最初に築造された古墳は規模が大きく石室形態も複雑で、馬具を有していることを述べておく。

同じく丹波市の応相寺古墳群では、ＴＫ43～ＴＫ217型式期に埋葬された、谷中の古墳群７基が調査され（徳原1999、下山2000）、その報告にもとづき石室規模を図にまとめた。最も規模が大きい石室は１号墳であり、奥壁幅で20㎝弱、石室長では約60㎝の差をもって２～７号墳よりも大きな石室である。詳細な時期が不明なため、１号墳が最初の築造とはいいきれないが、可能性が高いことを指摘しておきたい。ただし、出土遺物による差は認められない。また、古墳群の石室規模はＴＫ43～ＴＫ209型式期としては小規模であり、ＴＫ217型式期の規模を示すことも付記しておきたい。

前節でみたように、時期により石室規模縮小化の傾向はあるものの、その縮小化は漸移的なものである。ところが、古墳群中最初に築造されるのは、各縮小段階における最大ともいえるほどの規模を有する、最も大きな石室であり、後続する古墳が最初に築造された石室を凌駕することはなく、その規模差は時期差による縮小傾向よりも大きく、歴然としている。このように、時期が降るにつれて石室が小規模化する大きな流れのなかで、古墳群築造の契機となった古墳は大きな石室規模をもち、その後築造される古墳の石室規模は最初に築造された石室とは明確な差をもって小規模となる。これが加古川流域における後半期古墳群内の築造パターンであろう。

さて、古墳群内において最初に築造された古墳について、菱田哲郎氏は、東山古墳の分析を通じて、「東山古墳群では盟主墳―従属墳という身分表徴のための造墓原理が働いていて、坂本古墳群で代表され

る一般的な家族墓では、そのような原理はあまり働いていないと言ってよいだろう」（菱田2001）と述べ、西脇市坂本古墳群では「階層性を示す明確な規範を看取することはできず、２号墳を盟主墳、その他を従属墳という原理で捉えることが困難であ」り、「大型の２号墳は造墓活動の契機となった家族の墓を示すと見た方がよいであろう」（菱田2001）と、坂本２号墳の位置付けを低く見積もっている。小野市勝手野古墳群の報告において、井守徳男氏は勝手野３号墳の位置付けについて、「盟主墳的位置」と微妙な用語を使用している（井守2002）が、この評価を受けてのことと推察される。一方、他地域に目を転じると、芦屋市八十塚古墳群や宝塚市長尾山古墳群について、「それぞれの群を形成する支群のなかに、際立って大きな墳丘もしくは横穴式石室を有する古墳にあっては、それらを家父長的戸長の墓と見ることができ、これを中心として墓域が形成される」（直宮2002）と、積極的に評価しようとする意見もある。

そこで、東山古墳群について報告書（菱田ほか編1999・2001）から上記の検討を行ない、第11図に示した。その結果、古墳群中最初に築造されたと考えられる東山１号墳の石室は、他の２・３・10～15号墳とは大きくかけ離れた規模を有しており、１号墳のみ突出して大規模である。また、９・10・12・15号墳と２・３・11・13・14号墳との間に規模の小差がありそうである。その点は置くとしても、東山１号墳のみ突出した規模である点については、ＴＫ209～ＴＫ46型式期に築造された加古川流域の古墳の石室規模とはかけ離れて大きいにもかかわらず、さきにみた後半期古墳群内の築造パターンと合致する。つまり、東山古墳群のみが加古川流域の他の古墳・古墳群の石室規模と比較して、非常に大きいことが、特異的ともいえるほどの特徴となっているのである。そこで、東山古墳築造契機となった１号墳被葬者を盟主と呼び、坂本古墳群２号墳の被葬者を盟主でないとするならば、東山１号墳の被葬者以外には、既調査の加古川流域における後半期古墳群内には盟主と呼べる人物は皆無であることになる。ここはやはり、東山１号墳および東山古墳群築造主体者集団を特殊と考えるべきで、菱田氏が東山古墳群の被葬者像について、「北播磨地域において最も上位の階層に属していたと推測」（菱田2002）されるように、たとえ範囲を北播磨からもう少し広げても、東山古墳群ほど突出した石室規模を有する古墳群は見当たらないことから、菱田氏の評価が正しいことを裏付けていると思われる。そこで、東山古墳群以外のこれら古墳群の築造契機となった主体については、東山古墳群よりも下層にあるものの、古墳群築造可能集団として一般的な家族墓より上層に位置付け、古墳群・支群中の突出した規模の勝手野３号墳や坂本２号墳、状覚山10号墳、状覚山14号墳について、各古墳群あるいは支群の築造主体者集団の盟主と考えたい。また、野坂大谷12・13号墳、応相寺１号墳についてもその呼称をあてはめることは可能であろう。

以上、加古川流域の後半期古墳群について造墓原理とも呼べるパターンを抽出した。このパターンが他地域についてもあてはまるかどうかは未検討であるが、富山氏が分析（富山1999・2004）を行なった赤穂市木虎谷古墳群においては、前節でみたように、最も規模が大きい２号墳がＴＫ43～ＴＫ209型式期に最初に築造されたようであるが、その後に築造された古墳群内の石室規模は２号墳を大きく下回り、その差は石室幅で50㎝近くから1.3ｍにも達する。発掘調査を伴わないこの一例をもって、西播磨においても同様の造墓パターンであると言い切ることはできないが、少なくとも同様のパターンを示す古墳群が存在している可能性が高いことは指摘できるであろう。

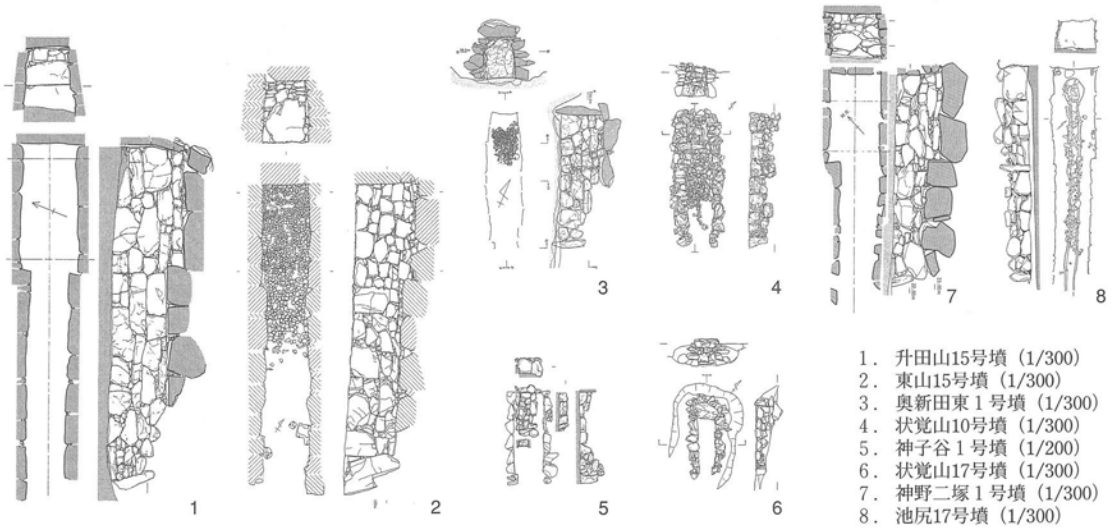
第３節　石室開口部の立石について

状覚山10号墳の石室開口部では両側に柱状の石を立てて石室端としており、その石室内側には小さな

塊石を積み上げていた。これと似たような構造は状覚山５・６・17号墳においても認められた。ただし、６号墳では柱状の石を立てていたが、側石１段分の高さ止まりであり、５・17号墳ではやや幅が広く低い石材を石室開口部に縦方向に置いていた。10号墳の省略・簡略形の可能性も考えられる。なお、他の部分の側壁はいずれも横積みとなっている。また、６・17号墳では、10号墳と同じように立石の石室外側の面が石室奥壁側に傾いている。このような石室開口部の立石で類似するものとしては、羨門立柱石と呼ばれるものがある。羨門部の立柱石については小中美幸氏が注目し、東山15号墳の類例を平荘湖古墳群の升田山15号墳や池尻16号墳に求め、東山15号墳の構造は平荘湖古墳群からの影響であろうと考えた（小中1999）。その後、中浜久喜氏（中浜2002）や丹羽恵二氏（丹羽2002）が類例を調査し、加古川流域を中心として分布し採用されていることが明らかにされている。丹羽氏は11例、中浜氏によれば12例を挙げ、讃岐地方などとの技術交流の結果生み出されたとの考えに及んでいる。

中浜・丹羽両氏が類例とした羨門立柱石をもつ石室は、その名が示すとおり、両袖や片袖式といった有袖式石室の羨門部両側に存在するもののみ類例を挙げており、玄室や羨道部の区別がない無袖式石室のものについては類例として認められていない。無袖の石室端に存在する立石は袖石としての機能や袖石が退化した可能性も考えられるため、立石の機能について検討の必要があるが、石室端に存在する現象を重視し、無袖式石室の開口部に認められる立石を「開口部立柱石」あるいは「開口部立石」と新たな呼称を設け、羨門立柱石とは分離して類例を求めたのち、両者の関係について検討してゆきたい。

開口部立石は状覚山古墳群以外には加古川市奥新田東１号墳（岸本・高木2001）、加西市愛染古墳（加西市・奈良大学1991）などがあり、状覚山10号墳と同様、高い立柱石を開口部端に設置している。奥新田東１号墳では側石３段分にも達する立柱石を垂直に立てているが、立柱石から外側の側壁には石を積んだ形跡が認められない。愛染古墳では片側しか残存していないが、側石２段以上の高い柱状石を２石連続して立てており、立柱石は状覚山10号墳と同様、石室奥壁側に傾斜させている。また、三木市正法寺３号墳（松村・小網ほか2000）の開口部には、石室内面が方形に近いが、側石２段目上部に達する大き目の石材を置いており、立石の開口部側ラインが奥壁側に若干傾斜している。一方、状覚山10号墳の簡易・省略型と考えられる状覚山５・６・17号墳のように低い石材を石室開口部に縦方向に置いている例には、加古川市神子谷１号墳（岡本1996）があり、状覚山と同様に小規模な石室であるが、片側は側石３段分にも達する柱状石を垂直に立てている。ただし、立石の高さは50㎝未満である。



第12図　羨門立柱石・開口部立柱石を有する石室および類似する石室

これら開口部立石はいずれも石室開口部の端にあって、羨門立柱石においてよく言われるのと同様に、石室の正面観を整えるという視覚的な効果が考えられると同時に、横積みの石室端部を崩れにくくし、安定させるという機能的な面も考慮すべきと思われる。また、内側に向かって傾いているものが多いことも機能面から考えれば納得できよう。したがって、このような視覚的・機能的見地からすれば、羨門部立柱石と同様と思われる。さらに、石室奥壁側に傾斜している立石や、石室外側の面が石室奥壁側に傾斜している立石の例が羨門立柱石においても多く認められることも、開口部立石との類似性を示している。なお、石室の正面観を整えるという視覚的な効果が考えられる開口部の立石として、有袖式のものに姫路市塩淵３号墳（深江・服部1999）・加古川市神野二塚古墳前方部とされる石室（高野1996）・加古川市池尻17号墳（上田ほか1969）例があり、加古川市池尻10号墳例（島田・上田ほか1965）もその可能性がある。また、加西市ヤクチ４号墳（立花1985）も開口部端に積み上げられた小塊石を除外すれば、類例に含まれるであろう。

次に羨門立柱石の機能のひとつとして、扉石を伴う閉塞施設に関連する構造であると考えられている（中浜2002）が、開口部立柱石を伴う石室において扉石は未検出である。また、状覚山５・６・17号墳例の簡易・省略形と考えられるものについては、塊石を積み上げて閉塞しており、扉石ではない。ただし、開口部立柱石を伴うすべての石室が扉を伴わないとは言い切れず、簡易・省略形とは分けておく必要があるかもしれない。そこで、立石や立柱石のうち高いものと、簡易・省略形と考えられる低いものとを分けておきたい。その境は限定しにくいが、高さ80㎝程度とし、塊石を積み上げて閉塞するものは開口部立石の低いものに認められることも指摘しておく。一方、羨門立柱石は規模の大きい古墳に採用されている（中浜2002、丹羽2002）ようであるが、この点も開口部立石をもつ古墳とは異なっている。

開口部立柱石はＴＫ217新段階～ＴＫ46型式期以降に、加古川流域南部の加古川市・三木市・加西市域において認められる。また、簡略形もやや遅れてＴＫ46～ＴＫ48型式期に採用されている。一方、羨門立柱石はＴＫ43～ＴＫ209型式期の升田山15号墳が加古川流域での初現（中浜2002）とされ(7)、ＴＫ217新段階～ＴＫ46型式期の東山14・15号墳まで続いている。時期的には羨門立柱石に続いて開口部立柱石が出現しており、全期間にわたる重複や途切れが認められない。また、前節でみたようにＴＫ217型式期から石室形態が有袖から無袖へと変化する動きと連動している。採用される地域が縮小し、大型古墳に採用されるとは限らなくなるものの、羨門部立柱石と開口部立柱石が同一の系譜にあると考えられる。そのことは視覚面および石室端を安定させる機能面からもうかがえるであろう。

初期の羨門立柱石が大型古墳に採用され、扉石を伴う閉塞施設に関連する構造であるとしても、定着後には機能分化や形骸化が起こることも考えられる。すなわち、塊石による閉塞が行われた簡略形の開口部立柱石においては、視覚面が重視され機能面が欠如した結果であると推定され、羨門立柱石が小型古墳の無袖式石室にも採用され、開口部立柱石となるのが定着後であることも、このような変容の結果と推定することができよう。したがって、羨門立柱石と開口部立柱石が同一系譜にあり、今後両者がまとめられる可能性を示唆しておきたい。

註

(1)2001年に行われた播磨の横穴式石室の研究集会の発表（中浜2002、丹羽2002）においても、ＴＫ217型式期以降の変化については石室構造に主眼が置かれ、特徴のある石室以外は播磨地域で数多く調査されている一般的な終末期の小型横穴式石室の規模変化については言及されていない。

(2)発掘調査が行われていない場合、初葬時期や横穴式石室構築時期の判断に誤りが生じるおそれがあるためである。また、現在までに多くの古墳が調査されており、今回のような限られたデータによる分析には耐えうるだけの資料が揃っていると判断したためである。

(3)ここではＴＫ43型式併行期以降の資料を主として扱った。これは、定型化する前の前半期横穴式石室においては、形態・規模などのばらつきや地域的な偏りが多く、目的にそぐわないためである。

(4)社町吉馬滑Ｂ・Ｃ・Ｄ号墳（表番号19-2～4）や加西市ヤクチ２号墳（表番号27-1）および篠山市沢の浦２号墳石室（表番号１-２）のように奥壁幅が1.3ｍを下回るものも小数存在するが、無袖がほとんどである。

(5)加古川市大亀谷山古墳（表番号32）、三木市年ノ神２号墳（表番号25-2）、篠山市庄境１号墳（表番号４-1）石室のように奥壁幅の広いものも例外的に存在する。

(6)西脇市緑ヶ丘古墳（表番号14）は片袖だが、ＴＫ217型式でも古い段階であるためであろう。また、先述の大亀谷山古墳石室は袖幅15㎝と僅かながら明確に突出しており、奥壁幅も広い。同古墳からはＴＫ217型式新段階以降の須恵器が出土しているが、石室構築時期はもう少し遡る可能性を考えておきたい。

(7)ただし、同じく羨門立柱石を有する池尻16号墳の方が升田山15号墳よりも若干時期が遡る可能性が考えられる。

参考文献

池田征弘2005「古墳群について」『野坂大谷古墳群－西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会

市橋重喜・池田正男ほか1987『沢の浦古墳群－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－』兵庫県教育委員会

井守徳男2002「勝手野古墳群の築造過程」『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会

井守徳男・久保弘幸ほか2002『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会

上田哲也ほか1969『印南野－加古川工業用水ダム古墳群発掘調査報告その２－』加古川市教育委員会

太田宏明1999「「畿内型石室」の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第１号（通巻181号）

大平茂・池田征弘2002「窟屋１号墳」『平成13年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

大平茂・池田征弘2005『野坂大谷古墳群－西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会

岡崎正雄ほか1993『箱塚古墳群－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XXⅡ－』兵庫県教育委員会

岡本一士1982「志方町二子塚古墳の調査」『加古川市埋蔵文化財調査集報Ⅰ』加古川市教育委員会

岡本一士1996「神子谷古墳群・カメ焼谷古墳群」『加古川市史　第４巻　史料編Ⅰ』加古川市

小田木治太郎1996「升田山15号墳」『加古川市史　第４巻　史料編Ⅰ』加古川市

加西市遺跡調査会・奈良大学1991『愛染古墳発掘調査現地説明会資料』

柏原正民・井守徳男・深井明比古2003『太市中古墳群－一般国道29号改良事業発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会

柏原正民・深井明比古2001『大亀谷山古墳－山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXⅢ－』兵庫県教育委員会

岸本一郎1995『緑ヶ丘古墳発掘調査報告書』西脇市教育委員会

岸本一郎2001『坂本古墳群－西脇公園山麓開発に伴う横穴式石室墳の発掘調査－』西脇市教育委員会

岸本一郎2003「高松古墳群」『西脇市古墳調査集報』西脇市教育委員会

岸本一宏・高木芳史2001『奥新田東古墳群－山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXV－』兵庫県教育委員会

喜谷美宣・真野修ほか1973『柏原町東奥１号墳・峯田古墳発掘調査報告書』兵庫県教育委員会

口野博史1985「舞子古墳群東石ヶ谷１号墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

小中美幸1999「東山古墳群の横穴式石室について」『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

是川長1970「考古学上からみた三木地方の古代／加古川流域須恵器編年」『三木市史』三木市（正法寺１号墳）

佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築にむけて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号

島田清・上田哲也ほか1965『印南野－加古川工業用水ダム古墳群発掘調査報告－』加古川市教育委員会

下山文隆2000「応相寺遺跡・応相寺古墳群（第２次）」『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅲ』氷上郡教育委員会

輔老拓治・吉田昇1983『近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告（１）－庄境２号墳－』兵庫県教育委員会

第２回播磨考古学研究集会実行委員会2001「播磨の横穴式石室実測図集成」『第２回播磨考古学研究集会資料集』

高瀬一嘉編1995『西脇古墳群－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－』兵庫県教育委員会

高野政昭1996「二塚１・２号墳」『加古川市史　第４巻　史料編Ⅰ』加古川市

立花聡1985『ヤクチ古墳群－県営西在田地区農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告－』加西市教育委員会

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

丹治康明・橋詰清孝1994『高塚山古墳群発掘調査概要』神戸市教育委員会
徳原多喜雄1999「応相寺遺跡・応相寺古墳群」『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅱ』氷上郡教育委員会
徳原多喜雄2003「谷川遺跡群（谷川踊場遺跡・谷川東山古墳群）」『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅴ』氷上郡教育委員会
富山直人1999「兵庫県千種川流域の横穴式石室について－支流矢野川流域を中心として－」『古代文化』第51巻第11号（通巻第490号）
富山直人2004「横穴式石室の諸段階とその地域性－初期国家再編過程への一視点－」『古代文化』第56巻第９・10号（通巻第548・549号）
直宮憲一2002「西摂における群集墳の築造とその展開」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究室
永井信弘1995「播磨における古墳時代須恵器の変遷／まとめ」『小谷遺跡（第６次）－屋内ｹﾞｰﾄﾎﾞｰﾙ場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』加西市教育委員会
中浜久喜2000「黍田古墳群における横穴式石室の構造と変遷」『山津屋・黍田・原』揖保川町教育委員会
中浜久喜2002「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨－第２回播磨考古学研究集会の記録－』第２回播磨考古学研究集会実行委員会
長濱誠司・松岡千寿ほか2002『年ノ神古墳群－山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXⅥ－』兵庫県教育委員会
中村弘・藤田淳ほか1993『石垣山古墳群・石垣山遺跡－余暇村公園都市計画公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会
中村浩ほか1990a『社・吉馬－古窯跡群等の発掘調査報告書－』吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会
中村浩ほか1990b『社・牧野－古窯跡群等の発掘調査報告書－』牧野古窯跡群埋蔵文化財調査会
西口圭介1995「西脇古墳群の構造について」『西脇古墳群』兵庫県教育委員会
丹羽恵二2001「多可郡における大型無袖式石室について」『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
丹羽恵二2002「託賀郡と賀毛郡域の横穴式石室と編年」『横穴式石室からみた播磨－第２回播磨考古学研究集会の記録－』第２回播磨考古学研究集会実行委員会
菱田哲郎1999「東山古墳群出土土器の編年とその特色」『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
菱田哲郎2001「東山古墳群の形成過程と造墓原理」『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
菱田哲郎2002「横穴式石室墳の造墓原理」『横穴式石室からみた播磨－第２回播磨考古学研究集会の記録－』第２回播磨考古学研究集会実行委員会
菱田哲郎ほか編1999『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
菱田哲郎ほか編2001『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002『三釈迦山北麓の遺跡－丹波並木道中央公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査概要－』
深江英憲・服部寛1999『塩淵３号墳－神谷ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会
藤岡弘・橋爪康至1969『小野市中番地区群集墳調査概報』小野市教育委員会
松岡千寿・池田征弘ほか2004『三原遺跡・畑田遺跡－丹波の森公苑整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会
松村正和・小網豊ほか2000「正法寺古墳群」『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ－昭和60年度～平成６年度』三木市教育委員会
松本正信・加藤史朗ほか2000『山津屋・黍田・原－町道山津屋・原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』揖保川町教育委員会
宮原文隆ほか1993『安楽田・女夫岩遺跡』中町教育委員会
宮本郁雄・渡辺伸行1983「舞子古墳群西石ヶ谷３号墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
村上賢治・仁尾一人2001「桂ヶ谷奥古墳群」『平成12年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
森下大輔1989『四ッ辻古墳群』加東郡教育委員会
森下大輔1993「上三草古墳群７・８・９号墳」『埋蔵文化財調査年報－1990年度－』加東郡教育委員会
森下大輔・宮原文隆1986『黒石山古墳群』加東郡教育委員会
森田稔1983a「舞子古墳群西石ヶ谷１号墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
森田稔1983b「舞子古墳群西石ヶ谷４号墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
安平勝利1999『奥豊部１号墳』加美町教育委員会
山内紀嗣1984『那波野古墳』相生市史編纂室
山内紀嗣1996「地蔵寺古墳」『加古川市史　第４巻　史料編Ⅰ』加古川市
山上雅弘・多賀茂治ほか1996『飾東２号墳－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX－』兵庫県教育委員会
山崎信二1986（1985）「横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編－」1984年度文部省科学研究費奨励研究Ａ
山田郁子1996「池尻16号墳」『加古川市史　第４巻　史料編Ⅰ』加古川市
山本三郎・多賀茂治・仁尾一人2002「ずえが谷西古墳群」『平成13年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
山本雅和1995「狩口台きつね塚古墳」『平成４年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
山本祐作1996「中山古墳群」『加古川市史　第４巻　史料編Ⅰ』加古川市
渡辺昇・別府洋二ほか1987『庄境１号墳－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ－』兵庫県教育委員会

第８章　堀山３号墳出土人骨

京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室
藤澤珠織・片山一道

平成５年度におこなわれた兵庫県教育委員会の調査により、加西市の万願寺川南岸に面した丘陵上に位置する堀山３号墳において、人骨が遺存する２基の箱式石棺が確認された。

「第１主体」人骨は撹乱を受けていたため原位置を留めておらず、埋葬姿勢は判断できない。「第２主体」人骨は、取上げ前の写真や実測図から、仰臥伸展葬で埋葬されていたと断定できる。また、それぞれの骨が人体内のあるべき解剖学的位置で、交連状態を留めていたことが確認できた。

以下に各人骨の遺存部位を記載し、性別判定、死亡年齢推定、その他特記事項などについて詳述する。

1. 第１主体人骨

第１主体の人骨はすべてが破片化し、骨の遺存量もわずかであった。研究室での精査の結果、いくつかの骨に重複が認められ、少なくとも２体分の人骨が確認された。一方を便宜的に１－A人骨とし、他方を1－B人骨とする。

遺存状況（1－A）

頭蓋骨、下顎骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、寛骨、大腿骨、脛骨が残る。すべて小片化しており、特に長骨片は表面の磨耗が激しく、外部形態の詳細な観察は不可能である。

頭蓋骨：前頭骨、左右頭頂骨、左側頭骨、後頭骨、上顎骨の破片が残る（第13図）。前頭骨は右眼窩上縁の中央付近から左頬骨突起までの破片と、この上部に接合して冠状縫合まで続く破片、および右眼窩の外側部上縁の破片が残る。頭頂骨は矢状縁の部位で縫合する左右の骨片と、左側の前頭縁から側頭縁を含む破片が残る。右側頭骨は岩様部の塊である。左側頭骨は鱗部の前方が残り、先ほどの左頭頂骨片と縫合する。同じく左側頭骨の頬骨突起の基部から後頭縁および岩様部にかけての断片も残るが、その下半は消失している。後頭骨は左乳突縁付近の破片で、左側頭骨の後頭縁断片と縫合する。上顎骨は、右の第二大臼歯から第一小臼歯までの歯槽部分、および左の側切歯から第一大臼歯までの歯槽部分、梨状孔の上縁を含む左前頭突起付近の部分が遺存する。

下顎骨：左下顎枝の下顎孔より上部が残るが、筋突起と関節突起を破損する。

歯：上顎歯のみが残る。左中切歯を除き、右の第二大臼歯から左の第二大臼歯までの合計13本が遺存する。このうち右犬歯から中切歯までの歯と左第二大臼歯は遊離しており、それ以外は歯槽に釘植している。一部の歯の歯冠表面には、具体的に何かはわからないが、セメント様の付着物がある。

上肢帯骨：左鎖骨の破片が残るが、端部と骨体前面を破損する。

自由上肢骨：右上腕骨と右橈骨が残る。上腕骨は三角筋粗面を含む骨幹上部から中央部にかけての約８㎝の骨片である。橈骨は橈骨粗面の直下から遠位10㎝ほどの骨幹が残る。

下肢帯骨：右寛骨の恥骨部分のほぼ全体が遺存する。

自由下肢骨：左右大腿骨と左右脛骨が遺存する。右大腿骨は骨幹の中央部より遠位の約６㎝、左大腿骨は骨幹中央付近の約13㎝が残る。右脛骨は中央から下方にかけての骨幹が14㎝ほど残り、一部は縦に

割れて後面を欠く。また遠位骨端の内果から内果関節面を含む部分も小塊となって残る。左脛骨は右とほぼ同様の残り具合である。

1－Aの残存歯

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	×	○	○	○	○	●	●	●	×	○	○	○	○	○	●	×
下顎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

○：釘植、　●：遊離、　×：消失

遺存状況（1－B）

頭蓋骨、歯、大腿骨が遺存する。

頭蓋骨：前頭骨、左右頬骨、右上顎骨、右頭頂骨の各破片が残る（第14図）。前頭骨は前頭鼻骨縫合のやや上から始まる破片と、左眼窩上縁部が遺存し、それぞれ1－Aに同一の部位が残る。左頬骨は前頭突起から眼窩下縁にそって残り、右頬骨がそれよりもやや大きな破片として残る。左頬骨は、上述した1－Bの前頭骨の左眼窩上縁部と縫合する。また、形態特徴などから左右の頬骨は同一個体のものである。このため、頬骨は左右ともに1－Aとは別個体である。上顎骨は、右頬骨と縫合した状態で頬骨突起の部分がわずかに遺存する。右頭頂骨は前頭角を含む破片が残る。これは1－Aで遺存する前頭骨頭頂縁と縫合する部位であるが、縫合が合わないため、1－Aとは別個体である。

歯：すべて遊離歯である。遺存歯は上顎右第一大臼歯、上顎左犬歯から第二大臼歯、下顎右第二大臼歯、第二小臼歯、および下顎左の中切歯あるいは側切歯の、合計９本である。このうち上顎右第一大臼歯と下顎右第二大臼歯、第二小臼歯は、歯冠もしくは歯根の一部を破損している。1－Bの歯冠頬側面にも1－Aと同様の付着物がみられる。なお1－Bの上下顎歯は、発掘時に狭い範囲で取上げられていることや、劣化の状態が似通っていることなどから、同一個体のものと考えられる。

体肢骨：右大腿骨の上部骨幹だけが７㎝ほどの破片で残る。1－Aに遺存する右大腿骨片とは接合せず、部位もわずかに重複している可能性があるが、表面の磨耗により部位の同定はできない。

1－Bの残存歯

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	●	×
下顎	×	●	×	●	×	×	×	×	●		×	×	×	×	×	×

○：釘植、　●：遊離、　×：消失

第１主体にはこれらのほかに、砕片のため部位同定ができない頭蓋骨片および四肢骨片が、それぞれ十数点残る。

性別判定

古人骨の性別を形態学的に判定するのに最も有効な寛骨の恥骨部分が残っている。恥骨下角は男性では逆V字型、女性では広い逆U字型を呈する。第１主体に遺存する右恥骨からは、逆V字型に近い恥骨下角となることから、この骨の持ち主は男性であったと考えられる。このほか、２個体分が遺存する前頭骨は両者ともに、男性的な特徴である眉上隆起の発達が認められる。

以上のことから、第１主体に残る人骨のうち恥骨を有する１個体は高い確率で男性である。またもう１個体のほうも、どちらかと言えば男性の可能性が高い。

死亡年齢の推定

恥骨結合面：左右の恥骨が接する恥骨結合面の形状は加齢変化を示すことで知られている。これを利用して年齢段階を表したToddの図表（White, 2000）は、恥骨から死亡年齢を推定するのに広く用いられている。第１主体に残る恥骨（写真５）は、背側縁と傾斜面および下端が明瞭であるものの、腹側縁と上端は境界がはっきりしないという特徴を示す。このような形状は、Toddの図表では、27～30歳の年齢段階に相当する。

歯牙：1 - Aにおける咬耗の状態は、すべての歯でモルナーの３～４度（Molner, 1971）に相当する。これは咬頭が一部もしくは完全に磨滅し、象牙質が大きく開くようになり始めた状態である。1 - Aの遺存歯は上顎歯のみであるが、咬耗パターンから死亡年齢を推定するLovejoyの図表（White, 2000）と比較すると24～35歳に該当する。次に1 - Bの咬耗はモルナーの２～４度（Molner, 1971）に相当し、エナメル質だけが磨り減ったものから、象牙質の小孔が露出した状態までが認められる。1 - Bもまた遺存歯数が少ないが、Lovejoyの図表（White, 2000）と比較すると20～30歳の間となる。

縫合の癒合：頭蓋骨には、1 - Aの場合、冠状、矢状、ラムダ、前頭頬骨、前頭鼻骨等の縫合部分の骨が一部残っている。すべての縫合で内板、外板ともに未癒合の状態である。このことから熟年（40～59歳）以上に達していたとは考えにくい。おそらく壮年（20～39歳）であったと思われる。

各部位による推定値をまとめると、恥骨結合面が27～30歳、歯牙の咬耗が24～35歳（1 - A）、20～30歳（1 - B）、頭蓋の縫合が壮年という年齢や段階を示した。以上のことから、主体部１の２個体のうち、少なくとも恥骨を有する１体は30歳前後に死亡したと推定できる。また他の１体は、歯牙の咬耗や頭蓋骨片の縫合の状態などから、壮年期のあたりで死亡したと考えるのが妥当であろう。

齲蝕、病変、ストレスマーカーなど

齲蝕：1 - A人骨では、全遺存歯13本のうち７本の歯冠頬側面に除去できない付着物があった。このためこれら７本については咬合面、舌側面および隣接面のみを観察し、他の６本については歯冠表面全体が観察できた。その結果、上顎左側の犬歯と第一小臼歯の隣接面においてC３度（瀬田・吉野, 1990）の齲蝕が確認できた。これは、エナメル質や象牙質にくわえ、齲蝕が歯髄にまで達している状態である。またこの歯牙の位置に根尖膿瘍と思われる顎骨前面の開放が認められた。1 - B人骨では、全遺存歯９本のうち歯冠表面の観察が可能な８本すべてに齲蝕は見られなかった。

ストレスマーカー：エナメル質減形成の出現のしかたは主に、左右の同名歯に対称的に起こるもの、左右非対称で起こるものに大別される。全身的な障害に起因して左右対称に出現したものは幼少期のストレスマーカーの指標として、局所的な障害による左右非対称のものとは区別されている（山本, 1988）。1 - A人骨は、歯冠頬側面の観察が可能な６本のうち４本に、1 - B人骨は、観察が可能な５本のうち１本にエナメル質減形成が認められた。しかしこれらの人骨には全歯が遺存しておらず、表面の付着物などにより観察不可能な歯もある。左右の同名歯で対称的に減形成が出現していたかどうかの確認ができないため、エナメル質減形成の出現があっても、幼少時に栄養不良にさらされたか、あるいは何らかの疾患に冒されたかを推察することはできない。一方、左右の出現が非対称であると確認できたものは２組ある。これらは栄養障害などのストレスとは異なり、何らかの局所的な原因により減形成が起こったものと考えられる。

その他

第１主体人骨の長骨片の中に、鋭利な刃物によると思われる損傷を持つ骨片が3点見られた（写真７）。骨の部位については、おそらく２点が脛骨の前縁部分の破片、１点が腓骨の破片だと思われる。これらの傷には治癒機転がみられないことから、生前に受傷したものではない。また傷の表面が平滑であるという特徴からは、乾燥骨になった後ではなく、まだ生骨のときについた傷という可能性がある。しかし傷の周縁部分は磨耗により観察ができないなど、これ以上の推察は困難である。いつの段階にこれらの損傷を受けたのかという点については、さらに詳細な検討を要する。

2. 第２主体人骨

遺存状況

ほぼ全身の骨が１個体分揃う。どの骨も端部が破損しているため完形のものはなく、また遠位にある小さな骨は残っていない。頭蓋骨、下顎骨、胸骨、鎖骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、肋骨、椎骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨などが残る（第15図・写真１～４）。

頭蓋骨：右顔面部を大きく欠くものの、破片の接合により復元が可能であった（写真１・２）。破損部位は、前頭骨のうち右眼窩上縁部よりも外側の部分、右上顎骨の第二小臼歯歯槽よりも外側の部分、右頬骨と頬骨弓、右乳様突起、蝶形骨の右側約三分の２の部分、そして左頬骨弓、左側頭鱗の上半部、左乳様突起、左頭頂骨の頭頂切痕付近などである。しかし、左眼窩内壁や左右鼻骨、鋤骨などの薄く脆い骨も一部残っており、遺存の程度については良好といえる。

下顎骨：右第一大臼歯にあたる歯槽部分が消失し、そこを境に大きく二片に割れている（写真３）。右側片は下顎枝から右第二大臼歯歯槽隆起までが残る。しかし筋突起と、下顎枝の後縁から下顎角および下顎底が大きく破損し、下顎孔より下方の内側面も崩壊する。もう一片は右第二小臼歯歯槽部分から左下顎枝にかけてのほぼ全体が残る。こちらも筋突起と関節突起の先端および下顎角は破損する。

歯：上顎歯列では、右第三および第二大臼歯と左第二小臼歯以外の合計12本の歯が残る。このうち右第一大臼歯と第二小臼歯は遊離し、２本とも歯根が折損している。また釘植している左第一小臼歯は歯頚線付近で折れて歯冠の大部分が消失している。下顎歯列は、未萌出の左第三大臼歯を除く15本の歯がすべて残る。このうち右第三および第二大臼歯は遊離しており、かつ歯根が折損している。

上肢帯骨：右鎖骨と左右肩甲骨が残る。右鎖骨は骨体中央部分のみが数cmの破片として残る。左右肩甲骨はともに肩甲切痕付近から縦に割れており、その外側が遺存する。ここには烏口突起と関節窩、外側縁の上方が残り、肩甲棘や肩峰は破損する。

自由上肢骨：左右上腕骨と右橈骨、右尺骨が遺存する。右上腕骨は大結節よりも遠位の骨幹部から遠位骨端部までが残るが、内外側上顆が破損する。左上腕骨は外科頸より遠位の骨幹部のみが残る。右橈骨および尺骨は、それぞれ数cmの骨体断片だけが残る。

体幹：胸骨、左右の肋骨群、頚椎から仙椎までの多くの椎骨が遺存する。胸骨は胸骨柄と胸骨体の一部が残る。肋骨は左右各４本と左右不明１本の計９本だけが残り、すべて先端部を破損する。椎骨は環椎（第一頚椎）、第四から第十二胸椎、第一から第五腰椎の合計15個が残る。環椎は前結節から左の上下関節窩あたりまでが残り、横突起を破損する。胸椎と腰椎は椎体の大部分あるいは一部が残り、横突起と棘突起はほとんど残っていない。仙椎は第二仙椎の椎体上半部までが残るが、背側の正中仙骨稜は破損する。

下肢帯骨：左右寛骨が残る。右寛骨は全体的に良く残っているが、腸骨翼の大部分と坐骨棘および坐骨結節表面を欠く。左寛骨も右とほぼ同様の残り具合である。

自由下肢骨：左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨が残る。右大腿骨は完形に近い形で残り、大転子と内側上顆および内側顆を破損する。左大腿骨は骨幹の大部分が残るものの、近位端の一部と遠位端を破損する。右脛骨は近位端から骨幹中央部あたりまでが残り、上関節面の外側半を欠く。左脛骨は骨幹上部のみが残る。左腓骨は数点の破片が残るが接合は不可能である。

これら以外に、砕片であるため具体的な部位同定のできない頭蓋骨片および四肢骨片が数十点残る。

主体部２人骨の残存歯

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	×	×	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	ー	○	○	未
下顎	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	未

○：釘植、　●：遊離、　×：消失、　ー：死後消失、　未：未萌出

性別判定

左右の寛骨ともに大坐骨切痕と恥骨下角が観察できる。大坐骨切痕は男性の場合鋭角的で深く、女性の場合緩やかなカーブを示す。恥骨下角は男性では逆V字型、女性では逆U字型である。この人骨は両者ともに男性的な特徴を示している。頭蓋骨では、男性である場合によく発達する眉上隆起や下側頭線、外後頭隆起が認められる。なお乳様突起は左右ともに破損するため観察できない。眼窩上縁は女性では薄く鋭い印象となるが、この人骨では丸みを帯びており男性的である。また女性的な特徴である前頭結節はほとんど認められない。

以上の事項から、男性骨であると断定できる。

死亡年齢の推定

歯牙による推定：左の上下顎には第二大臼歯までが萌出済である。一方、右の上下顎は歯槽突起を破損するも、下顎右第三大臼歯が遊離して遺存している。歯根は破損しており形成の程度はわからないが、歯冠に咬耗の形跡がないことから未萌出だったと考えられる。他の歯の咬耗は、ほぼすべてがモルナーの２～３度（Molner, 1971）に相当する。これはエナメル質のみが磨り減っているか、あるいは象牙質が点状に露出した状態である。Lovejoyの図表（White, 2000）と比較すると、上顎では18～22歳、下顎では20～24歳の段階に相当する。

恥骨結合面：２号人骨には良好な遺存状況を呈する左右の恥骨結合面があり、十分な観察が可能である。背腹方向に走る明瞭な溝、それらにより隔てられた数本の隆線、腹側部に傾斜の兆候などの特徴が認められる。くわえて上下端部には明瞭な境界ができていない（写真６）。このような形態は、Toddの図表（White, 2000）との比較により、20～21歳の段階に相当する。

癒合：第一仙椎と第二仙椎間の癒合は20代後半に完了する（瀬田・吉野, 1990）が、この人骨では未癒合であり、20代後半に至る前に死亡したことを表す。また椎骨の輪状骨端は20～25歳に癒合する（瀬田・吉野, 1990）が、本人骨では第五および第十一胸椎の輪状骨端が癒合する途中にあることから、20～25歳での死亡に相当する。頭蓋の冠状、矢状、ラムダ縫合は内板、外板ともにすべて未癒合であり、口蓋に残る切歯、正中口蓋、横口蓋の各縫合部分や、左眼窩部の蝶前頭縫合も癒合途中であることが確認できる。これらは壮年（20～39歳）の死亡だったことを示す。

各部位による推定値をまとめると、咬耗が18～24歳、恥骨結合面が20～21歳、仙椎の癒合が20代後半より以前、椎骨の輪状骨端が20～25歳、縫合の癒合が壮年以下という年齢や段階を示した。以上を総合的に判断すると、この人骨の死亡年齢は20歳前後であったことが推定できる。

身体的特徴

頭蓋の特徴：頭蓋計測により、頭長幅示数（70.9）は過長頭に近い長頭型、頭長高示数（70.9）は低頭に近い中頭型、頭幅高示数（100.0）は狭頭型、そして突顎の程度を測る顎示数（95.4）は正顎型であることが示された（第５表）。

頭長幅示数とは頭蓋を上から見たときの前後の長さを表し、この値が大きいほど短頭型、小さいほど長頭型であることを示す。古墳時代人骨の頭蓋計測値を地域集団ごとにまとめた寺門の報告によると、男性人骨は集団の平均値がすべて短頭型から中頭型に属している。このうち示数が最も大きいものは畿内集団であり、最も小さいものは関東や東日本集団である（寺門1981）。これらに比べて本人骨の示数の値は、関東や東日本集団よりもさらに小さく、古墳時代人骨の全集団のなかでも突出した長頭型であることがわかる。次に、頭長高示数は頭蓋を横から見たときの上下の高さを表す。本人骨の示数の値は西日本や西国の人骨集団（寺門1981）と同様に中頭型の範囲に含まれる。ただ全集団の中では最も小さく、より低頭型に近い値である。次に、頭幅高示数は頭蓋を後ろから見たときの形を表す。この値が大きいほど狭頭型であり、左右に狭く上下に尖っているように見える。また値が小さいほど平頭型であり、左右に広く平たく見えることを示す。寺門によると、男性人骨での集団の平均値のうち示数が最も大きいものは関東集団で、これは中頭型に近い狭頭型である。示数が小さいものは畿内や西国集団で、これらは中頭型に属する（寺門1981）。本人骨の指数の値は関東集団よりもさらに大きく、古墳時代人骨の全集団に比べても強い狭頭型であることがわかる。以上のように、この人骨の頭蓋骨は、前後に非常に長く、また左右にも非常に狭い形をしていることが特徴的である。

身長推定など：長骨のうち、欠損部位が最も少なかった右大腿骨に限り、最大長の概測値を求めることができた。その値は約420㎜であり、日本人用の身長推定式（藤井1960）に代入すると、生前の身長は158.6㎝と推定できる。古墳時代人の平均身長については男性で163.06㎝、女性で151.53㎝との報告があり（平本1981）、本人骨の場合は男性にしてはやや低いほうと言える。このほか、大腿骨では柱状性とまではいかないものの粗線が発達している。また特に、脛骨のヒラメ筋線の発達が現代人に比して強く、その筋が強靭であったことを物語る。

形態小変異：この人骨は遺存状態が比較的良好なため、形態小変異について観察することができた。特記すべきものとして、矢状縫合部の縫合骨が挙げられる。この小変異の報告例はまれなようであり、管見では現代人での記載例は確認できなかった。なお四肢骨などには特記すべき特徴はなかった。

齲蝕・病変・ストレスマーカーなど

齲蝕：全遺存歯27本で齲蝕が確認できた歯は４本あった。そのうち３本はいずれもＣ２度（瀬田・吉野, 1990）で、齲蝕がエナメル質にくわえ、象牙質にまでおよぶものである。出現部位は上顎左犬歯では遠心面の中央付近、下顎左第一大臼歯では歯冠咬合面の近心端から近心面にかけて、下顎左第二大臼歯では歯冠咬合面中央部で認められた。また上顎左第一小臼歯の歯冠は歯頸線付近まで齲蝕しており、歯髄腔が露出する。これはＣ４度（瀬田・吉野, 1990）相当の齲蝕である。この歯には根尖膿瘍の跡も認めら

れ、顎骨側面に向けて瘻孔を形成している。これらのことから、この歯は重篤な齲蝕により歯冠部分の崩壊が進み、歯髄腔から感染して、根尖膿瘍が形成されるに至ったと考えられる。

ストレスマーカー：エナメル質減形成については、上顎左第一大臼歯と第二大臼歯、上顎左右中切歯および下顎左中切歯の５本に認められた。対称的に出現していたものは上顎左右中切歯の１組だけであったが、幼少時に栄養不良やなんらかの全身性疾患を患っていたことが考えられる。観察可能な左眼窩上壁には、鉄欠乏性貧血との関連が指摘されるクリブラ・オルビタリアなどの病変は認められなかった。

まとめ

堀山３号墳の２基の箱式石棺から発見された人骨は、少なくとも３体分である。

第１主体から出土した２体のうち、少なくとも１体は男性骨である。もう１体のほうもどちらかと言えば男性骨であろう。この２体のうち１体は30歳前後に死亡し、もう１体のほうは壮年期に死亡したと考えられる。

第２主体から出土した１体は20歳前後の年齢で死亡した男性である。生前の推定身長は158.6㎝で、頭蓋の形態は他の古墳時代人骨に比べ、非常に前後に長く左右に狭いという特徴を示す。また、これまでにあまり報告例のない矢状縫合部分の縫合骨が観察された。

謝辞

本人骨資料を検査する機会を与えてくださった兵庫県教育委員会の関係者各位に、深く感謝の意を表します。

引用文献

藤井明, 1960 : 四肢長骨の長さと身長との関係に就いて；順天堂大学体育学部紀要 3: 49 - 61.

平本嘉助, 1981 : 骨からみた日本人身長の移り変わり；考古学ジャーナルNo.197: 24-28.

佐藤達夫・秋田恵一, 2000 : 日本人のからだ　解剖学的変異の考察；東京大学出版会

瀬田季茂・吉野峰雄, 1990 : 白骨死体の鑑定；令文社

S.Molnar, 1970 : Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability ; American Journal of Physical Anthropology 34: 175-190.

T.D.White, 2000 : Human Osteology, Second Edition: p346 Fig.17.3 ; Academic press

寺門之隆, 1981 : 古墳時代人骨；人類学講座5　日本人Ⅰ:111 - 121； 雄山閣出版

Todd, T.W., 1920 : Age changes in the pubic bone: I.The white male pubis. ; American Journal of Physical Anthropology 3: 467-470.

山本美代子, 1988 : 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成； 人類学雑誌Vol.96,No.4: 417-433

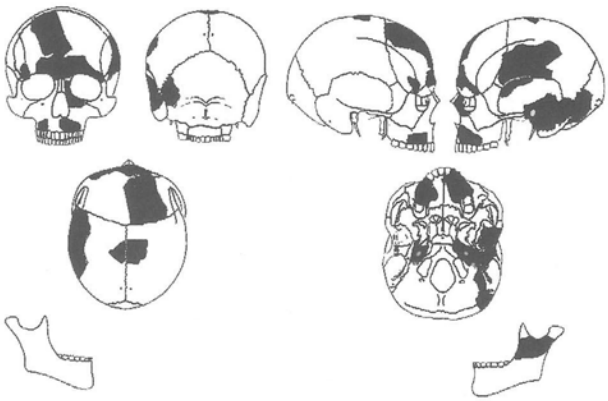
第５表　第２主体人骨　頭蓋の主要計測値（mm）および主要な示数（%）

計測項目	計測値	示数項目	示数
頭蓋最大長	189	頭蓋長幅示数	70.9
頭蓋最大幅	134	頭蓋長高示数	70.9
バジオン・ブレグマ高	134	頭蓋幅高示数	100.0
顔　長	103	顎示数	95.4
眼窩幅（左）	42		
眼窩高（左）	34	眼窩示数	80.5
鼻　幅	25		
鼻　高	56	鼻示数	44.6

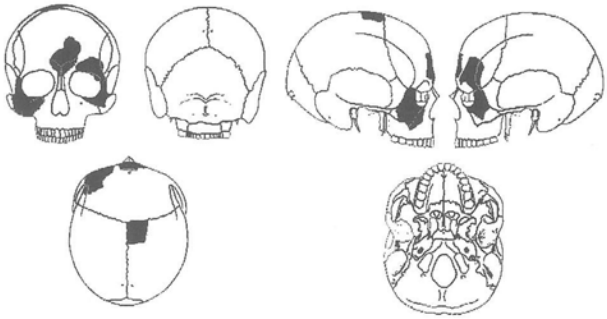
第６表　第２主体人骨　歯冠計測値（mm）

	R								L							
上顎	M３	M２	M１	P２	P１	C	I２	I１	I１	I２	C	P１	P２	M１	M２	M３
近遠	—	—	9.90	6.50	7.27	7.82	6.72	7.96	7.88	6.71	7.88	—	—	9.86	9.40	—
頬舌	—	—	11.42	9.32	9.63	8.43	6.32	7.10	7.01	6.29	8.42	—	—	11.53	11.08	—
下顎	M３	M２	M１	P２	P１	C	I２	I１	I１	I２	C	P１	P２	M１	M２	M３
近遠	10.83	10.20	10.64	7.00	7.06	6.91	5.53	4.96	5.11	5.48	6.94	6.87	7.09	10.66	10.27	—
頬舌	9.57	10.00	10.14	8.63	7.93	7.82	5.83	5.46	5.47	6.03	7.88	8.07	8.58	10.15	9.93	—

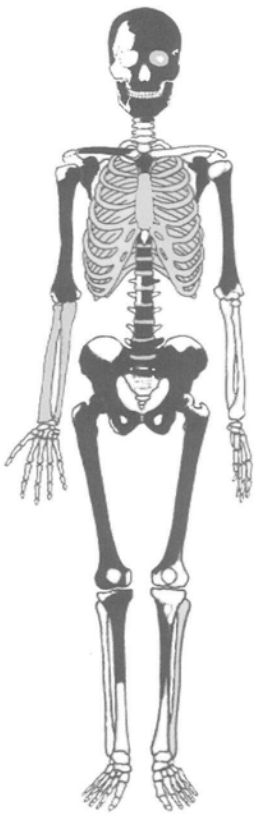
※下顎切歯４点の近遠心径は咬耗の影響を受け、やや小さめに計測されている。



第13図　第１主体 - A人骨　頭蓋・下顎遺存状況



第14図　第１主体 - B人骨　頭蓋遺存状況



第15図　第２主体人骨　全身遺存状況

■：遺存する骨とその部位　■：遺存するが部位の特定ができない骨

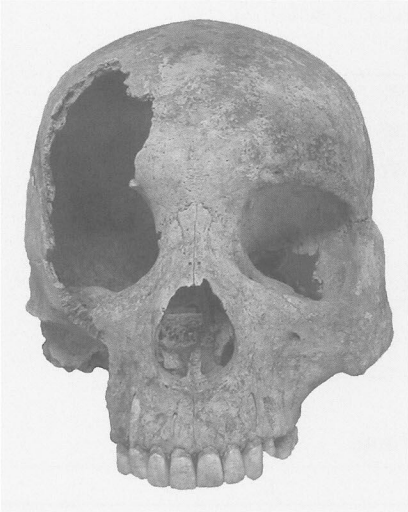


写真１：第２主体人骨
頭蓋正面観

写真２：第２主体人骨
頭蓋側面観

写真３：第２主体人骨
下顎

写真４：第２主体人骨
体幹および四肢骨

写真５：第１主体人骨
右恥骨結合面

写真６：第２主体人骨
右恥骨結合面

写真７：第１主体人骨
損傷痕のある骨

※スケール　写真4：10㎝、写真5，6，7：1cm

第16図　堀山３号墳出土人骨

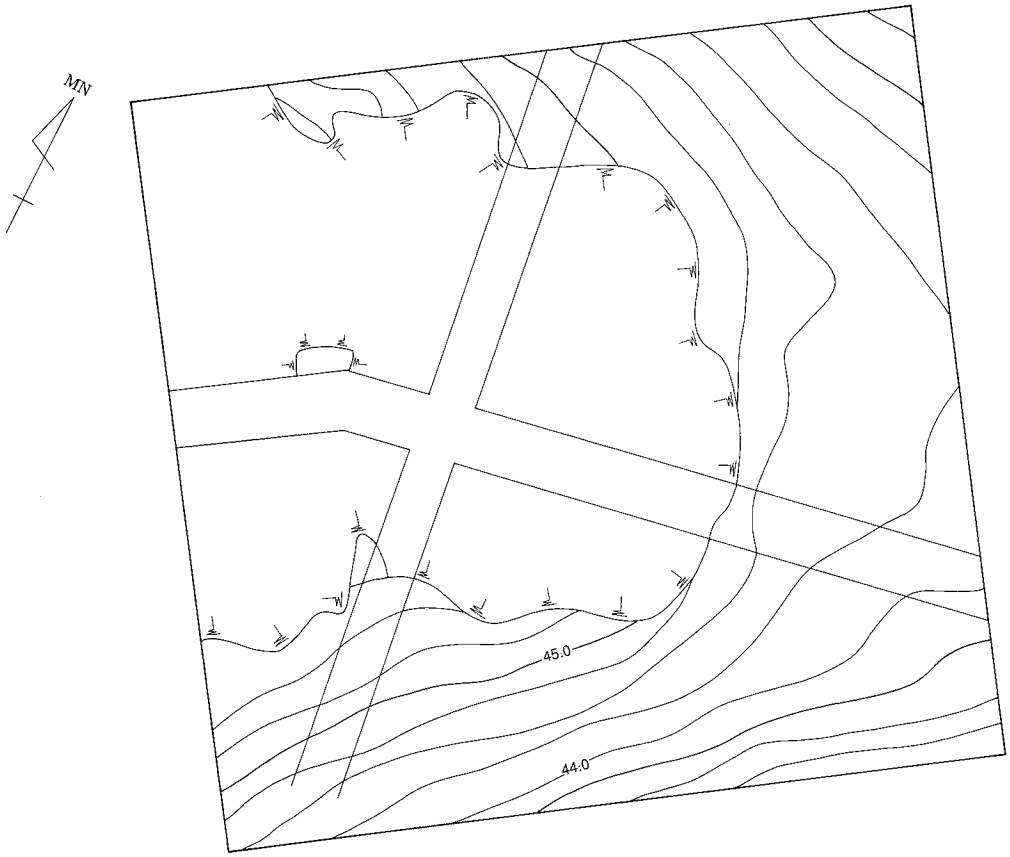
報告書抄録

ふりがな	かさいみなみさんぎょうだんちないいせきちょうさほうこくしょ
書名	加西南産業団地内遺跡調査報告書
副書名	状覚山古墳群・堀山古墳群・堀山遺跡ほか
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第302冊
編著者名	長濱誠司・森内秀造・岸本一宏・久保弘幸・菱田淳子・高木芳史・岡本一秀・藤澤珠織・片山一道
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
発行年月日	西暦2006（平成18）年３月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
じょうかくさん 状覚山古墳群	兵庫県加西市 網引町	282201	930062			1993.04.30 ～09.20	600㎡	加西南産業団地造成
	字状覚山		950388			1996.01.17 ～03.23	1114㎡	
			960174	34度 51分 ７秒	134度 52分 33秒	1996.07.17 ～1997.01.10	3751㎡	
ほりやま 堀山古墳群	字堀山		930062	～ 34度 51分	～ 134度 52分	1993.04.30 ～09.20	1392㎡	
ほりやま 堀山遺跡	字堀山		940148	29秒	54秒	1994.05.23 ～07.29	476㎡	
ひるがいけのしり 蛭ヶ池ノ尻遺跡	字蛭ヶ池ノ尻		930062			1993.04.30 ～09.20	1541㎡	
ながれお 流尾遺跡	字流尾		960035			1996.05.08 ～06.30	397㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
状覚山古墳群	墳墓	古墳時代後期	横穴式石室	須恵器・土師器・金属器	導入期・終末期の横穴式石室
堀山古墳群	墳墓	古墳時代前期～後期	古墳	須恵器・土師器・金属器	韓式系土器が出土
堀山遺跡	墳墓	弥生時代末	方形周溝墓	弥生土器・鉄鏃	大型の鉄鏃が出土
		縄文時代中期	土坑	石器	
蛭ヶ池ノ尻遺跡	集落	不明	土坑		
流尾遺跡	墳墓か	奈良時代	土坑	須恵器・土師器	

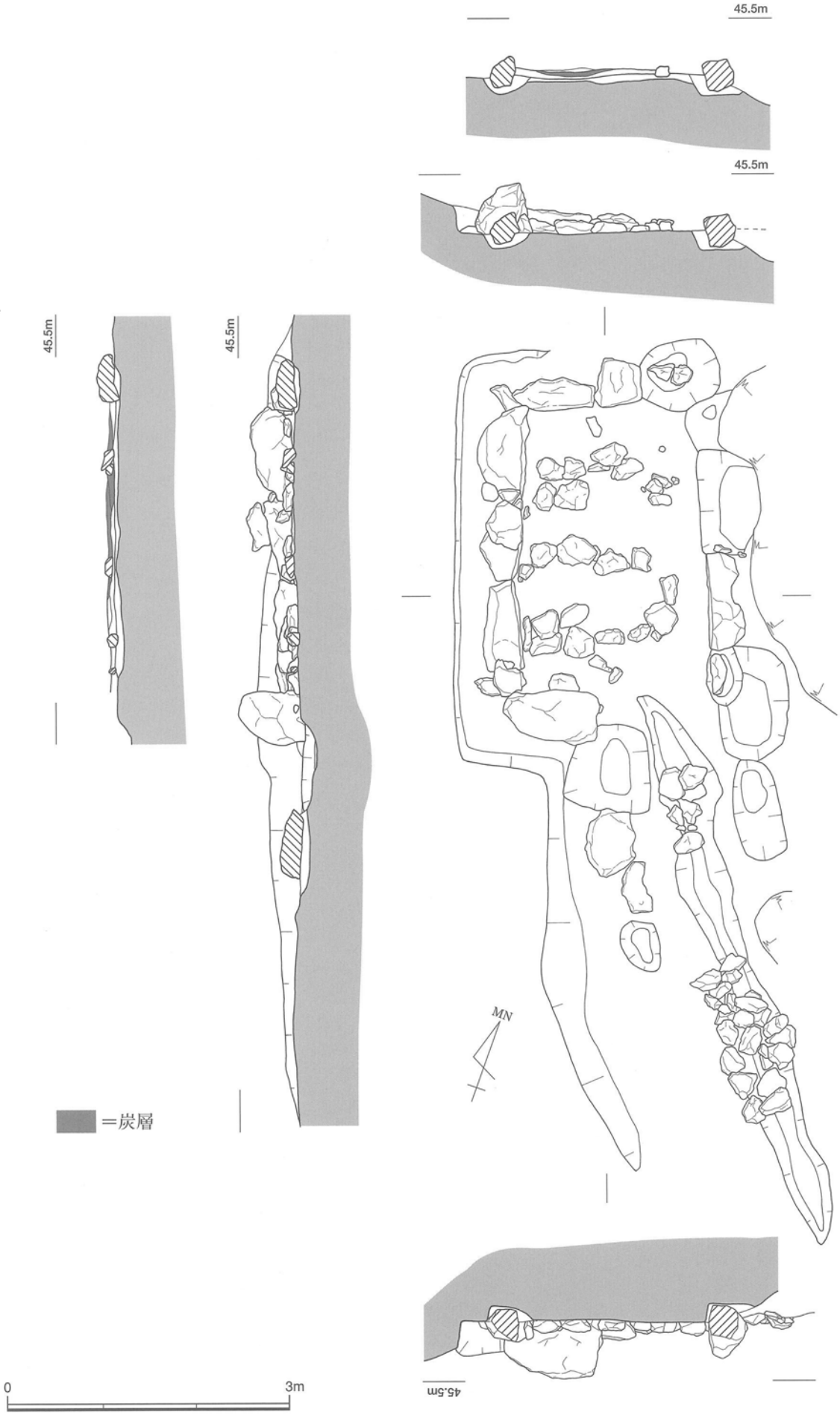
図　版



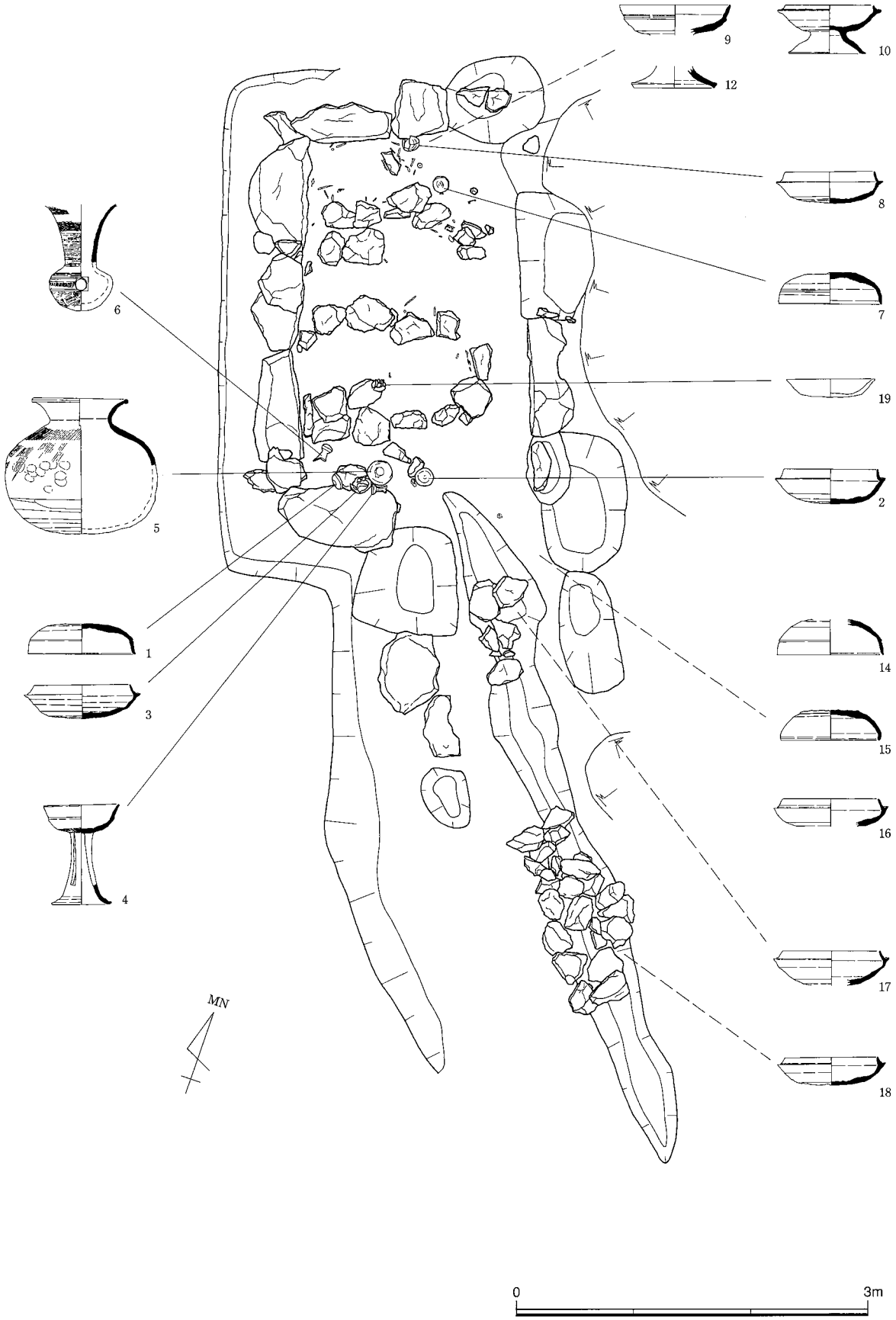
0　10m

調査区地形測量図

図版 2　状覚山 4 号墳

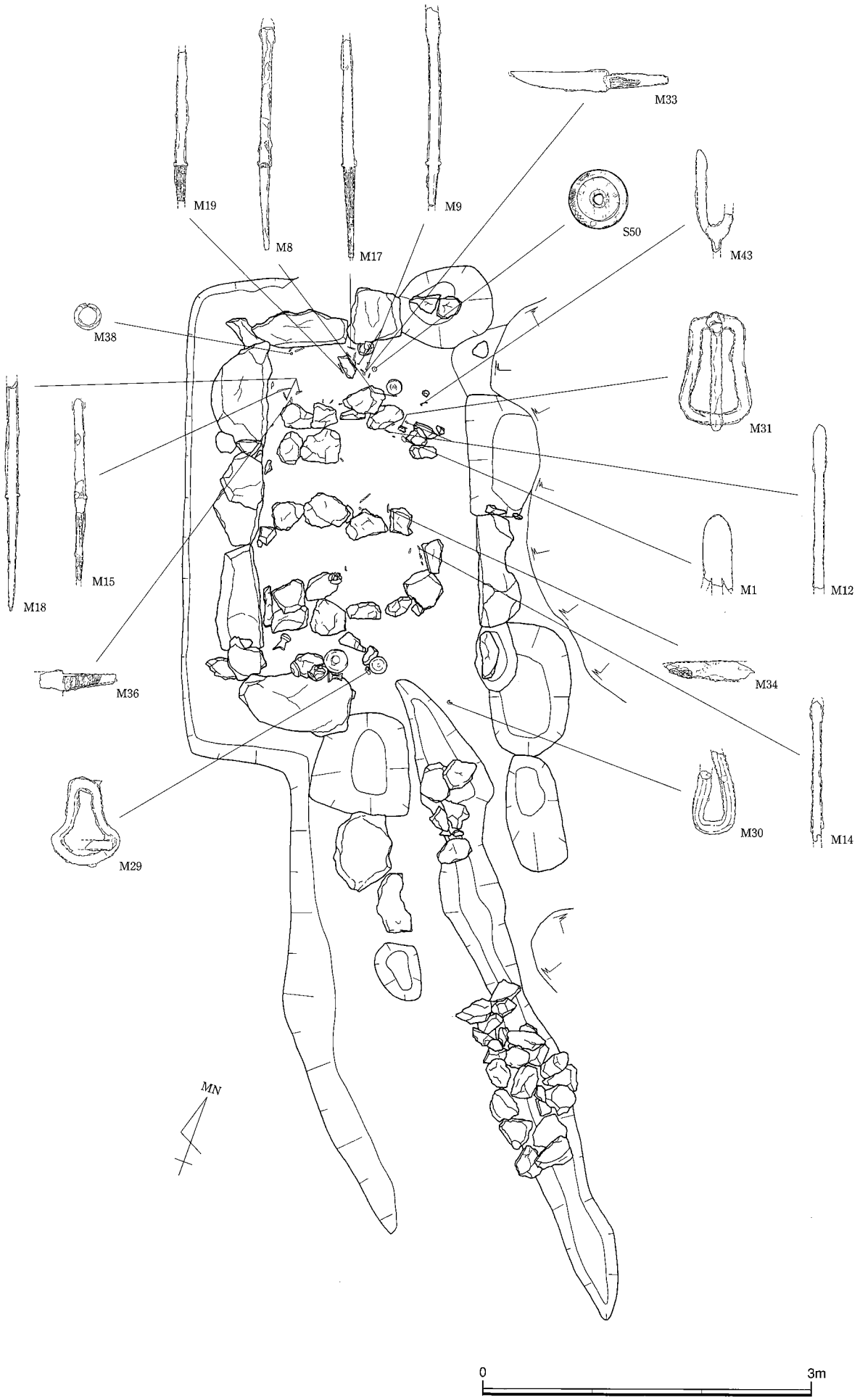


石室平・立面図

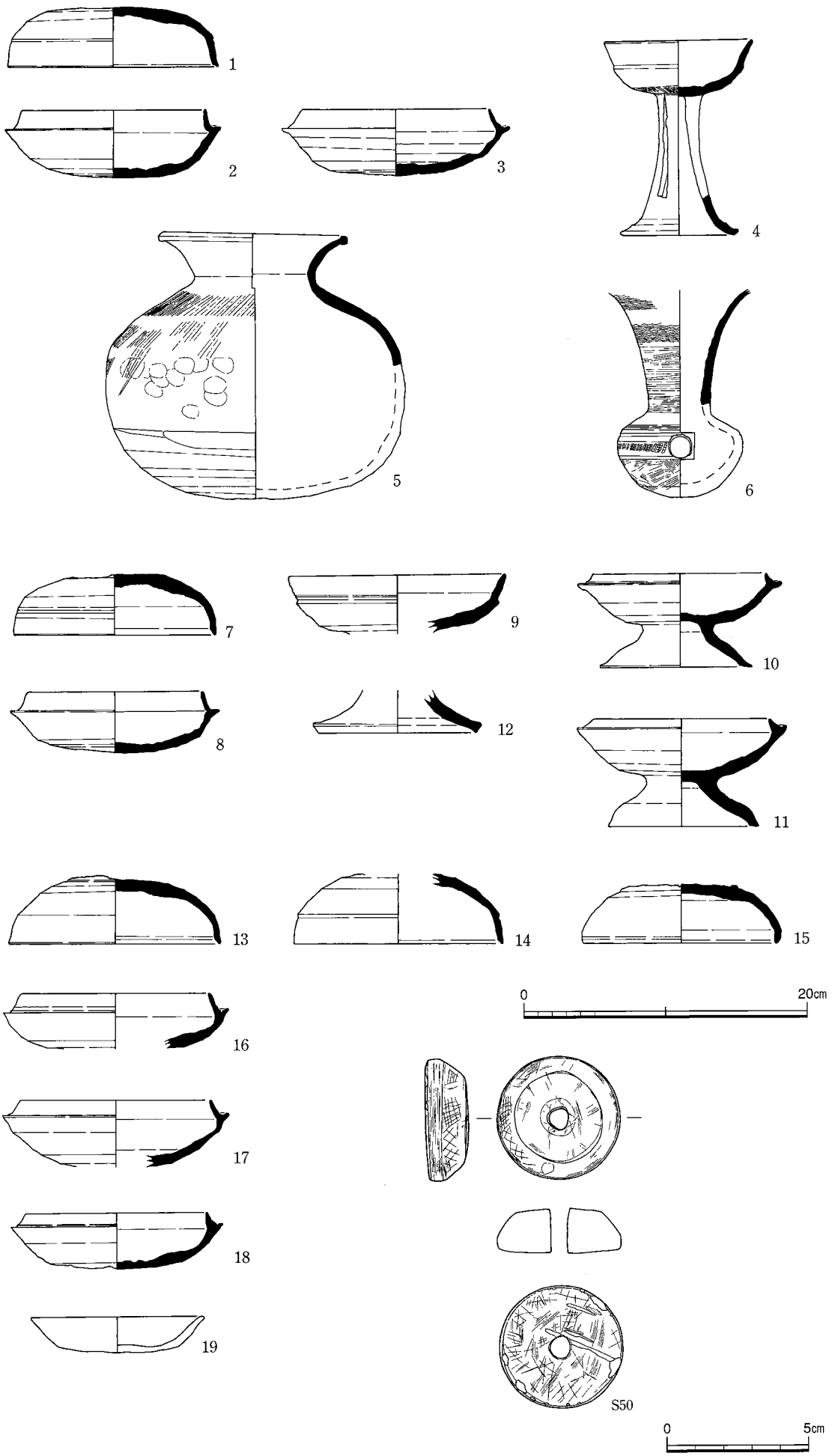


石室内土器出土状況図

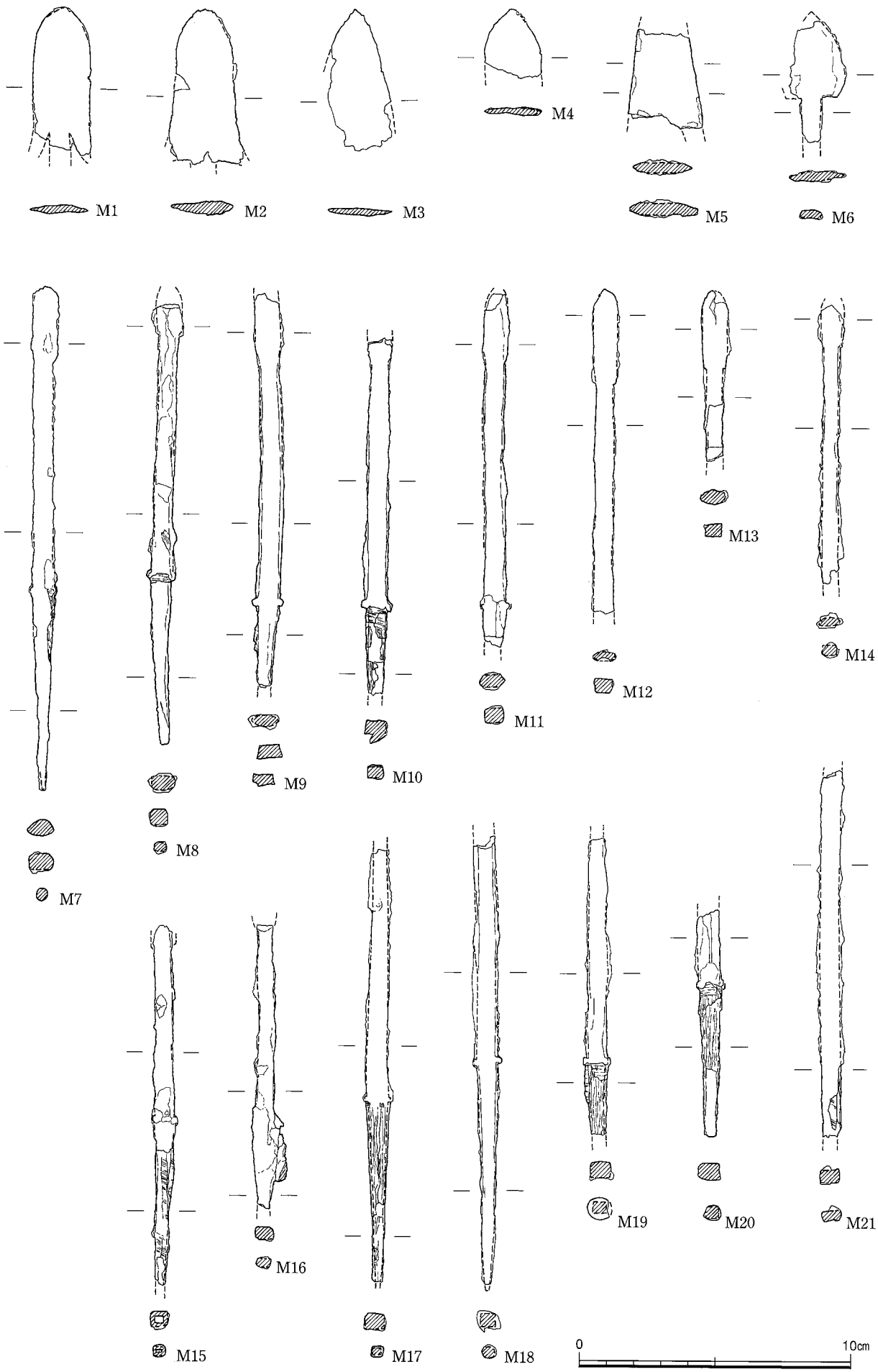
図版 4　状覚山 4 号墳



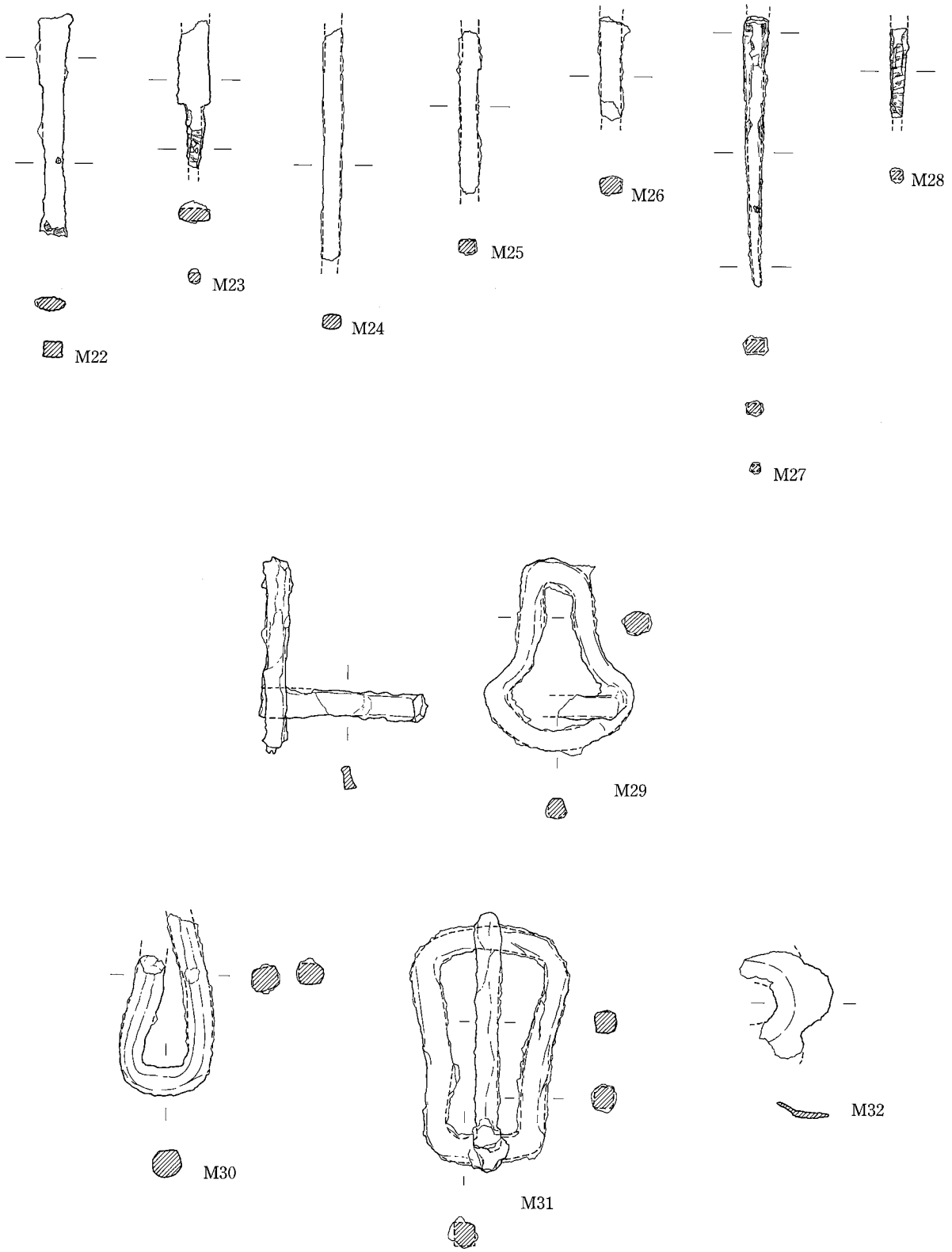
石室内金属器・石製品出土状況図



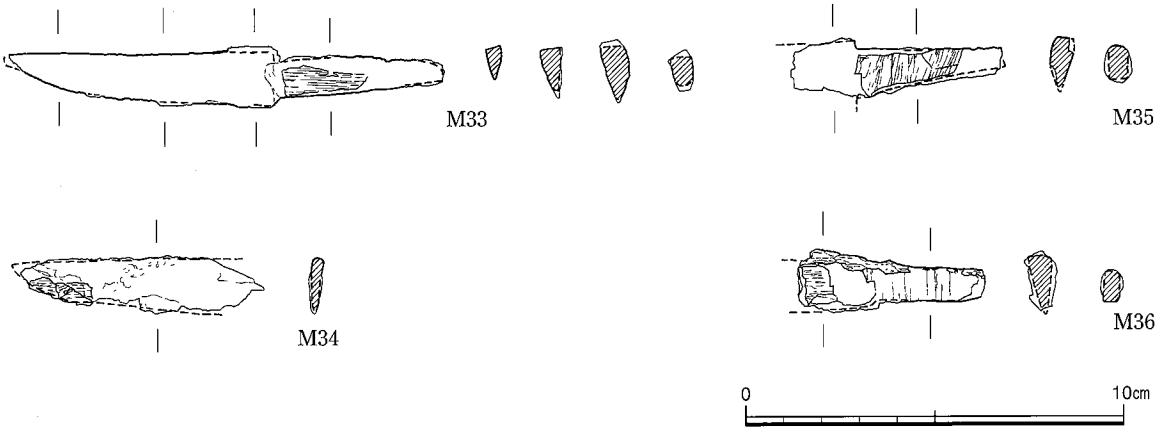
出土土器・石製品

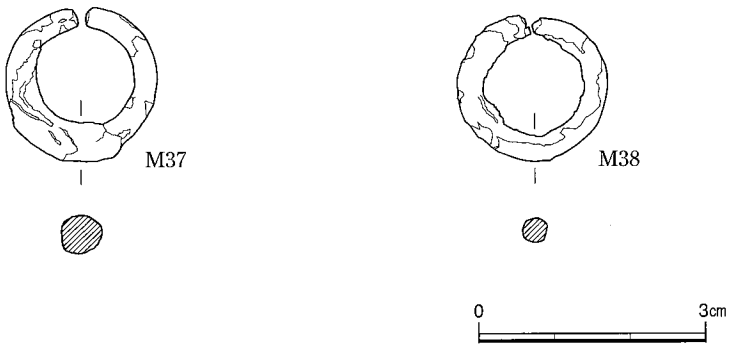

M1
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M8
M9
M10
M11
M12
M13
M14
M15
M16
M17
M18
M19
M20
M21
0
10cm

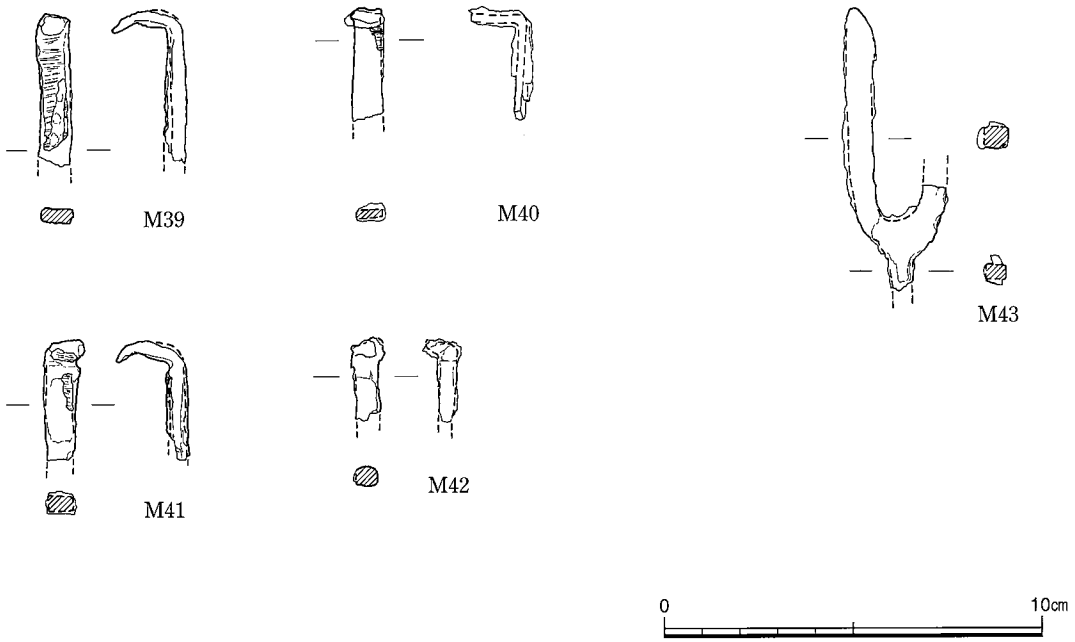
出土金属器(1)



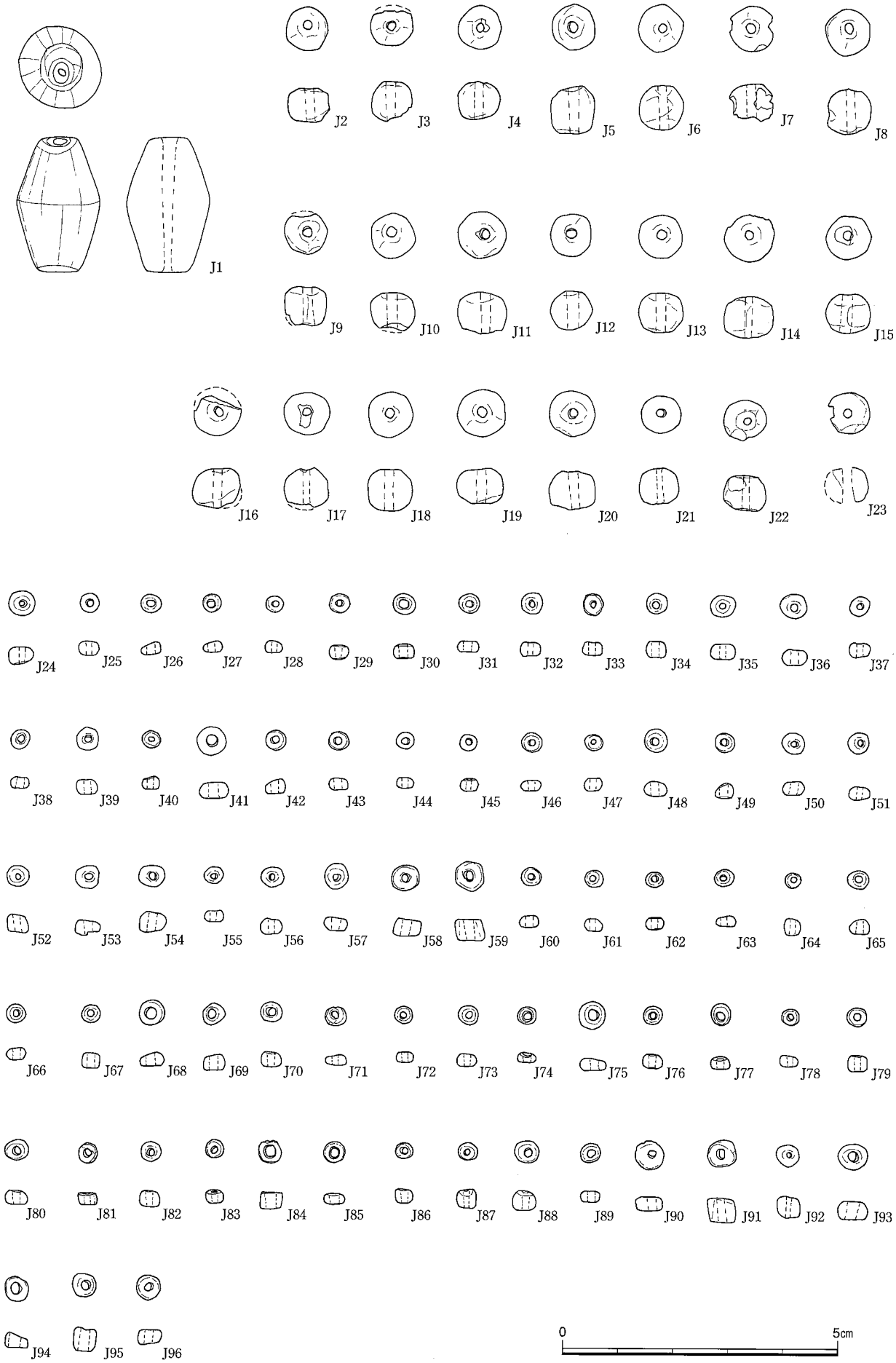
出土金属器(2)





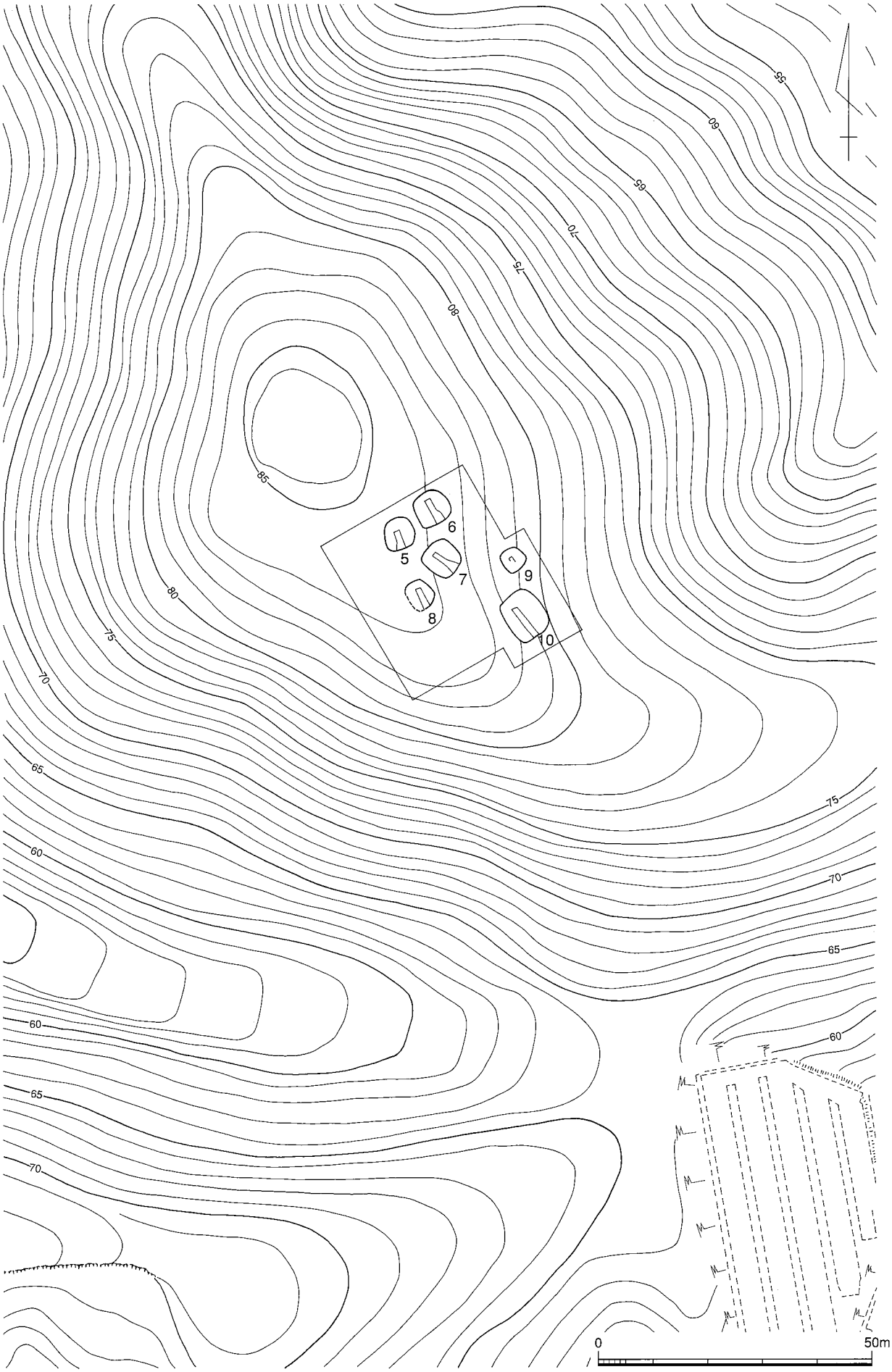


出土金属器(3)

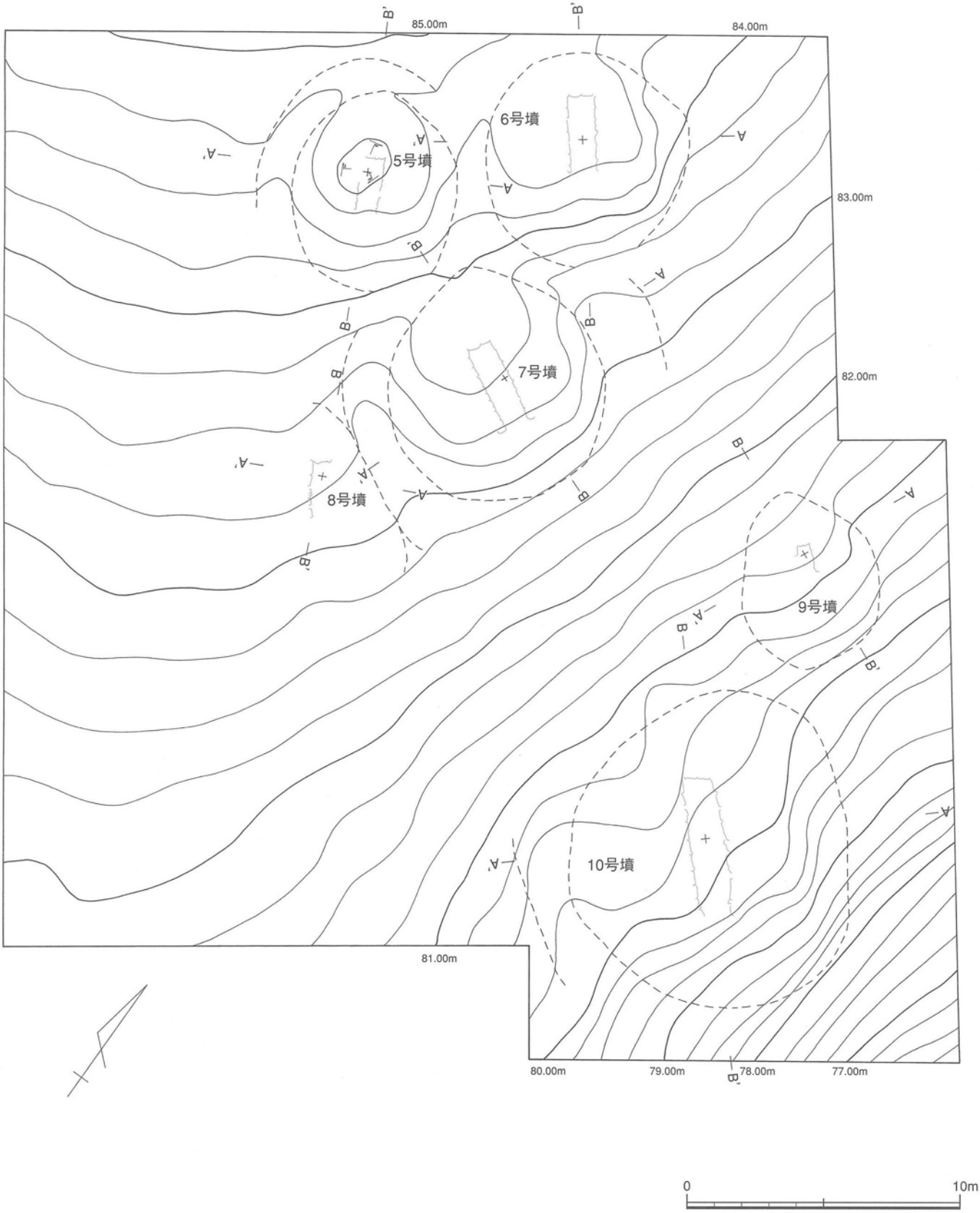

J1
J2
J3
J4
J5
J6
J7
J8
J9
J10
J11
J12
J13
J14
J15
J16
J17
J18
J19
J20
J21
J22
J23
J24
J25
J26
J27
J28
J29
J30
J31
J32
J33
J34
J35
J36
J37
J38
J39
J40
J41
J42
J43
J44
J45
J46
J47
J48
J49
J50
J51
J52
J53
J54
J55
J56
J57
J58
J59
J60
J61
J62
J63
J64
J65
J66
J67
J68
J69
J70
J71
J72
J73
J74
J75
J76
J77
J78
J79
J80
J81
J82
J83
J84
J85
J86
J87
J88
J89
J90
J91
J92
J93
J94
J95
J96
0
5cm

出土玉類

図版10　状覚山５～10号墳

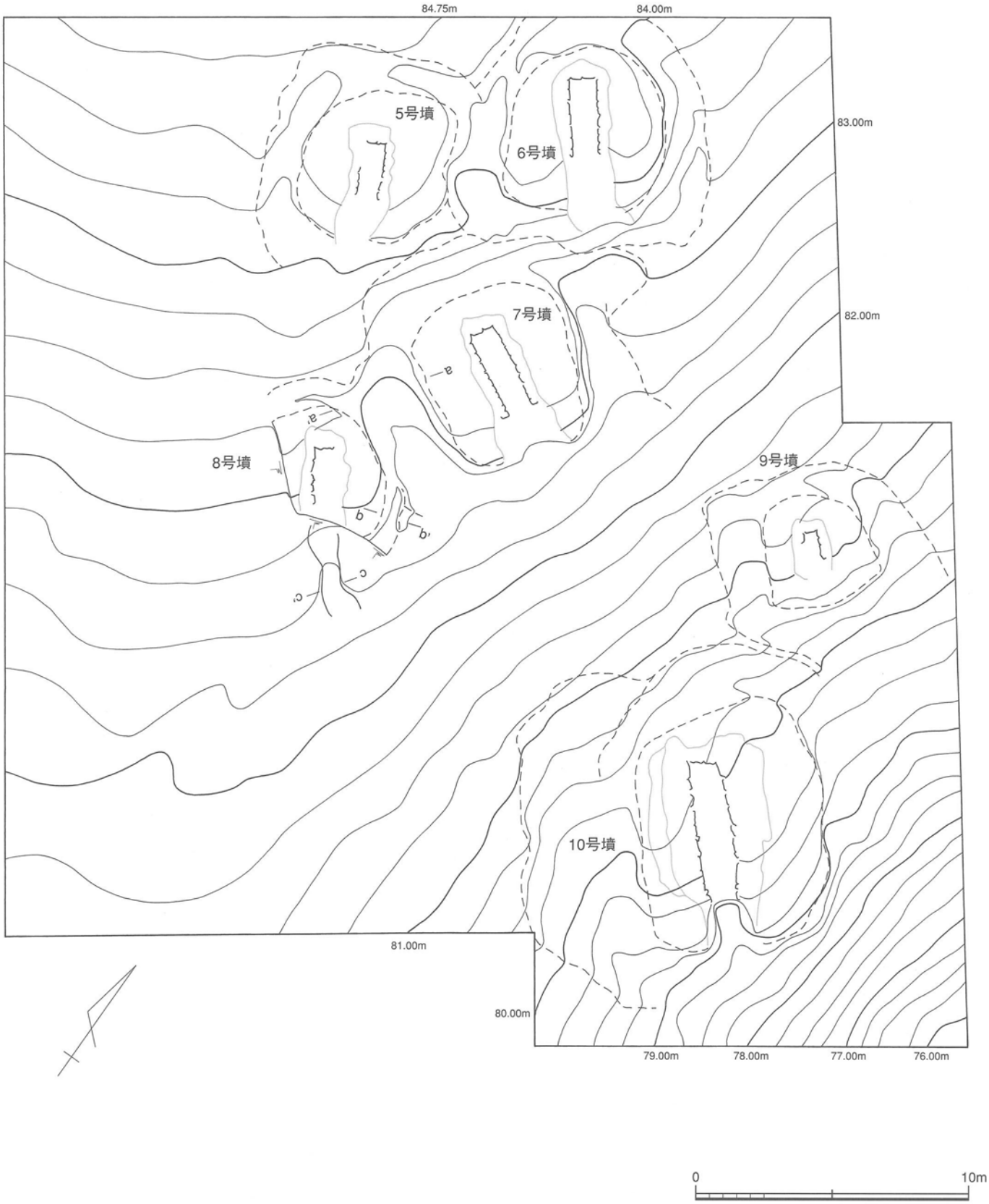


地形測量図


85.00m
84.00m
83.00m
82.00m
81.00m
80.00m
79.00m
78.00m
77.00m
5号墳
6号墳
7号墳
8号墳
9号墳
10号墳
A
A'
B
B'
0
10m

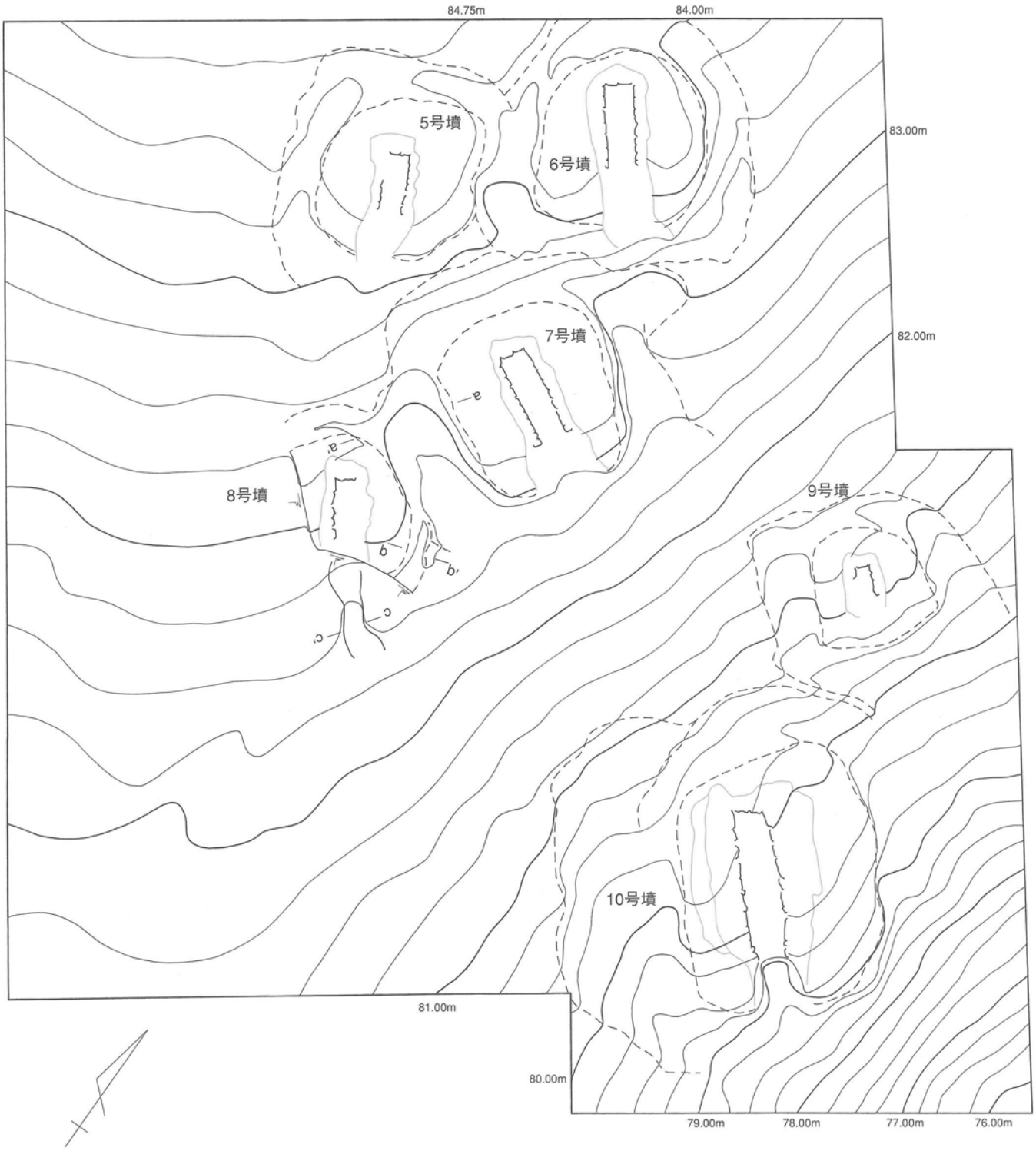
調査前測量図

図版12　状覚山５～10号墳

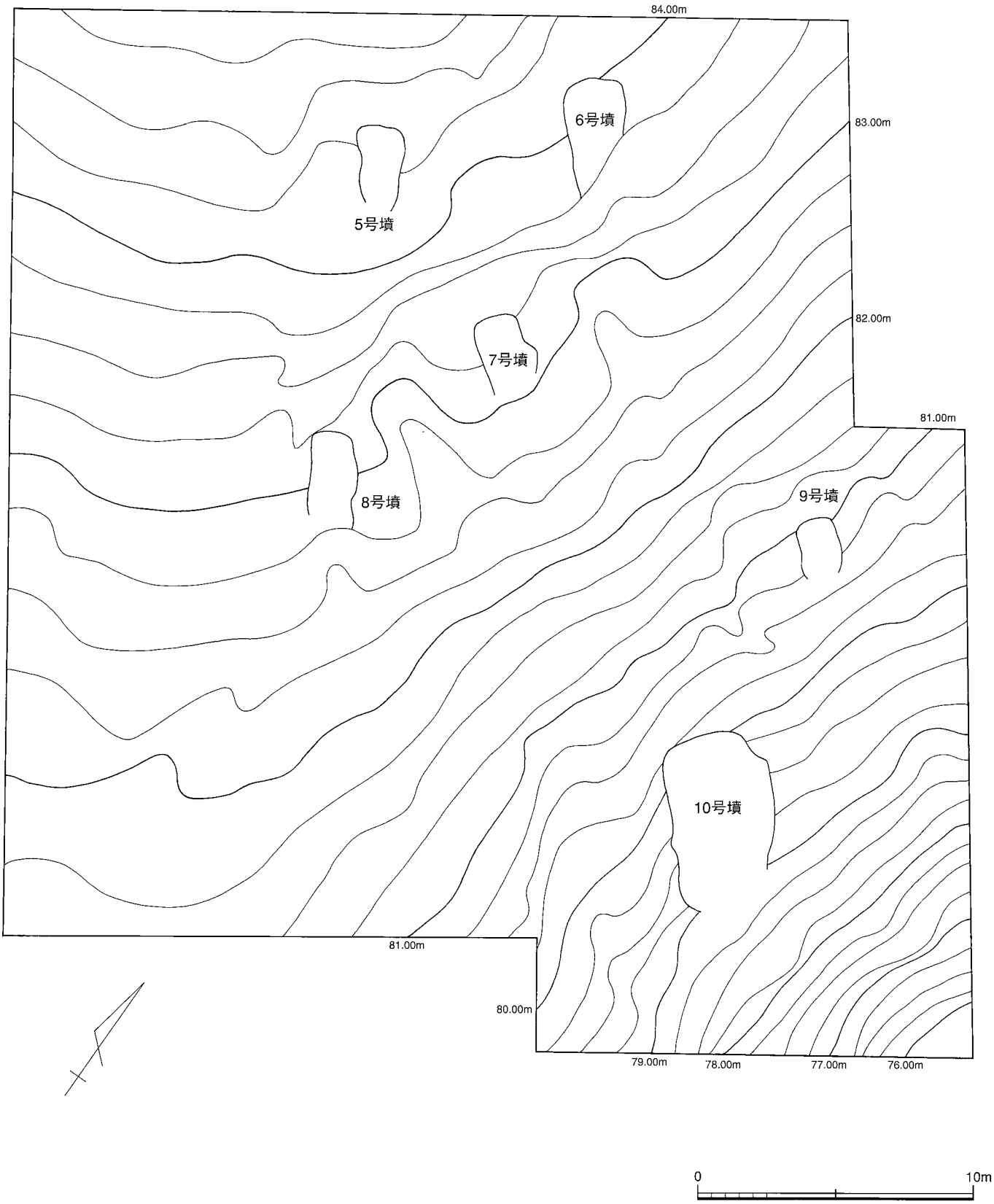


調査後測量図

図版12　状覚山５～10号墳

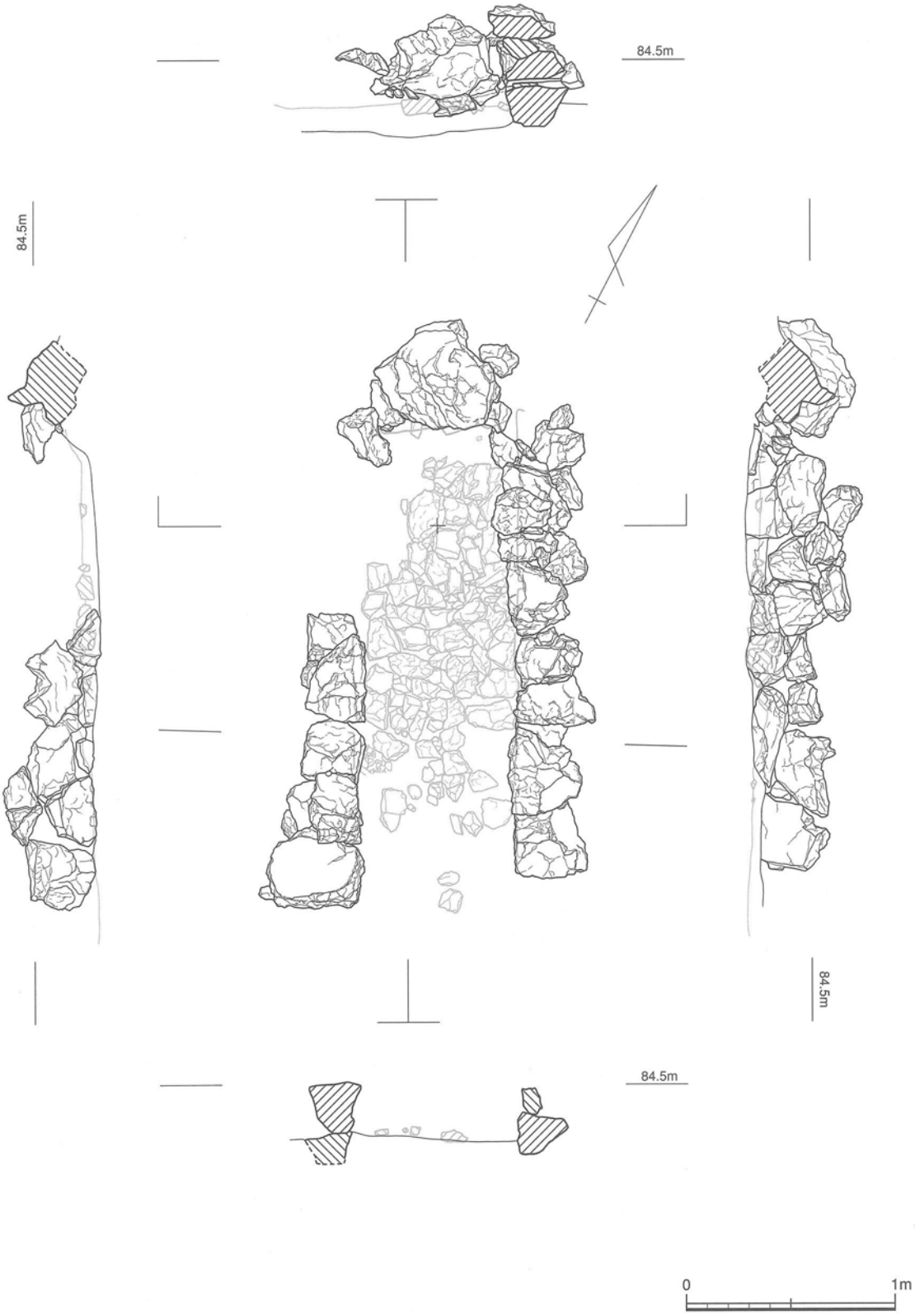


調査後測量図

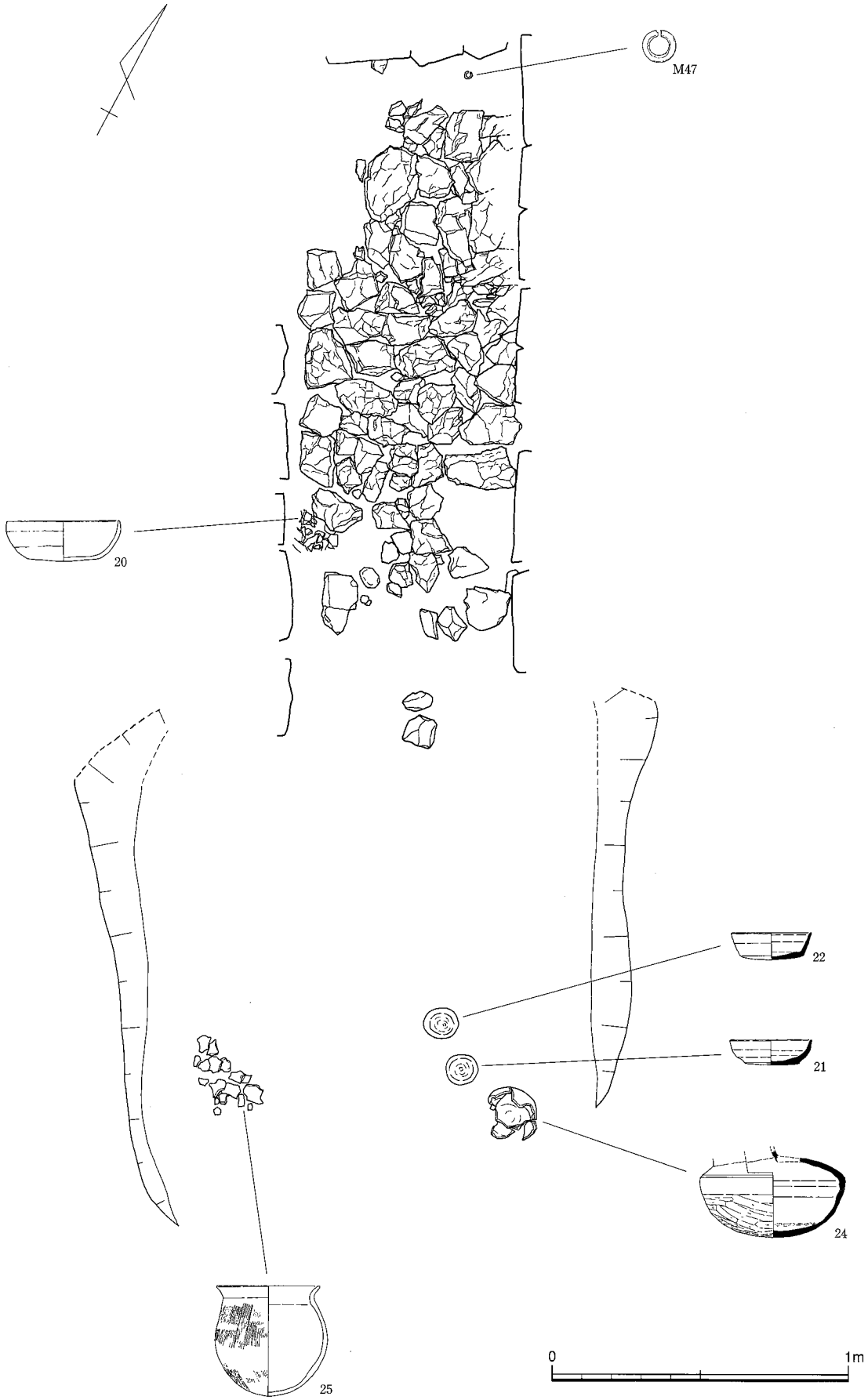

84.00m
83.00m
82.00m
81.00m
81.00m
80.00m
79.00m
78.00m
77.00m
76.00m
5号墳
6号墳
7号墳
8号墳
9号墳
10号墳
0
10m

墳丘盛土除去後測量図

図版14　状覚山５号墳



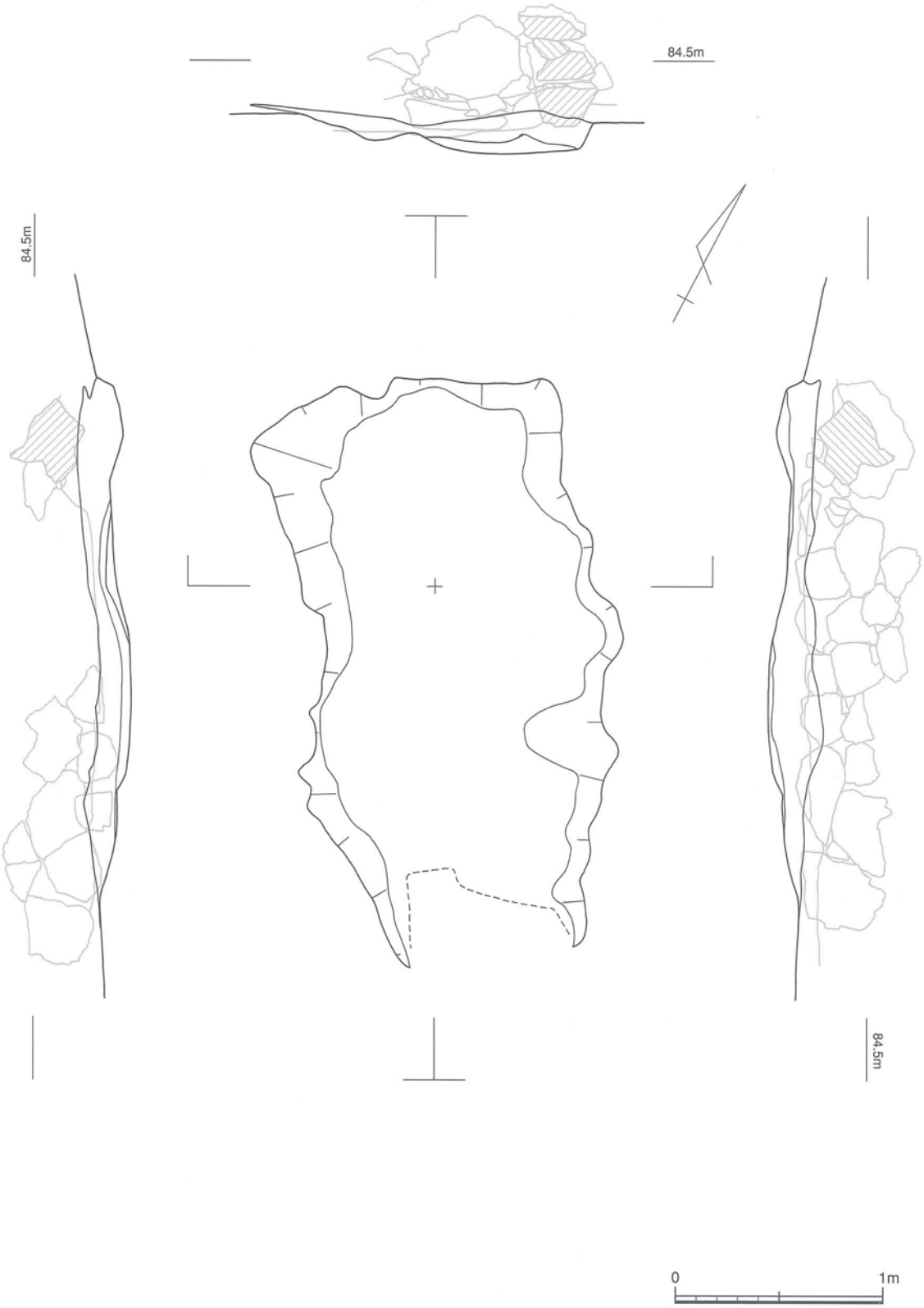
横穴式石室



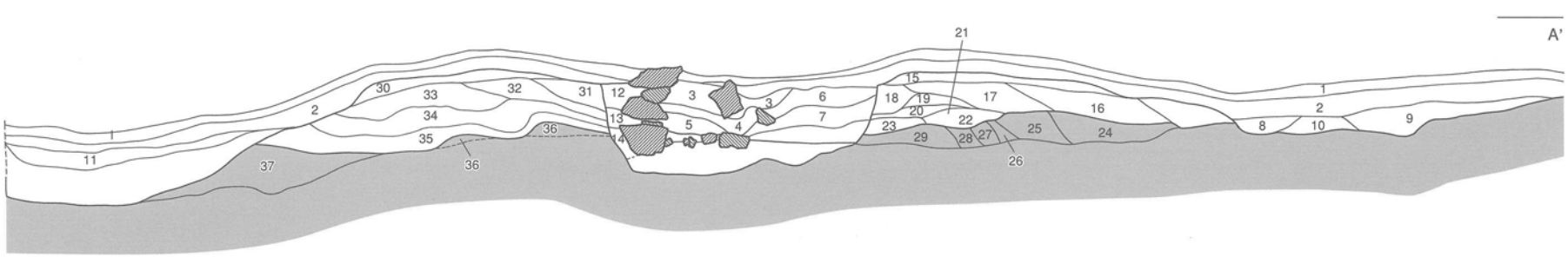
石室内敷石・遺物検出状況

図版16　状覚山５号墳

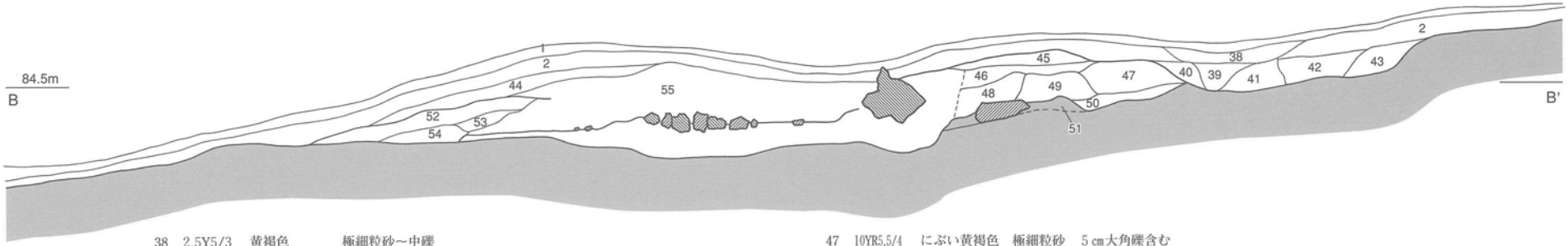
石室閉塞状況



墓壙

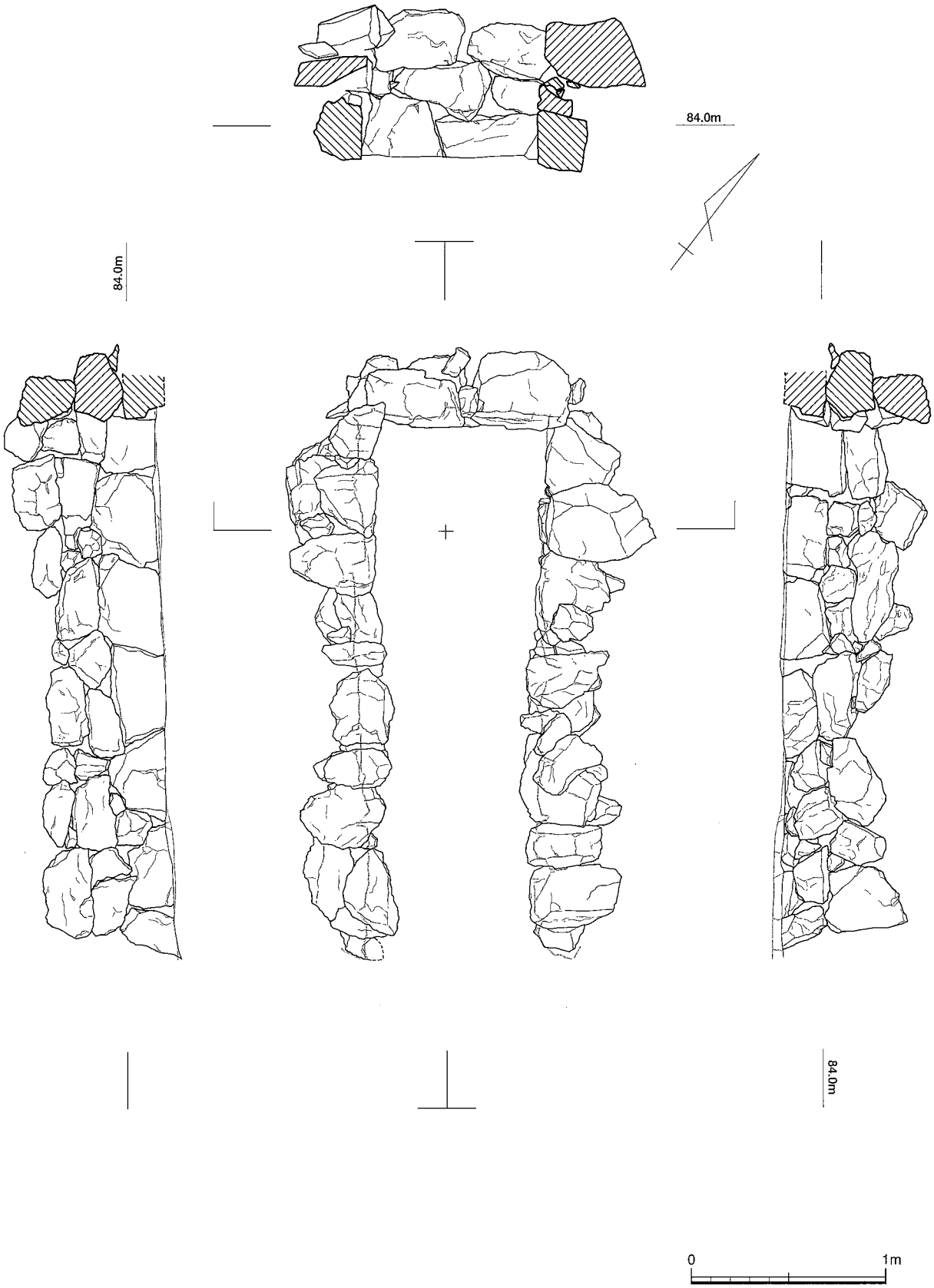


1	腐植土		
2	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～３㎝大角礫）含む
3	10YR7/4	にぶい黄橙色	細粒砂　３～８㎝大角礫含む
4	10YR5/6	黄褐色	細粒砂　２～４㎝大角礫含む
5	10YR5/8	黄褐色	細粒砂　６～10大角礫含む
6	10YR5/6	黄褐色	細粒砂～中粒砂　１～３㎝大角礫含む
7	10YR5/8	黄褐色	細粒砂　１～５㎝大角礫含む
8	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　４㎝大中礫多く含む
9	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　細礫～中礫少量含む
10	2.5Y6/5	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　１～３㎝大中礫少量含む
11	2.5Y4/6	オリーブ褐色	細粒砂で極細粒砂混じる　細礫～中礫含む
12	2.5Y6/8	明黄褐色	細粒砂～中粒砂　２～４㎝大角礫含む
13	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂　２～５㎝大礫含む
14	10YR6/6	明黄褐色	
15	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～３㎝大角礫）含む
16	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂～細粒砂　１～３㎝大角礫含む
17	10YR6/4	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　２～３㎝大角礫含む
18	2.5Y6/4	にぶい黄色	細粒砂　１～２㎝大角礫含む
19	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂
20	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂
21	10YR5/2	にぶい黄褐色	細粒砂～中粒砂
22	2.5Y5/4	黄褐色	細粒砂～中粒砂
23	2.5Y5/3	黄褐色	細粒砂
24	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂～細粒砂
25	10YR4/4	褐色	細粒砂
26	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂～細粒砂
27	10YR5.5/4	にぶい黄褐色	細粒砂　３㎝大円礫含む
28	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂　ややシルト質
29	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂　１～２㎝大角礫含む
30	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～３㎝大角礫）含む
31	10YR5/3	にぶい黄橙色	
32	10YR5/4	にぶい黄橙色	細粒砂～中粒砂　１～２㎝大角礫含む
33	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂
34	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂～細粒砂　１㎝大角礫含む
35	10YR6/3	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂
36	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂
37	10YR5.5/6	明黄褐色	シルト質極細粒砂



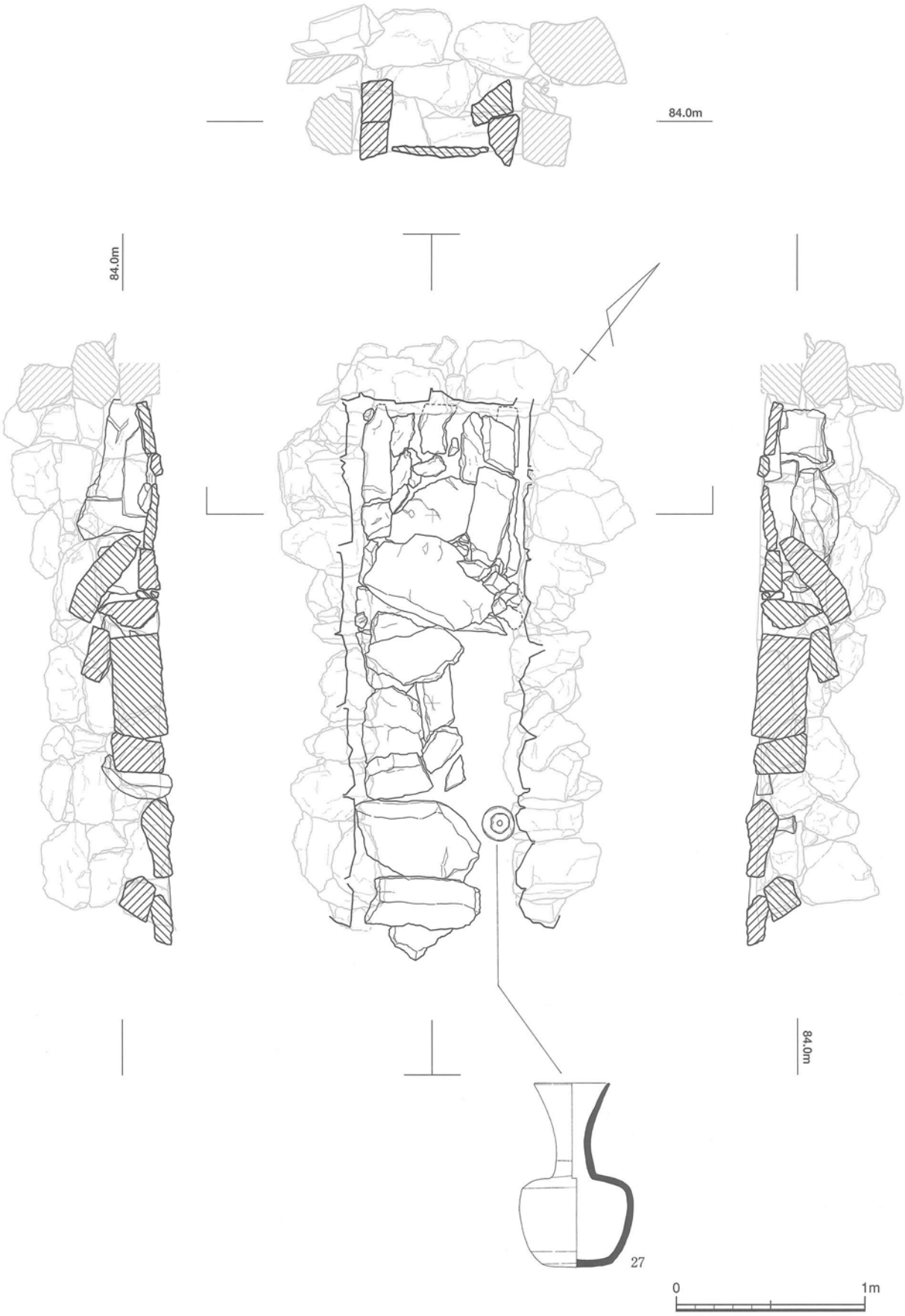
38	2.5Y5/3	黄褐色	極細粒砂～中礫
39	2.5Y5/2	黄褐色	細粒砂～中礫
40	2.5Y6/7	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　１～３㎝大中礫含む
41	2.5Y6/6	明黄褐色	シルト質極細粒砂～細粒砂　中礫・大礫含む
42	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中粒砂～中礫含む
43	2.5Y6/5	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～細礫含む
44	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～３㎝大角礫）含む
45	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～３㎝大角礫）含む
46	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂　２～５㎝大角礫含む
47	10YR5.5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂　５㎝大角礫含む
48	10YR5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂
49	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂
50	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂　ややシルト質
51	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂　２～４㎝大角礫含む
52	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫含む
53	2.5Y6/8	明黄褐色	細粒砂　中礫含む
54	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫多く含む
55	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂　２㎝大中礫含む

墳丘土層断面

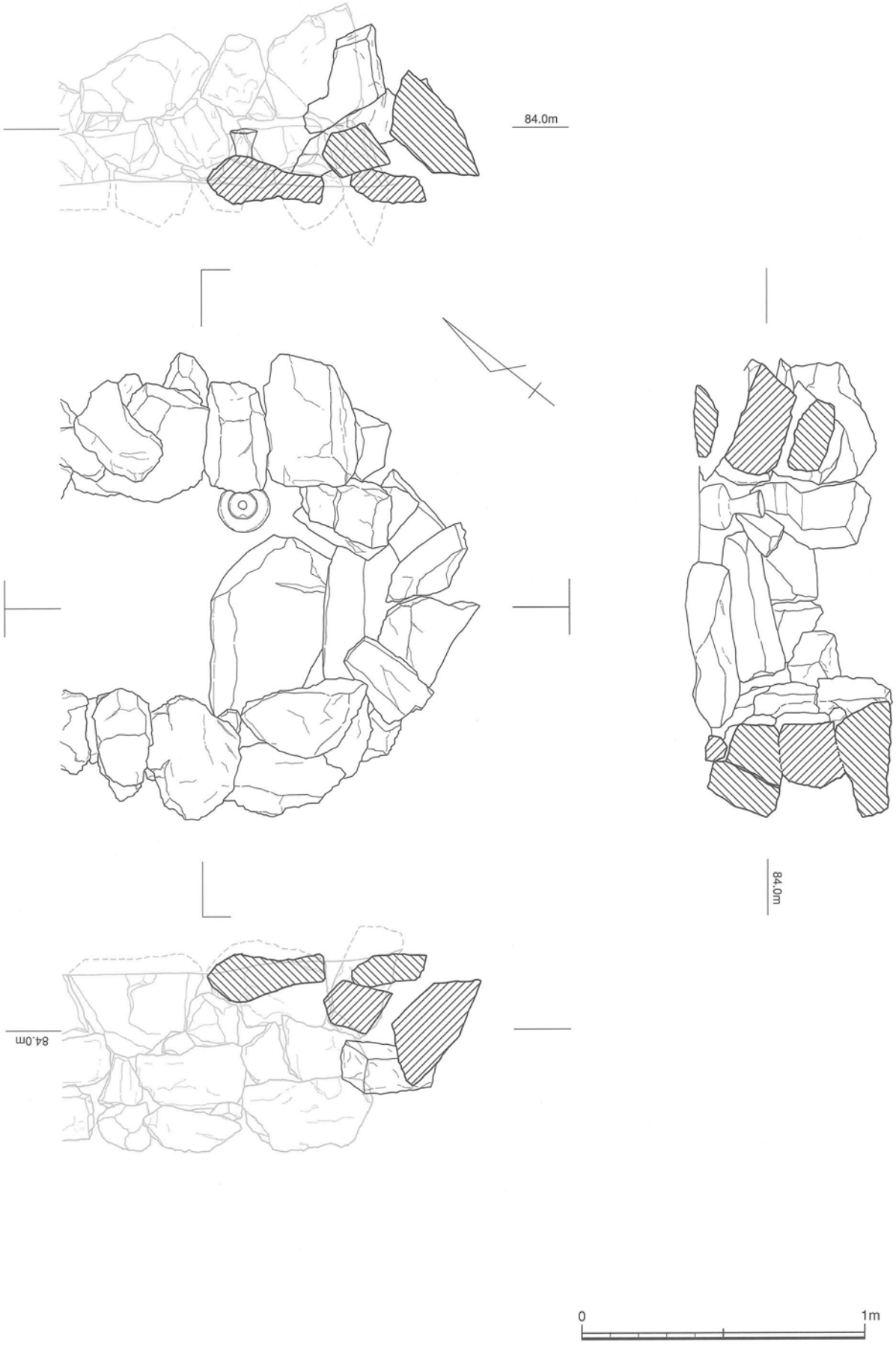


横穴式石室

図版20　状覚山６号墳

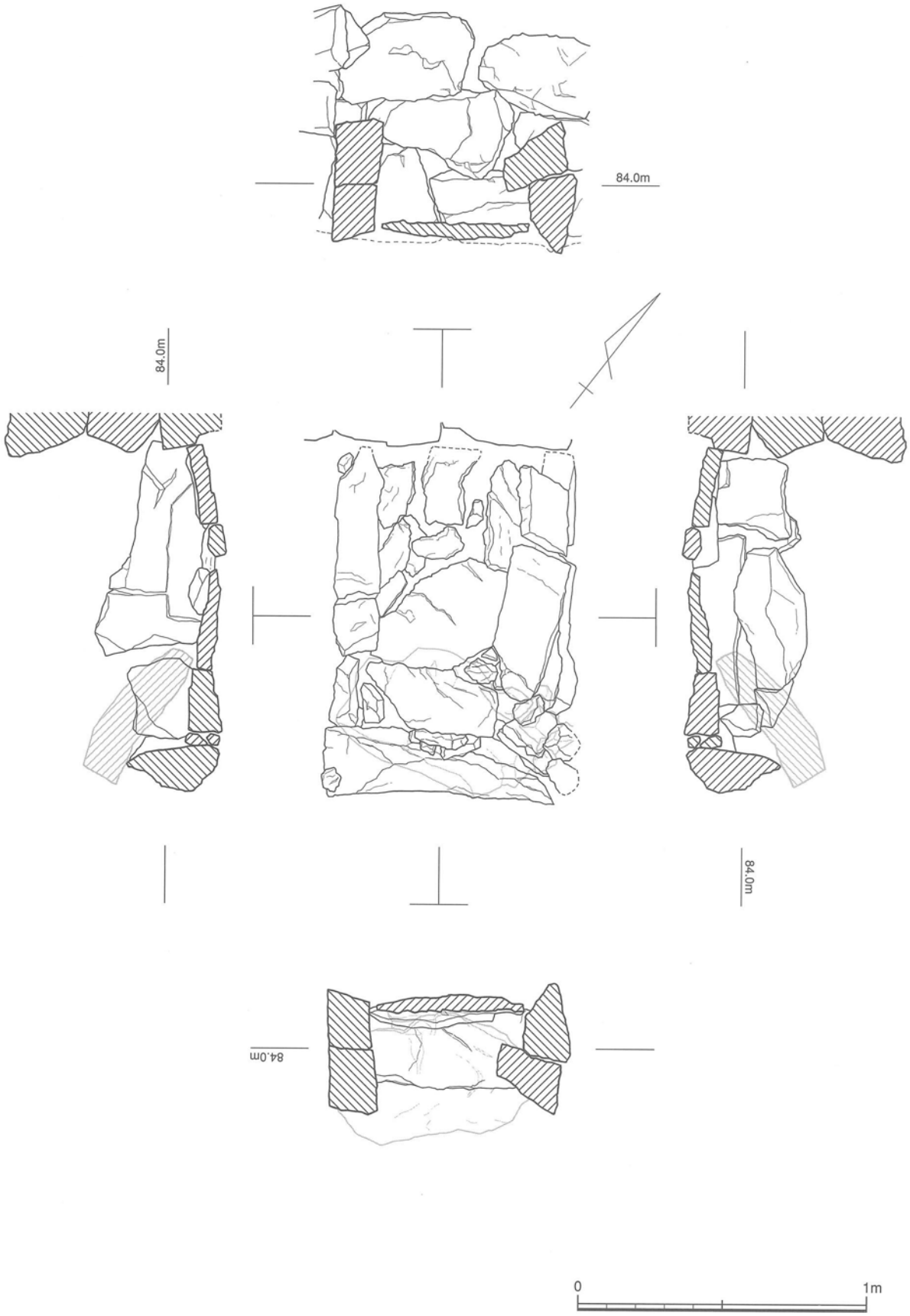


石棺・遺物検出状況

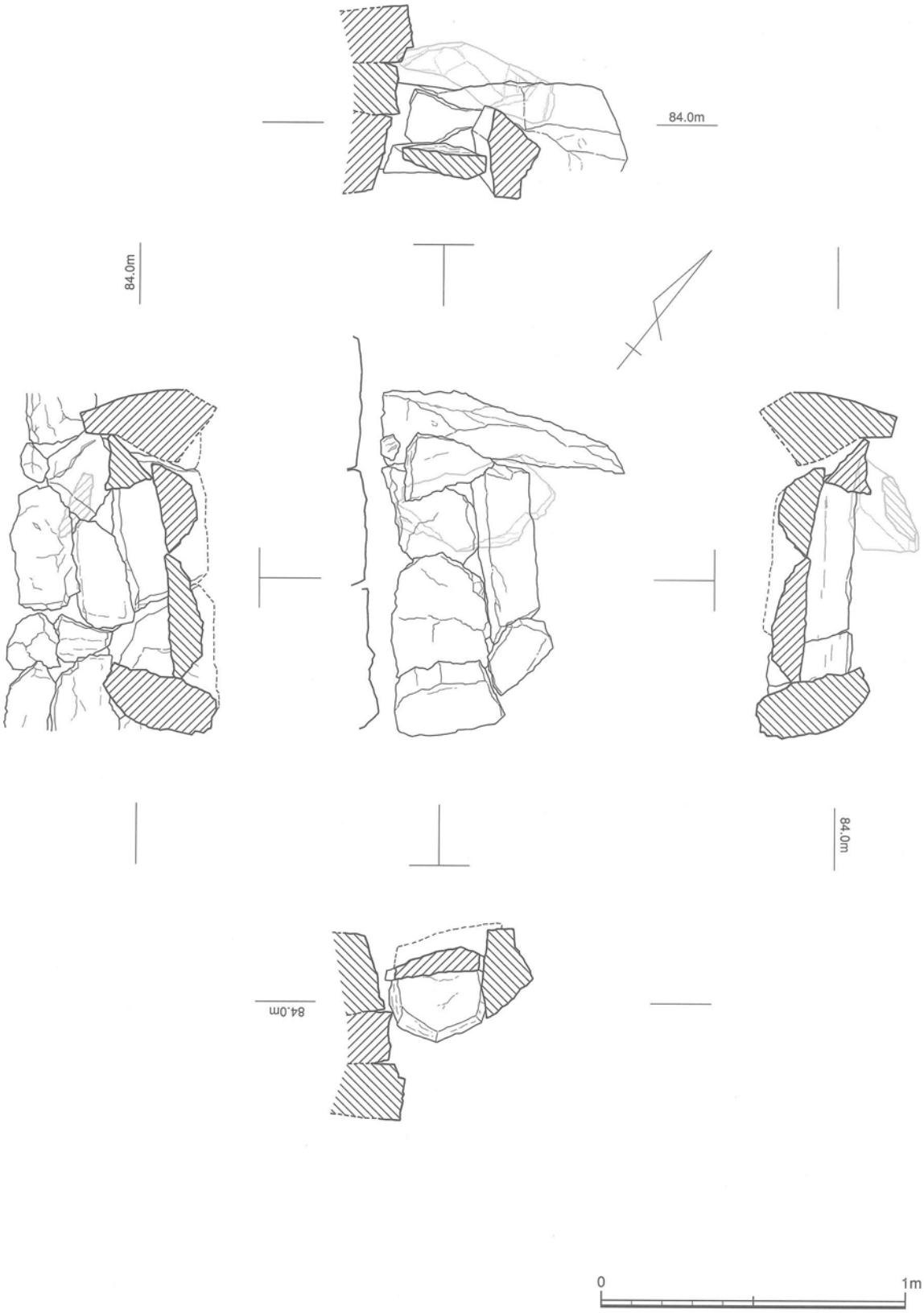


石室閉塞状況

図版22　状覚山６号墳

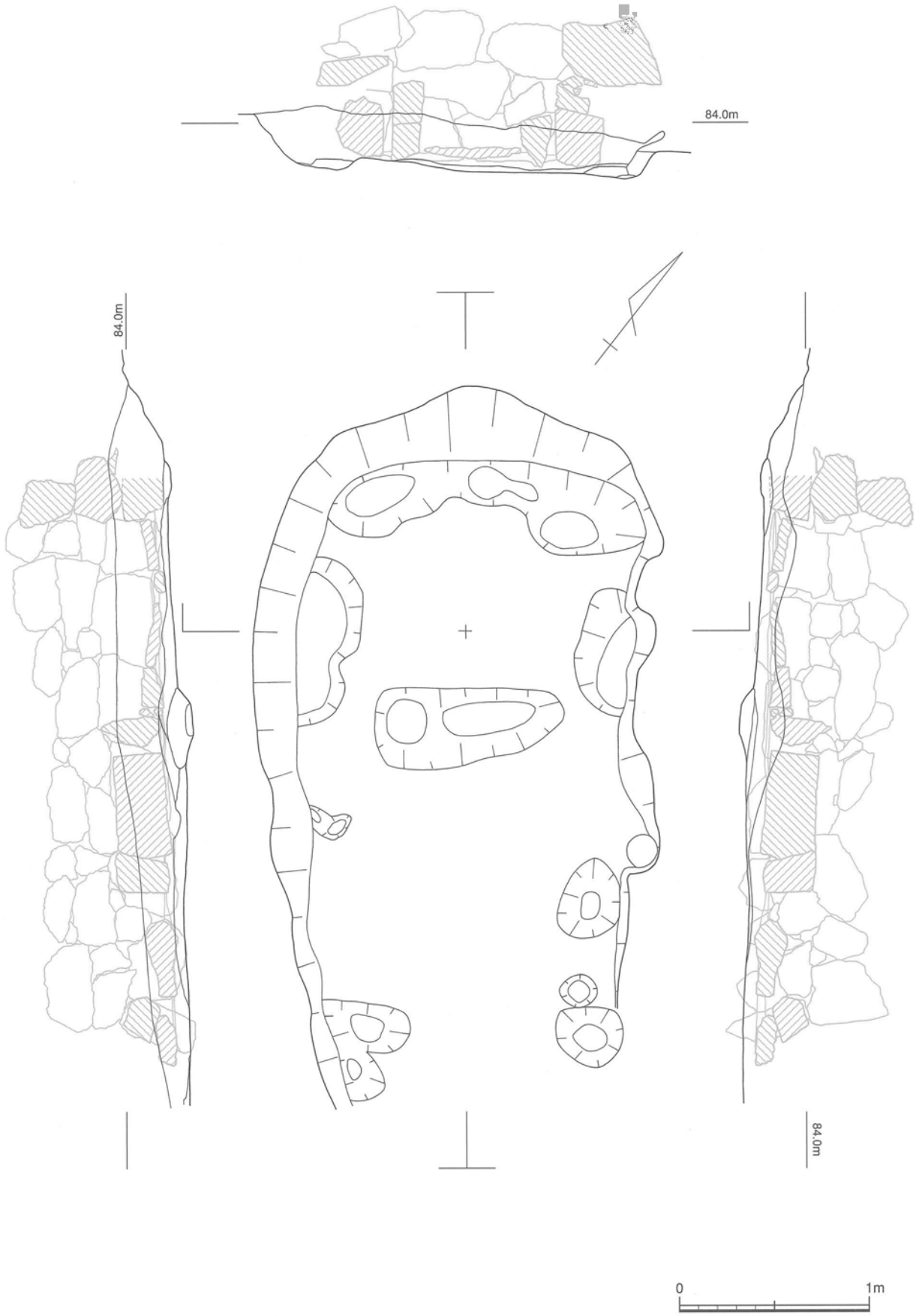


１号棺

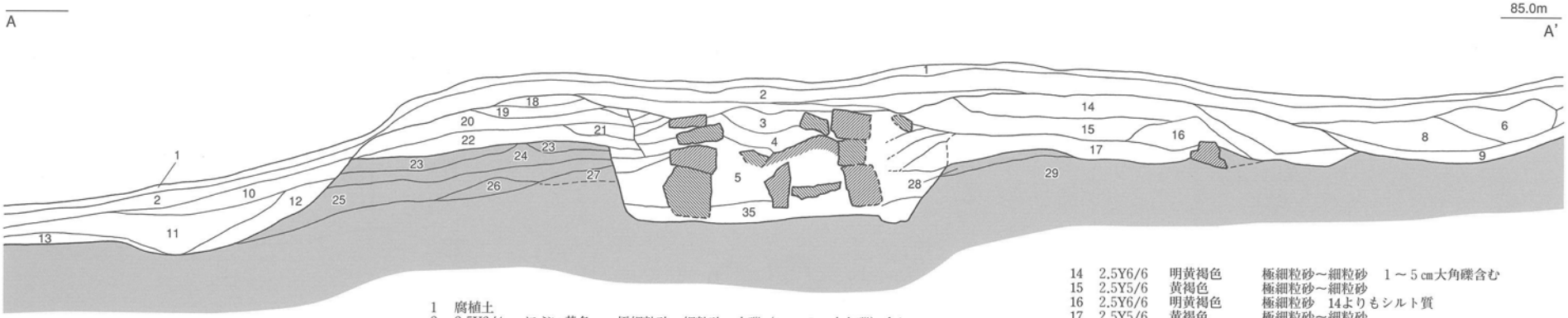


２号棺

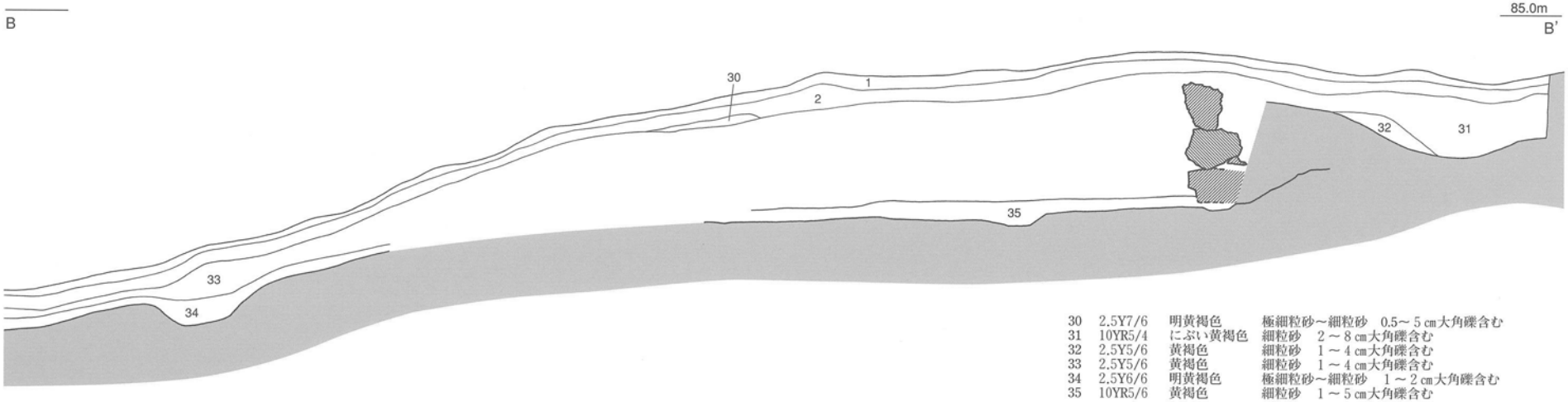
図版24　状覚山６号墳



墓壙



1	腐植土		
2	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～5㎝大角礫）含む
3	2.5Y6/6	明黄褐色	細粒砂　中礫（0.5～1㎝大角礫）含む
4	10YR5/6	黄褐色	細粒砂～中粒砂　中礫（2～4㎝大角礫）含む
5	10YR5/8	黄褐色	細粒砂
6	2.5Y6/4	にぶい黄色	シルト質極細粒砂～細粒砂　中礫（4㎝大角礫）含む
7	2.5Y6/6	明黄褐色	シルト質極細粒砂～細粒砂　1㎝大角礫含む
8	2.5Y5/4	黄褐色	極細粒砂～細粒砂　2～5㎝大角礫含む
9	2.5Y7/6	明黄褐色	シルト質極細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む
10	2.5Y5/4	黄褐色	極細粒砂～細粒砂　1～2㎝大角礫含む
11	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂　2～5㎝大角礫多く含む
12	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂
13	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂　1～5㎝大角礫多く含む
14	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　1～5㎝大角礫含む
15	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂
16	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　14よりもシルト質
17	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂
18	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
19	10YR6/4	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂
20	10YR6/3	にぶい黄橙色	細粒砂
21	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
22	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂　3～5㎝大角礫含む
23	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂　2～3㎝大角礫含む（地山）
24	10YR5/6	褐色	細粒砂（旧表土か）（地山）
25	2.5Y6/6	明黄褐色	細粒砂（地山）
26	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂～中粒砂（地山）
27	2.5Y6/6	明黄褐色	細粒砂～中粒砂（地山）
28	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂（地山）
29	2.5Y7/6	明黄褐色	細粒砂（地山）

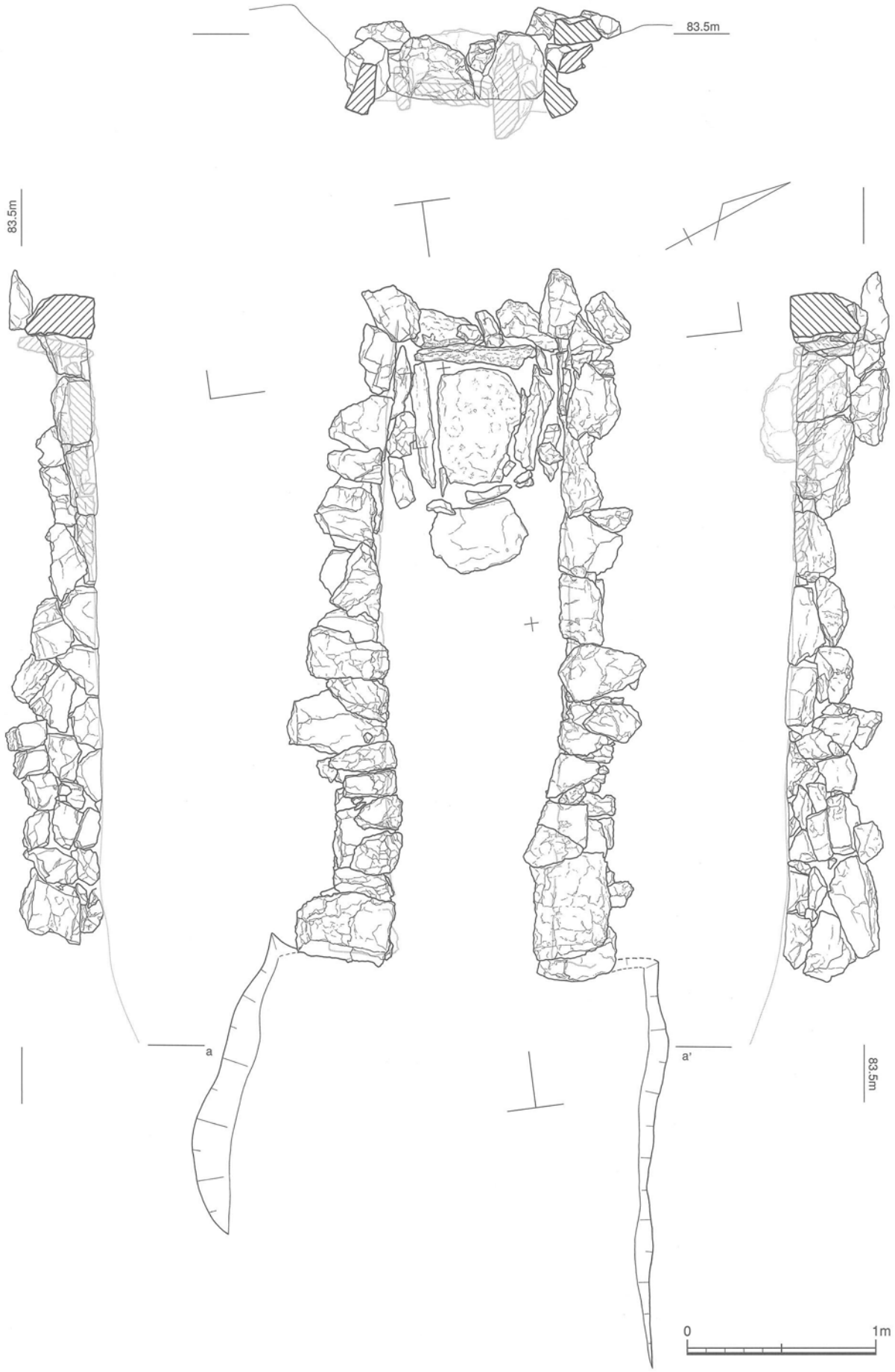


30	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　0.5～5㎝大角礫含む
31	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂　2～8㎝大角礫含む
32	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂　1～4㎝大角礫含む
33	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂　1～4㎝大角礫含む
34	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　1～2㎝大角礫含む
35	10YR5/6	黄褐色	細粒砂　1～5㎝大角礫含む

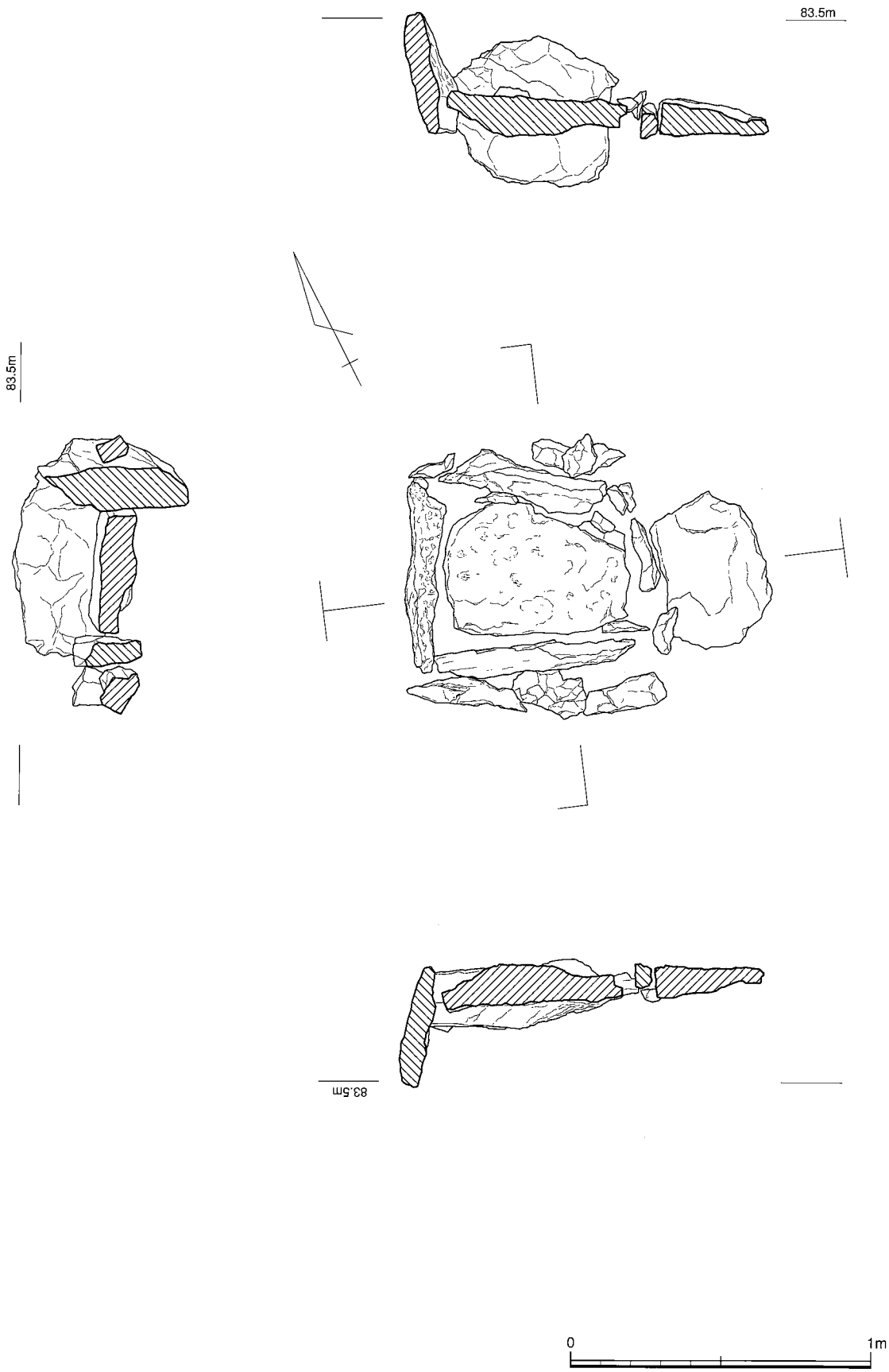
0　2m

墳丘土層断面

図版26　状覚山７号墳

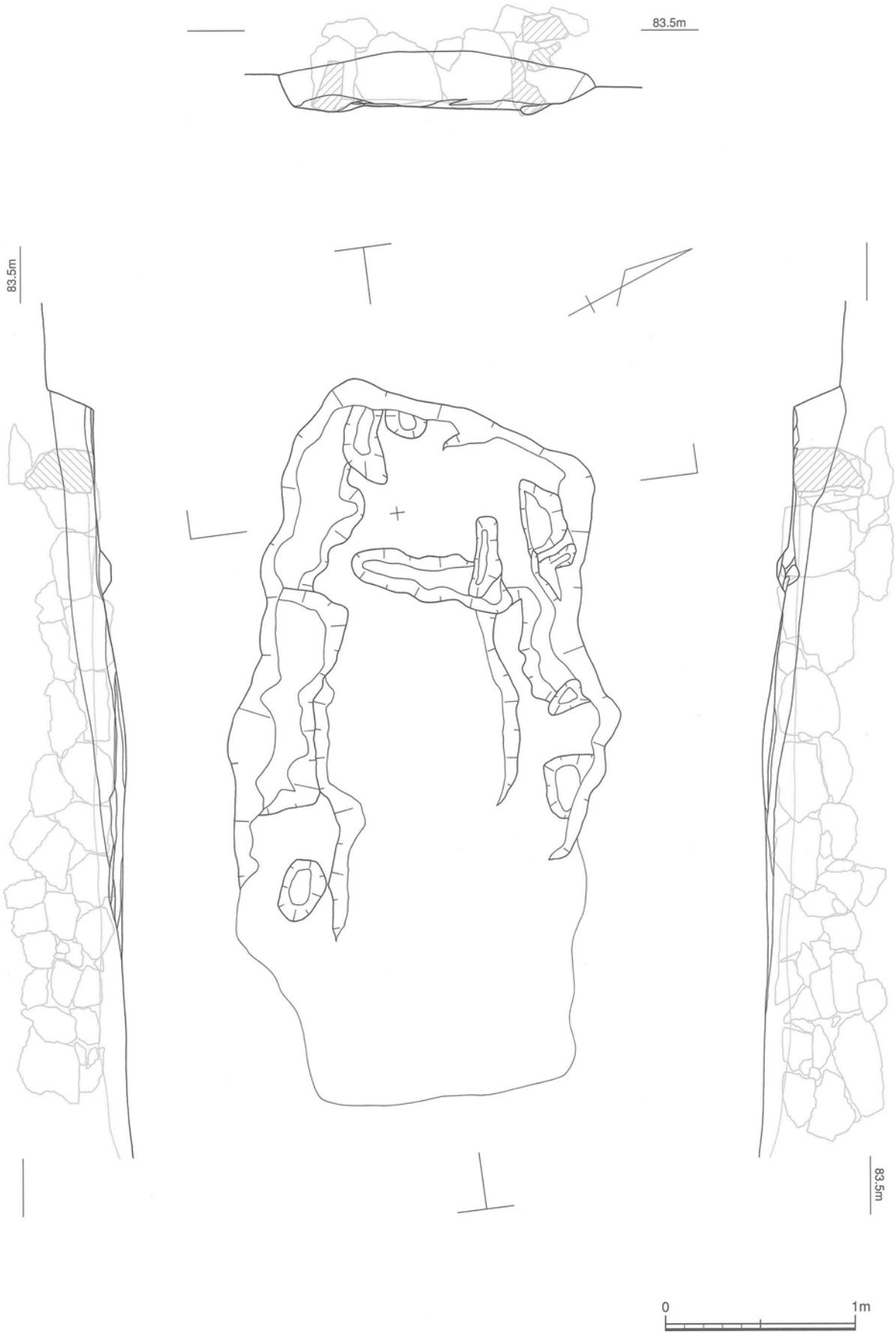


横穴式石室

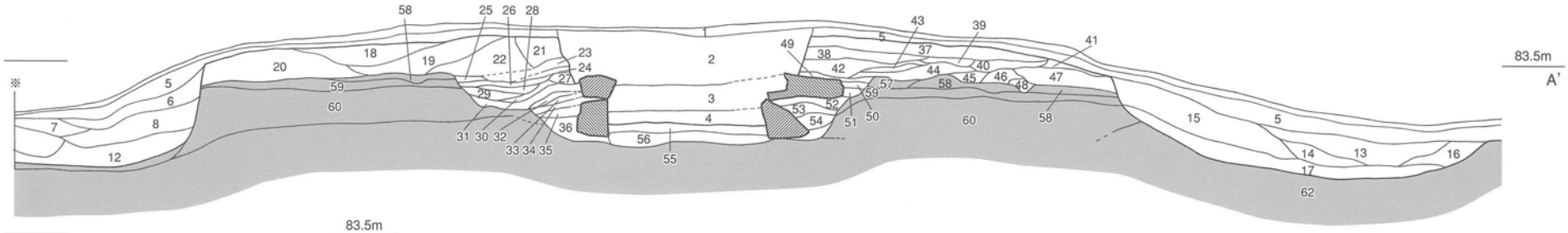


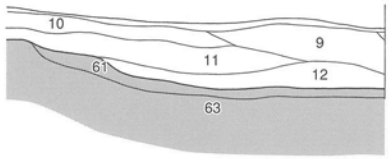
石棺

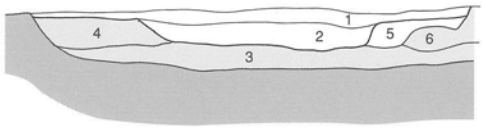
図版28　状覚山７号墳



墓壙

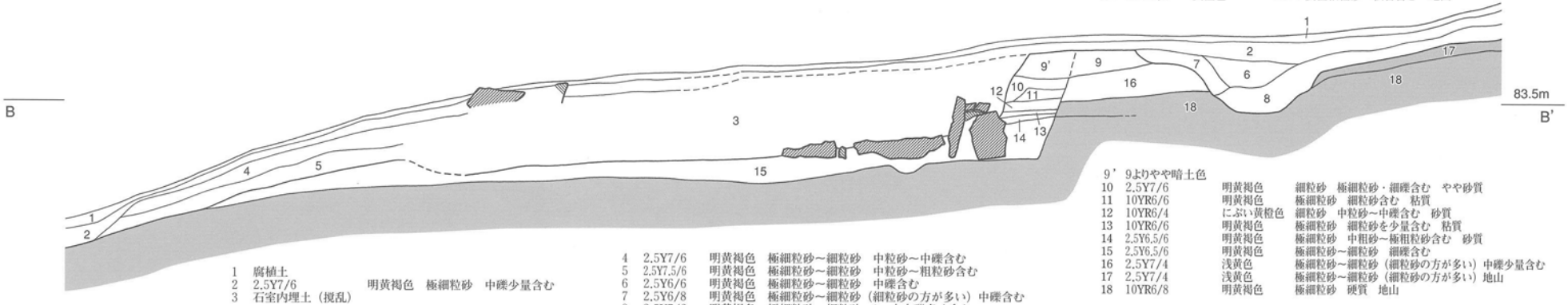






1	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～中礫含む（前庭部埋土）
2	2.5Y7.5/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む（前庭部埋土）
3	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　細礫含む（墳丘盛土　前庭部の底）
4	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂　極細粒砂・マンガン・中礫含む　石室墓壙掘削後石室構築時に埋めた土
5	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂　極細粒砂・マンガン・中礫含む
6	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂（墳丘盛土）

1	腐植土		
2	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂で細粒砂含む　0.5～8cm大の角礫含む
3	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂　0.5～4cm大の角礫含む
4	2.5Y6/5	明黄褐色	極細粒砂　0.5～10cm大の角礫含む
5	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中礫少量含む
6	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　中粒砂含む
7	2.5Y5/5	黄褐色	極細粒砂　中礫少量含む
8	2.5Y6/7	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂含む
9	2.5Y5/4	黄褐色	極細粒砂　細粒砂含む　中礫角礫多く含む　土器含む
10	2.5Y6/5	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂
11	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂含む
12	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂含む
13	2.5Y6/3	にぶい黄色	極細粒砂　中礫・土器含む
14	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む　粘質
15	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　粗粒砂含む　粘質
16	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む　粘質
17	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂　細粒砂～中礫含む　粘質
18	2.5Y7/3	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂含む
19	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む
20	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～細礫含む
21	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む
22	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む　粉っぽい
23	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む
24	10YR6/3	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　中礫～1cm大中礫含む　砂質
25	10YR6/3	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～中礫含む　マンガン含む　砂質
26	2.5Y6/7	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂含む　粘質　硬質
27	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む　粘質
28	2.5Y7/7	黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂含む　粘質　硬質
29	2.5Y6.5/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～中礫含む　マンガン含む　砂質　軟質
30	2.5Y8/6	黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂含む　粘質　硬質
31	10YR6/4	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～中礫含む　マンガン含む　砂質　軟質
32	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む　粘質
33	10YR6/3	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　細礫～1cm大中礫含む　砂質
34	2.5Y7/8	黄色	極細粒砂～細粒砂　細礫含む　粘質　硬質
35	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細砂粒　細礫含む
36	2.5Y6.5/8	黄色	極細粒砂～細砂粒　細礫～大礫含む
37	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む
38	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫～2cm大中礫含む
39	2.5Y8/4	淡黄色	極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含む　粉っぽい
40	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含む
41	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂含む
42	2.5Y6/5	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　細礫含む
43	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む
44	2.5R6/8	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂～中粒砂含む
45	2.5Y7/7	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂含む
46	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂含む
47	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～中礫含む
48	10YR7/2	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む　中礫・マンガン含む
49	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細礫含む　粘質
50	10YR6/3	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　細礫～1cm大中礫含む　砂質
51	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　極粗粒砂含む
52	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　極粗粒砂含む
53	10YR6/3	にぶい黄橙色	極細粒砂～細粒砂　細礫～1cm大中礫含む　砂質
54	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～細礫含む　やや砂質
55	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む　締まる
56	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含む　締まる
57	10YR6/2	灰黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫・マンガン含む　旧表土
58	2.5Y7/3	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　中礫・マンガン含む　旧表土
59	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～細礫含む　地山が旧表土に影響を受けた土
60	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む　地山
61	2.5Y7/8	黄色	極細粒砂　63の土壌化層　地山
62	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫含む　地山
63	10YR7/8	黄橙色	シルト質極細粒砂　軟岩含む　地山

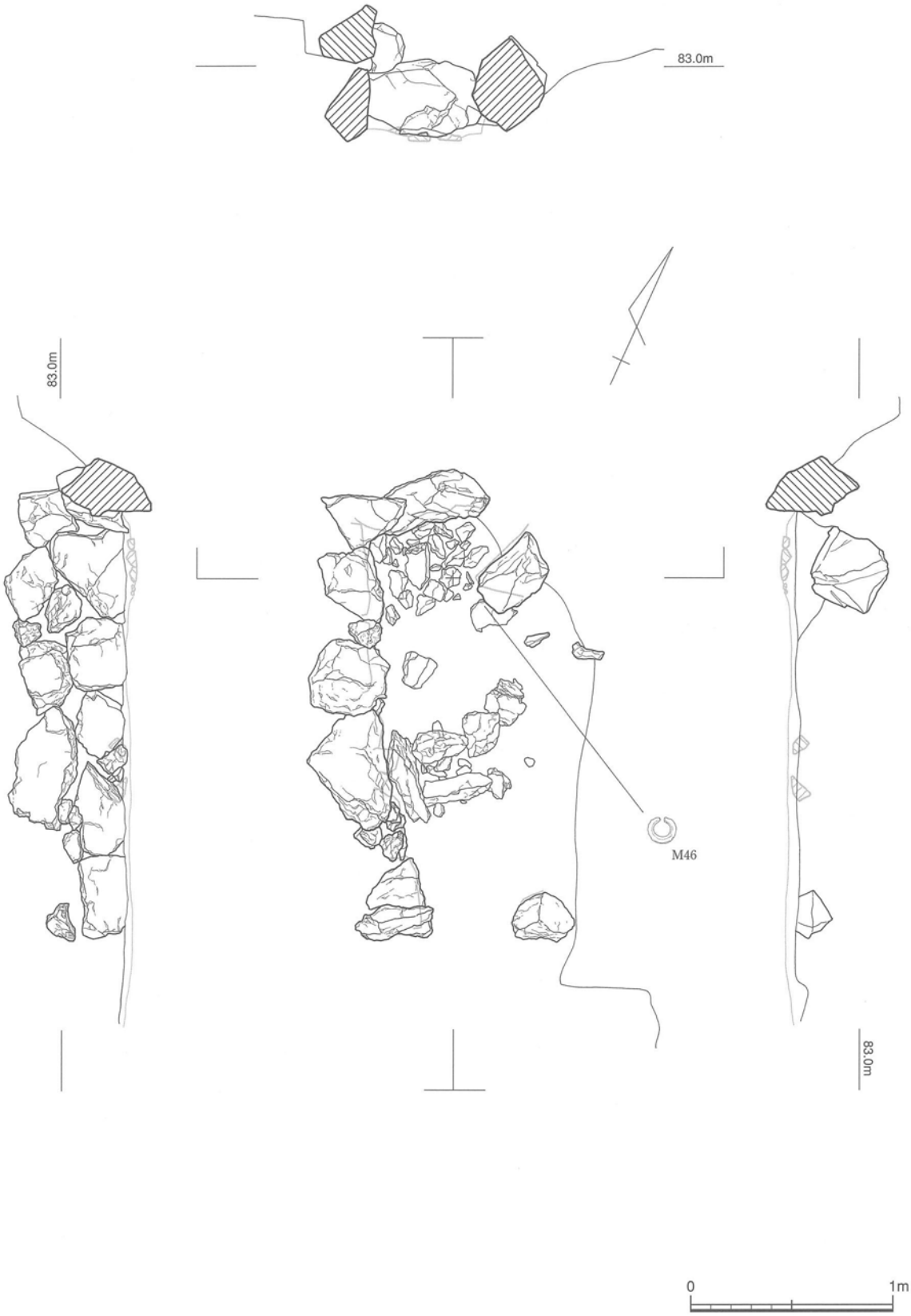


1	腐植土		
2	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中礫少量含む
3	石室内埋土（撹乱）		
4	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～中礫含む
5	2.5Y7.5/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～粗粒砂含む
6	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫含む
7	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂（細粒砂の方が多い）中礫含む
8	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　3cm大中礫多く含む
9	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂

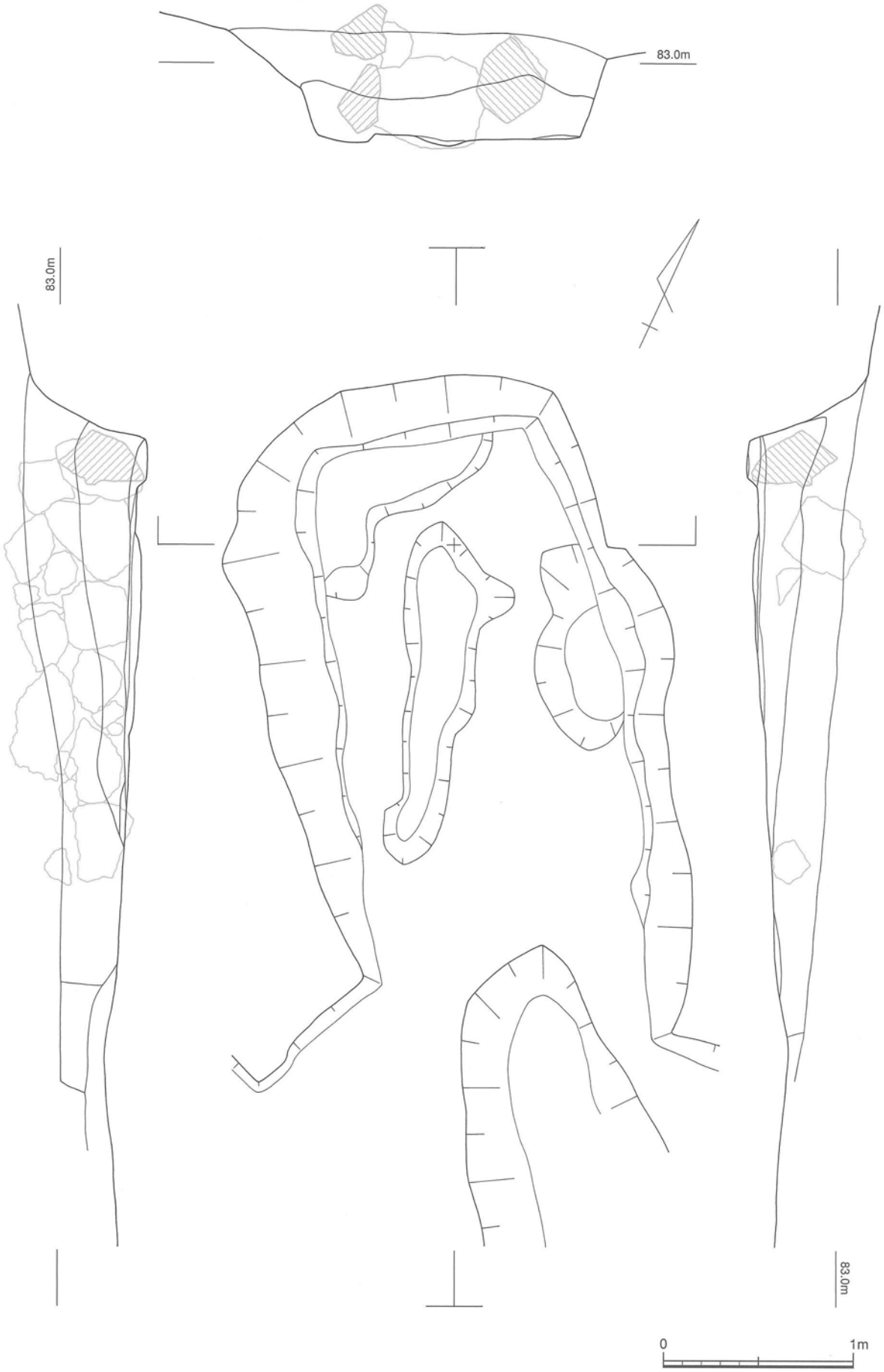
9'	9よりやや暗土色		
10	2.5Y7/6	明黄褐色	細粒砂　極細粒砂・細礫含む　やや砂質
11	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂含む　粘質
12	10YR6/4	にぶい黄橙色	細粒砂　中粒砂～中礫含む　砂質
13	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂を少量含む　粘質
14	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂　中粗砂～極粗粒砂含む　砂質
15	2.5Y6.5/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　細礫含む
16	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂（細粒砂の方が多い）中礫少量含む
17	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂（細粒砂の方が多い）地山
18	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂　硬質　地山

墳丘・前庭部土層断面

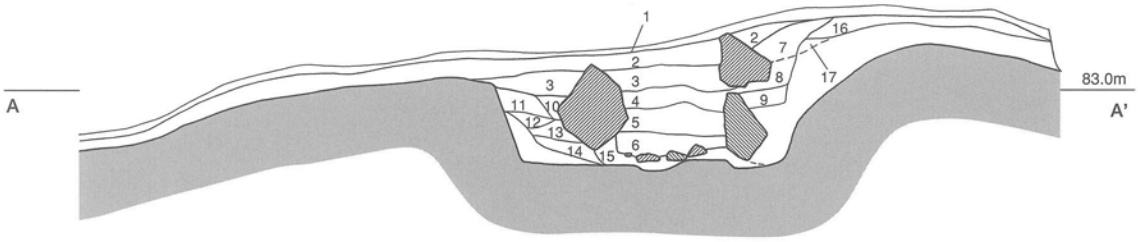
0　2m



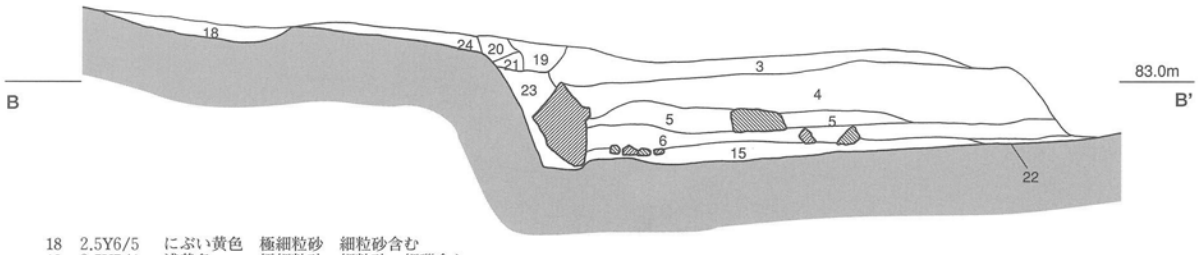
横穴式石室・遺物検出状況



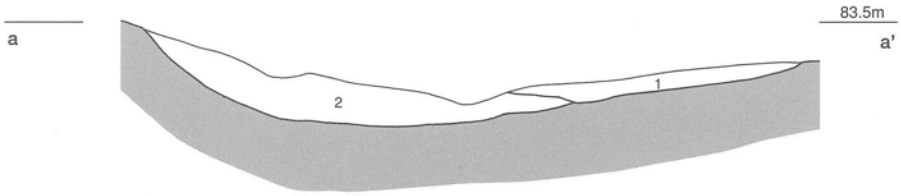
墓 壙



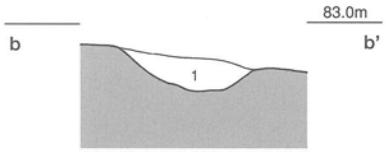
1　腐植土
2　2.5Y6/4　にぶい黄色　極細粒砂～細粒砂　中礫（0.5～3cm大角礫含む）
3　2.5Y6/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　細礫含む
4　2.5Y7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　細礫少量含む
5　2.5Y6/8　明黄褐色　極細粒砂　細粒砂～細礫含む
6　10YR5/6　黄褐色　極細粒砂
7　10YR7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　粗粒砂含む
8　10YR7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～細礫含む
9　10YR7/8　黄橙色　極細粒砂　粗粒砂含む
10　10YR8/6　黄色　極細粒砂～細粒砂　細礫含む
11　10YR6/8　明黄褐色　極細粒砂
12　10YR7/8　黄橙色　極細粒砂　軟質
13　10YR7/6　明黄褐色　極細粒砂
14　10YR7/8　黄橙色　極細粒砂　粗粒砂～細礫含む　硬質
15　10YR5/6　黄褐色　極細粒砂　極粗粒砂含む
16　2.5Y7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　粗粒砂～細礫含む
17　10YR7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　細礫～中礫含む



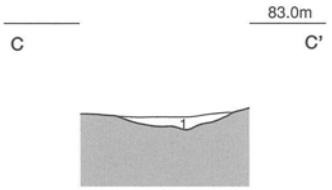
18　2.5Y6/5　にぶい黄色　極細粒砂　細粒砂含む
19　2.5Y7/4　浅黄色　極細粒砂～細粒砂　細礫含む
20　2.5Y7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　細礫含む
21　10YR6/6　明黄褐色　極細粒砂　細粒砂含む
22　10YR6/6　明黄褐色　極細粒砂
23　2.5Y7/8　黄色　極細粒砂～細粒砂　硬質
24　2.5Y7/6　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂



1　2.5Y6/5　にぶい黄色　極細粒砂　細粒砂含む
2　分層及び土層名省略

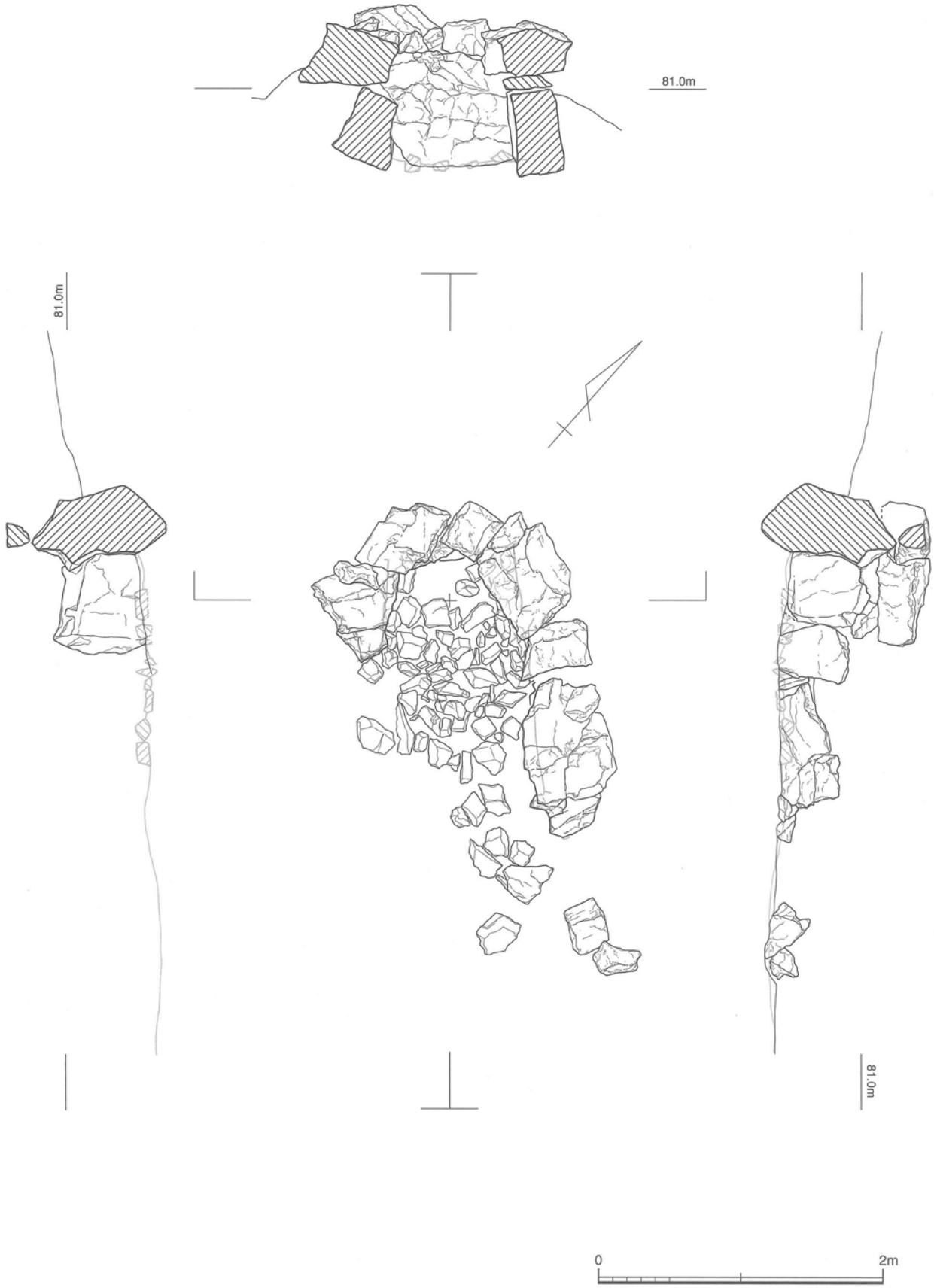


1　2.5Y6/5　明黄褐色　シルト質極細粒砂～細粒砂　細礫含む



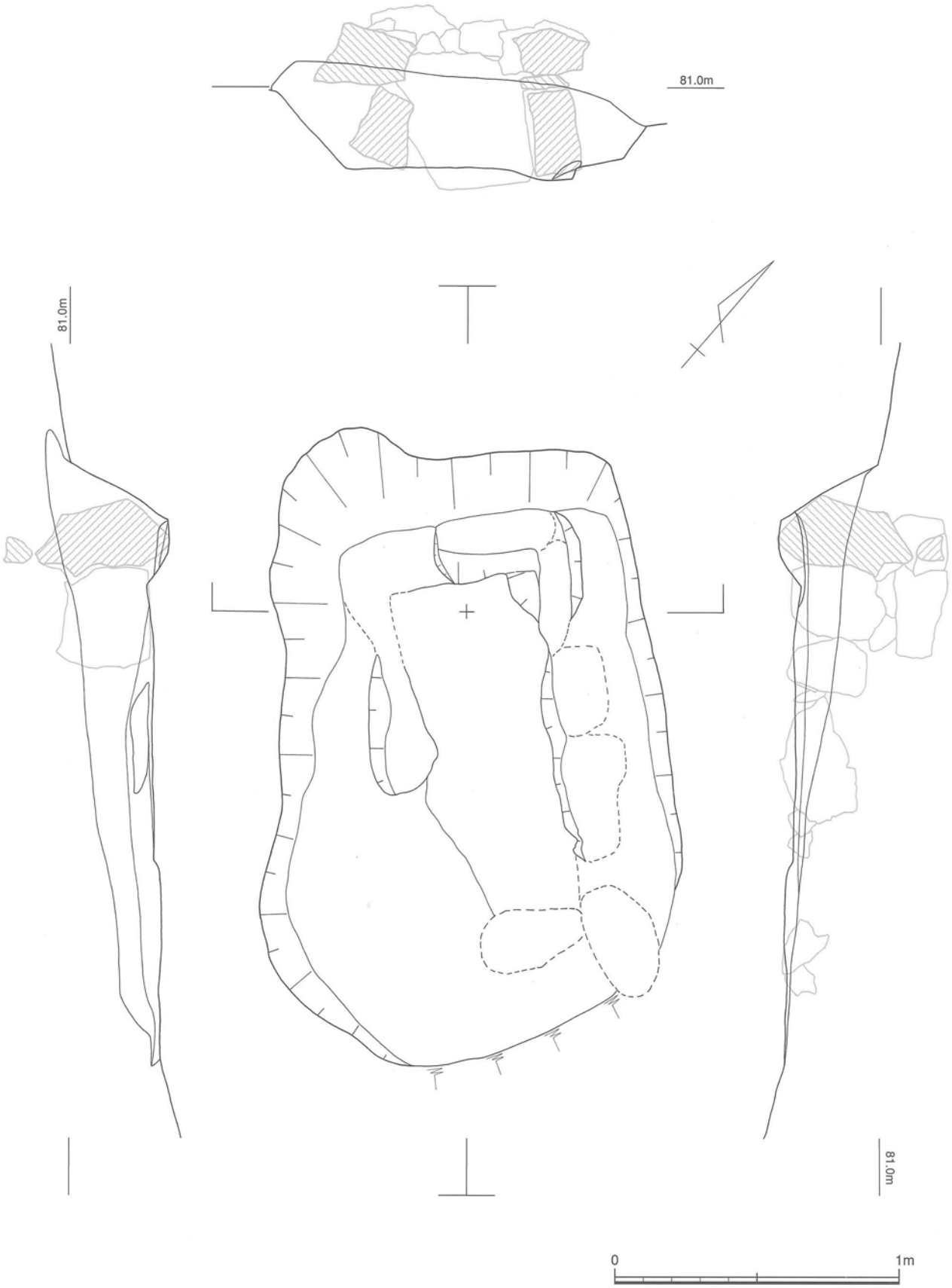
1　2.5Y7/4　浅黄色　シルト質極細粒砂～細粒砂　細礫含む

墳丘・周溝・排水溝土層断面

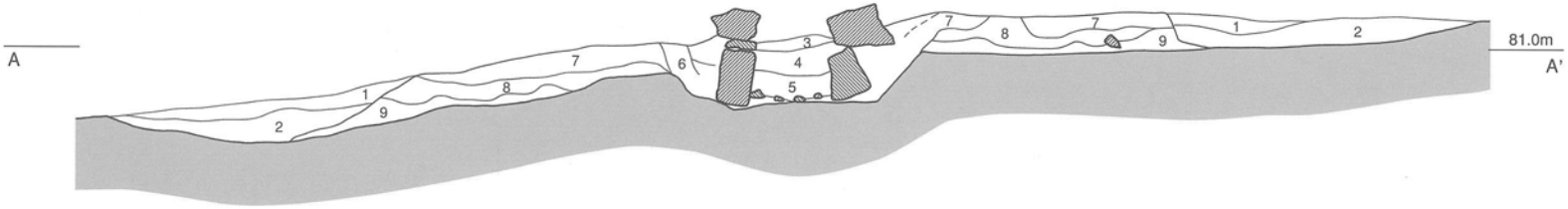


横穴式石室

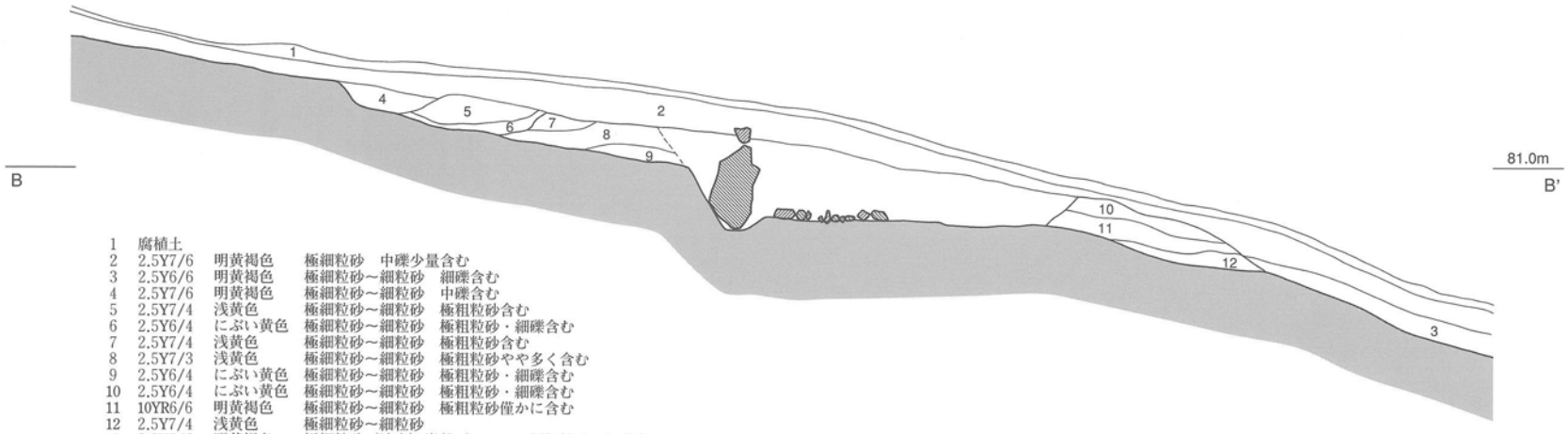
図版34　状覚山９号墳



墓壙



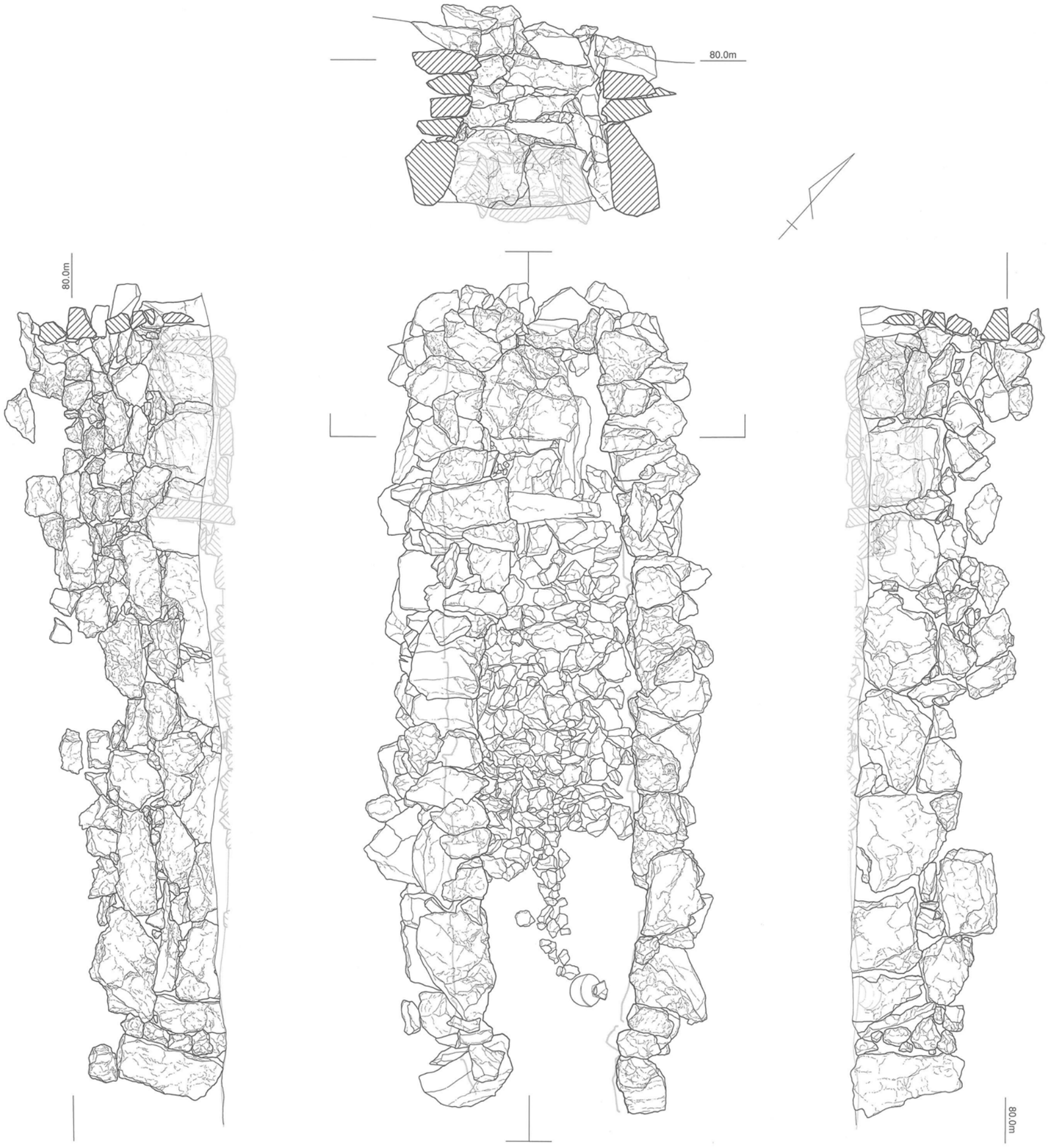
1	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂　細粒砂～粗粒砂含む
2	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　10cm大大礫含み、極粗粒砂～細礫少量含む
3	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　粉っぽい　極粗粒砂～大礫含む
4	2.5Y7/6	明黄褐色	細粒砂　極細粒砂・粗粒砂～細礫含む
5	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂
6	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂～中粒砂含む
7	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
8	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む　軟質
9	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂多く含む　極粗粒砂少量含む



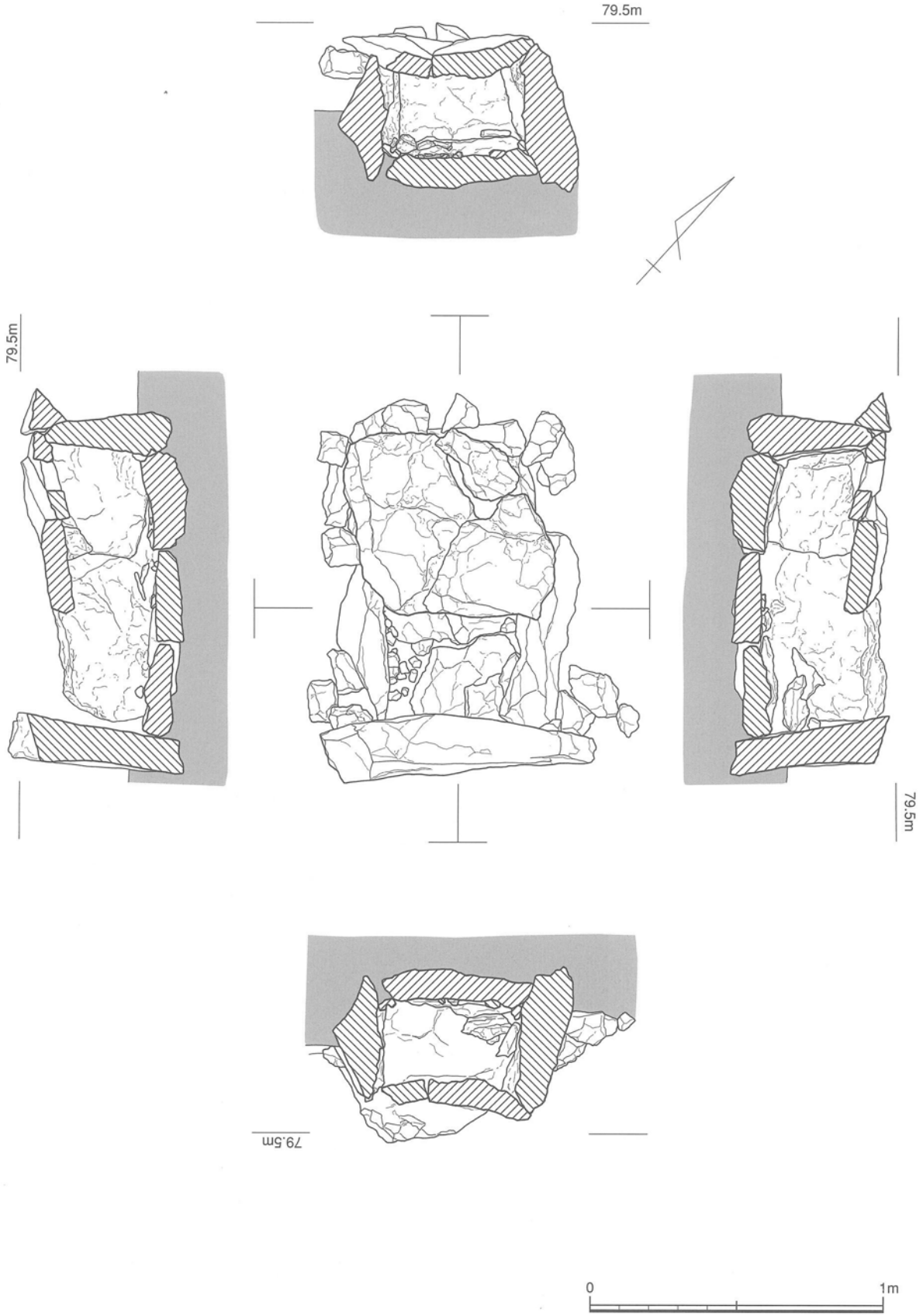
1	腐植土		
2	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中礫少量含む
3	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　細礫含む
4	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中礫含む
5	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂含む
6	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂・細礫含む
7	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂含む
8	2.5Y7/3	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂やや多く含む
9	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂・細礫含む
10	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂・細礫含む
11	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂僅かに含む
12	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂
13	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂（地山）岩盤ブロック・極粗粒砂～細礫含む

墳丘土層断面

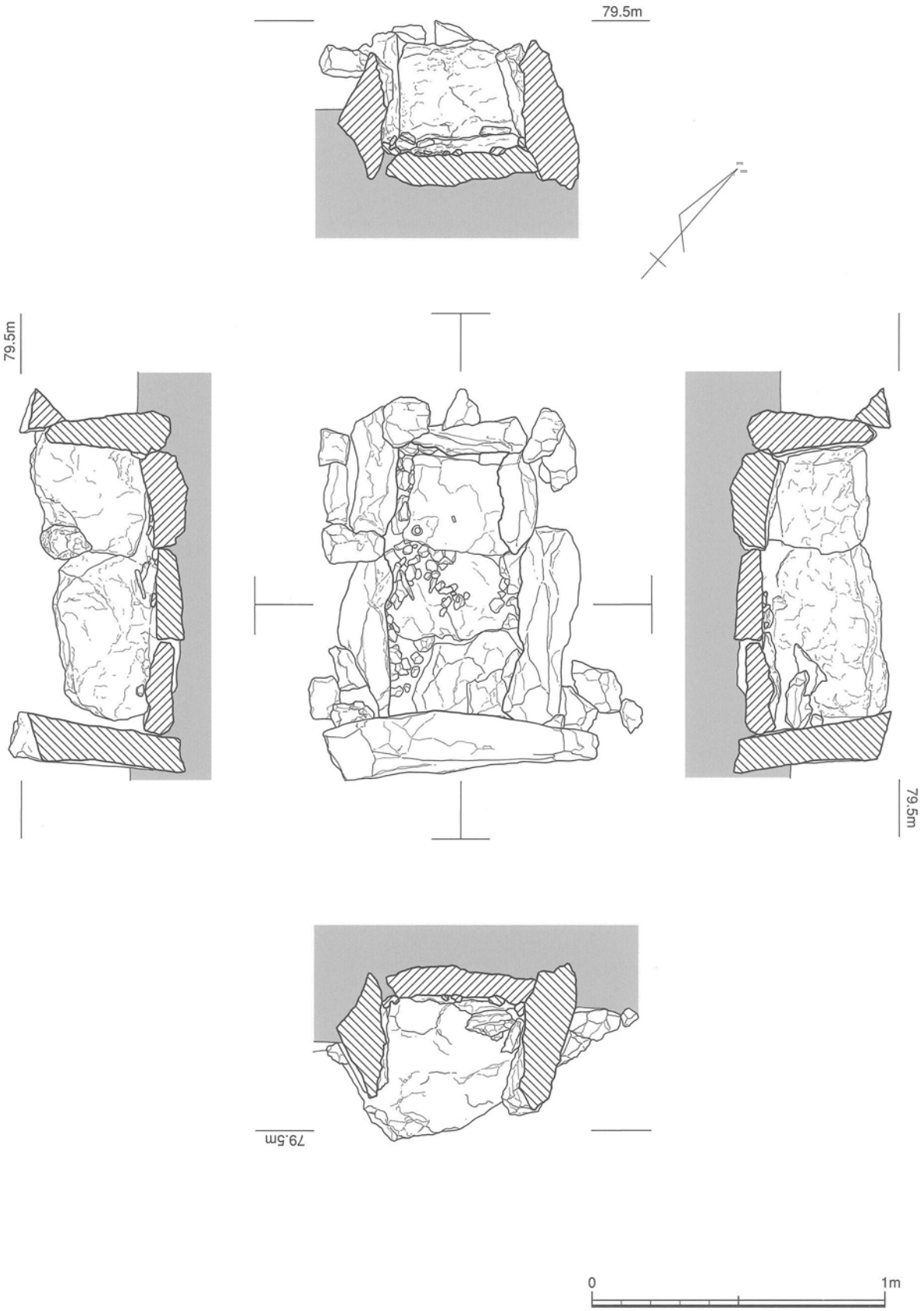
敷石・遺物検出状況



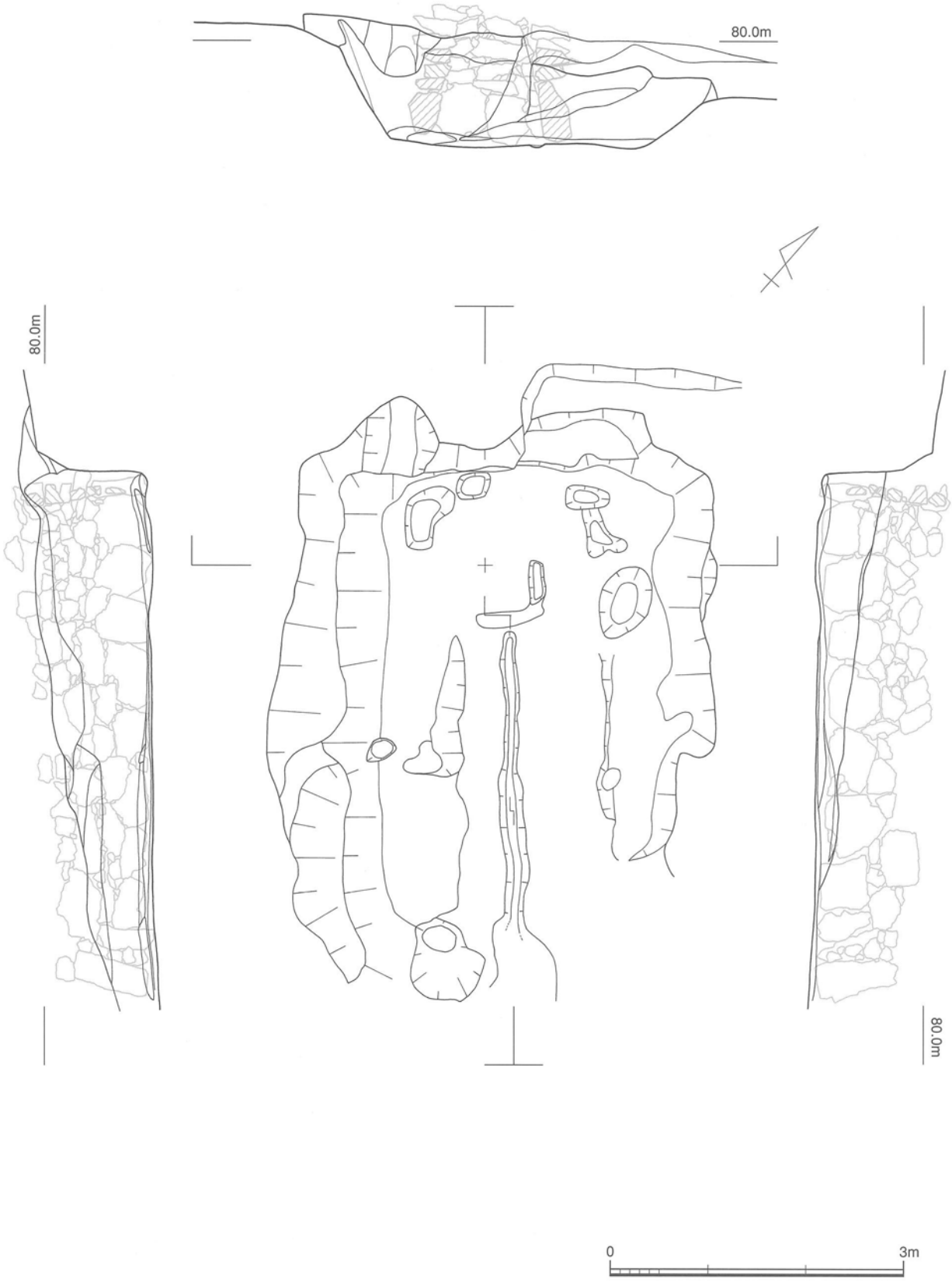
横穴式石室



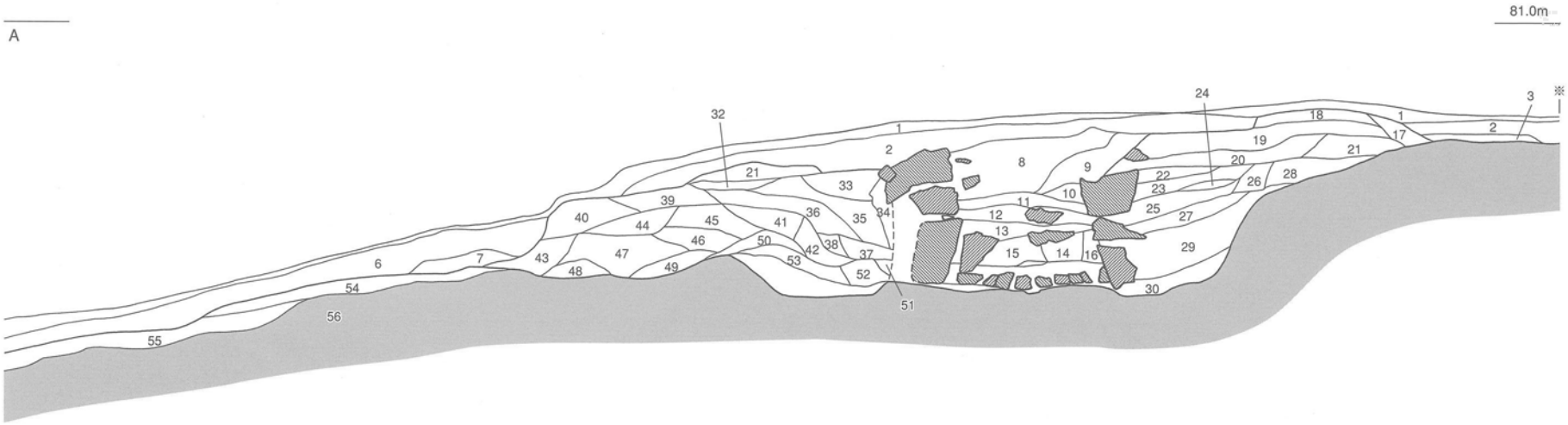
石棺



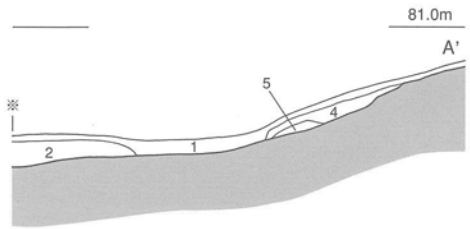
石棺（蓋石除去後）



墓壙

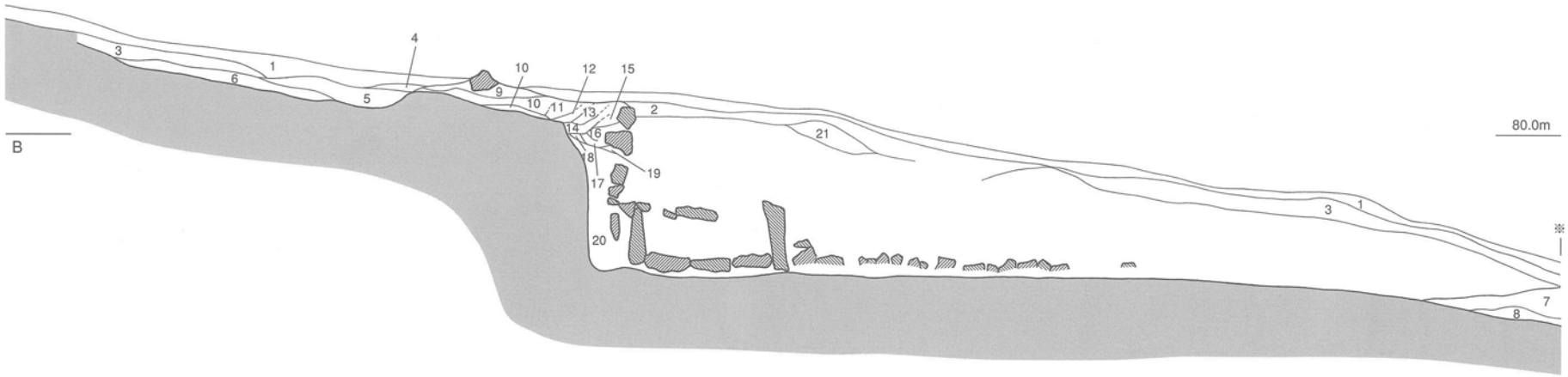


1	腐植土		
2	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中礫少量含む
3	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む
4	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂　極粗粒砂少量含む
5	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂　細礫～中礫少量含む
6	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
7	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む　中礫少量含む
8	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
9	2.5Y7/8	黄色	極細粒砂で細粒砂多く含み、極粗粒砂～細礫含む
10	2.5Y6/5	明黄褐色	極細粒砂で細粒砂多く含み、極粗粒砂～細礫含む
11	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　砂質
12	2.5Y7/5	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～中礫含む　砂質
13	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　10cm大角礫多く混じる　砂質
14	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　細粒砂やや多く含む　極粗粒砂～中礫混じる　軟質
15	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫わずかに含む　やや締まる
16	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　細粒砂やや多く含む　極粗粒砂～中礫若干混じる　やや締まる
17	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　細礫～中礫少量含む
18	2.5Y6/8	明黄灰色	細砂混じりシルト
19	2.5Y6/6	明黄灰色	細砂混じりシルト
20	2.5Y7/6	明黄灰色	細砂混じりシルト（土壌化した土）
21	2.5Y6/6	明黄灰色	細砂～粗砂混じりシルト
22	2.5Y7/8	黄色	粘土混じりシルト
23	2.5Y7/6	明黄褐色	細砂混じりシルト
24	2.5Y7/6	明黄褐色	シルト～粘土（土壌化した土）
25	2.5Y7/6	明黄褐色	粗砂混じりシルト
26	2.5Y7/6	明黄褐色	細砂混じりシルト～粘土（土壌化した土）
27	2.5Y7/4	浅黄色	小礫混じりシルト　締まり悪い
28	2.5Y6/6	明黄褐色	細砂～シルト
29	2.5Y7/4	浅黄色	粘土（土壌化した土）混じりシルト　粘土はブロック状
30	2.5Y7/4	浅黄色	シルト～粘土（締まり悪い）
31	2.5Y6/5	明黄褐色	極細粒砂　1cm大中礫含む　やや軟質
32	2.5Y8/6	黄色	細粒砂　極粗粒砂～粗粒砂含む
33	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂含む
34	10YR7/8	黄橙色	細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
35	2.5Y7/8	黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂含む
36	10YR6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
37	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂　粗粒砂～極粗粒砂含む　締まる
38	10YR7/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
39	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～中礫含む
40	10YR6/8	明黄褐色	細粒砂～粗粒砂
41	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～中礫含む
42	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
43	10YR7/8	黄橙色	極細粒砂～細粒砂
44	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂
45	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
46	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂
47	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂　マンガン含む
48	10YR6/6	明黄褐色	細粒砂
49	2.5Y6/8	明黄褐色	極細粒砂　地山に近い
50	2.5Y7/8	黄色	極細粒砂～細粒砂
51	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂
52	2.5Y6/8	明黄褐色	細粒砂　極粗粒砂～中礫含む
53	2.5Y7/8	黄色	極細粒砂～細粒砂
54	2.5Y5/6	黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～中礫多く含む　砂質
55	2.5Y6/6	明黄灰色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
56	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂　細粒砂～極粗粒砂含む（地山）

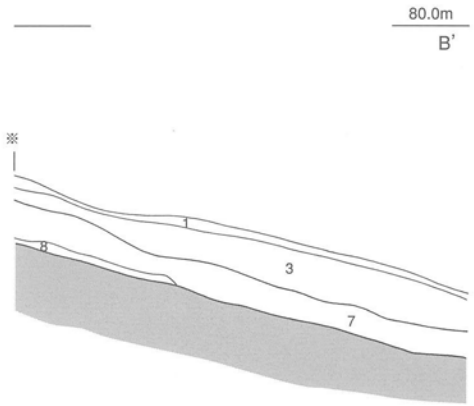


0　3m

墳丘土層断面



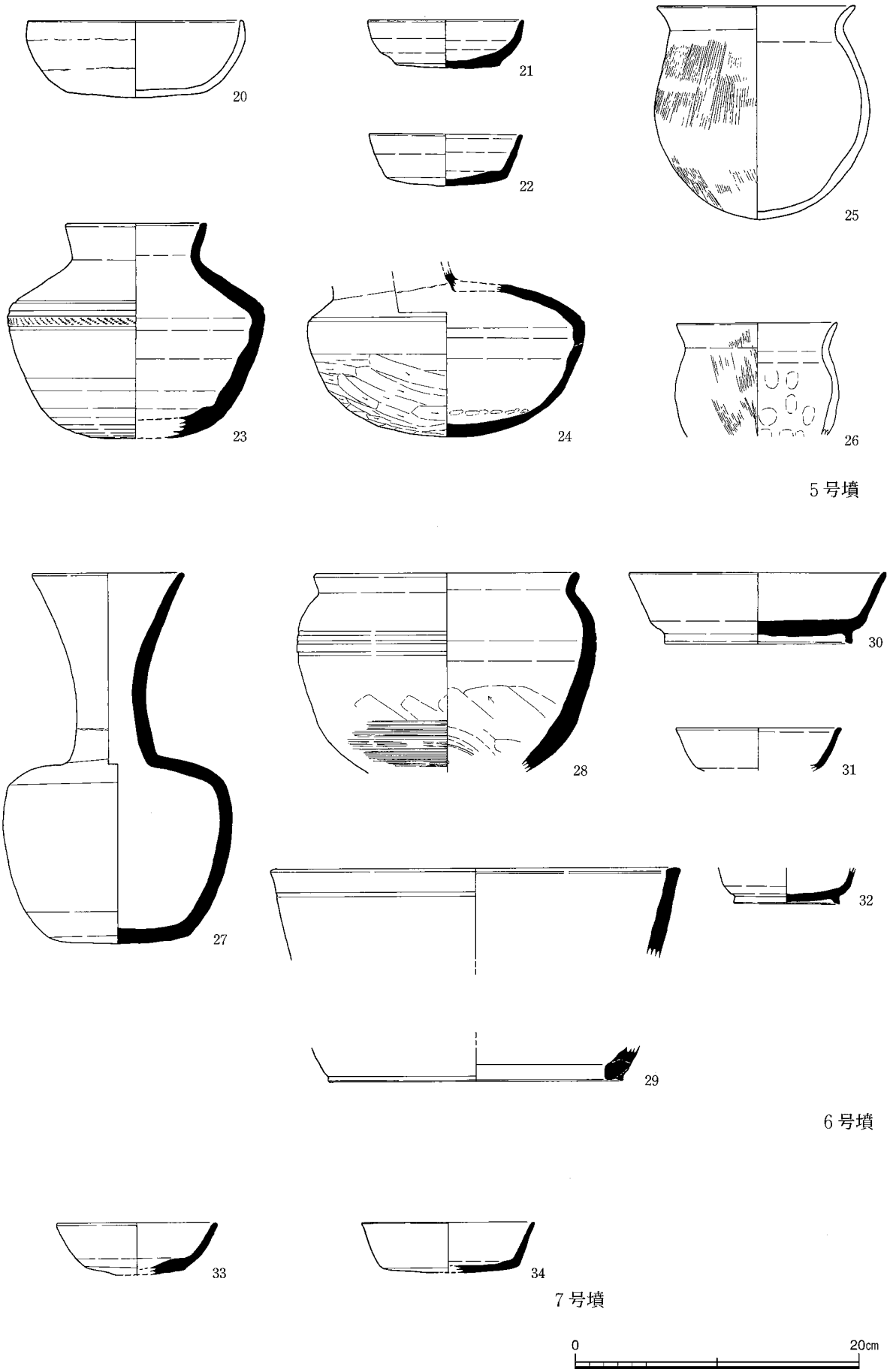
1	腐植土		
2	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　10cm大大礫少量含む
3	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中礫少量含む
4	2.5Y6/5	明黄褐色	極粒細砂　細礫～中礫含む　やや軟
5	2.5Y8/6	黄褐色	極細粒砂　極粗粒砂少量含む
6	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂含む　4～8cm大大礫・地山ブロック少量含む
7	2.5Y5/4	黄褐色	極細粒砂～細粒砂　中粒砂～細礫含む
8	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂多く含む　細礫～中礫少量含む
9	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂
10	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む　2cm大中礫含む
11	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　細粒砂～極粗粒砂含む
12	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂
13	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　極粗粒砂含む
14	2.5Y6/4	にぶい黄色	極細粒砂～細粒砂　細粒砂非常に多い　細礫～3cm大中礫含む
15	2.5Y6/4	にぶい黄色	細粒砂　極粗粒砂含む　軟質
16	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂　極粗粒砂～中礫少量含む　締まる
17	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
18	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂～細粒砂　細粒砂非常に多い　極粗粒砂含む
19	2.5Y6/6	明黄褐色	極細粒砂　中粒砂～極粗粒砂少量含む
20	2.5Y6/4	浅黄色	極細粒砂　極粗粒砂～細礫・2cm大中礫含む
21	2.5Y7/4	浅黄色	極細粒砂～細粒砂　細礫～中礫・地山ブロック含む



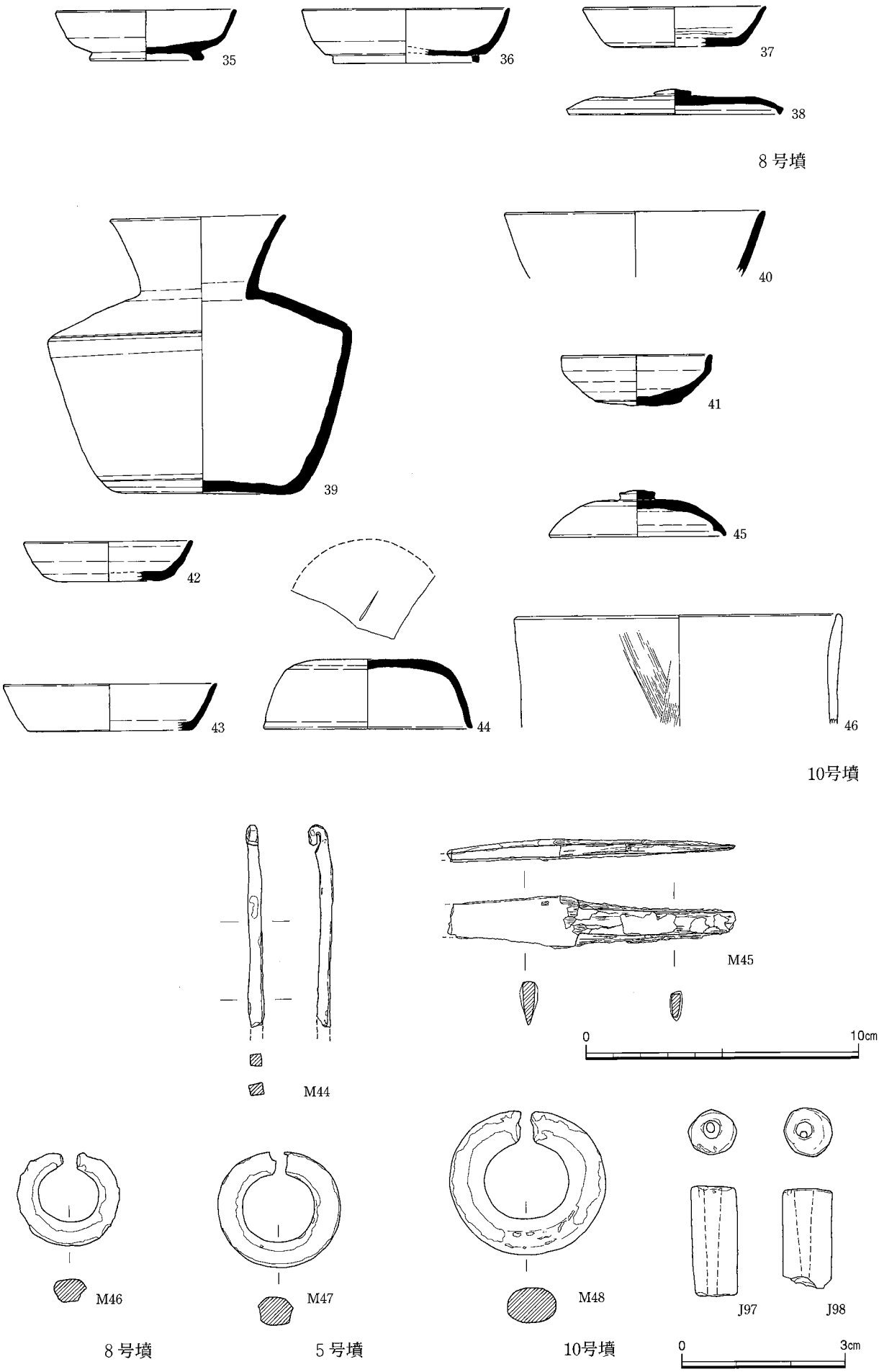
0　3m

墳丘・前庭部土層断面

図版43　状覚山５～７号墳

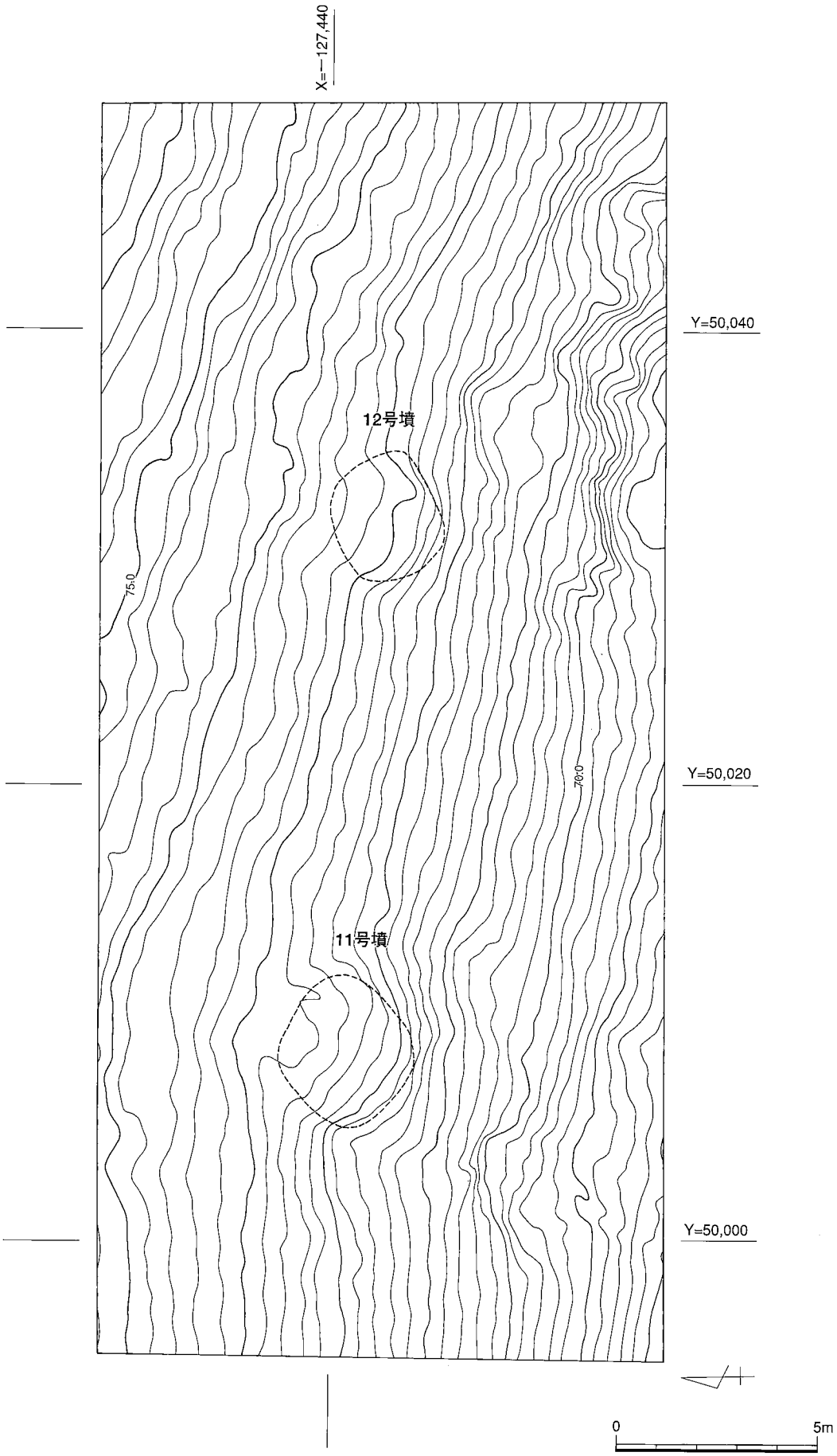


出土土器

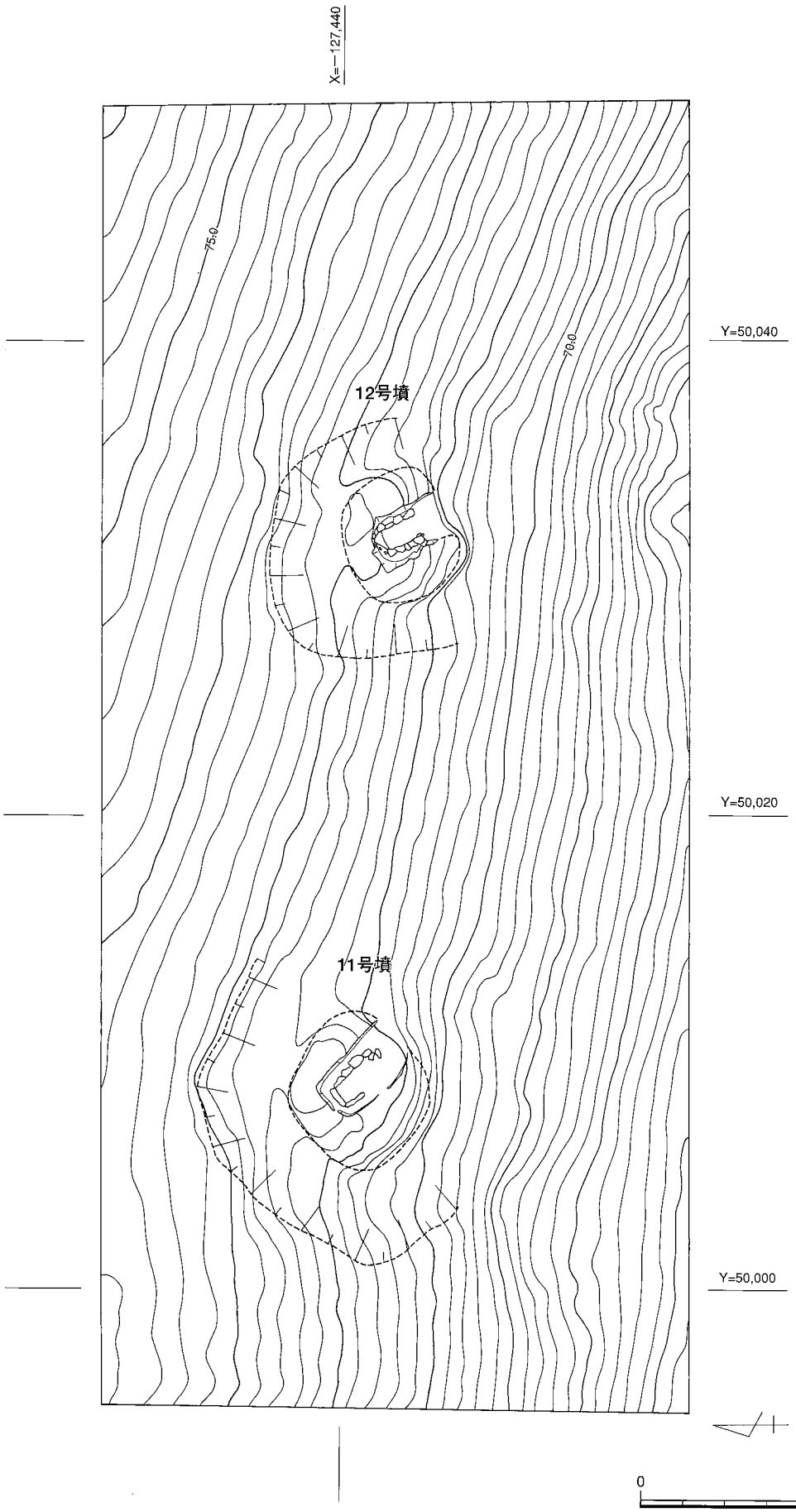

35
36
37
38
8号墳
39
40
41
42
43
44
45
46
10号墳
M44
M45
0
10cm
M46
M47
M48
J97
J98
8号墳
5号墳
10号墳
0
3cm

出土土器・金属器・玉

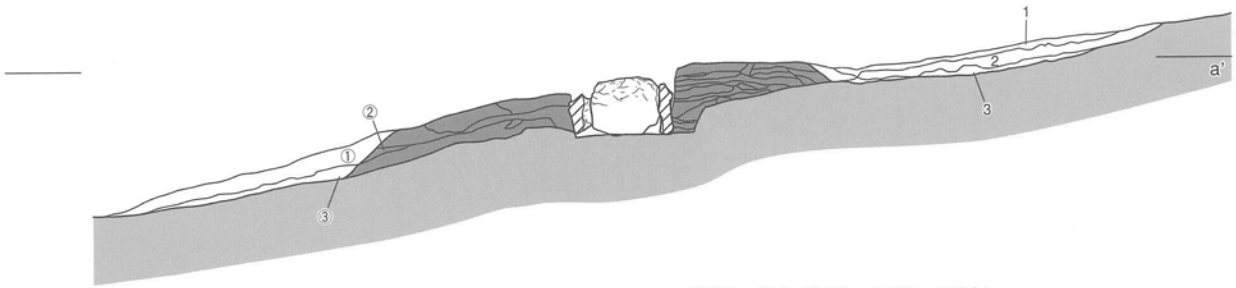
図版45　状覚山11・12号墳



調査前地形測量図

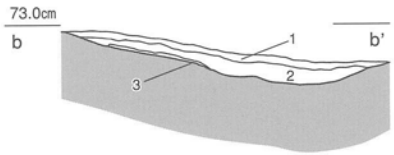


調査後地形測量図



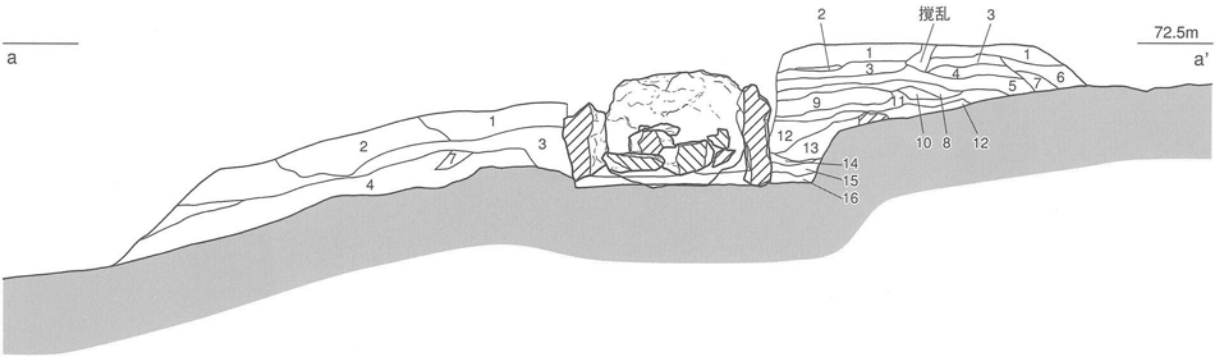
① 黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む
② 黄褐色～褐灰色　細砂～極細砂　極粗砂～中礫、マンガン含む
③ 明黄褐色　極細砂　極粗砂～大礫若干含む

1 明黄褐色　細礫～極細砂　極粗砂～細礫含む
2 黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～中礫、特に極粗砂～細礫多く含む
3 明黄褐色　細砂含む極細砂　極粗砂～中礫含む



1 明黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む
2 黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～中礫、特に極粗砂～細礫多く含む
3 明黄褐色　細砂含む極細砂　極粗砂～中礫含む

墳丘地形測量図

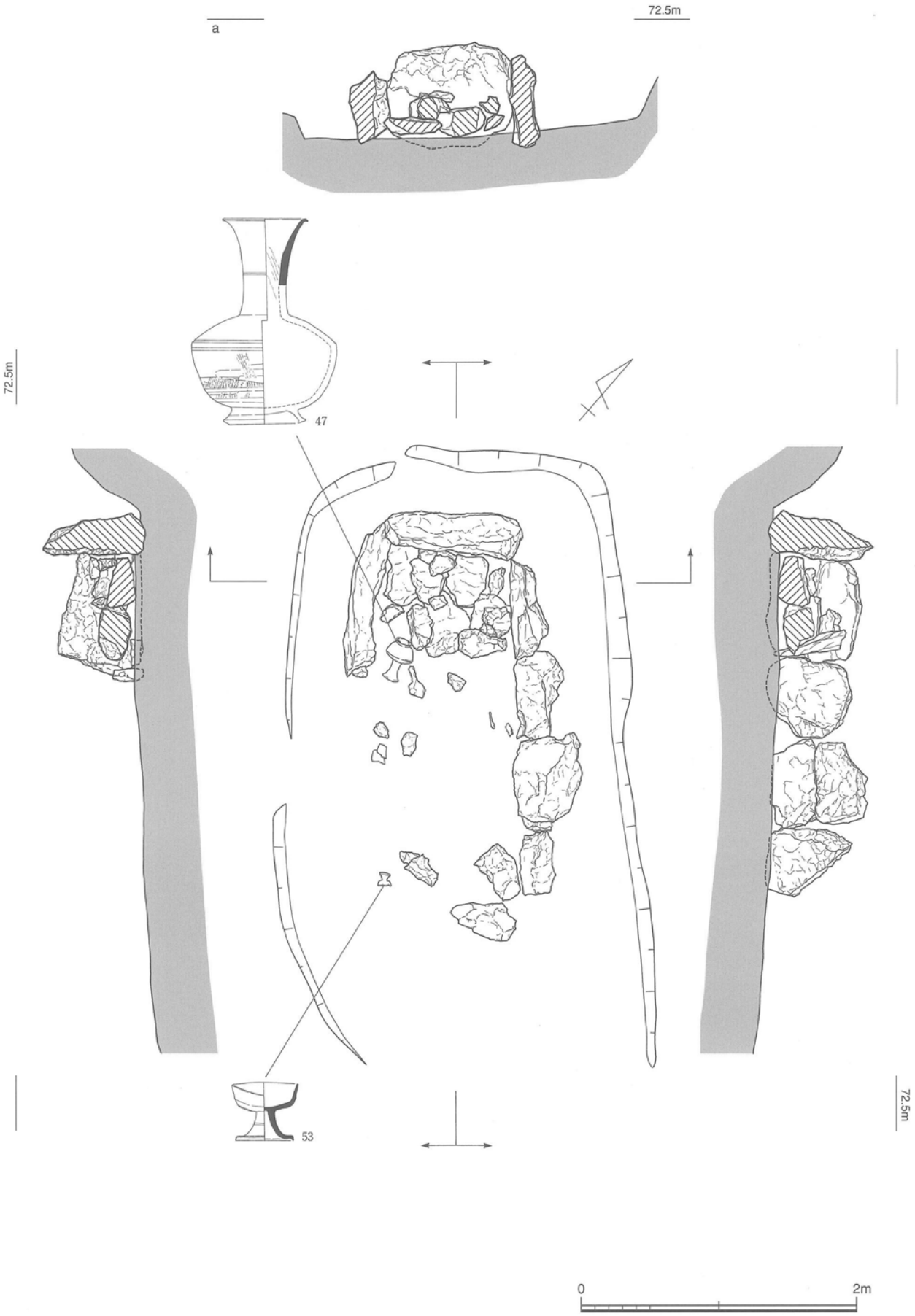


1　明黄褐色　極細砂～細砂　極粗砂～中礫含む
2　にぶい黄橙色　細砂多く含む極細砂　細礫多く含む
3　黄褐色　極細砂～細砂　直径10cmの大礫少量含む　極細粒砂～細礫含む
4　褐灰色　細砂　極粗砂～大礫含む　細礫多く含む
5　明黄褐色　細砂少量含む極細砂　極粗砂、中礫含む

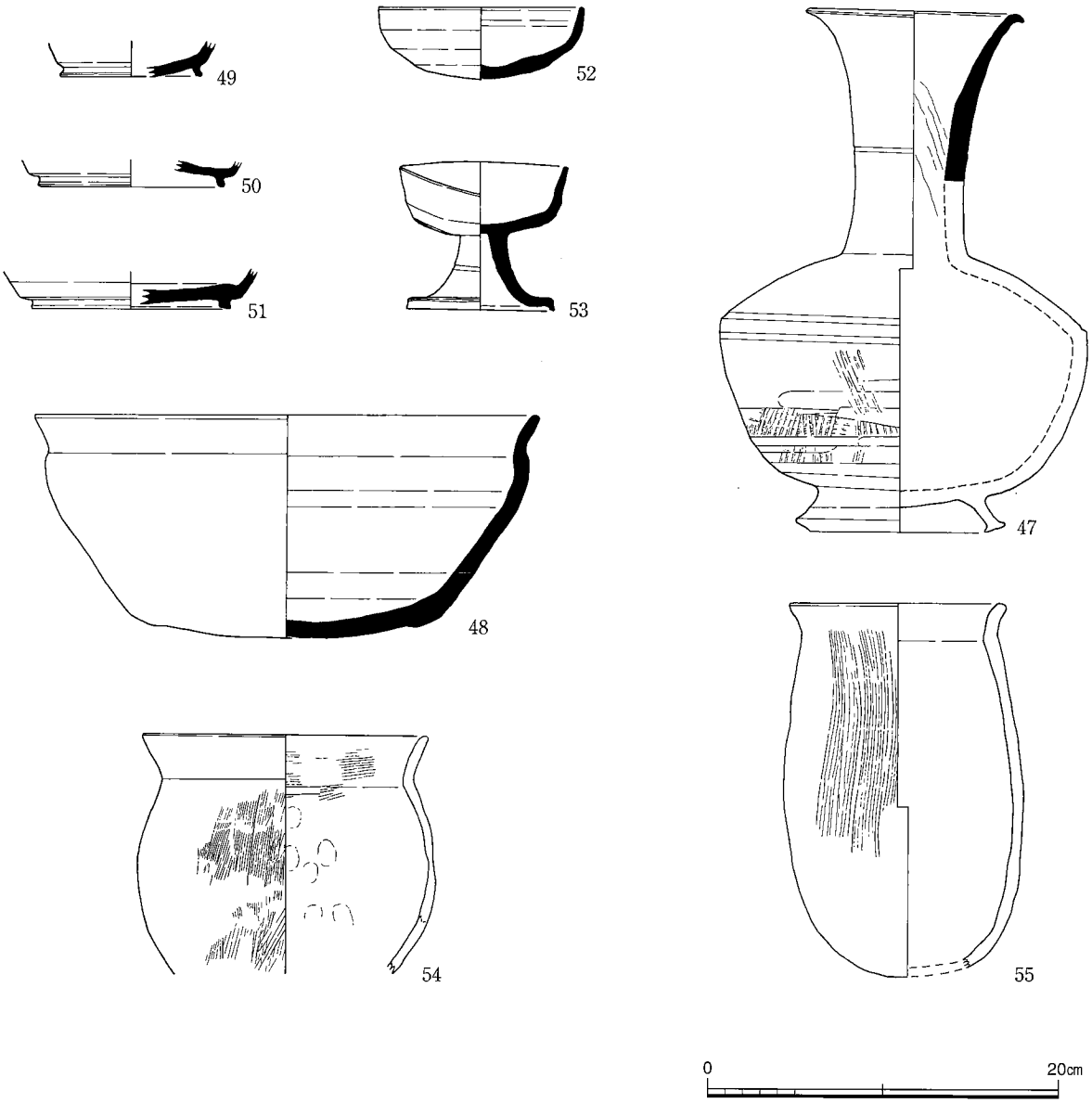
1　明黄褐色　極細砂～細砂　極粗砂～細礫含む
2　にぶい黄橙色　細砂多く含む極細砂　極粗砂～中礫含む
3　黄褐色　細砂～極細砂　細礫含む
4　黄褐色　極細砂～細砂　細礫～中礫少量含む
5　褐灰色　細砂　極粗砂～細礫含む　中礫少量含む
6　にぶい黄橙色　細砂少量含む極細砂　極粗砂～中礫含む
7　黄褐色　細砂少量含む極細砂　細礫少量含む
8　にぶい黄橙色　細砂多く含む極細砂　極粗砂～細礫含む
9　褐色　細砂　細礫多く含む
10　褐色　細砂　細礫多く含む
11　明黄褐色　極細砂～細砂　細礫含む
12　明黄褐色　極細砂～細砂　細礫含む
13　褐色　細砂　極粗砂～中礫多く含む
14　明黄褐色　極細砂　中礫、大礫多く含む
15　褐灰色　細砂～極細砂　極粗砂～中礫含む
16　黄褐色　細砂～極細砂　細礫含む

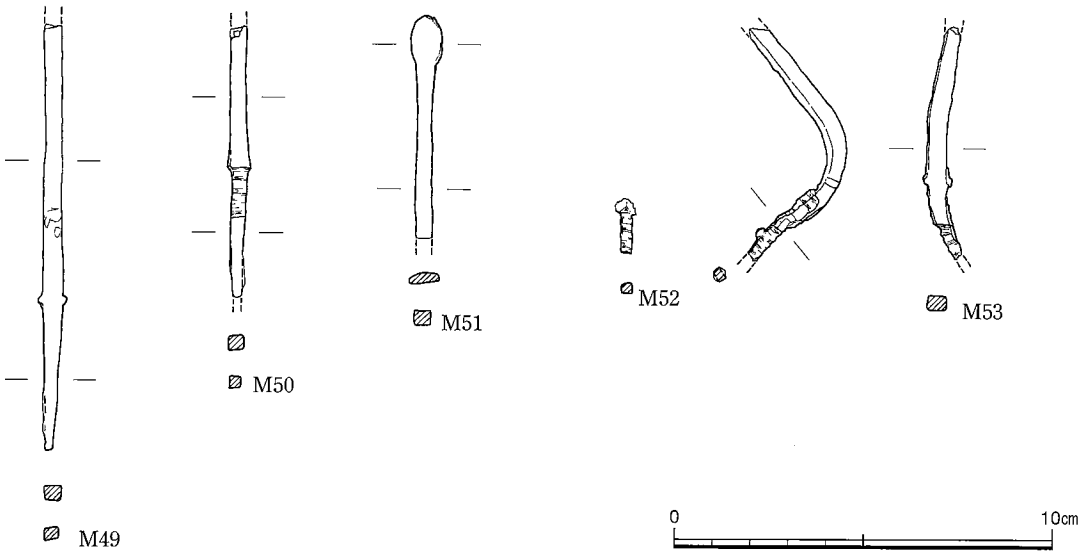
0　3m

墳丘実測図

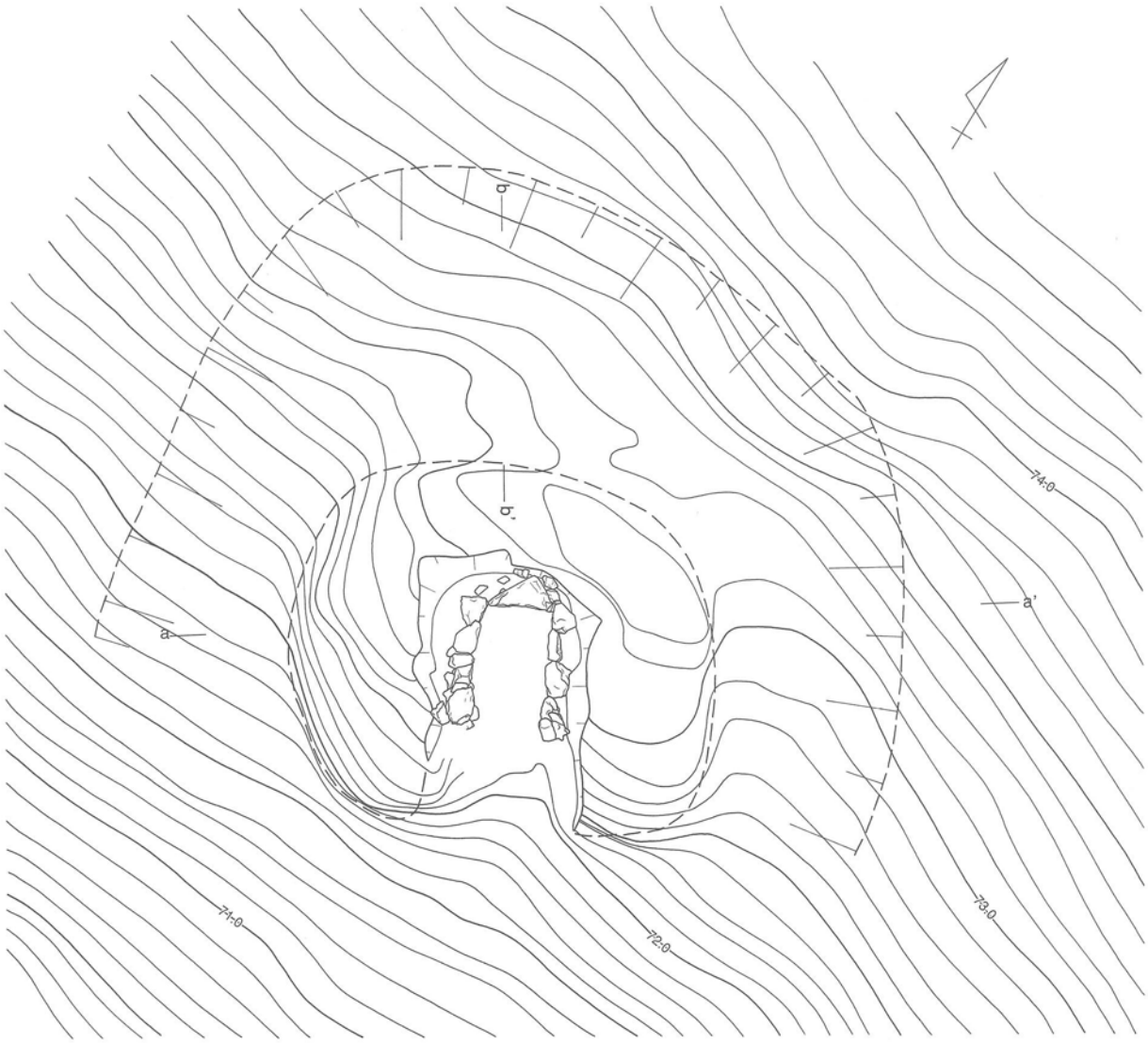


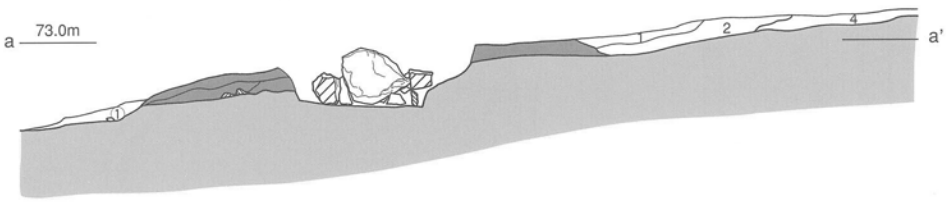
石室実測図





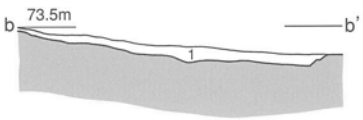
出土土器・出土鉄鏃





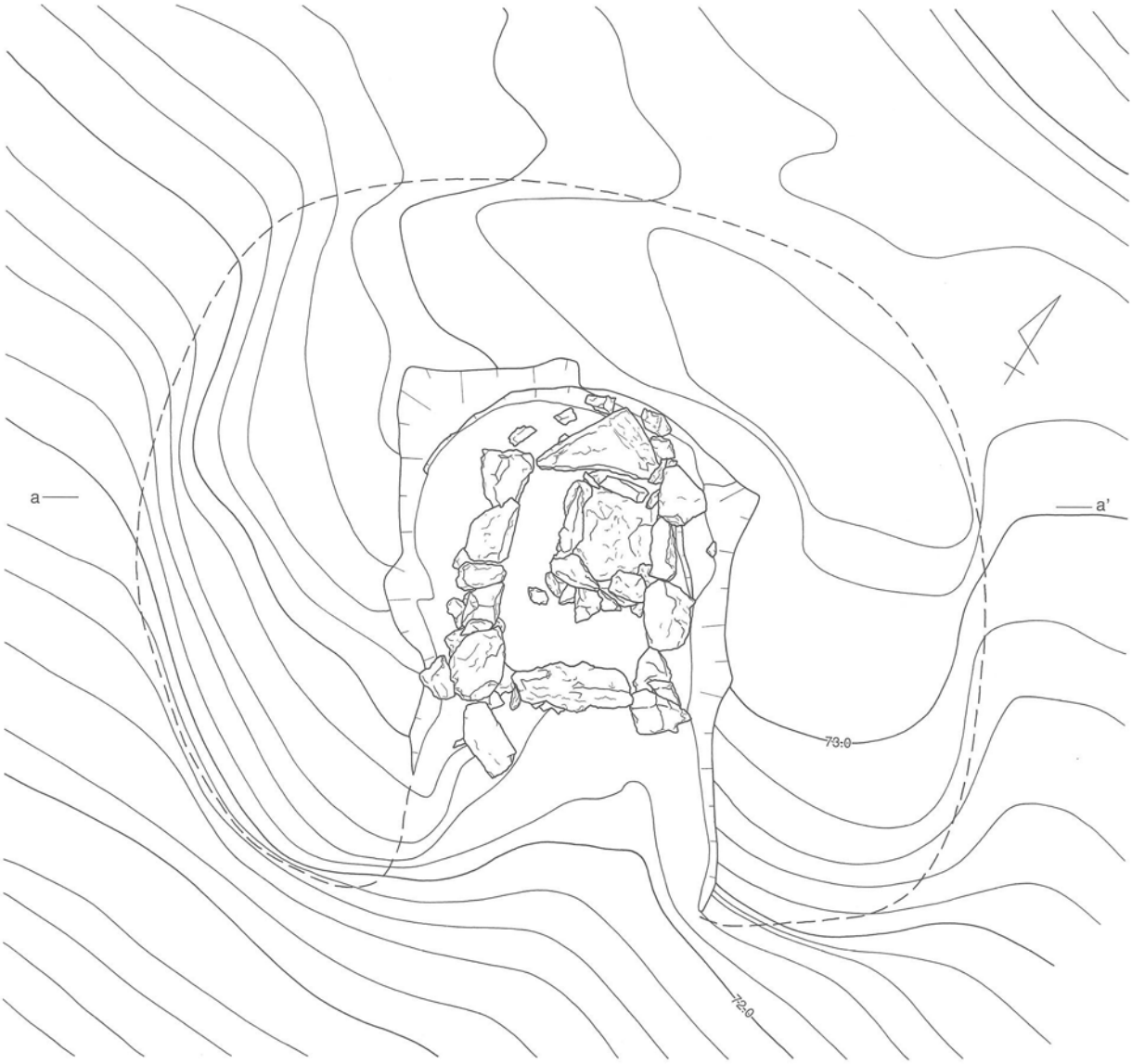
① 黄褐色　細砂～極細砂　炭少量　極粗砂～中礫含む

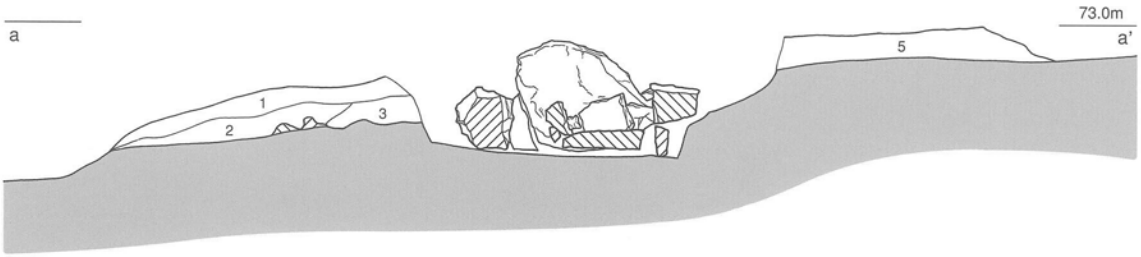
1　黄褐色　細砂　極粗砂、細礫少量含む
2　黄褐色～褐色　極細砂～細砂　極粗砂～細礫わずかに含む　マンガン含む
4　明黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂含む　細礫多く含む



1　黄褐色　細砂～極細砂　炭少量　極粗砂～中礫含む

墳丘地形測量図

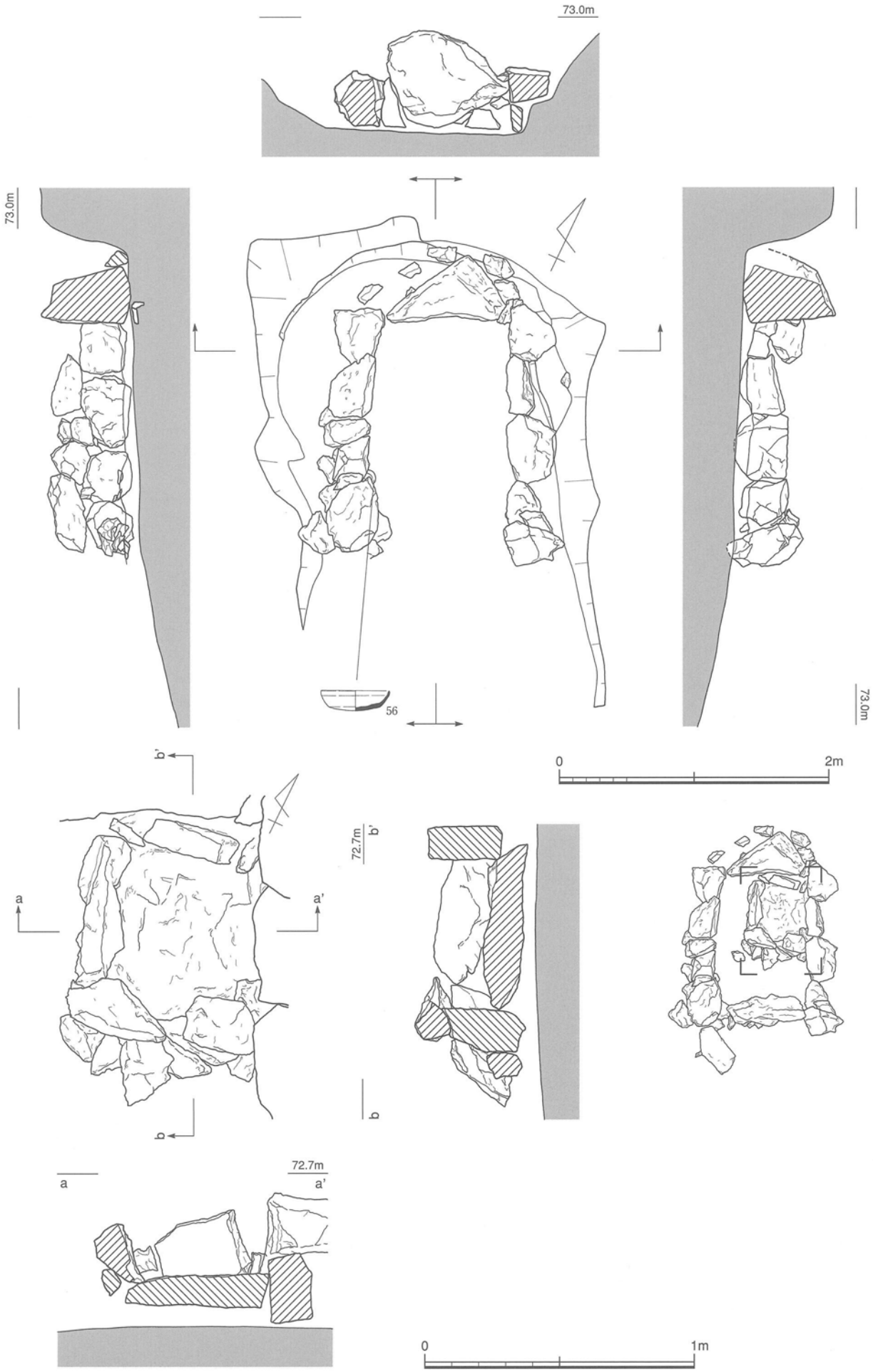




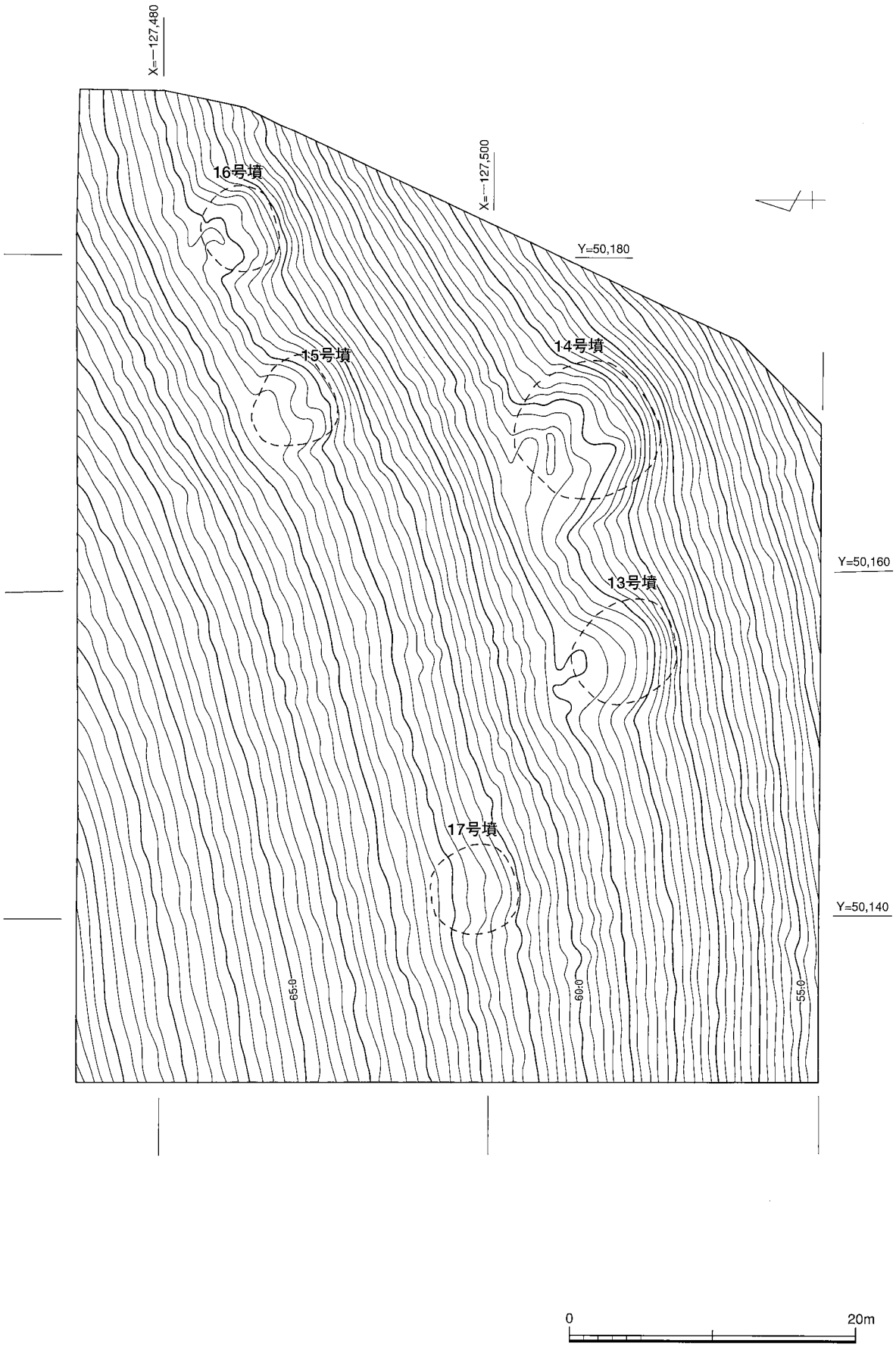
1　明黄褐色　極細砂～細砂　細礫含む
2　黄褐色　極細砂～細砂　極粗砂～細礫含む
3　にぶい黄橙色　細砂多く含む極細砂
5　明黄褐色　細砂～極細砂　極細砂～中礫含む

0　3m

墳丘実測図

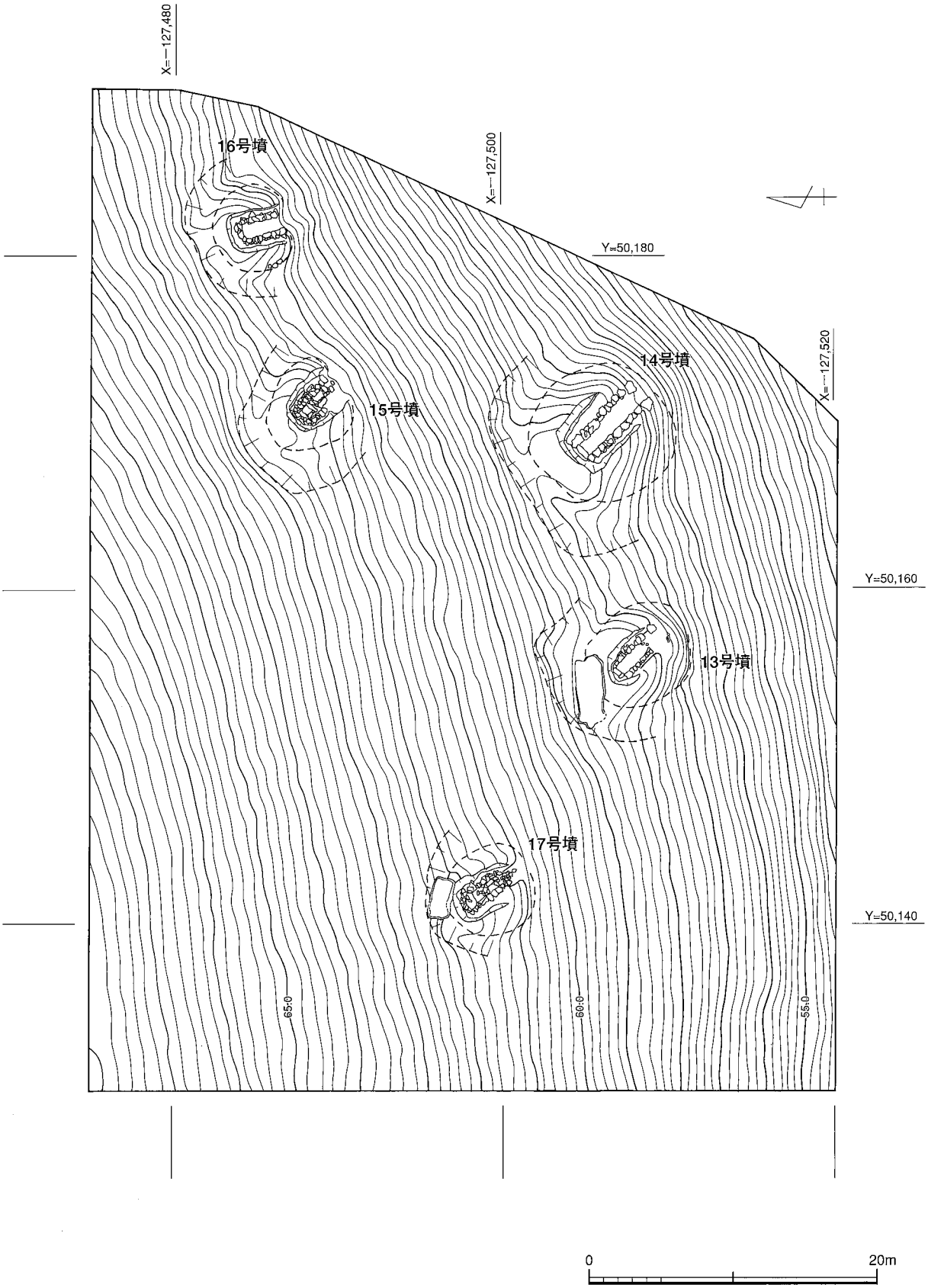


石室・石室内石棺実測図

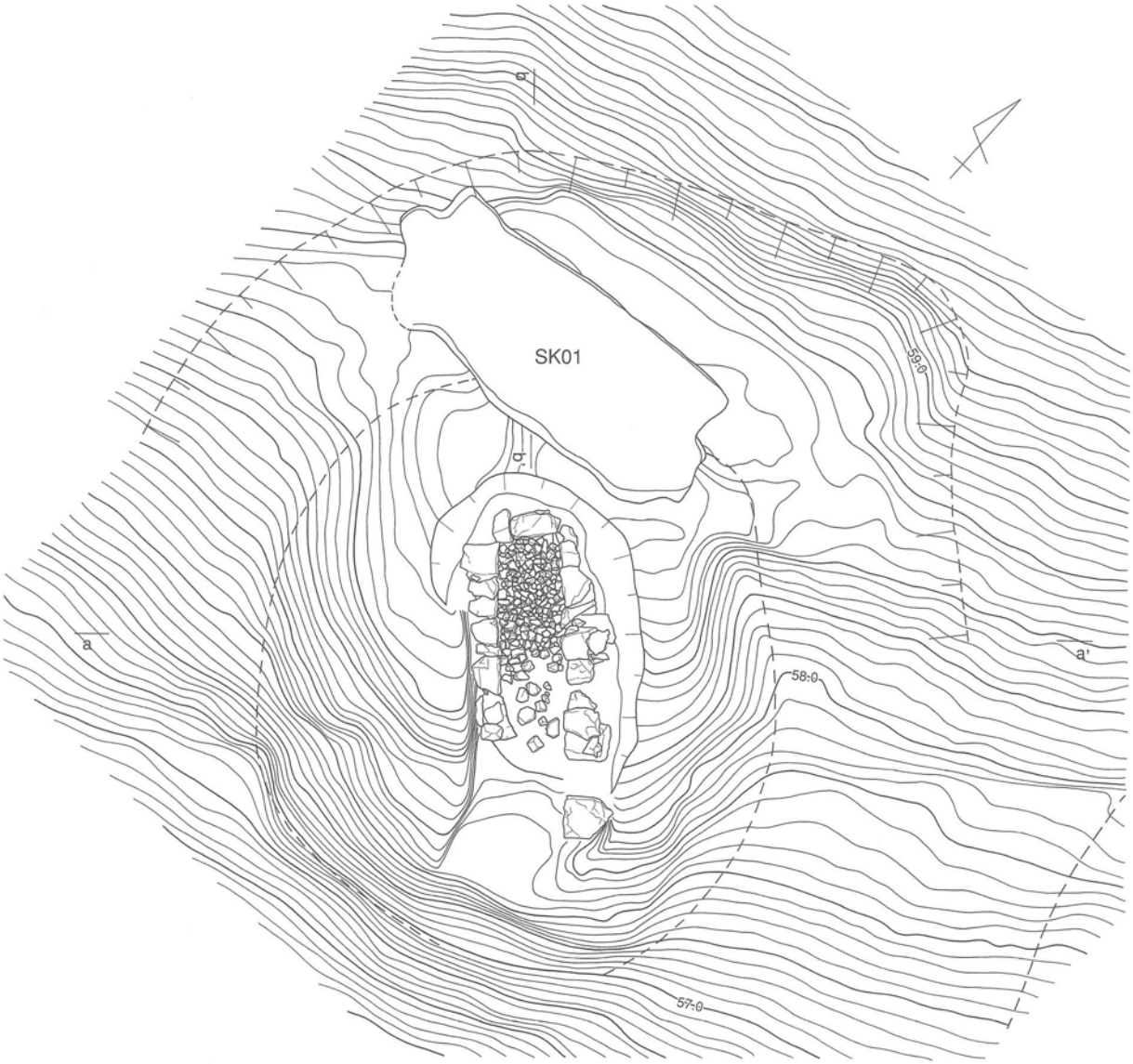

X=−127,480
X=−127,500
Y=50,180
Y=50,160
Y=50,140
16号墳
15号墳
14号墳
13号墳
17号墳
65·0
60·0
55·0
0
20m

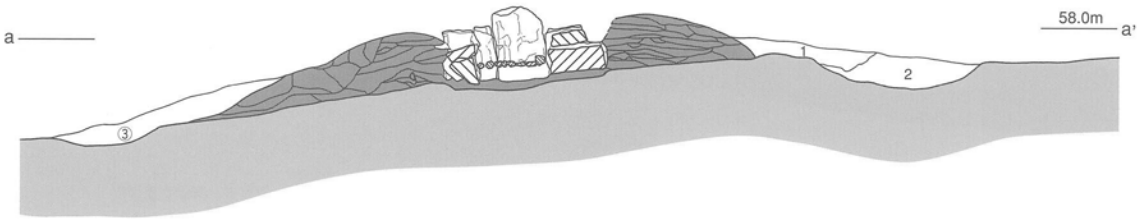
調査前地形測量図

図版55　状覚山13～17号墳



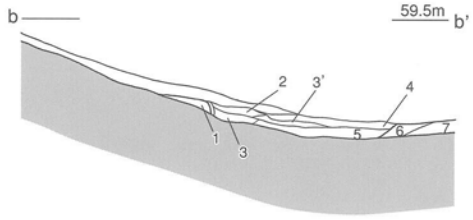
調査後地形測量図





① 浅黄色　極細砂わずかに含む細砂　極粗砂～細礫多く含む
中礫少量含む

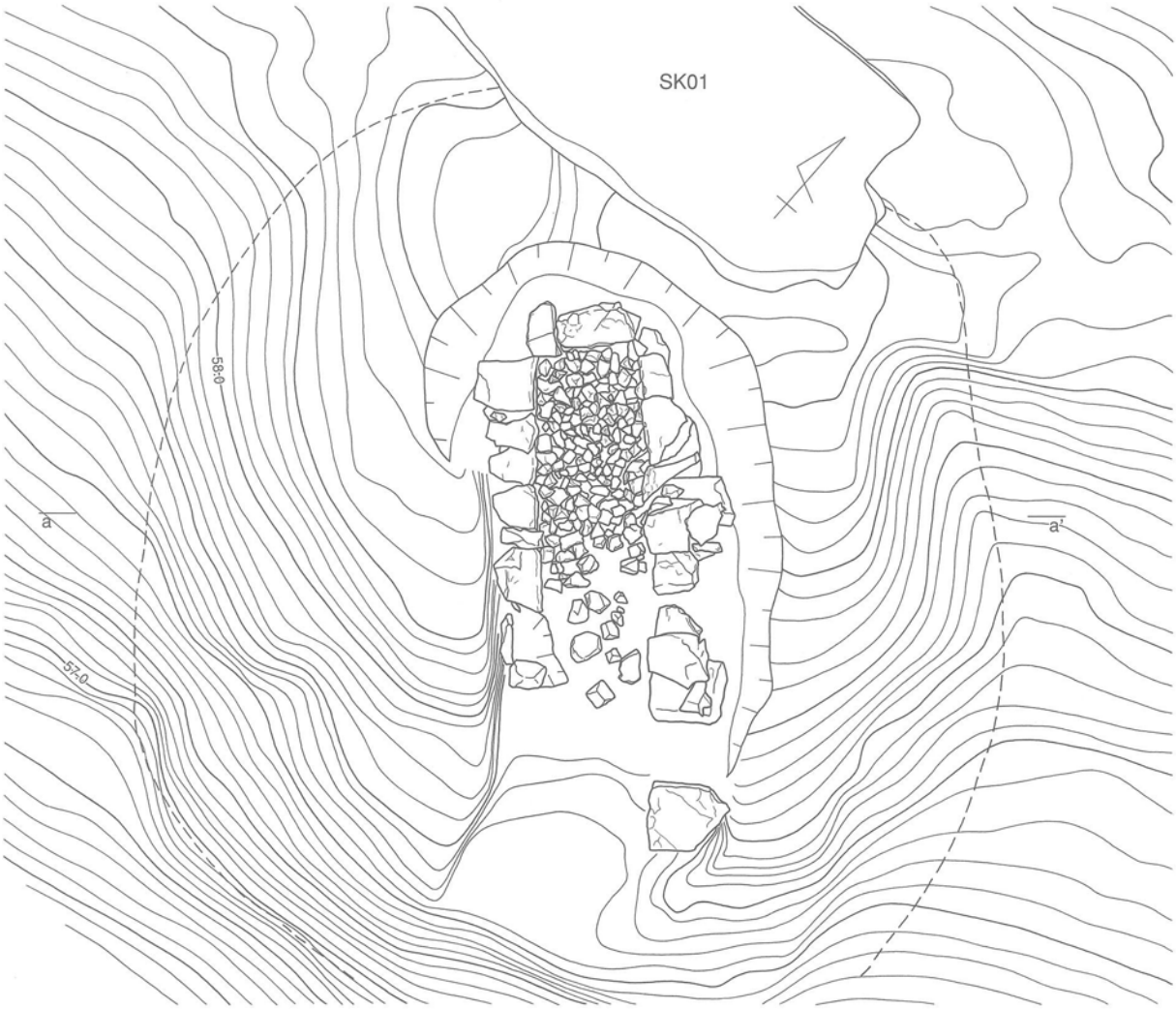
1　黄褐色　細砂多く含む極細砂　極粗砂～中礫、大礫含む
2　浅黄色～オリーブ灰色　細砂～極細砂　極粗砂～大礫含む

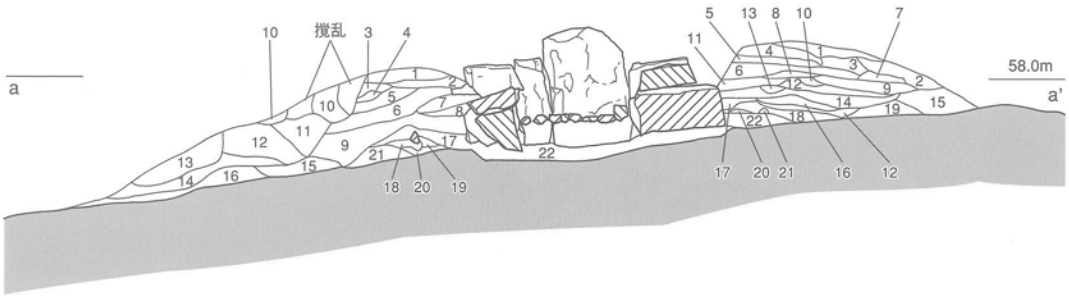


1　黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～細礫少量含む　シルト質
2　焼土層
3　炭層
3'　暗灰褐色　細砂～極細砂　極粗砂多く含む　ややシルト質
4　にぶい黄橙色　炭まじり細砂含む極細砂　シルト質　極粗細砂～細礫少量含む
5　黄褐色～浅黄色　細砂～極細砂　極粗砂～大礫多く含む　シルト質
6　黄褐色　極細粒砂含む細砂　しまり悪い　} 墳丘（やや土壌変化）
7　明黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～中礫含む　} 墳丘（やや土壌変化）

0　3m

墳丘地形測量図



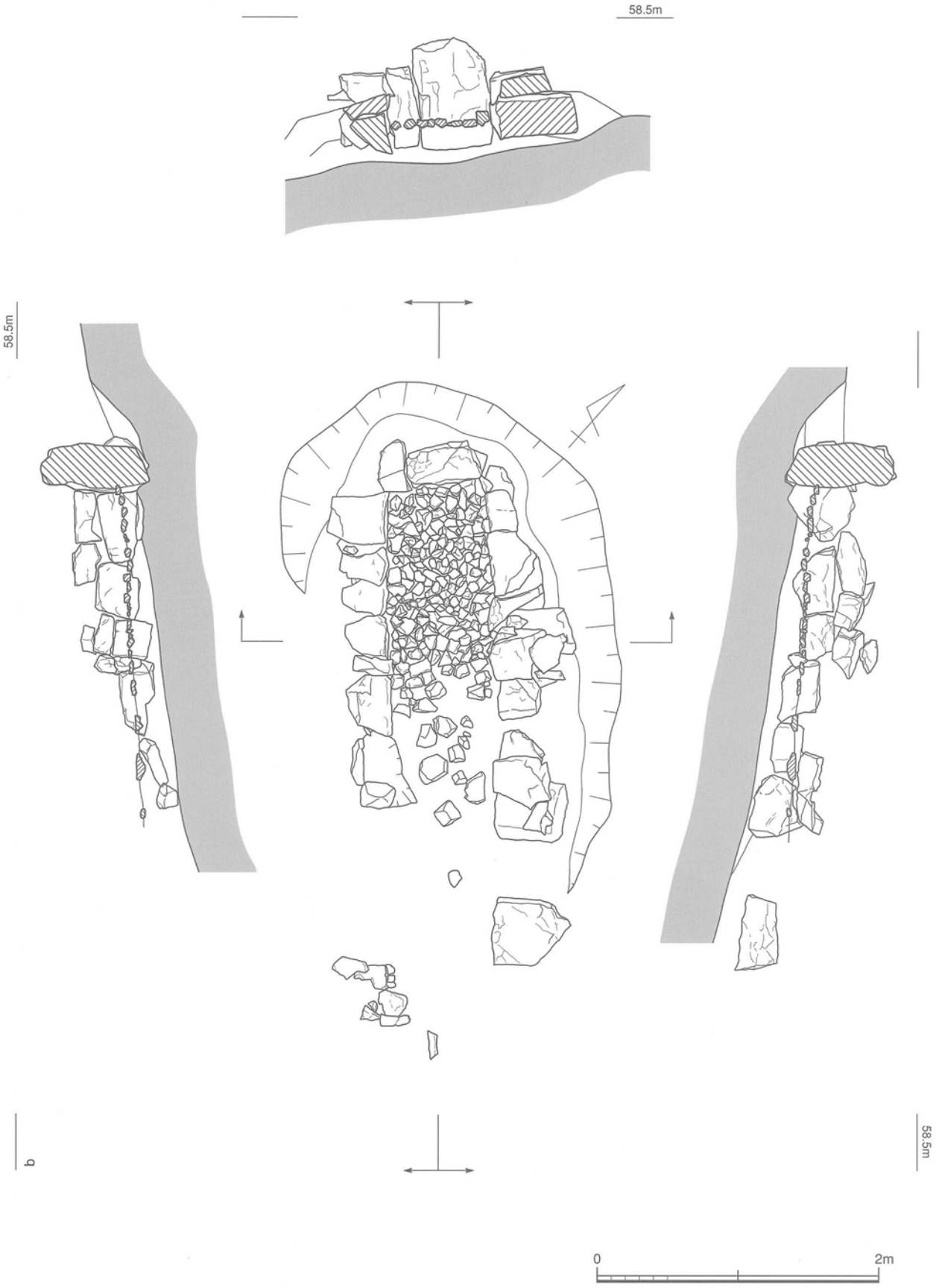


1	明黄褐色	細砂～極細砂	極粗砂含む　粉っぽい
2	黄褐色	細砂～極細砂	細礫含む
3	黄褐色	細砂～極細砂	極粗砂、大礫少量含む　やや堅い
4	黄褐色	極細砂　細砂～細礫含む	堅い
5	明黄褐色	細砂～極細砂	極粗砂～細礫含む　堅い
6	黄褐色	細砂～極細砂	極粗砂　大礫少量含む　ややしまり悪い
7	にぶい黄橙色	細砂～極細砂	細礫～大礫含む　ややしまり悪い
8	にぶい黄色	極細砂　極粗砂～細礫含む	やや堅い
9	にぶい黄橙色	細砂～極細砂	極粗砂～大礫含む
10	明黄褐色	細砂～極細砂	
11	褐灰色	細砂　しまり悪い	
12	黄褐色	細砂～極細砂	細礫含む
13	明黄褐色	細砂～極細砂	細礫～中礫含む
14	にぶい黄色	細砂～極細砂	細礫含む
15	黄褐色	細砂～極細砂	細礫～中礫含む　やや堅い
16	にぶい黄橙色	極細砂　極粗砂、中礫含む	堅い
17	褐灰色	極細砂含む細砂	細礫多く含む　ややしまり悪い
18	明黄褐色	細砂～極細砂	大礫含む
19	褐色	極細砂含む細砂	細礫含む
20	黄褐色	細砂～極細砂	細礫含む
21	褐灰色	細砂～極細砂	しまり悪い
22	褐灰～黄褐色	細砂～極細砂	細礫～中礫含む

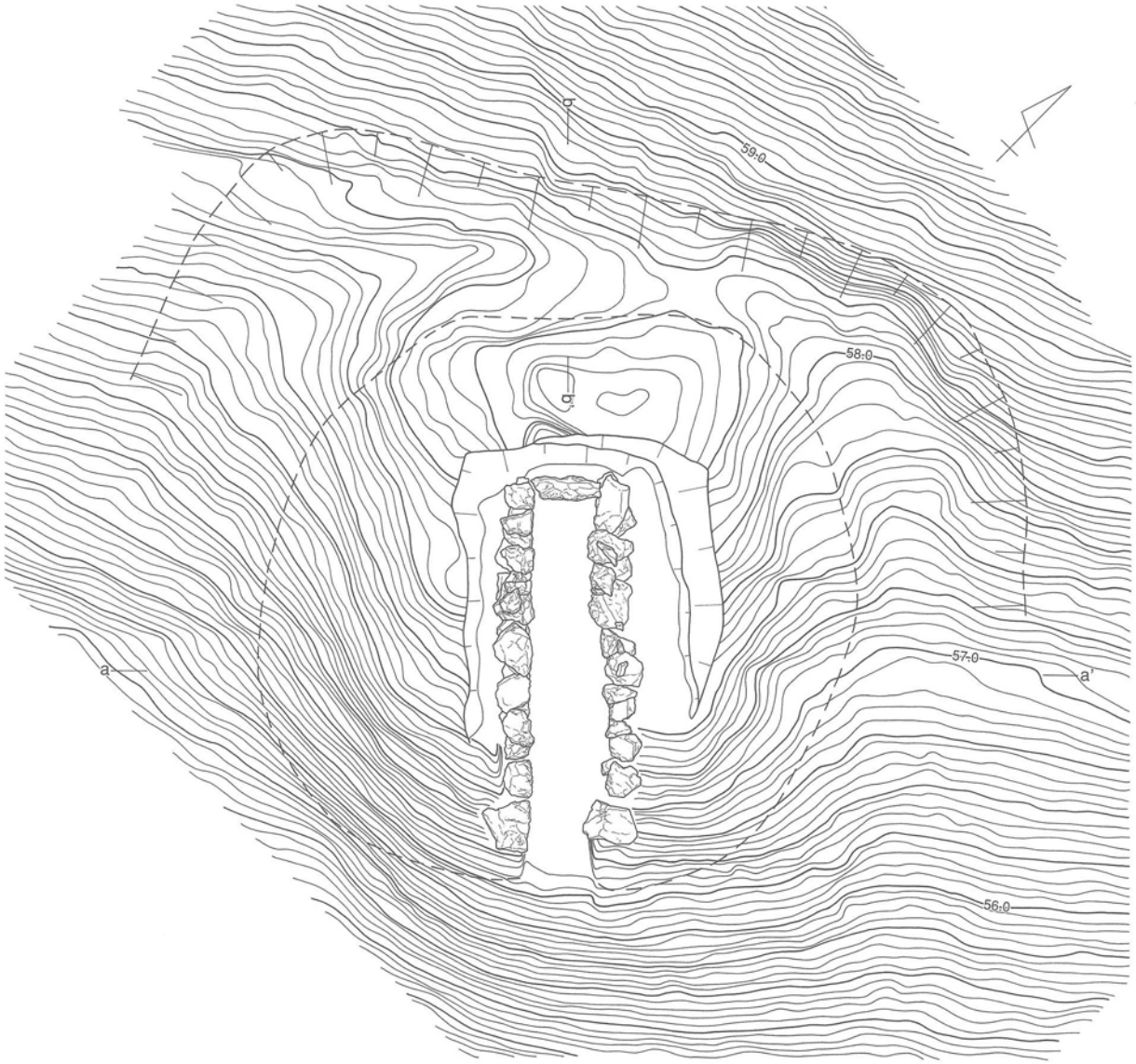
1	にぶい黄	細砂～極細砂	
2	浅黄色	細砂～極細砂	極粗砂～細礫少量含む
3	にぶい黄	細砂～極細砂	細礫含む
4	明黄褐	細砂～極細砂	極粗砂～細礫少量含む
5	にぶい黄	極細砂含む細砂	細礫少量含む
6	にぶい黄橙	極細砂含む細砂	細礫少量含む
7	黄褐色	極細砂含む細砂	
8	にぶい黄色	細砂～極細砂	細礫含む
9	にぶい黄色	細砂～極細砂	極粗砂含む
10	黄橙色	極細砂　細礫少量含む	
11	褐灰色	極細砂含む細砂～極粗砂	ややしまり悪い　大礫含む
12	にぶい黄橙色	細砂含む極細砂	細礫、中礫含む　やや堅い
13	黄橙色	極細砂含む細砂	極粗砂　粉っぽい
14	黄褐色	細砂～極細砂	
15	明黄褐色	極細砂　中礫含む	
16	明黄褐色	細砂～極細砂	極粗砂含む
17	にぶい黄橙色	極細砂含む細砂	ややしまり悪い
18	褐灰色	極細砂含む細砂	細礫、中礫　大礫少量含む　しまり悪い
19	褐色	細砂～極細砂	しまり悪い
20	褐色	細砂～極細砂	
21	にぶい黄色	細砂～極細砂	
22	黄褐色	細砂～極細砂	極粗砂含む

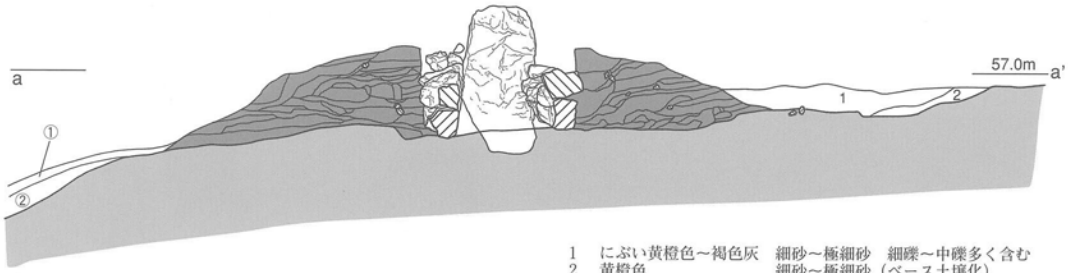
0　3m

墳丘実測図



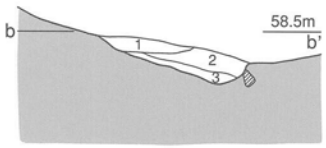
石室実測図





① 表土
② 黄褐色　極細砂含む細砂　極細粗砂～細礫含む

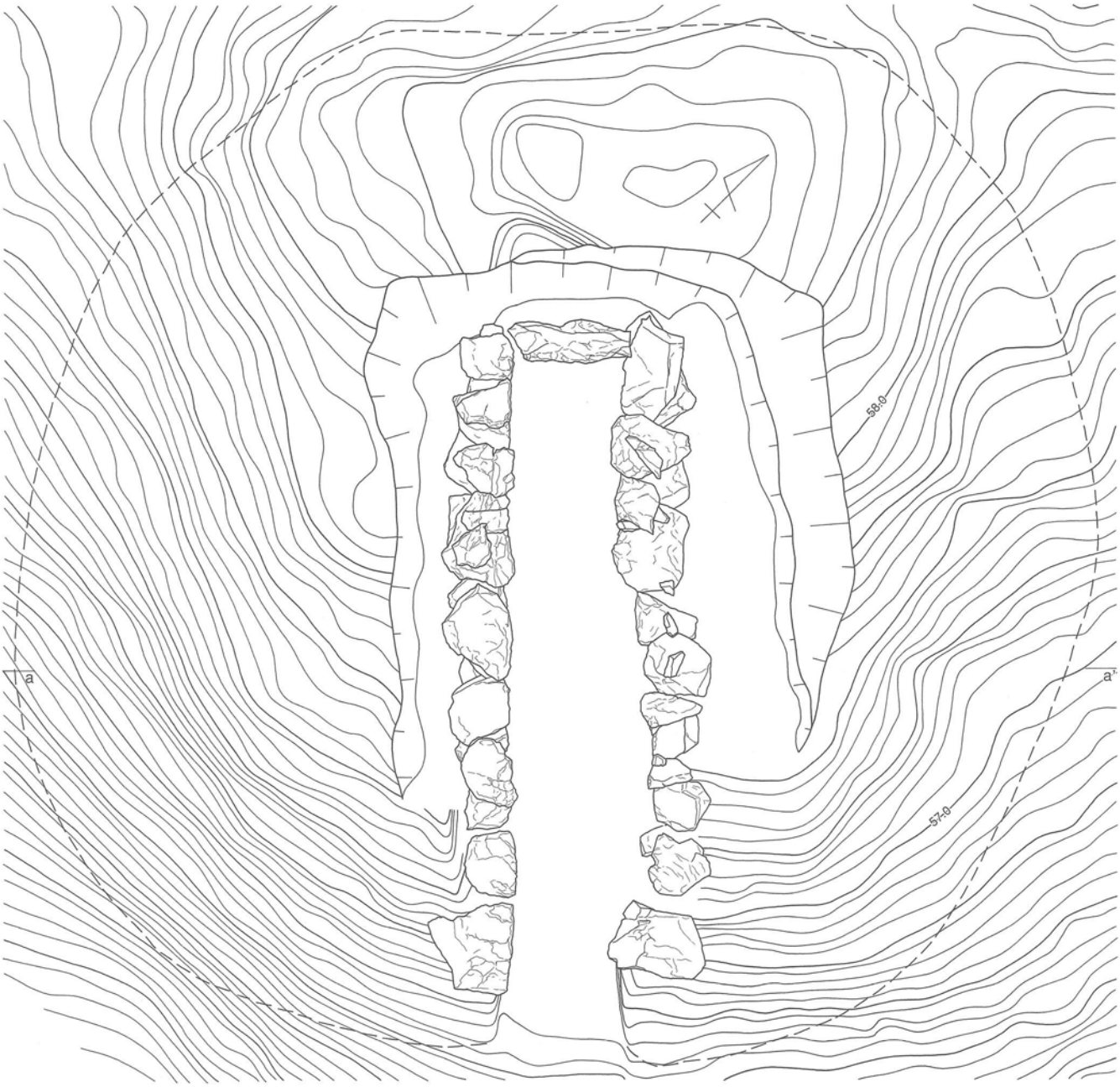
1　にぶい黄橙色～褐色灰　細砂～極細砂　細礫～中礫多く含む
2　黄橙色　細砂～極細砂（ベース土壌化）

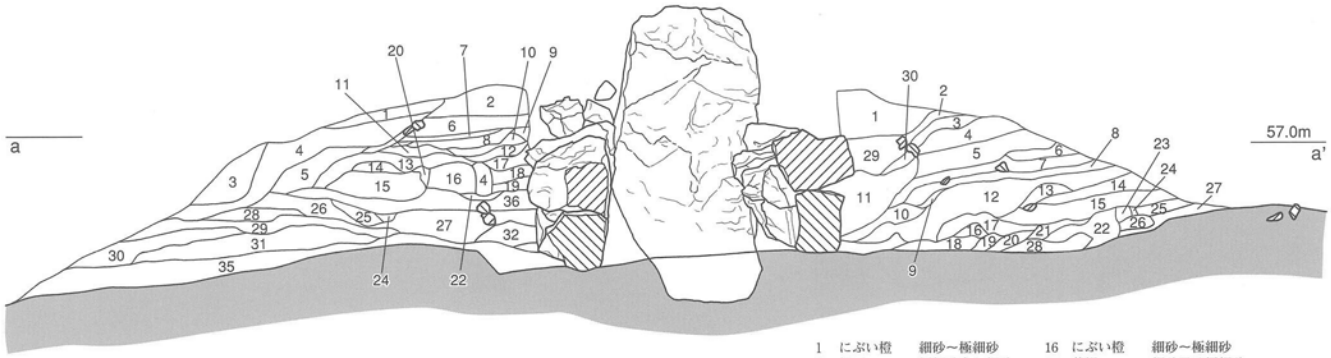


1　表土　細礫～中礫多く含む
2　黄褐色　細砂～極細砂　細礫～中礫多く含む
3　褐灰色　中礫～大礫　極細砂含む細砂（砂礫層）

0　5m

墳丘地形測量図



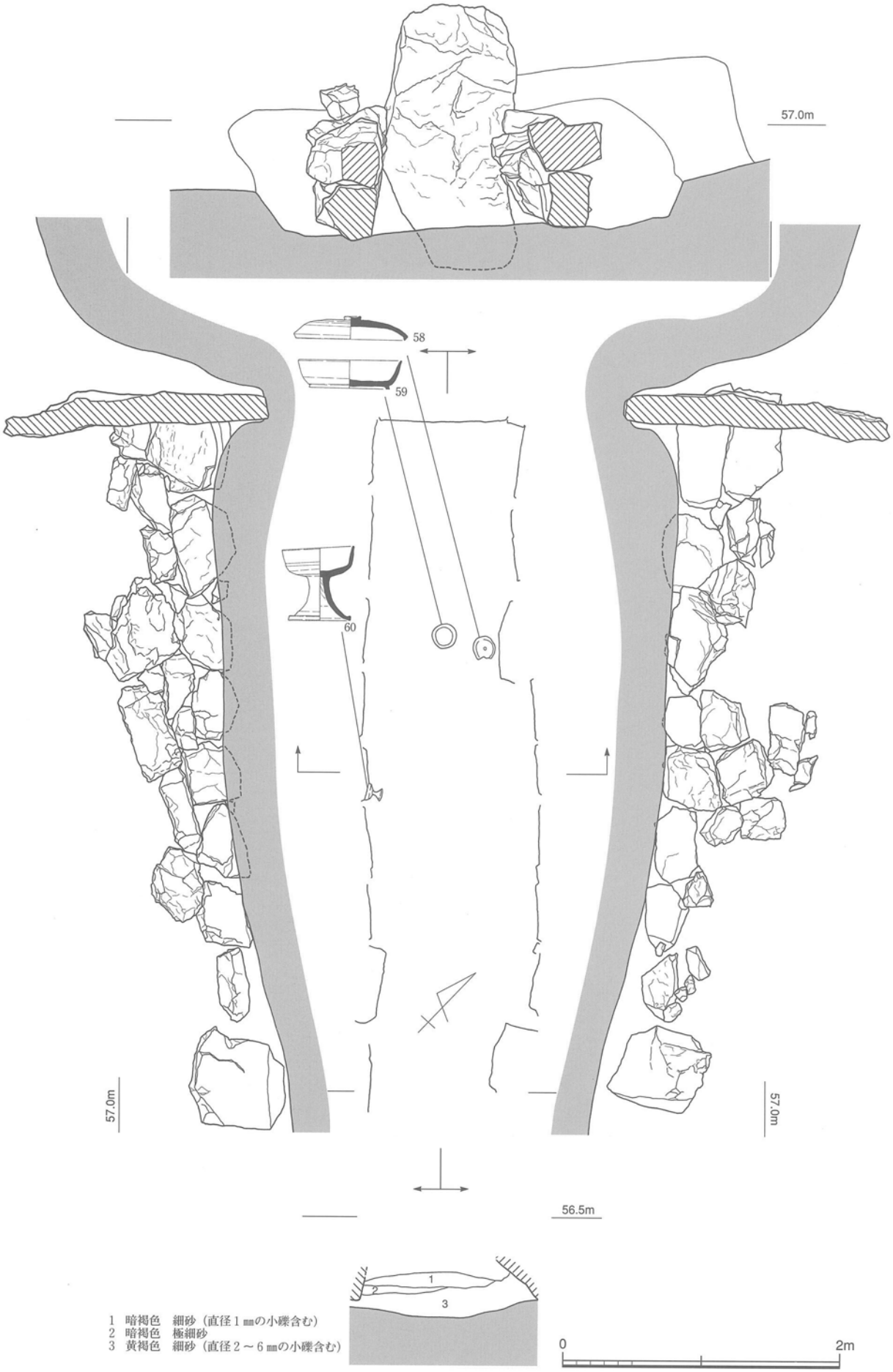


1	褐色	細砂～極細砂
2	にぶい黄橙	細砂～極細砂
3	黄褐	極細砂含む細砂
4	黄褐	極細砂含む細砂
5	にぶい黄橙	極細砂含む細砂
6	黄褐	極細砂含む細砂
7	明黄褐	細砂～極細砂
8	褐	極細砂含む細砂
9	明黄褐	細砂～極細砂
10	明黄褐	細砂～極細砂
11	褐灰	細砂～極細砂
12	にぶい黄橙	細砂～極細砂
13	にぶい黄橙	極細砂含む細砂
14	黄褐	細砂含む極細砂
15	明黄褐	細砂～極細砂
16	明黄褐	細砂～極細砂
17	黄褐	細砂～極細砂
18	明黄褐	細砂～極細砂
19	にぶい黄橙	細砂～極細砂
20	黄褐	細砂～極細砂
21	褐灰	細砂～極細砂
22	黄褐	細砂～極細砂
23	褐灰	細砂～極細砂
24	褐	細砂～極細砂
25	明黄褐	極細砂含む細砂
26	黄褐	細礫～極細砂
27	暗黄褐	細砂～極細砂
28	にぶい黄橙	細砂～極細砂
29	褐灰	細砂～極細砂
30	浅黄	細砂～極細砂
31	にぶい黄橙	細砂～極細砂
32	にぶい黄	細砂含む極細砂
33	褐	細砂　極細砂含む
34	黄橙	細砂～極細砂
35	暗褐	極細砂含む細砂（旧表土）
36	褐灰	極細砂含む細砂
37	オリーブ灰	細砂～極細砂

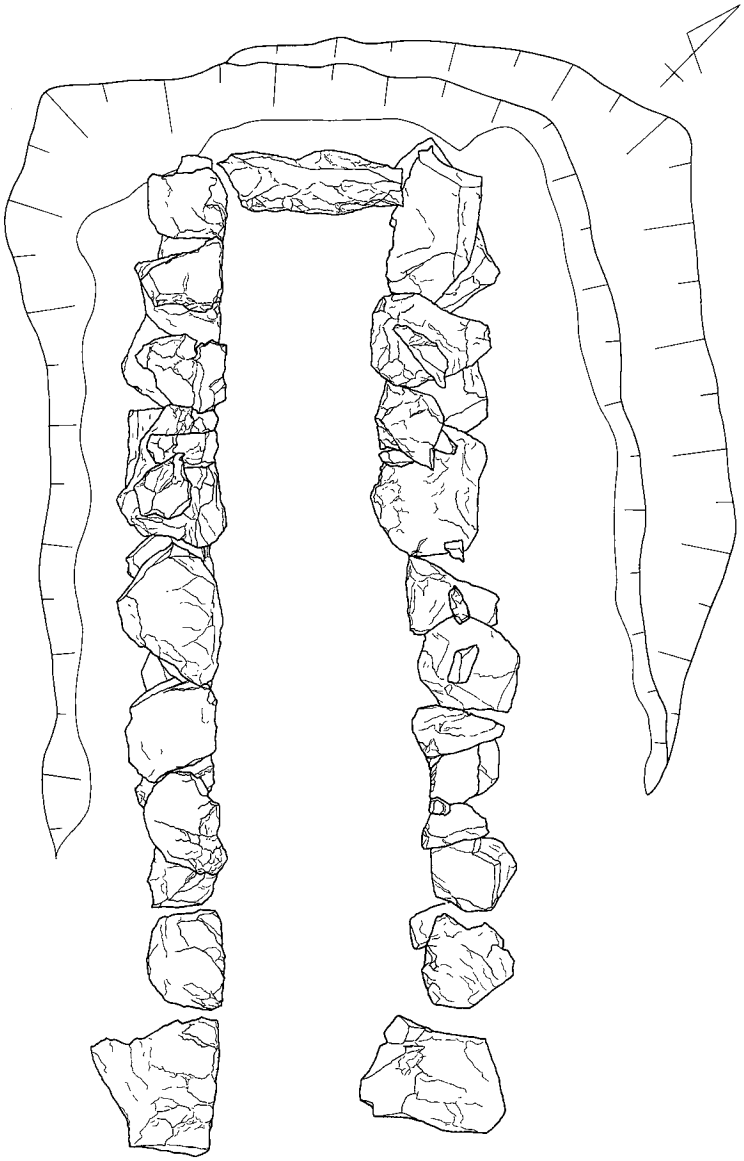
1	にぶい橙	細砂～極細砂
2	褐灰	極細砂含む細砂
3	にぶい橙	細砂～極細砂
4	褐灰	細砂～極細砂
5	黄褐	細砂～極細砂
6	明黄褐	細砂～極細砂
7	にぶい黄	細砂又は極細砂
8	褐灰	極細砂含む細砂
9	明黄褐	細砂～極細砂
10	黄褐	細砂～極細砂
11	褐灰	細砂～極細砂
12	にぶい橙	細砂～極細砂
13	褐灰	極細砂含む細砂
14	黄褐	細砂～極細砂
15	褐灰	極細砂含む細砂
16	にぶい橙	細砂～極細砂
17	黄褐	細砂又は極細砂
18	褐	細砂～極細砂
19	黄褐	細砂～極細砂
20	褐灰	細砂～極細砂
21	にぶい黄	極細砂含む細砂
22	黄褐	極細砂含む細砂
23	にぶい黄	細砂又は極細砂
24	黄褐	細砂～極細砂
25	黄褐	極細砂含む細砂
26	浅黄	細砂～極細砂
27	にぶい橙	極細砂含む細砂
28	にぶい橙	細砂～極細砂
29	黄褐	細砂～極細砂
30	明褐黄	細砂～極細砂

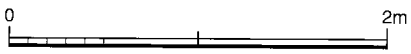
0　3m

墳丘実測図


57.0m
58
59
60
57.0m
57.0m
56.5m
1
2
3
1　暗褐色　細砂（直径１㎜の小礫含む）
2　暗褐色　極細砂
3　黄褐色　細砂（直径２～６㎜の小礫含む）
0
2m

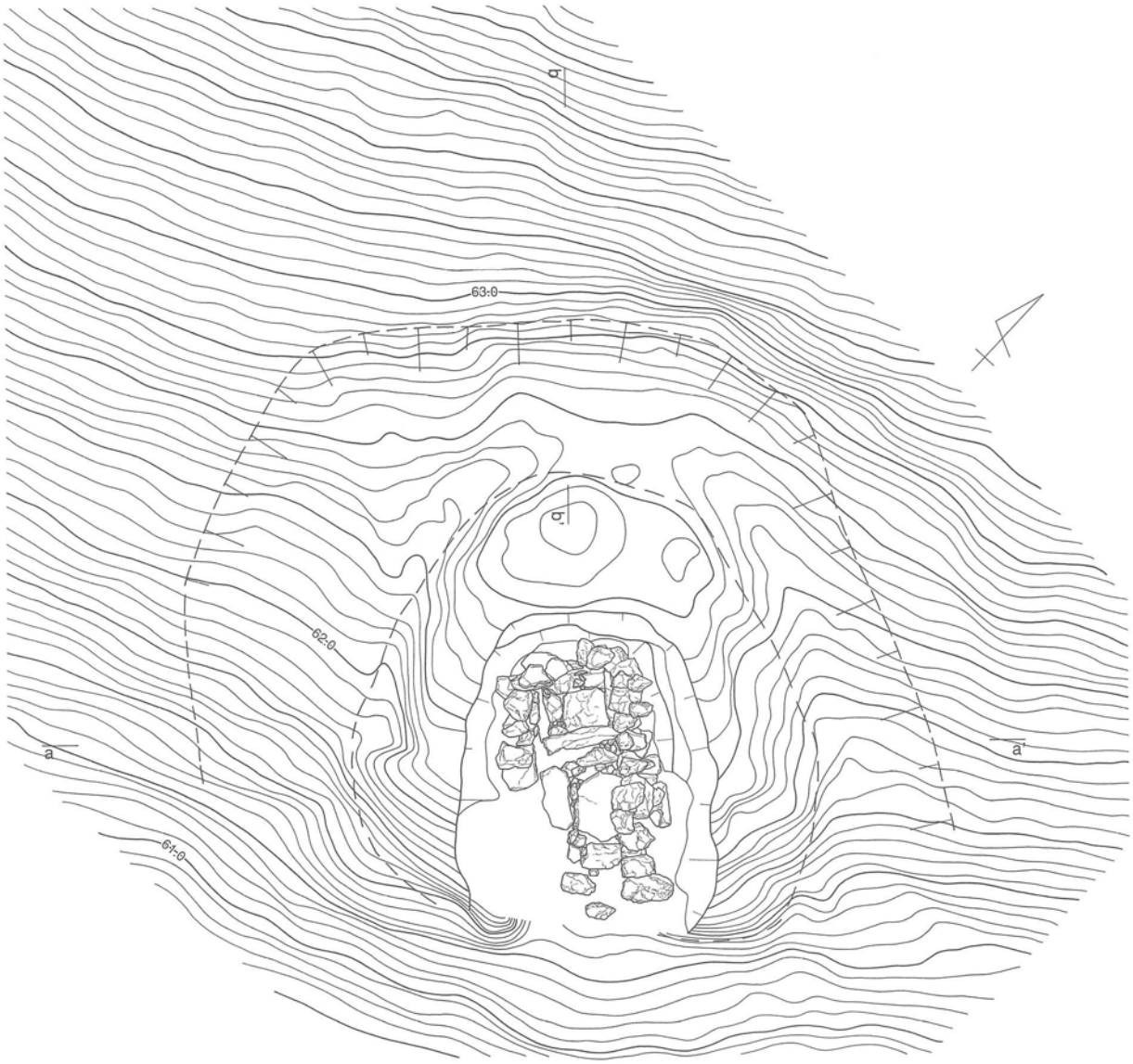
石室実測図(1)

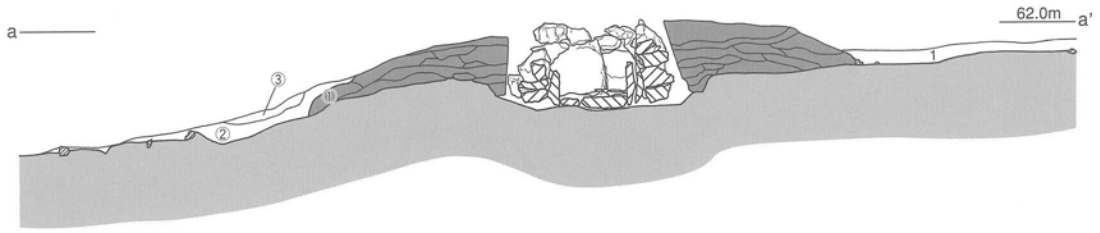




石室実測図(2)

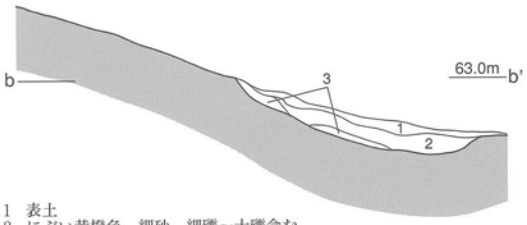
図版63　状覚山15号墳





① 黄褐色　極細砂含む細砂　細礫含む
② にぶい黄橙色　細砂～極細砂（細砂多く含む）　中礫～大礫やや含む
③ 表土

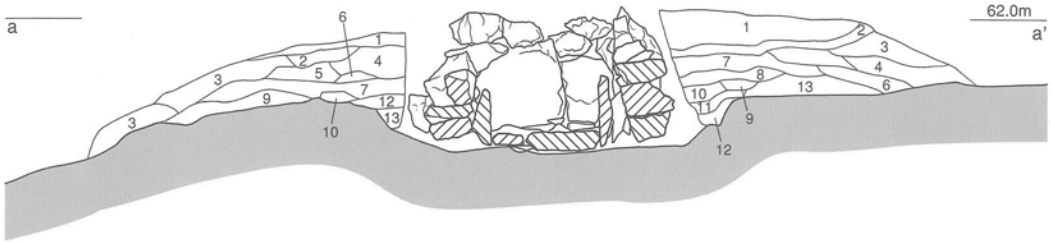
1 黄褐色～にぶい黄色　細砂～極細砂　中礫、大礫わずかに含む
しまりよい



1 表土
2 にぶい黄橙色　細砂　細礫～大礫含む
3 浅黄色　極細砂含む細砂　細礫～中礫含む

0　3m

墳丘地形測量図

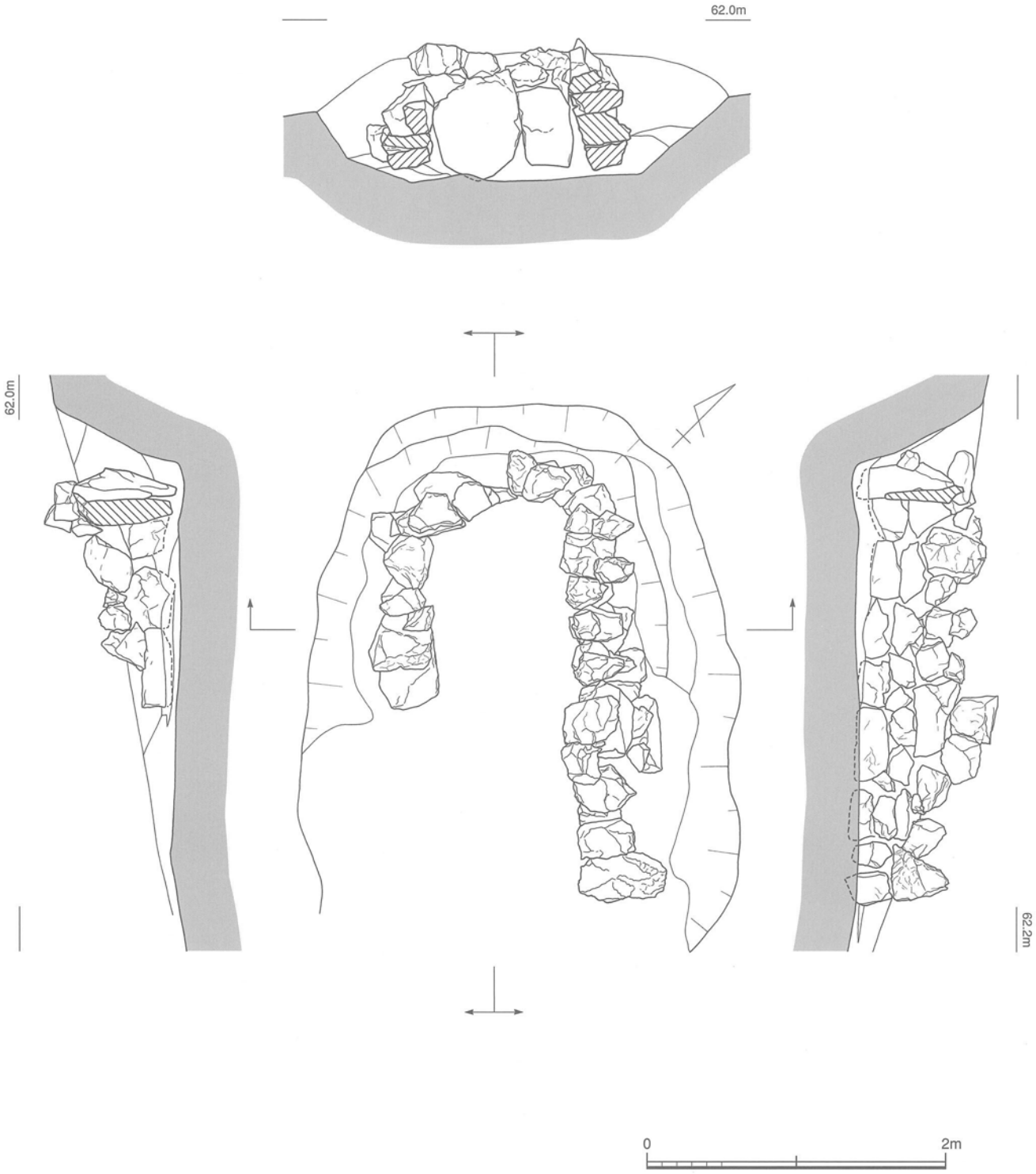


1　にぶい黄色　細流砂～極細流砂　極粗砂少量含む
2　浅黄色　細流砂又は極細流砂　極粗砂～細礫含む
3　にぶい黄橙色　細砂～極細砂　極粗砂含む　ややしまり悪い
4　黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む
5　黄褐色　極細砂含む細砂　中砂～細礫含む　ややしまり悪い
6　黄褐色　極細砂含む細砂　細礫少量含む
7　褐灰色　細砂～中砂　極粗砂少量含む　しまり悪い
8　にぶい黄色　細砂～極細砂
9　浅黄色　細砂～極細砂　細礫含む
10　黄褐色　細砂～極細砂　細礫含む
11　褐灰色　極細砂含む細砂　中砂～細礫含む
12　黄褐色　極細砂含む細砂　極粗砂含む　しまり悪い
13　にぶい橙色　細砂～極細砂　中粒砂～細礫含む　しまり悪い

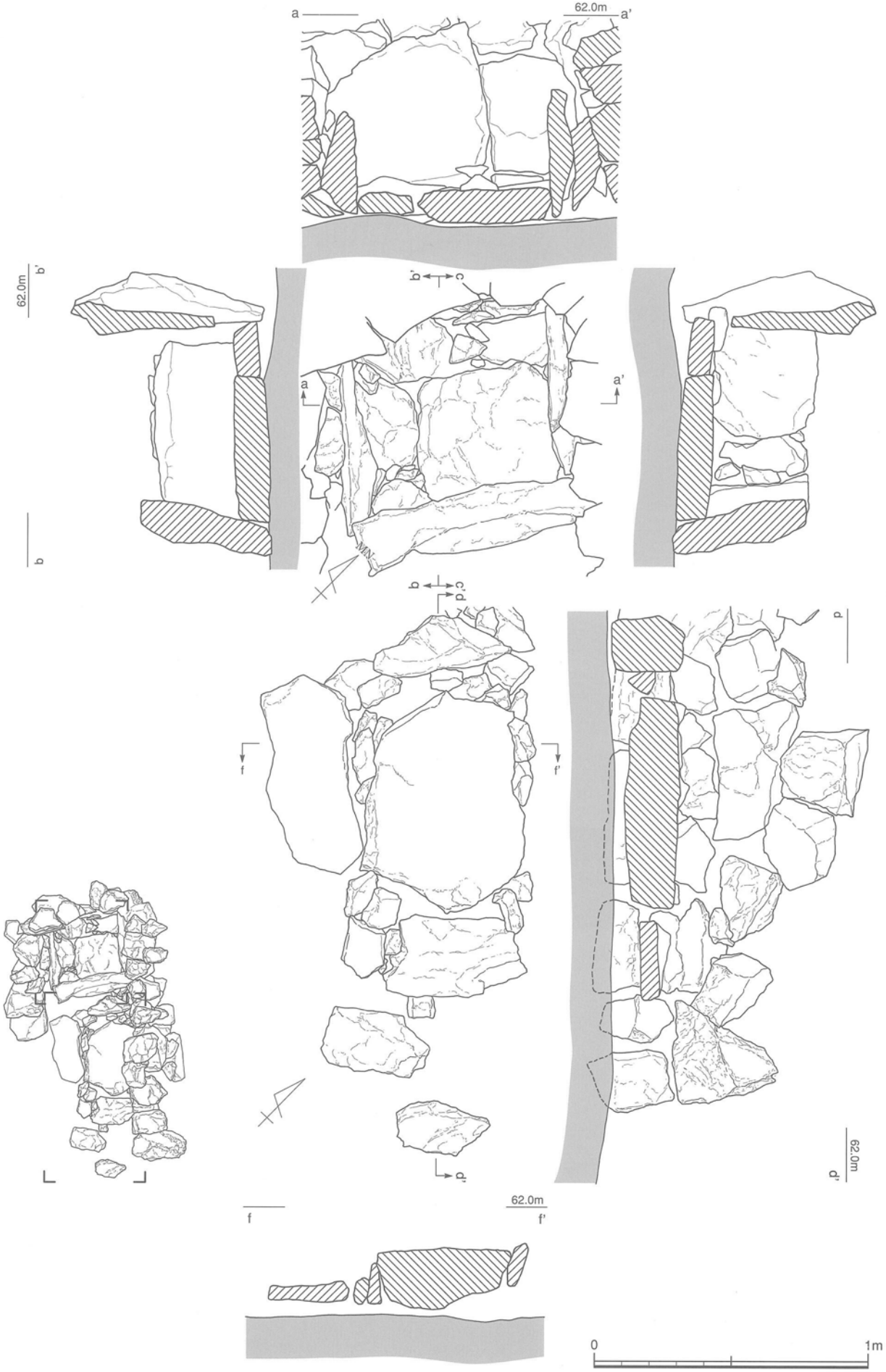
1　にぶい橙色　細砂～極細砂　細礫含む
2　黄褐色　極細砂含む細砂　中砂～極粗砂含む
3　黄褐色　細砂～極細砂　中砂～極粗砂含む　中礫含少量含む
4　黄褐色　極細砂含む細砂　大礫含む
5　黄褐色　細砂～極細砂　細礫含む
6　黄褐色　細砂～極細砂　細礫含む
7　にぶい黄色　細砂～極細砂　中砂～細礫含む　しまり悪い
8　黄褐色　極細砂含む細砂　中砂～極粗砂、細礫含む　しまり悪い
9　浅黄色　細砂含む極細砂　堅い
10　黄褐色　極細砂含む細砂　中砂、細礫含む　堅い
11　明黄褐色　細砂～極細砂　極粗砂含む
12　褐灰色　細砂～中砂　極粗砂、細礫多く含む
13　褐色　細砂～極細砂　細礫、中礫、大礫含む

0　3m

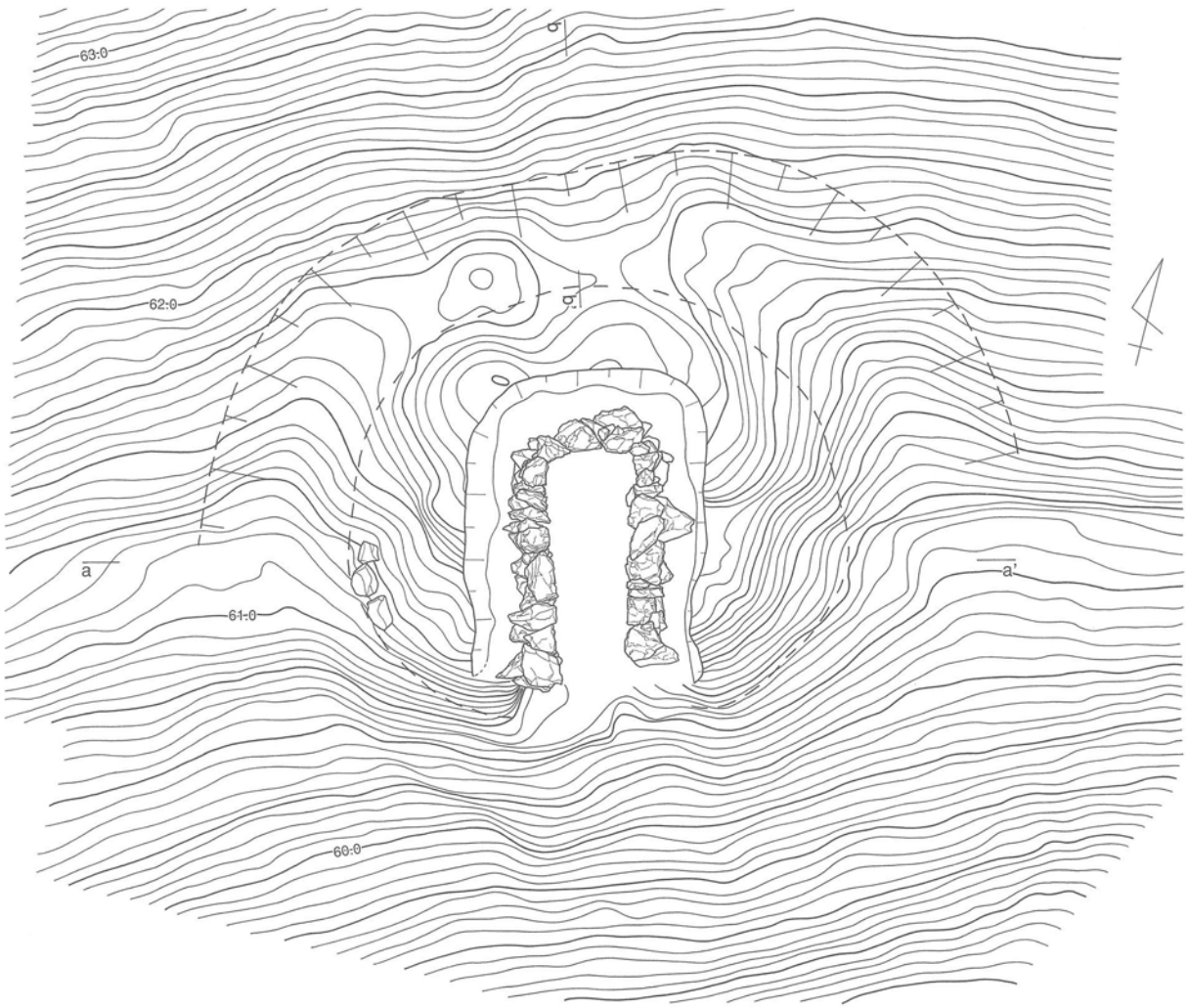
墳丘実測図

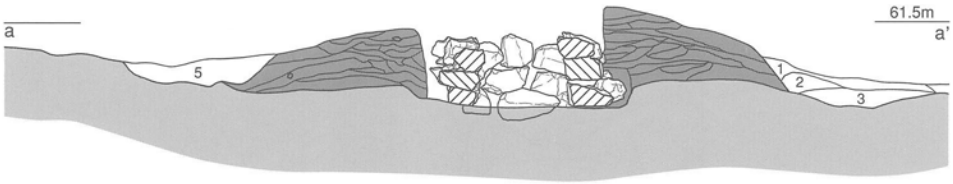


石室実測図



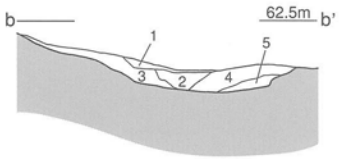
石室内石棺実測図





5　黄褐色　細砂～極細砂（ややシルト質）　中礫、大礫少量混じる　しまり悪い

1　表土
2　にぶい黄色　細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む（しまり悪い）
3　褐色　細砂～極細砂　細礫～中礫少量含む



1　表土
2　にぶい黄橙色　細砂～極細砂　中礫、大礫多く含む
3　黄褐色　細砂～極細砂　細礫～中礫含む
4　黄褐色　細砂多く含む極細砂　細礫少量含む
5　にぶい黄橙色　細砂多く含む極細砂　中礫少量含む

0　3m

墳丘地形測量図

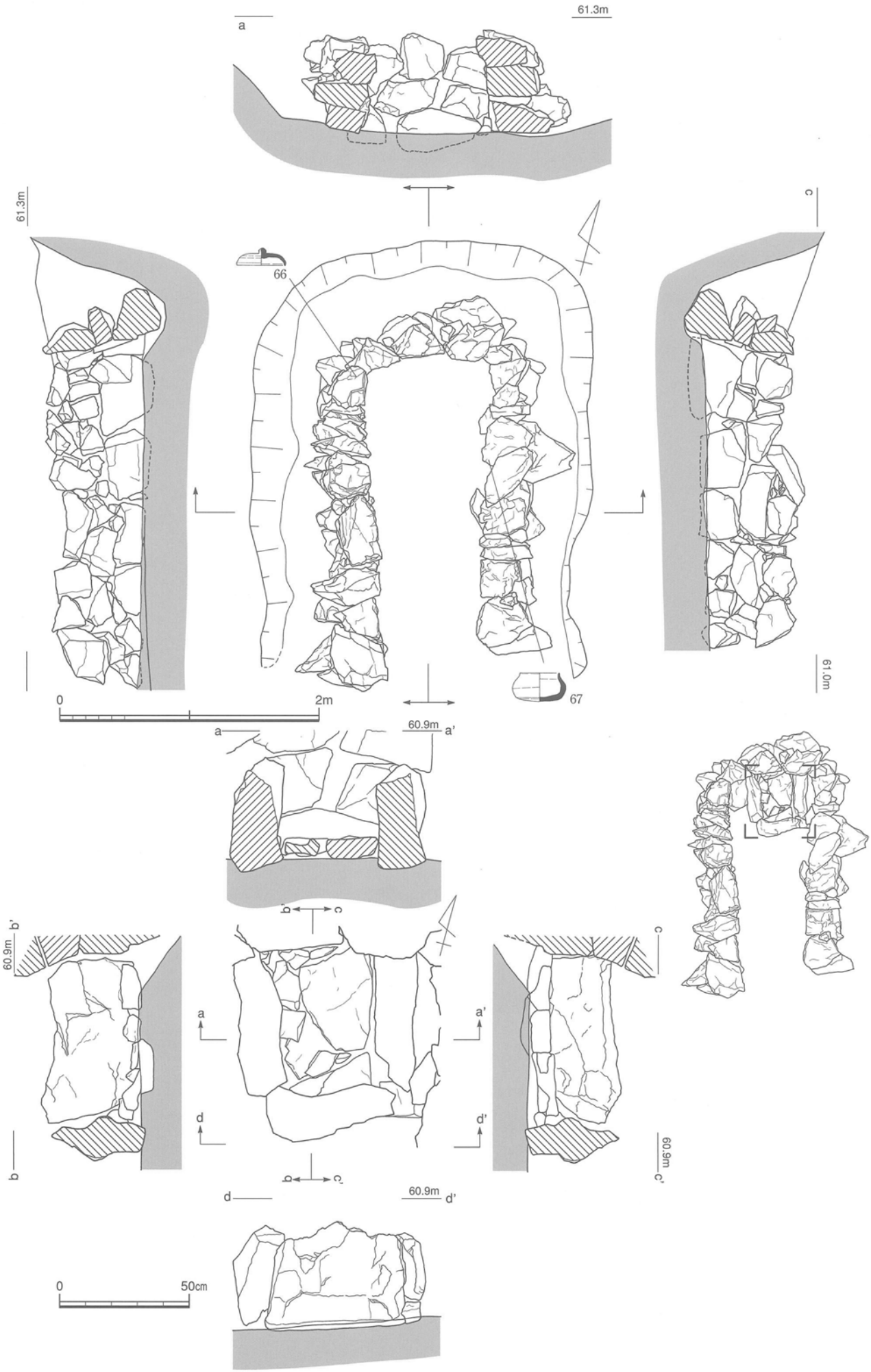
1	黄褐色	細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む
2	明黄褐色	細砂～極細砂　極粗砂、大礫少量含む
3	にぶい黄橙色	細砂～極細砂　中礫含む
4	明黄褐色	極細砂含む細砂　極粗砂、細礫少量含む
5	黄褐色	極細砂含む細砂　細礫含む　ややしまり悪い
6	にぶい黄色	細砂～極細砂　極粗砂～細礫少量含む　しまり悪い
7	にぶい黄橙色	細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む
8	明黄褐色	細砂含む極細砂
9	褐灰色	極細砂含む細砂　極粗砂～細礫含む　しまり悪い
10	褐色	極細砂含む細砂　極粗砂多く含む
11	黄褐色	細砂含む極細砂　細礫含む
12	にぶい黄橙色	極細砂含む細砂　極粗砂～細礫含む
13	黄褐色	細砂～極細砂
14	褐灰色	細砂～極細砂　中礫含む
15	明黄褐色	細砂又は極細砂
16	褐灰色	極細砂細砂　細礫～中礫含む
17	暗黄褐色	極細砂含む細砂　極粗砂多く含む
18	褐色	極細砂含む細砂　細礫多く含む

1	にぶい黄橙色	細粒砂～極細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
2	黄褐色	細粒砂～極細粒砂　極粗粒砂含む
3	にぶい黄色	細粒砂～極細粒砂　細礫含む
4	にぶい黄橙色	細粒砂又は極細粒砂
5	にぶい黄橙色	極細粒砂含む細粒砂　細礫少量含む
6	褐灰色	細粒砂～極細粒砂　中礫含む
7	黄褐色	細粒砂含む極細粒砂　堅い
8	黄褐色（灰がかった）	細粒砂～極細粒砂　極粗粒砂　ややしまり悪い
9	明黄褐色	細粒砂～極細粒砂　中礫含む
10	にぶい黄色	細粒砂～極細粒砂
11	褐灰色	細粒砂～極細粒砂
12	にぶい黄橙色	細粒砂～極細粒砂　細礫含む　ややしまり悪い
13	褐灰色	極細粒砂含む細粒砂　極粗粒砂多く含む
14	浅黄色	細粒砂～極細粒砂　中礫少量含む
15	暗黄褐色	細粒砂～極細粒砂　中礫、大礫少量含む　しまり悪い
16	褐灰色	極細粒砂含む細粒砂　細礫含む　しまり悪い
17	褐色	細粒砂～極細粒砂　細礫多く含む　ややしまり悪い
18	黄褐色	極細粒砂含む細粒砂　細礫多く含む
19	暗黄褐色	細粒砂～極細粒砂　細礫含む　ややしまり悪い
20	褐灰色	細粒砂～極細粒砂　極粗粒砂～細礫含む
21		中礫含む大礫

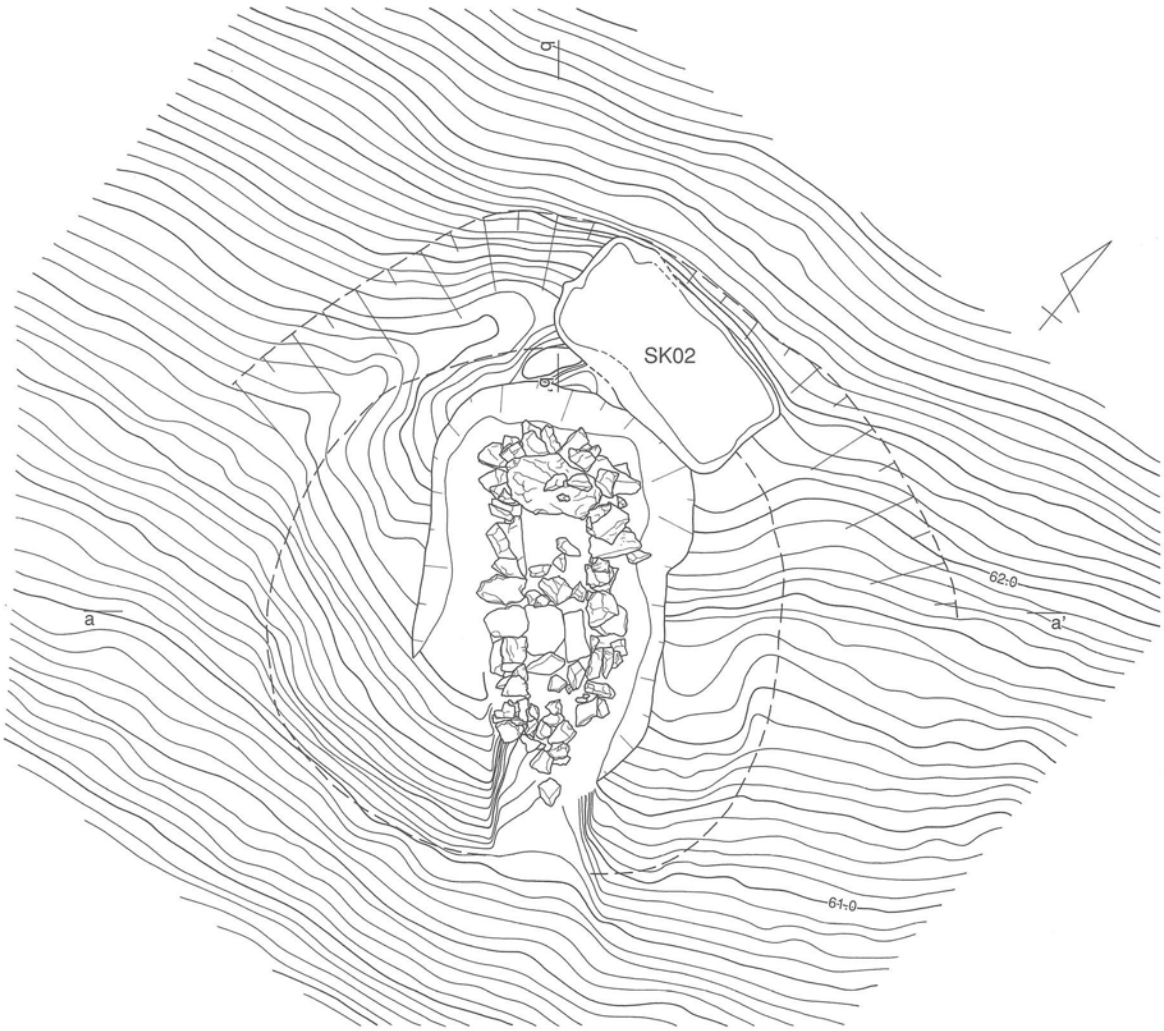
0　3m

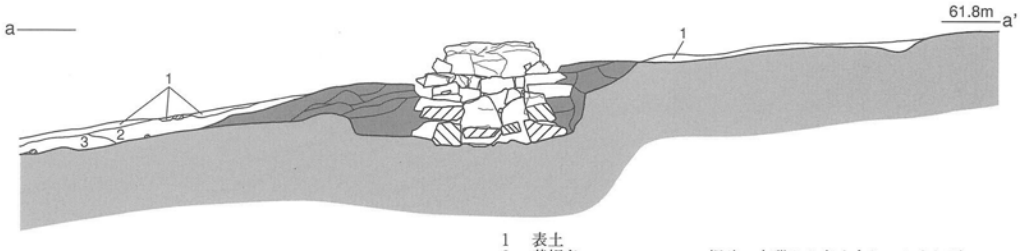
墳丘実測図

図版69　状覚山16号墳

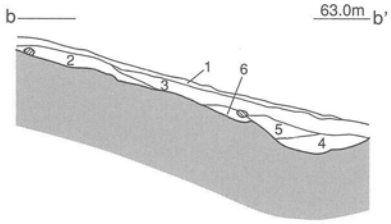


石室・石室内石棺実測図





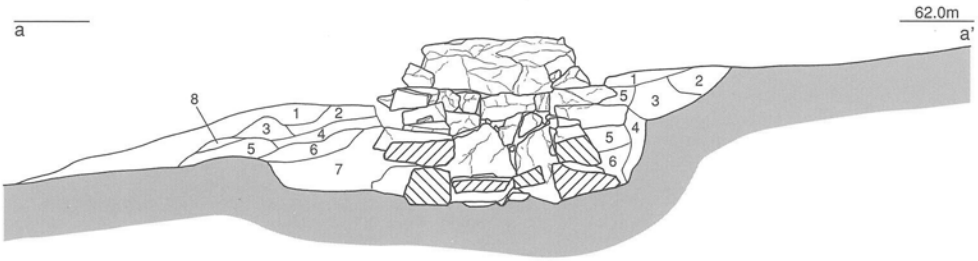
1　表土
2　黄褐色　細砂～中礫やや多く含む　しまり悪い
3　黄褐色～オリーブ褐色　細砂～極細砂　極粗砂多く含む



1　表土
2　明黄褐色　細砂～極細砂（シルト質）　大角礫含む
3　黄褐色　細砂～極細砂　細礫～中礫少量含む
4　黄褐色　細砂　極粗砂～細礫多く含む　中礫、大礫少量混じる
5　にぶい黄橙色　細砂　極粗砂～細礫
6　灰黄褐色　細砂　大礫含む
7　明黄褐色　極細砂～細砂　大礫多く含む（墳丘）

0　3m

墳丘地形測量図

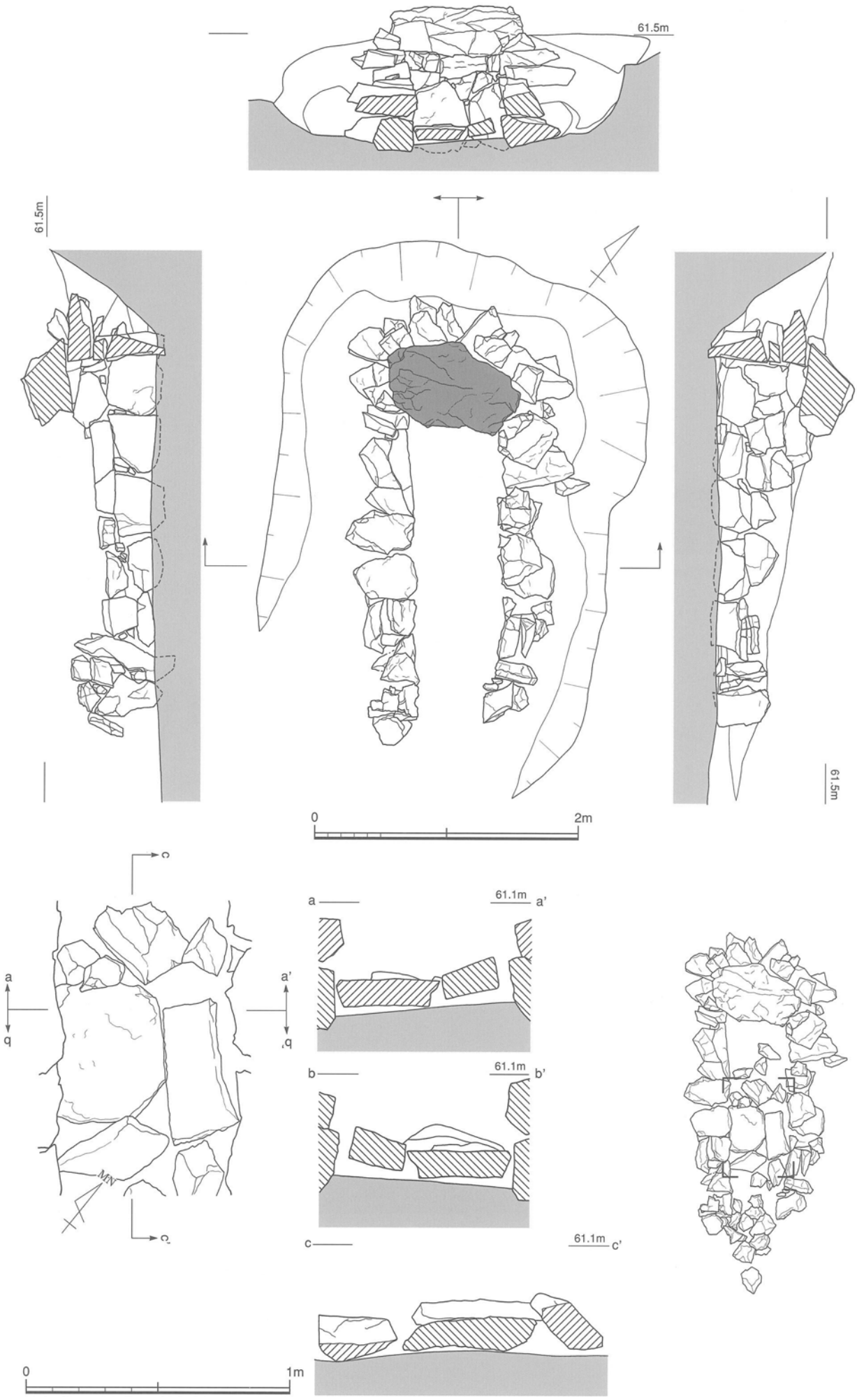


1　にぶい黄橙色　細砂～極細砂　細礫少量含む
2　明黄褐色　細砂～極細砂　中礫少量含む
3　褐灰色　極細砂含む細砂　ややしまり悪い
4　にぶい黄橙色　細砂～極細砂　細礫含む
5　褐灰色　極細砂又は細砂　細礫含む
6　褐灰色～灰白色　細砂～極細砂　極粗砂～細礫含む
7　明黄褐色　細砂～極細砂　中礫～大礫含む　堅い
8　黄褐色　細砂～極細砂　中礫含む

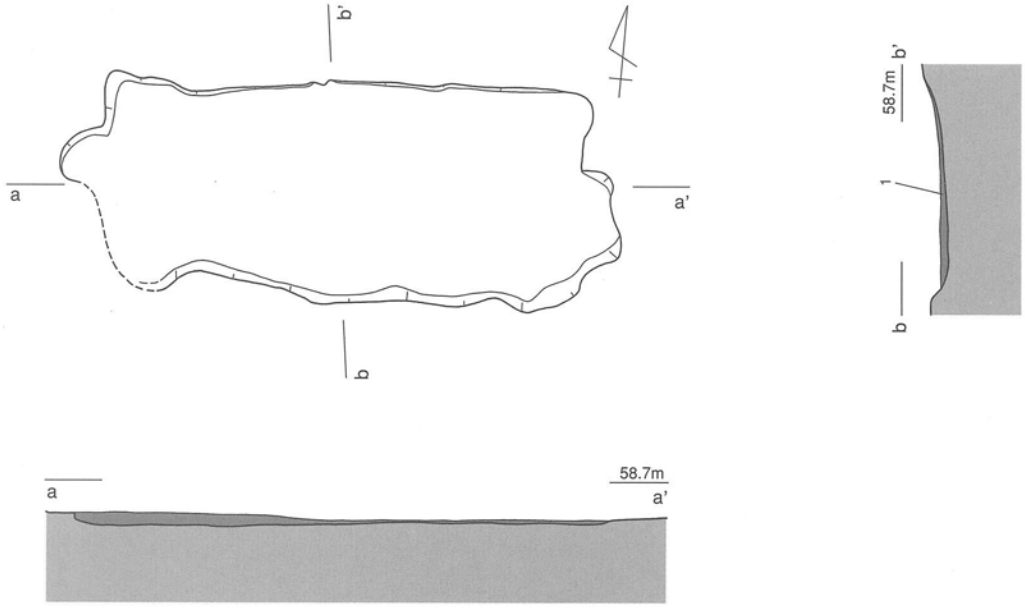
1　黄褐色　細砂～極細砂
2　にぶい黄橙色　細砂～極細砂
3　黄褐色　細砂～極細砂　中礫、大礫含む
4　浅黄色　極細砂含む細砂　細礫含む
5　明黄褐色　細砂～極細砂　細礫～中礫多く含む
6　にぶい黄橙色　極細砂含む細砂　極粗砂多く含む～中礫含む

0　3m

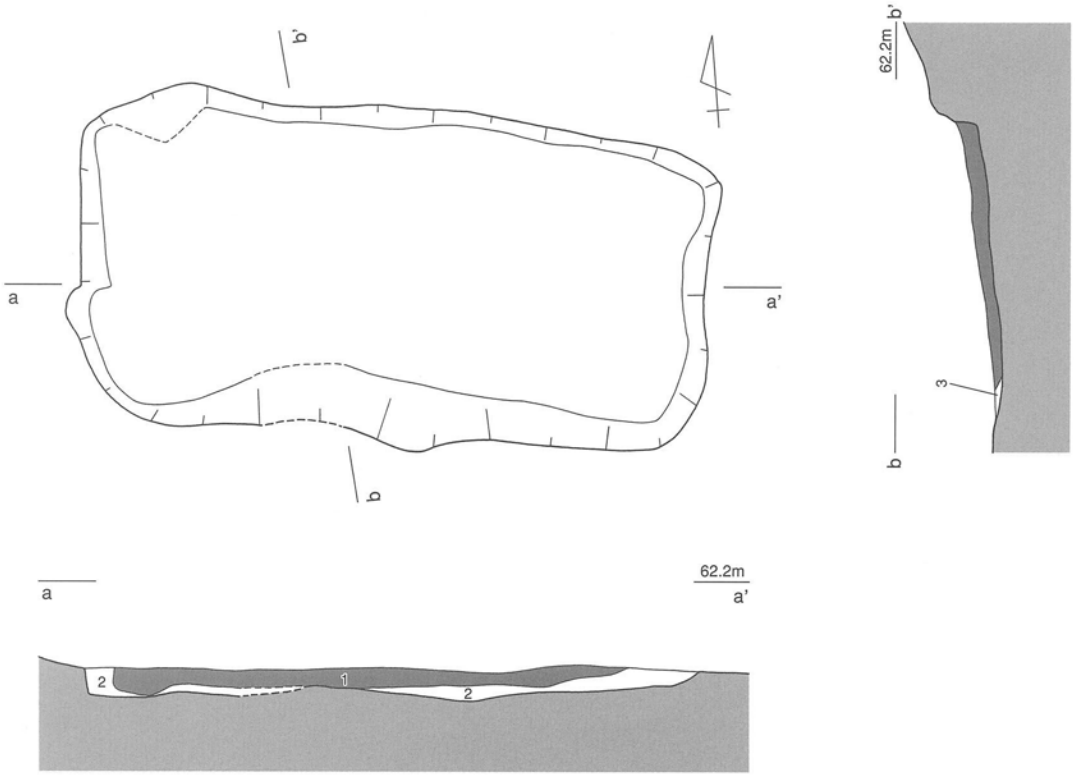
墳丘実測図



石室・石室内石棺実測図



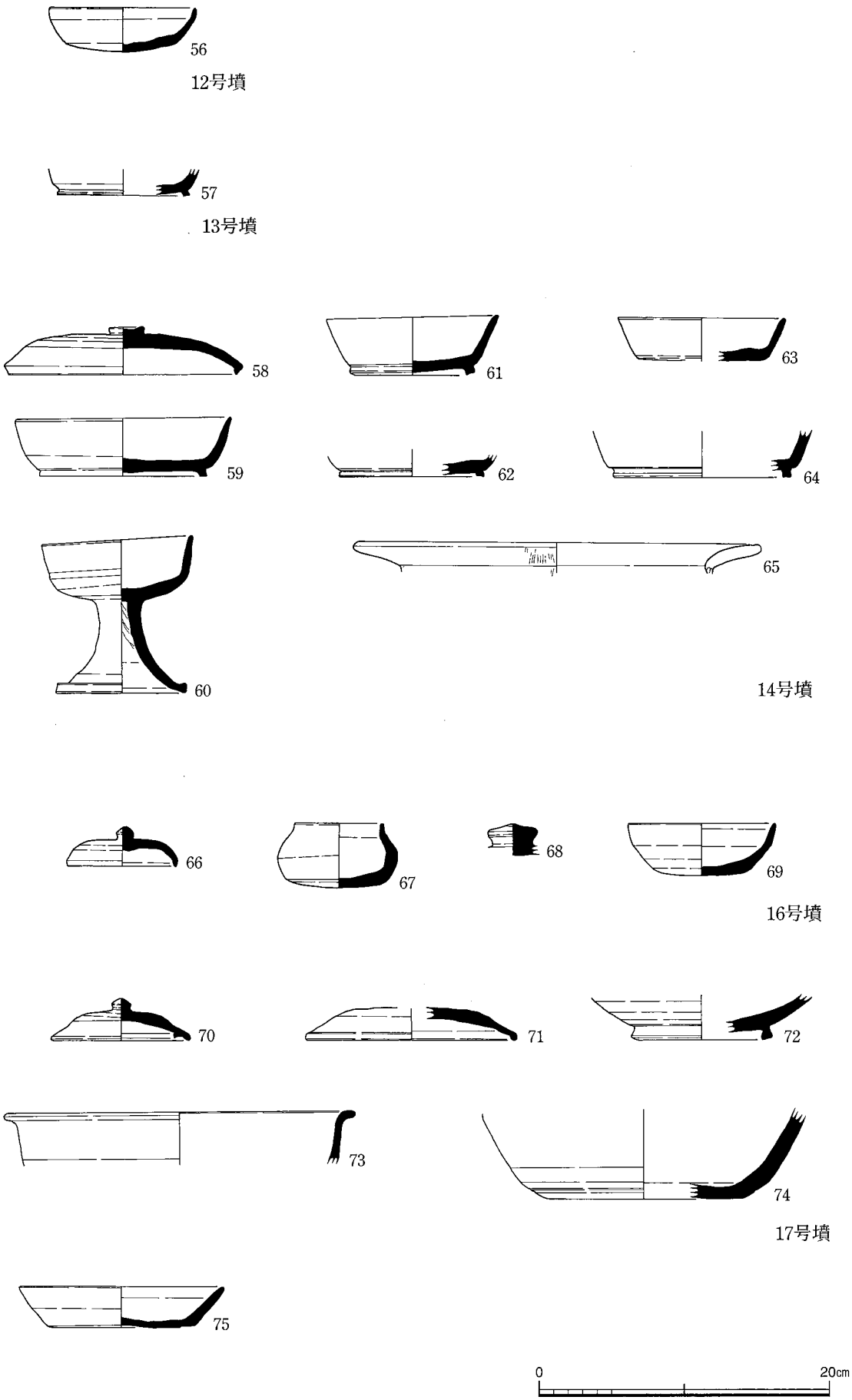
1　暗黒褐色　炭ブロック　焼土片少量含む　細砂含む極細砂（炭層）



1　暗黒褐色　細砂含む極細砂（炭層）
2　明黄褐色　細砂含む極細砂（シルト質）
3　焼土

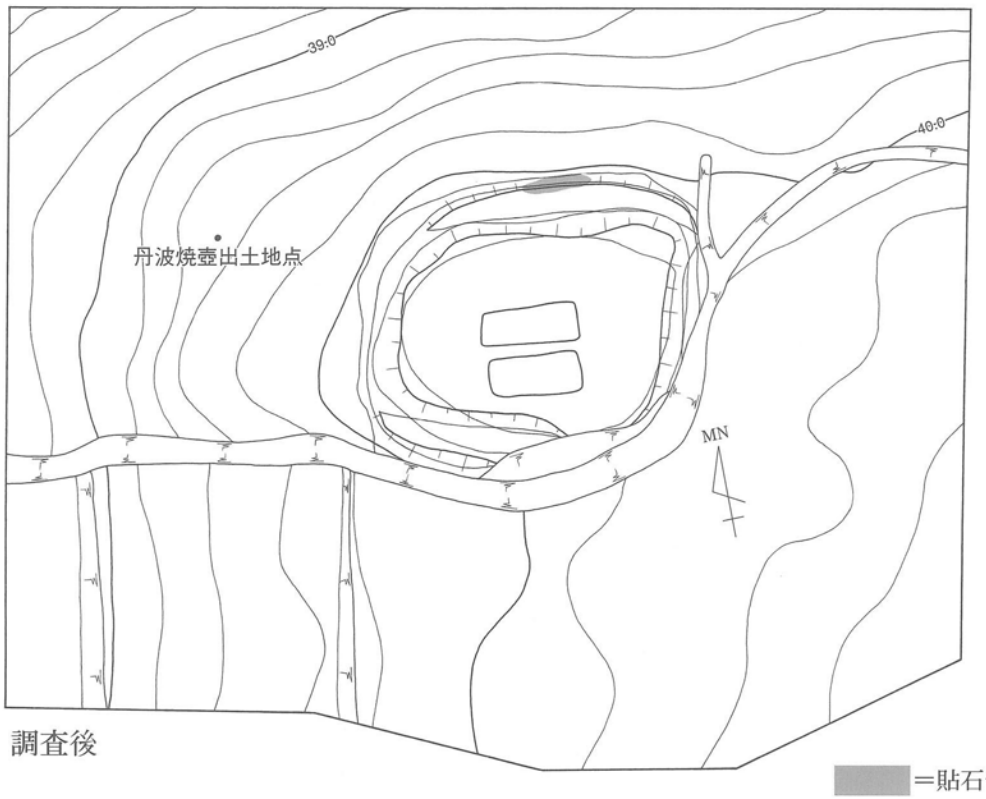
0　3m

炭土坑


56
12号墳
57
13号墳
58
61
63
59
62
64
60
65
14号墳
66
67
68
69
16号墳
70
71
72
73
74
17号墳
75
0
20cm

出土土器

調査前

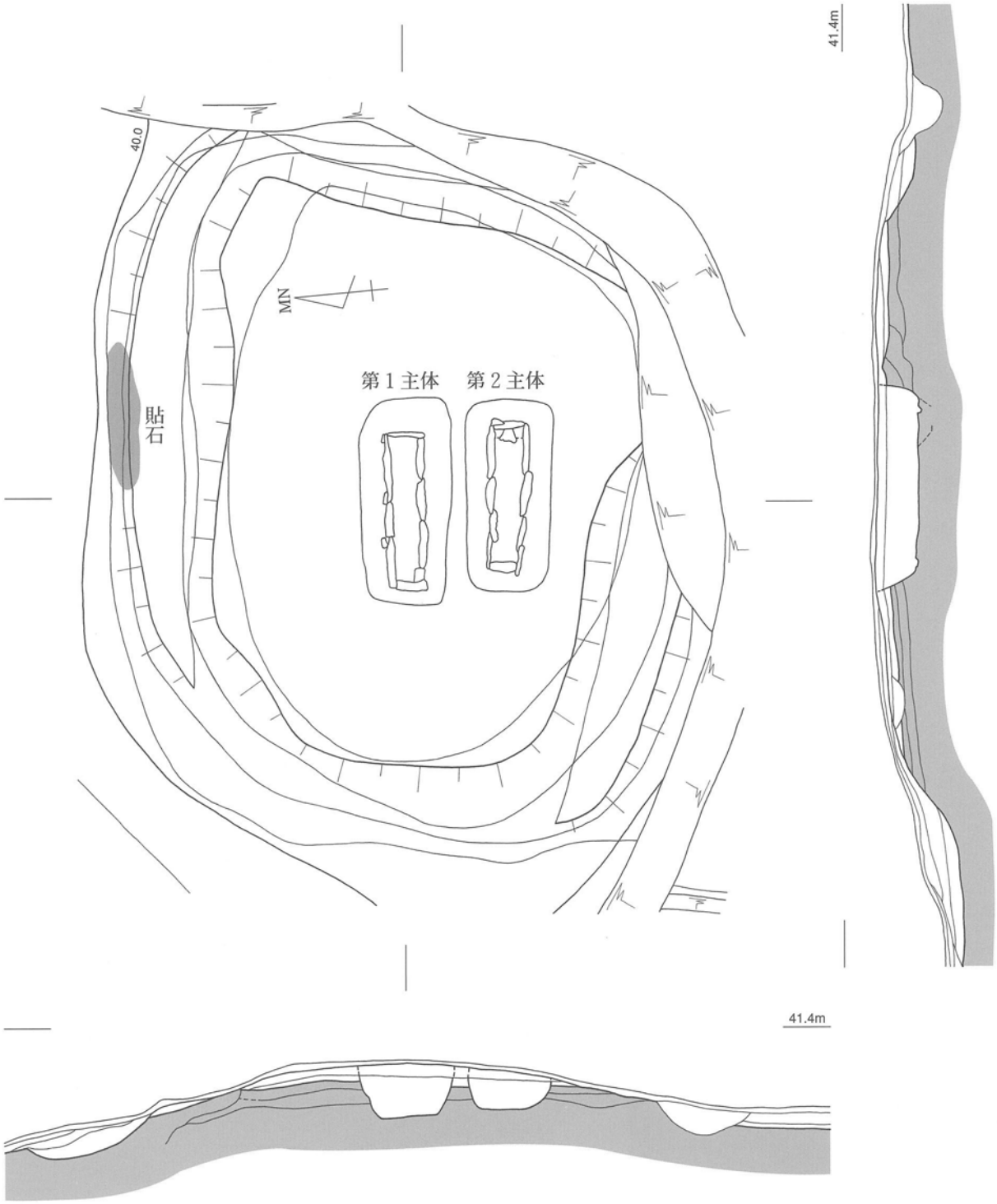


調査後

＝貼石部分

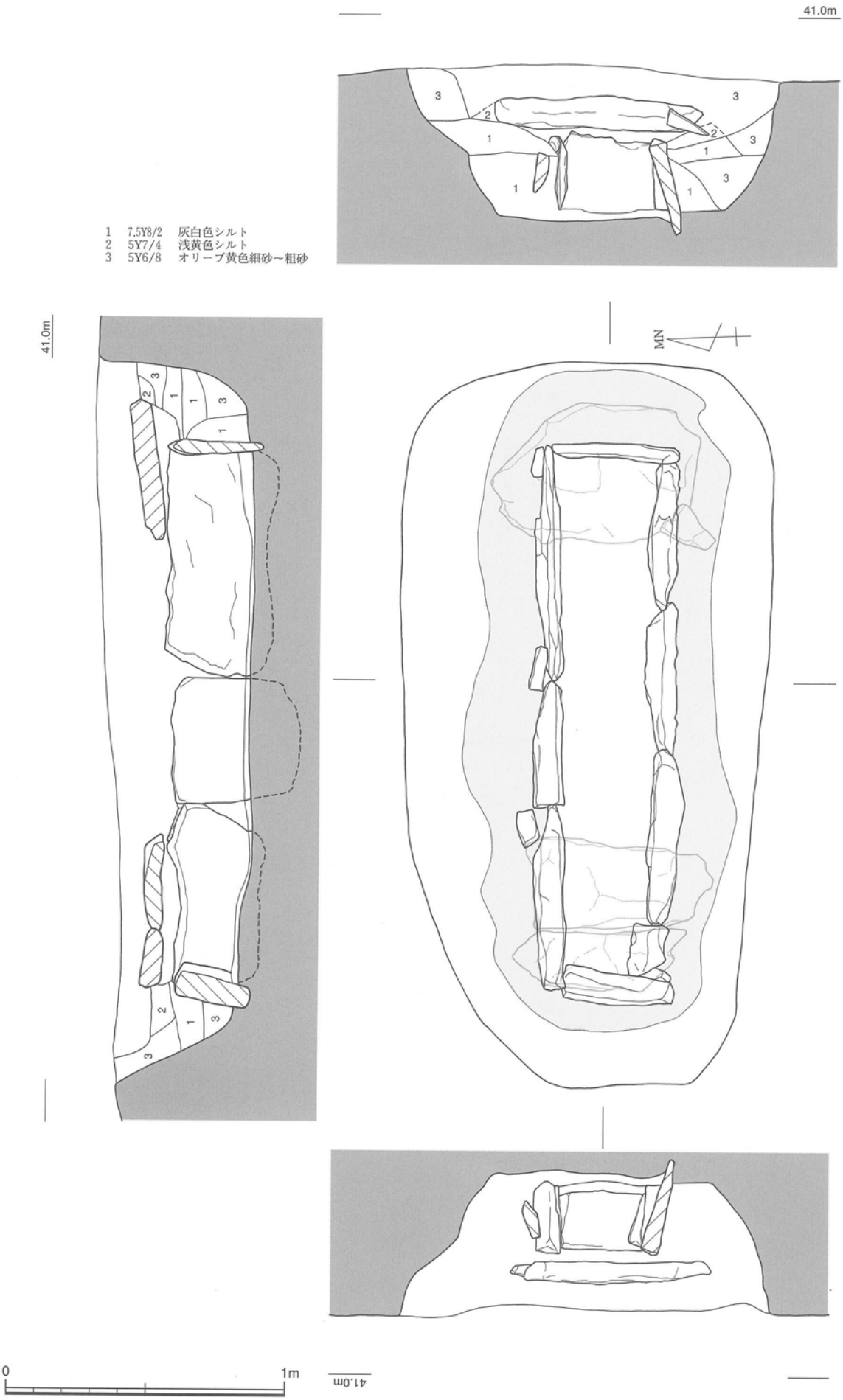
0　10m

調査区地形測量図

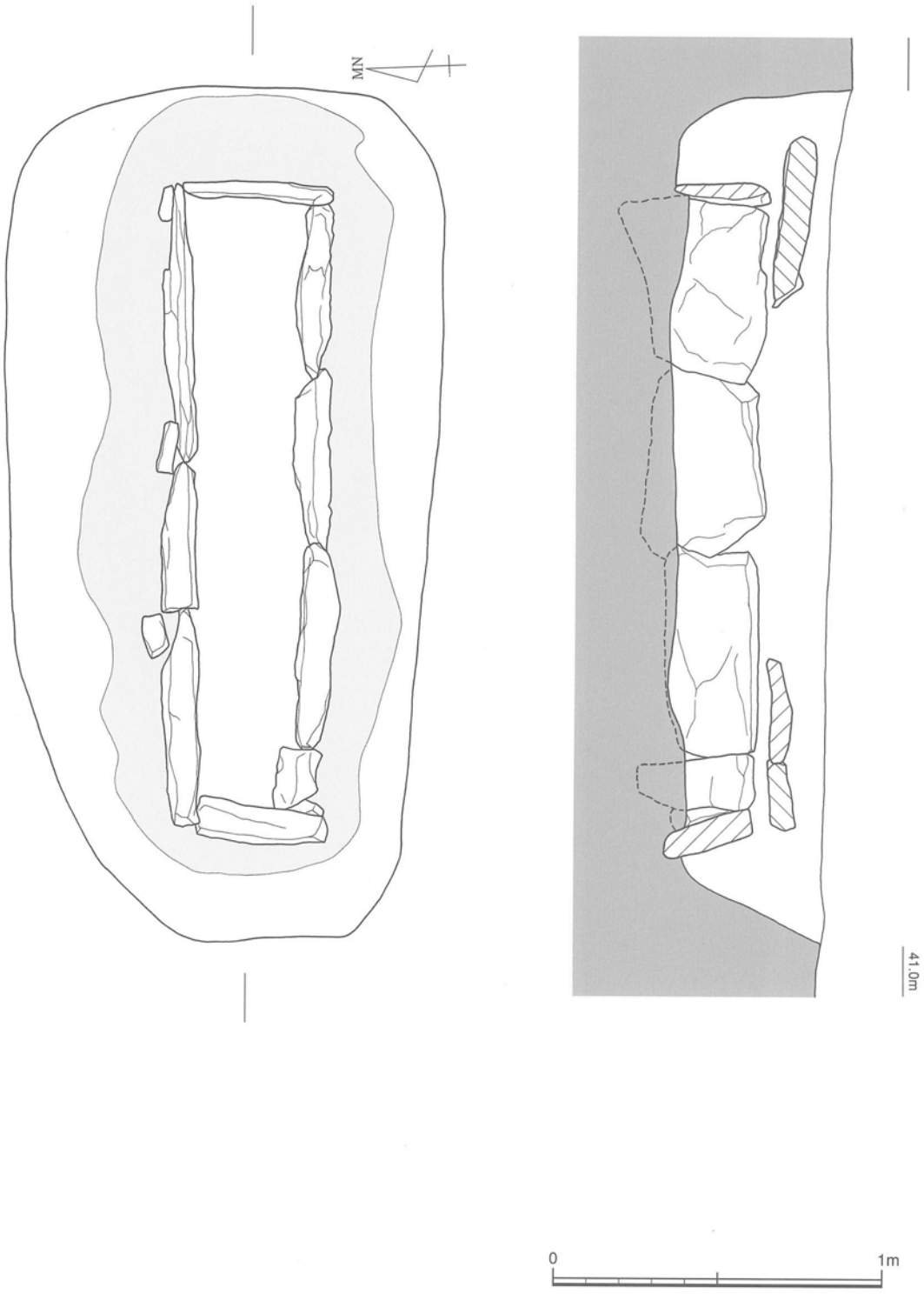


0　3m

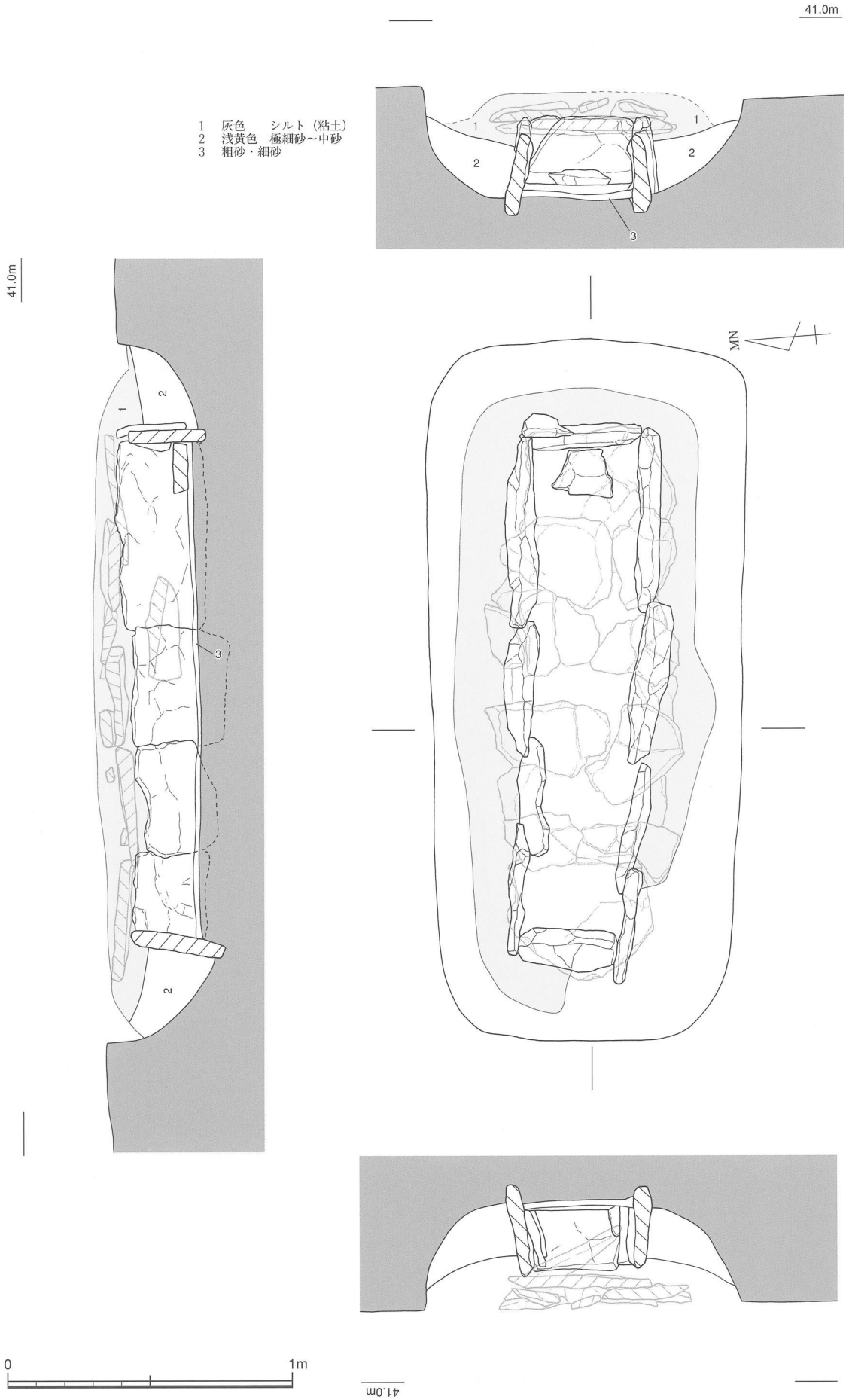
墳丘地形測量図



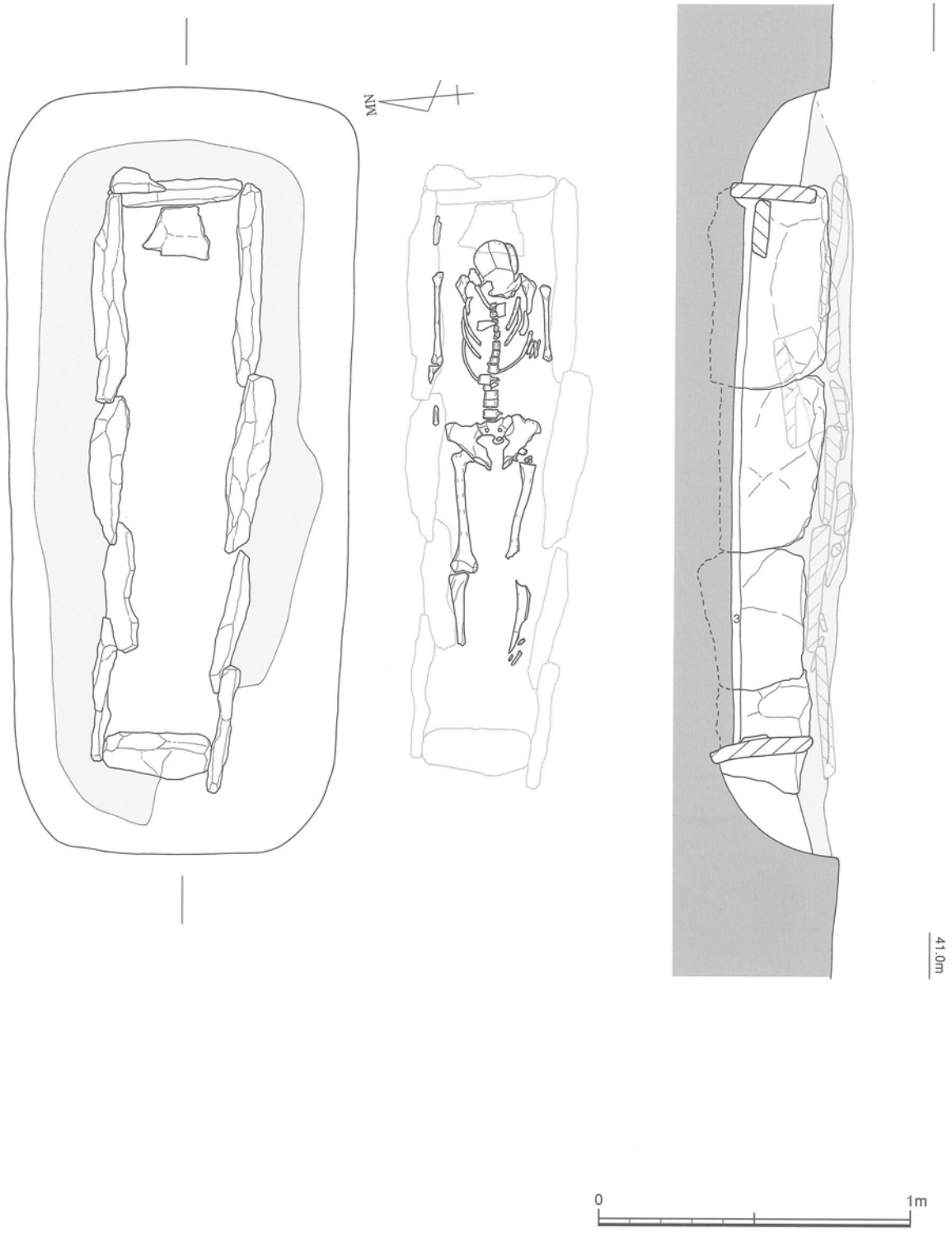
第１主体実測図(1)



第１主体実測図(2)

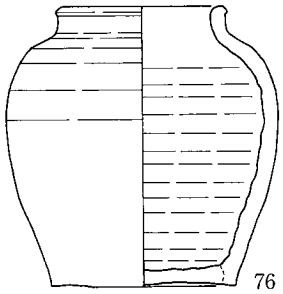


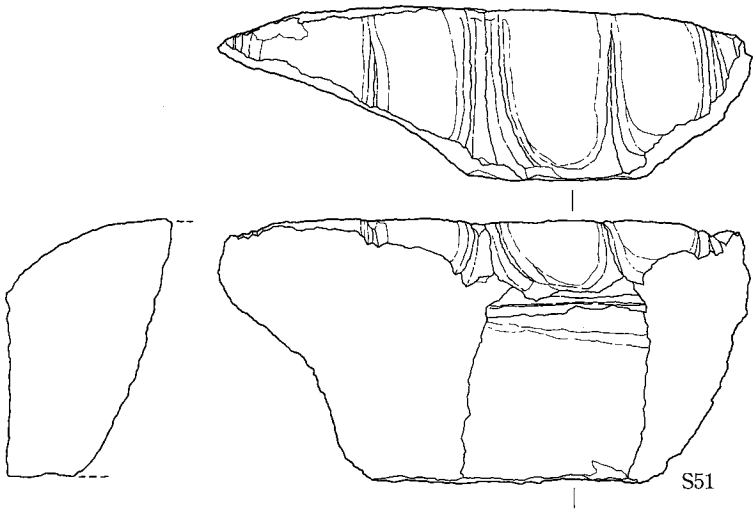
第２主体実測図(1)

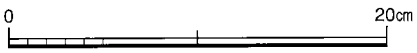


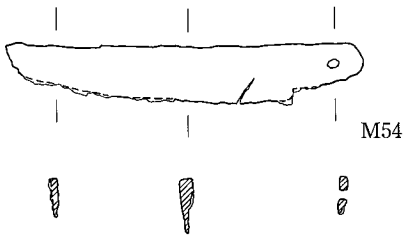
第２主体実測図(2)

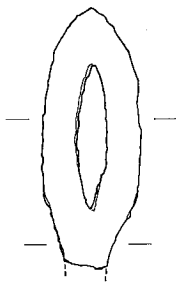
図版81　堀山３号墳

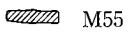


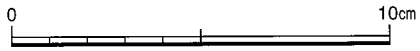




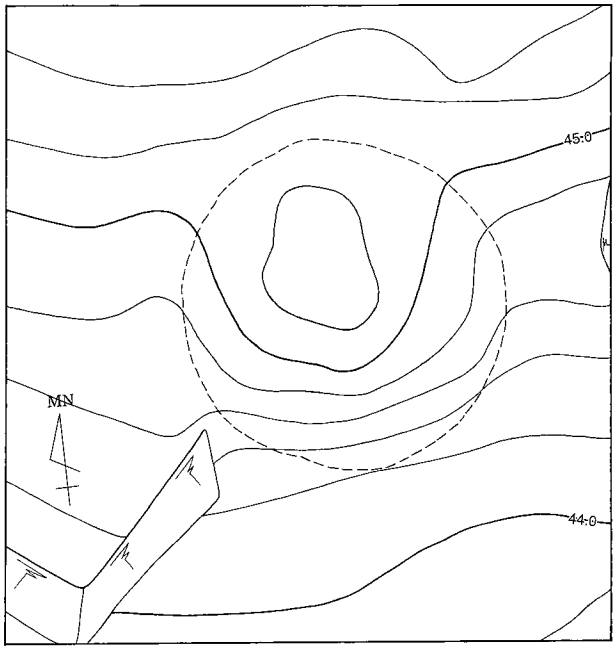




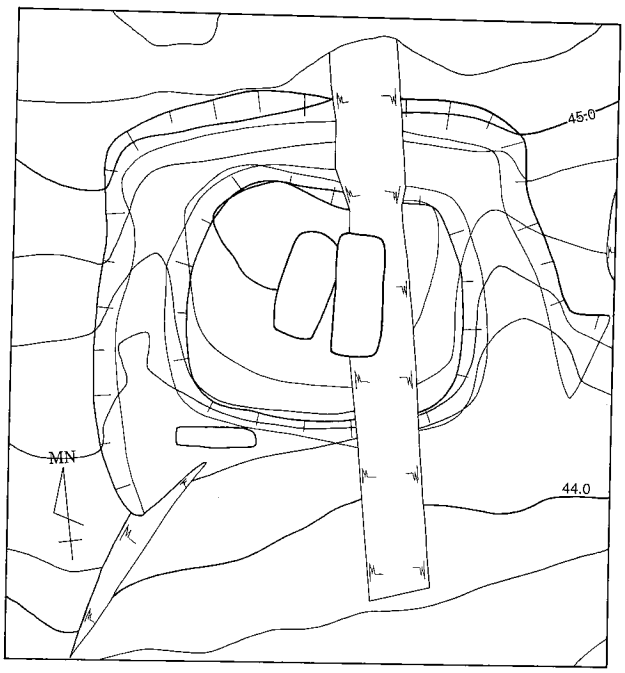




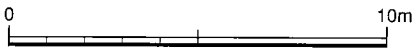
出土土器・石造品・鉄製品



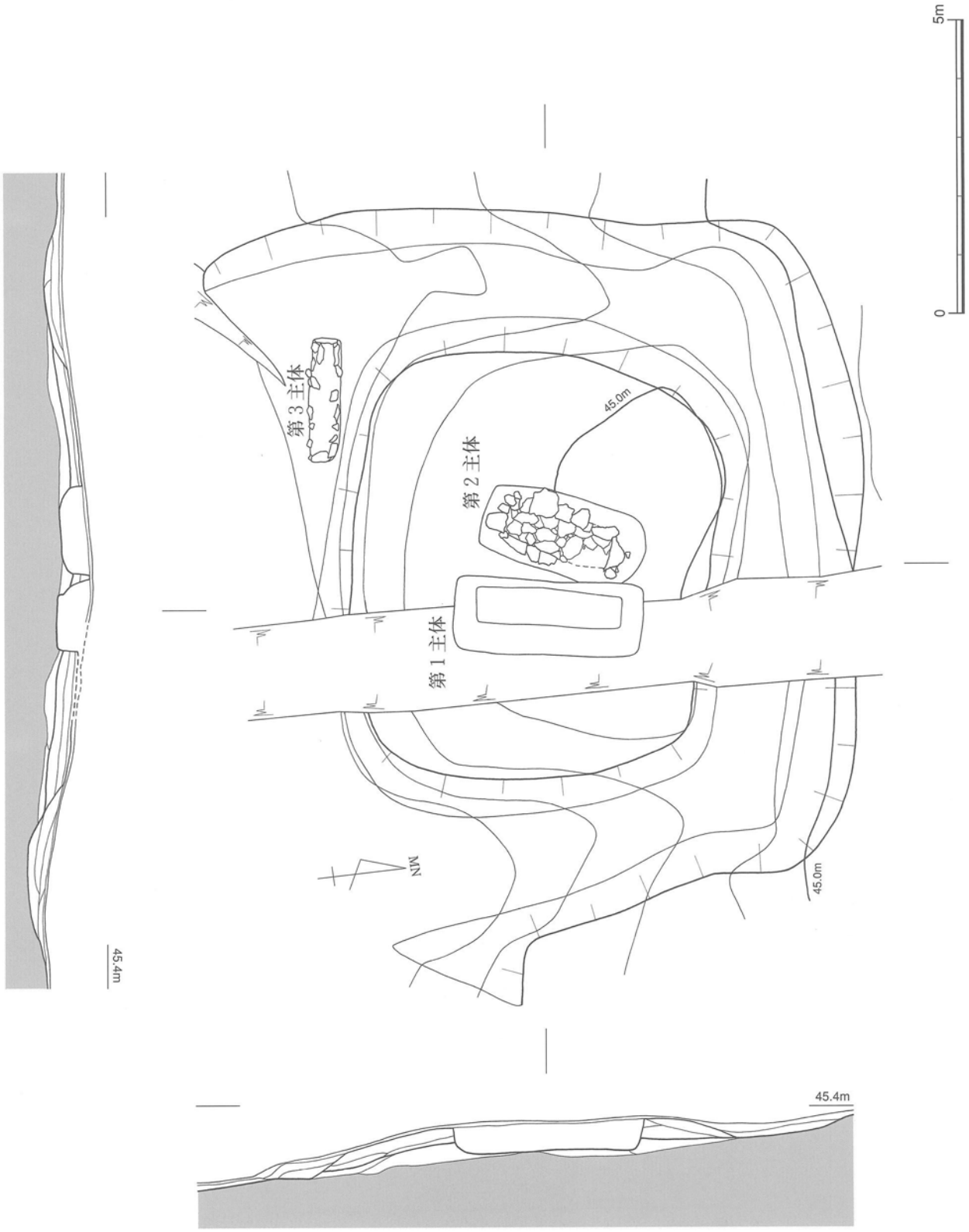
調査前



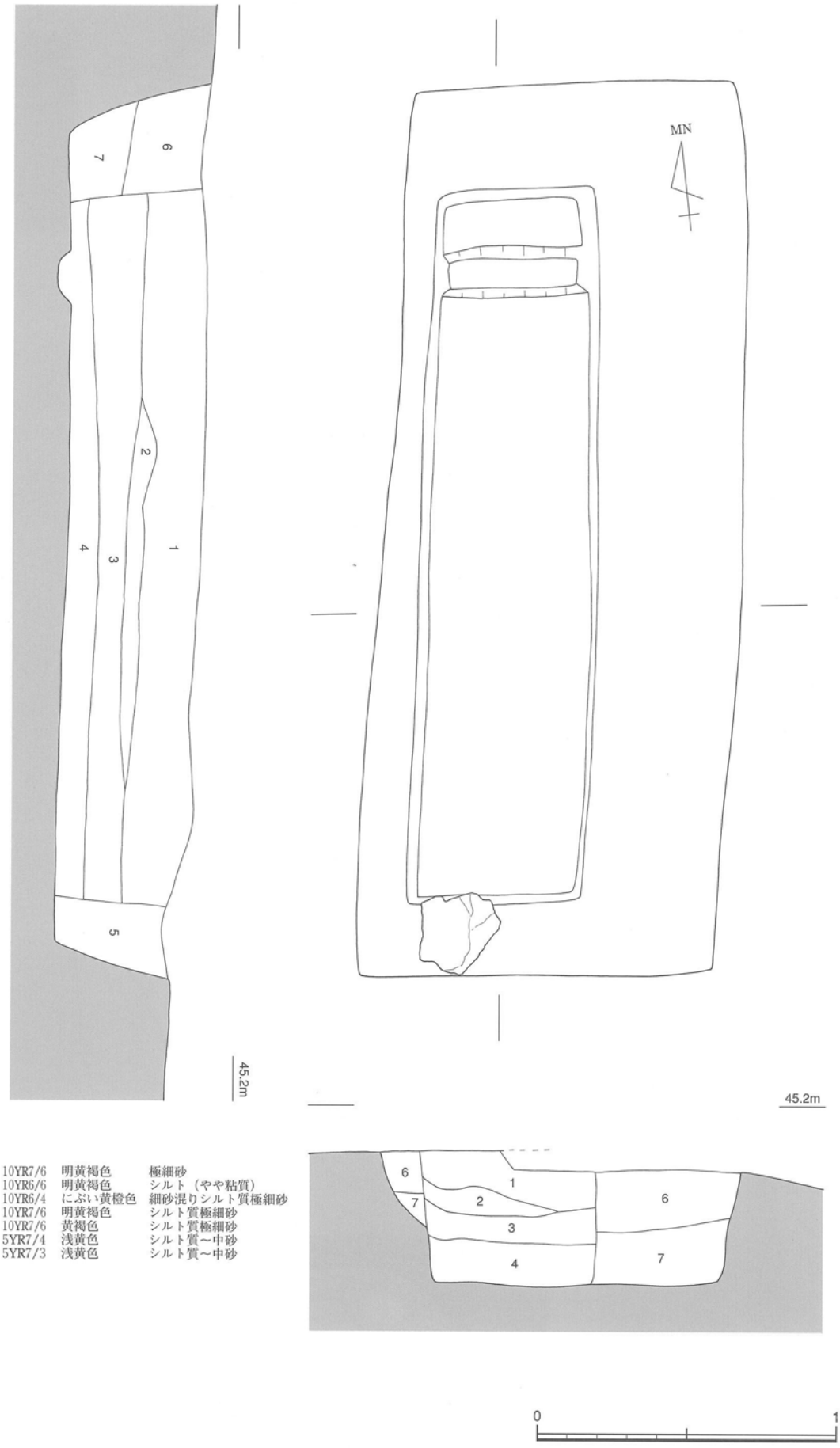
調査後



調査区地形測量図

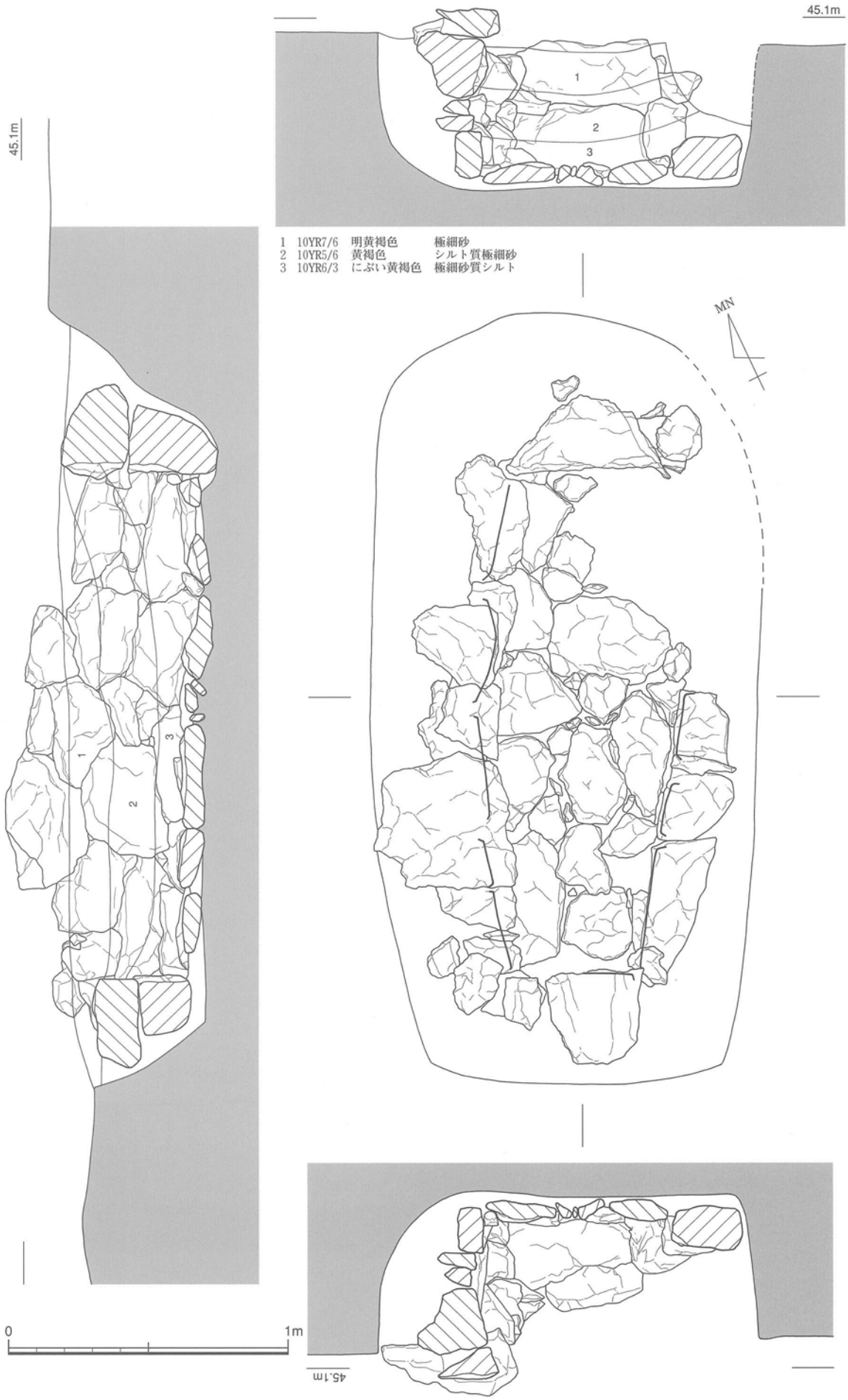


墳丘地形測量図

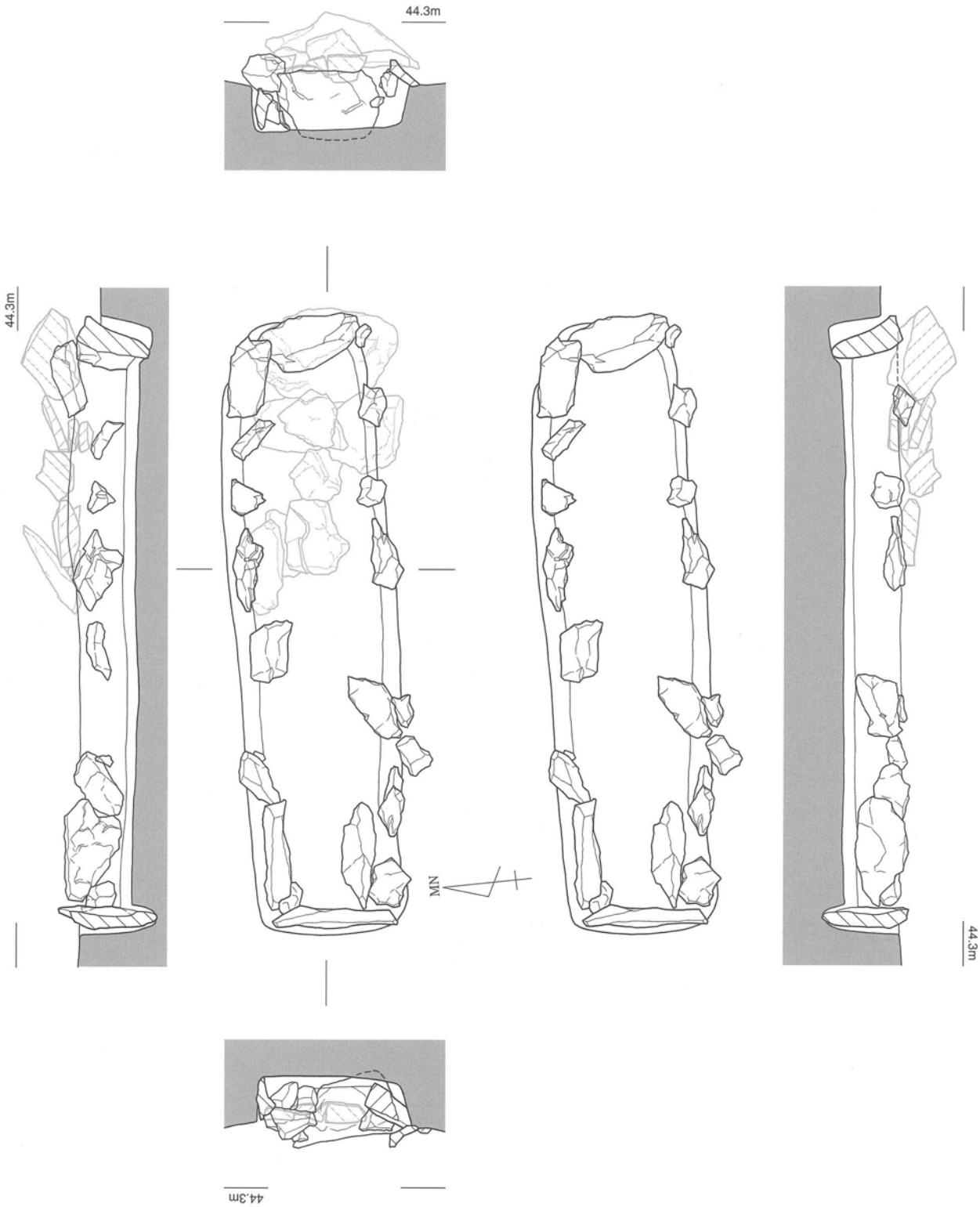


1	10YR7/6	明黄褐色	極細砂
2	10YR6/6	明黄褐色	シルト（やや粘質）
3	10YR6/4	にぶい黄橙色	細砂混りシルト質極細砂
4	10YR7/6	明黄褐色	シルト質極細砂
5	10YR7/6	黄褐色	シルト質極細砂
6	5YR7/4	浅黄色	シルト質～中砂
7	5YR7/3	浅黄色	シルト質～中砂

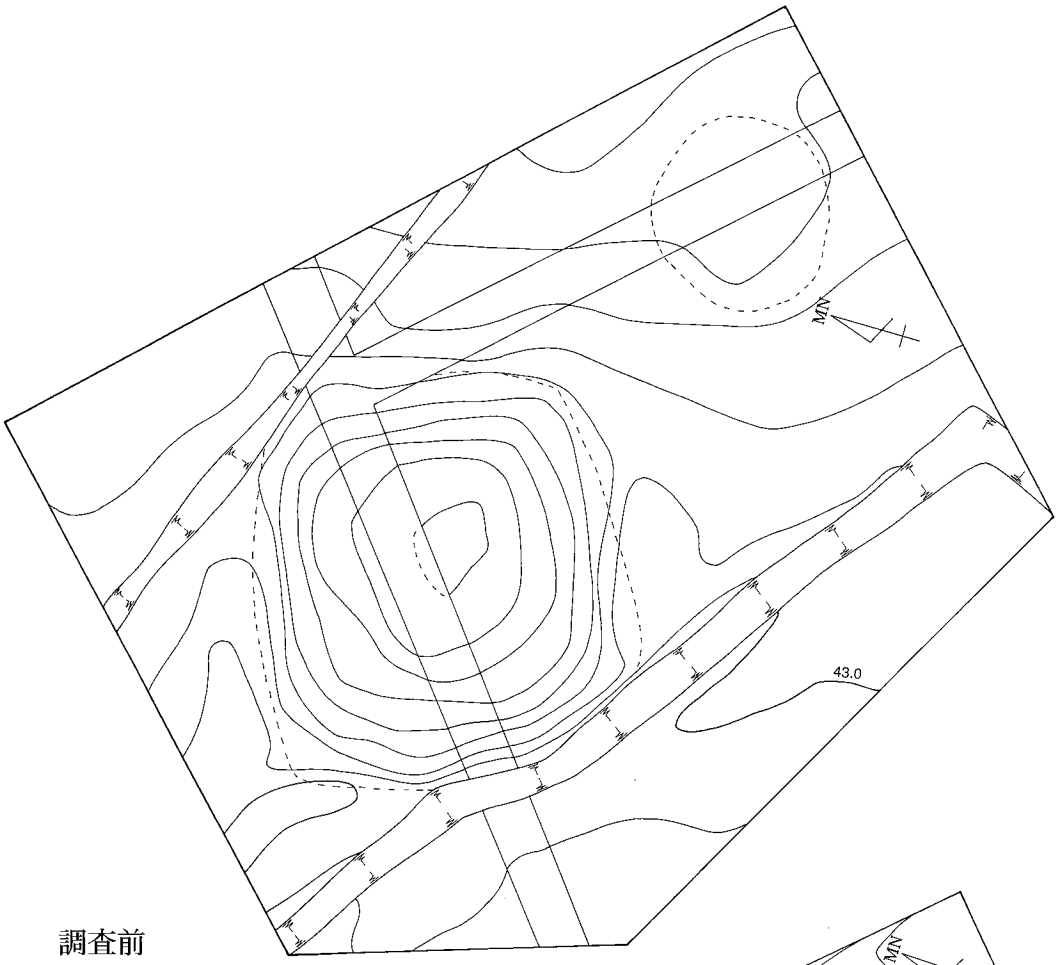
第１主体実測図


45.1m
1
2
3
1　10YR7/6　明黄褐色　極細砂
2　10YR5/6　黄褐色　シルト質極細砂
3　10YR6/3　にぶい黄褐色　極細砂質シルト
MN
0
1m

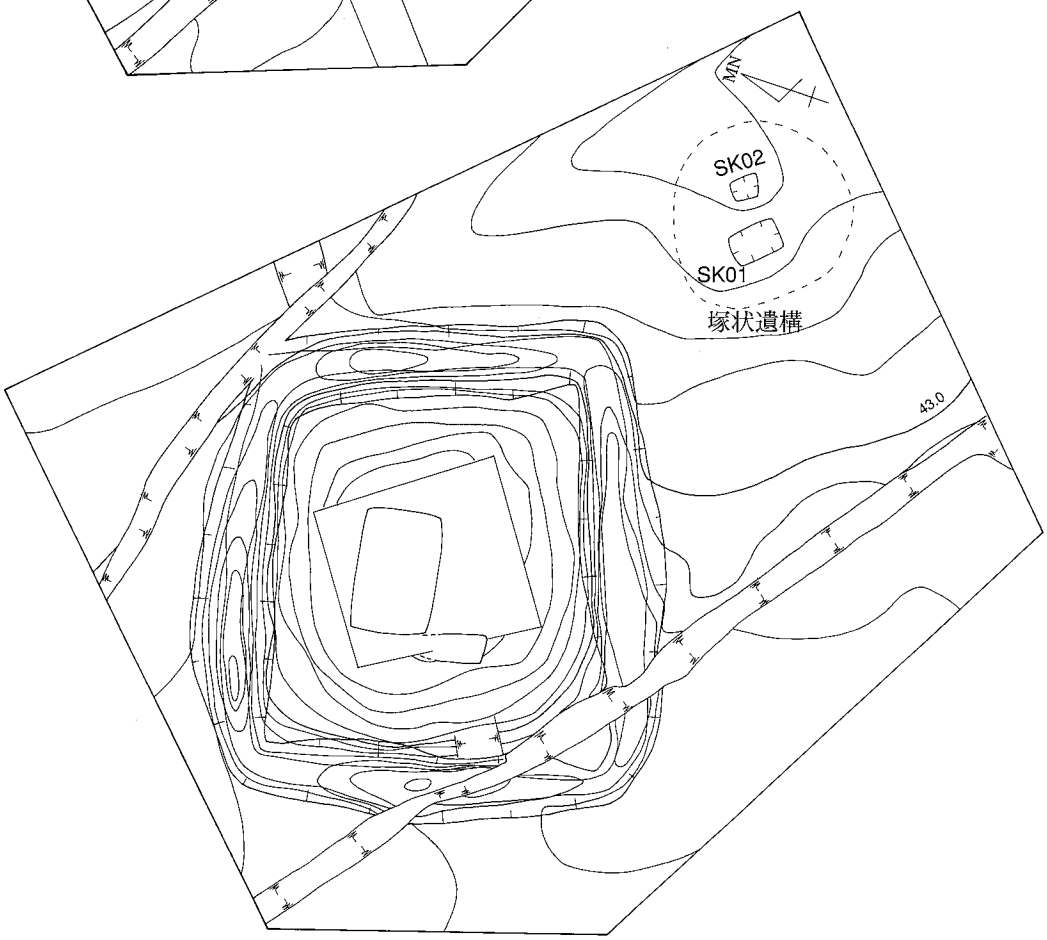
第２主体実測図



第３主体実測図



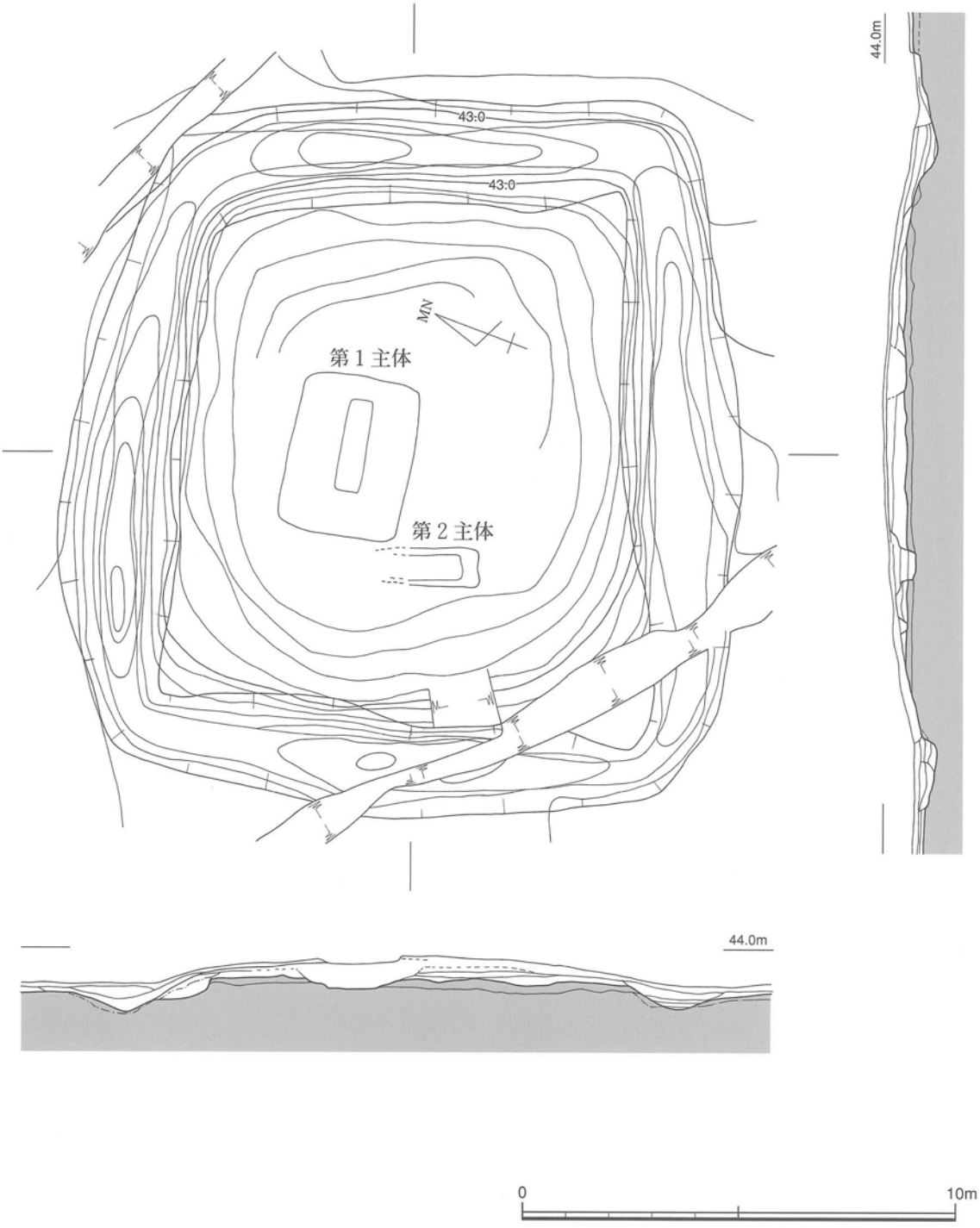
調査前



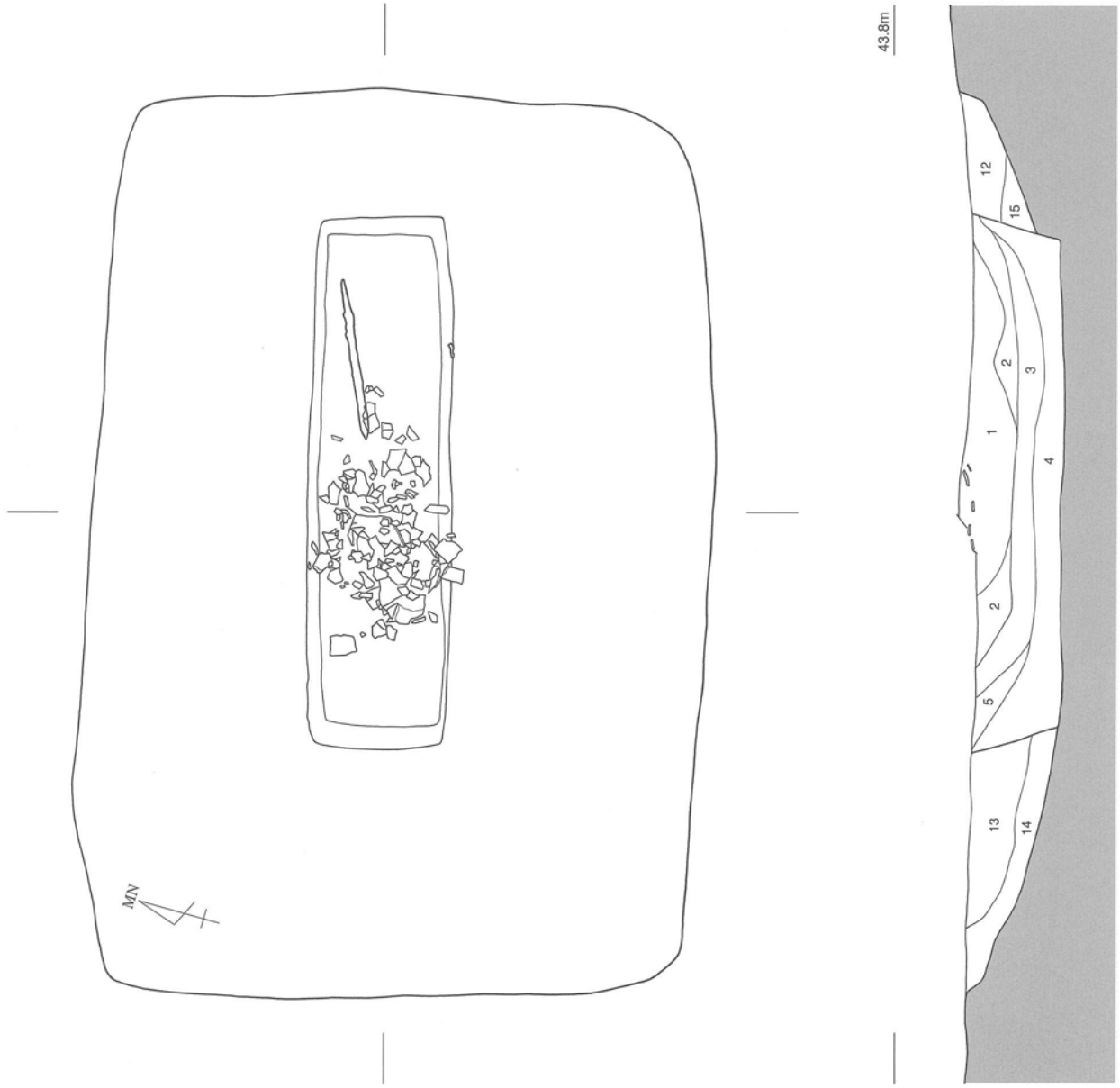
調査後

0　100m

調査区地形測量図



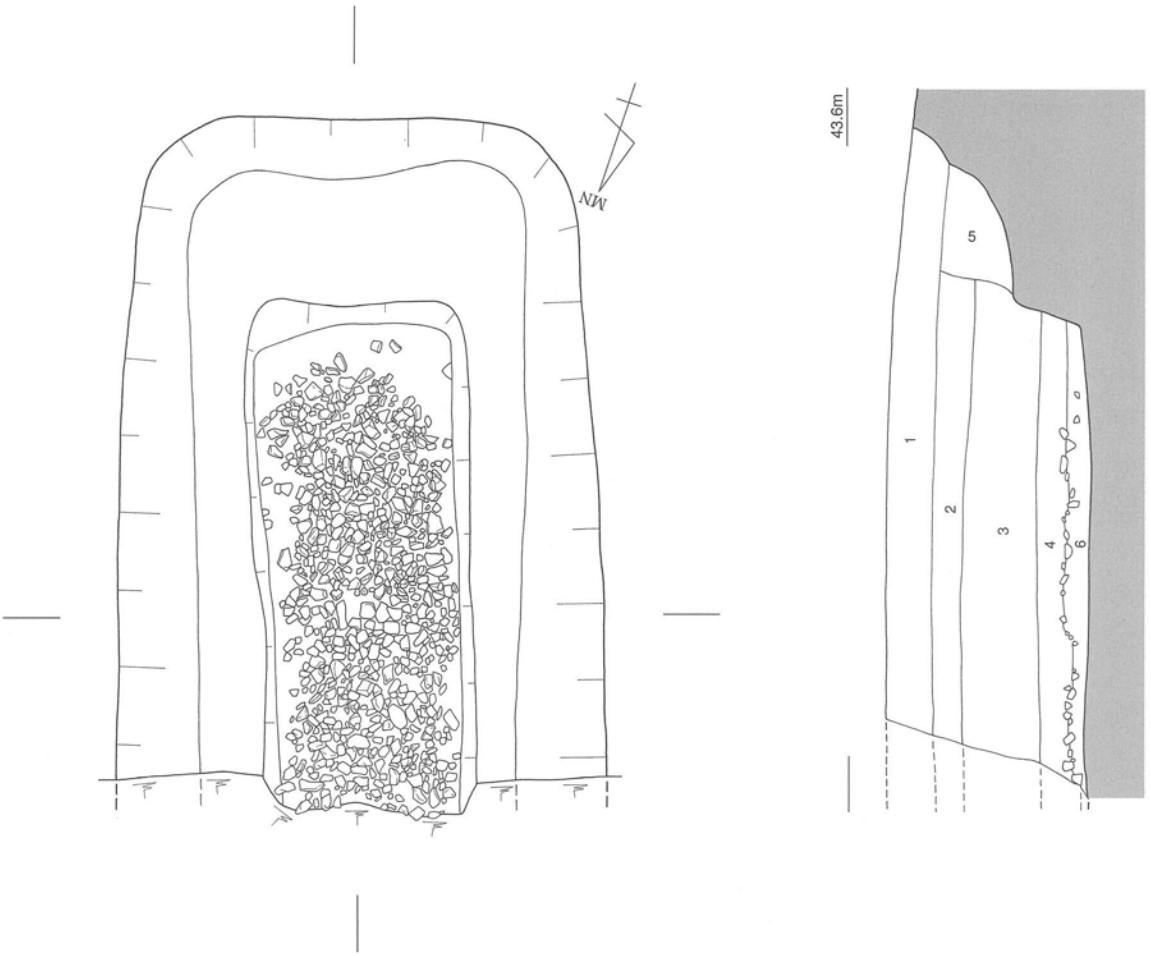
墳丘地形測量図

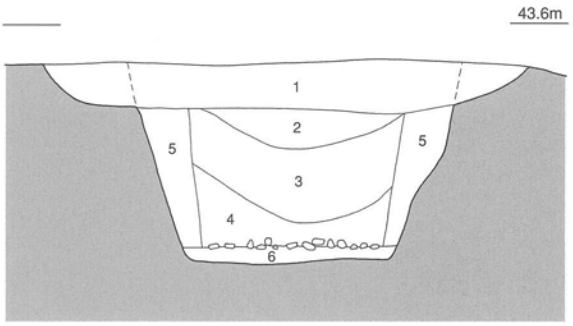


1	5YR6/4	にぶい橙色	シルト質極細砂
2	7.5YR5/6	明褐色	シルト質極細砂
3	7.5YR5/8	明褐色	シルト質極細砂（よくしまる）
4	5YR6/8	橙色	シルト質極細砂（よくしまる）
5	7.5YR6/8	橙色	シルト（しまりが弱い）
6	7.5YR5/6	明褐色	シルト質極細砂（やや粘質）
7	7.5YR5/8	明褐色	シルト質極細砂
8	7.5YR6/8	橙色	シルト（粘質）２に対応
9	7.5YR6/6		シルト質極細砂
10	7.5YR6/4	にぶい橙色	シルト質極細砂　４に対応
11	10YR6/6	明黄褐色	シルト質極細砂（やや粘質）
12	10YR6/6	明黄褐色	シルト
13	7.5YR6/8	橙色	シルト質極細砂
14	7.5YR6/6	橙色	シルト質極細砂（よくしまる）
15	7.5YR6/8	橙色	シルト

0　1m

第１主体実測図

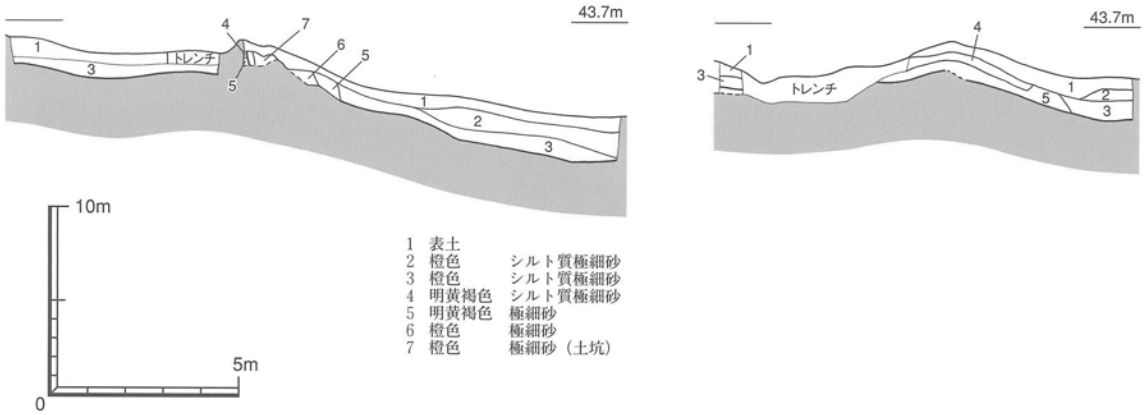




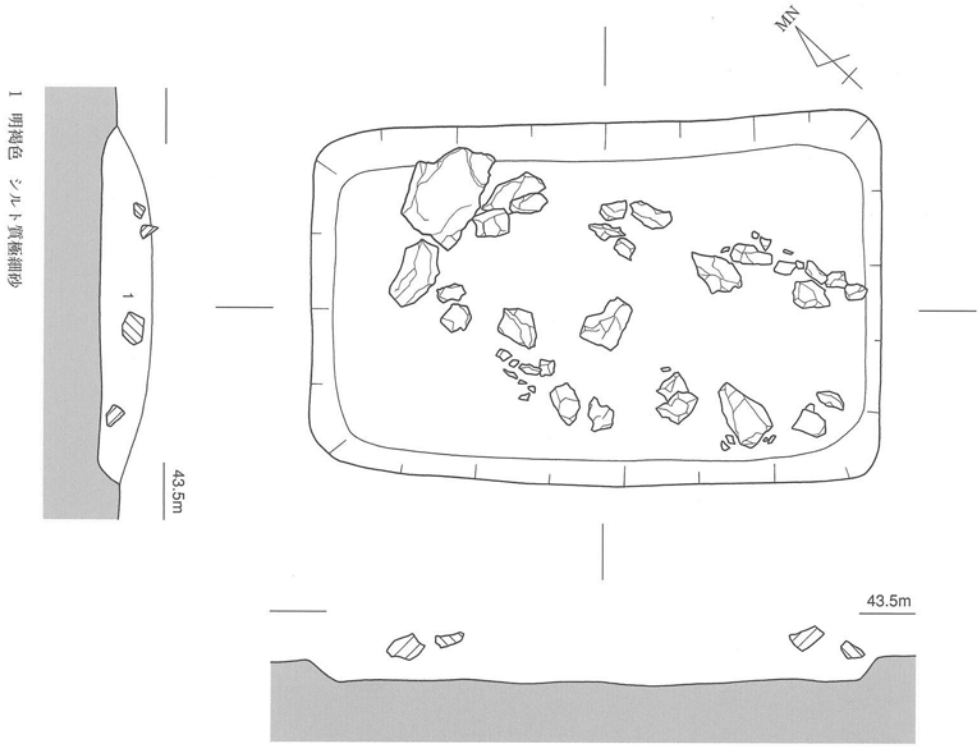
1	7.5YR6/6	橙色	シルト質極細砂
2	7.5YR7/4	にぶい橙色	細礫混シルト質極細砂
3	7.5YR5/6	明褐色	細礫混シルト質極細砂
4	7.5YR6/8	橙色	細礫混シルト質極細砂
5	5YR6/6	橙色	シルト質極細砂
6	7.5YR6/6	橙色	極細砂（やや粘質）

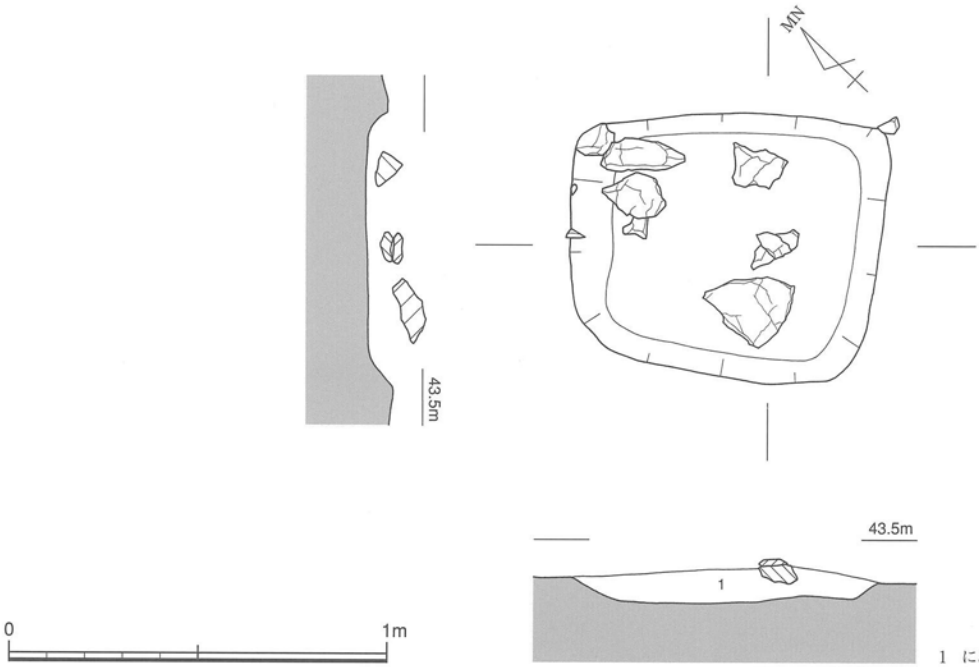
0　1m

第２主体実測図



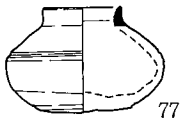
1　表土
2　橙色　　シルト質極細砂
3　橙色　　シルト質極細砂
4　明黄褐色　シルト質極細砂
5　明黄褐色　極細砂
6　橙色　　極細砂
7　橙色　　極細砂（土坑）

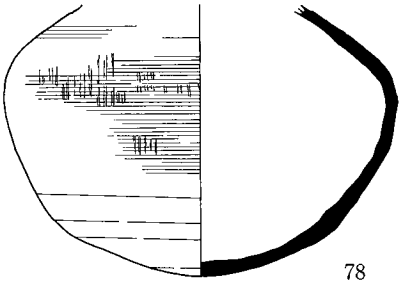




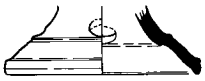
1　にぶい橙色　細砂

塚状遺構


77

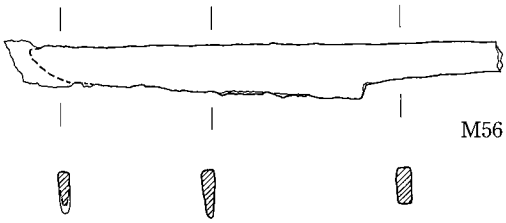

78

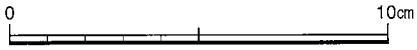
5号墳

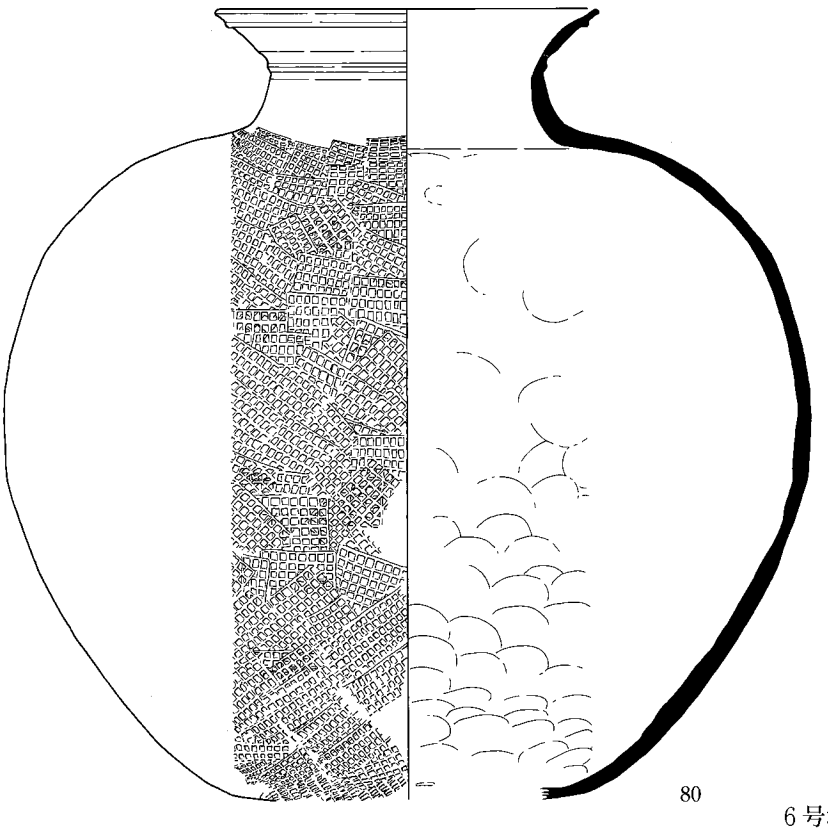

79

7号墳付近

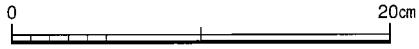
J99


M56

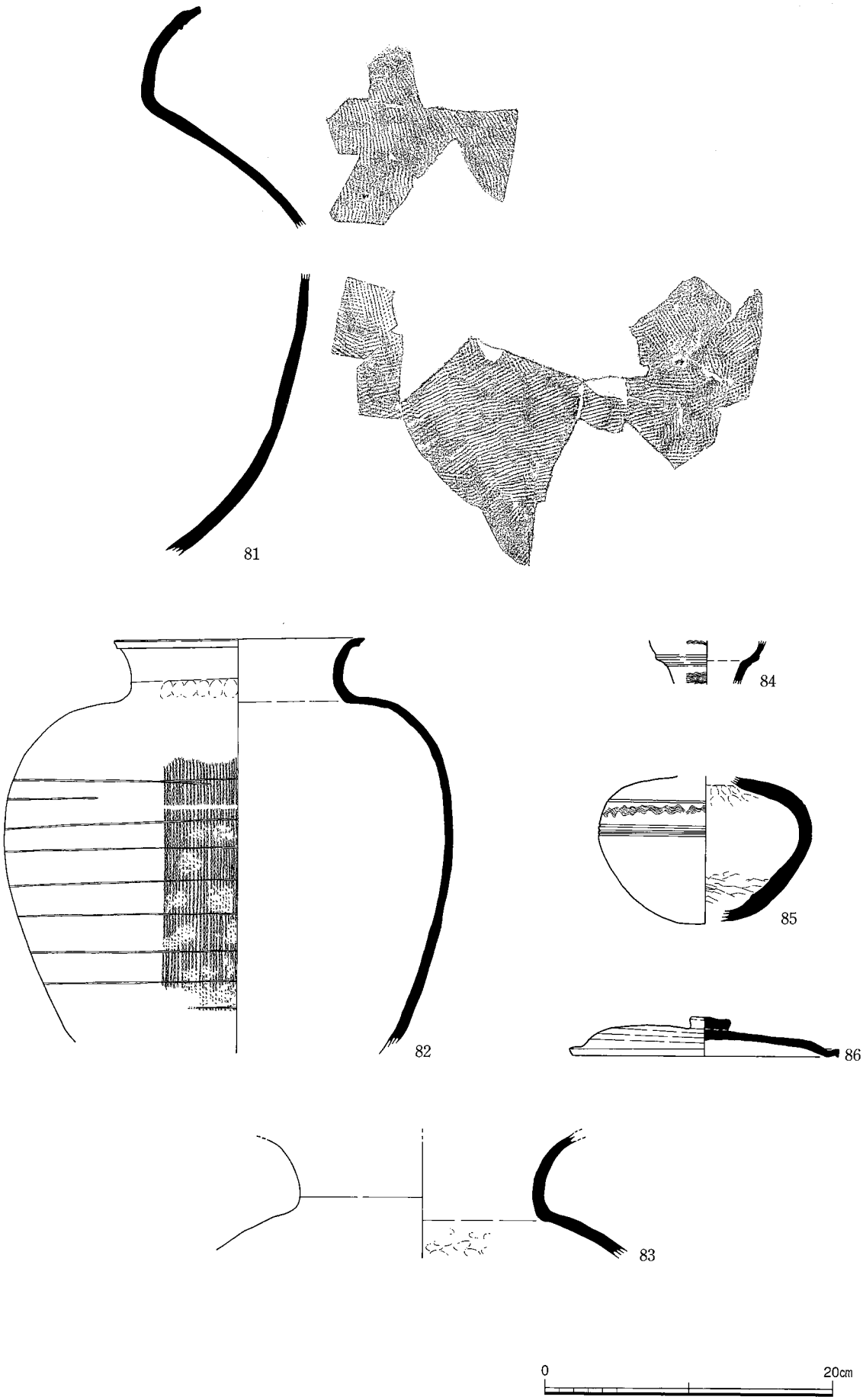



80

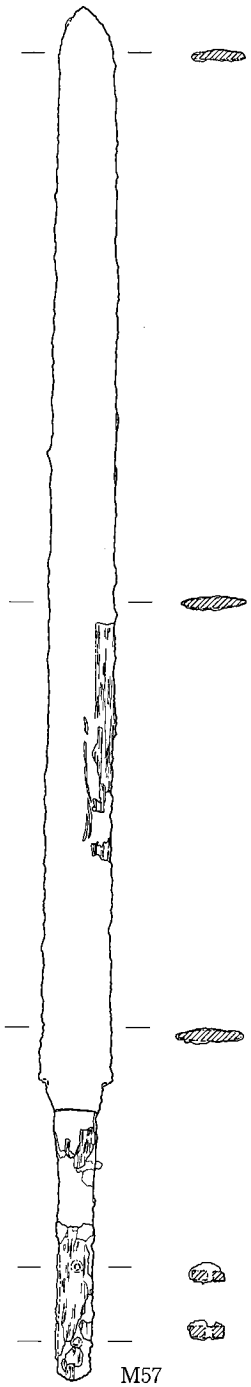
6号墳

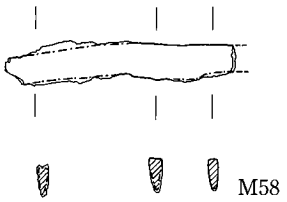


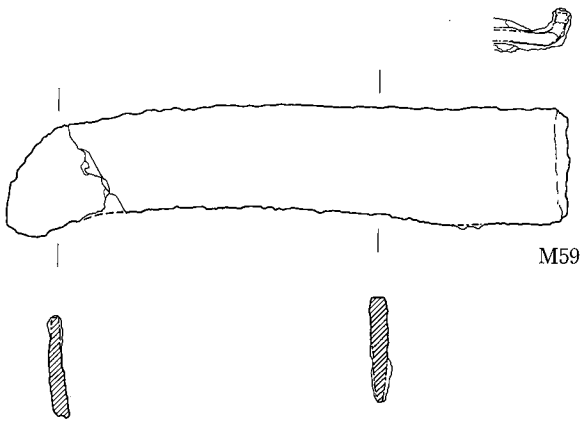
出土土器・金属器・玉

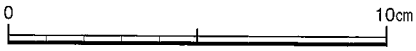


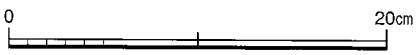
出土土器





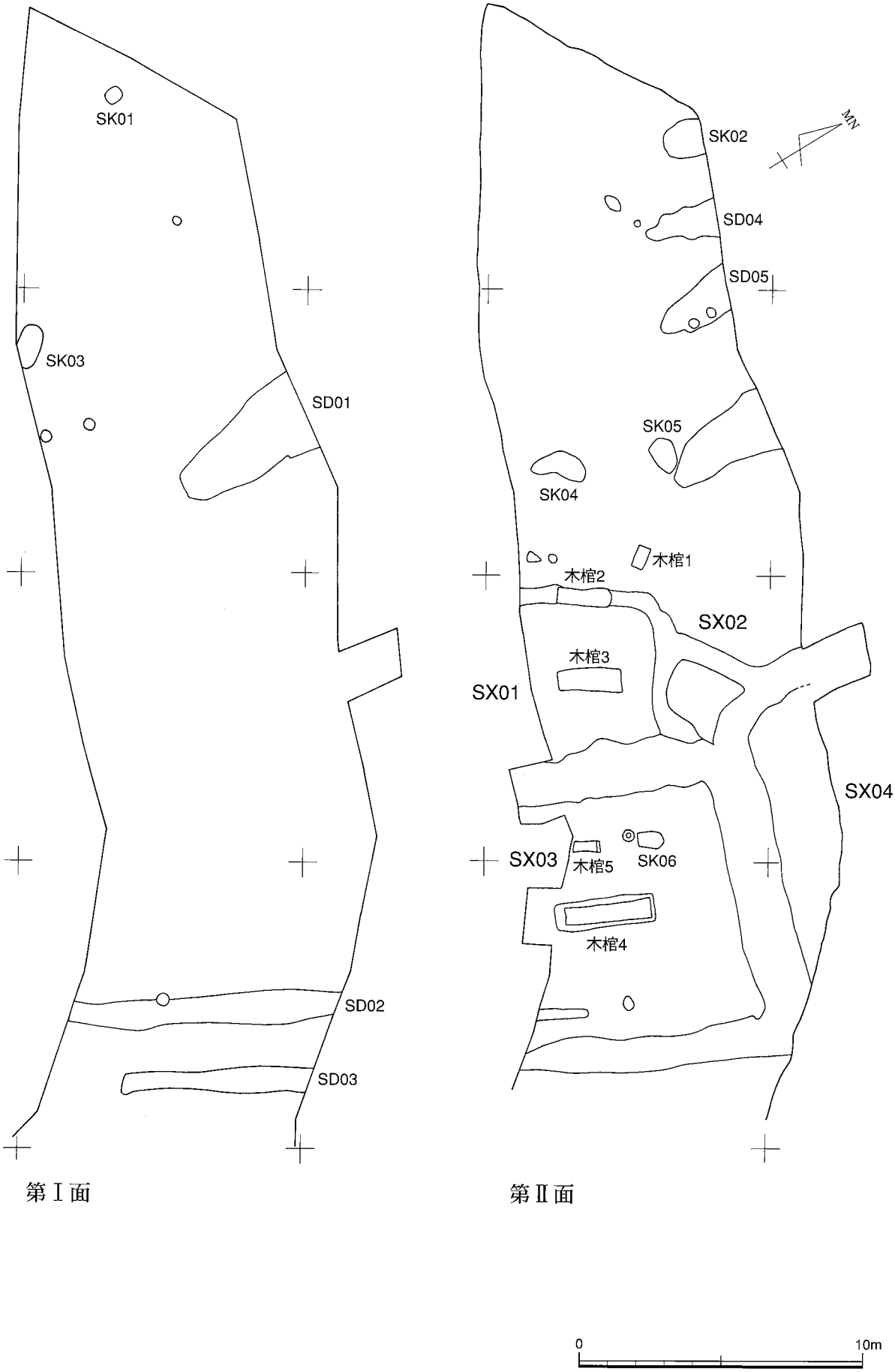




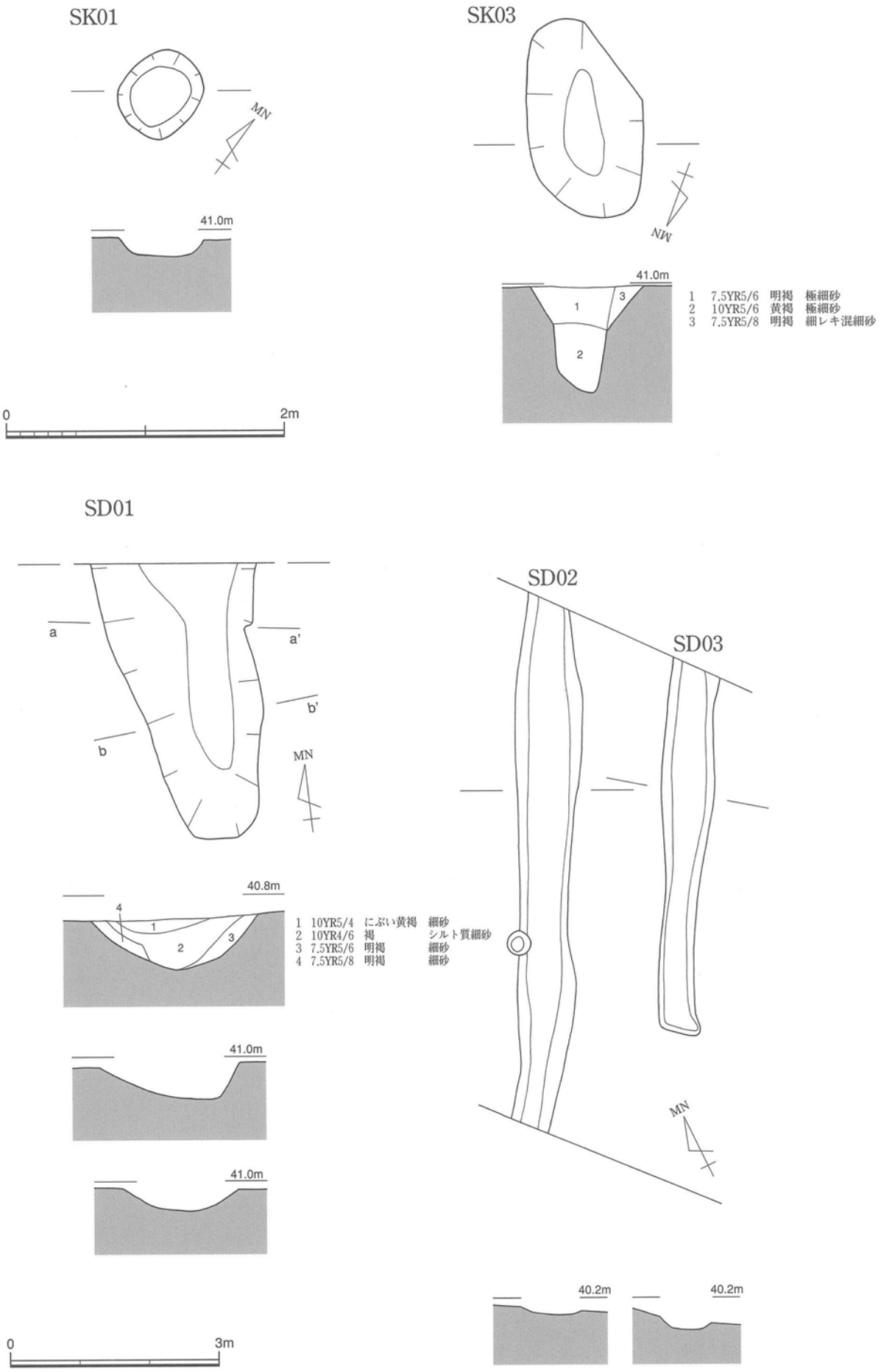


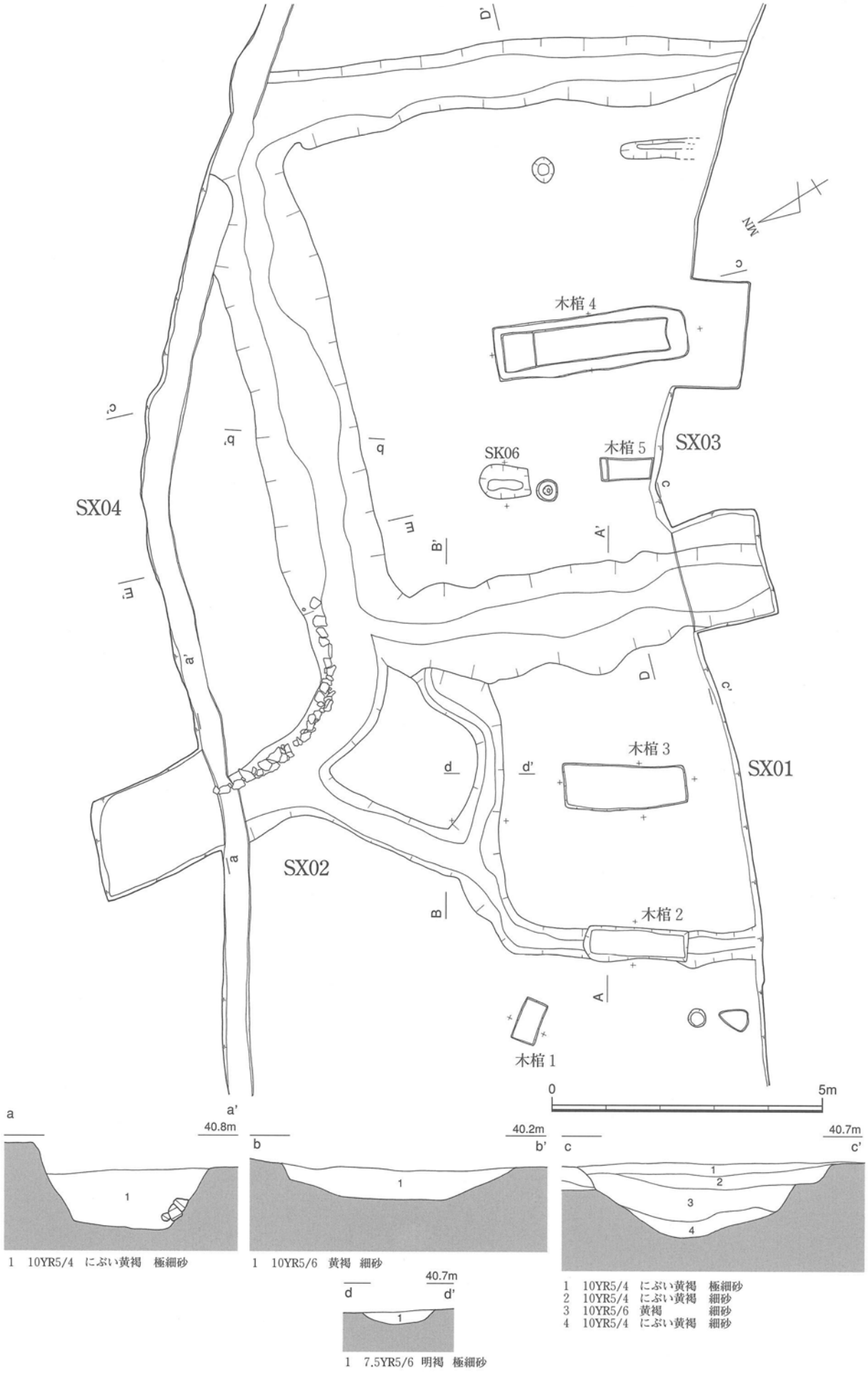
出土金属器

出土・採集石器

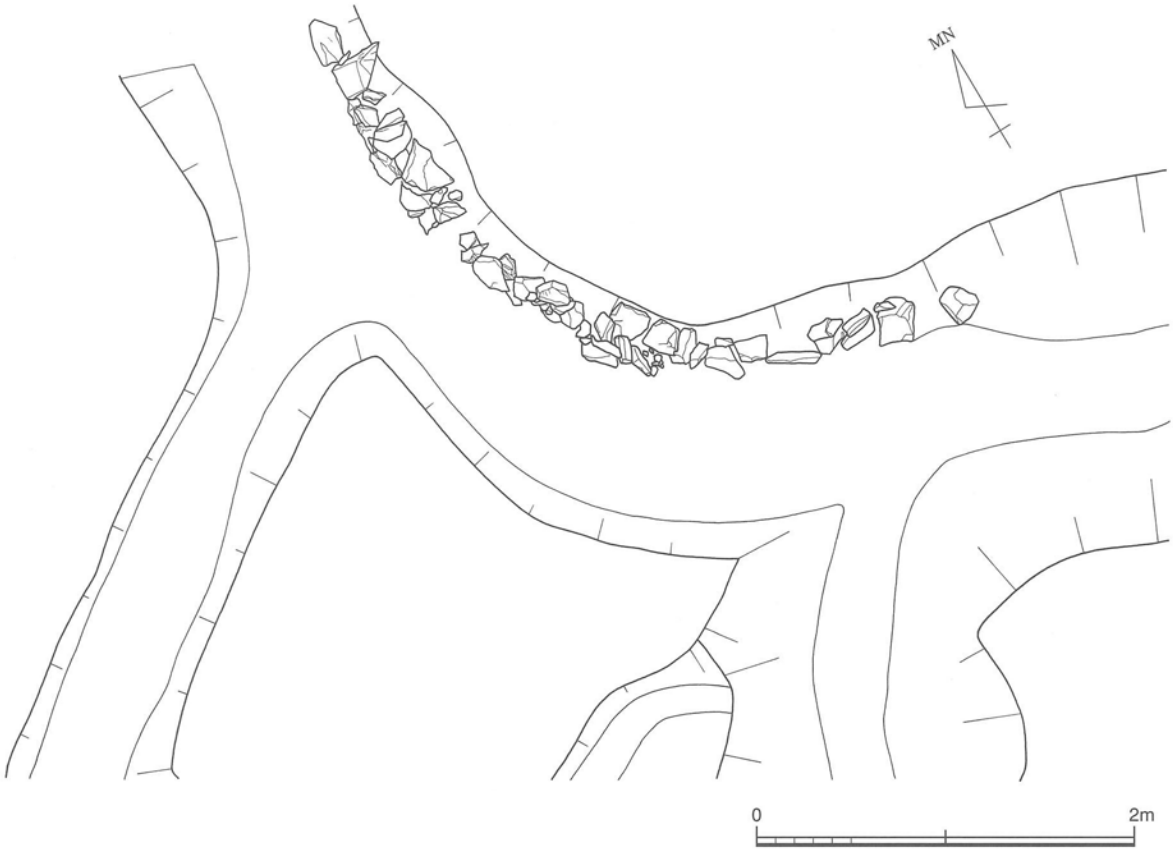

SK01
SK03
SD01
SD02
SD03
第Ⅰ面
SK02
MN
SD04
SD05
SK05
SK04
木棺1
木棺2
SX02
木棺3
SX01
SX04
SX03
木棺5
SK06
木棺4
第Ⅱ面
0
10m

調査区全体図

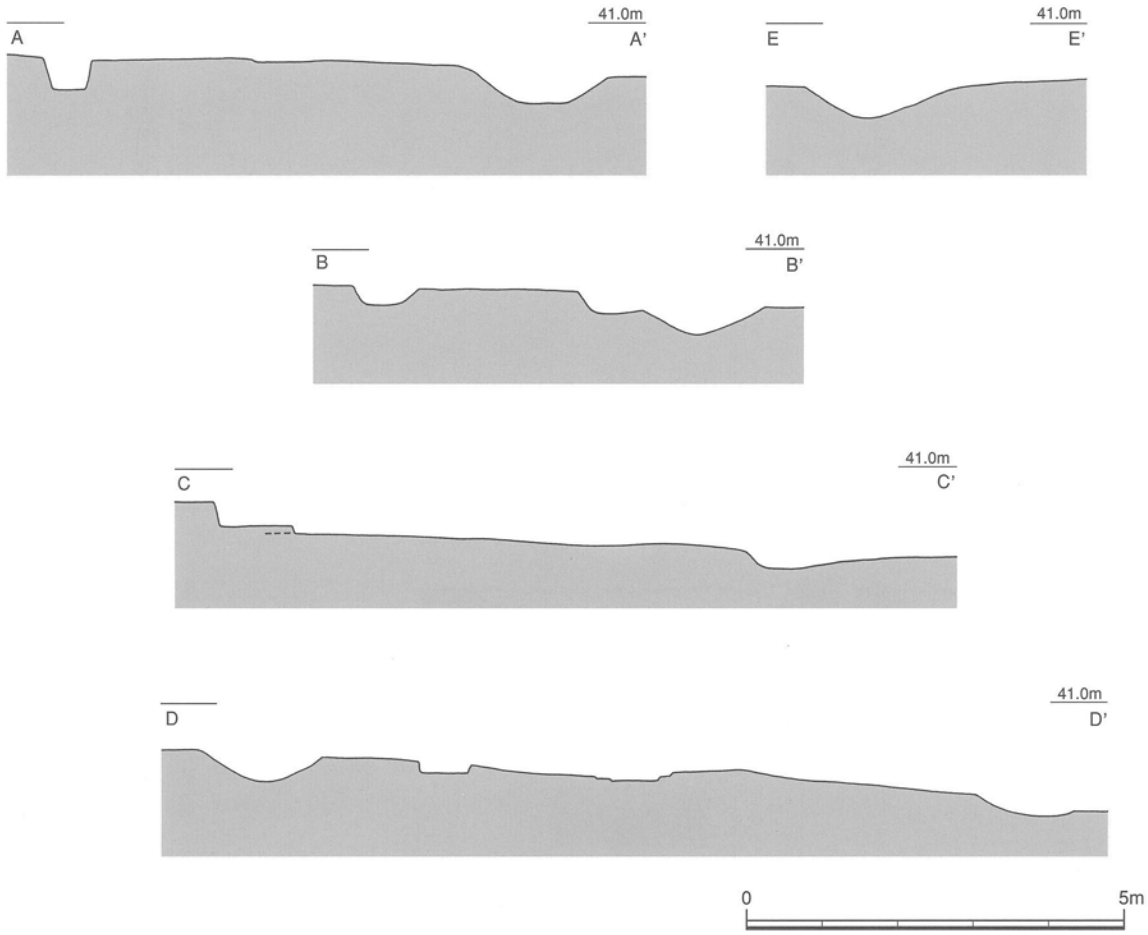

SK01
MN
41.0m
0
2m
SK03
NW
41.0m
1
2
3
1　7.5YR5/6　明褐　極細砂
2　10YR5/6　黄褐　極細砂
3　7.5YR5/8　明褐　細レキ混細砂
SD01
a
a'
b
b'
MN
40.8m
4
1
2
3
1　10YR5/4　にぶい黄褐　細砂
2　10YR4/6　褐　シルト質細砂
3　7.5YR5/6　明褐　細砂
4　7.5YR5/8　明褐　細砂
41.0m
41.0m
0
3m
SD02
SD03
MN
40.2m
40.2m


SX01
SX02
SX03
SX04
SK06
木棺1
木棺2
木棺3
木棺4
木棺5
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
E
E'
MN
0
5m
40.8m
40.2m
40.7m
1 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂
1 10YR5/6 黄褐 細砂
1 7.5YR5/6 明褐 極細砂
1 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂
2 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂
3 10YR5/6 黄褐 細砂
4 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂

第Ⅱ面　方形周構墓群

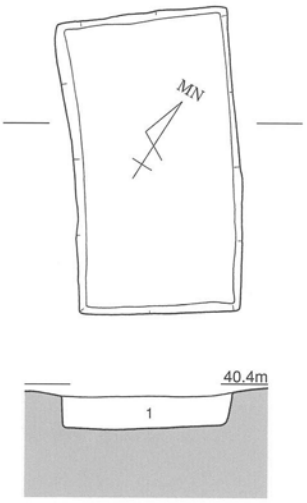


第Ⅱ面　SX04 南西角貼石



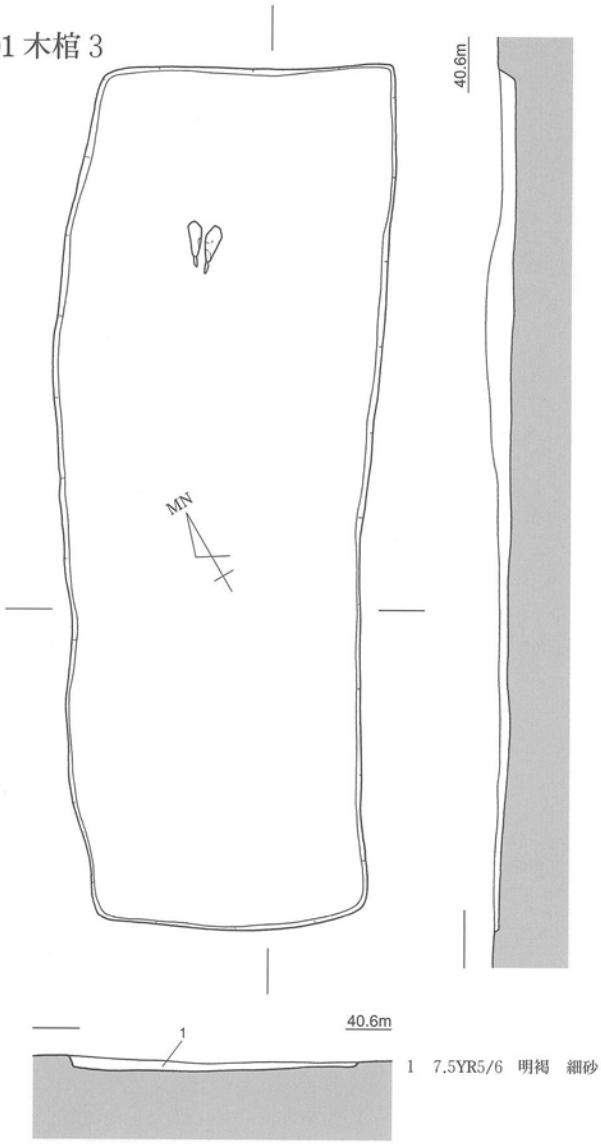
方形周構墓群断面図

木棺



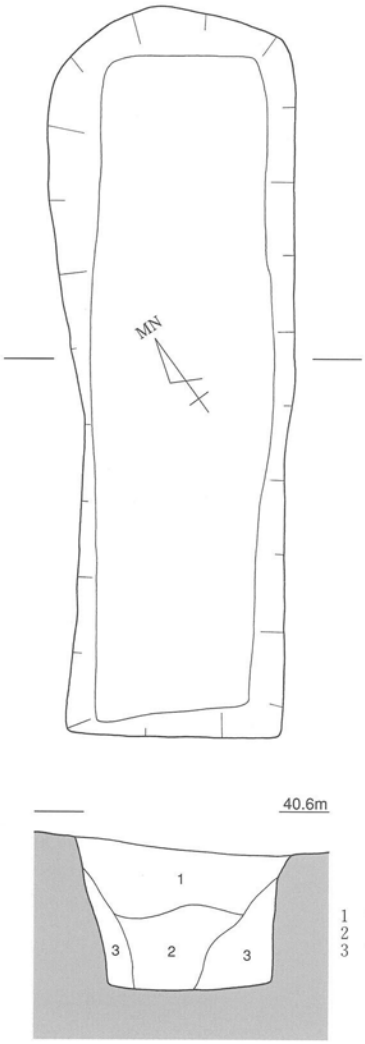
1　7.5YR5/6　明褐　極細砂

SK01 木棺 3



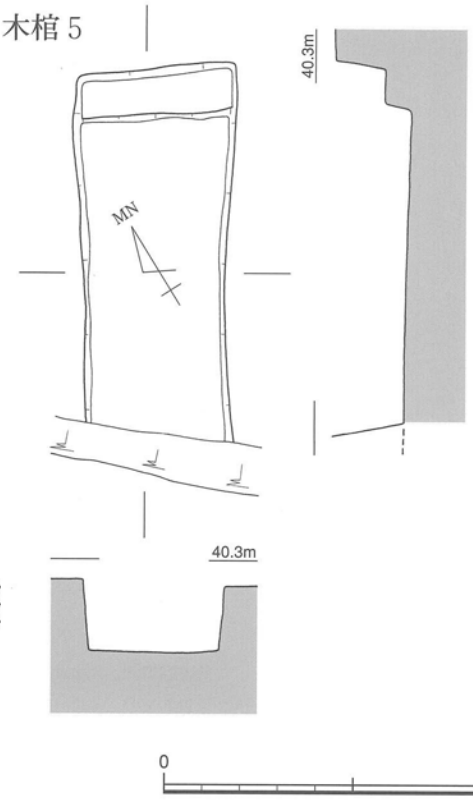
1　7.5YR5/6　明褐　細砂

SX01 木棺 2

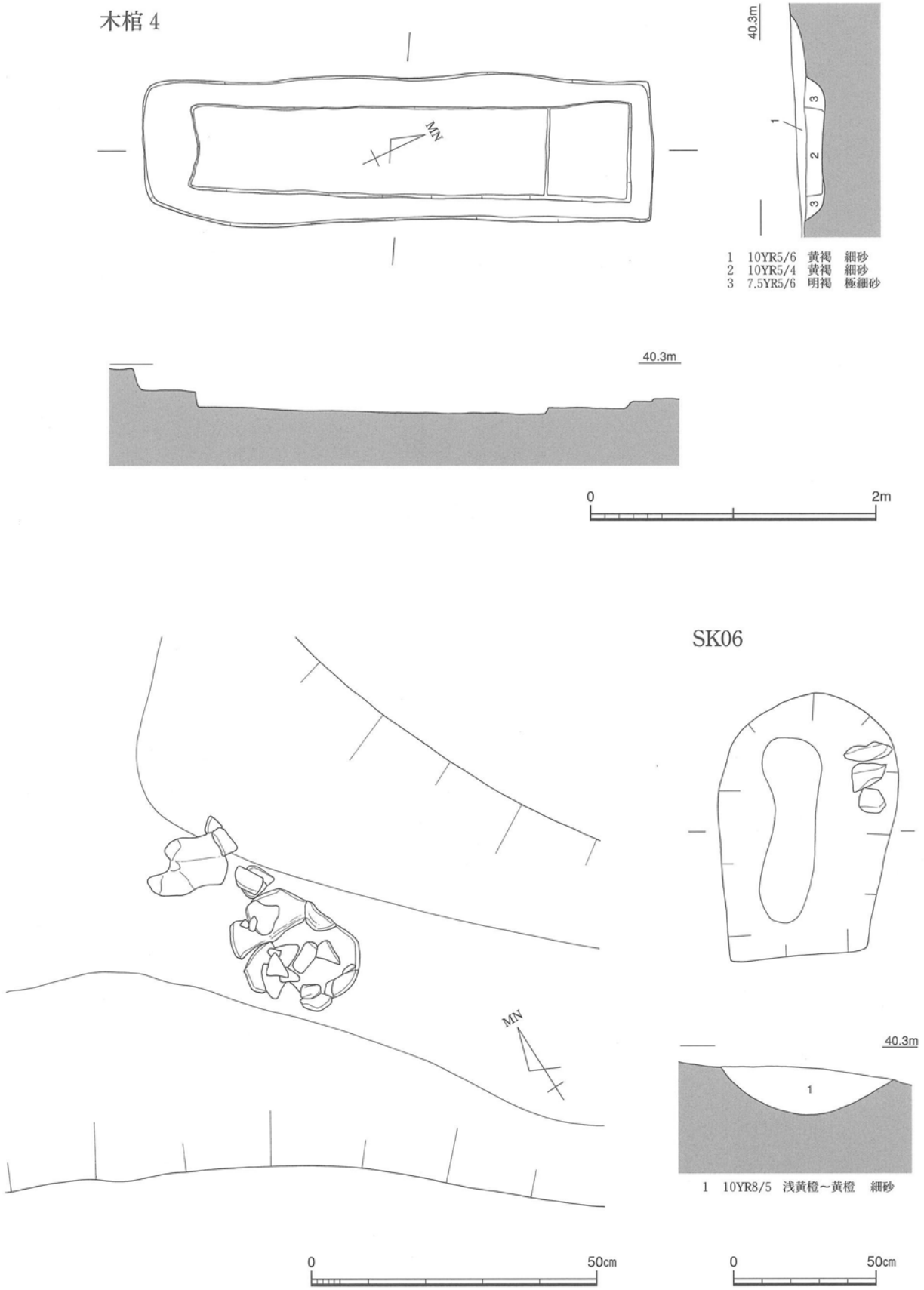


1　7.5YR5/6　明褐　極細砂
2　10YR6/6　明黄褐　極細砂
3　7.5YR5/6　明褐　極細砂

SX03 木棺 5

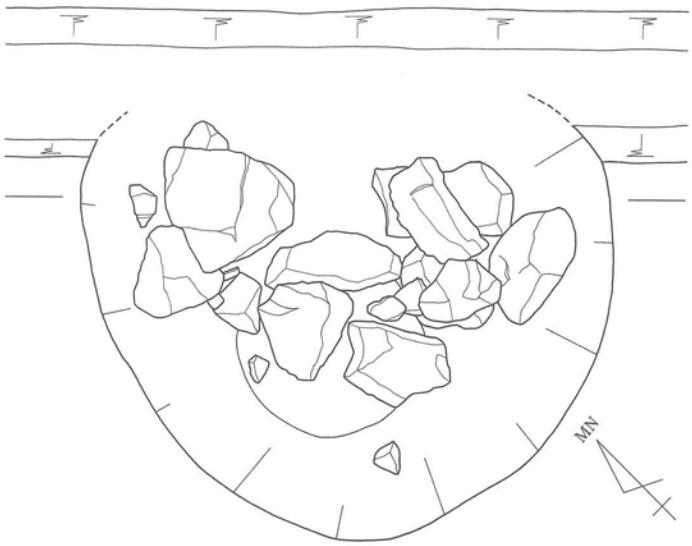


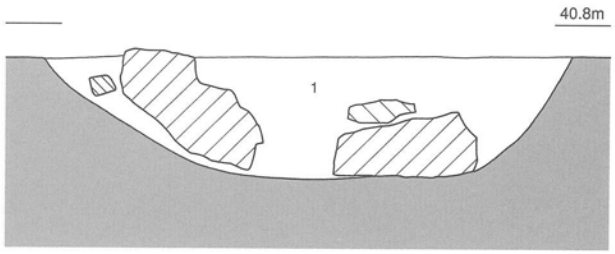
第Ⅱ面　木棺



第Ⅱ面　木棺・土坑、周溝内土器出土状況図

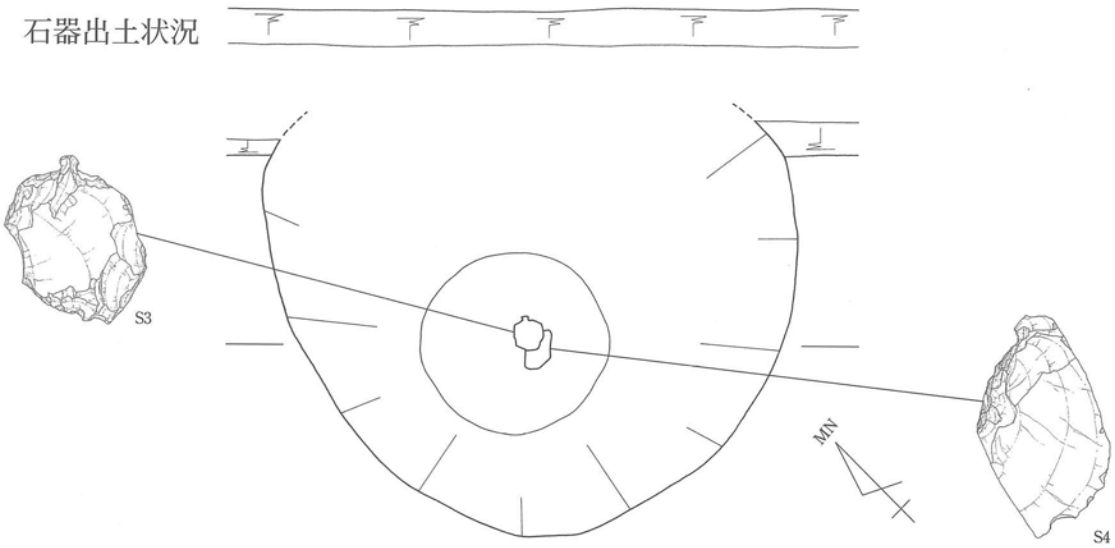
礫検出状況

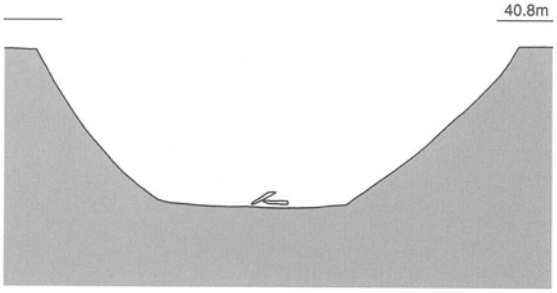




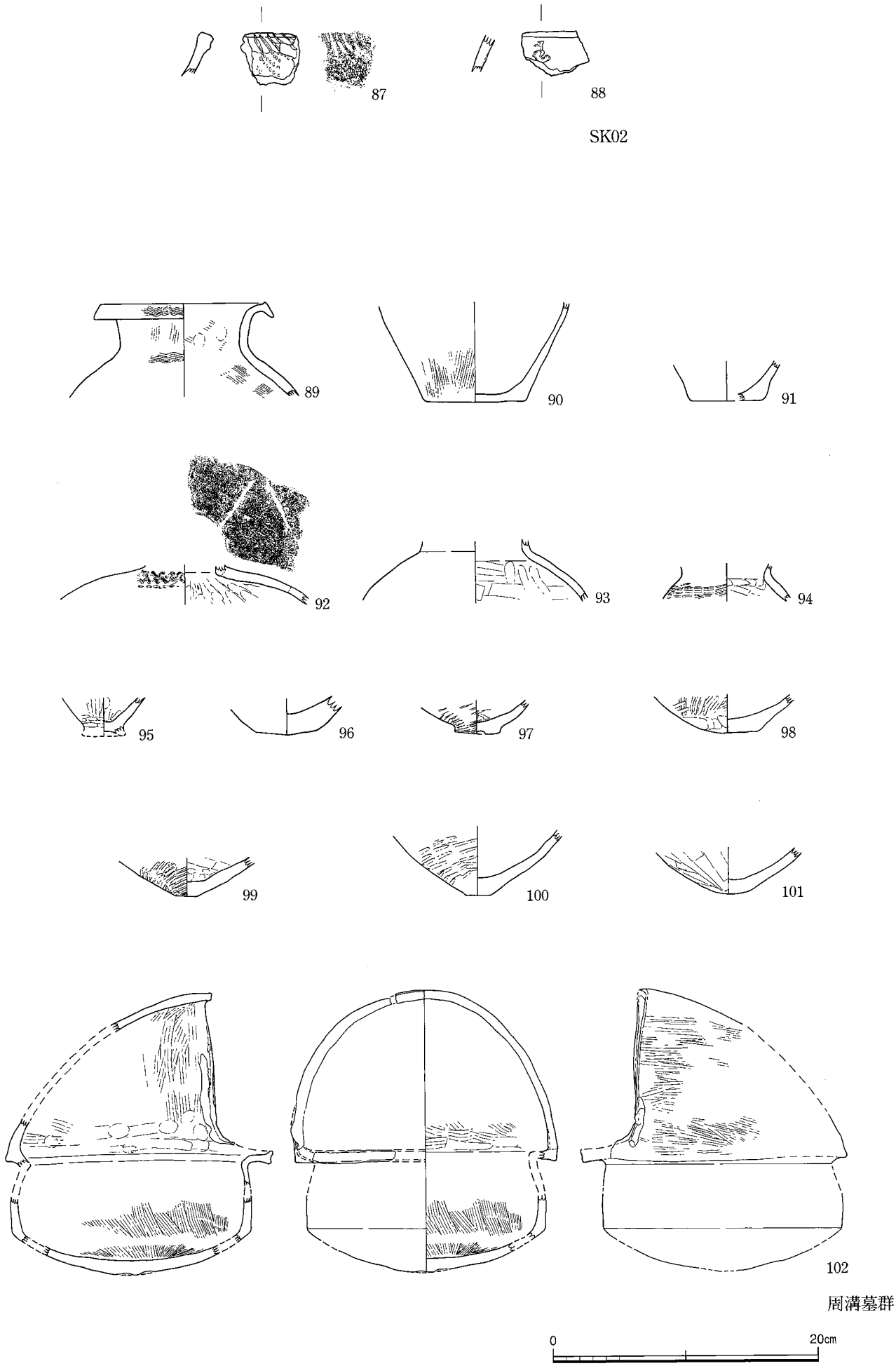
1　10YR6/4　にぶい黄褐　細砂

石器出土状況

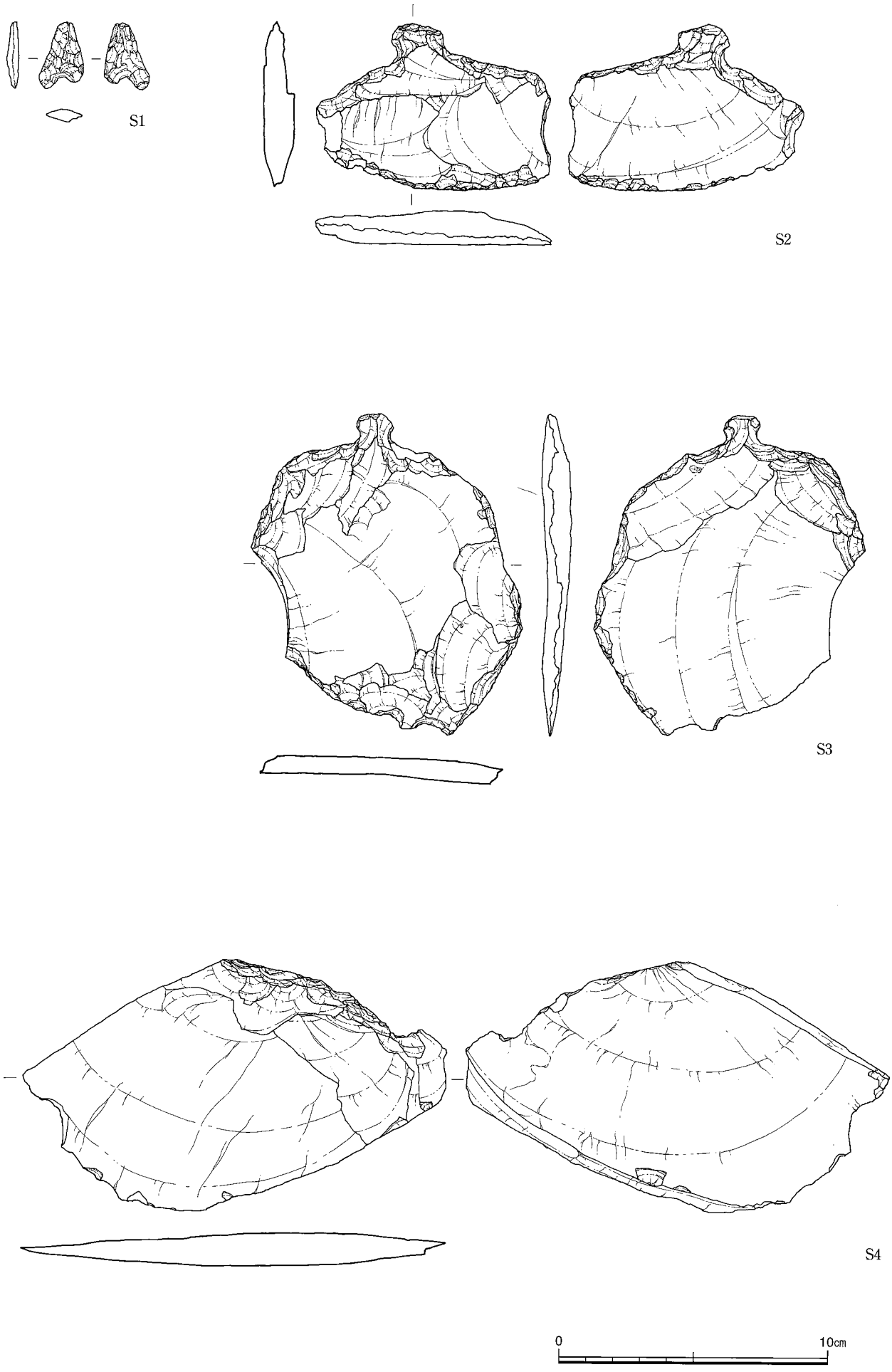




第Ⅱ面　SK02



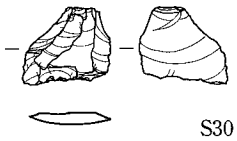
出土土器

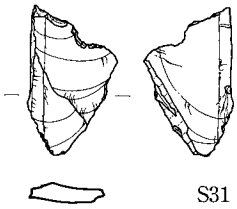


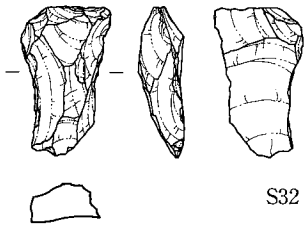
出土・採集石器(1)

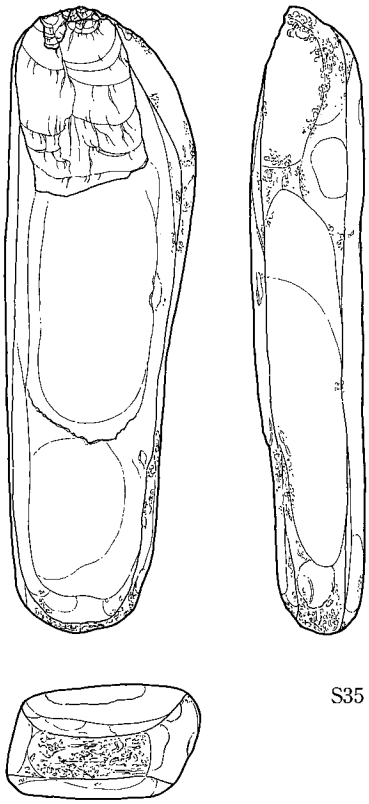
S5
S6
S7
S8
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
S23
S24
S25
S26
S27
S28
S29
0
10cm

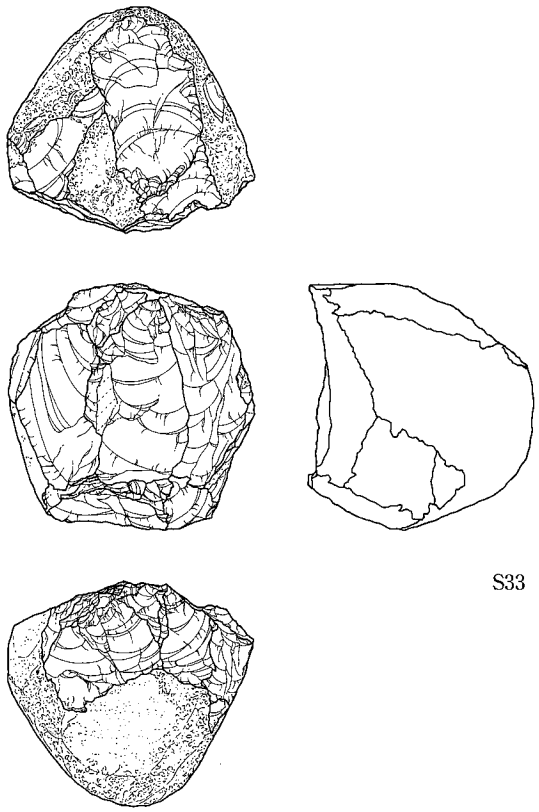
出土・採集石器(2)

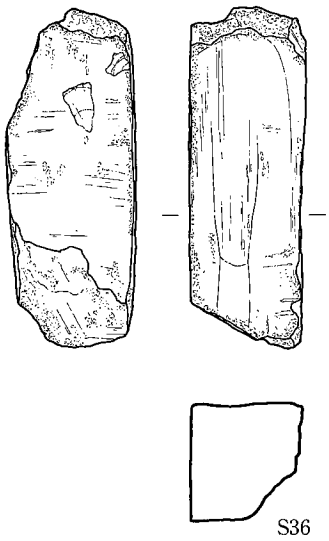


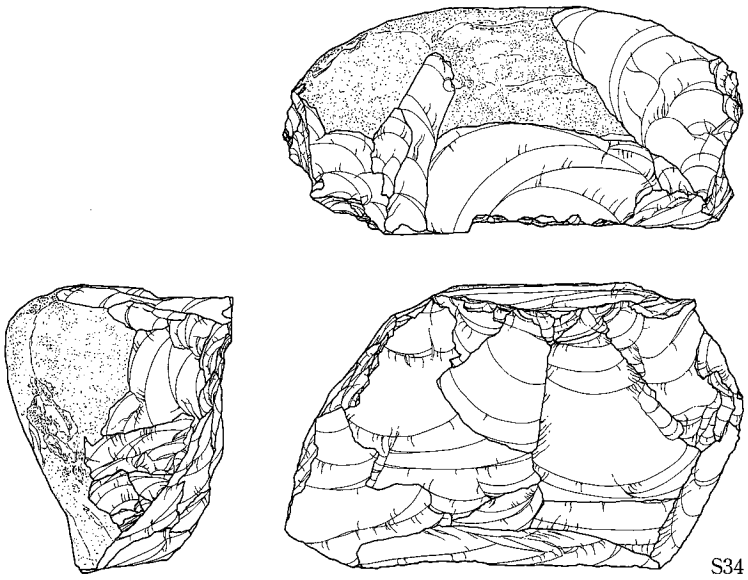








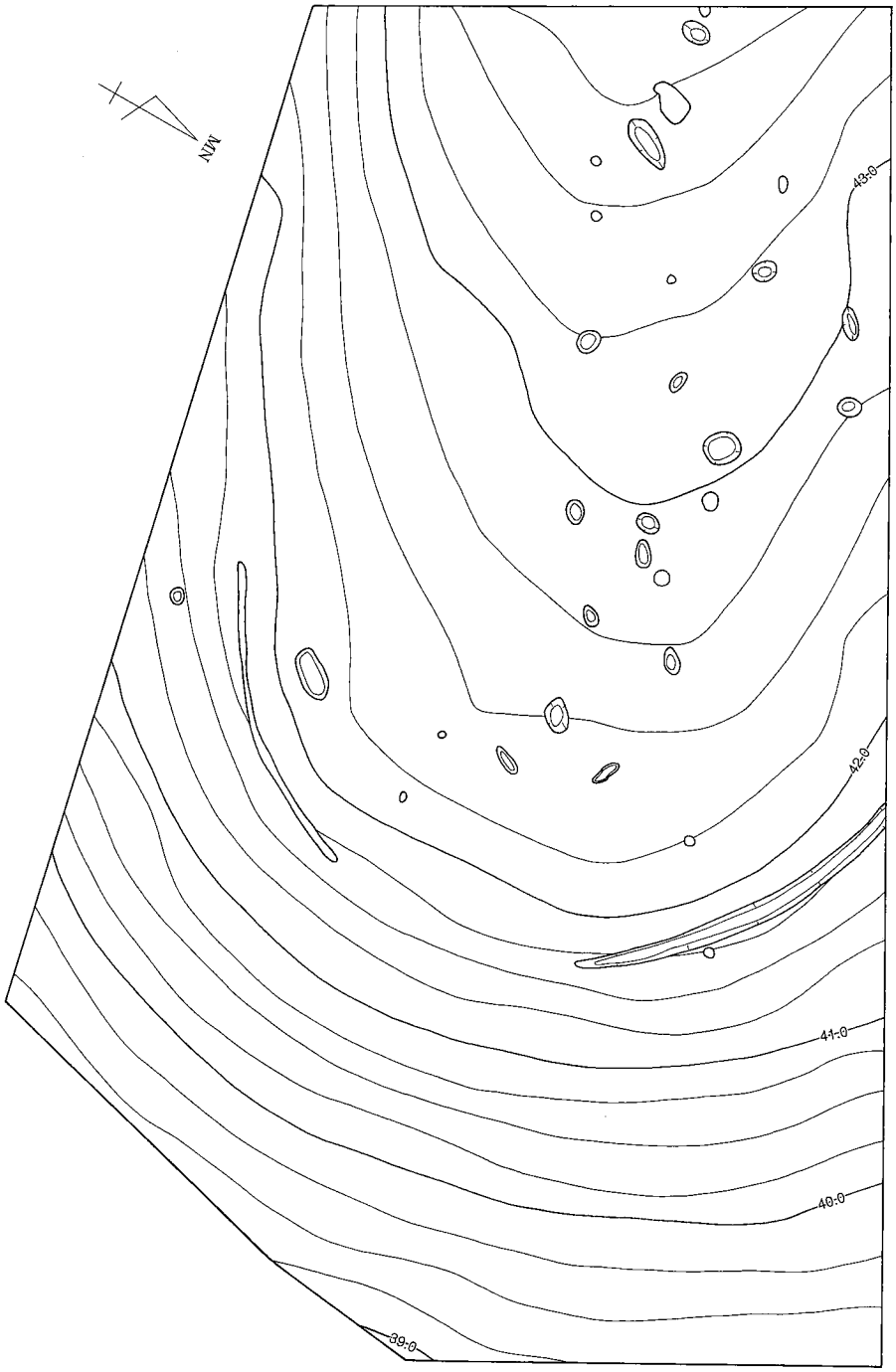




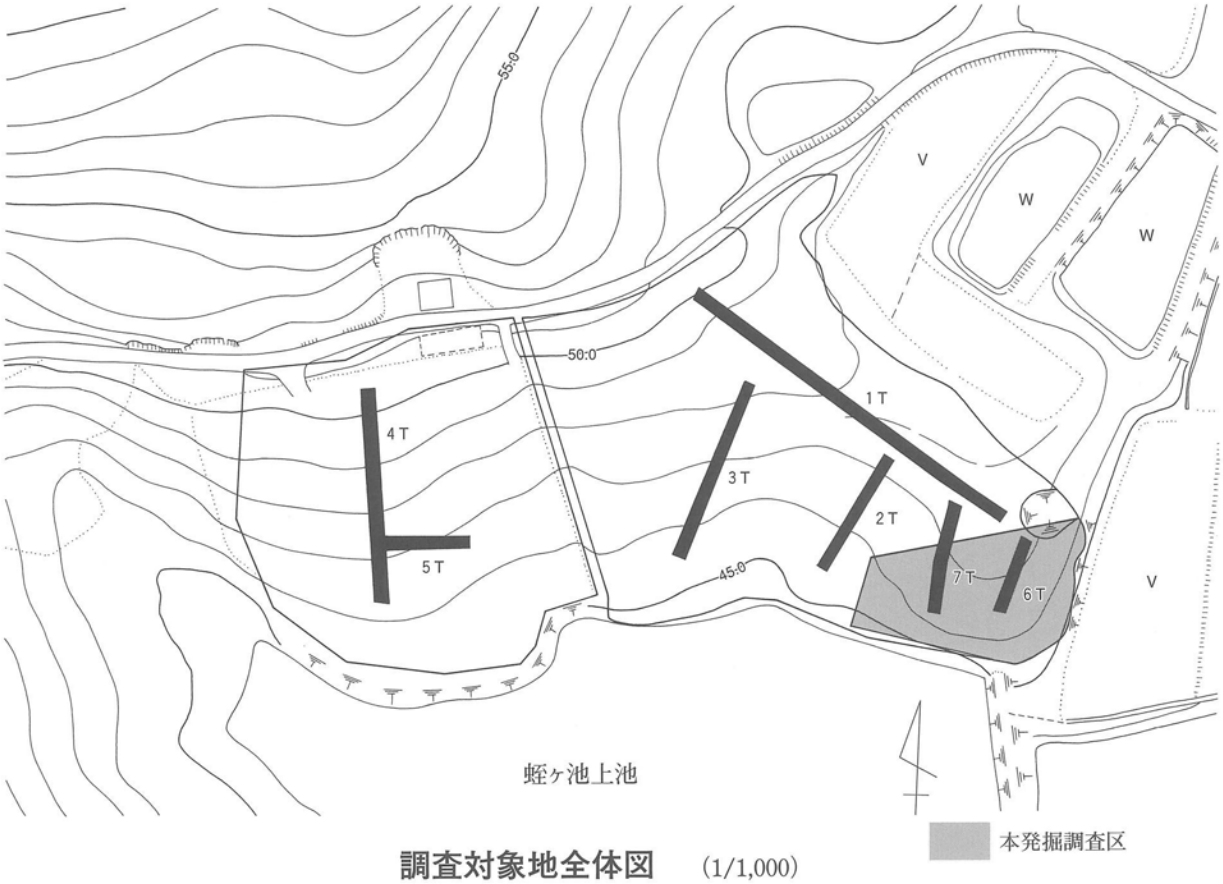
0　10cm

出土・採集石器(3)

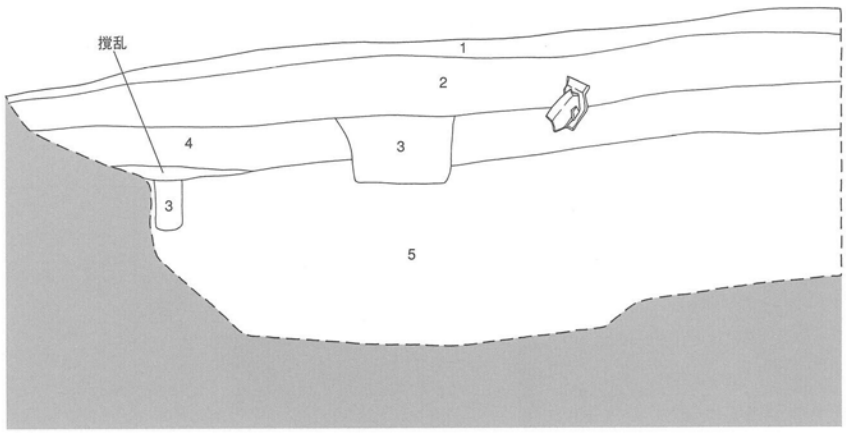
図版107　蛭ヶ池ノ尻遺跡



調査区地形測量図



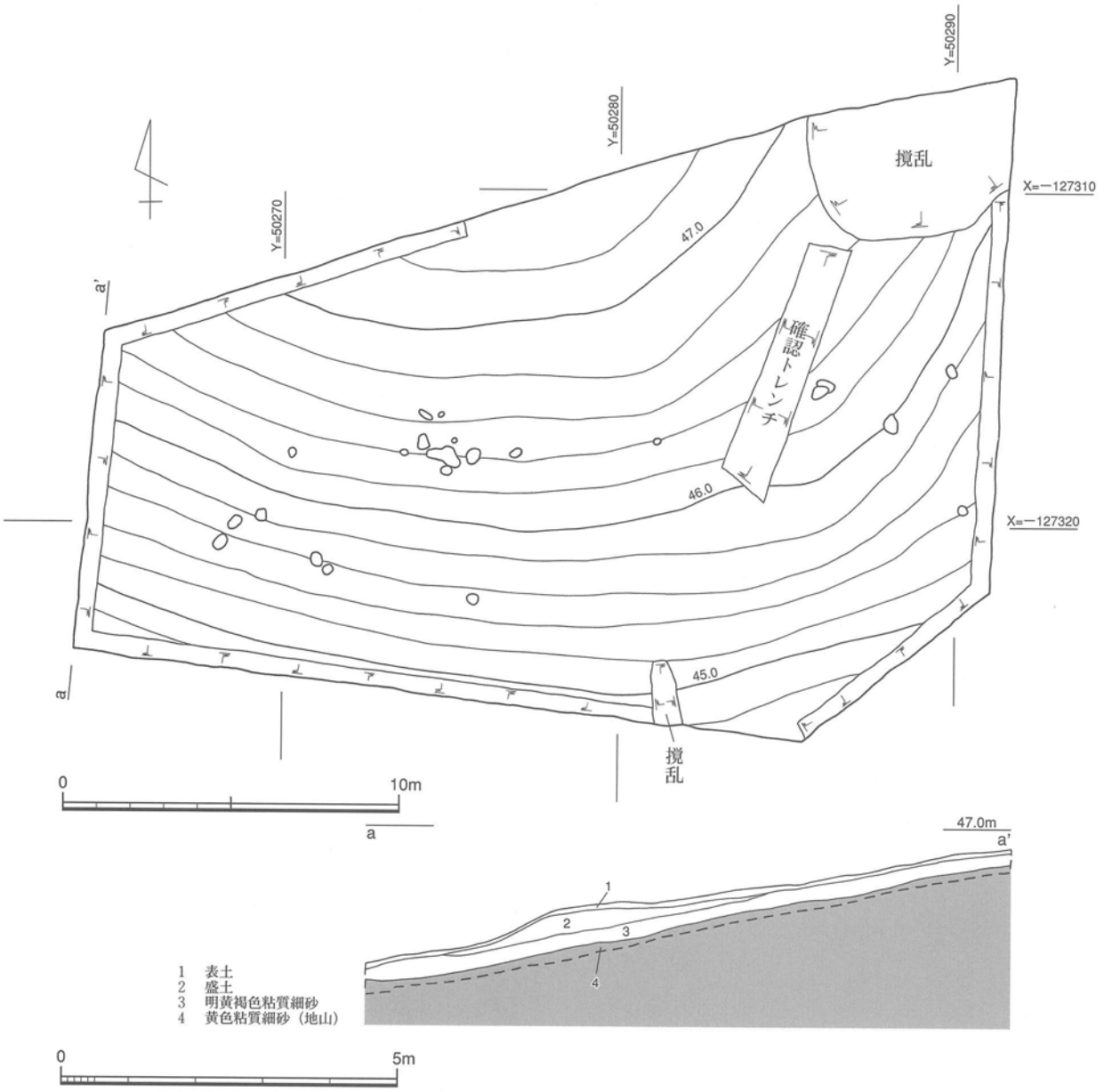
調査対象地全体図　(1/1,000)



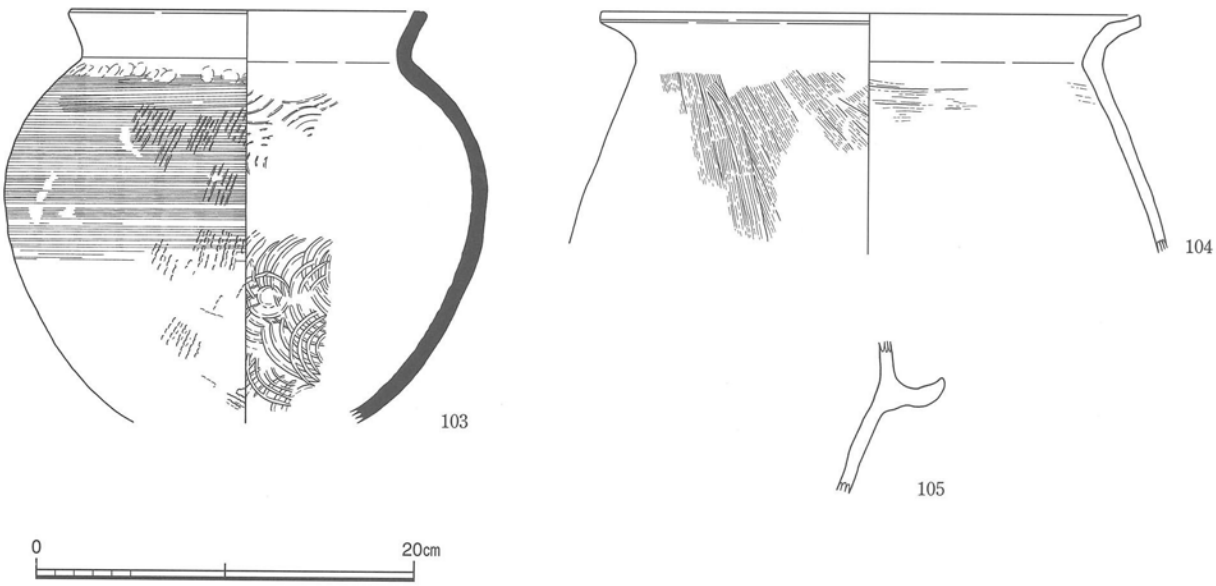
1　腐植土
2　黄灰色　砂質土
3　黄橙色　粘質土
4　暗黄褐色　粘質土
5　灰白色　粘質土

撹乱坑　南壁断面図

0　1m



調査区地形測量図・断面図



出土遺物